

---

# OVERtheLORD-千の影を敷く者-

kurei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

OVER the LORD - 千の影を敷く者 -

### 【Nコード】

N2228I

### 【作者名】

kurei

### 【あらすじ】

「いえいえ、そんなことはないですよ。その輝きは『紅刃』さんが自身が発現しえた『紅刃』さんの輝きです。だから私も」  
「そこで言葉を区切ったはやなの身体の回りから『銀』の粒子がこぼれる様に煌き始める。」

「持てるすべての輝きを『紅刃』さん、貴方にぶつけます！」  
その宣言により一気にはやなから『銀』の極光が弾ける様に顕現した。

本文第28話『極光』《銀星姫》、  
『顯現』より抜粋

## 第1話【DA学園篇】（前書き）

注意！！

この小説は遊戯王デュエルモンスターズGXのオリジナル主人公物語再構成が主幹となっておりますが主人公が使うカード群はアーケードゲーム、ロードオブヴァーミリオン（以下L.O.V）の使い魔たちやそれに登場する施設や称号を土台としたオリジナルカードとなります。

さらに遊戯王GXとL.O.V以外にも後々物語りに他の作品をクロスさせたり、他の作品からキャラクターだけを引っ張ってくるゲストクロスを行っております。

加えて、クロスさせるにあたり世界観やキャラクターの設定やらその他もろもろを原作から大きく逸脱する場合があります、物語の都合上改変する場合があります。

この事をご承知の上でこの作品をお読みください。

## 第1話【DA学園篇】

かの武藤遊戯や城之内克也、海馬瀨人を輩出した童実野町。今、この町では海馬コーポレーションが立ち上げたエリートデュエリスト養成機関「デュエルアカデミア」の実技試験が行われていた。そこに向かう、影が2つ。片方は遊戯を継ぐ者、そしてもう片方は、この物語で荒唐無稽な御伽噺を紡ぐ者。今新たな物語が綴られようとしていた……

「うああああ！こりゃマジやばい！おくれるうううう！！！」

街を疾走する少年の名は遊城十代。彼はデュエルアカデミアの実技試験を受けるべく試験会場である海馬ランドへと急いでいた。しかし、そんなことをしている暇はないとわかっていて十代だがやはり先ほど、自分にカードをくれた人物のことが気になっていた。

（あの人はやつぱり、武藤遊戯さんじゃ）

キング・オブ・デュエリスト、武藤遊戯。デュエリスト王国、バトルシテイその他数々の大会で優勝した、現在に生きる伝説。

もちろん彼、十代もそんな遊戯のファンの一人だ。

しかし、その人が遊戯本人であったのかは確認する術はない。十代は遊戯らしき人からもらったカードを取り出そうとして視線を前方から外した時だった。

「ああいてっ！！」

走ったまま余所見をした十代は左の角からやってきた人物と衝突、十代は尻餅をついてしまった。

「いててて」

そんな十代に、ぶつかっただけもう片方の人物は手を差し伸べ十代を起こしながら聞いた。

「大丈夫かい」

「おう、サンキューな」

そこで十代はぶつかり、手を差し伸べた人物を見た。

150ちよつとあるかないかの低い背、華奢な体つき。しかし、目を引くのは後ろで1つに結われたプラチナのような銀の長髪とルビをそのまま嵌めこんだような紅い双眸だった。

しかし、十代はその人物の容姿よりも腰のベルトにあるものに注目した。なぜならそこには、

「なあ、あんたってひよつとして

十代の視線の先に何があるか気がついた人物は、それを手にとって見せた。

「ああ、決闘者だよ。これからデュエルアカデミアの実技試験に向かうのだけれど

しかし、十代はその人物のいった台詞で何故、自分は急いでいたのかを思い出した。

「ああああああ！そうだった！遅れてるってこと忘れてたああああ！！！」

そう叫ぶや否や、十代はその人物の手を取り走り出した。

いきなり手を取られ走り出された人物は眼を丸くして自分を引っ張っている十代に声をかける。

「遅れるって、まだ時間あるじゃないか」

そういうと、その人物は懐から意匠の凝った、かなりの一品と見える懐中時計を取り出し、十代に見せた。

確かにその時計が刻む時間を見れば試験時間はまだ先のはずだ。

「何言ってるんだよ、あんた！俺、駅から来たんだけど駅で見た時間でも、もう時間いっぱいだったんだぞ！！！」

それを聞いた人物は「ふむ」と考える顔になったかと思うと何かが閃いた顔になってこういった。

「ああ、そうか。昨日まで海外だったから時計の時刻を直すの忘れてた」

どうやら、この人物かなりの天然さんらしい。

「そんなこといつてる暇じゃなねえええ！走るぞ！！！」

十代は引つ張っていた人物を走らせると自分も試験に間に合わすべく試験会場へと急ぐのであった。

しかし、試験に遅れそうなもう独りはと言つと・・・

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったね。私は姫宮千影。君は？」

悠長に自己紹介なんぞをし始めていた。

そんなこんなで2人は全力疾走、さらには近道をするために獣道まで通つて目の前を柵を乗り越えた先に受験受付係が見えた。

それは今正に片づけをはじめようとしている瞬間だった。

「「まつたああああ!!!」」

十代と千影はそれを止めるべく、名乗りを上げる。

「受験番号150番、姫宮千影」

「受験番号110、遊城十代！」

そして全くの異口同音でこう続けた。

「「セーフだね？」」

どうやら、全力疾走の間に2人の間に友情が芽生えたようだった。

「ふう」

眼鏡をかけた自信なさげな少年が試験結果が思わしくなかったのか、さらに自信なさげに溜息をついている。

そこに近づく二つの影、言わずもがな遅刻組みの十代と千影である。

「おっ、やってるやってる」

決闘場では受験番号1番の三沢大地が実技試験を行っていた。

千影は決闘中である両者のフィールドを観察してその現状を口にする。

「状況はライフ差では受験生側が勝ってはいるけど、フィールドのモンスターじゃ相手のモンスターは倒せない。さて、彼はどうでるかな」

千影のこの呟きに、三沢は自分の場に出ているブラッドヴォルスに

破壊輪を使うことで試験官のライフポイントを減らして見事勝利したのだった。

「へえ、上手な手だね」

「そうだな、あの1番見事なコンボだったな」

2人の感想を尻目に眼鏡をかけた少年、丸藤翔は2人をあきれたような顔で見る。

「そりゃそうさ。受験番号1番、つまり筆記試験第1位の三沢君だよ」

「ふくん、受験番号はそういう意味か」

「合格は筆記試験と実技試験の内容で決まるんだ。受験番号119の僕が受かるかどうか・・・」

肩を落とす翔の背中を十代が思い切り叩いて元気づけようとする。

「心配すんな！運がよければ合格するさ！俺だって110番だ！！」  
そんな2人の隣で千影が首をひねっていた。

「おかしいな、筆記試験はけっこうできたほうだと思ったのになあ・・・」

「ちなみに君は何番？」

「ん、150番」

「150って！君、知ってる？今年の受験者数150人。君は筆記試験どべってことだよ」

「あっ、そうなんだ」

千影のその返答を聞いた翔は呆れ返ってしまった。

「そうなんだじゃないよ！君、この実技試験でよっほどいい成績ださないと落ちちゃうよ、本当」

「なに、じゃあ安心だ」

「なにが？」

翔の言葉に1つ頷いた千影がさらりとこんなことを言って見せた。

「要はこの実技試験で好成绩をだせばいいのでしょ、ならあとはそれを成せばいい」

その言葉を聞いた2人はそれぞれの

十代は笑い、翔はさ



らにあきれ返った

反応を示した。

「そりゃそうだ！まだやってみてもねえもんな！」

「はあ、君たちのその能天気さが羨ましい……でも、そうはいってもいられないよ」

その翔の言葉に十代と千影は頭に？マークを浮かべた。

「「なんで？」」

「100番代の試験は1組目。もうとっくに終わってるよ。2人も実技試験受けさせてもらえるかどうか……」

「「えっ……」」

それを聞いた二人はしばらくの間固まってしまった。

試験官たちが寄り合って受験生たちの試験内容を審議する席で先ほどの三沢のデュエルの内容が話されていた。

「三沢君は審議の必要もない、決まりだな」

「うむ、彼なら問題ないでしょう」

そんな試験官たちの最高責任者、クロノス・デ・メデイチの下に試験監督の1人が耳打ちしてきた。

「すみません、あと2人受付時間ギリギリに来た生徒がいて」

「その2人の筆記試験順位は？」

「はい、110番と150番です」

それを聞いたクロノスは鼻で笑って言い払った。

「ギリギリに来るなんて、まず心がけがなってないネ。ドロップアウトボーイは我が学園にはいらないうーノネ！」

だが、他の試験官たちはその言葉に難色を示している。それもそうだろう。

「しかし、時間には間に合ったようですよ」

「ここで受けさせないのはまずいでしょう」

「ノンプロブレマー！レマー！ノンノン！」

しかし、エリート主義の塊であるクロノスは認めたくないようで強固に反対するが……

『 』

クロノスの携帯電話が鳴り出した。相手は校長らしい。

どうやら筆記試験順位でチャンスを奪うな云々言われたらしく、忌々しげな顔で呟いた。

「地獄耳なのーネ、狸親父。デュエルアカデミアはデュエルエリートのための学園、ドロップアウトボーイに肩入れするなんーテ、あの校長は何を考えてるーノ」

校長がそうでも、自分はドロップアウトを認めない。ならばどうする？

（ここは私が直々に引導を渡してやるーノネ）

そうと決まれば話は早い。

「ワタクシがその受験生たちート、決闘しまース！」

クロノスは教員専用のデュエルコートを持ち出して、決闘場へと降りていった。

試験用のデッキではなくクロノス自身のデッキを持って。

「よ、お前強いな」

「そうだね、状況判断も的確だった」

後ろから声をかけられた三沢は後ろを振り返ってみた。

「んっ？」

声をかけてきたのは十代と千影だった。

三沢は当然と言ったような顔をして前を向こうとするが次の十代の台詞に体を硬直させた。

「受験生で3番目くらいに強いかもな」

そんなことを簡単にいってのけるほどの腕前なのか、もしくはただの馬鹿なのか、三沢はそれを計ろうとした矢先に場内にアナウンスが響き渡った。

『受験番号150番、姫宮千影君』

「あっ、私の番だ」

「がんばれよ、千影！」

「うん」

それを聞いた千影は十代の声援を受けて決闘場へと向かっていく。  
「君」

決闘場に向かう千影を見てから三沢は十代の方を振り返った。彼の言葉の真意を確かめるために。

「なぜ、僕は3番なんだい」

それを聞いた十代は自分と千影を指差し、

「俺と、あいつ、どちらかが一番だからさ」

そう答えた。

その答えを聞いた三沢と翔は狐につままれた顔をしていた。

「なんで僕より筆記の成績が9いいだけで、そんなに自信があるの？」

翔の当然ともいえる質問に隣に立つ、十代はさも当然のように答えた。

「それは、あいつの決闘を見てれば解かるさ」

「君ってさ、あの人の昔からの友達なの？」

翔は、十代にそこまでいわせる千影が昔からの友達かと思って聞いてみたのだが、答えはまったくの真逆だった。

「いいや、今日ここに来る途中で友達になった」

「えっ！？じゃあなんでそこまでのことを言えるの！？！？」

翔は彼らのことが不思議で不思議でしょうがなかった。そしてそれは三沢も同じ、奇妙なものを見る目つきで十代を見ていた。

「まあ、強いて言うなら同じ匂いがしたからかな。それより決闘、始まるぜ」

「ボンツジョールノ！！ワタクシはクロノス・デ・メディチ。実技の最高責任者をやってるものですーノ」

デュエル場にはすでにデュエルコートを着込んだクロノスが待ち構えていた。

「姫宮千影です。しかし、最高責任者が直々にお相手ですか。相手

にとって不足なしです」

しかし、試験官に最高責任者が出てきたのというのに千影はにこやかな笑みでもってクロノスに答えた。えらくのほほんとしたものである。

（呆れてモノも言えませーん）

その能天気ぶりにクロノスはあきれ返ってしまふのだった。

最後の二組の試験官としてクロノスが出てきたことに中等部進学組み、特にオベリスクブルーの制服を着たエリートたちは心底驚いていた。

「クロノス教諭が相手になるってことは、あの姫宮千影と次の遊城十代は相当の大物ってことか!？」

その取り巻きの発言に中等部主席卒業の万条目準が内心でそんなはずはないと叫んではいられなかった。いくら試験用のデッキとはいえ扱うのがあのクロノスなのだから。

開場中の注目を集めながら、決闘は始まった。

「「決闘っ!!!」」

千影LP4000

クロノスLP4000

「先行は貰います。私のターン!」

千影はデッキからカードを一枚引き手札に加えると、その手札の内容のよさに1つ頷く。

（手札に早々に死者蘇生と聖なるバリア・ミラーフォース-があるとは幸運だな。まずは様子見から行くべきか）

「私は、Lovサーヴァント-ガーゴイル-を攻撃表示で召喚!」

Lovサーヴァント-ガーゴイル- 4 ATK1800 DE

F1000

「さらにカードを一枚セットしてターン終了」

「私のターンでース、ドロ」

クロノスは手札に加えたカードを見ながら、目の前のドロップアウトをどのように料理するかを考えていた。

（始めから低レベル高攻撃力モンスターを出してくるとは、スモールタウンでーハ、そこそ強かったのでしょーネ。しかーシ

）

「世界の広さをワタクシが教えてあげるーノデス！！手札から魔法カード、押収発動！」

「押収、ライフを1000払い相手の手札を見て一枚墓地に捨てることのできるカード・・・」

「おー、ドロップアウトにしてーハよくお勉強してるのーネ。死者蘇生を墓地に送るーノデス！」

千影LP4000

クロノスLP3000

（早々に手札に来たことが仇になったか、しかしLOVサーヴァント・ガーゴイルのモンスター効果は戦闘フェイズの間のみ攻撃力を200上げる効果、攻撃力2000のモンスターを破壊できる低級モンスターはそうはいない、さらにセットしてあるカードは聖なるバリア・ミラーフォース。余程の事が無い限り抜かれることはないと思うけど・・・）

「さらに場に2枚のカードを伏せるーニヨ、そして手札から魔法カード大嵐を発動。これの効果で全ての魔法・罠ゾーンにあるカード全てを破壊するーノデス！」

（くっ、死者蘇生に続き、ミラーフォースまでも持っていかれた。

しかし自分のフィールドのカードを巻き込むと言うことはセットされたカードは破壊がトリガーになって発動するカード。この条件化

しかも2枚ということは・・・!!)

「クロノス教諭、貴方の狙いは最上級モンスターの生贄召喚ですか」  
千影の読みは当たっていた。

クロノスもこれには心底驚いた。

「これは驚きですーノ。まだ、私の破壊したカードがまだわかっていないのーニ、そこまで先を読むとーハ。筆記試験150番のブービーとは思えませんーガ、しかし、点数は嘘はつかないのーネ!決闘続行!!破壊された罫カード、黄金の邪神像は破壊されると自分フィールドに邪神トークン1体を特殊召喚するーノ!破壊された邪神像は2枚、よって邪神トークン2体を特殊召喚!!」

その決闘を見ていた翔は何がなんだかわからないといった顔でいた。

「なにがどうなってるのか、僕にはサツパリだ・・・」

それに答えたのは前の席に座る三沢だった。

「黄金の邪神像は破壊されることで発動する特殊な罫カードだ、それを見越してクロノス教諭は黄金の邪神像をセットしてから大嵐を使ったんだ」

それを聞いた翔と十代は納得といった顔で頷いていた。

「へえ」

「やるなあ、さすがは実技最高責任者だぜ」

所変わってオベリスクブルー勢はクロノスのコンボを見て一つの確信に至っていた。

「これは試験用のデッキじゃない。これはクロノス教諭自身の暗黒の中世デッキ!」

「自分のコンボを成立させると共に150番の罫も封じてしまった!」

「あのデッキに勝てる受験生なんて・・・」

「・・・いないよなあ」

それを聞いた万条目は先ほどまで抱いていた考えが杞憂どころか、まったくの逆だったことに満足げな顔で不敵に笑っていた。

「ふふつ、あの受験生2人が特別なのかと思ったが、とんだ勘違いだったようだ。クロノス教諭はドロツプアウトたちの儚い夢を徹底的に叩き潰すつもりなんだ」

さらに開場の2階でこの決闘を見ていたオベリスクブルーの女生徒、天上院明日香が千影に同情の視線を送っていた。

「あの子可哀想、クロノスのお気に召さなかったようね」

その明日香に話しかける男が1人、アカデミア最上級生で『皇帝』の名を冠する決闘者。丸藤亮だった。

「見物だぞ」

「えっ?」

「暗黒の中世デッキ、150番のおかげで伝説のレアカードを拝めるかもしれない」

「まだ私のターンは続くーノデス」

「っ、まだ貴方は通常召喚を行っていない・・・」

「その通りですーノ、貴方を落とすのが惜しくなってきましたが、我が栄光あるデュエルアカデミアに、ドロツプアウトは必要ないのーネ!邪神トークン2体を生贄に、古代の機械巨人を召喚!!」

古代の機械巨人      8      ATK3000      DEF3000

巨大な機械人形の登場に開場全体がざわめいた。

「こっ、これが伝説のレアカード!?!」

「すっげー、噂に聞いたことがあるぜ」

「いきなり 8モンスターなんて!!」

開場の驚きを代弁するかのようになり明日香が叫び、十代は顔を輝かせ、翔は自分が決闘してるわけではないのに顔を青くしている。

「クロノス・デ・メデイチがこのカードを召喚して未だ負けたことはない。あの受験生には先生を本気にさせる何かがあるということか・・・」

亮はクロノスにここまでさせる千影を計るように見ていたが、明日香は溜息を1つ着くと同情の色合いを強くして千影を見つめた。

「それがなくてもクロノス教諭は気まぐれだから。気の毒に、アカデミアの鉄の扉が閉じる音が私には聞こえたわ」

「ウォーツホホホツ！！いくのですヨ！アルティメット・パウンド！！」

クロノスの古代の機械巨人への号令に千影は負けじと、自分の場のモンスターの効果を発動する。

「Lovサーヴァント-ガーゴイル-の特殊効果発動！戦闘フェイズのみ、このカードの攻撃力は200ポイントアップする！」

「それでも攻撃力2000では古代の機械巨人の前には紙屑同然ですーノ！」

しかしそれでも相手のモンスターの攻撃力との差は歴然だった。

「古代の機械巨人の攻撃力3000、ガーゴイルの攻撃力2000、かないっこないよ！」

1000ポイントの圧倒的差に翔は取り乱していたが、三沢は正確に今の状況を分析する。

「1つ救いなのは彼が守りに入っていなかったということだ、このモンスターの効果は守備表示モンスターの守備力を攻撃力が上回っていれば、その差だけダメージを与える。ガーゴイルの守備力は1000、守備表示なら大ダメージを受けているところだ」

「そんな・・・掟破りモンスターじゃないか！！」

翔が大声を上げている中、十代は何も言わず静かに決闘場に立つ千影を見ていた。

巨大な拳がガーゴイルを粉碎するべく迫る中、会場のほぼ全ての人間はガーゴイルの粉碎を疑わなかったが

「手札のモンスター効果を発動！！」



この千影の言葉にクロノスは驚きの声を上げる。

「なんですとー!?!」

「Lovサーヴァント・グリフォン - の特殊効果を発動!」

千影は手札のモンスター、Lovサーヴァント・グリフォン - を掲げ、その効果を発動させた。

「このカードは手札から墓地に捨てることで攻撃力1500以上のモンスター1体の攻撃を無効にすることができる!さらにこのカードの効果によって無効化したモンスターの攻撃力が2500以上の時、次の自分ターンのドローフェイズにデッキからカードをもう一枚ドローすることが出来る!」

千影LP4000

クロノスLP3000

古代の機械巨人の攻撃はLovサーヴァント・グリフォン - の効果でガーゴイルと千影をかすめるに終わった。勿論ガーゴイルは無事、ライフポイントも増減なしだ。

しかし、古代の機械巨人の威容に当てられたのか千影は俯いたままだった。

切札の攻撃を回避されたのには驚いたが、依然自分の有利に違いな  
いクロノスはそんな千影を見て鼻で笑った。

「おやあ、早くも戦意喪失ですーノ?」

しかし、顔を上げた千影の双眸には絶望も恐怖もなかった。

「こんなに魂が騒ぐのは、血潮が沸き立つのは何時ぶりだろう、実  
技最高責任者が最高のデッキで最高のカードで私と決闘してくれて  
いる!」

その紅い双眸にあつたのはいつものほんわかした天然の雰囲気から  
は到底考えることの出来ない紅蓮の炎を連想させるような真紅に爛  
々と輝いていた。

「貴方が本気の決闘をするのなら私も全力の血闘でもってお答えし

ましよう！私のターン、ドロー！さらに、墓地にあるL o Vサーヴァント・グリフォン - の効果でもう1枚ドロー！！」

千影は2枚目に引いたカードを見て、口元に笑みを浮かべた。

（来たか、サキュバス）

その誰も答ええないはずの心の言葉に答える声があった。

「やっと出番がきたわ」 あら、ピンチじゃないのよ。でもこの状況でありながら無傷というのは流石は私のご主人様」

それは蝙蝠の翼を生やし、露出過多な衣裳を身に纏った美しい少女、淫魔だった。

（無論だ。そんなことよりもアレいけるな）

「それこそ無論よ、目の前の木偶人形を完膚なきまでに全力全壊で粉碎してやりましょう」

（それでこそ私の相棒だ）

「私はチューナーモンスター、L o Vサーヴァント - サキュバス - を攻撃表示で召喚する！」

L o Vサーヴァント - サキュバス -                    3                    A T K 1 5 0 0                    D E  
F 1 0 0

「チューナーモンスターなんて聞いたこともありませんーノ!？」

聞いたことのないモンスターの登場に決闘者であるクロノスだけではなく開場全体がどよめきに包まれていた。

「私もそうだけど、クロノスが知らないカードが存在するなんて隣に立つ亮も新しく出てきたカードから視線を外さないようにしながら明日香の問いに対する答えを示す。

「先生とて到達できない所がある。決闘の世界は底が知れない」

「そうね、だからこそおもしろいのよね」

その言葉に明日香は笑いながら相槌を打つのだった



その威容を見た亮、明日香、万条目は顔を驚愕に、翔と十代は喜色に染め、三沢は初めて聞く召喚方法に考えるそぶりを見せる。

「でも、古代の機械巨人の攻撃力は3000、あのバハムートっていうモンスターの攻撃力は2500。ちょっとだけ届かないよ」

「なあに心配すんなって」

翔の発言に十代が口を開いた。

「へっ？なんで？」

「あいつが、ここであんなすげえモンスターを召喚したんだ、何か勝つ手段があるからそうしたのさ」

十代のその台詞に驚きながら三沢はその訳を聞いた。

「何で君はそう思うんだい？」

「オレだって同じ事をするからさ。まあ見てなって千影は勝つぜ」  
その三沢の言葉に十代は視線を千影に向けたままそう言ったのだった。

「シンクロ召喚とはワタクシも初めて聞く召喚方法ですーガ、しかし、そんなモンスターを特殊召喚したところーデ、攻撃力2500、ワタクシの古代の機械巨人には及びませーンノ！」

「そうとは限りませんよ、バトル！」

「冗談でしょ、バハムートの攻撃は古代の機械巨人に届きませーンノ」

「チューナーモンスター、LOVサーヴァント・サキュバス・のモンスター効果、このカードを素材にしてシンクロ召喚されたモンスターは、攻撃力をそのターンの間1000ポイントアップする！よって、このターンのバハムートの攻撃力は3500！！」

その千影の言葉と共に、バハムートの赤銅色の巨体が白金色に輝いていく。それはあたかも破壊を司る神の様。

LOVサーヴァント - バハムート -      7      ATK 3500      DE  
F1400

「オ、デューオ!？」

「L0Vサーヴァント・バハムート - の攻撃、破壊しつくせ! メガフレア・エクステンション!！」

白金色のバハムートは両の腕に収束させた灼熱のエネルギーを古代の機械巨人に向けて放った。

「……っ!……!……!」

十代を除く、クロノスの圧倒的勝利を確信していた開場の人間は全員が息を呑んだ。

「あわわわわ!？」

灼熱の劫火が古代の機械巨人を分子レベルに分解していく。

千影LP4000

クロノスLP2500

「マンマミーア!？我が古代の機械巨人が!……しかし、まだ私のライフポイントは残ってます!、まだまだ……」

次のターンがあるとのおうとしたクロノスの発言を千影が遮った。

「いいえ、クロノス教諭。貴方に次のターンはありません!」

「何を言ってる!、もうアナタの場には攻撃できるモンスターなんていないの!ネ!」

「L0Vサーヴァント・バハムート - のモンスター効果! 手札を2枚墓地に捨てる度にもう1度攻撃することができる! 私は手札を2枚墓地に捨てる!」

再び、バハムートの両の腕にエネルギーが収束し、眩いばかりのプラズマを放つ。

「これで終わりです! バハムートで直接攻撃!！」

古代の機械巨人を焼いた劫火がクロノスを包み込んだ。

「ペーペロンチーニョー!……!」

千影LP4000  
クロノスLP0

決着がつき、その場には這い蹲ったクロノスと勝者の千影が残され、ソリッドヴィジョンで映されていたバハムートは消えていった。

「ありがとうございます、クロノス教諭。楽しませてもらいました。またやりましょう」

千影がそう言って両手両膝を付いているクロノスにお辞儀をして顔を上げた時には、決闘中の双眸の爛々とした紅蓮の炎のような真紅の輝きはなくなり、のほほんとした穏やかな紅い眸に戻っていた。

「なぜなーノ？なぜ私が筆記試験ドベのドロップアウトごときーニ？」

クロノスはこの結果が信じられない様子だった。ニコニコ笑う千影に忌々しげな視線を向けたまま未だ腰が抜けたまま立てないでいた。

この結果が信じられないのは何もクロノスだけではなかった特に中等部進学組みのオベリスクブルーの生徒は皆、驚愕の表情以外の顔ではいらなかった。

それは万条目も同じだった。

「信じられない、クロノス教諭が受験生に敗れるなど・・・しかも暗黒の中世デツキを使つての勝負で1体のモンスターも破壊できず、1ポイントのダメージも与えられない完全敗北などと・・・！！」

そんな驚愕とは真逆の反応をしている者もいた。

「ちよつとあの面白いかも」

明日香は微笑を浮かべ、そう言いつつ横目に亮を見る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

亮は腕を組んだまま、その視線は千影を追いかけていた。

「いいぞー！ブービー150番！！」

「やったなー！千影、絶対勝つと思つてたぞー！！」

（これからはいいライバルになれそうだな、パーフェクト君）

翔と十代は千影に声援を送り、三沢は心の中で千影をライバルと認めただった。

## 第1話【DA学園篇】（後書き）

二次創作小説サイト、N i g h t T a l k e r 様に去年から投稿させていただいている作品をこちらにも投稿することにしました。何分、始めの数は物書きに慣れていなかった時期の作品をそのまま持ってきたため、かなり拙い（今でも大分下手糞ですが）文章になっておりますがご容赦ください。

あと、N i g h t T a l k e r 様では恒例となっている本日の最強カードのコーナーもこのあとがきでやっていきますの楽しみください。

今回の最強カード『L o v サーヴァント - バハムート - 』

7 A T K 2 5 0 0 D E F 1 4 0 0 炎属性 ドラゴン族 シンクロ効果モンスター

このモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力がその守備力を越えていればその差だけ相手ライフポイントにダメージを与える。

手札2枚を墓地に捨てる度、もう1度攻撃することができる。

いわずと知れた e の看板竜であります、伝承を辿ってみると竜よりも海の生物だったと言われるバハムートさんです。

その効果はL o v での対超獣亜人無双のような連続攻撃と貫通効果となっております。

一番最初に投稿した時は連続攻撃のコストは1回の追加につき手札1枚というブツ壊れたカードでしたが、これはやヴあいと思い2枚に修正されたという困ったちゃんです。

しかしながらサキュバスの効果と組み合わせた時の破壊力は抜群で千影君のエースカードとしてこれからも活躍することでしょう。



## 第2話【DA学園篇】

デュエルアカデミア実技試験から数週間後の9月某日、姫宮千影は機上の人となっていた。それはデュエルアカデミアが太平洋上の孤島にあるためだ。

乗っていたのは彼の他に十数人の生徒と丸藤翔や三沢大地、そして結局千影の後の決闘でクロノスを破った遊城十代もヘリコプターのシートに揺られていた。

「しかし、すごいね十代。あの追い込まれた状況から逆転するなんて」

「まあ、でもやっぱりすごいって言うっちゃお前のほうがすごいぜ。決闘してみてわかったけどあのクロノス先生から無傷で勝利するなんて、俺にはちよつと無理だな」

席のシートが隣り合っている千影と十代は互いに試験での決闘のことについて談義していた。

「まあ、運が良かったただだよ」

「運も実力のうちってな！でもお前の使ってるカードって見たことないけど、どこで手に入れたんだ？」

十代が前々から不思議に思っていたこと、千影の持つカードについて聞いてきた。

「ああ、この子たち。この子たちはね、今年の誕生日に小父様から貰った大切なものなんだ」

「へー、見たこともないカード持ってるなんて、そのおじさんすげえんだなあ」

そう2人が喋っている間に目的地の上空に到着した。

デュエルエリート養成機関デュエルアカデミア本校。そのヘリポートにヘリコプターが着陸準備をし始めていた。

ヘリコプターから降り、指定の制服を受け取ってロッカールームで

着替えを済ました新入生たちは大教室へと集まっていた。

整列した生徒たちが見上げる壇上には少し太った禿頭の男性が立っていた。彼こそがデュエルアカデミア本校の校長である鮫島であり、千影と十代から受験資格を剥奪しようとしたクロノスを諫めた人物でもある。

「ようこそ、デュエルエリート of 諸君。諸君は狭き門を實力で開いてやってきてくれました。未来のデュエルキングを夢見て楽しく勉強してください」

鮫島校長が新入生に対しての祝辞を述べると、そのまま解散となり新入生たちは思い思いの場所へと散っていった。

赤い制服を着た千影と十代、翔は校舎の入り口の前で電子生徒手帳を広げ、自分たちが所属する寮を確認していた。

ちなみにそれぞれ制服の着こなし方が違う。翔は裾の短い制服をぴつちり前まで閉じているのに対して十代は制服に袖を通しただけでボタンは締めず、私服のアンダーシャツが見えている。千影は裾のやたら長い制服を着ており、こちらも前のボタンは締めずにさながらマントのように羽織っている。

「おつ、俺はオシリスレッドだ」

「本当？私もだよ」

「僕もレッドだ」

そんな彼らの前を黄色い制服を着た三沢が通り過ぎようとするが十代が、三沢を呼び止め聞いた。

「やあ、3番。お前もレッドか？」

「いや、この制服でわかるだろ。僕はライイエローだ」

その十代の問いに三沢は自分の制服に手を当てつつ言った言葉に千影たち3人は少し驚いたような顔をした。

「制服の色ってそういうことだったんだ」

納得といった風に千影は頷いていると、三沢は逆に納得できないといった表情でいた。

「どうして君たち2人がレッドなのか不思議だよ」

「????」

「むっ！何か引つかかる言い方だな」

三沢の言葉に千影は首を捻り、十代は少しだけムツとした表情になる。

「ま、気にしないことだ失敬するよ。1番君にパーフェクト君」

「ハハハハハ、まあお前も落ち込まずにがんばれよ」

その言葉に気をよくした十代が笑いながら答えるが、自分の寮に向かおうとした三沢が思い出したように振り返ると3人に向かってこう言った。

「そうそう、君たちの寮は向こうだよ」

「「「えっ????」」」

三沢に指差された方向へと

海岸線沿いへの道を

進む。

そこには

「なんだ、これえ」

翔の気落ちした声を出しながら自分が配属された寮を見ていた。

翔が落ち込むのも無理はない、なぜならそこに立っていたのは紛れもないポロアパートだったからだ。

「オシリスレッドの寮だけ酷くない？」

「そうか？ここは眺めもいいし風情もあるぞ」

「それに海も近くて気持ち良いじゃない。代わりに校舎までは少し遠いけどいい運動になると思うし」

傷みに傷んだ壁に手を当てつつ翔は千影と十代に同意を求めたが返ってきた答えはあながち満更ではないという答えだった。

「私たちの部屋は？」

千影のその言葉に翔は生徒手帳を開いて調べる。

「えーつと・・・あった。ここだよ」

「ここが俺たちの部屋か」

自分たちに用意された部屋の前に立ち、その扉を開く。

「3人とも一緒の部屋だね」

「へー、意外に狭いんだな」

十代の言葉通り、部屋の大きさは8畳程度、その部屋に3段ベッドと簡易キッチン、勉強机と奥に布団一式が置かれている質素な部屋だった。

「でも、生活する分には困らない。俺、こつこの好きだなあ」

「そうだね、私も誰かと一緒の部屋で生活するのって初めてだから、少し楽しみ」

しかし十代と千影は気にした風もなく、部屋に入りいろいと中を見回したりしていた。

「3人同室なんて、僕たちきつと縁があるんだね！入試の時も2人ともかつこよかったし・・・ねえ、2人のことアニキってよんでもいいかな？」

「決闘者に上下はないぜ。ただのライバルさ」

「私も勘弁して欲しいかも」

試験の時の2人の勇姿を思い出したのか頬を赤く染めながら翔は2人にそう言ったのだが2人に難しい顔をされてしまった。

「でもとても君たちには・・・」

「そんなこと、これから一緒にデュエルキング目指して頑張っていこうぜ！」

「そうだよ、まだまだ私たちの学園生活は始まったばかりなんだから、そんな暗い顔してたら、その先も真つ暗闇だよ」

自分のことを自信なさげに話す翔を2人で元気付けながら千影がカーテンを開け放った。

「うわっ、まぶしい！カーテンを閉じる！」

いきなり3段ベッドの一番上から声が聞こえた。誰かが寝ていたらしい。

「人がいたんだ」

「ごめん、気がつかなくて」

「夢多き新入生か」

ベッドで寝ていた声の主はのっそりと起き上がり、その顔を見せた。  
「デスコアラー!!」

「おー、そっくりさんだ」

十代と翔が悲鳴をあげ、千影が感嘆するほどにその人物はデュエル  
モンスターズに出てくるカード、デスコアラにそっくりな顔をして  
いた。

「コアラっていうな！俺は同室の前田隼人だぞ！」

「ごめん。俺、遊城十代」

「丸藤翔です」

「私は姫宮千影、よろしく」

3人は改めて隼人に自己紹介をするが、その隼人はふんと鼻を鳴ら  
しさつさと寝転がってしまった。

「……???」「……」

その反応に3人が不思議そうにしていると、隼人は呆れながら口を  
開いた。

「お前たち、オシリスレッドの赤の意味を知ってるのか？」

「いや、翔お前しってるか？」

「ううん、わからない」

赤の意味について思い当たることはない、ならばと、言った本人に  
千影が聞いてみた。

「何か意味でもあるの？」

「赤はレッドゾーン。危険な奴らってことなんだぞ」

「……えっ?」「……」

レッドゾーン。その言葉に3人は言葉を失った。

「デュエルアカデミアでは成績に応じてオベリスクブルー、ライイ  
エロー、オシリスレッド、3つの寮に分けられるんだ。オベリスク  
ブルーは中等部からの成績優秀組で占められる、高等部の試験を  
受けて入ってきた中で成績が優秀な奴はまずライイエローに配属さ  
れるんだ」

「なるほど、そういう仕組みなのか」

隼人の説明を聞いた千影は頷いていると翔が隼人に質問を投げかけた。

「じゃあ、オシリスレッドは？」

「成績ダメダメのドロップアウト組の吹き溜まりさ」

その隼人の言葉に翔派うへー、と唸る。

「わかったか。ここに送られてきた者には最初から未来なんてないんだぞ」

そういうと、隼人はもう言うことはないと言いつつ再び昼寝に戻ったのだった。

寮から出た3人は外を歩いていった。

「はあ〜」

「まだ落ち込んでるのか」

「だってあんなこと言われたら・・・」

隼人のオシリスレッドの意味を聞いた翔はもの凄く落ち込んでいた。確かに誰だって初めから未来を手にすることができないなどと言われれば大抵はそうなる。何よりも隼人のふて腐った態度が現実味を帯びて翔の上に押し掛かっていた。

「でも俺は赤が大好きだぜ。燃える炎、熱い血潮、熱血の俺にはお似合いだぜ!!!」

「それに下からのスタートならやることはシンプルじゃないか。ただ上り詰めればいいだけなんだから。下を気にすることがなくて私は逆に気が楽だなあ」

その翔の不安を何でもないように十代と千影が言っただけのける。

翔もそれに触発されたのか、

「そうだ、今から落ち込んでどうするんだ。がんばれ僕！ファイト!!!」

「んっ・・・」

と意気込んでいるが千影と十代は何かには惹かれるように翔を置き去りにしてフラフラと歩を進めていった。

「始まる前から落ち込むなんてだらしなかったよ。アニキ・・・」  
しかし、翔が気づいた時には2人は校舎に向かっているところだった。

「待ってよー！」

「どっかでデュエルしてる奴がいる！」

「この気配は校舎の中からだね」

2人の言葉を聞いた翔は呆れつつ2人を追っていったのだった。

校舎に入った3人は千影と十代を先頭にして校舎の中を進んでいた。

「えーと確か、どっちだったかな」

「こっちだよ、十代」

千影が指差す方向に十代が疑いも持たず付いていくのを翔は不思議でならなかった。

「どうしてそんなのわかるのさ、十代のアニキに千影のアニキ」

「いや、だから私の場合、アニキは勘弁して」

「しかたがないか、じゃあ千影君で」

「うん、改めてよろしく翔」

翔のアニキ発言について話していると鼻を引く付かせた十代が声を上げた。

「匂う、匂うぞ。決闘の匂いだ！」

そういうや否や十代は駆け出していった。それに千影も続いて駆け出していく。

「決闘の匂いって・・・って、勝手に入っちゃっていいの!？」

2人の後を追った場所に入った翔はその場所に呆気に取られた。

「うわー、これは最新設備の決闘場だよ！音響設備も体感システムもニューバージョンだ！」

「すげー」

「うん、本当に。こないところまで学べるなんて」

十代と千影も相槌を打ちつつ、その決闘場を見渡した。

「いいなあー、こんな場所で決闘したいなあ」

「やってみようぜ！」

「えっ、いいの？」

「何言つてんだよ、俺たちはここの生徒だぜ」

「そうだね。でも十代、使うなら先生に使用申請出さないと駄目なんじゃない？」

決闘場の使用をめくって話をしていた千影たち3人にオベリススクブルの制服を着た生徒2人  
万丈目の取り巻きの2人

が近づいてきて口を開いた。

「という訳には行かないんだなこれが」

「ここはオシリスレッドのドロップアウトボーイたちの来るところじゃないぞ」

「えっ？」

デュエルアカデミアの生徒ならばアカデミアの施設を使えるのではないか、そう思った翔は疑問の声を上げるが、次の言葉を聞き沈黙せざるを得なくなった。

「上を見てみる」

その発言に3人は万丈目の取り巻きの1人が指差す後ろを振り向いた。そこには、

「オベリスクの紋章が見えないか？」

オベリスクの紋章。即ち、この施設を使用できるのはオベリススクブルの生徒のみということ。翔は先ほど隼人に聞いたオシリスレッドの意味とそれを体言しているボロイ寮を思い出した。

「ごめん、知らなかつたんだ。寮に帰ろうアニキ、千影君」

「うーん・・・何かしつくりこないなあ・・・！！じゃあお前、俺と勝負しないか！？それならいいだろ」

翔のその言葉を何か納得いかないような顔で考えていたが、十代は1つ閃き、万丈目の取り巻きの1人に決闘を申し込んだ。

「確かにそれなら、使う側の片方の生徒はオベリススクブルーだから、問題はないね」

千影もうんうんと頷いていると、





がすぐに大笑いを始めた。

「ドロップアウト組みのオシリスレッドが身の程知らずな！」

「ビー、クワイエット！」

取り巻きの1人がいかに先ほどの発言が分不相応なものかを言おうとした矢先、静止させる声が上がった。誰であろう、万丈目だった。

「諸君、はしゃぐな」

「万丈目さん」

「そいつら、お前たちよりやる。入学試験決闘で手抜きしたとはいえ一応、あのクロノス教諭を破った奴らだ」

「実力さ」

「まあ、それほどでも」

その万丈目の言葉に十代は拳を握り締め、千影は少し照れつつ答えた。

それを見た万丈目は不敵に笑いながら口を開く。

「ふふん、その実力ここで見せて欲しいものだな」

「いいぜ、だけど問題は」

「私か十代、どっちが相手になるかだよな」

千影か十代、どちらかが相手になるかが決まれば、すぐにでも決闘を始めてしまう雰囲気介入する声が聞こえた。

「貴方たち、何してるの」

歩み寄ってきたのは同じ1年でオベリスクラブに所属する天上院明日香だった。

「わあ、綺麗な人だなあ」

現れた明日香の見目麗しい容姿に翔がミーハー根性を丸出しにしている中、万丈目が口を開いた。

「天上院君。やあ、この新入りたちがあまりにも世間知らずなんでねえ、学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

「そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

その明日香の台詞に万丈目は「ちっ！」と舌打ちしつつ、

「引き上げるぞ！」

取り巻きを連れて、決闘場から出て行ったのだった。

「貴方たち、万丈目君たちの挑発に乗らないことね」

明日香の発言に3人は「えっ？」と声を上げる。

「あいつら碌でもない連中なんだから」

明日香は嫌悪感を隠さず、はき捨てるようにそう言った。

「へえー」

「っ？」

千影の感嘆の言葉に明日香は千影のほうを振り向いた。

「そんなことを態々教えてくれるなんて、貴女、いい人ですね。私、

そういう人好きですよ」

と、ここでも千影はニコニコしながら天然全開な台詞をはいた。

しばらく明日香はその台詞に呆然として、「クスッ」と笑い出した。

それに釣られて十代と翔も苦笑いを始めたが、なぜ笑われているのかわからない千影は？を頭に浮かべながら首を捻っていた。

「オシリスレッドでも歓迎会が始まるわよ」

一頻り笑った明日香は3人の方に向き直ってそういった。

「おっと、そうだった！急いで寮に戻るぞ、千影、翔！」

「あつ、待ってよアニキー！！」

「十代、ストップ！」

それを聞いた十代は走りだそうとするが、千影にストップをかけたから、その場で足踏みしだした。

「なんだよ、早く行かねえーとご馳走なくなるぞ」

「うん、それもそうなんだけど、大事なこと忘れてたから」

そういった、千影は明日香の方に歩み寄り自分の右手を差し出した。

「私は姫宮千影、貴女のお名前は？」

しばらく呆気にと取られていた明日香は微笑みを浮かべると握手をしながら言った。

「天上院明日香」

それを聞いていた、十代も、

「俺、遊城十代！よろしくなー！んじゃ行くぞ千影」

と自己紹介をし、千影の手を引っ張って寮に戻っていったのだった。

「千影、十代」

その場に残された明日香はかみ締めるように2人の名を呟き、未だ暖かさの残る右手を眺めるのだった。

そして寮に戻った千影たちを待っていたのは歓迎会のご馳走・・・のはずなのだが・・・

オシリスレッド歓迎会特別メニュー、白米、めざし、味噌汁、たくさん以上！・・・

とても歓迎会の献立には見えないその有様に他のオシリスレッドの寮生たちは口々に不満を漏らした。

「なんだー！これは！」

「他の寮はすごいご馳走だったぞー！」

確かにオベリスクブルーは男子も女子も立食形式のパーティ料理だし、ライエローもフルコースメニューだった。それを考えるとこの内容には落胆せざるを得ない。

「おまけに寮長も人間ですらない」

寮生の言葉通り、寮長が座る机の上で欠伸をする太った猫がいた。

その猫の後ろ、キッチンの暖簾を潜って出てきた人物に寮生たちの視線が集まった。

「寮長の大徳寺だにや、授業では錬金術を担当している、よろしくにや」

期せずして皆の注目が集まったのを良しとしたのか自分の自己紹介を始めた大徳寺教諭なのだが

しかし、クロノスにしろ、この大徳寺にしろ独特の喋り方をするが、まあ気にしてはいけない。

これも個性の一端だ。

だが、そんな話を聞かない人間が2人、誰であろう、千影と十代だった。

「なんだよ、千影。細かいこと気にするなよ」

「だめ、これだけは絶対にだめ。いただきますしてないのに箸をつけるなんて行儀が悪いよ」

「勘弁してくれよ、俺腹が減って死にそうだよ」

などと大徳寺の話も聞かずに料理に手をつけるつけないで揉めていた。

「ちよつと、2人と今先生が挨拶中」

そんな2人を諫めようと声を出した翔だったが、その近くに大徳寺が歩み寄ってきたので喋るのを辞めざるを得なかった。

3人の前に立つた大徳寺は気にした風もなく笑顔を張り付かせたまま言った。

「気にしないのにや」。それでは皆さんこれからよろしくにや。では、話はコレくらいにしていただきましようかにや」

そして、食事を終えた千影、十代、翔の3人は宛がわれた部屋で寛いでいた。

「はー、食った食った。腹いっぱいだけ。なんで皆食べなかったのかな？」

「さあ、皆お腹の調子が悪かったからじゃない？でもちゃんと食べないとだめだよ。せっかく用意してくれたのに」

十代のその言葉に千影もお茶を入れながら答えた。

「おかわりしてたのアニキと千影君だけだったね」

「結構うまかったぞ」

「うん、素材の味は悪くないよ。調理方法もちよつと雑だけど作ってもらっておいで文句言ったら罰が当たるよ」

翔のその言葉に十代と千影は答える。特に千影は食に対して思うところがあるのか今日の他の寮生たちの態度を思い出して、少し起きているようだった。

「はい、お茶が入ったよ」

「お、サンキュー」

「ありがとう」

千影から受け取ったお茶を一口啜った十代と翔は驚きの声を上げた。

「お、この茶うめーぞ！」

「本当だ！こんなに美味しいお茶初めて飲んだよ」

「そう、実家から持ってきた茶葉なんだけど喜んで貰えて良かったよ。隼人、用意したけど君も飲む？」

その感想を聞いた千影をにっこりの微笑んでベッドに横になっている隼人に声をかけた。

「俺はいらない」

「なんだよ、せっかくこんなうまい茶を千影が淹れてくれたのに」  
隼人が言った言葉に十代は少し腹を立てた。

「いいんだ、十代。隼人、飲みたくなったら言ってよ。また淹れるからさ」

その千影の言葉に隼人は溜息をはきつつ言った。

「料理がまずいんじゃないんだぞ、自分たちの境遇が悲しくてメシが喉を通らなかつたんだぞ」

隼人のその言葉にオシリスレッドの扱いの差を思い出し、翔は顔を伏せる。

そこに電子手帳にメール着信の電子音が鳴る。

誰のかと思えば千影のものだった。

千影は生徒手帳を開き受信したメールを再生する。

差出人は万丈目、内容は以下の通りだ。

『やあ、ドロップアウトボーイ。午前0時に決闘場で待っている。

互いのベストカードを賭けたアンティールで決闘だ。それと、遊城十代も連れてこい。お前の次に相手をしてやる。勇気があるなら来るんだな』

そこでメールは終わっていた。

「へへっ、いよいよ面白くなってきたぜ」

（賭け試合か・・・でも、持ちかけられた決闘から背を向けるのは家訓に触るし・・・）

「やるしかないかな」

その内容を聞いた十代はわくわくしながら話しに乗り、千影も決闘を受けることにした。

「あいつらの元気もここまでなんだな」

その様を見ていた隼人がそう零したのだった。

「アニキ、千影君。明日香さんが相手にしちゃ駄目だって

」

指定された決闘場に向かう中で千影と十代についてきた翔は2人を止めようとする。

「何言つてんだよ、決闘だぞ。挑戦されたら受けるのが漢だろ」

「それに、持ちかけられた勝負に背を向けるということは負けたことと同意だよ」

「で、でも」

翔の説得虚しく、とうとう昼間に来たオベリスクブルー寮生専用の決闘場に到着した。

そこには

「よく来たな、150番に110番」

万丈目とその取り巻き2人がいた。

「決闘を申し込まれたなら、それがどのようなものでも応えるのが真の決闘者というもの」

「そういうことさ。じゃあ、がんばれよ千影。」

「うん、征ってくるよ」

そう言つて、千影を十代が送り出したのだった。

決闘場の上に千影と万丈目が立つ。

「見せてもらうぜ、クロノス教諭を無傷で破つたのがマグレか実力か」

「こちらもちょうど良かったよ。デュエルアカデミアのエリートの実力がどれほどのものか知りたかったから」

その千影の言葉に万丈目は笑い声を上げる。

「ハハハ！いいか、互いのベストカードを賭けてのアンティルールだ」

「ああ、委細承知の上だよ」

そして、この決闘が賭け試合ということを確認したら、互いに決闘盤を起動させる。

「「決闘っ！！」」

万丈目LP4000

千影LP4000

「まず、俺のターンだ！」

ドロートしたカードを手札に加えた万丈目はそこから、どうするかを一瞬で決める。

「リボーン・ゾンビを守備表示で召喚！」

リボーン・ゾンビ 4 ATK1000 DEF1600

「カードを2枚伏せターンエンドだ！」

(決闘には引きがある以上、運の要素も入る。しかし、勝負を決するのは緻密な計算に基づく作戦だ)

「オベリスクブルーとオシリスレッド、この頭脳の差が既に勝敗を決めているんだよ！」

万丈目のその台詞に千影は厳しい視線と言葉でもって応える。

「確かに、決闘を制するのに必要な要素として頭脳が占めるところは大きいことは否定しない。だけど、決闘の勝敗はそれだけで決まることは断じて否だ！私のターン、ドロート！」

千影はドロートしたカードを加えた手札を見て、その中にLOVサーヴァント・サキュバスのカードがあることに気がついた。

そのカードからサキュバスの精霊が飛び出て、千影に詰め寄った。



《ちよつと、アンティルールでデュエルですって！何考えてるのよ  
ご主人様！！》

どうやら、ここまでの流れを聞いていたようだ。

（ごめんね。本当は私もだめだつてことわかつてるんだけど、決闘  
と言われたらそれに背を向けることはできないんだ）

千影のその心の声にサキュバスは溜息を1つついて、

《わかつてるわよ、家訓なんですよ。でも負けたら承知しないんだ  
からね！》

（ありがとう、サキュバス）

《わかればよろしい じゃあね、ちゆつ》

サキュバスは千影の頬にキスをしてからカードの中に戻っていった。  
（さて、それにしてもどうしようか・・・リボン・ゾンビは手札  
が0枚で、かつ攻撃表示の時のみ戦闘では破壊されない効果。今の  
状況ではまったくの無意味な効果。なら、考え得るのはモンスター  
を圏にしての伏せカードによる反撃。でも私の手札にはモンスター  
の破壊効果を無効にできる魔法カード、我が身を盾にがある。なに  
よりもリバースカード自体がブラフの可能性もある なら）

「私は手札から魔法カード二重召喚を発動！このカードは発動した  
ターンのみ通常召喚を2回まで行うことが出来る！」

千影の発動した魔法カードに万丈目は身構える。

「私はLOVサーヴァント-ガーゴイル-とチューナーモンスター、  
LOVサーヴァント-インキュバス-を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント-ガーゴイル- 4 ATK1800 DE

F1000

LOVサーヴァント-インキュバス- 3 ATK800 DE

F300

（ここは攻めるー！！）

「4、LOVサーヴァント-ガーゴイル-に 3 LOVサー



いたが、十代は気がついたようだ。

「そう。コード・チェンジはカードに表記されているモンスターの種類か種族を任意に変えることができる魔法カード」

「ということは・・・どうということ?」

翔は未だにわからないままのようだった。

「コード・チェンジの効果でヘル・ポリマーの融合モンスターの記述をシンクロモンスターに変更!さらに記述が変更されたヘル・ポリマーの効果!リボン・ゾンビを生贄にバハムートのコントロールを得る!」

万丈目の場にあたりリボン・ゾンビがヘル・ポリマーから発せられたオーラに絡みつかれ砕け散ると、千影の場に召喚されたバハムートが消え、万丈目の場に現れた。

その体は本来の赤銅色でもなければ、神聖を放つ白金色でもない。ただただ狂気を表す黒色だった。

「クロノス教諭との決闘での止めがこのモンスターだと知って、この罠を張っていたのさ。そんなことも知らずにまんまと罠に入り込んでくるとわな。所詮、オシリスレッドという訳だ。フッフッフッ」  
黒いバハムートを従えた万丈目はしてやったりという顔で笑っていた。

(抜かった!まさかコントロール奪取とは・・・!!)

《何やってるのよ、もう!》

エースモンスターを盗られた迂闊さを内省していると、手札のサキユバスからも叱責が飛んできた。

(ごめん、この状況を読みきれなかった。精々が迎撃用の罠カードだと思っていた私のミスだよ)

《どうするのよ、こっちはもう通常召喚できないのよ!それにバハムートの効果は

《》  
サキユバスは心配そうな目で自分の主を見るが、彼はまだ冷静だった。

(攻撃力が守備力を越えていればその差だけダメージを与える貫通効果と、手札を2枚捨てる度に攻撃を繰り返せる連続攻撃効果。この状況あまりにも痛い、まだ手はあるよ)

《本当なのでしょ、うね?》

(ご主人様を信じなさい)

その言葉を信じたサキュバスは何も言わなくなった。

(本当、今回はこの子に心配かけてばかりだな　さて挽回  
しますか!)

千影は自分をこんなにも心配してくれる相棒に感謝しながら、そう決意した。

「まだ、私のターンは終わっていないよ!LOVサーヴァント・インキュバス・のモンスター効果、このカードがシンクロ召喚の素材にしたときデッキの上からカードを1枚手札に加えることができる!」

(この状況を凌ぐことができるカードはある。応えてくれよ我が使い魔たち)

そして、千影はカードを1枚引く。

そのカードを確認した千影は心の中で安堵の息をついた。

なぜなら引いたカードは

「私が引いたカードはLOVサーヴァント・ワイバーン・!このカードは通常のドロワー以外で手札に来たとき1000ポイントのライフを支払うことで特殊召喚することができる!私は守備表示で特殊召喚する!」

「何!?!」

万丈目LP4000

千影LP3000

LOVサーヴァント・ワイバーン・　7　ATK2400　DE  
F2400

「ターン終了だ」  
「ふん、驚かせやがって。上級モンスターを特殊召喚しても、その攻撃力ではバハムートには及ばない。俺のターン、ドロー！地獄戦士を召喚！」

地獄戦士      4    ATK 1200    DEF 1400

「いけ、バハムート！メガフレア！！」

バハムートは両の腕にエネルギーを収束させワイバーンに向けて放つ。  
バハムートの攻撃がワイバーンに直撃し、辺りは爆発の煙に包まれる。

そして、爆発の余波が千影を襲い、ライフポイントを削っていく。

万丈目LP4000

千影LP2900

「これで、お前を守るモンスターはいない」

「それはどうかな？」

バハムートの圧倒的な攻撃力の前に酔いしれた万丈目の発言を千影は遮った。

「なんだと!？」

万丈目はその言葉の真意を探るべく目を凝らして爆心地を見た。

煙が晴れていく中そこには、無傷のワイバーンがいた。

「そんな、確かに攻撃は通ったはずだ！なのに、なぜ!？」

「LOVサーヴァント・ワイバーン」のモンスター効果、攻撃力、守備力を800ポイントマイナスすることにより戦闘での破壊を免れる」

LOVサーヴァント・ワイバーン - 7 ATK1600 DEF1600

その姿を見た万丈目は苦虫を噛み殺したような顔で自分のモンスターたちに命令した。

「ならば、破壊できるまで攻撃するのみ！バハムートのモンスター効果！手札を2枚捨てる度にもう一度攻撃することができる！俺の手札は3枚、この中の2枚を墓地に送り、バハムートでもう一度ワイバーンを攻撃！貫通ダメージを喰らうがいい！！」

再びワイバーンに破壊の劫火が迫るがこれもワイバーンは耐えた。

千影も腕を顔に翳し、その余波を耐える。

万丈目LP4000

千影LP2000

LOVサーヴァント・ワイバーン - 7 ATK800 DEF800

「続けて地獄戦士でワイバーンに攻撃！ヘル・アタック！！」

3度目の攻撃にワイバーンも態勢を崩すが何とか持ちこたえることができた。

しかし、3度の攻撃を耐えたワイバーンは満身創痍で正に死に体だった。

LOVサーヴァント・ワイバーン - 7 ATK0 DEF0

「フハハハハッ！無様だなあ150番！これでもう効果は使えない！ご自慢のシンクロモンスターをも封じられて正に打つ手なしだなあ！！スモールタウンではどうだったかは知らないがお前はデュエルアカデミアでやっていけるレベルではない！思い知ったか！！」

そのポロポロになったワイバーンと下を俯いたままの千影が愉快でならないのか、万丈目は笑いながら千影をそう断じた。

「俺は場にカードを1枚伏せてターンエンド！さあ、お前の番だ！」  
千影は俯き肩を震わせていた。

「悔し泣きかい？150番」

肩を震わせる千影を見て泣いていると思ったのかさらに愉快げな顔をしながら万丈目は千影を見た。

しかし

「楽しいなあ」

千影は泣いてなどいない、それは武者震いだった。

そしてその言葉を聞いた万丈目は驚きの声を上げる。

「何!？」

「私は今、すごく感動しているよ。この学園には君みたいな強い決闘者がまだまだいるのでしょうか？これほど楽しみなことはないよ。

そして強い君だからこそ私は今、全力の血闘ができるのだから！」  
そして顔を上げたその眸はクロノスとの決闘の時と同様に紅蓮の炎のような真紅に爛々と輝いていた

「私のターン、ドロー！」

その引いたカードを見た千影は口元に笑みを浮かべた。

「私はLOVサーヴァント・ワイバーン - を生贄にLOVサーヴァント・マンドレイク - を攻撃表示で召喚する！」

持ち主の千影がこの状況でこのカードを見て笑みを浮かべるということは、それだけのモンスターであるはず。召喚されたモンスターは  
見た目、大根にしか見えないモンスターだった・・・

LOVサーヴァント・マンドレイク -      5      ATK1500      D  
EF500

「はっ！そんな大根でいつた何が出来る！」

そのモンスターのお間抜けな姿を見た万丈目は一笑に付した。

「ならば、その身で味わうがいい！いけ、マンドレイク！地獄戦士に攻撃！球根爆弾！！」

マンドレイクは《いいいやっほおお、ばりばりだぜ》という気の抜ける声と共に頭を振って、そこからいくつもの球根を発生させてそれを地獄戦士に振りまく。

降り注いだ球根が爆発を起こし、地獄戦士は粉微塵に吹き飛んだ。

「くっ！」

地獄戦士はあつけなく倒されたが、地獄戦士が持っていた剣が宙を舞い、意志があるかのごとく千影に向けて落ちてきた。

「ううっ！」

万丈目LP3700

千影LP1700

「モンスター効果発動だ！地獄戦士は破壊された時、プレイヤーの受けたダメージを相手プレイヤーにも与える効果があるのだ！」

「千影！」

「千影君！！」

それを見ていた十代と翔は心配そうな声を上げる。

「彼、そうは見えないけど少し迂闊ね。モンスター効果を見捨てるなんて」

彼の取ったその行動に明日香は落胆を隠さずにそう言った。

しかし、その明日香の落胆は裏切られることになる。

「LOVサーヴァント・マンドレイク・のモンスター効果発動！」

「何！？」

「このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、このカードを墓地に送ることで相手の場にいる全てのモンスターが全ての魔法、罫カードどちらかを破壊することができる！！私が選ぶのはモ



ンスター！！」

マンドレイクが眩しいばかりの閃光を放ち、決闘場を呑み込んだ。

「ぐっ、くっ！」

光が晴れたあとには千影と万丈目、両方の場からモンスターは完全に消えていた。

「すげーぞ！千影！！」

「そんな効果があるなんて！」

「まさか、さっきの攻撃はこれを狙って

」

その効果を聞いた十代、翔、明日香は驚きを隠せなかった。

《ばたんきゅ〜》

その腰の抜けるような声と共にマンドレイクは墓地へと落ちていった。

「助かったよ、マンドレイク。それとお帰り、バハムート」

千影は自分の決闘盤の墓地がある部分を愛おしげに撫でた。

「さらに私は魔法カード、貪欲な壺を発動！このカードの効果は墓地にあるモンスターカード5枚を選びデッキに戻す。そしてシャッフルの後、デッキからカードを2枚ドロースる！墓地にあるバハムート、マンドレイク、ワイバーン、ガーゴイル、インキュバスをデッキに戻してカードを2枚ドロースる！私はこのままターンを終了する」

「この！調子に乗るなオシリスレッドのドロップアウトめ！！俺のターン、ドロースる！！」

奪い取ったエースモンスターを雑魚モンスターに破壊されたことに怒りながら万丈目はドロースしたカードを見る。

そのカードを見た万丈目の顔は喜色に染められていった。

「ふっ、この決闘俺の勝ちだ！リバース罠、リビングゲデッドの呼び声発動！！このカードは自分の墓地からモンスターを1体選び、攻撃表示で特殊召喚する！地獄戦士を特殊召喚！！」

地獄戦士 4 ATK1200 DEF1400

「そして地獄戦士を生贄にして地獄將軍・メフィストを召喚!!」

地獄將軍・メフィスト 5 ATK1800 DEF1700

「お前にはその身を守るモンスターも伏せカードもない。直接攻撃が通れば俺の勝ちだ!」

「通ればの話だけだね」

「ふっ、減らず口を。ならばこの攻撃で終わらせてやる!地獄將軍・メフィスト、プレイヤーへ直接攻撃だ!!」

メフィストは万丈目の命令を受けて、その手に持つ巨大なハルバードを振り上げ、千影に迫る。

「確かに、私の場には私を守るカードはない。しかし、私を守ってくれるカードはここにいる!私は手札からLOVサーヴァント・グリフォン - の効果を発動!」

LOVサーヴァント - グリフォン - 4 ATK1500 DEF800

「っ!そのカードは!!」

「そう、このカードの効果は攻撃力1500以上のモンスター1体の攻撃を無効にする。さらに無効化したモンスターの攻撃力が2500以上なら、もう1つの効果も発揮するが 地獄將軍・

メフィストの攻撃力は1800。残念ながら次のターンでのドロワー追加効果は発動しない」

グリフォンの効果により万丈目の攻撃は不発に終わった。

「くっ!しぶとい奴め!しかし、俺の圧倒的有利には変わりはない。どう転んでも俺の勝ちが決まったようだな!アンティールによりお前のベストカードを貰うぜ!!」

しかし、場の状況は未だに自分に傾いている万丈目は余裕の表情で千影に言った。

「それはどうかな？」

「なに？」

千影のその言葉に一瞬、表情を曇らせるが万丈目はそれを一笑に付す。

「ふっ、決闘は99%の知性が勝敗を決する。運を含むそれ以外の要素が入り込む余地などたったの1%に過ぎない」

「確かに君のいつてる事は事実の一端ではある。しかし！その1%にこそ決闘の真実がある！！君に奇跡を見せてあげよう！私のターン、ドロー！！」

その万丈目の台詞に千影は首を振って言い、デッキからカードを引いた。

引いたカードを見た千影の口元が笑みに変わった

そのカードとは

「私は魔法カード、死者蘇生を発動！」

「なんだと!？」

「この効果により墓地のモンスター1体を特殊召喚する。私は墓地にいるLOVサーヴァント・グリフォン - を攻撃表示で特殊召喚!」

LOVサーヴァント・グリフォン - 4 ATK1500 DE

F800

「さらにチューナーモンスター、LOVサーヴァント・サキュバス - を攻撃表示で召喚する！」

LOVサーヴァント・サキュバス - 3 ATK1500 DE

F100

「チューナーモンスター　　っ、まさか！」

千影の次の一手がシンクロ召喚だとわかった万丈目はその表情を驚愕に染める。

「そのまさかさ。　4、　L o Vサーヴァント - グリフォン - に  
3、L o Vサーヴァント - サキュバス - をチューニング！」

グリフォンとサキュバスが星となり戯れるように宙を舞う。それが雄雄しき竜に姿に変化していく様はまさに奇跡。

「妖しきの星が、集いてここに奇跡を成す！奇跡よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、絶対破壊者L o Vサーヴァント - バハムート - ！」

そして破壊の権化が軌跡の体現者として、その身を顕現させたのだ。  
った。

L o Vサーヴァント - バハムート -　　7　　A T K 2 5 0 0　　D E  
F 1 4 0 0

「さらにチューナーモンスター、サキュバスの効果により、このターンの攻撃力が1000ポイントアップ！」

L o Vサーヴァント - バハムート -　　7　　A T K 3 5 0 0　　D E  
F 1 4 0 0

さらに奇跡は続く。バハムートの体が白金色に輝きその身から溢れんばかりの力を漲らせていた。

「私の手札は3枚。よってバハムートの攻撃可能回数は2回。君のライフポイント3700。たとえ地獄將軍・メフィストが壁になったとしても2回目の攻撃で君のライフは0になる。それに君の手札は0枚、君の負けだ万丈目　　んっ？」

逆転したこの状況で万丈目に負けを言い渡そうとした千影はこちらに近づいてくる足音に気がついた。

「すっげえ！本当に奇跡を起こしちゃったよ千影の奴！！」

「本当に千影君はすごいや！」

宣言どおり、奇跡とも言うべき逆転を起こした千影に十代と翔は大喜びだった。

明日香もこの状況に半ば呆然としていたが、故にこちらに近づく足音に気がつけた。

この時間帯、決闘場に用のある人間などいない 自分たち

のことは棚の遥か上に上げて 。来るのは警備を担当する

者、そう明日香は結論づけた。

「ガードマンが来るわ！アンテイルールは校則で禁止されているし、時間外に施設を使ってるし、校則違反で退学かもよ！」

明日香のその言葉に十代と翔は「うへ〜！！」「と唸った。

「確かに賭け試合での私闘、施設の時間外無断使用、退学処分の理由には十分か 万丈目、この勝負、君に預けておくよ」

明日香の言葉を聞いた千影は1つ頷く。そして決闘盤の電源を落としながら万丈目にそう言った。

「な、情けをかけるというのか！ドロップアウトがこの俺に！！」

オシリスレッドのドロップアウトに負けかけただけでなく、その勝負を保留、すなわち引き分けにしてくれたことと何よりも

(しかも明日香さんが見てる決闘で俺に恥をかかせるとは！)

明日香の前でそのような醜態を晒したことに酷くプライドを傷つけられていた。

「万丈目さん！ヤバイっすよ！！」

「早く行かないと見つかったちゃいますよ！！」

その取り巻きの言葉に憎憎しげに千影を身ながら千影を指差し叫んだ。

「この屈辱、いつか必ず晴らす！覚えておけ、姫宮千影！！」

そういうと、取り巻き立ちを連れて、決闘場から出て行った。

「さ、私たちも早く逃げよう」

そして十代たちの側に来てそう言った千影の眸はいつの間にかいつもの穏やかな紅に戻っていた。

「そうね、ついて来て。こっちからの方が早く校舎から出られるわ」  
明日香の先導の下、決闘場から4人は立ち去る時、明日香は横を走る千影を見つつ心で思った。

（この子、おもしろいかも）と。

## 第2話【D A学園篇】（後書き）

さて、本編だと第2話のフレイムウイングマンの回を今回お送りしました。

今回、本編では万丈目が十代のフレイムウイングマンをばくる回だったので千影のバハムートをばくらせようとしたのですが、シンク口召喚されたモンスターを相手ターンにばくるカードに思いあたりがなかったので、ヘル・ポリマーの効果「相手が融合モンスターを融合召喚した時発動」の記述を削らせていただきました。

さらにGX最終回アテムが使いオシリスを召喚したコード・チェンジも若干の変更を持って使用させていただいています。

今回の最強カード『LOVサーヴァント・マンドレイク』

5 ATK1500 DEF500 光属性 植物族 効果モンスター

このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、このカードを墓地に送ることで相手の場にいる全てのモンスターが全ての魔法、罫カードどちらかを破壊することができる。

相手のモンスターを戦闘で破壊した時、墓地に送ることでサンダーボルトかハーピィの羽根箒の効果を使えると言うモンスターです。しかしマンドレイク自身が5であることと攻撃力も主力アタッカーの1600の数値に届いていないこともあり使いにくい効果となっています。

効果は強力ですが使いどころが非常に限定されるカードでしょう。

### 第3話【DA学園篇】

万丈目と千影の決闘から一夜明けた今日、初めての授業で明日香がクロノスからの出題にスラスラと答えていく。

「デュエルモンスターズのカードにはモンスターカード、融合モンスターカード、儀式モンスターカード、効果モンスターカード、そして魔法カードと罠カードがあります。さらに罠カードには通常罠、カウンター罠、永続罠。そして魔法カードには通常魔法、永続魔法、装備魔法、速攻魔法、儀式魔法、そしてフィールド魔法と分けることができます」

さらに遙か前方を座る千影を見つつ

「そして今朝、インダストリアル・イリユージョン社と海馬コーポレーションが新機軸のモンスター、シンクロモンスターとチューナーモンスターの開発、研究を行っていることを発表しました。数年の内には販売され、今までの決闘環境を大きく変える新システムとして関心が集まっています」

「ベツニーシモ！非常によろしいノ！オベリスクブルーのシニョーラ明日香には優しすぎる質問でしたーネ。それに新しい情報も漏らすことなく把握しているとーハ！！」

そこまで言った明日香をクロノスは満足げに評価した。

「基本ですから、それに決闘者として情報のチェックは欠かすことの出来ない重要なものです」

そう応えた明日香は席へと座った。

「いい心がけですーノ。それでは」

そこまでいった、クロノスはさらに満足げな顔で頷きながら、次に誰に問題を出すか辺りを見回し、翔に目をつけた時、いいことを思いついた。

「シニョール丸藤」

「は、はい！？」



クロノスに指名された翔はガチガチに固まりながら席を立つ。

その翔にクロノスは

「魔法カード、デンジャラスマシンTYPE-6の説明をお願いしますーノ」

カードの表記文がややこしいカードの効果を答えさせようとした。

もちろん、クロノスはオシリスレッドの生徒がこの問題に正解できるとは思っていない。ただ、何も答えられない翔と先ほど完璧に答えた明日香を比較し、いかにオベリスクブルーの生徒が優秀であるかを知らしめ、オシリスレッドの生徒を笑いの種にしたてようとしたのだ。

「え、えっと・・・デンジャラス・・・マシン・・・TYPE-6の効果は・・・あの、その・・・ええっと・・・」

当然、翔はこのことに答えることは出来ない。それにこのカードの効果を完璧に答えられる生徒はオベリスクブルーでもそうはいないのだ。

しかし、この答えをピタリと答えた生徒がいた。

「デンジャラスマシンTYPE-6、永続魔法カード。効果は自分のスタンバイフェイズ毎にサイコロを振り、出た目の効果を適用するカード。適用される効果は1の時は自分の手札を1枚捨てる効果、2の時は相手の手札を1枚捨てる効果、3の時は自分はカードを1枚ドローする効果、4の時は相手はカードを1枚ドローする効果、5の時は相手フィールド上のモンスター1体を破壊する効果、6の時はこのカードを破壊する効果です」

翔の横に座っていた千影が立ち上がってそう答えた。

「又ウツ!?!・・・ばらばらーノ、ばらばらーノ」

まさかのオシリスレッド生徒からの回答にクロノスはテキストを開いて答えの確認を行ったが、次の瞬間には顔から表情が消えた。

「正解なのーネ」

その言葉に教室中がざわめいた。まさかオシリスレッドの生徒が完璧に答えられるとは夢にも思っていなかったのだらう。その中で十

代と明日香、三沢は満足そうに、万丈目は忌々しげに千影を見つめていた。

「翔、君は答えがわからなかったんじゃなくて、あがっていて答えられなかったんだよね？」

そして未だ立つ翔に千影は小首を傾げながらそう聞いた。

「えっ！？あー、うん」

千影のその天然発言にNOとは言えず、尻すばみに肯定とも否定とも取れる答えを返した。

千影はどうやら肯定と受け取ったよう

「と、いうそうですクロノス先生。それと指名されてもないのに、いきなりの発言、お許しください」

ニコリと微笑んでクロノスにそう言つと、席に着席したのだった。

「マンマミーア！！」

その余裕ぶつた

本人はそんなつもりは毛頭ない

発言にクロノスはポケットから取り出したハンカチを噛み締めるのだった。

クロノスの授業が終わり、大徳寺の授業が始まった。

「えー、錬金術とは文字通り金属でないものから金属、特に金を作り出すことですが。広い意味では一般の物質を完全な物質に変化、変成しようとする技術のこと」

太った猫、ファラオを膝の上に置いて撫でながら錬金術について語る大徳寺の話聞いていた千影に翔が顔を寄せてきた。

「千影君、さつきはありがとう」

「うん？ああ、クロノス先生の授業の奴ね。だって知ってるのに、知らないってことになっちゃ困るでしょ？」

未だに千影は翔がデンジャラスマシンTYPE-6の効果を知っていることを勘違いしたままだった。

千影のその言葉に翔は「あー」とか「うーん」とか唸っていたが、その2人の姿を大徳寺が見ていることに気がついた十代は2人に向

かつて小声で言った。

「しっ！無駄口叩いてるとまた先生に指され  
しかし、十代はその台詞を最後まで言うことはできなかつた。」

「丸藤翔君」

なぜなら、すでに大徳寺が翔を指名したからだ。

「はっ、はい！」

翔は慌てながら席を立つ。その顔は注意されると思い、緊張に強張っていた。

しかし大徳寺の次の言葉は予想に反するものだった。

「フアラオを捕まえてもらえますかにゃ」

「えっ？フアラ・・・オ??」

いきなり古代エジプトの王を捕まえてと言われた翔は呆然となった。いったい、フアラオが何を指すのか翔がわからないことを悟った大徳寺は続けて言った。

「私の猫ですにゃ」

そう言われれば、さっきまで膝の上にいた太った猫が消えていた。

その大徳寺の言葉に心えるようにニヤーという声が翔と千影の足元でした。

いきなりの猫の声に皆が翔と千影の足元を見てみると、太った猫フアラオが翔の足元を潜り、千影の足元までくると、その足に頬摺りをはじめたのだった。

所変わってクロノスの教諭室。クロノスは紙に向かってペンを走らせていた。

「あのドロップアウトボーイだったら、よくもワタクシのドロップアウト扱下ろし作戦に水をさしてくれましたーノネ！このままで済むと思つたら大間違いですーノ！！」

どうやら書いていたのは手紙のようだ。書き終わったのか羽ペンを直し、封筒を用意する。

そして何故か口紅を出し、自分の唇に塗り始める。

「モロンゾーレ、メロンゾーレ、んーむちゅっ」

手紙の入った封筒に唇を押し当て、キスマークを付けるのが目的だったようだ。

「これでよしと。ムッホホホホ!!」

そして、これからのことを思い浮かべたクロノスは愉快そうに笑うのだった。

本日最後の授業である体育の授業、十代や翔が整列している中でそこには未だに千影の姿がなかった。

「何やってんだ千影の奴、俺たちより早く着替え終わってたくせに」「遅いよね、千影君。何かあったのかな?」

未だにこない千影の事を心配そうに話す十代と翔だった。

しかし、千影が来ないまま体育の先生が来てしまった。

「皆さんこんにちは。今日から皆さんに保健と体育を教えます、鮎川恵美です。どうぞよろしくね」

さらに所変わって男子更衣室。そこに妖しい影が1つ。誰であろう、クロノスだった。

「そろりーノ、生意気なドロップアウトボーイのロッカーはどこでしょーネ。あつ、ありましター!」

どうやら千影のロッカーに用があるようだ。クロノスは先ほど自分が用意したキスマーク付きの手紙をそのロッカーに入れ、「ニヤーツ」と笑い、ロッカーを閉めるとスタコラサッサと更衣室から出て行ったのだった。

それから数十分後、ジャージを着た千影が更衣室に入ってきた。

「しまった。今日の体育は体育館での授業だった」

その手にはアウトドア用のスポーツシューズが握られていた。どうやら、今の今まで授業があるのは運動場だと勘違いしていたらしく数十分も待ちぼうけしていたようだ。

千影はアウトドア用のスポーツシューズを直し、ロッカーからイン

ドア用のスポーツシューズを出そうとしてロッカーを開いた。

「んっ、何かあるな。何だろう?」

ロッカーの中に何かを見つけた千影はそれを取り出して見た。

「手紙?宛名はないな。私のロッカーに入ってたっていうことは私宛ってことでいいよね?」

宛名も送り主も書いていない封筒を破り、中に入っていた手紙を広げた。

以下がその手紙の内容である。

貴方だけに伝えたいことがあります。今日の夜、女子寮の裏へこっそり着てください。待ってます。天上院明日香から姫宮千影様へ

「???何だろう?明日香が伝えたいことって?しかもこっそり?」なぜ、明日香がこんな手紙を寄越したのか考え始めた千影は、体育の授業のことをすっかり忘れてしまっていた。

このことを思い出したのは授業終了のチャイムが鳴ってからである。

そして、夜。風呂から上がった十代と翔は頭をタオルで拭きながら部屋に戻ってきた。

「おい、千影お前も風呂いってこいよ」

「今ならちようど空いてるよ」

十代と翔はそう言うが、その千影の姿が見当たらなかった。

「千影ならいないんだな」

部屋を見回しても千影の姿を見つけないことが出来ない2人に隼人は声をかけた。

「「えっ?」」

「何だ、一緒に風呂に行ってたんじゃないのか?」

その隼人の言葉に2人は首を横に振る。

「一緒じゃないよ」

「どこ行っただ?あいつ」

オベリスクブルーの女子寮の裏手に1人の黒装束の男がいた。男は裏門にかかっていた鍵をチェーンカッターで切り、中に侵入していた。

そんなことは露知らずその裏手にある女子寮の大浴場では女の子たちがバスタイムを満喫していた。

「本当に明日香さんってばスタイル抜群で羨ましいですわ」

「そんなにジロジロ見ないでよ。恥ずかしいじゃない・・・」

浜口ももえがうっとりとした表情で明日香のスタイルのよさを褒めるが、その言葉に明日香は赤面して胸の前に腕を持ってきて、その胸を隠した。　　ような気がする。　　いかんせん声だけなので妄

sゲフンゲフン、想像なのだが。

「ももえもまた胸が大きくなったんじゃない？」

「もう！ジュンコさんったら、どこ触ってるんですかー！」

枕田ジュンコは、明日香を褒めたももえの胸がまた大きくなっていることに気づき、後ろから持ち上げるようにしてその感触を楽しんでいる。　　ような気がs（以下略

その声を聞いて風呂に女子がいることを確認した黒装束の男、クロノスは今のところ計画が順調に進んでいることに満足していた。

クロノスは懐からカメラを取り出しつつ、これからの計画を誰も聞いていないのにペラペラと喋りだした。

「ノホホホー、ここはちょうど女子寮の風呂場の裏なーノデース。

そうとも知らずノコノコやってくるあのドロップアウトボーイの姿が目には浮かびますーノ！そこをパチリと写真を撮れーバ誰がみてーモ、女風呂をのぞく痴漢ボーイの証拠写真ー二見えるはずーネ！そしてドロップアウトボーイは退学、この学園からおさらばな訳ネ、アデオース！それはスペイン語、チャオ」

そういう計画らしい。

クロノスがペラペラと聞く人間もいないのに計画の内容を喋っている内に裏門に連なる湖に千影の乗ったボートが到着した。

場面が変わって、オベリスクブルー女子風呂の中。体を洗い終わった明日香、ももえ、ジュンコは湯船に浸かりながら談笑していた。「それにしても今年入学の男子ってば碌なのいないですわねえ」ももえのその言葉に話題が今年入学の男子の話題に変わった。

「あつ、でも姫宮千影さんは別よね。どことなくにじみ出る気品、柔らかい物腰、今日の授業で見せた明晰な頭脳、そして入試決闘での完全勝利！なぜ、オシリスレッドなのか不思議でしかたありませんわ」

ジュンコは今日のクロノスの授業でデンジャラスマシンTYPE-6の効果を澱みなく答えた千影を思い出して、話題に上げた。

「ええ。それにまるでお顔も可愛らしいお人形さんみたいで、殿方にしておくのが勿体無いですわあ」

「女の子の格好をさせたらさぞかしお似合いでしょうね。ねえ明日香さん」

それにももえが相槌を打ち、ジュンコも女装をした千影を思い浮かべながら、明日香に話を振った。

「そうね、それもおもしろいかもね」

明日香も千影が女装した場面を想像したのか、少し笑いながら答えたのだった。

「オーソレミーヨ、オーソレミーヨ、オーソレ　　っ！」

女子寮の裏で千影を今か今かと待ち受けるクロノスは、こちらに近づいてくる足音に気づき、その身を茂みの中に隠す。

（来ましたネ、飛んで火に入るドロップアウトボーイですーノ）

「明日香ってばこんな時間になんの用なのかな？私にだけこっそり話したいことなんて」

そういつつ、千影は懐から件の手紙を取り出す。

（シャッターチャンス！）

それと同時にクロノスがカメラを構えた。

クロノスがシャッターを切ろうとしたその瞬間

《千影！狙われてる！！》

デッキケースに入れてきたLOVサーヴァント・サキュバス・から警告が発せられる。

「っ！何奴！！」

千影もその気配に気づき、手に持った手紙の入った封筒を手裏剣のように気配のしたほうに投擲した。

「オ、デイーオ！？」

手紙はクロノスのカメラに、命中。クロノスはカメラを落とし、驚きの声を上げて立ち上がった。

「誰？」

そのクロノスの叫び声を聞いた女子生徒の数人が裏手に出てきた。

「しまっタ！！」

クロノスは慌てて、身を隠そうとするがもう遅かった。

「覗きよーっ！！」

「きゃーっ！！！！」

「ちかーんっ！！」

数人の女子生徒のあげた悲鳴に、人が集まってくる。

「じよ、冗談ではありませんーノ！このままでは私のほうが退学ー二なつてしまいますーノ！！」

人が集まってくるのを見たクロノスはこの場からの逃走を図ろうとするが、それさえも遅かった。

「そこか！！」

すでにクロノスの目の前には千影が迫っていたからだ。

千影はクロノスの手を取ると、その小さな体に見合わない力でクロノスを投げ飛ばした。

「マンマミーア！？」

投げ飛ばされたクロノスは湖に水しぶきを立てて落下、沈んでいったのだった。

クロノスを投げ飛ばした千影は投げ飛ばす際に髪を結っていた紐をクロノスに掴まれ、そのまま持つていかれたようで、解き放たれた



銀の長髪が夜風に靡いていた。

「あなた、大丈夫!？」

「すごかったよ!」

「さっきのどうやったの!?!?!?、あなた!」

その姿を遠めに見ていた女子は千影を女の子と思っただけで近づいてくるが、その身に纏った制服がオシリスレッドの制服であることに気がつき驚きの声を上げる。

それは次々に伝播していき、千影の周りには人だかりができていた。  
「何やってるの、貴方たち　　っ、千影!？」

この騒動を聞きつけて、急いで風呂から上がってきた明日香は人だかりの中心にいる人物を見て驚きの声を上げたのだった。

明日香はこの案件は自分が預かるとして、先生への報告を控えるようにだけ言い、この場を解散させた。

「でっ、どういふことかしら?」

明日香はこの顛末を聞こうと、千影の方を向く。

「話せば長くなるから、場所は変えたほうがいいね。明日香たち、お風呂上りですよ。こんなとこに長い時間いると湯冷めしちゃっよ」千影のこの言葉に明日香と共にこの場に残ったももえとジュンコが「うんうん」と頷くが、すぐに男子を寮に入れるリスクに行きあたってしまう。

「でも、寮の中じゃ鮎川先生に見つかってしまうかもしれませんし・

・・・

「せめて、この子が女の子なら　　っあ!それですよ、明日香さん!」

ジュンコはさっき風呂場で話していた話題を思い出し、明日香のほうを見た。

明日香もそのことを暫く思索すると、千影に対しこう言った。

「千影、あなた服を脱ぎなさい」

オベリスクブルーの女子寮のロビーに4人の女子生徒がいた。その4人とは明日香、ももえ、ジュンコ、そして髪をおろしたままでオベリスクブルー女子の制服を着た千影であった。

「私の予備だからサイズはちよつと大きいかもしれないと思ったけど、なんとかなるものね」

自分の制服の予備を着た千影を見た明日香はそう感想を漏らした。

「変じゃないかな？」

千影は大きく余った胸の部分を気にしながら3人に聞いた。

「やあん、この子本当にかわいいですわあ！」

「もう、このまま女子寮に置いておきたいくらい！」

その仕草にももえとジュンコはキュイキヤイとしやいでいた。

ももえとジュンコは今にも千影に飛びついて撫で回したい衝動に駆られるが、痴漢の件となぜ千影があそこにいたのかを聞き出す役割を引き受けた明日香の邪魔をしてはいけないとグツと堪えた。

「でっ、千影はなぜ貴方はあんなところにいたのかしら？」

「あれっ？明日香が私に用があるんじゃないの？ほら、これ」

その言葉に千影は今日送られてきた手紙 犯人が落とした

カメラとともに回収済み を取り出し明日香に渡した。

明日香は渡された封筒を開き中の手紙を読むと、首を振った。

「私の字じゃないわ。こんな汚い字書かないもの」

「じゃあ、誰がこんないたずらを？」

「それにもう1人の痴漢も気になりますわあ。他の子たちの話を聞く限りでは千影さんが黒装束の怪しい者を投げ飛ばしたという話ですし」

偽者の手紙で呼び出された千影、その場にいた怪しい黒装束の痴漢、これは偶然なのか。それとも何か思惑の絡み合った事件なのか。万丈目が万丈目サンダーへと至っていれば万丈目サンダーの名にかけて、こんな事件たちどころに解決してみせてくれるのに本当に残念だ とはいかなかった。

「多分だけどいいかな？」

千影は小さく手を上げつつ、明日香たちに自分の推理を話しはじめた。

「今回のあの黒装束の目的は風呂場の盗撮じゃないと思うんだ」「なぜ、そういいきれますの?」

その千影の台詞にももえは首を傾げながら聞いた。

「それはシャッターを切ろうとした相手が私だから」

その言葉に3人は「っ、えっ!?」「っ」という表情になった。

しかし、明日香はすぐに納得できないといった表情になった。

「なぜ、それが自分とわかるのかしら?」

「ええっと、まあいろいろあります・・・ごめん、今はちょっとその理由はいえない」

明日香の言葉に千影は困った顔を浮かべつつ頭を下げた。

その表情を見た明日香は「やれやれ」と肩をすくめて言った。

「わかった、今は聞かないわ。で、続きはどうなの?」

「うん。で、このことを考えると黒装束の本当の目的は私を痴漢に仕立て上げようとしたんじゃないかって」

千影のその言葉に明日香はすこし考えてから頷く。

「そうね、そう考えるとこの手紙との関連性も見えてくるわね。わかった、そういうことにしておくわ。でもこの手紙とカメラは私たちで預かることになるけど、いいわね?」

その言葉に頷く千影に、ジュンコとももえは飛びついた。どうやら我慢の限界が来たらしい。

「でも、何を考えてるのかしらあの痴漢!こんな可愛い子を痴漢にしたてあげようとするだなんて!!」

「まったくもって許せませんわ!」

「あっ、あの、ちょっとどこを触ってるんですか!あっ、そこはこれ以上は本当にだめえええええええ!!」

そしてそのまま千影はももえとジュンコの餌食になるのであった。

クロノスの敗因は1つ。いつの世も女性とは可愛いモノの味方なのだということを知らないことだった。

「はあく、満喫しましたわ」

「ええ、本当に」

ジュンコとももえは肌をツヤツヤさせながら笑いあっていた。千影はすこしやつれていたが、すぐに復活し乱れた服装を直しながら明日香を恨めしそうな顔で見た。

「止めてくれても良かったんじゃないかな、明日香」

「ごめんさないね。ああなったジュンコやももえは止まらないからそのあまりにも可愛らしい仕草に明日香は笑いながら答えた。

「でも千影。着せておいてなんだけど、女装することに抵抗はなかったの？ 貴方一応男の子でしょう」

「まあ、女の子が湯冷めするくらいなら女物の服ぐらい着るし。それに私、家訓で5歳までは女の子として育てられたから」

明日香の台詞に頭をかきながら答えた千影の言葉に明日香は少し頭を痛めた。

「どんな家訓よそれは・・・」

しかし、これで少し納得がいった。千影の自分の呼び方が私なのも言葉遣いが所々女よりなのも、物腰が男にしては柔らかなのも、その家訓の賜物なのだろう。

そういう話をしていると、ロビーの2回から声がした。

「皆さんお揃いで何の騒ぎ？」

オベリスクブルー女子寮、寮長の鮎川教諭だった。

明日香、ももえ、ジュンコはついに来たかと思い、明日香は千影に耳打ちする。

（俯いたまま顔を上げちゃだめよ、千影。上からなら顔は見えないから）

千影はその言葉に1つ頷き、明日香、ジュンコ、ももえは千影が着替えている間に打ち合わせた予定通りの芝居を始める。

「実はこの子にちょっとした相談を持ちかけられて、それで私たちで話し合っていたんです」

明日香の台詞にジュンコとももえは頷きつつ続いた。

「何でも好きな殿方ができたらしくて」

「どうすればいいのかを相談されたのですわぁ」

ジュンコとももえのその発言に千影はギョツとするが、何とか顔をふせたままでいられた。

その姿は鮎川の目には自分が色恋をしていることを先生に知られて恥ずかしがっている姿に映った。

「そうなの！あつ、恋の悩みなら先生も相談に乗るわよ！！」

その言葉を聞いた鮎川は階段を降りてこよつとするが、明日香の言葉がそれを止めた。

「いいえ、先生それには及びませんわ。私たちに相談されたことですから私たちで解決したいのです」

「そうなの、ちよつと残念。あつ、でも先生ならいつでも相談に乗るから、私に相談したくなったら遠慮せずに来なさい。それでは皆さん、もう遅いから部屋に戻ってお休みなさい」

鮎川をそう言い残して去っていった。

「ふうふうふう」

明日香、ももえ、ジュンコの3人は何とか上手くいったことに安堵の溜息をついた。

「もう、驚いたよ。いきなり私が男に懸想してるだなんて」

そんな3人を見つつ、千影は少し怒った顔をして言った。

「でも、上手くいったでしょ」

「確かにね。私が今日の鮎川先生の授業に出なかつたっていうのも大きいし、顔も見られていない。髪の毛を結っていればけっこう印象変わるから、そうそうばれる事はないけど私だってこれでも男で好きになる人は女の人なんだから。男に懸想というのはやめてほしかったなあ」

そう、いいながら肩を落とす千影を男と見るのは残念ながら不可能だった。

「じゃあ、これで一件落着かな。犯人は見つかってないし検討もつ

かないけど、狙いは私ということがわかったから私自身がこれから気をつけねばいだけだしね。と、いうことで私は自分の寮に帰るよ」

「待ちなさい千影」

そっぴいなながら女子寮の裏手に出て行こうとした千影を明日香が呼び止めてこう言った。

「もう少し私に付き合いなさい」

女子寮に隣接する湖の上にボートに乗った千影と明日香、ももえ、ジュンコがいた。

「ごめんささいね、呼び止めて。でも私は貴方と決闘してみたかったのよ」

明日香はそう言いながら決闘盤を腕に嵌める。

「私もだよ、明日香。君がどんな決闘をするのか楽しみだ」

千影も自分の決闘盤を起動させ、そこにデッキをはめ込む。ちなみにまだオベリスクブルー女子の制服を着たままだった。

「酷い目にありましたーが、なんだか、おもしろーイことになってきましたーネ」

その光景を湖に浸かりながら見ていた黒装束、千影に投げ飛ばされたクロノスは不敵に笑いながら眺めていた。

「いくわよ、千影！」

「いつでも！」

「決闘っ！！！」

明日香LP4000

千影LP4000

「先行は貰うわよ千影！私のターン、ドロー！」

明日香は引いたカードを手札に加え一瞥すると、その中から2枚の

カードを選ぶ。

「エトワール・サイバーを攻撃表示で召喚！」

エトワール・サイバー 4 ATK1200 DEF1600

「さらにリバースカードを1枚セットしてターンエンドよ」

「私のターン、ドロー！」

（前回の万丈目との決闘では相手の罠を甘く見ていて痛い目にあつた。しかし、私は同じ失敗は2度としない！）

「私はLoVサーヴァント・ケルベロス-を攻撃表示で召喚！」

LoVサーヴァント・ケルベロス- 3 ATK1400 DEF700

「ケルベロスでエトワール・サイバーを攻撃！」

エトワール・サイバーに3つ首の魔獣が放った炎が迫る。

（私のリバースカードを無視してきた！？私のリバースカードは眼中にないっていうの？ いえ、彼は昨日の万丈目君とのデ

ュエルでミスをした。同じミスを続ける人とは思えない。ということとはリバースカードの発動を誘ってる？いいわ、その手に乗ってあげる！）

「リバースカードオープン！ドゥーブルパッセ発動！！」

エトワール・サイバーに向かっていた炎は軌道を変え、明日香に襲い掛かった。

「くっ！うっっ！」

明日香LP2600

「これは！？」

そのカードの効果に千影は驚きの声を上げる。

「ドゥーブルパッセは相手の攻撃をプレイヤーへの直接攻撃に切り替える。そして攻撃対象となったモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃ができる！さらにエトワール・サイバーの特殊効果、直接攻撃の時、攻撃力が600アップ！」

エトワール・サイバー 4 ATK1800 DEF1600

エトワール・サイバーの直接攻撃が千影に決まる。  
「ぬっ！」

千影LP2200

「まさか、ドゥーブルパッセとは。自分の身を削ってまで私にダメージを与えに来る なんて攻撃的な決闘スタイルなんだ」

千影のその言葉に明日香は笑みを浮かべていた。

「どうしたの、貴方の実力はこんなものではない筈よ」

「まあね。決闘は始まったばかり、これからだよ。私はターンを終了する」

ターンエンド宣言をしながら千影は心の中で小さな握りこぶしを作っていた。

(これでいい。この手の罫は後になれば後になるほど厄介になってくる。今のうちに使わせておけば被害は少なくて済む)

「そう、じゃあ、遠慮なく行かせて貰うわ。私のターン、ドロー！」

明日香は千影のその台詞に頷きながら新たにカードをドローする。  
ドローしたカードを見た明日香は「よしっ」と頷く。

「私はブレード・スケーターを攻撃表示で召喚！」

ブレード・スケーター 4 ATK1400 DEF1500

「そして魔法カード、融合！エトワール・サイバーとブレード・ス



ケーターを融合し、サイバー・ブレイダーを召喚する!!」

サイバー・ブレイダー 6 ATK2100 DEF800

明日香が召喚したサイバー・ブレイダーは湖の上を氷のリンクのよう  
うに滑る。

「行くわよ!サイバー・ブレイダーでケルベロスを攻撃、グリツサ  
ード・スラッシュ!!」

エトワール・サイバーはその身を回転させ、ケルベロスにブレード  
のついた足蹴りを放つ。

そのギロチンのような攻撃にケルベロスはその身を真っ二つに裂か  
れて消滅した。

「うくうっ!!」

千影LP1500

しかしこのままで終わる千影ではなかった。

「LOVサーヴァント・ケルベロス-のモンスター効果発動!」

「なんですって!?!」

「このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以  
下のLOVサーヴァントと名のついたモンスター1体を攻撃表示で  
特殊召喚できる!私はLOVサーヴァント・バジリスク-を特殊召  
喚する!」

LOVサーヴァント-バジリスク- 3 ATK1500 DE

F500

「やるわね。モンスターの破壊をトリガーに新しいモンスターを呼  
ぶなんて」

千影の場のモンスターを途切れさせない戦略に明日香は満足そうに

笑った。

「まだまだ、決闘はこれからだよ」

「ならば、ここからどう逆転するか見せてみなさい！ターン終了！」

「流石、明日香さん。素晴らしいですわ」

「ええ、それに千影さんも負けてはいませんわ。それにお二人の決闘の姿、なんてお美しいのでしょうか」

別のポートに乗っているジュンコとももえはそう評しながら千影から預かった  
元はクロノスの  
カメラでそんな2  
人の決闘を撮影していたのだった。

「私のターン、ドロー！LOVサーヴァント・バジリスク-のモンスター効果！1ターンに1度、モンスター1体を選択し、選択したモンスターの攻撃力をそのターン内のみ600ポイント下げる！私はサイバー・ブレイダーを選択！！」

サイバー・ブレイダー      6    ATK1500    DEF800

「でも、あなたのバジリスクも攻撃力1500。このままでは相打ちよ」

「わかってるさ。私はさらにチューナーモンスター、LOVサーヴァント・インキュバス-を召喚！」

LOVサーヴァント・インキュバス-      3    ATK800    DEF300

チューナーモンスター。その言葉を聞いた明日香は身構える。

「いくよ！ 3、LOVサーヴァント・バジリスク-に 3、LOVサーヴァント・インキュバス-をチューニング！！」

2体のモンスター星となり湖の上を飛び交う。

「妖しき星が、集いてここに獣を誘う。魔の獣よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、暴食魔獣L o Vサーヴァント - オルトロス - ！！！」

L o Vサーヴァント - オルトロス -           6   ATK1700   DE  
F1500

光が弾け、そこから出てきたのは2本の頭を持った獵犬だった。

「流石ね。私が融合モンスターを召喚したと見るや、すかさずシンクロモンスターで迎え撃つなんて」

「言っただでしょう、決闘はこれからだって。L o Vサーヴァント - インキュバス - の効果！このモンスターがシンクロ召喚の素材にされた時、デッキからカードを1枚ドロウする！さらにL o Vサーヴァント - オルトロス - のモンスター効果！このモンスターは戦闘フェイズに2回の攻撃が行える特殊効果を持つ！！行け、オルトロス！ハンターダッシュュ！！！」

オルトロスがサイバー・ブレイダーに高速で迫る。

（甘いわ）

その光景を見た明日香は口元に笑みを浮かべた。

オルトロスがその牙を突きたてようとした瞬間、サイバー・ブレイダーの前に不可視の盾が現れ、その攻撃を無効化した。

「くっ！」

明日香LP2400

しかし、ダメージは通ったようで明日香は顔を歪めていた。

「破壊できていない           破壊耐性能力か！」

サイバー・ブレイダーの健在を確認した千影は驚きの声を上げた。

それに明日香は頷きながら答えた。

「そう、サイバー・ブレイダーの特殊効果『パ・ド・ドウ』。相手

のモンスターが1体の場合、戦闘で破壊されないの」

「しかし、ダメージ計算は適用される。オルトロス、2回目の攻撃だ！ハンターダッシュュー！！」

「ぐっ、うう！」

明日香LP2200

オルトロスがまた牙を突きたてようとするがまた無駄に終わったが、明日香のライフポイントを減らすことには成功した。

「私はカードを1枚セットしターンを終了する」

サイバー・ブレイダー 6 ATK2100 DEF800

千影がターンエンド宣言をしたことでバジリスクの効果が切れ、サイバー・ブレイダーの攻撃力が元に戻った。

「詰めが甘かったわね、千影。私のターン、ドロー！」

そのドローしたカードを見た明日香は口元に笑みを浮かべた。

「どうやら、ここまでのようね。装備魔法、フュージョン・ウエポン！発動！！」

「それは、融合モンスター専用の装備カード！」

そのカードの登場に千影は驚きの声を上げた。

「そうよ。このカードを装備したモンスターの攻撃力、守備力は1500アップする！サイバー・ブレイダーに装着！！」

サイバー・ブレイダー 6 ATK3600 DEF2300

「これが決まれば私の勝ちよ、覚悟なさい！サイバー・ブレイダーでオルトロスを攻撃！！」

サイバー・ブレイダーの腕に装着されたフュージョン・ウエポンから稲妻が走り、オルトロスに迫る。

「そうはさせない！速攻魔法発動、収縮！！このカードは対象モンスター元々の攻撃力を、このターン内のみ半分にする魔法カード。フュージョン・ウェポンで増加した1500ポイントに変動はないけど、それでもこのターンは凌ぐことができる！」

サイバー・ブレイダー 6 ATK2550 DEF2300

サイバー・ブレイダーの放った稲妻の威力が減衰するが、それでもオルトロスを破壊するには十分だった。

「あううっ！」

千影LP650

（凌がれた！？でも残りライフポイント650、それに次のターンにはサイバー・ブレイダーの攻撃力は元の3600に戻る。今までで千影が出したモンスターの最大攻撃力がバハムートの3500。私の勝ち揺らぎない！）

「私はターンを終了するわ！」

サイバー・ブレイダー 6 ATK3600 DEF2300

しかし、その明日香の思いとは裏腹に千影は眸を閉じて笑い出した。

「ふっ、フッフ」

「何が可笑しいの！？」

「ごめんね。可笑しくて明日香を笑っているんじゃない、楽しくて笑っているんだ。それに手紙の悪戯をした人にも感謝しなくちゃね。おかげでこんな楽しい血闘ができるのだから！」

そして開いたその双眸はまた、紅蓮の炎のように真紅に燃えていた。

「でも、残念。すでに舞台は調った、あとは役者を呼ぶのみ」

「???どういうことかしら？」

千影のその言葉の真意を明日香は探れない。

「こういう事だよ！私のターン、ドロー！！私は墓地にあるLOVサーヴァント・オルトロス-のモンスター効果を発動！」

「もう1つ特殊効果があったというの！？」

その千影の言葉に明日香は驚きの声を上げた。

「このカードが墓地にある時、このカードを除外し、ライフポイントの半分を支払うことで、デッキまたは手札からチューナーモンスター1体を特殊召喚する！」

千影LP325

「私はデッキからチューナーモンスターLOVサーヴァント・サキユバス-を特殊召喚！、さらに手札からLOVサーヴァント・ガール-を通常召喚する！！」

千影の狙いが、7のシンクロモンスター召喚だと見抜いた明日香は余裕の表情でいた。

「でも、このままバハムートを召喚しても、私のサイバー・ブレイダーは倒せないわよ」

「私が召喚するのはバハムートではない！」

「えっ？」

しかし、千影の否定の言葉に明日香は意表をつかれた。

「4、LOVサーヴァント・ガール-に、3、LOVサーヴァント・サキユバス-をチューニング！」

7つの星が湖の上を幻想的に踊る。

「妖しき星が、集いてここに狂気が咲く。狂気よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、魔界公妃LOVサーヴァント・ベルゼバブ-！！」

湖の水面を揺らし、蠅の女王がここに顕現した。

LOVサーヴァント・ベルゼバブ- 7 ATK1200 DE  
FO

「さらにLOVサーヴァント・サキュバス・の効果で攻撃力がこのターンのみ1000アップする！」

LOVサーヴァント・ベルゼバブ・ 7 ATK2200 DE  
FO

しかし、それを見た明日香はいぶかしんだ。

「それが何。サイバー・ブレイダーの3600には到底及ばないじゃない」

そう。千影が自身ありげに言うからには最低でも今のサイバー・ブレイダーの攻撃力より上のモンスターを出してくると思っていたのだが、どうやら思い違いだったようだ。

しかし、千影は不敵に笑っていた。

「そんなことはよくわかってるさ。LOVサーヴァント・ベルゼバブ・のモンスター効果、このモンスターがシンクロ召喚された時、相手モンスター1体の攻撃力を0にする！」

サイバー・ブレイダー 6 ATK0 DEF2300

「なんですって!?!」

攻撃力が0になったサイバー・ブレイダーを見た明日香は驚きの声をあげた。

「これなら破壊できなくても明日香、君に大ダメージが与えられる。征け、ベルゼバブ!サイバー・ブレイダーを攻撃!墮落の抱擁!」  
ベルゼバブはその身を9つに分身させるとサイバー・ブレイダーへと集っていった。

サイバー・ブレイダーは不可視の盾でその身を守るが、明日香はその余波からは逃れることは出来なかった。

「きゃあああああつ!」

明日香 L P O

「明日香様、大丈夫ですか!？」

その光景を見たジュンコが自分のボートを漕ぎ、明日香のボートの横に着けた。千影もボートを漕いで明日香の元に向かってくる。

明日香は何か立ち上がり自分が大丈夫なことをアピールしながら千影のほうを向く。

「ええ、大丈夫よ。それにしても千影、貴方思ったとおりの強さね。眸の色を元に戻した千影はその言葉に首を振りながら答えた。

「そんなことないよ明日香、君も強かったよ。またやろう、じゃあね」

そういつて微笑んだあと、千影はボートを漕ぎ自分の寮へと帰っていった。

その千影の微笑みにジュンコともえは惚けながら明日香は決闘の内容に満足しながら見送ると明日香は何かを思い出し、「あっ!」という表情になった。

「制服、そのまま帰っていったわね」

そう、千影の着ていた制服は自分の予備、すなわちオベリスクブル―女子のものだった。

(もう。すごい決闘を見せたと思ったら、こんなおつちよこちよいをするなんて。ますますおもしろい子だわ、千影)

決闘ではあんなにすごいのに日常生活ではどこか抜けている千影を思い返した明日香は笑いながら心の中でそう思っただった。

「姫宮千影、今度こそあなた―ヲ、ぎゃふん―ト　でも、今日は疲れた―ノ。早く帰る―ノ。ブクブクブク」

その決闘の一部始終を見ていた黒装束、クロノスはその顔を悔しさに歪めていたが、そそくさと帰っていったのであった。

ちなみに千影は自分が未だ制服を着替えていなかったことを気がついたのは自分の部屋に入り、その姿に驚いた十代たちに指摘されて



からである。

後日、この決闘の写真がオベリスクブルー女子の間で流され好評を博したことを追記しておく。写真のタイトルは『姫と女王の舞闘会』だそう。

この写真を契機として、『姫宮千影ファンクラブ』が立ち上がり、オベリスクブルー女子生徒を中心に大きく会員数を増やし数あるファンクラブの中で一大勢力になったのは全くの蛇足である。さらに、ファンクラブの会員から千影は『姫』、『千影姫』と呼ばれることになるが、これもまた全くの蛇足である。

### 第3話【DA学園篇】（後書き）

さて、本編では第3話のエトワール・サイバーの回ですが、私がこの回でしたかったこと、それは千影君の女装です！

千影君は天下無敵の男の娘ですので何を着ても可愛くなる仕様となっております。

他の突っ込みどころとしましてはサイバー・ブレイダーは、7だからフュージョン・ウエポン使えないだろうがあ！とか、エトワール・サイバーの攻撃力アップは500だろうがあ！とかのお叱りを受けそうですがこの作品はアニメの効果を準拠していますのでそこらへんはご容赦を。

そして今回の本編主人公の十代ですが、三沢のごとく空気で、背景にすらなっていないのですが、これはいたし方ありません。だって、本編どおり勘違いした翔を女子寮潜入させれば十代もついてきますが、その場合は千影に女装させられないし。本編主人公登場かオリ主女装かで迷いましたが、結局はオリジナリティを追求すると言っ形でこうなりました。

今回の最強カード『LOVサーヴァント-ベルゼバブ-』

7 ATK1200 DEF0 閻属性 悪魔族 シンクロ効果  
モンスター

このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体の攻撃力を0にする。

相手のモンスター1体の攻撃力を0にする効果ですが、シンクロ召喚に成功したタイミングでないと発動できないこととベルゼバブ本体の攻撃力の低さからバハムートが出てくることが多いですが、今回のようにバハムートの攻撃力を凌ぐモンスターなどが相手のとき

は重宝する効果となっております。

シンク口召喚の強みは、その場その場で要求される状況に柔軟に対応できると言うのが大きな利点ですので、それを体現したカードとなっております。

#### 第4話【DA学園篇】

太陽の日の出と共に、太平洋上を進む黒光りがあった。

「こちら護衛機、2260イーグル。あと3分でそちらに合流する」  
それは数機のヘリコプターだった。

そしてそのヘリコプターが進む先には巡洋艦数隻で作られた艦隊があった。

その艦隊の旗艦からヘリコプターに通信が入る。

『了解、イーグル。本艦はすでに目標を肉眼で捕捉、8030上陸予定』

「全艦最警戒態勢に入れ。何としても」  
通信を送った艦の艦長は自分の横に立つサングラスに黒いスーツを着た長身の男を横目に艦隊に命令を出す。

「彼とその積荷を守る！上陸に備えよ！！」

その黒服の男の手には手錠で繋がれたアタッシュケースが握られていた。

「お願いしますう」

翔は十代の軒が響く部屋の中で蠟燭を灯し、頭に鉢巻を巻いて壁に貼ったオシリスの天空竜の絵に向かって祈りを捧げていた。

「決闘の神様、今日の月1テストの成績しだいでのオシリスレッドからライイエローへ昇格することができます。これはまさに

死者蘇生っ！！」

翔の頭をよく見てみると鉢巻にも死者蘇生のカードが突き刺してあった。

「この翔をこの墓場からお救いください。お願いしまするう」

そこまで翔に言わすほどオシリスレッドの扱いは酷かった。入学してから1ヶ月というものオベリスクブルーの生徒は勿論、ライイエローの生徒からも馬鹿にされ、宛がわれた寮は木造モルタル2階

建てのボロアパート、食事も毎回毎回白米と味噌汁にめざしや納豆、エビフライが月に1回あるだけという粗食っぷり。

この扱いを地獄といわず何と言うのか。

しかし、今日のテスト次第ではそこからの脱却も在り得るのだ、普段信じていない神にだって祈ろう。

そう思い、一所懸命祈っていた翔はいきなり大きな音が鳴り出した。「うわああああっ!!」

慌てて音のした後ろを振り返ってみると、十代がセツトした目覚まし時計だった。

「なんだあ、目覚まししかあ。でも十代のアニキは余裕だなあ。試験勉強まつたくやらないで大酩かいて寝てるんだから」

翔は音の出所にホツとすると目覚し時計が鳴っていても未だ目覚めない十代を見て起こしにかかった。

「アニキ、テストに遅れちゃうよ。アニキー」

「むにや、俺のターン！ドロー！むにやむにや」

しかし、その先の言葉を翔が話すことは出来なかった。十代が寝言をいいつつ寝返りを打ち、翔を弾き飛ばしたからだ。

翔は「うわっ!？」と腰を強かに打ちつけた翔は怒った顔になって言った。

「もう、ターンエンドだよ！テストに遅れちゃうんだってば!!」

その翔の言葉に隼人がベッドの上から声をかけてきた。

「翔、お前甘いんだなあ」

その隼人の言葉に翔へ「えっ?」となつて上を向く。

「テストは実技、筆記とも各寮で競われるんだぞあ。つまり、オシリスレッドの人たちはお前にとって全て敵なんだってことなんだな」

「そんな、敵だなんて」

その言葉を聞いた翔は戸惑った。それはアニキと慕う十代や友達の手影とも闘うということなのだから。

「特にクロノス先生を破った手影と十代はオシリスレッドの中では最もライエローに近い存在なんだな。このまま起こさないでほっ

とけば俺たちが有利になるんだな」

隼人のその言葉に翔は怒りながら十代を起こしにかかる。

「弟分の僕がアニキにそんなことできる訳ないじゃないか！アニキ！起きてよアニキ、試験が始まっちゃうよアニキ！！アニキってば、アニキー！！」

しかし、アニキという言葉を連呼していた翔は何か思い至ったのか、いきなり外に向かって走り出した。その場に残されたのは未だ夢の中にいる十代と翔のその行動に汗を流す隼人だけだった。

（そうだ、ここは決闘者たちの戦場。やらなければ僕がやられる。僕はハードボイルド決闘者を目指すぞ！）

外に飛び出した翔はそう思い新たに決意を固めるが、しかし一貫性のない奴である。

あっ、こけた。どうやらハードボイルドには遠そうである。

「ただいまー」

日課である朝のジョギングを終えた千影が部屋に帰ってきた。

「おお、千影お帰りなんだな」

「うん、ただいま。十代はまだ寝てるのかあ。あれ、翔は？」

未だに軒をかいている十代を苦笑しつつ眺めると、部屋の中に翔がいないことに疑問に思った。

「もう、学園にいったんだな。千影はこのあとシャワー浴びてから出るんだろ？俺はこれから出るから、十代のことよろしく頼むんだな」

先ほどは翔にいったことはほとんどが冗談だったようで、隼人は寝ている十代のことを千影に任せた。

「うん、任せといて」

その言葉に千影は頷きながら答えると、隼人は部屋から出ていったのだった。

「ふう、気持ちよかった。さて、十代を起こして学園に行かない

と んっ?」

シャワーを浴びてきた千影は自分の私物である携帯型端末に1通のメールが来ていることに気がついた。それも差出人は

「お爺様からだ。何々、すぐに電話で連絡されたしか。お爺様もメールの方に要件を書けばいいのになあ」

そう言いながら千影は端末を手にしつつ部屋を出るのだった。十代を起こすことをスッパリと忘れて。

「うおおおおおっ！遅刻だ、遅刻だ、遅刻だあああっ！！」

オシリスレッドの寮から十代が砂煙を上げて走ってくる。どうやら、ついさつき目覚めたようだ。ちなみに現在時刻は試験の始まる5分前である。

「遅刻だ、遅刻だあああああ！！んっ!?!」

走っている途中でエンストした車を押している中年の女性を追い抜いた十代は、それに気がつくと急ブレーキをかけて止まった。

「うあああ、弱いんだなあ。俺、こういうの」

頭を抱えて天を仰ぐと、十代は来た道を戻り、中年の女性と一緒に車を押し始めた。

「手伝うぜ、おばさん」

その十代を見た中年の女性は息も絶え絶えになりながら十代に言った。

「遅刻しちゃうよ、今日はテストなんだろう!?!」

「遅刻が何だよ、困ってるおばさんを見過ごせないぜ!」

その言葉に十代は握りこぶしを作りながら言うが、坂道でいきなり手を離したら車は滑っていくわけで

「わわわわわっ!?!」

案の定、車は坂道を滑っていったが、それを止めた者がいた。

「十代、手伝うのはいいけど、ちゃんとしなきゃだめじゃないか。

うんしょっつ」

千影はそういいつつ、車を押していく。

「助かったぜ千影、よいしょっと！」

千影のその姿を見た十代もまた車を押し始める。

「坊やたち」

「先のことなら何とかなるぜ」

「私たちにまかせて」

「すまないねえ」

そんな二人の行動に中年の女性は感謝したのだった。

「苦しいときはお互い様です」

「そういうことさ」

千影と十代は笑顔でそっぴい、車を押し上げていくのであった。

所変わって試験会場。

朝早く寮を出た翔は答案用紙を白紙のままにして眠りこけていた。しかも何やら悪夢に魘されているらしく、

「アニキ・・・アニキ・・・ごめんよ・・・アニキ・・・」

どうやら十代を起こさなかったことを悔いているようだ。

そんな翔の寝言に答える声があった。

「許さあん、絶対に許さんぞ！」

「うわっ!?!」

その言葉に翔は驚き眠りから覚めると、声のしたほうを向いた。

「勉強のしすぎで居眠りなんかしてちゃ意味ねえぞ、こら」

そこには遅れてやってきた十代が笑いながら立っていた。

「十代、試験中なんだから静かにしないと。ほら早く問題用紙を取りにいくよ」

一緒に遅れて教室に入ってきた千影は十代を咎めつつ、教壇にて試験監督を務める大徳寺の方に向かっていく。

「待ってくれよ！」

十代も千影を追いかけ、大徳寺から問題用紙を貰うと席に着いた。

(あ、あいつら、舐めやがって・・・!!)

(30分も遅刻とは、筆記試験など眼中にないということ? 千影を



そうとは思いたくないけど )

(あれほどの実力があいながら、どうしてそう不真面目なんだ。それに今日は真面目な千影まで遅刻とは いや、千影もよく

ドジを踏んで遅れてきていたか)

万丈目、明日香、三沢はそれぞれ心でそう思ったのだった。

(( )) (どうして、あんな奴らがクロノス教諭に勝ったんだ！？ どうして！？) (( ))

そしてこれが、この教室にいる生徒全員の共通の心の叫びだった。席に着いた千影はスラスラと滞りなく問題を解き始め、十代は翔と共に答案用紙を白紙のまま寝息を立て始めたのだった。

その光景を外からこっそりと見ていたクロノスは予想通りの展開に顔を緩めていた。

「クフフフフフツ、ムーツフフフフ。予想通り遊城十代は筆記テストは自滅なのーネ。問題は姫宮千影ですが、それは実技テストで クフフフツ、楽しみーノヨ。ムッフフフフフ！」  
そしてこれからの展開に大笑いを上げるのであった。

筆記試験終了間際、デュエルアカデミアに向かって来ていた艦隊は旗艦を除いて沖合いにて停止。旗艦は港に接舷し、そこからデュエルアカデミアの紋章が入ったアタッシュケースを持った艦長と、自分の手と手錠で繋がれたアタッシュケースを持った黒服の男が降りてきた。

それと同時に校内に試験終了のアナウンスが響いた。

『これで、筆記テストは終了、なおお実技テストは午後2時から体育館で行いまあす』

アナウンスを聞いた生徒たちがいきなり教室から出て行き、走り出していった。

その生徒たちを見た万丈目の取り巻き2人が万丈目を急かした。

「急ぎましようー！」

「早く行かないとー！」

その2人の言葉に、答案の自主採点をしていた万丈目は「わかっている」と答えると立ち上がり、2人を連れて急いで教室を出て行くのだった。

「起きてよ十代、翔」

「試験はとつくに終わったぞ！」

未だ眠りこける十代と翔に千影と三沢は2人を起こしにかかる、翔が驚きの声を上げながら起きる。

「やっちまった。何のために勉強したんだか……」

試験が終わったという言葉に涙を流す翔の姿に三沢は溜息をつく、むくりと起き上がった十代がフェローを入れた。

「気にすんな、午後の実技テストが本番よ」

そして再び眠りにつこうとする十代だったが、

「あれっ、皆は？」

すでに教室が自分たちを残して誰もいない教室を見て驚いた翔の言葉によって立ち上がった。

「もう昼飯か？」

十代の言葉に三沢が首を振りながら言った。

「購買部さ。なんせ、昼休みに新しいカードが大量入荷することになってるからな」

「えっ、ええええええっ！カードの大量入荷っ！？」

その三沢のその情報を翔は知らなかったらしく驚きの声を上げた。

「皆、午後の実技テストに向けて、デッキを補強しようと思っただよ」

カードの大量入荷を知っていて、買いに行こうとしない三沢を不思議そうに見ながら千影は聞いた。

「三沢は行かないの？」

「僕は今のデッキを信頼している。新しいカードなんか必要ない」

千影の言葉に三沢は自信満々に言い切ったのだった。

それを聞いた翔は十代に話を振る。

「ア、アニキは？」

「俺は」

その翔の言葉に十代は考えるそぶりを少し見せると、その顔を輝かせて言った。

「興味ある！どんなカードがあるのか見たくっしょうがねえ！！  
行こうぜ！翔、千影！！」

十代はすぐさま千影と翔を連れて購買部へと走っていきこうとするが、それを千影の言葉が止めた。

「ごめん、十代。実はちよつと先約があるから付き合えないんだ」  
手を合わせてゴメンのポーズをしながら言った千影に十代は、

「えっ、そうなのか？じゃあお前の分も買ってきてやるよ！楽しみにしてるよ！！」

と言って翔を連れて教室から走って出て行くのだった。

所変わって、件の購買部。シャッターの降りた準備中の購買部に生徒たちが群がりシャッターを拳で叩いていた。

「開ける！開ける！！」

「早くレアカード見せろ！」

そんな彼らの元に、防弾・防刃ベスト、警防で武装した警備員が走って来た。

そのものものしい警備員たちを見た生徒たちは驚き声を上げた。

『なんだあぁっ！こいつらあぁあ！？』

「下がれ！下がれえ！！」

いきなり聞こえた言葉と共に警備員たちは2列に並び道を作る。

「お前たちの欲しい物はここに！！」

その道を艦長が歩き、手に持つアタッシュケースを掲げると生徒たちから歓声が沸きあがった。

艦長は購買部のシャッターを持ち上げ、中に入りながら笑みを浮かべて待つ生徒立ちを見て言った。

「今、売ってやるからな」

そして開店のシャッターが開くとそこには先ほど艦長が手に持って

いたアタツシユケースが開けられていた。その中にはレアカードが封入された大量のパックが

「ないいいいいいいいっ!!!」

なく、あつたのは売約済みの紙切れ1枚だけだった。

「どういうことなんだよ!？」

それを見た生徒の1人は納得行かないといった口調で購買部店員のセイコに聞いた。

「こちらの方がお買占めでーす」

セイコがそう示した先には、学ランにボロボロの学生帽、マントといったバンカラな風貌の学生がいた。

「代金既にお支払い済みなーノ」

その人物が人差し指を天に向けながらいった言葉に周りの生徒たちからブーイングが巻き起こったのだった。

「早く、早く!」

「待ってよ!」

そんなことは露知らず十代と翔は購買部へと滑り込むが、そこには当然人っ子1人いなかった。

「どうなつてんだ?」

その光景を見た十代は不思議そうに首を捻る。

「誰もいないってことは」

そこで2人はとある結論に達して顔を見合わせた。

「もう全部売り切れちゃつたつてことおおっ!?!」

そのことを確かめるべく十代と翔はレジにいる人物の所に詰め寄る。

「おあばちゃん、おばちゃん! お姉さん、新しいカードは?」

十代のおばちゃん発言にセイコはムツとするが十代が言い直したことに強張らせた顔を緩める。

「それが沢山買っていった生徒さんがいて」

セイコはカードの入ったパックを1つ机の上に出して言った。

「もうこれだけなのよ」

「えっ、えええええ！ひ、1つかあ」

それを見た十代と翔は驚いた顔になりながら、この最後の1パツクをどうするか翔は十代に聞いた。

「どうしようアニキ、筆記テストもだめだったし、実技でせめてデツキが補強できればって」

「いいよ、翔が買えよ」

十代のその言葉に翔は驚きを隠せなかった。

「譲ってくれるの！？最後の1パツクだよ！？」

「いいさ！千影に買って行ってやれないのはちよつと残念だけど」

「でもアニキ、今日は大事なテスト。僕らだって敵同士なのに」

「

その翔の言葉に十代は表情が曇った。

「敵？何で??」

「いや、そのお・・・」

しかし、すぐに十代は顔を明るくさせると翔に言った。

「それに実技までまだ時間がある。早くデツキを組み立てに行こうぜ！」

「アニキ」

十代のその言葉に翔は涙ぐむが、そこにある人物の声が響き渡った。

「お待ちよ!!」

その声に十代、翔、セイコは振り返るとそこには朝、千影と十代が助けた中年の女性が立っていた。

「あつ、今朝のおばちゃん」

「おばちゃんじゃないわよお。トメって呼んで、ト・メ！」

パチリという音よりもバチリという音が聞こえてきそうなウインクつきの自己紹介だった。

「トメさんって購買部のおばちゃんだったのか」

顔見知りな十代とトメさんの言葉に翔は驚きつつ十代に聞いた。

「知り合いかい、アニキ？」

「ああ、ちよつと訳ありでな」

朝の光景を思い出し頬をかきつつ十代は答えた。

「それより、こっちにいらっしやいよ」

トメさんのその言葉に十代と翔は「「えっ?」「」と声を上げた。

「ムフフフフフツ、いいのがあるのよ客さん!」

十代と分かれた千影は校長室の前に来ていた。

千影は校長室の扉を2回ノックすると、中から鮫島校長の声が聞こえてきた。

「開いていますよ」

「失礼します」

千影はそういいながら扉を開けると中にいる人物を見ると、そこには鮫島校長ともう1人、懐かしい顔があった。

「ドウクス、久しぶりだね!」

千影はサングラスをかけた長身の黒服の人物  
ドウクスを  
見ると顔をほころばせた。

「ああ、千影もこの1ヶ月はどうだった?」

「もちろん、勉強にも武道にも励んだよ、師匠」

千影はドウクスのその言葉を茶化しながら答えた。

「そうか、それはよかった。それはそうと翁からの連絡は届いたか?」

「うん、今朝にね。ドウクスが来るって聞いて驚いちゃったよ」

「うおっほん!」

その自分を蚊帳の外に置かれた会話を聞いた鮫島はこれ見よがしに咳払いをした。

「あつ、すみません校長先生。ドウクスと久しぶりに会ったのでちよつとはしゃいでしまいました」

「では、早速仕事に入ろうか」

ドウクスがそう言うと言った自分の手にかかった手錠を外し、アタツシユケースを机の上に下ろすと、鍵を挿し込みダイヤル式のパスワード

を回すとアタツシユケースが音を立てて開いた。

そこには

「おお！これが！！」

それを見た鮫島校長が顔を子供のように輝かせていた。

「ペガサス会長から預かったL・O・Vサーヴァントシリーズの第2陣だ、千影」

「これが、私の新しい使い魔たち

千影はその新しいカードたちを手に取りながらそう呟いた。

「それと決闘盤をだしてくれ。デュエルリンクサーバーでデータは逐次送られて来ているが念のため、今までの決闘データを吸い出す」ドウクスの言葉に頷いて千影は自分の決闘盤を渡しながらドウクスに聞いた。

「ねえドウクス、今日はいつまでここにいれるの？もしよければ一緒に食事とか、また稽古とかつけてくれない？」

その千影の言葉にドウクスは千影の決闘盤を自分のノートPCに繋ぎながら首を振る。

「千影、私は確かに君の師だが、従者でもあるのだ。稽古は兎も角として、同じ食卓につくなどそんな恐れ多いことは出来んよ。それに翁から申し付けられた仕事他にもあるし、これが終わったらこのデータをペガサス会長の下まで届けるために直ぐに発たねばならん」

ドウクスの言葉を聞いた千影は肩を落とす。

「はあ、そうか。残念だなあ」

そう話しているうちにデータの吸出しが終わったようだ。

「そう気を落とすな。暇か仕事でまた来た時、時間があれば稽古の1つでもつけてやる」

ドウクスは膝を突き千影の背丈に合わすと、千影の頭の上に手を乗せながら千影の手に決闘盤を握らせる。それは端から見ればまるで親娘のように見えた。

「うん、その時はお願いね。じゃあ、ペガサス小父様にありがとう

って伝えといて」

千影のその言葉にドウクスは微笑みながらこう応えたのだった。

「心得た、我が主よ」

校舎内を歩く人影が3つ、万丈目以下取り巻き2人だった。

「誰だ、あいつ！カードを買い占めやがって！！」

「どうすんだよ、午後の試験！」

その取り巻きの2人の発言に万丈目は落ち着きながら答えた。

「慌てるな。たかが月テストで新たなカードを仕込むこともない。

どうせ、オベリスクブルーの新生入生に俺を倒せるものはいないからな」

だが、その万丈目の言葉に語りかける声があった。

「しかしその相手が姫宮千影、もしくは遊城十代だったらどうなの

！カナ？」

「何！？」

万丈目は姫宮千影の名前に顔を歪めながら言葉のしたほうを振り向くとそこにはカードを買い占めたバンカラ学生がいた。

「今のデッキで千影、十代に勝てるーノですかー」

「お、お前は！カードを買い占めた！！」

取り巻きの1人のその発言にバンカラ学生はマントを開いて見せた。

「そのカードなら今ここーニ、ありますーノ！」

マントには買い占められたカードがずらりと並んでいた。

「お前は誰だ！？」

「カードなど買占めどうするつもりだ！」

その光景を見た取り巻きの2人はバンカラ学生に向かって叫んだ。

「ニイツヒヒヒイツ！まーダわからないーノですかー、シニユー

ル万丈目。ワタクシーノ、正体ーヲ！！」

マントと学生帽を取り払ってでてきたのは

「遊城十代と姫宮千影に負けたクロノス教諭！」

その万丈目の言葉にクロノスは豪快にこけたが、何とか体勢を立て



直し、話の続きに入る。

「遊城十代や姫宮千影のようなドロップアウトボーイたちは早いうちエリートである貴方が叩き潰さなければいけませんーノ。だからワタクシは貴方に申し付けますーノ！十代そして千影と闘いなさいー！」

「でも、実技テストは同じ寮の者同士で行われるんじゃない？」

万丈目のそのもつともな疑問にクロノスは自身ありげな顔で答えた。「まっかせつなさい、ですーノ！そしてワタクシたちエリートこそレアな存在だということをあのドロップアウトボーイたちに思い知らしてややるーノデスー！！ウフフツ、ムハハハハハハッ！！」

クロノスは笑い声を上げながら心の中でこう思っていた。

（それに仮にシニョール万丈目が負けたとしてもーモ、その時はプランBに移行すれば問題ありません。その場合は我々エリートの存在を知らしめられませんが、今回はどっちに転がってもいいのデース。ムツヒヨヒヨヒヨヒヨ）

そして午後の実技試験、十代は自分の前に立つ万丈目に驚きの声を上げた。

「ええええええっ！なんで万丈目が俺と決闘を！？」

十代の驚きの言葉にクロノスは歩み寄りながら答えた。

「入学試験であれほどの成績を収めた君や姫宮千影とオシリスレックスの生徒では釣り合いがとれないーノデス。そこで」

クロノスは万丈目を指差しながら言葉の続ける。

「シニョール万丈目こそが君たちの相手に相応しいと判断いたしましたーノデス。勿論、勝てばライエローに昇格することになりまーッスノ。ですが、いかがですーノ？遊城十代君に姫宮千影君、この申し出受ける気になりますですかーノ？」

クロノスのその言葉に試験会場は騒然となった。

（やっぱりアニキと千影君はスゴイんだ）

(十代と千影が勝てば、僕と同じ寮になる。入学したてにしてもう  
) そんな中翔と三沢はそれぞれそう心の中で思った。

そしてクロノスの言葉を観客席で聞いていた千影は席を立ってクロ  
ノスの言葉に応えた。

「クロノス先生、その申し出受けましょう。彼には前回の決闘を預  
けてありますし」

その千影の言葉に万丈目は1月前のことを思い出したのか、苦虫を  
噛み潰した顔になった。

さらに十代から声上がる。

「俺もいいぜ！俺、いろんな奴と決闘をしてみたい。どんな奴から  
の挑戦でも受けたいんだ！！」

千影と十代のその言葉を聞いたクロノスは2人に最終確認を取る。

「ならば、シニョール万丈目との決闘を受けるーノですネ？」

2人はそれに頷くと、決闘場に立つ万丈目は観客席に立つ千影を指  
差し叫んだ。

「姫宮千影、待っている！すぐにこいつを料理して、ここに引きず  
り出し、入学式の日の借りを返してやる！！」

そして決闘盤を起動させると十代の方を向く。

十代も自分のデッキを決闘盤にはめ込む。

「決闘っ！！！！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「行くぞ、万丈目！！」

「万丈目さん、だ！！」

そして互いにカードを5枚ドローして決闘が始まった。

「俺の先行、ドロー！！」

《クリクリ》

十代がデッキからドロートしたカードからの声に十代はそのカードが自分の相棒であるハネクリボーだということに笑みを浮かべた。

(相棒、最初から来てくれるとはありがたいぜ！ならば俺は

)

「E・HEROクレイマンを守備表示で召喚！」

E・HEROクレイマン      4    ATK800    DEF2000

「ターンエンドだぜ」

そのモンスターを見た万丈目は鼻で笑った。

「雑魚ぞろいのためヒーローデッキめ、お前の脆さを見せてやる。俺のターン、ドロート！」

ドロートしたカードを確認した万丈目は口元に笑みを浮かべる。

(いきなりクロノス教諭から貰ったレアカード！)

「俺は魔法カード、打ち出の小槌を発動！」

「なにっ!？」

「このカードと手札の中のいらぬカードをデッキに戻してシャッフルし、新たにその枚数分ドロートする！そして俺は  
「  
万丈目は4枚のカードを掲げて見せた。」

「ええっ!?!? 4枚もカードを取り替えるの!!！」

「自分の手札からいらぬカードを戻して新たにカードを入れ替えることが出来れば、手札に好カードが来る確率は高くなる」

「何かしらのコンボを狙っているね、万丈目は」

その万丈目の行動に翔、三沢、千影はそう言葉を漏らしたのだった。

「しかも打ち出の小槌は使い捨てのカードではない。何度もデッキに戻ることにより何度も俺の手中に入る！」

そして入れ替えた手札の1枚を十代に見せる。それは魔法カード、打ち出の小槌だった。

それを見た十代は驚きの表情になる。

「再び、打ち出の小槌を発動！打ち出の小槌ともう1枚のカードをデッキに戻し、再び2枚をドロウする！」

そして、手札の準備が整ったのか万丈目は攻勢に移った。

「いでよ、V・タイガー・ジェット！攻撃表示で召喚！」

V・タイガー・ジェット      4    ATK1600    DEF1800

「さらに手札から永続魔法、前線基地を発動！ターンごとに1度、手札から4以下のユニオンモンスターを1体、特殊召喚できる。このターン、W・ウイング・カタパルトを攻撃表示で特殊召喚！いでよW・ウイング・カタパルト！」

W・ウイング・カタパルト      4    ATK1300    DEF1500

「そして！V・タイガー・ジェットと融合！」

2体のモンスターは連結合体し、新たな姿を現した。

「VW・タイガー・カタパルト！」

VW・タイガー・カタパルト      6    ATK2000    DEF2100

その立て続けの連続召喚を見た十代は驚きを隠せなかった。

「驚いたか十代、しかしまだ俺のターンは終わっちゃいない。さらに俺はVW・タイガー・カタパルトの特殊効果を発動！手札を1枚捨て、相手モンスターを攻撃表示に変える！」

「なにっ!？」

その効果におどろいたのは十代だけではなかった。

「ずるいぞ！攻撃力800のクレイマンが攻撃に回ったら！」

観客席に座る翔は万丈目に批難の視線を向けたのだった。

「クツフフフフ！フツハハハハハハハハハ！！」

その万丈目の笑い声と共にクレイマンは守備表示を解き、攻撃表示になった。

「いくぞ、十代！VW・タイガーミサイル発射！！クレイマンを粉砕せよ！！」

万丈目のその号令の元VW・タイガー・カタパルトからミサイルが発射されクレイマンに降り注ぐ。

「ぬっぐううう！！」

十代LP2800

その光景を見ていた、クロノスは喜びの声を上げていた。

「ブラーボー！シニョール万丈目は投入した戦力を確実ー二、存分ー二使いこなすーノ！！」

（この分ならプランBは必要ないかもしれませぬーノ！）

クロノスが心の中でそう思う中、鮫島はじつと2人の決闘を見ていたのだった。

「カードを1枚伏せて、ターン終了！」

万丈目のターンエンド宣言に十代は自分を鼓舞するように言葉を放つ。

「なんの、決闘はまだ始まったばかりだぜ！いくぞ、俺のターン！

ドロー！！E・HEROスパークマンを守備表示で召喚！！」

E・HEROスパークマン      4      ATK1600      DEF1400

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

その光景を見た翔はいぶかしみながら言った。

「あれっ？守備表示なんてアニキらしくない」

翔のその言葉に三沢は答える。

「相手が攻撃力2000じゃ、そうするしかないということだろう」

「で、でも・・・」

翔がそう言いよんでいる間、別の席に座った明日香も気が気ではなかった。

（十代、入試決闘で見たあなたの力はこんなものではないはずよね？）

そんな他者の思いが飛び交う中、万丈目のターンになった。

「俺のターン、ドロー！X・ヘッド・キャノンを攻撃表示で召喚。

さらに永続魔法、前線基地の効果によりZ・メタル・キャタピラーを特殊召喚！」

X・ヘッド・キャノン 4 ATK1800 DEF1500

Z・メタル・キャタピラー 4 ATK1500 DEF1300

その光景を見た十代の顔は驚愕に染まる。

「ま、まさか！？」

「そのままかさ！リバーズカード、オープン！」

そして万丈目が発動したりリバーズカードはリビングゲットの呼び声だった。

「俺はこのリビングゲットの呼び声の効果により、自分の墓地からモンスター1体を復活させることができる！そのモンスターは、Y・ドラゴン・ヘッド！」

Y・ドラゴン・ヘッド 4 ATK1500 DEF1600

万丈目の場にX、Y、Zの3体のモンスターが揃った。

「いくぞ、十代！X、Y、Zを合体させ」

万丈目のその言葉に3体のモンスターがパーツを分離、収納して次々と合体していき、大型のモンスターとなって地面に降り立った。

「XYZ・ドラゴン・キャノン！！」

XYZ・ドラゴン・キャノン	8	ATK2800	DEF2600
---------------	---	---------	---------

その威容を見た翔と三沢は驚きの声を上げた。

「あああああっ！」

「攻撃力2000以上のモンスターがフィールド上に2体」

「違う」

千影のその呟きに翔と三沢は「えっ！？」となって千影を見た。  
「それだけじゃないよ。VからZ、全てが揃ったということはアレが来る」

その千影の言葉通り、万丈目は言葉を発した。

「まだだ、まだ終わっちゃいない！俺はこのVW・タイガー・カタパルトとXYZ・ドラゴン・キャノンをさらに合体召喚する！！」  
万丈目のその台詞に十代は絶句する。

「またっ！？」

そして2体のモンスターがさらに分離、合体して1体の巨大ロボットになった。

「これが、VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンだ！！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン 8 ATK300  
0 DEF2800

その威容を見た全ての人間が感嘆の声を漏らした。

「そして、VWXYZの特殊効果発動！」

万丈目の言葉と共に十代の場にいたスパークマンが忽然と消え去った。

「なっ!?!スパークマンが!?!」

「残念だったな、十代。VWXYZは1ターンに一度だけ相手の場のカードを除外することができるのさ。フッフフ、たつぷりと味わうんだな持たざる者の悲しさを」

万丈目はそう言い、愉悦にひたりながら心の中で思った。

(すばらしいじゃないか。これなら姫宮千影のL0Vサーヴァントデッキにも勝てる!まあ、その前に目の前のドロップアウトを始末するか)

その光景を見ていたクロノスは狂喜乱舞していた。

「ちょー気持ちいいいいいい!!!いよいよドロップアウトボイのドロップアウトする瞬間が見れますーノ!このまま姫宮千影も倒してくれると万々歳ですーノ!!!」

「いけええっ!VWXYZ、プレイヤーへ直接攻撃!!!」

「待った!!!」

万丈目は止めを刺そうと攻撃宣言をするが、それを十代が止めた。

「リバース罠オープン!ヒーロー見参!!!」

「ヒーロー見参!?!」

そのカードの登場に万丈目は驚いた。

「このカードにより、相手に選ばせた1枚の手札がモンスターカードだったら、それをこの場に召喚することができる!さあ、選べ万丈目!!!」



「万丈目さん、だ！一番右だ！！」

万丈目が示したカードをみた十代は1つ頷く。

「ラッキー。俺はこのカード、E・HEROバーストレディを守備表示で召喚！」

E・HEROバーストレディ      3      ATK1200      DEF800

それを見た万丈目は大声で叫んだ。

「守備表示にはさせん！VWXYZが攻撃する時、モンスターの表示形式は俺の自由だ！！VWXYZ・アルティメット・ディストラクション！バーストレディを攻撃！！」

VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンから放たれた砲撃は攻撃表示に強制変更されたバーストレディを呑み込み、爆散させた。

「ぐっ、うつうつうつ！！」

十代LP1000

「ターンエンドだ。これでまた丸裸、1体のモンスターもお前の場にはいやしないぜ」

その万丈目の言葉に十代はその眸に闘志を燃やして言った。

「俺は俺のデッキを信じる！俺と共に最後まで戦ってくれるモンスターがこのデッキにいる限り、俺は戦い続けるぜ！ドロー！！」

（こっ、これは！？）

十代はその引いたカード見て驚いた。

なぜならそれは今朝手伝ってくれた十代と千影のためにトメさんが取り置きしてくれたレアカードパックに入っていたカードだったからだ。

そして、そのカードに手札のハネクリボーも反応する。

《クリクリ》

（ハネクリボー、何か感じるのか？）

《クリクリ》

(お前がそこまで言うなら、俺はこのカードに賭ける!!)

相棒のその言葉に十代は頷くと手札のハネクリボーを取り出す。

「俺はハネクリボーを守備表示で召喚！」

ハネクリボー 1 ATK300 DEF200

《クリクリ》

登場したハネクリボーの可愛らしさに観客の女子一同から『かわいいい〜!』と歓声が上がった。

「そして、カードを1枚伏せてターンを終了する！」

その十代の行動を見た翔はとうとう頭を抱えた。

「また守備表示だ・・・アニキ、もう打つ手なしなのかよお」

しかし、隣に座っていた千影はその翔の言葉に首を振る。

「いや、違う。この布陣は

」

しかし、万丈目はハネクリボーを見ると、一笑に付した。

「俺のターン、ドロー。無駄だぜ。戦闘ダメージを0にするその毛

玉野郎がいたところで、VWXYZの特殊効果が除外する」

「だったらやってみな！」

しかし、十代は余程の自信があるのか万丈目を挑発する。

「ハネクリボーを蹴散らして、十代に直接攻撃だ！アルティメット・

デイストラクション!!!」

十代のその挑発に乗った万丈目はハネクリボーにVWXYZ-ドラ

ゴン・カタパルトキャノンの除外効果を使用。砲撃がハネクリボー

に迫る。

「来たぜ、相棒！俺は手札2枚をコストに、進化する翼を始動!!」

それを見た十代は残りの手札2枚を墓地に捨て、トメさんから貰ったカードを発動した。

「なにつ!？」

光はハネクリボーを包み込むと、ハネクリボーはその翼を大天使のごとく巨大にさせ、龍を模した甲冑を身につけた姿に変わった。そして、迫り来るVWXYZ-ドラゴン・カタパルトキャノンの攻撃を、その小さな体で受け止めた。

「どっ、どうということだ!？」

その光景を見た万丈目は信じられないといった顔になった。

「進化する翼により、ハネクリボーは進化!ハネクリボーは今、  
10!!」

ハネクリボーLV10      10      ATK300      DEF200

その光景に万丈目だけでなく開場の人間全員が驚きの声を上げている中、千影はその双眸を鮮やかな紅蓮の如き真紅に染めて十代と、ハネクリボーを見ていた。

「こいつの効果は、その身を犠牲に相手の攻撃表示モンスターを全て破壊し、その攻撃力と同じダメージを相手プレイヤーへ与える!ハネクリボー、全エネルギーをあいつに返してやれ!!」

ハネクリボーは十代の号令の元、自分に降り注いでいた攻撃をVWXYZ-ドラゴン・カタパルトキャノンに反射。VWXYZ-ドラゴン・カタパルトキャノンは断末魔の悲鳴を上げて爆散し、万丈目に攻撃力分のダメージ3000を与える。

「ぬっ、くっ!」

万丈目LP1000

「ターンエンドォ!」

エースモンスターを雑魚モンスターに破壊されたことに、顔を歪めながら万丈目はターンエンド宣言をした。

「万丈目！」

そこに十代の声が響き渡る。

「これでお互いライフは1000ポイントずつ。でもここで俺が攻撃力1000以上のモンスターを引いたらおもしろいよなあ！」

「なあにを戯言をおおお！そお簡単にいいっ！！」

十代の手札は0枚、十代のその台詞をそんな都合のいいことがあるものかと万丈目は否定する。

「でも引いたらおもしろいよなあ！！俺のターン、ドロー！！！」

しかし、十代はその顔に笑みを浮かべたままカードを引く。

そして、その決闘を楽しむ笑みは勝利の笑みへと変わる。

「俺はこのカード、E・HEROフェザーマンを召喚し」

E・HEROフェザーマン      3      ATK1000      DEF1000

攻撃力1000のモンスターの登場に開場全体はまたざわめいた。

「プレイヤーへ直接攻撃！！」

フェザーマンはその腕を振りかぶり万丈目に迫り、爪を振り下ろした。

「うああああああっ！！！！」

万丈目LPO

万丈目は膝を突き、信じられないといった表情で愕然としていた。

その十代の大金星に開場全体はドツと沸いた。

十代はその開場の歓声に手を上げて応えながら、未だ膝を折っている万丈目に対してウインクしつつ、人差し指と中指を差し出すポーズを取った。

「ガッチャー！楽しいデュエルだったぜ」

その十代を恨めしそうな顔で見ていた万丈目は決闘場に降りてくる千影を見て、さらに顔を歪めた。

「やったな、十代」

そう十代に言った千影の双眸はいつの間にかまた元の紅に戻っていた。

「おう、次は千影の番だな。がんばれ」

しかし、その十代の言葉をクロノスのアナウンスが遮った。

『お見事ですーノ、遊城十代！残念ながら貴方の実力を認めるしかありませんノ。そしてオベリスクブルーのシニョール万丈目を破った貴方こそーガ、そこにいるもう1人のオシリスレッドでの実力者、姫宮千影の相手に相応しいのでース!!!』

そのクロノスの言葉に万丈目は驚きの声を上げた。

「クロノス教諭、それでは話が違う！俺は何としてでも奴と、姫宮千影に雪辱を」

『おだまりなさーイ！遊城十代に負けたあなたでーハ、姫宮千影に勝つことなんてできません、敗者は大人しく引き下がらなさいーノネ!!!』

「くっ！ふんっ!!!」

その言葉に万丈目は顔を怒りに震わせながら決闘場から出て行くのだった。

そして2人以外誰もいなくなった

千影の試験を残して全

ての実技試験は終了したため 決闘場で十代と千影が驚いた顔になりながら、隣に立つ互いを見た。

「千影が俺の」

「十代が私の」

そして奇しくも同じ言葉を放ったのだった。

「対戦相手っ!!!」

#### 第4話【DA学園篇】（後書き）

さて、第4話は本編でも同様の月1試験の回でした。最初は万丈目vs千影の再戦を予定していたのですが、本編主人公、十代の存在があまりにも空気になりつつあるので、ここいらでテコ入れさせていただきました。本当はもっと後になるつもりだったのですが、前回の第3話が背景にもなっていなかったため、これはやヴぁいと思いきうになりました。

今回はほとんどが本編のままで、オリジナルは新キャラのドウクス  
の場面とクロノスが腹に一物抱えてる場面くらいかな？

次回は千影vs十代です。2人がどのような決闘を見せるのかを楽しみにしててください。

今回の最強カード『E・HEROフェザーマン』

3 ATK1000 DEF1000 風属性 戦士族

言わずとも知れた十代の使うE・HEROの1体。相手の場にカードがなく、相手の残りLPが1000以下の時は、その一撃で勝負が決まってしまう恐ろしいカード。

すごいよフェザーマン！禁止カード入りだよフェザーマン！！（蝶大嘘）

## 第5話【DA学園篇】

十代の大金星に未だ興奮冷めやらぬ体育館にクロノスのアナウンスが響き渡った。

「お見事ですーノ、遊城十代！残念ながら貴方の実力を認めるしかありません。そしてオベリスクブルーのシニョール万丈目を破った貴方こそーガ、そこにいるもう1人のオシリスレッドでの実力者、姫宮千影の相手に相応しいのでース！！」

そのアナウンスを聞いた千影と十代は、2人以外誰もいなくなった

千影の試験を残して全ての実技試験は終了したため

決闘場で隣に立つ互いを見た。

「千影が俺の」

「十代が私の」

そして奇しくも同じ言葉を放ったのだった。

「対戦相手っ！！」

クロノスはそのアナウンスを発した後、心の中でこう思っていた。

（ムッフフフー！シニョール万丈目はだめでしたーガ、この潰しあいーデ、ドロップアウトボーイのどちらかを確実に落とせるのーネ。二兎を追うものは虻蜂とらーズ、片方から確実に料理していくのーネエ！）

そんなことをクロノスが思っているとは露知らず校長の鮫島はクロノスのこの采配にかなり満足しているようだ。

「ほう。共にクロノス教頭、貴方を破った生徒同士での決闘ですか。これは楽しみですね」

その言葉に自分の計画が上手く進んで上機嫌なクロノスは顔を引きつらせた。

（くうううっ！チヨウ失礼する親父なーノ！！しかし、ここはこの計画のために我慢するのーネ）

クロノスのアナウンスに未だ決闘場の上で呆けていた千影と十代の2人は共に前触れもなく、くすりと笑った。

「そういや、お前とはまだ決闘してなかったな」

「うん、身近にいたのに不思議だね」

「そうだな。でも負けないぜ、俺」

「こっちもだよ、十代」

そして、お互いに静かな火花を散らすのが、何かを思い出した十代がポケットに手をやった。

「おっと、そうだったと忘れるところだった」

その十代の行動に千影はクエスチョンマークを浮かべているとトメさんから預かったパックを千影に渡した。

「十代、これは？」

「何だ、忘れたのかよ。いったら、お前の分も買って置いてやるって。と、いいたいとこだけど、実は買い占められちゃっ

ててさ。それは今朝車押しを手伝ったおばちゃん、トメさんが俺たちのために取り置きしておいてくれたんだ。お礼だって」

それを聞いた千影を十代からそのパックを受け取りつつ、笑顔で十代に応えた。

「ううん。買ってきてくれるって気持ちで十分だよ十代。それとこのパック、持ってきてくれてありがとう。早速使わせてもらうよ」

「礼なんかいらねえよ、俺とお前の仲じゃんか」

十代もそういつつ、互いに笑いあうのだった。

その光景を見た翔はわからないといった顔でいた。

「なんでアニキも千影君もこれから戦いあう敵同士になるっていうのにあんなに仲良く笑いあってるんだらう？」

翔はそれが不思議でいらなかった。

「彼らにとって決闘とはただの勝負ではないんだらうな」

三沢のその言葉に翔は「えっ？」となつて三沢のほうを見た。



「彼らにとつて決闘は他人を蹴落としたり、自分がのし上がった  
するためのものじゃなく、共に楽しみ、さらなる高みに昇ろうとす  
るものなんだ」

「僕にはその考えがわからないよ                    アニキ、千影君」

三沢が言った言葉の意味を未だ理解できない翔は決闘場に立つ2人  
を見たのだった。

十代から貰ったカードパックを開けてそのカードを確認した千影は、  
そのカードたちを自分のデッキに加えた。

「おつ、もついいのか？」

その姿を見た十代は座っていた地面から勢いよく立ち上がった。

「うん、これで問題ないよ。さあ決闘を始めよう十代」

千影はそう言いながら決闘盤を起動させ、デッキをはめ込んだ。

「よおし！デュエルアカデミア頂上決戦、いっちょやるか！！」

十代も決闘盤を起動させ臨戦態勢に入った。

「「決闘っ！！！！」」

千影LP4000

十代LP4000

「まずは先行を貰うよ、十代。私のターン、ドロー！」

千影は手札の状況を見ながら、最初の一手をどうするか考える。

（十代のデッキは融合により素早く高攻撃力のモンスターを展開す  
るヒーローデッキだ。対応が少しでも遅れるとそれが命取りになる。  
なら                    ）

「私はLovサーヴァント・ガーゴイル - を攻撃表示で召喚する！」

Lovサーヴァント・ガーゴイル -                    4                    ATK1800                    DE

F1000

「さらにカードを1枚セットしてターン終了」

(万全の準備を持って迎え撃つ！)

「アニキと千影君の決闘始まっちゃったよお。僕はどっちを応援すればいいんだ……」

とうとう始まった千影と十代の決闘に翔は頭を抱えてうな垂れていた。

(彼ら2人の実力は新入生の中でも群を抜いている。片や知識は乏しいが独特のセンスと引きの強さで相手を倒す十代と、片や完璧と行って言い頭脳と卓越した戦略眼を持って相手を組み伏す千影

まさに剛と柔の闘いと言ったところか。さて、どんな決闘を見せてくれる？1番君にパーフェクト君)

横に座る三沢もそう思いながら、一時も目を離さないといった表情で2人の決闘を見ていた。

「俺のターン、ドロー！」

そして十代も最初の一手をどうするかで考えていた。

(千影の場にはモンスターと伏せカードが1枚づつ。そしてモンスターのガーゴイルは戦闘フェイズの間のみ攻撃力が200アップする効果、融合前のE・HEROじゃ太刀打ちできない。でも千影はそんな事はわかってるはず ならグダグダ考えるのは辞め

だ！俺は俺の決闘を千影にぶつけるだけだぜ！！)

「俺は手札のE・HEROスパークマンとE・HEROクレイマンを融合！」

いきなりの十代の融合に開場にどよめきが走った。

「いきなり、融合！？」

「先に仕掛けたのはやはり十代か！」

翔と三沢も十代の行動に声を上げていた。

「これにより俺はE・HEROサンダー・ジャイアントを攻撃表示で特殊召喚する！」

E・HEROサンダー・ジャイアント      6      ATK2400      D  
EF1500

「さらにサンダー・ジャイアントの特殊効果！このカードの召喚に成功した時、相手フィールド上のこのカードより元々の攻撃力の低いモンスター1体を破壊する！！ガーゴイルの元々の攻撃力は1800、サンダー・ジャイアントよりも低い！！」

十代のその言葉に千影は身構えた。

「いけえ、サンダー・ジャイアント！ウェイパー・スパーク！！」

サンダー・ジャイアントがガーゴイルに迫ると掌から雷撃を放ちガーゴイルを破壊した。

「ぬっ！」

その雷撃の余りの眩しさに千影は腕で目を庇う。

「ただだぜ、千影！俺はサンダー・ジャイアントでプレイヤーに直接攻撃！！」

十代のその命令の元、サンダー・ジャイアントは千影に迫り、両手に電気のエネルギーを集約させる。

「ボルティック・サンダー！！」

そして放たれた雷撃が千影を襲うが、その雷撃が千影を貫くことはなかった。

なぜなら

「畏カード発動！次元幽閉！！」

そのカードの発動と共にサンダー・ジャイアントは霞のように消えていったからだ。

「なにっ！？サンダー・ジャイアントが！？」

その光景を見た十代は驚きの声を上げる。

「次元幽閉、相手の攻撃宣言時に発動できる罠カード。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する」

決闘を見ていた三沢のその説明に翔は驚愕の声を上げる。

「そんな！じゃあアニキのフィールドはがら空きじゃないか！！」  
「いや、まだ十代は通常召喚をしていないからまだ何とかなる。それに融合召喚されるE・HEROが融合でのみ召喚可能と言う性質がここでは不利には働かない。サンダー・ジャイアントが墓地に行っても蘇生系のカードで特殊召喚できないから除外されてもさほど問題はないからな」

「くっ！サンダー・ジャイアントは除外されたけど、まだ俺のターンは終わっていないぜ！！俺は手札から魔法カード、融合回収を発動！このカードは自分の墓地に存在する融合カードと融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える魔法カード！！」  
十代は墓地に手を伸ばし、そこから2枚のカードを掲げ千影に見せる。

「俺は融合とE・HEROクレイマンを手札に加える。さらに俺はまだこのターン、通常召喚を行っていない！E・HEROクレイマンを守備表示で召喚！！」

E・HEROクレイマン      4      ATK800      DEF2000

「俺はこのままターンを終了する！」

2人の決闘は最初から全力全開の文字通りの決闘だった。

千影と十代、2人の激闘はすぐさま噂になって、前半に実技試験を終わらせて早々に帰っていった上級生や一部の新入生たちの間に一気に広まった。

「おい、何だか1年最後の組の実技試験がすごいことになってるらしいぜ」

「ああ、何でも入試決闘でクロノス教諭を倒したオシリスレッドの2人が決闘してるんだろ？それにそのうちの1人はその直前にオベリスクブルーの万丈目を倒したらしいぞ」

「その生徒と決闘してるもう片方は千影姫ですって！」

「何ですって！？それを早く仰いなさいな！これを見逃す手はございませんわよ！！」

「おい、観に行こうぜ！」

「おい！置いてくなよ！俺も行くぞ！！」

「急がないと終わってしまうぞ！！」

部屋で、ロビーで、思い思いに寛いでいた上級生たちはその噂を聞くと急いで、体育館へと向かって行った。

（遊城十代、そして姫宮千影）

そして、体育館に向かう大勢の上級生を壁に背を預けて見つめながら、いかに噂とはいえ上級生たちにそうまでさせる2人の力に『皇帝』丸藤亮は十代と千影の名を心の中で呟くと、壁から背を離して自分も体育館へと歩を進めたのだった。

「モンスターを除外されてもまた新しいモンスターを出してくるとは流石だよ、十代」

「へっ！決闘はまだまだこれからだぜ、千影！！」

千影の言葉に笑みを浮かべて応える十代に、千影も笑みを持って応えながら内心では少し焦っていた。

（守備力2000のクレイマンを破壊するにはシンクロ召喚を狙うしかない。でも私の手札にはチューナーモンスターがなく、モンスター召喚支援のカードもない。ここで隙を与えたらきつと十代のことだ、また融合で攻めてくるに違いない。この状況でクレイマンを破壊し、少しでも十代の出鼻を挫く事のできるカードはペガサス小父様が新たに作って、ドウクスが運んでくれたあの子たちの中あの1枚しかない！）

その考えにいたると、千影はデッキからカードを引くべくデッキに

手を伸ばした。

「じゃあ遠慮なく行かせて貰うよ。私のターン、ドロー！」  
そして引いたカードを見た千影の顔は喜びに染め、引いたカードを見て思った。

(この子が応えてくれた！なら私がすべきことは )

「私はLOVサーヴァント・ワータイガー - を攻撃表示で召喚！」  
その千影の言葉とともに、鍵爪を装備した筋骨隆々の虎の亜人が現れたのだった。

(この子たちに最高の決闘を持って応えるのみ！)

LOVサーヴァント・ワータイガー -      5      ATK 2100      D  
EF 1200

その千影の出した上級モンスターに十代は驚いていた。

「生贄なしで上級モンスターを召喚だつて!？」

「このモンスターは自分の場にモンスターカードがなく、相手の場にモンスターカードがある時、生贄なしで特殊召喚することができる。その代わりにプレイヤーへの直接攻撃はできないけど、この場はこれで十分！さらに私はLOVサーヴァント・ケルベロス - を攻撃表示で召喚!！」

さらに千影は三つ首の魔獣を召喚して一気に攻勢に入った。

LOVサーヴァント・ケルベロス -      3      ATK 1400      DE  
F 700

「征くよ、十代！ワータイガーでクレイマンを攻撃！ビーストチャージ!！」

虎の亜人がクレイマンに迫り、その鍵爪を振るってクレイマンを引き裂く。

「さらに、ケルベロスで十代に直接攻撃!！」

そして三つ首の魔獣が放った炎が守りを失った十代に襲い掛かった。  
「うっうっうっ！」

十代LP2600

「私はこのままターンを終了する。さあ十代、今度は君の番だ！」  
「おうよ！俺の本気を見せてやるぜ！！俺のターン、ドロー！！」  
千影のその言葉にそう返した十代は引いたカードを見て「よしっ」と頷いた。

「俺は、手札のE・HEROワイルドマンとE・HEROエッジマンを融合！こい、E・HEROワイルドジャーマン！！」

E・HEROワイルドジャーマン      8    ATK2600    DE  
F2300

その新しいヒーローの出現を見た千影は驚いていた。

(やはり、展開が速い！この速度には流石の私も追いつけない！！)  
「ワイルドジャーマンは相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃することができる特殊効果を持つ！一気に行かせて貰うぜ、千影！ワイルドジャーマンの攻撃、インフィニティ・エッジ・スライサー！」

ワイルドジャーマンの攻撃が千影の場の全てのモンスターに襲い掛かり、一掃した。

「うっうっ！」

千影LP2300

十代の猛攻に体を踏ん張らせながら耐えた千影はただでは転ばなかった。

「LOVサーヴァント・ケルベロス」のモンスター効果発動！この

カードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のL  
oVサーヴァントと名のついたモンスター1体を攻撃表示で特殊召  
喚する！！私はチューナーモンスター、L oVサーヴァント・イン  
キュバス-を攻撃表示で特殊召喚！！」

L oVサーヴァント・インキュバス -           3   A T K 8 0 0   D E  
F 3 0 0

「迂闊だぜ、千影！戦闘フェイズ中に特殊召喚されたモンスターに  
もワイルドジャギーマンの効果は有効だ！インフィニティ・エッジ・  
スライサー！！」

「それはどうかな」

十代その言葉に千影は手札のカード1枚を見せたのだった。

「それはっ！！」

「手札のL oVサーヴァント・グリフォン-を墓地に捨てて効果発  
動！1500以上の相手モンスター1体の攻撃を無効にする」

ワイルドジャギーマンの3度目の攻撃は成功せず、千影の場にはイ  
ンキュバスが残っていた。

「さらに無効化した相手モンスターの攻撃力が2500以上の場合、  
次の自分のドローフェイズで、カードをもう1枚ドローすることが  
できる」

「ワイルドジャギーマンの攻撃力は2600           迂闊なのは

こつちだったか。俺はリバーズカード1枚セットしてターンエンド  
だ！」

十代と千影、共に頬に一筋の汗を流していたことを本人たちは気が  
ついていなかった。

千影と十代の決闘を見ていた翔はあたりが騒がしくなってきたと思  
い、決闘から目を離して会場を見ると驚いた。

「うわっ！？何、この人ばかり！？」



三沢も体育館に集まった収容人数を大幅に超える人の多さに驚いていた。

その2人の下に声をかける人物が1人いた。

「千影と十代の決闘がすごいことになってるって噂を聞いた人たちなんだな」

それは自分の実技試験が終わると早々に帰っていった隼人だった。

「隼人君、帰ったんじゃない？」

隼人は座る席がないので階段に腰を下ろしながら外のことを説明した。

「ああ、自分の試験が終わったから帰って寝ようかと思ったんだけど、2人の決闘がすごいって噂を聞いてやってきたんだな。この人だから皆そういう人たちなんだな」

そして自分も千影と十代の決闘を見始めるのだった。

「あら、あなたもこの決闘を気になった口かしら？」

明日香は自分の後ろに立った人物、亮のほうを振り向きながら聞いた。

「まあ、そんなところだ」

そして亮も腕を組んで2人の決闘をじっと見始めるのだった。

「私のターン、ドロー！さらにLOVサーヴァント・グリフォン・の効果でもう1枚ドロー！」

（この手札ならば、いける！）

カードを2枚手札に加えた千影はこれからどうするかを瞬時に判断し、すぐさま行動に移る。

「私はLOVサーヴァント・イフリート・を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント・イフリート・ 4 ATK1900 DE  
F700

「十代、君が融合で攻めるなら私はシンクロ召喚を持って応える！」  
「おう、来い！」

その千影の宣言に十代は笑みを持って答え、身構える。

「征くよ！ 4、L o Vサーヴァント-イフリート-に 3、L o Vサーヴァント-インキュバス-をチューニング！」

7つの星が飛び交い、その光景に観客たちが期待の眼を持って、その軌跡を見る。

「妖しき星が、集いてここに狂気が咲く。狂気よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、魔界公妃L o Vサーヴァント-ベルゼバブ-！！！」

L o Vサーヴァント-ベルゼバブ- 7 ATK1200 DE  
FO

かつて自分を倒した蠅の女王の登場に明日香は驚きの声を上げた。

「ついに千影もシンクロ召喚を！」

「互いに死力を尽くしているということか」

亮もその光景を眸に納めながら、そう呟いたのだった。

「L o Vサーヴァント-インキュバス-により、私はカードを1枚ドロ-！さらにL o Vサーヴァント-ベルゼバブ-の効果！このモンスターはシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を0にする！！私が選ぶのは勿論、ワイルドジャーマン！！！」

ベルゼバブは黒いエネルギーを集めると、それをワイルドジャーマンに向けて放つ。

「そうはさせないぜ、千影！リバースカード、オープン！！」

千影の宣言に十代は自分の伏せたカードを発動する。

そのカードとは

「融合解除!!」

「融合解除だつて!?!」

「そう、この融合解除によりワイルドジャーマンを融合デッキに戻し、墓地のワイルドマンとエツジマンを俺の場に特殊召喚!対象をなくしたベルゼバブの効果は不発に終わるぜ!!」

その十代の言葉通り、ベルゼバブの放った黒い波動はワイルドジャーマンが消えたことで空を切り、十代の場には2体のモンスターが攻撃表示で並ぶのだった。

E・HEROワイルドマン 4 ATK1500 DEF1600

E・HEROエツジマン 7 ATK2600 DEF1800

その十代の戦術に三沢は賞賛の言葉を送った。

「上手い!これで効果を回避したばかりか、十代の場の2体のモンスターの攻撃力はベルゼバブの攻撃力を越えている。千影はこのターンを無駄にしたか!?!」

しかし、その三沢の予想は外れることになる。

「十代、君が融合解除を使うなら私もこのカードを使わせてもらおう!魔法カード、シンクロキャンセル発動!!」

「なにっ!?!」

「シンクロキャンセルはシンクロモンスター版の融合解除!この効果によりベルゼバブをイフリートとインキュバスに戻し、再びシンクロ召喚!!」

「っ!?!?!」

その言葉に十代は絶句する。

「再び顕現せよ、狂気の蠅の女王よ!シンクロ召喚!LOVサーヴアクト-ベルゼバブ-!!」

LOVサーヴァント - ベルゼバブ - 7 ATK 1200 DE  
FO

千影の怒涛の攻勢に開場全体は沸きあがった。

そして、それを見ていた三沢と翔、隼人も、

「十代の融合解除を読んでいたというのか」

「すごいや、こんな決闘見たことないよ」

「俺もなんだな」

額に汗を浮かべつつ、汗を拭うのも忘れて2人の決闘を見ていた。

それを見ていた亮は少し眉をひそめた。

「十代はタイミングを見誤ったな」

「えっ？」

その亮の台詞に明日香は亮のほうを振り向く。

亮は明日香に十代の何がまずかったのかを説明する。

「戦闘フェイズで融合解除を使えば、このような追撃は貰わなかっただろう。千影のシンクロキャンセルを警戒していなかった十代のミスプレイだ。これは千影に大きなアドバンテージになるぞ」  
そう言った亮は再び口をつぐんで2人の決闘に眼を戻した。

「インキュバスの効果でカードを1枚ドロー！そして今度こそ逃がさないよ、ベルゼバブの効果でエツジマンの攻撃力を0にする！！」  
ベルゼバブが再び放った黒い波動は今度こそ、十代のモンスターに命中し、その攻撃力を下げた。

E・HEROエツジマン 7 ATK 0 DEF 1800

「そして、ベルゼバブでエッジマンを攻撃！墮落の抱擁！！」  
ベルゼバブはその身を5つに分裂させるとエッジマンに集り、破壊したのだった。

「エッジマン！！」  
十代はそう叫びながらも腕で顔を庇うのが精一杯だった。

十代LP1400

「さらに私は2回目のインキュバスの効果で手札に加えたこの魔法カード、地割れを発動する！相手フィールドの一番攻撃力の低いモンスター1体を破壊！！」

これによりワイルドマンは地割れに呑み込まれ破壊、十代の方はがら空きとなった。

「うううっ、ワイルドマンまで……」

「私はさらにカードを1枚セットしてターン終了。どうだ十代！これが私の全力全開の血闘だ！！」

そう発言した千影の双眸は紅蓮の如き真紅に爛々と輝いていた。

「ああ！確かにお前の本気の決闘、受け取ったぜ千影！！じゃあ次は俺のターンだ！行け、ドロー！！」

手札が0枚なのに十代は絶望の欠片も見せずにワクワクとした笑顔のままカードを引いた。

「俺がドローしたカードはE・HEROバブルマン！手札がこのカード1枚だけの時、このカードを特殊召喚できる！俺は守備表示で特殊召喚！！」

E・HEROバブルマン      4      ATK800      DEF1200

「さらにこのモンスターが召喚された時、自分の場にこのカード以外のカードがない時、デッキからカードを2枚ドローすることができるー」

バブルマンの効果でカードを2枚手札に加えた十代はその中から1枚のカードを選び出す。

「さらに俺は手札の魔法カード、モンスター回収を発動！このカードは自分の場のモンスター1体と自分の手札をデッキに戻してシャッフルした後、カードを5枚ドロウする！」

十代はバブルマンと残りの手札1枚をデッキに戻し、カードを5枚引く。

《クリクリ》

(相棒、来てくれたか！)

その5枚の中にハネクリボーを見つけた十代は残りの手札を確認すると逆転の一手を閃いた。

「よし！頼んだぜハネクリボー！！俺はハネクリボーを攻撃表示で召喚だ！！」

ハネクリボー 1 ATK300 DEF200

「さらに俺はカードを2枚セットしてターンエンドだ！！千影、俺の全力を見せてやるぜ！！」

この白熱した決闘に胸躍らせていたのは生徒たちばかりではない。

鮫島校長とクロノスも2人の決闘に感動を覚えていた。

「すばらしい！これほどまでの決闘は3年生のオベリスクブルー生徒でもそうはできないでしょう。ねえ、クロノス教頭？」

「ぬっ、確かにそれはそうなのですーガ……」

クロノスは鮫島の台詞にタジタジになりながらも2人の決闘から眼を離すことが出来なかった。

「じゃあ見せて貰うよ、十代。君の全力を！私のターン、ドロウ！私はベルゼバブを生贄にしてL.O.Vサーヴァント-ディアボロス-を攻撃表示で召喚する！！このカードは相手の場にモンスターがあ

る時、召喚に必要な生贄は1体となる!!」  
千影はドロークしたカードをすかさず召喚、トライデントを持った悪魔が姿を現した。

LoVサーヴァント - ディアボロス -                   7           ATK 2600   D  
EF 1400

(ハネクリボーを攻撃表示にしているということは明らかに攻撃を誘っている。ならば伏せられたカードは先ほどの万丈目との決闘で見せた進化する翼。しかし                   )  
「ディアボロス、ハネクリボーに攻撃だ!」  
(それに臆する私ではない!)  
そしてディアボロスはトライデントを振りかぶり、ハネクリボーに向かっていく。

「来たぜ、相棒!準備はいいか!!」

《クリクリー!》

そのハネクリボーの言葉を聞いた十代はリバーズカードを発動する。「手札のカード2枚をコストにリバーズカード発動!進化する翼!」

このカードの効果によりハネクリボーはハネクリボーLV10にレベルアップするはずだった。しかし

「それはさっきの決闘で見せてもらった!リバーズカード、オープン!!神の宣告!!」

千影LP 1150

千影の己のライフの半分を支払い相手の召喚、魔法、罠を無効化し破壊するカウンター罠、神の宣告により進化する翼は音を立てて砕け散ったのだった。

そして今なお、ハネクリボーに突き進むディアボロスを有する千影

はこう叫んだ。

「これで決まりだ、十代！」

その千影の宣言に十代は会心の笑みを持って応えた。

「まだそうとは決まらないぜ千影！俺はもう1枚のリバースカードを発動する！！」

「なんだって！？」

千影の驚いた顔を見ながら十代は、ディアボロスとハネクリボーが激突する瞬間にもう1枚伏せてあったカードを開いた。

「トメさんから貰ったパツクに入っていたもう1枚のカード、バースーカードクラッシュを発動だ！このカードは自分の墓地にあるモンスターカード1枚を取り除いて発動。このターンの間、自分のフィールドに存在するハネクリボーの攻撃力・守備力を除外したモンスターと同じ数値にする！俺が除外するモンスターはこれだ！！」

十代はE・HEROエッジマンのカードを掲げた。

《クリクリー！！》

このカードにより、ハネクリボーの攻撃力は格段に上がった。

その攻撃力は

ハネクリボー      1      ATK2600      DEF1800

「2600！？ディアボロスに並んだ！！」

「まさか、1のモンスターがここまでの可能性を見せるとは  
」

その十代の見せた光景に明日香と亮は驚きを隠せないでいた。

「いけー！ハネクリボー！！」

「打ち砕け！ディアボロス！！」

そして、ディアボロスとハネクリボーの衝突の果て、決闘場を眩い



ばかりの閃光が走り2人の場からモンスターは消え去ったのだった。光が晴れた決闘場で千影と十代は互いに俯いたまま、何をすることもなく佇んでいた2人だが、しばらくの間そうしていると肩を小刻みに揺らし始めた。

「クッククク」

始めは小さな声だった。それが次第に大きな笑い声へと変わる。

「ハッハハハハハハハハハ！！」

いきなり笑い出した2人を開場にいた全ての人は呆然となった。

しかし、そんなことはお構いなく一頻り笑った千影と十代は互いを満面の笑みを持って見合った。

「楽しいなあ、千影！」

「うん、こんな楽しい決闘は生まれて始めてかも。でも楽しい夢は長くは続かない、次のターンで決着をつけよう！」

「おうよ！臨むところだぜ！！」

その言葉を聞いた千影は勝負のお膳立てをするべく動く。

「私はカードを1枚セットして、手札から魔法カード、天よりの宝札を発動！このカードの効果により互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローする！！」

共に手札が0枚の2人は6枚のカードをドローする。

（このカードは！？）

手札に来た1枚のカードを見た千影は内心で驚きの声を上げたが、すぐに気を取り直して他のカードたちを見た。

《そろそろ私の出番なんじゃないかなあ、ご主人様》

その中であつたサキュバスが千影に声をかけてきた。

（そうだな。十代と決着をつけるにはサキュバス、君からのシンク口召喚が相応しいな）

《よおし、じゃあ張り切つていくわよ》

「私は手札から魔法カード、二重召喚発動！このカードの効果により、私はこのターン、もう一度通常召喚を行える！！私はチューナーモンスター、LOVサーヴァント-サキュバス-を攻撃表示で召

喚する！」

LOVサーヴァント - サキュバス -                    3    ATK 1500    DE  
F100

「さらに私はカードを2枚セットしてターン終了だ！さあ十代、君のフェイバリットで来い！次の君のターンが決着の時だ！！」  
その千影の叫びに十代も頷きつつ答える。

「OK！俺も全力で行かせて貰うぜ！！ラストターン、ドロー！！」  
その手札の内容を見た十代は千影の場を見て考えた。

（千影が俺のフェイバリットカードを待ってるってことは千影が狙ってるのは俺のターンでのシンクロ召喚。それにサキュバスでシンクロ召喚されたモンスターの攻撃力はそのターンの間1000上がることを考えれば、俺の手はこれしかない！）

「俺は手札のE・HEROフェザーマンとE・HEROバーストレディを融合し、E・HEROフレイム・ウィングマンを融合召喚する！来い！マイフェイバリットカード、フレイム・ウィングマン！！」

E・HEROフレイム・ウィングマン                    6    ATK 2100    D  
EF1200

その姿を見た翔は飛び上がって言った。

「来た！アニキのフェイバリットカード、フレイム・ウィングマン！！」

「あれがクロノス教諭を倒した十代のモンスターかあ」  
隼人も十代のエースモンスターの登場に拳を握りつつ、三沢も予測不能の決闘に胸を高鳴らせながら呟いた。

「千影の場にはサキュバスとリバーカードが3枚、十代がここからどう出るかな」

「さらに俺はフィールド魔法、魔天楼・スカイスクレイパー - を発動！」

十代が出したこのフィールド魔法により決闘場は夜の大会へとその姿を変貌させた。

「このタイミングでスカイスクレイパー!？」

この十代の行動に驚いた明日香は声を上げたが後ろに立つ亮は冷静に言葉を放った。

「十代は千影のシンクロ召喚を警戒して、予めこのフィールド魔法を使ったのだろう」

「ということは、千影はこのターンにシンクロ召喚をしかけるといふの!」

亮の言葉に明日香は驚きの声を上げるのだった。

「魔天楼・スカイスクレイパー -、E・HEROと名のつくモンスターが攻撃する時、相手のモンスターよりも攻撃力が低ければ攻撃力を1000アップさせるフィールド魔法。十代、嬉しいよ。君がここまでやってくれるなんて!」

「千影、お前も俺に見せてくれよ。全力のシンクロ召喚を! フレイム・ウィングマンでサキュバスを攻撃!」

千影のその言葉に十代はフレイム・ウィングマンの攻撃で持っている。

サキュバスにフレイム・ウィングマンが迫るが、千影はそれこそを待っていた。

「ああ、見せてあげるとも! リバーカード発動! リビングデッドの呼び声! この効果でガーゴイルを特殊召喚! さらにもう一枚のリバーカード! 緊急同調、発動!」

LOVサーヴァント - ガーゴイル - 4 ATK1800 DE  
F1000

千影の発動したりリビングデッドの呼び声によりガーゴイルが復活、  
そして緊急同調の効果で千影の場の2体のモンスターは星になった。  
「緊急同調は戦闘フェイズの間のみ発動できる畏カード、シンクロ  
モンスター1体をシンクロ召喚する!!」  
そして魔天楼の空を7つの星が駆け巡る。

「妖しき星が、集いてここに破滅を誘う。破壊よ、顕現せよ!シン  
クロ召喚!汝、絶対破壊者LOVサーヴァント - バハムート - !!」

LOVサーヴァント - バハムート - 7 ATK2500 DE  
F1400

「さらに、サキュバスの効果でこのターンのバハムートの攻撃力は  
3500になる!!」

「なんの!こつちもスカイスクレイパーの効果で攻撃力アップだ!  
!」

LOVサーヴァント - バハムート - 7 ATK3500 DE  
F1400

E・HEROフレイム・ウィングマン 6 ATK3100 D  
EF1200

千影の破壊の竜はその身を白金色に変え、十代のヒーローは自身の  
体を炎で包み、ここに対峙する。

その光景を見た翔たちはもはや言葉もなかった。

「行くぜ、千影！フレイム・ウィングマンでバハムートを攻撃！！」  
攻撃力が僅かに届かないのに十代は攻撃を敢行、フレイム・ウィングマンが魔天楼の空を翔る。

「迎え撃て、バハムート！メガフレア・エクステンション！！」  
バハムートは両の腕にエネルギーを収束させ、フレイム・ウィングマンに放つべく腕を振りかぶった。

「ここだ！速攻魔法、突進発動！！」  
そのカードの発動によりフレイム・ウィングマンのスピードはさらに増した。

それを見た千影は驚きの声を上げた。

「っ！？それはモンスターの攻撃力をこのターン700アップさせる速攻魔法！！」

「そうさ！そしてこのカードの効果によりフレイム・ウィングマンの最終的な攻撃力は

「 E・HEROフレイム・ウィングマン          6          ATK3800          D  
EF1200

「3800！！バハムートを越えた！？」

「これで、決まりだああ！！スカイスクレイパー・シユートオオオオ！！」

バハムートが放った劫火の炎を突き破り、フレイム・ウィングマンはその身を弾丸にしてバハムートを打ち抜いたのだった。

「うぐうっ！！！！」

千影LP850

バハムートを破壊された千影はその攻撃に生まれて始めて決闘で方膝をついたのだった。

その千影を見た十代は勝利を確信した笑みをもって言った。

「フレイム・ウィングマンのモンスター効果。戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージをお前に与えるぜ、千影。俺の勝ちだな」

そして、フレイム・ウィングマンから炎が放たれ、千影を焼く

ことはなかった。

「なに!？」

その光景を眼にした十代は何がどうなっているのか解からなかった。そんな十代に千影は立ち上がりながらこう言った。

「確かに君の勝ちだったよ、十代。でも君がくれたパックが私に勝利を運んでくれた」

そう言う千影の直ぐ側で1枚のカードが開かれていた。

それは

「地獄の扉越し銃・・・」

「そう、このカードは戦闘ダメージ以外のダメージを与える効果が発動した時、発動。自分が受けるダメージを相手に与えるカウンタ―罠。君がくれたパックの中に入っていたカードさ」

「じゃあ、フレイム・ウィングマンの効果は」

「私ではなく、君に適用される」

その千影の言葉と共に千影を前にして消えた炎が十代を襲ったのだ。つた。

「ぬっ、うわああああ!!!!」

十代LPO

その光景にしばらく水を打ったような静けさだった開場は一気に怒涛の歓声に包まれた。

「すごかったぞー!オシリスレッドー!!」

「千影姫すてきー!!!」

「遊城十代もよくやったなー!!!」

そんな言葉と共に開場の全ての人が総立ちになり決闘場の2人に盛大な拍手を送った。

勿論、翔、隼人、三沢、明日香、亮も漏れることなく2人に惜しめない拍手を送っていたのだった。

そんな開場がスタンディングオベーションに包まれる中、地に膝をついた十代の元に眸を元に戻した千影が駆け寄った。

「大丈夫、十代!?!」

「ああ、何とかな。でも千影の勝ちかあ」

十代は近くに走りよった千影に手を挙げ大丈夫なことをアピールすると自力で立ち上がりながらそう言った。

しかし、千影はその十代の言葉に首を振って、

「ううん、十代から貰ったパックがなければ私の負けだったよ。これは私と十代、2人の勝利さ」

十代に右手を差し出した。

それを聞いた十代は一瞬キョトンとした表情になったが、次の瞬間には満面の笑みを浮かべて千影の右手を握り返した。

「そうだな、俺たちの勝ちだな!」

そう言っただけ握手を解き、笑顔で観客の声援に手を上げて応える十代に千影は、

「十代!」

「んっ?」

「ガツチャ!楽しい決闘だったよ!!!」

十代式のガツポーズを十代に送るのであった。

「千影、お前ってやつはあ!!!」

それを見た十代は千影の首に手を回してじゃれ合おうとするが、それを鮫島校長のアナウンスが遮った。

『見せてもらいましたよ、姫宮千影君に遊城十代君』

その鮫島校長のアナウンスに開場は静まり千影と十代は鮫島校長とクロノスがいるガラス張りの部屋を見上げた。

「君たちのデツキへの信頼感、モンスターたちとの厚い友情、そして何よりも勝負を捨てない決闘魂。それはここにいる全ての者が認めることでしょう」

その鮫島の台詞に体育館に集まった生徒たちは大きな歓声と拍手でもって応えた。

『よって姫宮千影君に遊城十代君、君たちはライイエローに昇格です！』

鮫島のこの言葉に開場はより一層大きな歓声と拍手に包まれた。

しかし、それに納得できない人間が1人。

誰であろう、この決闘の仕掛け人クロノスだった。

「ちよつと、待つーノデス鮫島校長！負けた遊城十代までライイエロー昇格は、いくらなんでもやり過ぎなのーネ！」

しかし、クロノスは次の鮫島の台詞に言葉を失うことになる。

「遊城十代君は先の万丈目君との決闘ですでに貴方がその実力を認めたでしょう、クロノス教頭」

その言葉にクロノスは自分が遊城十代にいった台詞を思い出してみると

(しまつター！余計なことを言ってしまったのーネ！！)

そう心の中で叫ぶクロノスの体にひびが入り、音を立てて一気に崩れ去った。

これにてクロノスが画策したプランBももろくも崩れ去ったのだった。

そして、試験が終わったその日の夕方。

オシリスレッドの寮の部屋で翔と隼人はライイエローへと一気に駆け上がった2人を思い返していた。

「まさかこのオシリスレッドからライイエローに昇格するやつがいるなんて、思いもよらなかつたんだな」



「それだけ、アニキと千影君はすごいってことだよ。今日の2人の決闘も本当にすごかったし」

今までのオシリスレッドの悪しき伝統を壊した千影と十代を思い返しつつ、2人は部屋の中を見回した。

たった2人がいなくなっただけで今まで狭かった部屋がもの凄く広く感じた。

そんな感傷に浸っていると、扉が開く音が聞こえたのでそちらの方を見てみると、そこには予想外の人物が立っていた。

「アニキ!？」

「それに千影!？」

そう、本日ライイエローに昇格した2人がオシリスレッドの制服のままそこにいたのだ。

「どうしてここに!？」

「どうしてって」

「ここが私たちの部屋だからだよ」

翔の叫びを聞いた十代と千影は笑いながら答えた。

その答えに翔と隼人は驚きの顔になった。

「ここでの生活、私は気に入ってるんだ」

「俺も!それにレッドは燃える炎、熱い血潮、熱血の赤だ!俺は離れる気はサラサラないぜ!！」

「そうそう。それに昇進したくなったら、いつでも昇進できるんだから問題ない」

その千影の自身満々の悪意の全くない天然発言に翔は顔を少し引きつらせながら、千影と十代のオシリスレッド残留を心から喜んだのだった。

## 第5話【DA学園篇】（後書き）

さて、今回は前回の続き月1試験の後編をお送りしました。

今回、一番頭を悩ませたのが千影と十代、どちらを勝たすかです。

一番無難な引き分けにする案もありましたが、私には腕も頭も足りず断念せざるを得ないことになりました。

そこで取った方法は千影君に試合に勝って勝負に負けてもらうというものでした。

千影の勝利の要因を十代が渡してくれたパックの中に入っていたカードにすることで、十代がパックを渡していなかったら本来は負けていたという位置づけにすることにより2人の腕が拮抗しているのを表現させてもらいました。

今回の最強カード『L o Vサーヴァント - ワータイガー - 』

5 ATK2100 DEF1200 地属性 獣戦士族 効果  
モンスター

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できない。

一言で言うと直接攻撃できないサイバードラゴンです。

シンクロ召喚の絡め安さから制限入りしたサイバードラゴンと同じ効果を持たせるのはパワーバランスにどうかと思いましたが、L o Vサーヴァントがそれぞれ1枚ずつしかこの世に存在しないという設定の元、採用しました。

それとL o Vの攻撃属性の撃と雷をどうするかで悩みましたが、その使い魔たちのイメージで残った遊戯王の属性、水・風・地をイラ

ストのイメージや使う特殊技に当てはめて変えていこうと思います。  
ワータイガー君はめでたく地属性にあいりました。

## 第6話【DA学園篇】

デュエルアカデミアの月1試験から一夜明けた今日、早速試験結果が電光掲示板に表示されていた。

「すげえな、千影！お前筆記テストも満点かよー！」

電光掲示板に表示された順位の1番上には姫宮千影の名と共に、筆記テスト100点、実技テスト100点、つまり1年生総合1位の試験結果が映し出されていた。

「そういう十代こそ、実技試験満点じゃないか」

その千影の言葉通り、実技テストのみの順位ではあるが、千影と並んでそこに遊城十代の名前が100点の点数と共に燦然と輝いていた。

千影に負けはしたが、その前に行った万丈目との決闘や、千影とのプロ顔負けの決闘内容にこの点数に落ち着いたのだった。

しかし、その結果を見た翔は少し不思議そうにしながら千影のほうを見て言った。

「あれ、でも千影君って入試の時は筆記試験全然だめだったよね？」その翔の言葉に千影は恥ずかしそうにしながら訳を話した。

「実は、あとになって校長先生に聞いたんだけど、入試試験の解答が1個づつずれてたらしんだ」

「それじゃあ!？」

それを聞いた翔はある結論にいきつく。

その翔の推測は当たっていた。

「うん。ちゃんと解答欄に書いてあれば満点だったんだって」

千影は少し頬を赤く染めながら、その頬を掻きつつ答えたのだった。しかし、哀れなのはその千影と十代の名前に注目が集まるなか、見向きもされない1年生総合2位の三沢大地の名前だった。

その日の夜のこと、明日香は1輪の薔薇を持って、人気のない建物

の前で佇んでいた。

そして、その建物の側に持っていた1輪の薔薇を置き、建物を見上げたのだった。

置かれた薔薇の花はまるで手向けの花のようだった

所変わって、オシリスレッド寮の食堂。

そこでは電気を消して蝋燭を灯した千影、十代、隼人が翔の話聞いていた。

「この島の北の断崖に、その洞窟は　　あるツス」

「おう、それで？」

翔のその抑揚をつけた喋りに十代は身を乗り出しながら翔に続きを促す。

「洞窟の奥には小さな入り江があって、夜になると天井から月明かりが差し込むんツス」

「うんうん」

その話に千影も頷きながら翔の話の続きを待つ。

「そこで入り江の底を覗き込むと、水の底に自分の欲しいカードが映って、それに手を伸ばすと　　たちまち海に引き込まれちゃうそうツス〜！」

その溺れる様を体で表現した翔だったが

「行ってみてえ、その入り江！」

「そんな不思議なところがあるんだねえ」

十代は顔を輝かせながらそう言い、千影もその不思議な入り江に興味を示した。

「アニキ、千影君、違うでしょ。今は怖い話をしてるんだからあ」

翔は怖い話なのに顔を輝かせる十代を呆れながら見た。

翔の後ろでは隼人がすごい怖がっていたが。

「まあ、4の話としてはそんなもんだろうな」

十代はそういつつ先ほど翔が引いた地縛霊のカードを掲げた。

「よし、俺の番」

そして十代が引いたカードは 1のキラーズネイクだった。  
それを見た翔は気落ちしながら言った。

「ちえっ、 1かぁ。ネタが楽でいいなぁ」

「へへっ、 そうだなあ 1の話は そういやあ、ちっちゃ

い頃はさ、夜になると聞こえたんだよなあ。モンスターの声」

その十代の発言に話を聞いていた翔と隼人は身を乗り出し、千影は  
驚いた顔になって十代を見つめていた。

十代は話を続ける。

「童話に出てくる妖精みたいにさ。俺が寝てる間にカードからモン  
スターが現れてパーティでも開いてるんじゃないかって思ってたさ。

夜中になっちゃカードケースを開いてみるわけさ

「でっ？」

その話の続きが気になった翔は十代に話の続きを促したが十代は「  
ニヤツ」と笑いながら答えた。

「なんでもないんだな」

その発言に翔と隼人はズッコケた。

「「なんだあ」」

(十代もカードの精霊が見えていた。でも今は?)

「でもなあ、最近また聞こえることがあるんだよなあ」

その十代の呟きに千影は十代に確認しようとしたのだが

「ほっほう、皆さ〜ん。何してるんですかによ〜」

いつの間にか後ろに来ていた大徳寺の言葉により、それは適わなか  
った。

「びっ、びっくりしたあ！」

「おどかさないてくださいよ！大徳寺先生!!」

翔と十代は驚きながらも現れたのが大徳寺であると気づくと安堵す  
る。隼人は未だにビビッていたが。

「先生。今は引いたカードの の数だけ怖い話をするというゲーム  
をやってるんですが、先生もどうですか？」

千影は大徳寺にこのゲームのルールを説明して勧める。

「それはおもしろそうですね。どれどれ、それでは私も」

そして大徳寺が引いたカードは 12のF・G・Dだった。

「で、でたあ！ 12!!」

「とっておきをお願いします」

それを見た十代は驚きの声を上げ、翔はこれからの話に期待を寄せた。

「ほっほほほほ。そう言えば、この島の奥には使われていない寮があるのをご存知ですかにや？」

そう話し始めた大徳寺の言葉に十代は身を乗り出して聞いた。

「使われていない寮？」

「ええ。昔この学園の特待生たちの寮だったらしいのですが

その寮では何人も生徒が行方不明になつてゐるそうだしにや」  
その話翔はつばを飲み込みながら大徳寺に聞いた。

「ほ、本当ツスカ？」

「なんでもその寮では闇のゲームに関する研究をしていたらしいのにや」

「や、闇のゲーム!？」

大徳寺の発した『闇のゲーム』の言葉に隼人はさらにビビツた。

「伝説のアイテムによって発動する恐ろしいゲームだって話ですよ」

それを聞いた十代は頬杖をつきつつ言った。

「千年アイテムね。でもそんなの迷信だろ」

「真実は私も知らないのにや。私がこの学園に来たときにはあの寮は立ち入り禁止になつてたにや」

話し終わると、大徳寺が抱いていたフアラオが眠そうに欠伸をしたのだった。

それを見た大徳寺は、

「さて、そろそろ部屋に戻る時間だしにや。ではおやすみ」

そう言うとき食堂から出て行くのだった。

大徳寺のその言葉に4人は「」「」「はーい」「」「と答えると、先

ほど大徳寺が話した廃止寮の話に入った。

「いやだなあ、本当にこの学園にそんないやな場所があるのかなあ」  
翔のその言葉に十代は顔をワクワクさせながら言った。

「楽しそうじゃん！明日の晩行ってみようぜ！！」

「それだと、いろいろと準備が要るね」

「ええっ！行くんツスカ！？」

そして、千影も十代に合いの手を入れるがそれを聞いた翔は驚くが、それ以上に驚きの人物が賛同の声を上げた。

「こ、怖いけど、俺も行きたい」

「よおし！決定！！」

隼人のこの言葉に十代は腕を振り上げて廃止寮探検の決定を宣言するのであった。

その話を外で盗み聞きしていた人物がいた。

ご存知の通りクロノスである。

「又ツフフフ、ブラーボ！闇のゲーム、その手がありましたーノネ。噂話を利用してドロップアウトボーイが消えるーノなら、誰にとっても問題ないーノネ！ホッホホホホ、又ハハ！！」  
デュエルアカデミアの夜にクロノスの笑い声が木霊したのだった。

とある街の一角の路地裏でそれは起こっていた。

端から見ればただのストリート決闘。しかし、対峙している決闘者2人の雰囲気これがただの決闘ではないことを示していた。

そんな中、黒いコートを着た男が手に持つモノ

本来なら

この世から消え去ったはずの千年パズルが輝き出した。

黒いコートの男と決闘していたもう1人の男は自分の胸を抑えつつ苦しみながら声を発した。

「こ、これが闇のゲーム・・・」

「喰らうがいい、マインドクラッシュュ！」

黒いコートの男が発した、ステキな若本ヴォイスと共に手に持った千年パズルがさらなる輝きを放つ。



黒いコートの男と決闘していた男はその輝きに叫び声を上げた。

「うわあああああつ!!!」

光が晴れた、その路地裏には黒いコートを着た男と、先ほどまでその男と対峙していた男が倒れていた。

黒いコートの男は倒れ伏した男の下に歩み寄りながら言葉を発する。

「レアカードは全て置いていって貰う。貴様にはもう、無用だからな」

そんな黒いコートの男、タイタンは自分の懐から携帯電話の着信音が鳴っていることに気がつく、その電話にでる。

「そうだ、私が闇の決闘者タイタン。デュエルアカデミア

」

そして、この日の夜は更けていくのだった。

開けて翌日。

十代と翔は今日の探検のために眠りこけていた。千影はそんな2人を苦笑しながら見つっ授業を受けていた。

その光景を外から盗み見たクロノスは笑い声を漏らした。

「又ツフフフ。よく眠るがいいのーネ、学べばいいのーネ。どうせこれが最後ーノものーニなるのデース、トトカルーチョ」

そして夜がやってくる。

約束の時間、待ち合わせ場所の灯台の麓にきたクロノスは自分が呼び寄せた人物を待っていた。

自分の下へ歩み寄ってくる足音を聞いたクロノスはそちらに振り向きながら聞いた。

「オウ。貴方が自称、闇の決闘者ネー」

「早速ギャラの話だ。私のギャラは一律、依頼人にどんな事情があるうと関係ない。必ず依頼人の給料3ヶ月分」

そのタイタンの言葉にクロノスは少し顔を引きつらせた。

「めちやくちや依頼人の事情ーと関係ある気がするー」

しかし、何だ。給料3ヶ月分とはどうしてそういうことに至ってそうだったのか説明して欲しいところである。指輪の話でもあるまいし。

「まあ、いいでしょう。それより本当に二大丈夫なんですよーネ？」そのクロノスの疑問の声にタイタンは答える。

「私はプロだ、決して敵に背中は見せない」

そう言うや否や、体の向きを右に変えた。

なぜならクロノスがタイタンの背中に回り込もうとしたからだ。

クロノスとタイタンはそれを3度ほど続けるとタイタンが口を開いていった。

「私に任せる。お前は決闘が終わった頃に来るがいい」

そう言うと、クロノスの方を向いたまま、バックしてこの場を去ったのだった。

「背中、見せネエー。フツ、プロフェッショナルーネ」

確かに背中を見せないプロフェッショナル、タイタンだった。

「でも隼人が来たがるなんて以外だよな」

人気のない夜道を進む影が4つ。千影、十代、翔、隼人だった。

その千影の言葉に十代も続く。

「いつもは授業に出るのもめんどくさがるくせによ」

十代のこの言葉に隼人が反論の声を上げた。

「別に俺、寝不精でも勉強が嫌いな訳でもないよお。ただあ

」

「ただ？」

「嫌なんだあ。決闘で勝つことだけの授業が」

その隼人の言葉に翔は不思議そうな顔をして隼人に聞く。

「勝つ方法以外に決闘で勉強することってあるの？」

その言葉に隼人は声を詰まらせるが、救いは意外なところから来た。

「あるよ」

誰であるう、千影だった。

「決闘はただ勝つことだけが目的じゃない。そりゃあ、勝つことは大事な目標であり、絶対に譲ってはいけないものさ。でも、勝ち負けに囚われている間は本当の意味での勝利を掴めないと私は思ってる」

千影の言った言葉を3人はそれぞれ考えながら廃止寮への道のりを歩いていくと、廃止寮に着いた。

「何かあるな、なんだ？」

その寮の近くに何かが落ちているのを見つけた十代はそこに懐中電灯の光をやると、そこには1輪の薔薇の花があった。

「こわそお。アニキやっぱり止めようよ」

予想以上に朽ち果てた寮に手向けられた薔薇を見た翔は怖気づいて十代にそう言った。

「何言つてんだよ。ここまで来て止められるかよ」

十代がそう言ったあと、枝がパキリと折れる音がした。

4人は驚き、そちらの方に懐中電灯を向ける。

そこには

「明日香」

その千影の呟きの通り、明日香が手に懐中電灯を持って立っていた。

「何で明日香がここに？」

それを見た十代はその疑問を明日香に向けるが、

「それはこっちの台詞よ。貴方たちこそ何してるの？」

逆に返されてしまった。

「ちよいと俺たちは夜の探検にね」

そう言った十代の言葉に明日香はこう返した。

「貴方たち知らないの、ここで何人もの生徒が行方不明になってるって」

明日香の言葉に十代は軽く答えた。

「そんな迷信、信じないね」

そう答える十代に明日香は説得にかかる。

「この寮の話は本当よ遊び半分で来る場所じゃない。それにここは

立ち入り禁止のほず、学校に知られたら騒ぎになるわ」

「そんなの怖くて探検なんてできないぜ」

説得も聞かず、そう言った十代に明日香は怒りながら言った。

「真剣に聞きなさい！」

その大きな声に十代はたじろぐが言われてばかりではなかった。

「なんだよ、やけに絡むな。そつちこそ質問に答えてないぜ、どうしてこんなところにいるんだよ？」

「勝手にすればいいわ」

これ以上何を言っても無駄だと思ったのか、明日香そう言うと4人に背を向けると歩き出していった。

「明日香」

その千影の呼びかけに応えた訳ではなかったが、明日香は歩みを止めてなぜ自分がここに来ているのかを4人に話した。

「ここで消えた生徒の中には私の兄もいるの」

その明日香の発言に4人は「」「」「えっ」「」「」と声を上げた。そして千影と十代は廃止寮の前に置かれた薔薇の意味を悟った。

(そうか、この薔薇は

)

( 明日香が

十代と千影が心でそう思う中、視線を元に戻してみると、もうそこには明日香の姿はなかった。

「アニキ、さつき明日香さんが言ったコト

僕、この話

は作り話だって……」

明日香の話に真実味が帯びてきたのか翔はさらに及び腰になっていた。

「まあ、入ってみりゃわかるさ」

「この眼で確かめるまで真実かどうかはわからない、てね」

その十代と千影と共に千影、十代、隼人の3人は立ち入り禁止を示すロープを跨ぐと寮の敷地内へと入っていく。

「そこで待ってるか、翔？」

未だ怖気づいて中に入らない翔に十代はそう言うと、翔はこんな夜

更けに外で1人になるほうがよほど怖いと思ったのか、

「待つてくれよお！僕も行くよお〜！！」

という言葉共に3人の後を追うのだった。

そんな4人の姿を心配そうに見ていた明日香は自分がここにいっても仕方がないと思い、寮に帰ろうと踵を返した時、自分の前に立つ大きな影に気がついた。

見上げれば、黒いコートを着た男が口元に笑みを浮かべていた。

明日香の記憶はそこで途切れたのだった。

廃止寮の中に入った4人はその内部を見回していた。

それを見た十代がこんなことを言い出した。

「埃は被ってるけどオシリスレッドの寮とは大違いだな。いっそ俺たちここに引つ越さねえか？」

その十代の発言に翔と隼人は「ゲツ！」という顔になった。

「やめてよ、アニキ。僕は絶対嫌だからね！」

翔は気味悪がりながら十代にそう言い、千影も、

「でもこれだけ汚れてると掃除とか修繕とか、住むにしても維持管理とか大変だよ」

どこかピントがずれた反対意見を上げたのだった。

そして、懐中電灯で辺りを照らしながら進んでいた隼人はこの寮の気味の悪さに口を開かずに入られなかった。

「ほ、本当にここで闇のゲームを？」

その隼人の言葉に翔は声を裏返しながら反論する。

「そ、そんなの迷信だつてヴぁー！！」

そんな2人の声を聞きながら十代と千影は壁に書かれた千年アイテムに関する記述を読んでいた。

「ほおう、千年アイテムつて7つあったんだ」

「千年パズル、千年ロッド、千年秤、千年リング、千年錠、千年眼、千年タウクの7つが存在していたが、王の冥府への旅立ちと共にこの世から消え去ったアイテム」

十代の言葉に続いた千影の言葉に3人は「「えっ!?!」「」と驚きの声を上げる。

「えっ?何??」

それを見た千影は、なぜ皆がそんなに驚いているのかわからないといった風情で3人を見た。

「なんか千影、やけに詳しいな」

その十代の言葉に千影が頷きながら応える。

「うん、知り合いの人たちが千年アイテムにちよつとした因縁があつてね　　あつ、あれ!」

台詞の途中、何かを見つけたのか千影はその先を懐中電灯で照らす。そこには『FUBUKI 10JOIN』とサインが書かれた1枚の写真が壁にかけられていたのだった。

その写真を失敬した十代たちはさらに歩を進めようとするが

『きゃああああああつ!!!』

何処からとなく聞こえた明日香の悲鳴を聞いた。

「十代、これつて!?!」

「急ごう!?!」

そのただならない明日香の悲鳴に4人は悲鳴が聞こえた先へと走り出した。

そして悲鳴の聞こえた場所に着いた4人は、明日香を探すべく懐中電灯で辺りを照らす。

「あつ!?!」

十代は何かに気がついたようで吹き抜けの2階から、1階に降りて見つけた何かの確認に行く。

それは1枚のカードだった。

そのカードを表替えして見てみると

「これは、明日香のエトワール・サイバー!?!」

明日香の持つカードだった。

そして他にも隼人が何か手がかりを見つけたようだ。

「何かを引き摺ったあとがあっちへ！」

隼人の指差した先には坑道のような道があり、確かに何かを引き摺ったあとが見て取れた。

それを確認した4人はその道を走っていくのだった。

そして、その道を抜けた4人が見たものは、棺に入ったまま眠り続ける明日香の姿だった。

「明日香!!」

そんな明日香を見た十代は大声で明日香の名前を呼ぶが、それに応えたのは明日香ではなかった。

「この者の魂は、最早深き闇に沈んでいる」

「誰だ!？」

その声を聞いた十代たちはその先へと視線を向ける。

そこには黒いコートの男、タイタンが佇んでいた。

「ようこそ、姫宮千影に遊城十代」

いきなり自分たちの名前を呼ばれた千影と十代はタイタンに向かって口を開いた。

「貴方は誰です!？名を名乗りなさい!!」

「明日香にいったい何をしたんだ!？」

その2人の言葉にタイタンは名乗りを上げた。

「我が名はタイタン。闇のゲームを操る、闇の決闘者」

「ふざけんな!闇のゲームなんてあるわけないだろう!!」

タイタンの発したその言葉に十代は否定の言葉を放つ中、千影は思考の海に沈んでいた。

(まさか、千年アイテムが残っていた!?いや、墓守の一族や瀬人さんの話によれば、この世にあるはずがない

でも光のピ

ラミッドという千年パズルに対を成す別のアイテムもあると聞いたじゃあ、千年アイテムとは別のアイテムも彼は持っている!?なら、確かめるのみ)

千影はその結論に行き着くとタイタンを見る。

「ふふうん、試してみればわかるだろうよ、小僧。ここは何人も踏

み入ってはならぬ禁断の領域。我はその誓いを破るものに制裁を下す」

「ならば試みましょう。その闇のゲームとやらを」

そして、自分のバックパックから決闘盤を取り出し、装着すると横の十代に囁いた。

(十代、私があいつの相手をするから、その際に明日香をお願い)  
(おう、そつちも気をつけるよ)

そして、千影はタイタンと対峙する。

「後悔するなよ、小僧」

「できるものなら」

互いに決闘盤を起動し、準備は整った。

「決闘っ!!!」

タイタンLP4000

千影LP4000

「先手を取らせてもらおう、ドロー。私はインフェルノクインデーモンを攻撃表示で召喚」

インフェルノクインデーモン      4      ATK900      DEF1500

「デーモンデッキか」

それを見た千影はタイタンの使うデッキを見抜く。

「このカードがフィールド上に存在する時、デーモンと名のついたモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップさせる」

インフェルノクインデーモン      4      ATK1900      DEF1500

タイタンのデッキを見抜いた千影は次にタイタンが打ってくる一手



を考える。

（デーモンデッキはその強力なモンスターを維持するためにスタンバイフェイズ毎にライフポイントを捧げねばならない。しかしあのカードがあれば

「ふうん。その顔、私が何を狙っているのかを測っている顔だな。

しかし残念ながらお前の考えどおりだ、手札からフィールド魔法発動！」

しかし、千影の表情から何を考えているのかを読み取ったタイタンが発動したカードが辺りに光を撒き散らし、その場をさらに不気味な伏魔殿へと変えたのだった。

「やはり、これは!？」

予想が的中した千影にタイタンは冗談めかしながら言った。

「さしずめ、地獄の1丁目といっておこうか。お前の考えどおり、私は万魔殿 - 悪魔の巣窟 - を発動した。このカードによりデーモンデッキを維持するためのコストは発生せず、デーモンと名のついたモンスターは戦闘以外で破壊された時、転生する能力を得るのだ」  
一頻り説明した後、タイタンは笑みを浮かべてターン終了を宣言する。

「さあ、お前のターンだ」

その言葉を聞いた千影は横目で十代を見る。

それに十代は頷くと、一気に明日香の元に走る。

「おうっと、そうはさせん」

しかし、そのタイタンの言葉と共に明日香が眠っていた棺が閉じようとしていた。

「明日香ーっ!!」

十代は叫びつつ明日香の棺に飛び込むと、そのまま棺が閉じ、いくつもの触手が棺に絡み付いて地面に引きずり込んだのだった。

「アニキ!？」

「明日香さん!？」

その光景を見た翔と隼人は2人の名を叫んだが、明日香は勿論、十

代からも返事は返ってこなかった。

「汚いぞ！」

「卑怯者……！」

隼人と翔はタイタンを睨みつけるとそう叫んだが、タイタンは何処吹く風といった風情で言った。

「何とでも言え。これが闇のゲームだ。何ならお前たちも消してやるるか……！」

そのタイタンの言葉に翔と隼人は怖気づくが、その2人に千影は2人のほうを振り向いていった。

「大丈夫、仮にこれが闇のゲームなら私が勝てばいいんだから」

そう言うと、千影はデッキへと手を伸ばした。

「私のターン、ドロー！」

手札に加えたカードを見た千影は考えをめぐらした。

（明日香は十代に任せよう。どうやら十代には精霊の加護があるみたいだから大丈夫。問題は私のほう、手札のモンスターはLOVサーヴァント・ケルベロスのみ。攻撃力が低くて相手のモンスターを戦闘では破壊できない　ならば）

「私はLOVサーヴァント・ケルベロス-を守備表示で召喚！」

LOVサーヴァント・ケルベロス-      3      ATK1400      DEF700

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド！」

（このカードのデッキからのモンスターサーチ能力で現状を打破できるカードを持ってくるしかない！）

そしてタイタンのターンがやってくる。

「私のターン、ドロー。ジェノサイドキングデーモンを新たに召喚！」

ジェノサイドキングデーモン      4      ATK2000      DEF15

00

「ジエノサイドキングデーモンは自分の場にデーモンと名のついたモンスターがいなければ召喚できない。だが、私の場にはインフェルノクインデーモンがいる。そしてインフェルノクインデーモンの効果でジエノサイドキングデーモンの攻撃力アップ！」

ジエノサイドキングデーモン      4    ATK3000    DEF1500

それを見た千影は驚きの声を上げた。

「4モンスターで攻撃力3000!？」

「喰らうがいい、我がデーモンたちの怒りを！ジエノサイドキングデーモン、ケルベロスに攻撃！！炸裂！五臓六腑！！」

己が胸を開き腸を虫に変えたジエノサイドキングデーモンの攻撃がケルベロスに襲い掛かり、ケルベロスを破壊する。

その破壊を見届けた千影はケルベロスのモンスター効果を発動する。  
「LOVサーヴァント-ケルベロス-のモンスター効果！このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のLOVサーヴァントと名のつくモンスターを攻撃表示で特殊召喚できる！」

しかし、それは適わなかった。

「甘いわあ！ジエノサイドキングデーモンの特殊効果は戦闘で破壊したモンスターの特殊効果を無効にする！！よってえ、ケルベロスの効果を無効化あ！！」

「そんなことはわかっている、本命はこっちだ！リバーズ罠、サーチアイ発動！！」

しかし、そんな事は先刻承知だったようで千影は伏せていたカード、サーチアイを発動。目玉のような機械仕掛けの施設が出現した。

「なに!？」

「このカードは戦闘によつてモンスターが破壊された時発動、デッキが手札から4以下のLOVサーヴァントと名のついたモンスター1体を特殊召喚できる！私はデッキからLOVサーヴァント・コカトリス-を守備表示で特殊召喚！！」

LOVサーヴァント・コカトリス -      2      ATK1000      DEF300

千影の言葉と共に1羽の怪鳥が姿を現した。

「はっ、そんな雑魚を出したところでなんになるというのだ。インフェルノクインデーモンでコカトリスを攻撃！」

「そうはいかない、LOVサーヴァント・コカトリス-のモンスター効果！このモンスターが召喚された時、相手モンスター1体を選択し、このカードが表側表示でフィールド上に存在する限り選択されたモンスターは攻撃も表示形式の変更もできない！！私が選択するのはインフェルノクインデーモン！征け、コカトリス！石化ガス！！」

しかし、タイタンはそれを見てもなお、不気味に笑っていた。

「ふっはは。それさえも無意味であるということを知れ。コカトリスの効果にチェーンしてインフェルノクインデーモンの特殊能力を発動する！」

そのタイタンの言葉と共に1から6の数字が書かれた珠が6つ出現した。

「インフェルノクインデーモンの特殊能力、それは相手の効果対象になったときサイコロを1度振り2から5が出た時、その効果は無効にしカードを破壊する。この決闘ではサイコロの代わりにこのルーレットを使用する。さあ地獄のルーレットよ、奴の運命を乗せ廻り始めえよ！」

廻り始めたルーレットを隼人と翔はどの数字が出るかを見守っていた。

「2か5ができればせつかく出したモンスターが破壊される」

「確率は3分の1、確率でいえば千影君のほうが有利だけど・・・」

しかし無常にもルーレットの目は2を示した。

「出た目は2、よってコカトリスの効果は無効、そして破壊！」

「コカトリス！！」

千影の場にいたコカトリスは闇に飲まれて消えていったのだった。

「まだまだぞ、戦闘続行！インフェルノクインデーモン、プレイヤーへ直接攻撃！！」

インフェルノクインデーモンが放った炎が千影を焼く。

「うっ、くうう！」

千影LP2100

「さあ、闇のゲームの恐ろしさを味わって貰おうか」

タイタンはその言葉と共にポケットからあるものを取り出した。

それは

（馬鹿な、千年パズルだつて！？）

そう、かつて武藤遊戯が所持していた千年アイテムの1つ。パズルを完成させたものの願いを1つ叶えるという闇のアイテムだった。

しかし千影は人づてではあるが千年パズルがこの世にはもうないことを知っている。

（千年パズルそのものでないとするならば、あれは千年パズル、光のピラミッドに続く第3の千年パズルとでもいうのか！？）

千影がその考えに至った時、タイタンの持つ千年パズルが光を放った。

「消えていく、お前の体が。ライフポイントの減少と共に消えていく」

そして光が治まった時、千影の体を見た翔と隼人が驚きの声を上げた。

「千影君！」

「千影っ！」

その叫びに千影が自分の体を見てみると、確かに体の1部が消えていたのだ。

「ふっふふ、小僧言っただろう。すでに闇のゲームは始まっているとなあ」

千影はこのことに戦慄を受けながら呟いた。

「まさか、本当に闇のゲーム……」

しかし、それだけでは終わらなかった。

「立ち込めてきた黒い霧が、重く黒い霧が、お前たちを包みこむ。

苦しいだろう」

そのタイトンの言葉に翔と隼人は苦しそうに喉を押さえた。

「なんだあ、この息苦しさは」

隼人のその言葉にタイトンは満足しながら答えた。

「これが闇のゲームのプレッシャーだ。貴様たちの足はもう動かず、誰もこのゲームから逃げることは出来ない」

その言葉に翔は足を動かさそうとするが、

「本当だ、足も動かない！」

タイトンの言葉通り動かなかった。

「ふっはは、もがけ苦しめ。しかしその苦しみさえも懐かしいと思うときが来る。闇のゲームの敗者に待ち受けるものは永遠の闇だからなあ」

しかし、千影は何かしらの違和感を感じていた。

（何だ 実際闇のゲームを体感するのは初めてだけど、何かが違うと私の中の何かが叫んで止まない。なぜ？）

その何も言葉を発しない千影を見て満足に思ったのかタイトルは自分のターンエンドを宣言する。

「私のターンは終了だ。さあ小僧、貴様のターンだ！」

（この違和感気になるけど、今は決闘に集中だ）

未だに感じる違和感を無理やり抑えこんだ千影はデッキに手を伸ば

す。

「私のターン、ドロー！」

その引いたカードを見た千影は「よしっ」と頷く。

「私はL o Vサーヴァント・ケイロン - を攻撃表示で召喚！」

L o Vサーヴァント・ケイロン -           4   ATK1600   DEF  
1400

千影が召喚したのは馬の下半身に人間の上半身も持ち、その身を甲冑で固めた騎士だった。

「このカードは通常召喚でしか召喚できないモンスターだけど、もう1つのモンスター効果を持つ。それは自分の墓地からカード3枚を除外することで相手の場の表側表示のモンスター1体を破壊する効果！私は墓地にあるケルベロス、コカトリス、サーチアイの3枚をゲームから除外し、ジェノサイドキングデーモンにケイロンの効果を発動する！征け、プレッシャースタンプ！！」

ケイロンがジェノサイドキングデーモンを破壊しようと迫る。

しかしタイタンはそれを余裕の笑みを持って迎える。

「ふっはは、ジェノサイドキングデーモンにもインフェルノクインデーモンと同じ効果がある。さあ廻れ、運命のルーレットよ」  
そして再びルーレットが廻り出した。

「効果が通る確立は3分の2、今度こそ！」

しかし、翔のその期待は裏切られることになる。

なぜならルーレットの目は5に止まったからだ。

「ふっははは！再び運命のルーレットは私に味方した。これで破壊されるのは小僧、貴様のモンスターだ！」

そのタイタンの言葉と共にケイロンもまた闇に吞まれて消えてしまったのだった。

「くっ、コカトリスに続いてケイロンまで……」

「これで貴様の場のモンスターは全て消えた、どうする小僧」

ケイロンまでもルーレットの効果で破壊された千影は次の手を考える。

(こつも幸運の女神が向こうに微笑むのなら、幸運の女神の出番をなくすしかない)

「私はカードを1枚伏せてターン終了」

その消極的な千影の手にタイタンは愉悦の表情で言った。

「結局お前はこの2ターン、私に与えたダメージは0。そろそろ決着を付けようではないか。私のターン、ドロー！この2連撃で決まりだ、ジェノサイドキングデーモンでプレイヤーに直接攻撃！炸裂！五臓六腑！！」

しかし、それを「待つてました」といった表情で千影は迎え撃った。  
「させない！リバーカード、オープン！聖なるバリアー・ミラーフオースー！！これで相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊させる！！」  
それを見た隼人と翔は喜びの声を上げた。

「上手いぞ！これなら対象を取らない全体破壊だから、ルーレット効果は発動しないんだな！！」

「やったよ！千影君！！」  
ミラーフオースの聖なる輝きがタイタンの場のモンスター全てを破壊しつくす。

「ぬっ、くう！しぶとい奴め。しかし私の勝利は揺るがない。私はデスルークデーモンの特殊効果を手札から発動！ジェノサイドキングデーモンが破壊され墓地に送られたとき、このカードを手札から墓地に送ることで、ジェノサイドキングデーモンを復活させることができる！！」

ジェノサイドキングデーモン      4      ATK 2000      DEF 1500

そして再びタイタンの場にジェノサイドキングデーモンが姿を現し



たのだった。

「さらにフィールド魔法、万魔殿の効果発動！戦闘以外でデーモンが破壊された時、破壊されたデーモンの よりも低いデーモンと名のついたモンスター1体をデッキから手札に加えることが出来る！さらに未だ戦闘フェイズは有効だ！！ジェノサイドキングデーモン、プレイヤーへ直接攻撃！！」

ジェノサイドキングデーモンの攻撃が千影を襲い、千影は顔を苦痛に歪める。

「うっうっ！！」

千影LP100

「ほう、持ちこたえたか。しかし小僧、貴様のライフが減ったことですさらに貴様の体は消える」

そう言い、ポケットから出した千年パズルが光を放つと、千影の体はさらに消えた。

それを見た翔は悲鳴を上げる。

「ああ！千影君の右腕が！！」

しかし、その翔の悲鳴を聞いた隼人はいぶかしむ。

「えっ？右足、だろ??」

2人は見えているものの違いに互いの顔を「「えっ!?!」」と見合わせたのだった。

隼人と翔が驚く中、千影は心の中で次に自分はどうすべきかを考え始めた。

（私の残りライフポイントは100、相手の場には未だジェノサイドキングデーモンが1体。それにさつき万魔殿の効果で手札に加えたカードはおそらくデスルークデーモン、このことを考えても相手は最低でも1回はジェノサイドキングデーモンを蘇生可能ということ。とにかく次のドローで何とか現状を打破できるカードを引くしかないか

）

「私のターン、ドロ―！私は強欲な壺を発動し、カードをさらに2枚ドロ―する！！」

そして新たに加わったカードを見ると1つ頷く。

「私は手札から魔法カード、二重召喚発動！チューナモンスター、LOVサーヴァント・クアール・とLOVサーヴァント・イフリート・を攻撃表示で召喚する！！」

LOVサーヴァント・クアール・	2	ATK1000	DEF0
LOVサーヴァント・イフリート・	4	ATK1900	DEF700

「そして 4、LOVサーヴァント・イフリート・に 2、LOVサーヴァント・クアール・をチューニング！」

雷を纏った獣と炎の魔人は星になり、新たな姿を現す。

「煌く星が、集いてここに唄を紡ぐ。唄い手よ、顕現せよ！シンク口召喚！汝、死者に唄う魔鳥LOVサーヴァント・セイレーン！！」

LOVサーヴァント・セイレーン・	6	ATK2100	DEF1800
------------------	---	---------	---------

翼の腕をはためかせ、美しい唄声で人を死に引き摺りこむ魔鳥が千影の元に顕現したのだった。

「カードでの効果破壊が万魔殿の発動トリガーになるのなら、戦闘破壊するまで！征け、セイレーン！ジェノサイドキングデーモンを攻撃、ストームトラップ！！」

セイレーンが放った風はジェノサイドキングデーモンの手前で一端消えるが、数瞬後上昇気流の嵐となってジェノサイドキングデーモンを空中に押し上げ風が切り裂いたのだった。

「ぬ、ぐわぁ！」

「この瞬間、セイレーンのモンスター効果発動！戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

その言葉を聞いて驚いたのは隼人と翔だった。

「こ、この効果は!?!」

「十代のフレイルム・ウィングマンと同じモンスター効果なんだな!」

2人が驚く中、セイレーンが唄い始める。それは破壊したモンスターに向けて送られた鎮魂歌のようだった。

「ぐわあああああ!ぬおおおおお!」

その唄がタイタンを苛む。

タイタンLP1900

タイタンは耳を塞ぎ、そのダメージに耐え切った。

そして、ダメージと共にタイタンの体も消えていくが

「消えたの右手だよな?」

「左、だろ??」

またも翔と隼人の間で食い違いが起こった。

「さつきから、見えてるもの違うくないツスか?」

「どういうことだ?」

その翔と隼人の言葉を聞いた千影は考える。

(2人で見えているものが違う?本当に体が消えるなら、食い違いはないはず。それにこの違和感)

「だが、この程度なら私のデーモンは不滅。再び手札のデスルークデーモンを墓地へ送り、三度甦れ!ジェノサイドキングデーモン!」

ジェノサイドキングデーモン 4 ATK2000 DEF1500

( ならばやはりあの人がもつ千年アイテムは  
 )  
タイタンがジェノサイドキングデーモンを甦らせる中、その考えに至った千影は確認のために2人に声をかける。

「翔、隼人、私の体はどこが消えてる？」

その言葉に隼人は答える。

「えっ、左腕と右足なんだな」

それを聞いた翔は驚きの声を上げる。

「えっ！？逆でしょ！？」

2人の証言を聞いた千影は笑みを浮かべる。

「なるほど、やはりそういうことか」

千影のその言葉に翔と隼人は頭の上に？マークを浮かべる。

「タイタン、貴方のペテンを今暴く！」

その千影の宣言にタイタンは驚愕の表情になる。

「何っ！？」

「私は手札より魔法カード、シンクロキャンセルを発動！この効果により、セイレーンをクアールとイフリートに戻す。そして、イフリートにクアールを再びチューニング！！」

2体のモンスターは再び星になる。

「煌く星が、集いてここに輝きとなる。輝きよ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、輝ける守護鳥L o Vサーヴァント・ガルーダー！！」

L o Vサーヴァント・ガルーダ -            6    A T K 2 0 0 0    D E F  
1 0 0 0

そして輝く鳥が、赤い羽を持つ守護の鳥が千影のもとへと降り立ったのだった。

「だから、何だというのだ！そんなモンスターを召喚したところで私が闇の決闘者でないことの証明にはならんわあ！！」

「否、この子がそれを証明してくれる！L o Vサーヴァント・ガルーダ - のモンスター効果は守備表示でシンクロ召喚された時、ファイ

「ルド上の全ての魔法・罨カードを破壊し、破壊した相手の魔法・罨カード1枚につき、私のライフポイントを1000回復できる！私は守備表示で召喚したため、効果発動！征くよ、ホールドフェザー！！」

千影の言葉と共にガルダが放った赤い羽の大群は全てのフィールドに降り注ぎ、唯一場に存在していた魔法カード、万魔殿を完膚なきまでに破壊したのだった。

千影LP1100

「さあ、守護の鳥の輝きの前に闇が晴れる！これが真実だ！」

ライフポイントの回復と共に千影はそう宣言した。

重苦しい黒い霧は晴れ、息苦しさは確かに感じなくなっていた。

「くそう！これを見る！！」

その言葉にタイタンは慌てて千年パズルを掲げる。

千年パズルは光り始めようとするが、

「おっと、貴方とその偽者に相応しいカードを差し上げよう！受けとれ！！」

千影の放ったカード、闇・道化師のペーテンが千年パズルに突き刺さる。

「しまった！！」

すると消えていた千影の体が元に戻る。

「やはり。その偽者が発した光と万魔殿のカードが作り出す雰囲気、そして貴方のその独特な喋り方。私たちに暗示をかけてたか」

その千影の言葉に翔と隼人は「えっ？」という顔になった。

そんな2人に千影は偽の千年パズルに突き刺さったカードを指差しながら言う。

「貴方はそのカードの通り、人をペテンにかけるのが本職の奇術師かそれに準ずる何か。そして奇術師ならば体が消えてみせるようなトリックもルーレットが当たるようなイカサマもお手の物ってどこ

る、違うなら弁明してみなさい」

「違う！私は闇の決闘者、千年パズルを持つ闇のゲームの使い手なのだ！！」

千影の言葉にタイタンは偽の千年パズルを振りかざしながら叫んだのだが、それが墓穴を掘ることとなった。

「貴方の手に持つそれが千年パズルだと？」

「そう！これこそが千年アイテムの1つ、千年パズルだ！！」

千影の問いにそう答えたタイタンに千影は口元に笑みを浮かべた。

「残念だけど、もうこの世に千年パズルは存在しない」

その言葉にタイタンは驚きの声を上げた。

「なんだと！？そんなデタラメを！！」

「私の知り合いに千年パズルを始めとした7つの千年アイテムが、人の手の届かないところに落ちていくのを見届けた人たちがいる。

初め私はそれを別のアイテムだと思っていましたが、あなたがそれを千年パズルだと断言してくれたおかげでそれが贗作だということがはつきりわかった！やはりあなたはそのカードの通りのペテン師だ！！」

そう千影に断言されたタイタンはたじろいだ。

「くぬう！私の仕掛けが効かない以上、貴様と決闘を続けるなど無意味なあことお！！」

そう言くとタイタンは偽の千年パズルを地面に叩きつけて、中に仕込まれた煙幕を撒き散らし逃走を図る。

「逃がしはしない！決闘でペテンなど許されることではつ！?!?!?」

それを見た千影はタイタンの逃走を阻止しようと走り出すが、いきなり蹲って眸に右手を当てた。その双眸は紅蓮の如き炎に燃えていたのだった。

(なに、これ・・・眼が・・・熱い・・・それにこの感覚は

千影が得も知れぬ眼の暑さに蹲る中、蛇のオブジェの口が光だし、

地面に光でウジヤト眼が描き出された。

しかし、暫くすると眼の熱さも引いた千影は立ち上がると周りを見る。

黒い霧が立ち込め、それが千影とタイタンを包み込む。

(これは、まさか本当の！)

「ぐおおおおおつ!!」

霧は闇色の球体となって2人を閉じ込めたのだった。

「千影君!?!」

「千影っ!?!」

そして、その光景を見た翔と隼人に出来たのは千影の名を叫ぶことだけだった。

閉じ込められた闇の中で千影は眸を爛々とした真紅に燃やしながら辺りを見た。

「これは闇のゲーム。ここの怪談話は本当だったということか

」

そう呟いた千影にタイタンは叫び声を上げた。

「なんなんだ、これは! 貴様、一体何をした!?!」

「本当の闇のゲームが発動したただだよ、おそらくはね」

その千影の言葉と共に、この空間に小さな黒い化け物たちが降り注いで来た。

「く、くく、来るなあ! 助けっ

」

その黒い化け物たちを集られたタイタンは最後まで言葉を発することとはできなかつた。

なぜなら、その口に黒い化け物たちが殺到したからだ。

しかし、千影にはなぜか黒い化け物たちは近寄ってこず、遠巻きに千影を見ているだけだった。

否

「私を恐れている?」

そう、どの黒い化け物も千影の紅蓮に輝く真紅の双眸を見ると近寄

るのを止めているのだ。

まるで、小動物が百獣の王に近寄らないように。

そうこうしている内にかかなりの量の化け物を呑み込んだタイタンは、虚ろな眼で千影を見てきた。

「さあ、姫宮千影。彼の地の王の血を引く者よ、本当の闇のゲームを始めよう」

「闇のゲームが発動したからには決着がつくまでは逃げられないからやるしかないけど、彼の地の王とはいったいなんだ？」

タイタン　すでにタイタン本人の意志があるかどうかは定かではないが　　の発した言葉にあった、彼の地の王。その

言葉に懐かしさを覚えた千影はそうタイタンに聞いた。

「ふん、貴様に教えてやる筋合いはないな。さあ決闘の続きだ」

その言葉と共にガルルダとジェノサイドキングデーモンが姿を現した。

「ならば、最低でも勝ちを頂いていく。それにまだ、私のターンは終了していない。私は手札から魔法カード、天よりの宝札を発動！この効果により、互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドロ―する！！」

天よりの宝札の効果で手札を大きく補充できた千影はそのままターンの終了を宣言する。

「ターンエンドだ」

「ふっ、私にターン、ドロ―。私はこのドロ―フェイズ終了時に手札から速攻魔法、トラップ・ブースターを発動！このカードは手札のカード1枚をコストに手札から罠カードの発動を可能にする魔法カード！！私はこのカードの効果により手札から罠カード、血の刻印を発動！！」

「血の刻印　　デーモンと名のついたモンスター1体を指定して発動し、指定したモンスターが発生するライフコストを相手にも与える罠カード」

「そのとおり！私はジェノサイドキングデーモンを選択！！そして



スタンバイフェイズ、お前にも800ポイントの維持コストによるダメージを受けてもらう」

そのタイタンの言葉通り、2人から800ポイントのライフが引かれた。

タイタンLP1100

千影LP300

「うぐうつ　　これが闇のゲームによる痛み……」

痛みに顔をしかめる千影と対照的に、大したものでもないといった風情でタイタンは手札に手をかける。

「私は場のジエノサイドキングデーモンを生贄に、迅雷の魔王・スカル・デーモンを攻撃表示で召喚する……」

迅雷の魔王・スカル・デーモン　　6　ATK2500　DEF  
1200

「行け、スカル・デーモンよ！ガルダを攻撃！！怒髪天昇激！！」  
スカル・デーモンから放たれた雷撃がガルダを襲い、ガルダを粉砕したのだった。

「ううつ、そしてこれが闇のゲームの衝撃か　　」  
初めて味わう、その得も知れぬ圧力と痛みで千影は眉をひそめた。

「私はカードを1枚伏せてターンエンドだ。1ついいことを教えてやる。私が伏せたカードはもう1枚の血の刻印。次にターンで貴様がスカル・デーモンを倒さなければ血の刻印の効果によりお前のライフは0、お前は闇に飲まれ消えることになる」

「ならばこのターンで貴方を倒す！私のターン、ドロー！！」  
新たなカードをドローした千影はこの絶望的な状況を打破するべく思考の海に潜る。

（そうは言っただけこの状況、バハムートを召喚できれば勝ちだが、

今の私の手札ではモンスターの 合計が7にはならない。それにタ  
イタンが伏せたカードは宣言通り血の刻印で間違いないだろう。タ  
イタンの言うとおり、このターンで勝負を決めなければ負けるのは  
私 ならば、賭けに出るしかない！いいな、サキュバス？  
そして、1つの打開策と共に打って出る決意を固めると、手札のサ  
キュバスに声をかけた。

《もちろんよ。早くアイツを倒して、この薄気味悪いところからで  
ましよう》

(そうだな、征くぞ！)

《イエス、マイロード》

「私はLOVサーヴァント・ワータイガー - を特殊召喚！このカー  
ドは相手の場にモンスターがあり、自分の場にモンスターがない時  
手札から生贄なしで特殊召喚することができる！！さらに手札から  
LOVサーヴァント・サキュバス - を召喚！」

LOVサーヴァント・ワータイガー - 5 ATK2100 D

EF1200

LOVサーヴァント・サキュバス - 3 ATK1500 DE

F100

「5、LOVサーヴァント・ワータイガー - に 3、LOVサー  
ヴァント・サキュバス - をチューニング！」

虎の亜人と淫魔が星となり暗闇を照らすように空を舞う。

「妖しき星が、集いてここに終末を誘う。終末よ、顕現せよ！シン  
ク口召喚！汝、終末の黒き竜LOVサーヴァント・ニーズヘッグ -  
！！」

星が弾け、中から神々の黄昏の時、飛翔すると言われる終末の黒き  
竜が降臨したのだった。

LOVサーヴァント・ニーズヘッグ - 8 ATK2400 D

E F 2 3 0 0

しかし、それを見たタイタンは笑い声を上げた。

「ふっはははははは！何かをしてくるかと思えば、スカル・デーモンよりも攻撃力の低いモンスターではないか！！」

「確かに、これ1枚ではね。でも、それだけじゃない！サキュバスの効果により、このターンのみサキュバスを素材にしてシンクロ召喚されたモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！！」

「なにっ！？」

タイタンは驚きながらニーズヘッグを見ると、ただただ凶暴だった眸に知性の光がともったのを見た。

L o v サーヴァント - ニーズヘッグ -            8    A T K 3 4 0 0    D  
E F 2 3 0 0

「それだけじゃない！ニーズヘッグはシンクロ召喚に成功した時、相手モンスター1体をゲームから除外する特殊効果を持つ！！」

「ならば、こちらもカウンター効果だ。スカル・デーモンの特殊効果発動！ルーレットの目1、3、5が出た場合、その効果を無効とし破壊する！！」

そしてルーレットが廻り出した。

「確率は2分の1、これに勝負をかける」

その千影の言葉と共にルーレットが減速、止まった数字は2だった。

「なにい！？」

それを見たタイタンは驚きの声を上げる。

対照的に千影は口元に笑みを浮かべて、ニーズヘッグの効果発動を宣言する。

「幸運の女神は私に微笑んでくれた！ニーズヘッグの効果でスカル・デーモンを除外する！！終末の咆哮！！」

ニーズヘッグの放った咆哮によってスカル・デーモンは消え去った。  
「征け、ニーズヘッグ！プレイヤーへ直接攻撃！！メテオブレス！  
！」  
「ぶるああああああああああつ！！！」  
そしてニーズヘッグが放った終末の炎がタイタンに襲い掛かったの  
だった。

タイタンLPO

決闘が終わり、膝を突いたタイタンの元に黒い化け物たちは群がり  
始めた。

「そんな、嘘だああ！本当に闇のゲームがあるとわああああ！！  
！」

そして、その言葉を残してタイタンは闇に沈んでいくのだった。

「これが闇のゲームに負けた者の末路か」

そう、呟く千影はこの空間に亀裂が入ってきている事に気がついた。

「勝敗が決すれば勝者は解放される。話どおりだったな」

そして、音と共に闇が割れ、千影は元の世界に帰還を果たすのだっ  
た。

十代、翔、隼人が闇色の球体を心配そうに見つめる中、球体が音を  
立てて割れ、そこから千影が姿を見せた。

「千影！」

「大丈夫ツスカ！？」

「よかつたんだな」

その姿を見た十代、翔、隼人は千影の元に駆け寄ってきた。

「皆、ただいま」

にこやかに笑う千影の双眸は元に戻っていた。

千影は明日香を支えて立つ十代を見ると、微笑みつつ言った。

「明日香、助けられたんだね」

「ああ、一瞬だめかと思ったけどハネクリボーが助けてくれたんだ」  
そう頬を掻きつつ応える十代に千影はやはりと言った顔で十代を見た。

「やっぱり十代にも精霊が見えるんだ」

「もってことは、お前も見えるのか！？千影！？」

その会話に翔と隼人は不思議そうにしていた。

そんな2人を尻目に詰め寄る十代を千影は手で制しながら3人に言った。

「とにかく、ここから出よう。明日香の様態も一応診ないといけなし」

千影の言葉に3人は頷くと廃止寮から出て行こうとするとき、「そう言えば」と翔がタイタンのことについて聞いてきた。

「アイツはどこいったの？」

その質問に千影は本当のことを言おうとしたが一瞬考えた。

（闇のゲームは本当に恐ろしいものだった。知らぬままで済むのがやはりいいことなんだろうな。ここは

「決闘に負けて帰って言ったよ」

と嘘をついたのであった。

鳥のさえずりと開けていく東雲に明日香は身じろぎしながら眼を開けた。

それを見た十代は喜びの声を上げた。

「おう、気がついたのか！」

その大声によつて一気に覚醒した明日香は、自分の周りに十代、千影、翔、隼人がいることに驚きの声を上げた。

「貴方たち、どうしてここに！？」

「悪かったな、変な目にあわせて。でも安心しろよ、お前を襲った変な奴は千影が追っ払ったぜ」

十代その言葉に明日香は昨晚の記憶が甦る。

「貴方が？」

千影が助けてくれたと思った明日香は千影のほうを向くが、千影は首を振って答えた。

「黒いコートの子と戦ったのは私だけど明日香、君を助けたのは十代だ。棺に閉じ込められそうなきも身を挺して君を救おうとしてくれた」

その千影の言葉に明日香は驚きつつ十代の方を向く。

明日香がこちらに向いたのをちょうどいいと思ったのか、十代はポケットとバックパックから2つのものを取り出し、明日香に渡した。「ん、別に気にするなよ。それと、コレ。と、コレ」  
それは

「エトワール・サイバー！それにこれは

兄さん！」

落ちていた明日香のエトワール・サイバーと寮の中で見つけた天上院吹雪の写真だった。

「間違いない、これは兄さんのサイン。兄さんはいつも洒落て天上院の天を数字で書いてた」

「ごめんな、コレしか手がかりが見つからなくてさ。兄さんの話を聞いて少しでも役に立てねえかなあって思ってたさ」

そういつつ頭を掻く十代を明日香は驚きの表情で見た。

「それじゃ貴方、わざわざその為に!？」

そこで黄金の卵を産む鶏の鳴き声が学園中に響き渡った。

それを聞いた十代は立ち上がった。

「ヤヴァイ、皆がおきだす前に戻ろうぜ！」

「そうだね、早く戻ったほうがいいね」

その千影の言葉と共に明日香を除く4人が立ち上がると明日香に別れを告げて帰路に着くのだった。

(遊城十代

お節介な奴)

十代たちの後姿を見送りつつ明日香は十代が持ってきてくれた写真を眺めて、微笑を浮かべたのだった。

千影や明日香たちが帰った後に廃止寮に響く足音が1つ。

「今頃、遊城十代か姫宮千影のどちらかーが、コテコテーになっているはず。んっふふふふ」

お約束どおりクロノスだった。

そして寮内を見回るが、誰もいないことを確認したクロノスはタイトルが失敗したことを悟った。

「誰もいない！さてはあの野郎、失敗しなの一ネ！！」

しかし、懐中電灯で照らした床にあるものを見つけて、それを手に取る。

「んっ？領収書、クロノス・デ・メデイチ様。金は払ってないけど貰ったとかアラビアータ」

こうして、今回の1連の闇のゲーム騒動は千影のみが真実を知るまま新たな朝を迎えたのであった。

## 第6話【DA学園篇】（後書き）

十代、明日香の胸キュンポイント+10の回。今回は闇のデーモンデッキ、ハネクリボーの奇跡の回をお送りしました。

いつものジレンマですが今回もタイタンに千影か十代どっちを闘わせるかすんごい悩みました。

そこで、タイタンと闘う騎士を千影が、明日香を助ける王子様を十代にやらせることで十代×明日香のフラグを建てさせていただきました。

今回の最強カード『LOVサーヴァント-ガルーダ-』

6 ATK2000 DEF1000 光属性 鳥獣族 シンク

ロ効果モンスター

このモンスターが守備表示でシンクロ召喚された時、全てのフィールド上の全ての魔法・罫カードを破壊することができる。この効果で破壊した相手の魔法・罫カード1枚につきライフポイントを1000回復できる。

守備表示でのシンクロ召喚との制約はありますが大嵐の効果と、破壊した相手の魔法・罫カード1枚につき1000ポイントのライフ回復と破格の能力を持つ使い魔です。

しかし、守備表示なのでこのモンスターだけではフィニッシャーにならないのが惜しいところ。

しかし、他のアタッカーのお供や、シンクロキャンセルでの再シンクロ召喚でのアタッカーに繋げるといった幅広い戦略も打てるおいしいカードとなっております。



## 第7話【DA学園篇】

特待生の廃止寮での件から数日後の未明、明日香は灯台の元に来ていた。

待ち合わせていたのか暗い夜の霧の中、そこには先客がいた。

「亮」

それは、このデュエルアカデミアの『帝王』、丸藤亮だった。

明日香はその亮の元に歩み寄ると、亮が霧と闇で見えもしない遙か彼方を見ながら口を開いた。

「夜明けは遠そうだな」

その夜明けが何を意味するのか。それはこの2人しか知らない。

「ええ、でも明けない夜はない。そう信じてる」

霧と闇に遮られて、見えぬその先に明日香と亮は何を見ているのか。

未だに夜明けは遠かった。

日が昇ったその朝、軍用の車両が一路、オシリスレッド寮に向かって進んでいた。

その車両がオシリスレッド寮の前に停止すると、荷台から屈強な男たちが降りてオシリスレッド寮の階段を登っていく。

「誰ですのにや〜？廊下を走っただめ〜、床が抜けるにや??？」

その足音に眼を覚ました大徳寺が眠たそうにして外に出てみると信じられないものを目にした。

それは濃い緑の制服とベレー帽、そして制服と同色のマントを羽織った人物だったからだ。

「泣く子も黙るアカデミアの倫理委員会！？睨まれたら退学間違いなしの方々がどうしてうちの寮に?!?!？」

眠気も吹っ飛ぶくらいの信じられない者たちの訪問だった。

大徳寺が倫理委員会の訪問に仰天しているうちに、その倫理委員会の面々は目的の部屋へと歩を進める。

そこは

未だに鼾をかいて夢の中にいる十代たちの部屋だった。

そんな大それた人たちが自分たちの部屋を目指していることは露知らず、十代、翔、隼人の3人は寢息と鼾をかいて眠っている。

千影はすでに眼を覚ましていて、布団を畳み、日課のジョギングに出かけようとパジャマを脱ぎジャージに着替えようとしていたところだった。

そこに、部屋の扉を叩く音と共に大声が聞こえてきた。

「開ける、ここを開けるんだ！開ける！開ける！！」

その大声を聞いた十代たちはもそもそと布団から出てきた。

「なんだよ、こんな朝っぱらから」

十代がそう愚痴る中、手早くジャージに着替えを済ませた千影が対応に出た。

「あ。はい。今あけまーす！」

そして扉を開けた先には緑の制服を纏った倫理委員会の女性職員が立っていた。

「何か御用でしょうか？」

千影はその女性に小首を傾げて対応するが、女性は厳しい目を部屋の中に向けて言った。

「姫宮千影、並びに遊城十代、丸藤翔、お前たちを査問委員会まで連行する」

その台詞に千影、十代、翔は眼を合わせて頭の上に？を浮かべたのだった。

そして、連れて行かれた先に待っていたのは鮫島校長、クロノスをはじめとする教師陣と千影たちを連行した倫理委員会の面々だった。

そこで言い渡されたのが

「ええええええつ！退学！？」

言い渡された退学という言葉に十代と翔は声を上げ、千影も声に出さないまでも眼をパチクリと大きく開いて驚いていた。

そんな3人が驚く中、倫理委員会の女性が罪状を読み始めた。

「数日前の未明、姫宮千影以下3名は閉鎖され立ち入り禁止となっている特待生寮に入り内部を荒らした。調べはついている！」

しかし、その倫理委員会の女性の言葉に千影が反論を返した。

「確かに、私たちは立ち入り禁止を無視して特待生寮に入りました。しかし、ただそれだけの理由で退学の処分は厳しすぎるではありませんか？それになぜか特待生寮内部には黒尽くめの怪しい部外者が、とある女生徒を拉致し立てこもっていましたが私たちが撃退しました。何処の誰とも知れぬ者の侵入を許してしまい、あまつさえ生徒を誘拐されるようでは、私はこの学園の危機管理能力を疑問に思います。そのところはどうでしょうか倫理委員会殿？」

その千影の反論に含まれた驚愕の事実教師陣がざわめく中、倫理委員会の女性は激昂した。

「この学園には不審者など内部のものが手引きしなければ入ることなどできない！見え透いた嘘で逃れようとはふざけたことを！！」  
2つ隣の席のクロノスはでっかい汗をかいていたが、倫理委員会の女性はそれに気がつかず、千影の言を所詮は校則違反者の言い訳として取り合わなかった。

「しかし、それを抜きにしてもやはり退学という処分には納得がいきません。どうかご再考をお願いします」

「何でも言うこと聞くからチャンスくれよ」

そう頭を下げる千影と手を合わせる十代にクロノスは笑みを浮かべつつ言った。

「ならば、別のペナルティの方法を提案するーノ！それは制裁タッグ決闘！！」

クロノスのその言葉に十代と千影はクロノスの方を向いてクロノスが言った言葉を反芻した。

「制裁」

「 タッグ決闘」

クロノは頷きつつ話を続ける。

「そのとおり。丸藤翔、君は遊城十代か姫宮千影のどちらかとタッグを組み決闘するーノネ！決闘に勝利すれば無罪放免なノネ！」  
それを聞いた翔は驚きの声を上げた。

「ええええええっ！僕がアニキか千影君を選んでやるんツスカ！？」

翔のその言葉にクロノスは、なぜそのようなシステムにするのか説明しだした。

「姫宮千影と遊城十代は前回の試験結果が示すとおり実技トップなのーネ。この2人がタッグを組んで決闘するということは制裁の意味を成さないーノネ。そこで丸藤翔、君がどちらかを選ぶことで釣り合いを取るーノデス。もちろん負ければ連帯責任で3人とも即退学、よろしいですかー？」

クロノスの確認の言葉に、

「タッグ決闘かおもしろそうだな」

十代は握りこぶしを作り、

「機会をくれることを感謝しますクロノス先生」

千影はクロノスに向かって頭を下げ、

「ええええええええっ！2人ともそれでいいんツスカ！？」

翔は2人のこの行動に再び驚きの声を上げたのだった。

その3人のリアクションを見たクロノスは校長のほうを向いてお伺いをたてた。

「校長、当事者たちの内2名が納得したようですか？」

「ううむ、ならば仕方あるまい」

鮫島校長は悩みながらもOKサインを出したのだった。

「では制裁タッグ決闘の対戦相手と日時は追って私から発表するーノネ！」

それを聞いたクロノスは改めて、3人に向かって制裁タッグ決闘の

決定を宣言するのであった。

千影たちが解放された後、校長室に意外な人物  
隼人が来ていた。

隼人は逡巡していたが決心をつけると鮫島校長に先日の特待生寮のことを話し始めた。

「お、俺もあの寮に行つたんです。だから、俺が翔の代わりに千影か十代とタッグを組みます！」

この事を喋らなければ自分は見逃されたはずなのに、隼人は自分も退学処分を受ける覚悟で翔との交代を鮫島校長に願い出たのだった。さらに校長室にもう1人の声が響いた。

「私も現場にいました」

隼人と鮫島校長が入り口を見ると、そこには明日香が扉をくぐり鮫島校長の前まで歩み寄っていた。

「私にタッグを組ませてください」

そう宣言する明日香を横目に隼人はポツポツと喋り出した。

「俺、自分で自分のことダメだと思ってました。でも！千影や十代の決闘見てて、もう1度決闘に取り組んでみようって！！」

それはやがて大きな声になり、鮫島校長の心を大きく動かせた。

「うむ」

鮫島校長が隼人の言葉に笑みを浮かべて頷く中、明日香も再び口を開く。

「あいつらに関わると皆ちよつと変になつちやうみたいで」

その2人の話には鮫島校長は笑顔から一転難しい顔になって唸った。

「ううむ、君たちの気持ちは良くわかった。しかし丸藤君が遊城君か姫宮君のどちらかとタッグを組むことは査問委員会で決まったことなんだ」

鮫島校長のその言葉に、隼人と明日香は顔を見合わせて、どうにもならない現実には顔を顰めたのだった。

隼人が寮の部屋に戻るといきなり翔が泣きついてきた。

「僕なんかじゃだめだああああっ！絶対負けて退学だああああっ！！隼人君、僕と代わってくれよおお！！！」

その翔の言葉に隼人は辟易しながら鮫島校長から聞いた今回のタッグ決闘の大原則を話した。

「そう思っただけで、翔が必ずタッグの1人に入るとは査問委員会が決まったことで、変えられないんだなあ」

「そんなああ！？アニキと千影君のタッグなら無敵なのにいいいい！僕なんかじゃ、僕なんかじゃああああ！！！」

隼人の言葉に泣き始める翔に十代はデッキを弄りながら、何とでもなるといった口調で言った。

「心配すんな。勝ちやいいんだる勝ちや」

「でも、タッグ決闘でしょ。十代はやったことある？」

十代のデッキ弄りを見ていた千影はそう十代に聞いたが

「ないな。でも初めてだからワクワクするんじゃないか」

そう言っただけで千影に笑いかけた。

「うん、十代ならそう言うと思った」

千影も笑みになり2人で笑いあうが、全く笑えないのは翔だった。

「そんなああ！2人ともおお！！！」

その翔の叫びに十代は翔のほうを向くと口を開いた。

「俺の弟分だったら弱気を出さずにかんばれるはずだぜ」

十代はその言葉に翔は難しい顔をしたまま佇むだけだった。

そんな翔を見た千影は思い出したように言った。

「そう言えば、まだ翔がどんなデッキを使うのか知らないね」

その千影の言葉に十代が便乗した。

「じゃあ翔、決闘しようぜ。俺か千影、どっちかとタッグ組まなきゃならないんなら、お前のデッキの特性知っとかなきゃならないからな。まずは腕試しに決闘といこうじゃないか」

そう言いつつ十代は弄っていたデッキを纏めると立ち上がり、デッキを掲げたのだった。

「千影、ごめんな。俺、何もしてやれなくて」

十代と翔の決闘を見守るためにオシリスレッド寮の裏手にある浜辺を見下ろせる高台で隼人が隣に立つ千影に申し訳なさそうに言った。「気にしないでいいよ。私にはその気持ちで十分だし、それにきつと大丈夫だから」

千影が首を振りつつ言ったこの言葉に後ろから応える声があった。

「貴方がそう言うのなら本当にそうなりそうね」

その声の主、明日香は2人に歩むよりながら千影を見つめていた。

「明日香さん」

「明日香」

それを隼人は少し驚いた顔で、千影は笑顔で迎えた。

「制裁タッグ決闘決定で落ち込んでるかと思ったら、なんだか楽しそうね千影。それにあいつも」

千影と隼人の近くまで来た明日香は下にいる十代を視線に収めると安心した風にそう言った。

「多少の不安はあるけど私が決闘するからには勝つよ。まあ、翔が私を選んでくれるかどうかだけだね」

明日香の言葉に千影は苦笑しつつ応えたその台詞に明日香は千影に微笑を浮かべると再び視線を十代と翔に戻しつつ言った。

「貴方や十代と関わった人間は元気になる。きっと翔君も」

そして十代と翔の決闘が始まるうとしていた。

「遠慮は要らないぜ。腕試しなんて思わずにおもしろい決闘をやるうぜー！」

「ああ、なんであんなに楽しそうなんだろ・・・退学ほぼ決定だつていうのに・・・」

始めからやる気満々の十代とは対照的に翔は目の前の現実に楽観的になれずうな垂れていた。

「なんか言ったか？」

翔のその呟きに十代は怪訝そうな顔をするが翔は何とか取り繕った。

「な、なんでもない」

「よし、決闘っ！」

「決闘・・・トホホ」

元気に決闘を宣言する十代とは裏腹に翔は肩を落としつつ決闘を始めたのだった。

十代LP4000

翔LP4000

「俺のターン、ドロー！」

十代はその手札の内容を見て「よしっ」と頷いた。

「俺はE・HEROFエザーマンを召喚！攻撃表示！！」

E・HEROFエザーマン      3      ATK1000      DEF1000

「さらにカードを1枚伏せてターンエンド」

「僕のターン、ドロー」

翔は棒読みの口調でカードを引くが、引いたカードを見た瞬間に顔を綻ばせた。

（やった！パトロイドの攻撃力ならアニキのフェザーマンに勝てるぞ！！何事も始めが大事      ）

そう心で思った翔はパトロイドの攻撃に成すすべなく破壊されるフェザーマンと尻餅をつく十代の姿を思い描くとニヤニヤと笑い始めた。

「えへへ、あははは」

その姿を見ていぶかしんだ十代は翔に声をかけた。

「おい、翔何してんだ！」

十代のこの言葉に翔は「ハッ」となるとそのまま引いたカードを召



喚した。

残りの手札とその引いたカードの効果を確認しないまま

「パトロイドを召喚、攻撃表示」

パトロイド 4 ATK1200 DEF1200

「よし、戦闘だ！いけパトロイド、シグナル・アタアック！！」

そうかつこよく攻撃を宣言した翔だったが十代には通用しなかった。

「畏カード発動！攻撃の無力化！！」

十代の攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させるカウンター畏、攻撃の無力化の前にパトロイドの攻撃は不発に終わった。

それを見た隼人は残念そうに呟いた。

「ああ、いきなりやられちゃったんだな」

「相手が低攻撃力のモンスターを攻撃表示にしている段階で何かしらの畏と見るべきなのに」

千影も手を額に当てつつ翔の初手からの失策に、その翔の迂闊さを厳しく指摘した。

「やっぱり心配していた通りね。翔君では貴方や十代のタッグパートナーは重荷なのかも」

翔に感じていた不安が現実になったことで、明日香は横の千影を見ると、気遣うような目で再び2人の決闘に視線を戻した。

3人からそんな辛口の批評を受けた翔は、攻撃が決まらなかったことに早速落ち込んで地面に「の」の字を書いていた。

「せっかく一発かつこいいところを見せられると思ったのになあ」  
そんな姿を見た十代は、翔が決闘者として大きな見落としていることに気がついた。

「翔、ひよっとしてお前モンスターの攻撃力しか見てないんじゃないか？」

「そんなことないよ！」

その十代の言葉に翔は反論するが、十代が翔の召喚したモンスターの特殊効果を説明しだした。

「パトロイドは相手のフィールドを確認する特殊能力がある。その効果を使っていれば俺が攻撃の無力化を貼っていることを確認できたはずだぜ」

十代の的を得たこの言葉に、翔は自分の不甲斐なさを十代の八つ当たりへと変えた。

「やめてよ！アニキだからってお説教はなしだよ！！」

そんな翔の叫びに十代は驚いた。

「どうしたんだよ、翔。いつものお前らしくないな」

そこで翔は自分が八つ当たりをしたことに気がつくとすまなさそうな顔をして十代に言った。

「ごめんアニキ。僕変だよな、せつかくアニキがアドバイスしてくれているのに」

「いや、ちよっとお説教くさかったかもな。決闘者に上下なしだ、アドバイスなしでバンバン本気だしちゃうぜ！」

翔の言葉に首を振ってそう応えた十代は新たにカードをドローするべくデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー！E・HEROスパークマンを攻撃表示で召喚！！」

E・HEROスパークマン      4      ATK1600      DEF1400

「いくぞ、翔！スパークマン、パトロイドにスパーク・フラッシュだ！！」

スパークマンの放った雷の槍がパトロイドを貫き爆散させる。

翔LP3600

「うづうづ、あつ！」

翔ができたのはうめき声を上げることと、パトロイドを破壊されたシヨックで立ちすくむだけだった。

「翔に直接攻撃だ、フェザーマン！」

そして十代はがら空きの翔にフェザーマンの直接攻撃を仕掛けた。

「うわあああああつ！うがあああああつ！！！」

翔LP2600

翔はオーバーリアクションとも取れる叫び声と共に後ろに吹っ飛ばされた。

「場に1枚カードを伏せて、ターンエンド」

十代は本気モードに入ったのか真剣な目つきで肅々と自分のターンの終了を宣言した。

「トホホ、いきなし本気を出すなんて酷いよアニキ」

翔はヘラヘラと笑いながら十代を見た。

その姿に、もはや決闘者としての姿勢は見出せなかった。

そんな翔の姿を見た明日香は心配そうに翔を見た。

「早くも戦意喪失なの」

「翔」

千影も翔のことを心配げに見つめる中、隼人がいきなり大声を出した。

「きばれえええ！そんなんで落ち込んでたら1年留年の俺よりかっこわるいぞお！！きばれええ！きばれええ、翔！！！」

その声援は確かに翔の下に届いた。

「隼人君・・・いつも大声なんてあげないあの人が、あんな一所懸命に僕のことを応援してくれているんだ」

隼人の声援を受けて眸に闘志を燃やした翔は、

「その期待に応えなきゃ！！」  
立ち上がったのだった。

翔の立ち上がる姿を見た明日香は、クスリと笑いながら隼人を見た。  
「隼人君の声援でやる気を取り戻したみたいね」

その明日香の言葉に「えっ」と驚きの声を上げると照れながら隼人はポツポツと語り始めた。

「俺、自分がだめだから、だめになっちゃう人間の気持ちかわかるような気がするんだな」

「そんなことはないよ。自分の弱さを知って、それを受け入れることは何よりも難しいことだ。それができて、なお人を気かけられる君はだめな人なんかじゃないよ」

千影のその褒め言葉に隼人は照れつつも2人の決闘に視線を戻した。

「僕のターン、ドロー！」

先ほどもどとは違う力強い声で翔は新たにカードをドローした。

そして今度はちゃんと手札の確認を怠らず戦略を練る。

(手札のモンスターじゃアニキに勝てない。なら )

「手札から魔法カード、強欲な壺を発動！このカードの効果でデッキからカードを2枚ドローする！！」

そして、強欲な壺の効果でドローしたカードを見た翔は驚きと戸惑いの表情を見せた。

翔にそのような顔をさせたカードとは

(パワー・ボンド！！)

機械族のみに使え、このカードを使って融合召喚した機械族モンスターの攻撃力を2倍にする効果を持つカードを引いたのに、翔はそれに手を伸ばせなかった。

(どうしたんだ翔。よっぽどすげえカードでも引いたのか?)

そんなどこか戸惑ったような翔の姿を見た十代は翔のことを測りかねていた。

(このカードを使えば、今の状況を大きく覆すことが出来る・・・でもこのカードはお兄さんからまだ使ってはいけないと封印されているカード・・・！)

そして思い出す、過去の情景を。

あれは翔が子供のとき、いじめっ子との決闘でこのカードを引いた場面。

そのカードを見た翔は勝利を妄信し相手を蔑み、そして相手の張った罠を見通せなかったあの決闘。

兄の丸藤亮の介入で事なきを得たが、もしもパワー・ボンドを使っていれば使用したターンのエンドフェイズに特殊召喚したモンスターの元々のダメージを受ける効果で敗北。このカードを引いたことで気を大きくした翔が言った出来もしない約束

裸で校庭を逆立ちして1週

を履行しなければならぬところだったのだ。

それ以降、兄の亮にこのカードの使用を禁じられた。

翔にはなぜこのカードを封印されたのかが未だわからない。

しかし、あの優秀な兄が、自分が逆立ち下って敵わないあの兄が言うのだ。何か理由がある、そうやって翔はその理由も考えずに兄の言葉をただただ自分に言い聞かせてきた。

そして、今日も

(僕にはこのカードを使う資格がない・・・まだこのカードは封印されたままなんだ・・・！)

「手札から魔法カード、融合を発動！」

兄の真意を未だに読み取れないままだった。

「見ててよアニキ、今度は僕の融合モンスターでお返しだ！手札のジャイロイドとスチームロイドを融合！スチームジャイロイドを融合召喚！！」

スチームジャイロイド      6      ATK 2200      DEF 1600

「戦闘だ！ハリケーン・スモーク！！」

翔のスチームジャイロイドが十代のフェザーマンに煙の竜巻と共に突進、フェザーマンを粉碎した。

「ぐあああつ！！」

十代LP2800

十代はその攻撃に方膝をついた。

「どうだ、アニキ！少しは参ったか！！」

そんな十代の姿を見た翔は自信満々に言ったが

「ふっふふふ・・・あつはははははは！やっぱ決闘はこうでなくっちゃ！翔、ちよこつと面白くなってきたぜ！！」

少しも参っていなかった。

「よっしゃー！お互い本気出そうぜ！！」

「う、うん」

なにやらエンジンに火をつけてしまったみたいで翔の方がタジタジになっていた。

「俺のターンだ！ドロー！！」

十代の引いたカードは融合、そして残りの手札を確認し攻勢に移る。

「よおーし、手札から魔法カード融合を発動！スパークマン、そしてクレイマンお前たちのパワーが新たなパワーを呼び出すぜ！！」

その十代の言葉と共にスパークマンとクレイマンは頷くと空へと飛び上がり、空に暗雲が立ち込める。

「E・HEROサンダー・ジャイアントを召喚！！」

そして落雷と共にサンダー・ジャイアントがその勇姿を現そうとしていた。

ソリッドヴィジョンで映し出された落雷が響く中、明日香はポツリと呟いた。

「これで勝負は決まったわ」

その言葉に隼人は「えっ？」と声を上げる。

「どうして？まだ翔はがんばっているじゃないか」

そんな隼人に明日香はサンダー・ジャイアントのモンスター効果の説明を始める。

「サンダー・ジャイアントの特殊効果はこのモンスターより元々の攻撃力が低いモンスター1体を破壊する」

「えっ!？」

隼人が驚きの声を上げる中、千影もこの決闘の結果が見えているのか、こう言った。

「それだけじゃない、まだ十代は通常召喚が残ってる。十代の手札に他のモンスターがいればこのターンで決闘終了だ」

「それじゃあ!？」

2人のその言葉を聞いた隼人は翔の敗北を認識したのだった。

隼人が翔の敗北を認識したのと同じ瞬間、サンダー・ジャイアントはその威容を見せ付けるように空から降り立った。

E・HEROサンダー・ジャイアント      6      ATK2400      D  
EF1500

「ヴェイパー・スパークツ!!」

十代の叫びと共にサンダー・ジャイアントから電撃の雨が放たれ、スチームジャイロイドを完膚なきまでに破壊する。

「あああっ!僕のフェイバリットカードが!!」

「さらに手札からE・HEROバーストレディを召喚!」

E・HEROバーストレディ      4      ATK1200      DEF800

十代は畳み掛けるように手札のモンスターを召喚、これで勝利への準備はすべて整った。

「プレイヤーへ直接攻撃、ボルティック・サンダー！」  
サンダー・ジヤイアントの放った雷撃が翔を襲いライフポイントを奪う。

「うわあああああつ！」

翔LP200

膝を突いた翔に、十代は容赦なく止めの一撃を放つ。

「さらに直接攻撃！バースト・ファイヤー！！」

「うわつ！ぬわあああああつ！！」

バーストレディの放った炎の弾に焼かれた翔は後ろへ派手にぶっ飛んでいったのだった。

翔LP0

そんな翔に十代はガッツポーズを向けていった。

「ガツチャ！翔、おもしろい決闘だったぜ！！」

「やっぱ無理だあ。僕じゃタッグ決闘で勝つなんて無理だよあ」

十代に完膚なきまでに敗北した翔はさらに自信をなくしたのか、そう言った。

そう言う翔の下に十代は歩み寄りながら口を開いた。

「何言ってるんだ。最後は見事な散りっぷりだったけど、それまでは

紙一重の闘いだっただぜ」

「でもお・・・」

そこで十代は決闘の最中に翔が見せたあの表情が気になった。

「お前カードをドロォした時、変な顔してる。手札見せてくれよ  
そう言っと、翔が反応する前にその手札を取り上げる。

その中の1枚を見た十代は驚きの顔に変わった。

「あっ！どうしてパワー・ボンドを使わなかったんだ？もし使っていれば攻撃力は2倍、スチームジヤイロイドは4400の強力モン



スターになっていたじゃないか！」

そのことは翔もわかっただけはいた、しかし

「やっちゃんだめなんだ！お兄さんから封印されているカードなんだ  
！！」

翔は、十代から自分の手札を引く手順るようにして取り戻す。

「やっぱり僕じゃ、アニキや千影君とタッグを組むなんて無理なんだよおお！！」

そして、その言葉を残して十代に背を向けるとどこかへと走り去っていったのだった。

「翔！？」

それを見た隼人は翔を追いかけて走っていった。

その場に残された十代は翔の言っていた言葉の意味が解からずに佇んでいると、今まで2人の決闘を見守っていた千影と明日香が浜辺に下りてきた。

明日香は海を見て元気なく佇んでいる十代に声をかけた。

「いつもは楽しそうに決闘している貴方が、今日はどうしたの？なんだか冴えない顔よ」

その明日香の言葉に十代は翔との決闘で気がついたことを話し始めた。

「だってさ決闘で楽しいもんのはずだろ。だけどあいつの決闘、なんだか辛そうなんだよな」

十代の言葉に千影も頷く。

「それは見てて、こっちも感じたよ」

「それにパワー・ボンドなんてクリアカード持つてるのに、お兄さんに封印されているとかいって使おうとしないしさ」

パワー・ボンド、お兄さんという単語を聞いた明日香は「ハッ」とした顔になった。心当たりがあるのだ。

「どうしたの明日香？」

そう問いかける千影に明日香は話すか話さまいか逡巡していたが、遅かれ早かれ気がつくことだと思い、話すことにした。

「翔君にはね、本当のお兄さんがいるの。しかもこの学園にね」

その明日香の台詞に十代は驚きの声を上げた。

「そうだったのか・・・千影は知ってたか？」

十代のこの問いかけに千影は首を縦に振った。

「うん。3年のオベリスクブルーに在籍している人で、名を丸藤亮。学園トップの称号『帝王』  
カイザーの名を冠する決闘者と聞いているよ」

千影はそう言いながら確認のために明日香のほうを振り向くと、明日香も頷いた。どうやら間違いはないらしい。

「その兄貴と翔の間に何があっただんだ？」

「さあ？そこまでは私もわからないし、これは彼らの問題だからそうそう立ち入っていい問題じゃないかもしれない」

十代の疑問にそう答える千影だったが、暫く海を眺めていた十代は何かを思いついたのか握りこぶしを作った。

「よっしゃ！その兄貴と決闘してみればわかるってもんさ」

その十代の出した答えに千影も頷いた。

「そうだね、まずはその丸藤亮って人の人となりを知らないと始まらないよね」

そう言った2人を見た明日香は驚きの声を上げた。

「ええっ！？十代、さっきの話聞いてたの？それに千影も！丸藤亮は3年の」

そこから先は十代に遮られて言えなかった。

「3年のオベリスクブルーのトップでカイザーって渾名があるんだろ。やっと面白くなってきたぜ！！」

「ちょっと、十代。私もその人と決闘してみたいんだから1人で突っ走っちゃだめだよ！」

「よし！じゃあどっちが先にカイザーと決闘するか決闘で決めようぜ！！」

「臨むところ、今度はちゃんと勝たせてもらおうよ！！」

「おうよ、こっちこそこの前の借り返させてもらっぜ千影！！」

そう言い、決闘を始めた2人を見た明日香は苦笑を浮かべていたが、  
(それにしても十代、千影貴方たちって おもしろすぎる)  
心の中で愉快そうに笑うのだった。

十代vs千影の決闘は僅差で千影が勝利したことをここに追記しておく。

これでめでたく丸藤亮と決闘するのは千影と決まったのであった。

## 第7話【DA学園篇】（後書き）

今回は最強カードのコーナーをお休みしてオリジナル主人公である千影君のプロフィールを紹介します。

オリジナルキャラクター紹介

姫宮 千影（Chikage Himemiya）

イメージCV：堀江由衣

性別：男

身長：151cm

B/W/H：??（AAA）/??/??

血液型：B型

誕生日：1月1日（山羊座）

後ろで1つに結われた、プラチナのような銀の長髪とルビーをそのまま嵌め込んだような紅の双眸の持ち主。

ぶつちやけ髪の毛を下ろしたその容姿は『魔法少女リリカルなのは』の初代リインフォースを少しちっこくした感じですww

本来なら凜とした美しい感じが背丈の低さと、持ち前の天然のせいで可愛らしくなってしまう男の子。

しかし、とある条件化でのみ発動する千影の双眸が紅蓮の炎のように爛々と真紅に輝く現象により、この時だけは天然がなりを顰め本来の凜とした美しさと真紅の眸が放つ独特の神秘性を持った美しい容貌になる。

頭も非常によく、一度目にしたものを聞いたことを一言一句間違えずに覚えていられる、抜群の記憶力を有しており、さらに相手の取った戦法から、次にどのようなことを展開してくるのかを読み取る戦略眼も備えている。

決闘のセンスもずば抜けて高く、頭脳にばかり囚われずに直感が走

るとそれに迷わず従う柔軟性も持つ。

運動も得意で合気道、剣道、弓道、居合道は段持ちである。これは実家での教育係であるドウクスの鍛錬の賜物でもある。

デュエルアカデミアに来た今も、欠かさず朝のジョギングや各種の簡易式の訓練を続けている模様。

他にも料理や裁縫、掃除などのおさんどんも卒なくこなし完璧人間に見えるが、天然のスキルがちよくちよく発動することで時間や場所を間違えて遅刻したり、見当違いの発言をしたりと欠点はあるにはある。

性格もどこかおっとりとしたのんびりやであるが、基本は真面目で誠実な人間で人受けはいいが、クロノスにはあまり気に入られていない模様。

十代と同じくカードの精霊が見えるようで、見えるようになったのは誕生日のプレゼントにペガサスがシンクロモンスターとチューナーモンスターの試作品であるＬｏｖシリーズを渡されたことがきっかけで、その中の１枚Ｌｏｖサーヴァント・サキュバスとは話すことも出来る。他のカードたちとは話すことは出来ないが、千影はそのカードたちを自分の子供のような優しさでもって接し、カードたちもそんな千影に応えるべく力を預けるといって切っても切れない絆で結ばれている。

しかし、実家のことは幾つかの家訓を話したが、もっと本質的で重要なことは積極的には話そうとしない。ペガサスを小父様と呼ぶような親しい間柄だったり、千年アイテムのいきさつや闇のゲームを墓守の一族や海馬瀬人から聞いたりと、その人脈の広さから実家はかなりの富豪か、資産家のように思えるが未だ不明のまま。

そんな容姿端麗、頭脳明晰、文武両道を絵に描いたような千影はオペリスクブルーの女子を中心に人気はあつたが、女装した千影と明日香との決闘を収めた写真『姫と女王の舞闘会』により人気は一気に爆発。浜口ももえと枕田ジュンコを会長とした『姫宮千影ファンクラブ』が発足すると爆発的に会員数を延ばし、数あるファンクラ

ブの中の一大勢力まで僅か1ヶ月たらずで駆け上がった。

会員は主にオベリスクブルー女子だが、男子生徒もかなりの登録数がある。

そんな会員たちから千影は『姫』、『千影姫』と呼ばれているが、当の千影はその名を自分の苗字と名前を洒落て作った渾名だろうと勘違いしている。

なぜ、眸が紅蓮に染まるのか？実家はどのような家なのか？まだまだ秘密の多い千影だが、物語が進むに連れてその秘密は暴かれていくだろう。

## 第8話【DA学園篇】

十代との決闘を終えた千影はアカデミア内にある図書室へと足を進めていた。

「ええっと、確か　こつちか」

電子生徒手帳の地図を開きながら辿り着いた千影は早速、司書として座って本を読んでいる女生徒に声をかけた。

「あの、ちよつといいですか？」

「はい　つて千影姫!？」

声をかけられた女生徒が本から顔を上げると、自分に声をかけたのが千影であることに驚いていた。

千影はなぜ驚かれたのかわからないといった風にしてしたが、この女生徒は『姫宮千影ファンクラブ』の会員なのだ。

もちろん千影は自分にファンクラブがあるなんて夢にも思っていないし、『千影姫』という呼び方も、自分の苗字と名前を洒落てつけた渾名だろうと思いき気に留めていなかった。

「あ、あの・・・千影姫が図書室に何の御用でしょうか？」

学園の　本人非公式の　アイドルである千影に話

しかけられた緊張感から頬を赤く染めた司書の女生徒は千影の来訪の理由を聞いた。

「映像の資料だけど、学園の模擬決闘か月1試験の決闘シーンが映された資料はあるかな？」

「ありますよ。でもさすがに資料として残るのは成績優秀者の決闘のみですが　　そう言えば、千影姫のこの前の月1試験の時の映像も成績優秀者の参考資料として入ってますよ!ご覧になりますか!？」

千影の問いに司書の女生徒は頷くと、この前の月試験での千影と十代の決闘が映されたディスクを持って来ようとするが、それを千影は手で制した。

「あつ、そうじゃないんだ。見たいのには私のじゃなくて、オベリス  
クブルー3年の丸藤亮の映像なんだけど」

「カイザーの映像資料ですか？なぜまたその様なものを千影姫が

まさか、千影姫！？」

なぜ千影がカイザーの映像資料を必要とするのかわからずに首を捻  
っていた司書の女生徒が「ハッ」となつて、その使用意図を掴んだ。

「うん、実は」

「カイザーに惚れていらつしやるんですか！？」

掴んではいたが、間違つた方向で掴んでいた。

それを聞いた千影はコケた拍子に頭を机にぶつけて、額から煙を上  
げながらぶつけた所に両手を当ててしゃがみ込み、声にならない悲  
鳴を上げていた。

「いけません、殿方同士での睦事は非生産的です！！ハッ、でもそ  
れはそれで　　じゅるっ」

暴走を始めた司書の女生徒の妄想は止まらず、禁断の領域に入る  
うとしたが、それを復活した千影が止めた。

「違うよ！なんでそうなるの！！」

その大きな声が響いたが、運よく図書室には他の人間はいないらし  
く、大きく間違つた情報が人の耳に入ることはなかった。

「ハッ！私は一体何を！？」

どうやら無事に帰つてこれたようだ。

「もう、すっかり頼むよ。丸藤亮との決闘に向けて必要なだから」  
そのことを聞いた司書の女生徒は安心したように胸をなでるそう  
とするが、何かが引つかかった。

「そうですか、カイザーとの決闘に・・・決闘に　　ってカ  
イザーと決闘ですかーっ！！」

そう、千影はアカデミアトップのカイザーに挑もうと言つたのだ。

「千影姫がカイザーと！？こうしちゃいられません！！このニユー  
スを我が同志たちに伝えなければ！！」

そう叫ぶと司書の女生徒は立ち上がり、走って図書室を出て行くの



だった。

「あ・・行っちゃった・・・」

その場に残された千影は司書の女生徒の行動に？を浮かべると、重大なことに気がついた。

「映像資料がどこにあるか教えてもらってない・・・」

千影は仕方ないと思い自力で探すことにしたのだった。

千影が丸藤亮の映像資料を探しているこの時間、翔は寮の部屋で布団に包まって、手に持ったパワー・ボンドのカードを眺めていた。そのカードを眺めているとかつて兄に言われた言葉が甦る。

（お前には、まだそのカードを使う資格がない）

聞こえてくる幻聴に耳を塞ぐが、それでもなお声は聞こえ、翔を苛む。

（お前が決闘者といえる力量になるまで、そのカードを封印する）

翔は布団を頭被ると蹲った。

まるで甲羅に身を隠す亀のように。兄の言葉から逃げるように。

「そうさ。僕なんか十代のアニキや千影君のパートナーが務まるはずない！」

ネガティブな感情は悪循環を始め、さらにネガティブなヴィジョンを翔に見せる。

それは制裁タッグ決闘、自分のモンスターのコントロールを相手に奪われ、そのモンスターの攻撃で十代と千影が敗れるというものだった。

そしてそのヴィジョンの最後には自分の兄、丸藤亮が自分を蔑むような眼で見ていたのだった。

そして西が赤く染まった時間帯、寮への帰路についていた千影の顔は満足げなものになっていた。

（さすがはデュエルエリート養成機関のデュエルアカデミア。ちゃんと成績優秀者の模擬決闘や実技試験での決闘を録画してあるのは

助かったな。それを見る限り、丸藤亮という決闘者は、なにかしらの理由もなく翔にあのカードの使用禁止を言い渡す人物とは思えない。いや、それどころかあの決闘スタイルには清々しいものを感じた。やはり直に決闘してみないとわからないか……んっ?)

そう考えていると、千影は後ろに気配を感じた。気配を探ってみると

( けっこういるね。敵意は感じない　でもなんか背中がムズかゆくなるこの感覚は気持ちいいものじゃないよね。ここは )  
そう考えると千影は後ろを向きつつ言い放った。

「あのー、後ろからついてくる皆さんは私に何か用でもあるのですか?」

その千影の言葉に、千影をつけていた者達が申し訳なさそうな顔でゾロゾロと姿を現した。

それはオベリススクブルー女子を中心とする『姫宮千影ファンクラブ』の会員たちだった。

「で、何で私をつけてたの?」

千影のこの質問にファンクラブの会員の1人が口を開いた。

「あ、あの!千影姫がカイザーと決闘するというのは本当ですか!」

その質問を皮切りに他の会員たちからも芸能記者顔負けの質問が始まった。

「何でも噂では1年生トップである千影姫が『帝王』の称号を奪うためというものがありませんが本当でしょうか!」

「千影姫がカイザーに片思いされているとの噂もあります!!」

「えっ!?カイザーが千影姫に交際を申し入れて、それを断るために決闘するんじゃないの!」

「嘘っ!?私は義兄弟の契りの杯代わりの決闘だって聞いたわよ!」  
千影に対する質問がいつの間にか自分たちが聞いた噂の討論会になっってしまった。

そんな尾ひれ羽ひれがつくどころか突然変異までしてしまった噂を聞いた千影は眼を白黒させることしかできなかった。

事態を收拾するのにかかなりの時間と体力を消耗したが、何とか後をつけていた会員たちの誤解を解き解散させると、再びついた帰途で十代と隼人にはったり会った。

「おっ、千影じゃないか。どうしたんだ疲れた顔をして？」

「確かに元気ないんだな」

2人はどこか煤けた感じのある千影に声をかけるが、千影は何かを悟ったような眼をして答えた。

「うん、ちよつと女の子の不思議の一端を垣間見てね」

そんな千影に2人は少し引きつつ、千影の収穫を聞いた。

「で、千影は図書室に行つてカイザーの決闘映像探しに行つたんだ。収穫は？」

「あつたけど、これだけじゃその人の人となりはわからないよ。やつぱりちゃんと決闘してみないと」

「こつちもそう思つて、千影の名前で決闘許可願を書いたんだけど、クロノス先生に破り捨てられたんだよなあ。それならとオベリスブルーの寮に乗り込んでみたけど門前払いだし・・・ああもう、腹が立つ！何がカイザーと決闘するのには100万年早いだ！！」

クロノスとオベリスブルーの生徒に言われたことを思い出して腹を立てる十代だったが、それを千影が宥めた。

「まあまあ十代、チャンスは訪れるさ。制裁タッグ決闘までまだ日数があるんだし、ここでカリカリしても始まらないよ」

「だけだよ」

そう話しているうちに部屋の前についた十代は扉を開けながら千影に何か言おうとするが、盛り上がった布団を見ると、溜息をつき布団に包まっているだろう翔に向かって口を開いた。

「はぁーっ。つたく、翔。授業にもでねえでいつまでも閉じこもつてると隼人みたいになつちまうぞ」

その言葉を聞いた隼人は怒った顔になった。

「失礼なことをいうなあっ！」

「まあまあ、隼人。抑えて」

何だか今日は人を宥めてばかりだなあと千影は思いつつ、十代と一緒に翔を起こしに行った。

「それっ！」

そして勢いよく布団を捲った十代だったが、そこには翔の姿がなかった。

「あれえ？」

「翔、いないね」

そこにいるとばかり思っていた十代と千影は不思議そうな顔になる。そんな中、翔の机の上にとあるものを見つけた隼人がそれを手に取った。

「なんだあ、これはあ？」

その声に十代と千影が隼人の隣から手紙を覗き込んだ。手紙の内容はこうだった。

一筆啓上。翔は島を出ます。止めてくれるなアニキ、

さよならだけが人生だ！

その手紙を十代は隼人から取り上げ握りつぶすと、奥歯をかみ締めた。

「あいつ、逃げやがった」

十代のこの言葉に隼人は疑問を挟んだ。

「でも、この島からどうやって逃げるんだ？」

「定期船に密航するくらいしか逃げる手段はないけど、定期船はこの前来たばかりだし、そうなると筏を組むぐらいしか  
っ  
！ちゃんとした船でないと太平洋の荒波を越えれない！筏を組んで海に発つたとしたら翔の命はないよ！！」

千影の発したこの言葉に十代と隼人は顔を強張らせた。

「探そう！」

「お、おう！」

「海から脱出する気なら海岸線沿いを風潰しにしよう!」

十代のその言葉に隼人と千影は頷き、部屋から飛び出したのだった。

「翔、どこだあつ!」

「翔、でてくるんだなあ!」

「翔!」

3人は叫びながら海岸線沿いを調べるが、どこにも翔の姿は見られない。

「翔、戻ってこおおいつ!」

その十代の叫びにも応えは帰ってこなかった。

「はあはあ・・翔のやつ、頼むからでてくるんだなあ・・・はあはあ」

「ほら、隼人ががんばって!休んでないで、早く探すよ!」

息を切らせた隼人を千影が激励し、3人は再び走り出そうとしたのだが、十代はふと何かに気がついた。

「あつ!」

ベルトに止めていたデッキケースが光り、中からハネクリボーが姿を現したのだ。

《クリクリ》

「あ、相棒!」

ハネクリボーの声を聞いた隼人は辺りを見回した。

確か、この声は千影が闇の球体に閉じ込められている間に、棺から明日香を助け出した十代の近くから聞こえた声と一緒にだった。

「まただ、クリクリって声が聞こえた?」

そして辺りを見渡すが、隼人にはまたしても声の主は見えなかった。逆に十代の肩に乗ったハネクリボーが見えた千影はハネクリボーを指差しながら十代に聞いた。

「それが十代の精霊?」

「お前も精霊が見えるんだったな。紹介するぜ相棒のハネクリボーだ。それより、どうしたんだハネクリボー?」

十代は頷き簡単にハネクリボーを紹介しつつ、なぜハネクリボーが現れたのかを聞いた。

《クリ〜》

ハネクリボーは十代たちを誘うように海岸線沿いを飛び、少し行くと十代たちを待つように滞空する。

「ついてこいつてか？まさか翔の居場所が！？」

「十代、君の相棒についていこう。今は手がかりもないんだから」

「そうだな、じゃあ案内頼むぜハネクリボー！」

《クリクリ〜》

道案内をハネクリボーに頼むと十代と千影はハネクリボーを追いかけるように走り出した。

「こつちだよ隼人！」

「待てよ、2人とモー！！！」

そして未だに声の主を探してキョロキョロしていた隼人に千影が声をかけると隼人は焦って2人を追いかけていった。

灯台の麓で沈み行く夕日を見ていた亮は自分に近づいてくる足音に気がつくとそのちらを見た。

「何かつかめたか？」

自分の隣にたち夕日を眺め始めた明日香に、亮はそう問いかけた。

「ううん、いつもと変わらない1日。何事もなく過ぎていく。兄のこと波に消えたまま」

明日香はその問いに首を横に振りつつ答えたのだった。

「焦るな、きつといつか」

「わかつてる　　そう言えば、貴方の弟の決闘を見たわ」

亮の言葉に頷いた明日香は、話を目の前にいる男の弟、翔の話に変えた。

「それがどうした？」

「感想は言わないわ。でも、そのことについて姫宮千影があなたと決闘をしたがってる」

明日香は千影のことを亮に話した。亮もその名を聞いて、眼を瞑るとあの時の決闘を思い出した。

「確か、先月の実技試験で大勢の生徒の心を動かしたオシリスレツドの新入生の片方か」

そう言った亮を見ると明日香は微笑を浮かべた。

「クスツ。貴方も、心を動かされた口でしょうに」

「そうだな。確かにアレは素晴らしい決闘だった」

亮も微笑みながら明日香の言い分を受け入れる。

「どう、受けて立ってみる？」

「そうだな」

明日香の問いかけに亮が答えようとしたその時、

「あ、アニキ!!!」

翔の声がここまで響いてきた。

その声を辿って海岸線沿いに視線をやると、そこには翔の姿があった。

「あれは!?!」

「翔!!!」

十代がこちらに走ってくるのを見た翔は、慌てて筏に飛び乗ると海へ発とうとした。

「おい、翔!?!?!」

それを見た十代は走るスピードそのままに空へと飛んだ。

「よつと!」

そしてそのまま翔が乗った筏に着地するが

「おおつとつと!?!」

「うわああああつ!?!」

着地のショックで丸太を縛っていた縄が解けたのか筏は分解され十代と翔はそのまま海に落ちた。

「た、助けてええっ! 僕泳げないいい!!!」

海に落ちた翔は溺れるものかと手足をばたつかせ、近くにあったも

のにしがみついた。

「こら、しがみつくな！沈むう！！」

しがみつかまれた十代は浮くことが出来ずに翔もるとも海に沈んでいく。

「十代！」

「翔、今行くんだな！！」

それを見た千影と隼人は制服の上を脱ぐと、海の中に飛び込んだ。

「あれ　？」

「　　浅い、ね」

海に飛び込んだ隼人と千影は、腰辺りまでしかない水位に互いの眼をあわしたのだった。

「ぶはっ！！」

そうこうしている内に足がつくことに気がついた十代と翔が顔を出した。

「ごっほ、ごほ・・・このまま行かせてくれよアニキ、千影君。僕のことはいいいから２人でタッグを組んで退学を免れてくれよお」

そんな弱気な翔の発言に十代と千影の檄が飛んだ。

「つべこべ言うんじゃねえ！俺と千影はお前がタッグパートナーになることに何にも不満はないんだ！！」

「そうだよ、翔。それに君がタッグの１人に入るのは大前提なんだから、君が逃げたら私も十代も戦う以前に負けてしまっんだ！勇気を出して、翔！！」

２人のこの言葉を聞いてもなお、翔は俯いたままの顔を上げられなかった。

「でも今の僕じゃ勝てっこないよ」

そんな翔の姿に十代は握った拳を震わせていると、上から声が聞こえてきた。

「不甲斐ないな、翔」

その声に４人が上を向くと、そこには明日香と亮が立っていた。

「お、お兄さん！」



腕を組んで立つ亮を見た翔は1番会いたくない人との遭遇に顔をしかめた。

「あれが、カイザー亮」

「翔の兄さん」

十代と千影も初めて会った翔の兄に、そう呟きをもらした。

「逃げ出すのか？」

「ぼ、僕は……」

亮のこの問いかけにどう答えるか翔は迷うが、亮のほうから思いもよらない言葉が出た。

「それもいいだろう」

これを聞き、とうとう兄に見放されたと思った翔はうな垂れると、ばらけた丸太を集め始めた。

いや、それだけじゃない

「う、うとうう……」

肩を震わせ泣き始めた。自分の不甲斐なさに、意気地のなさに。

「翔……」

それを見た十代は気遣うように翔を見ると、上にいる亮に向かってこう言い放った。

「行つちまうつてよ、あんたの弟！」

その言葉を聞いた亮はすました顔で言った。

「仕方ないな」

十代や明日香がこの言葉に驚く中、千影は何か違和感を感じた。

(なんだ？こう言いながらも翔を放り出す感じがしない。となると

丸藤亮のこの言動は　　っ！そういうことか！！)

亮の真意を見抜いた千影は、亮が待っているであろう言葉を発した。

「だったら銭別に、私と貴方の決闘を見せてあげられないか、丸藤亮！？」

この言葉に翔は驚いた。

「千影君……！！！」

翔が驚く中、亮は笑いながら千影に言った。

「君と決闘　　いいだろう、上がってきたまえ。姫宮千影」

「そうこなくっちゃな！がんばれよ千影！！」

それを聞いた十代が千影に声援を送る中、翔は戸惑いの声を上げた。

「えっ、千影君！？アニキイ！？」

（この決闘が翔になにかしらのキツカケになつてくれれば）

千影はそう思いつつ、上に立つ『帝王』を見上げたのだった。

そして日が完全に落ちた埠頭で『帝王』と『姫』の決闘が始まった。

「決闘ッ！！」

千影LP4000

亮LP4000

2人が対峙する中、翔は頭を抱えていた。

「どうしよお、僕のせいで大変なことになっちゃった！いくら千影君だって、お兄さんにかかったらあ」

「くうう、いいなあ千影！学園1の決闘者との決闘、俺がやりたかったぜ！！ほら、ちゃんと見とけよ翔！！」

そんな翔とは裏腹に千影を羨ましそうな眼で見た十代は翔にそういうと自分も一瞬でも見逃すものかと、2人の決闘に視線を戻した。明日香も見逃すまいとその決闘に集中する。

「私の先行、ドロー！！」

千影はドローしたカードを含めた手札を一瞥すると、その内2枚に手を伸ばした。

「私はLOVサーヴァント・グレムリン・を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント・グレムリン・　　1　　ATK500　DEF

「さらに私はカードを1枚セットしてターン終了!!」

千影はターンエンド宣言を聞いた亮は自分のデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロ。俺はサイバー・ドラゴンを攻撃表示で召喚する」

サイバー・ドラゴン      5    ATK2100    DEF1600

いきなりの 5モンスターの出現に千影は驚いた。

「この効果は私のワータイガーと同じ!？」

「そう言えば、君も同じ効果を持つモンスターを持っていたな。サイバー・ドラゴンも相手の場にモンスターがいて、自分の場がないとき、生贄なしで特殊召喚することができる。そして手札から速攻魔法、サイクロンを発動!魔法・畏カード1枚を破壊!!」

亮の発動したサイクロンが千影のリバースカードに襲い掛かるが、それを許す千影ではなかった。

「そうはさせない!サイクロンにチェインしてリバースカード、和睦の使者を発動!!このカードの効果でこのターン、相手からの戦闘によるダメージを0にし、私のモンスターは戦闘で破壊されなくなる!!」

サイクロンは千影のカードを破壊するにはしたが、効果の発動は止められなかった。

「手札1枚無駄にしたね、丸藤亮」

その千影の言葉に亮は頷きながらも次の一手を打つ。

「ああ、しかし俺のターンはまだ続いている。俺は手札から魔法カード、タイムカプセルを発動!」

そのカードの発動と共に棺の形をしたタイムカプセルが姿を現した。「デッキからカードを1枚選び、このカードをタイムカプセルに入れる。2回目の俺のスタンバイフェイズにこのカードを手札に加え

る」

亮は1枚のカードを迷わず選ぶと、それをタイムカプセルの中に入れた。

(デッキからのピンポイントサーチ。私の予測が正しければあの中に入れたカードはアレか)

千影が亮の選んだカードに思考を向けているうちに亮がターン終了を宣言した。

「ターンエンド」

そして、このターンの隙のない攻勢に千影は心の中でこう思った。

(さすがは『帝王』の渾名は伊達じゃないということか。初手から出鼻を挫いては見たが全く意に介さない堂々とした姿勢、そして次に繋ぐ布石を打ってきた。この人が相手なら1つのミスが命取りになる！)

「私のターン、ドロー！」

千影は引いたカードを確認すると、場にいるモンスターの効果を発動した。

「私はLOVサーヴァント・グレムリン - のモンスター効果を発動！このモンスターが表側攻撃表示にいる時、自分の毎ターンのドローフェイズに効果が発動。引いたカードが気に入らなければ、引いたカードをデッキの1番下に戻し、新たにカード1枚をドローすることが出来る！私は引いたカードをデッキの1番下に戻して新たにカードをドローする！！」

引いたカードを戻して、新たなカード引いた千影は1つ頷いた。

「私はLOVサーヴァント・グレムリン - を生贄にLOVサーヴァント・木霊 - を攻撃表示で召喚する！」

LOVサーヴァント - 木霊 -                    6    ATK 2500    DEF 1200

千影が召喚したのは巨大な樹の化身だった。

「征くよ、LOVサーヴァント - 木霊 - の攻撃！爆裂閃光花！！」  
千影の命に従い巨大な樹の化身は腕を地面に叩きつけ一筋の光の波動をサイバー・ドラゴンにぶつけた。

サイバー・ドラゴンにぶつかった光は一瞬収束すると大爆発を起こして機械の龍を消し去った。

正にその爆発は花火の様。

亮LP3600

しかし、その爆発も亮の表情を崩すことはできなかった。亮は千影を静かに見据えたまま立っていたのだ。

「私はこれでターンを終了する」

この2人の決闘を見た翔は2人のいる次元の高さに圧倒されていた。  
(お兄さんもすごいけど、やっぱり千影君もすごい。お兄さん相手に一步も引かずに決闘してる ても)

しかし、圧倒されているだけではない。弟として兄の決闘を見てきた翔は亮が次に打つであろう一手を思い、千影の不利を悟った。

そんな翔の考えどおり、亮の怒涛の攻撃が始まった。

「俺のターン、ドロ！。特殊効果によりサイバー・ドラゴンを特殊召喚する。さらに手札から死者蘇生を発動！墓地のサイバー・ドラゴンを復活！！」

サイバー・ドラゴン	5	ATK2100	DEF1600
サイバー・ドラゴン	5	ATK2100	DEF1600

2体の機械の龍を従えた亮は手札の1枚を選び取る。

それは

「そしてこの2体を融合」

融合の魔法カードだった。

2体のサイバー・ドラゴンは絡み合い、青いプラズマを放ちながら新たな姿を現す。

「サイバー・ツイン・ドラゴンを召喚!!」

サイバー・ツイン・ドラゴン      8      ATK 2800      DEF 2100

それは2頭を持つ機械の龍だった。

このモンスターを見た隼人は驚きの声を上げた。

「攻撃力2800!?!」

しかし、この隼人をさらに驚かせることを亮は口にした。

「それだけじゃない。サイバー・ツイン・ドラゴンは戦闘フェイズに2回の攻撃をすることができる」

「そ、そんな・・・」

隼人がこの効果に絶句する。

それは十代、明日香も同じだった。

ただ1人、翔だけはこの戦法がわかっていたので驚きはないが、圧倒的なその戦力に視線を下に向けたまま、こう思った。

(これがお兄さんの決闘)

勝つためにどこまでも計算され

つくした、誰も寄せ付けない。千影君やきつとアニキでさえ!)

「サイバー・ツイン・ドラゴンで木霊とプレイヤーを攻撃!エヴォリューション・ツイン・バースト!!」

亮の言葉と共に放たれた2条の光線が木霊を貫き、さらに千影を襲う。

「うっくうっ!」

千影LP900

千影のライフポイントを大幅に削ったというのに喜びの表情を見せず淡々と亮はターンの終了を宣言する。

「ターンエンドだ」

この亮のターンエンド宣言に千影が声を放った。

「この時、LOVサーヴァント・木霊・のモンスター効果発動！このモンスターが墓地にいったターンのエンドフェイズ時に苗床トークン2体を自分フィールド上に特殊召喚することができる！！」

苗床トークン 1 ATK0 DEF0

苗床トークン 1 ATK0 DEF0

場に2体の苗床トークンを守備表示で特殊召喚した千影は亮に向かって言い放った。

「楽しい、楽しいよね丸藤亮！こんなに心踊る楽しい決闘をできるなんて！」

このいきなりの言葉に亮は初めて表情を変えた。

「ああ、俺もだ  
それも微笑にだ。」

この兄の微笑を見た翔は驚いた。

(えっ！？お兄さん )

「何驚いてるんだよ翔。こんなゾクゾクする決闘、楽しくない方が変だぜ！くうううう、俺もゾクゾクしてきた！！」

そんな十代の言葉をよそに、翔はその亮の笑顔から何かを掴みかけていた。

「私のターン、ドロー！私は苗床トークン2体を生贄にしてLOVサーヴァント・ギガス・を攻撃表示で召喚！」

千影は早くも2体のトークンを生贄に最上級モンスターを召喚する。

LOVサーヴァント - ギガス -                    8     ATK 3000     DEF 1500

それは巨大な鬼だった。

「よっしゃ！攻撃力3000ならサイバー・ツイン・ドラゴンを倒せるぜ！」

このモンスターの登場を見て喜ぶ十代だったが、千影から声がかかった。

「残念ながら、このモンスターは相手モンスターを攻撃することができないんだよ十代」

「なんだよお、じゃあ意味ないじゃんか！」

千影の言葉に十代は大声を出す。千影は笑って見せた。

「まあ見てなさいな。LOVサーヴァント - ギガス - は相手モンスターに攻撃できない代わりにこのターン、攻撃力を半分にすることで相手プレイヤーに直接攻撃ができる！」

LOVサーヴァント - ギガス -                    8     ATK 1500     DEF 1500

攻撃力を1500まで下げながらもギガスはサイバー・ツイン・ドラゴンを飛び越え亮に迫る。

「受ける、丸藤亮！怒涛の進撃！！！」

そして豪腕が亮に振り下ろされた。

「くっ！」

亮LP 2100



「私はこのままターンを終了する！」

LoVサーヴァント - ギガス -                    8            ATK 3000    DEF 1  
500

千影のターンエンド宣言と共にギガスの攻撃力が元に戻った。

これを見た隼人は手を握り締めて言った。

「よおーしっ！相手モンスターに攻撃できなくても攻撃力3000、  
攻撃力2800のサイバー・ツイン・ドラゴンが攻撃してきても自  
滅するだけなんだな！！」

しかし、翔は隼人のように楽観的になれなかった。

（でも次のターン、お兄さんの棺からあのカードが復活する）

そして十代も明日香も、簡単にはいかないであろうということを肌  
で感じていた。

「俺のターン、ドロー！」

そして、ドローが終わると同時にタイムカプセルが現れた。

「タイムカプセル発動後2度目の俺のスタンバイフェイズだ。俺は  
タイムカプセルを破壊して棺に入れたカードを手札に加える！そし  
て手札から魔法カード、強欲な壺を発動！この効果でカード2枚を  
ドローする！！」

棺が壊れ、中から出てきたカードを手札に加え、さらにデッキから  
2枚のカードを補充した亮は千影に向かって言った。

「千影、いよいよ大詰めかな」

この台詞に千影も笑顔で頷く。

「うん、そうだね。ここからどうなるかがすごい楽しみだよ」

「そうだろう。君は君の持てる力を存分に出し切っている。そんな  
君に対して俺も全力を出すことが出来た。君の決闘に敬意を表する」  
そして亮は笑ったのだ。それも先ほどの微笑ではなく、純度100  
%の笑顔で。

その兄の不純物のない笑顔に翔は雷に打たれたかのような衝撃が体を走った。

（お兄さんが千影君の決闘を認めている！）

（カイザー、その言葉翔に言ってるように聞こえるけどな）

翔の横にいた十代は亮の言葉を聞いて微笑みながら、翔を見つづそう思ったのだった。

そんな翔は「はっ！」となった。

ようやく気がついたのだ。兄の真意を、パワー・ボンドが封印されたわけを。

（そうか！お兄さんの決闘は相手のことを考え、全ての可能性に対応した戦術をとる決闘。だけど、僕はあの時 相手を馬鹿にして、カードを過信して、アレは相手を全く無視した決闘……）

「行くぞ、千影！」

「こつちはいいよ『帝王』！」

千影の応えを聞いた亮は自分の最も信頼するモンスター召喚のための札を切る。

「俺は手札から魔法カード、融合解除を発動！このカードによりサイバー・ツイン・ドラゴンの融合を解除！！」

サイバー・ドラゴン 5 ATK2100 DEF1600

サイバー・ドラゴン 5 ATK2100 DEF1600

サイバー・ツイン・ドラゴンは元の姿であるサイバー・ドラゴンへと姿を戻す。

そして、亮は切札を切った。

「そして手札からパワー・ボンドを発動！手札のサイバー・ドラゴンと場の2体のサイバー・ドラゴンを融合！！」

亮の叫びと共に翼をはためかせた巨大な機械龍が姿を現す。

「サイバー・エンド・ドラゴンを攻撃表示で召喚!!」

その姿は雄雄しく華麗、海馬瀬人の所有する青眼の究極竜とも引けを取らない龍だった。

サイバー・エンド・ドラゴン      10    ATK 4000    DEF 2  
800

「パワーボンドの効果で攻撃力は2倍になる!」

サイバー・エンド・ドラゴン      10    ATK 8000    DEF 2  
800

そしてサイバー・エンド・ドラゴンは、かの三幻神すら凌駕する圧倒的な攻撃力をその身に宿したのだった。

これを見た隼人は啞然となった。

「はっ・・・8000・・・!?!?」

隼人だけではない。

「これがカイザーの本気・・・」

「亮・・・」

十代も明日香も亮のサイバー・エンド・ドラゴンの威容に気圧されていた。

神さえも凌駕しそうなモンスターを従えた亮は攻撃を宣言した。

「サイバー・エンド・ドラゴンでLOVサーヴァント・ギガスを攻撃! エターナル・エヴォリューション・バアアストオツ!!」

圧倒的な光の奔流がギガスを包み込もうとしたその瞬間、千影の双眸が紅蓮の真紅へと輝いた。

「丸藤亮、貴方の全力確かに受け取った。ならばこちらも全力を超

える全力全開でいかせてもらう！Lovサーヴァント・ギガス・のもう1つのモンスター効果発動！！」

この千影の言葉を聞いた亮は、この決闘で初めて驚きの表情になった。

「なに！？」

「このモンスターが攻撃対象となった時、決闘中1回のみ発動！このカードをデッキに戻すことで相手のモンスターの攻撃を無効にし、戦闘フェイズを終了させる！！そしてデッキからカードを5枚選び、そこからランダムに1枚のカードを手札に加え、残りの4枚のカードをゲームから除外する！！」

「と、いうことは……！！」

「サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃は無効となり、失敗する！ギガス、強制開門！！」

千影のこの言葉と共にギガスは空間に両腕を振るうと空間が砕け散り、そこに飛び込んでいくとともに千影はデッキからカード5枚を選び取り決闘盤の魔法・罠ゾーンにカードを差し込む。そして、飛び出てきた1枚を手札に加えると残りを自分のデッキケースの中に仕舞ったのだった。

そしてサイバー・エンド・ドラゴンの光の奔流は討つべき相手を見失い、彼方へと行き過ぎていった。

千影のこの一手に隼人と明日香は声を上げる。

「やったんだなあ！これでパワー・ボンドのもう1つの効果で千影の勝ちなんだな！！」

「パワー・ボンドはその強力な効果に対するリスクとして融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージをターンエンド時に受ける　　これで決まりなの？」

しかし、ここで終わる男が『帝王』になれる筈がない。

「まだだ、俺はこのターン通常召喚をしていない！俺はサイバー・

ジラフを召喚!!」

サイバー・ジラフ            3    ATK300    DEF800

「このモンスターは生贄に捧げることで、このターン、プレイヤーが受ける効果ダメージを0にする!!」

そして、亮はサイバー・ジラフを生贄にしたのだった。

「これじゃ、せっかく攻撃を凌いでもカイザーの場に攻撃力8000のモンスターが残っちまうぜ!」

十代が大声を上げる中、翔は兄がずっと伝えたかったことを今理解した。

(そんなことはもう問題じゃないんだ!お兄さんが言いたかったことと、それは相手をリスペクトしろという事!!)

翔はこの決闘の中、掴みかけていた何かを            1人前の決闘者としての在り方を            確かに掴んだのだった。

三つ首の巨龍を従えた亮はターンエンドを宣言した。

「俺のターンは終了だ!」

そのターンエンド宣言を聞きながら千影は頬に伝わる汗を拭った。

(危なかった。初見で闘っていたらさっきの攻撃で負けているところだった。丸藤亮の資料映像を見尽くした甲斐があったかな。しかし            )

千影の手札は次元融合と魔力儉約術を除いて使いどころのないモンスターや魔法、罠カードばかり。

(この手札ではサイバー・エンド・ドラゴンを凌駕するモンスターを召喚することができない。ならばこのドローに賭けるしかない!)  
そう思い千影は全身全霊を賭けてカードをドローする。

「私のターンだ!ドロー!!」

そして引いたカードを見た千影は口元に笑み浮かべた。

「私は魔法カード、二重魔法を発動！手札の魔法カード1枚捨てて丸藤亮、貴方の墓地から魔法カードを1枚使わせて貰う！」

亮は千影が選ぶであろうカードに思い当たると驚きの声を上げた。

「まさか!？」

「そう、融合解除だ！この効果でサイバー・エンド・ドラゴンをサイバー・ドラゴン3体に戻す！」

サイバー・ドラゴン	5	ATK2100	DEF1600
サイバー・ドラゴン	5	ATK2100	DEF1600
サイバー・ドラゴン	5	ATK2100	DEF1600

サイバー・エンド・ドラゴンの融合が解かれ、亮の場には3体のサイバー・ドラゴンが並んだ。

「さらに私は永續魔法、魔力節約術を発動！そして魔法カード、次元融合を発動！！魔力節約術により次元融合に必要な2000のライフコストは必要なくなる！私はギガスのモンスター効果で除外したLOVサーヴァント-インキュバス-とLOVサーヴァント-ヴァーパルバニー-を特殊召喚！！」

LOVサーヴァント-インキュバス-	3	ATK800	DEF300
LOVサーヴァント-ヴァーパルバニー-	4	ATK1000	DEF500

「LOVサーヴァント-ヴァーパルバニー-のモンスター効果！このモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚された時、デッキからカード1枚をドロウする！！そして 4、LOVサーヴァント-ヴァーパルバニー-に 3、LOVサーヴァント-インキュバス-をチェーンニング！！」

兔娘と淫魔の男は星になり夜空を舞う。

「妖しき星が、集いてここ破滅を誘う。破壊よ、顕現せよ！シンク  
口召喚！汝、絶対破壊者LoVサーヴァント・バハムート――！！」  
夜空を駆けた星は破壊の化身となり、千影の隣に従うように降臨し  
たのだった。

LoVサーヴァント・バハムート・ 7 ATK2500 DE  
F1400

「インキュバスの効果でさらに1枚のカードをドロ―。征くよ、丸  
藤亮！これが私の全力のさらに上を征く、全力全開の血闘だ――！！」  
その千影の叫びに亮が頷いた。

「ああ、来い！今度は俺が受けてたつ――！！」

「バハムート、サイバー・ドラゴンを攻撃！メガフレア――！！」  
バハムートの放った劫火がサイバー・ドラゴンを焼き尽くす。

亮LP1700

「さらに私は残りの手札4枚全てをコストにバハムートのモンスター  
―効果を発動！手札2枚につき1回の攻撃を追加できる――！！」

千影の宣言を聞いた亮は、千影のミスを指摘する。

「見誤ったな。それでは俺のライフポイントを削り切れないぞ千影  
――！！」

確かにこのまま攻撃しても亮に与えられるダメージは800。この  
ままでは状況を有利にすることができても、勝つことはできない。  
このままターンを終えれば、亮が逆転する可能性もある。  
しかし、千影にとってそんなことは百も承知の上だった。

「そうでもないさ！バハムートのコストに手札から墓地にいったL  
oVサーヴァント・キメラのモンスター効果発動――！！」

「なにっ――！！？」

「このカードが手札から墓地にいった時、相手フィールド上の全て

のモンスターの表示形式を変更することができる！サイバー・ドラゴン2体を守備表示に変更！！」

サイバー・ドラゴンの表示形式が守備表示に変わった。

「そして、バハムートのもう1つのモンスター効果は、このモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、攻撃力がその守備力を越えていればその差だけ相手ライフポイントにダメージを与える貫通効果！！」

「サイバー・ドラゴンの守備力は1600・・・しまった！！」  
千影の真の狙いに気がついた亮だったが、もう手遅れだった。

「征け、バハムート！メガフレア2連弾！！」  
バハムートの放った2つの劫火はサイバー・ドラゴンを完膚なきまでに焼き払い破壊したのだった。

そして超過ダメージの1800が亮を襲う。

「ぬうううううっ！」

亮LPO

ライフポイントは尽きたが膝をつかないのは流石は『帝王』ということか。

負けてもその威風堂々とした姿勢は決闘者としての在り方を体言しているように見えた。

「お、お兄さんが」

「丸藤亮が・・・負けた・・・」

この逆転劇がまるで嘘であるかのように翔と明日香は呆然と立っていた。

「すごいんだな、千影！」

「やったじゃねえか！いい決闘だったぜ！！」

対して隼人と十代は、この逆転劇に大喜びしていた。

そんな中、決闘盤を待機状態にし、眸の色を元に戻した千影は亮に



歩み寄ると右手を差し出した。

「いい決闘だったよ、丸藤亮  
誠の『帝王』だ」

いや、カイザー亮。貴方は

亮は、そう言う千影の右手を握りながら言った。

「負けていてはその名も返上しなければな」

その言葉に千影は首を振った。

「いや、負けても膝をつかないその威風堂々とした姿勢と、相手を常にリスペクトしつづけるその精神がある限り、貴方は『帝王』だよ」

千影はそう言いつつ笑顔を見せると、それに釣られて亮も笑顔になった。

「いつか機会があればリベンジしたい。今度はこちらが挑戦者だ」

「いつでも。楽しみに待っているよ」

そう言うと2人は握っていた手を離れた。

そこに

「千影君！」

翔が走りよってきた。

そして千影の横に並ぶと翔は目の前にいる兄に宣言する様に言った。

「お兄さん！僕、千影君とタッグを組むよ！！」

その顔は1人前とは程遠いが確かに漢の顔になっていた。

それを見た亮は、

「そうか」

とだけ言い残すと満足げな表情で踵を返して埠頭から去っていたのだった。

「亮！」

そんな去っていく亮に明日香は駆け寄り、隣り合つと口を開いた。

「負けちゃったわね」

「しかし、いい決闘だった。それに翔はいいアニキと友を持った」

「そうね」

この亮の満足げな声を聞いた明日香は微笑を浮かべたのだった。

その歩みさる2人の背中を見つめながら十代は翔に言った。

「いい兄さんだな、翔」

「アニキもね。それに千影君もいい友達だよ」

翔は笑顔になりながらそう言うど何処かから汽笛の音が聞こえた。

それを聞いた十代は皆に向かって言った。

「さて、帰ってデッキの調整でもするか。それぐらいしか俺が手伝えることないからな」

「そうだね。それに今度はちゃんとパワー・ボンドを活かせるデッキを組まないかね、翔」

十代と千影の言葉に翔は頷く。

「うん！絶対にパワー・ボンドの封印を解いて見せるよ」

翔の力強い決意の言葉に頷く十代と千影だったが

「でも食堂は封印されてしまったんだなあ」

隼人が腹の虫を鳴らしたのだった。思えば、翔を探していた時間帯がちょうど夕餉時。さらに亮との決闘で日付が変わろうかと言う時間帯。

これでは食堂は空いていても、料理を作る人がいないのは自明の理。すなわち

「「「晩飯食いつばくれたあああつ！！」」」

十代、翔、隼人が空いた腹を抑えて叫ぶ中、千影が大丈夫といった風に3人に言った。

「大丈夫、私がおか作ってあげるから」

この言葉に3人は顔を輝かせて千影を仰ぎ見た。

「本当か、千影！？」

「てか、料理できたんだ！？」

「それじゃ早く寮に帰るんだな！！」

3人が驚く中、千影は頬を書きつつ言う。

「あつ、でもあんまり期待はしないでね。大層なものは作れないし」「それでもいいって！行くぞー！！」

十代はそう言うと、笑顔で千影を引つ張つて寮へと駆けて行くのだ  
った。

それを追いかけていく翔と隼人も笑顔で寮へと走つていくのだった。  
この数十分後、「コッコッ上手いぞおおおおおっ!!!」「」と  
言う叫び声と共に天に上る光がオシリスレッド寮から上がったとか  
上がらなかったとか。

## 第8話【DA学園篇】（後書き）

さて、今回は最強！サイバー・エンド・ドラゴンの回であります。千影vs亮の決闘は千影の勝利で終わりましたが、ただ勝つのではあまりにも学園内パワーバランスが崩れるので、前もって資料映像を見て完璧に研究済みというアドバンテージを千影君に持たせて勝利させました。

それと融合解除はモンスターの融合を解除する 即ち、融合解除されたモンスターの素材は特殊召喚されるというアニメに準拠した効果になっておりますので千影君のプレイングミスではありません。

今回の最強カード『LOVサーヴァント・ギガス』

8 ATK3000 DEF1500 闇属性 戦士族

このモンスターは相手モンスターに攻撃することができない。1ターンに1度、攻撃力を半分にすることで相手プレイヤーに直接攻撃することができる。ターンエンド時に攻撃力は元に戻る。相手モンスターの攻撃対象となった時、決闘中に1度だけ発動できる。このカードをデッキに戻すことで相手モンスターの攻撃を無効にし、戦闘フェイズを終了させる。そしてデッキからカードを5枚を選び、その5枚からランダムに1枚のカードを選ぶ。選んだカードを手札に加え、残りのカードをゲームから除外する。

誘発効果型の攻撃の無力化+ランダム版苦渋の選択と起動効果型の攻撃力半減版流星の弓・シールを内蔵した大型モンスターと、すごい壊れた能力を有する使い魔となっただけでしたが攻撃力8000のサイバーエンドから逆転に持つてくるためにこういう効果と相成りました。

## 第9話【DA学園篇】

千影と亮の決闘から数日後の昼下がり、クロノスは廊下を歩きつつ、校舎の廊下で談笑しているオシリスレッドの生徒たちを見ながら心の中で憤っていた。

（まったく、なんでこのデュエルエリートのためのデュエルアカデミアでドロップアウトボーイズを受け入れないといけないーノネ！特にあの遊城十代と姫宮千影！あのような輩は排除あるのみ、デスーノー！！」

心で思っていたことがいつの間にか声になっていることに気がつかないクロノス。

それを聞いたオシリスレッドの生徒たちは皆談笑をやめ、クロノスと眼を合わせないようにしながらそそくさと教室へと入っていくのだった。

自分がどんな眼で見られていたのかを未だに気づかないクロノスは、これからのことを思うと笑いをこぼしだした。

「クシシシシッ。しかし、遂にこの時が来たのーネ！待っていないさい、ドロップアウトボーイめ！！」

そう一人で宣言するクロノスに近づいてくる者がいた。

「クロノス教諭！」

万丈目だった。

そんな万丈目にクロノスは振り返りつつ要件を聞いた。

「何事なのーネ、シニョール万丈目？」

「千影たちとのタッグ決闘、俺にやらせてください！」

この万丈目の申し出にクロノスは眉をひそめる。

「君に？」

「今度こそ、この手で奴らを叩き潰して見せます！」

万丈目の力強い宣言をクロノスは一刀のもとに両断した。

「その必要はありませんーノ！」

それを聞いた万丈目は「えっ!？」と驚いた顔になる。

「すでにタッグ決闘に相応しい、強力な決闘者を既に呼んであるんだスーのネ。それよりーモ、君は自分の心配をした方がいいデスーネ。このままだとライイエラーに落ちることだってあり得ますーノ」  
そう言い残すとクロノスは万丈目に背を向けてこの場から去っていったのだった。

「くっ!」

ライイエラー降格の可能性を示唆された万丈目は苦虫を噛み潰したような顔になるのであった。

所変わって、オシリスレッド寮の千影たちの部屋では千影と翔がデツキの最終調整を行っていた。

「いよいよ今日だなあ」

ベッドの上でそれを見ていた隼人が口を開くと、それに千影が頷いた。

「うん。がんばろうね、翔」

「えっと、うん」

翔は緊張しているのかやや硬い返事を千影に返した。

「初めてのタッグ決闘か、俺もやってみたかったなあ」

その十代の言葉に千影が1つの提案を出す。

「コレが終わったらさ、4人でやろうよ」

「お、いいなそれ!絶対やるうぜ!」

この提案を出した千影と、千影の提案に乗り切りの十代に隼人は苦笑しつつ言った。

「これに負けたら退学だって言うのに千影も十代も、お前たちって本当にどんな決闘でも楽しそうにやるよなあ」

隼人の言葉に千影と十代は逆に不思議そうな顔になりながら言った。

「当たり前でしょ、決闘は楽しいんだから」

「そうそう、それにどうせやるなら前向きにっつてね」

そんな2人を見た隼人はしみじみしながら言った。

「それがお前らの強さの秘密なのかもしれないな」

それを聞いていた翔は、自分の持っていたカード

パワー・

ボンドに視線を落として、数日前の千影と亮の決闘を思い出すと表情を決意に引き締めながら思った。

（僕、今度こそやるよ。決闘者として、お兄さんの弟として、そして  
）

翔は手に持っていたパワー・ボンドをデッキに入れつつ、十代と笑いあう千影を見た。

脳裏に浮かぶのは攻撃力8000のサイバー・エンド・ドラゴンを前にしても一歩も引かなかった千影の姿。

（僕に立ち向かう勇氣と、諦めない不屈の心を教えてくれた千影君のためにも恥ずかしくない決闘をして見せる！）

そして翔はデッキを持って立ち上がると千影に宣言した。

「千影君、絶対に勝とうね！」

「うん、当然。さて、そろそろ征こうか」

千影がその言葉に頷くとデッキをデッキケースに仕舞いながら翔を連れ立って部屋の外へと歩を向ける。

そんな3人を見た隼人と十代は千影と翔に励ましの言葉を送った。

「俺も観客席から応援してるぞ。お前たちがここに帰ってくることを信じて」

「俺の命、お前たちに預けたぜ。千影、翔」

それを聞いた千影と翔は笑いながら言葉を返す。

「うん、必ず未来を勝ち取ってくるよ」

「いつてきます！」

そして扉を開けて出て行くのだった。

タッグ決闘が行われる決闘場は異様な熱気に包まれていた。

「いよいよ始まるか

それにしても何だ？特にオベリスク

ブルーの女子たちが発するこの威圧感は……？」

席に座って決闘の開始を待つ三沢は、この場を支配する異様な空気が

に半ば当てられていた。

「千影のファンクラブの子たちよ」

その言葉に三沢を後ろを振り返ってみると、そこには明日香の姿があった。

「君はオベリススクブルーの天上院明日香」

明日香は三沢の近くに腰を下ろしつつ口を開いた。

「あなたも少なからず千影や十代と関わりがあるようね」

「ああ。しかし、千影にファンクラブなんてあったのか？」

三沢は明日香の言葉に頷きながら、千影にファンクラブができていることに驚いた。

「うちのジュンコとももえが会長をやつててね。で、その会員の子たちが先日発表されたこの退学を賭けた制裁タッグ決闘にかなり浮き足立っているの。皆、この決闘に千影たちが負けようものなら懐に忍ばせた嘆願書を持って校長先生のところへ突撃するっていきまいていたわ。中には自主退学届けまで用意する子までいるから頭の痛い問題だわ。まあ千影に決闘に集中して貰う様に勝敗が決するまでは騒ぎを起こさないことを徹底しているというのには関心するけれど」

明日香はここ数日、女子寮内で起きている事を話すと、三沢は頬を引きつらせていた。

「それはまた、すごいな・・・」

「まあ、そんな訳でオベリススクブルーの女子のほとんどがこの決闘を見に来ているのよ」

自分には到底真似できないことをやってのける女子生徒に眼を白黒させつつ、何とか自分を納得させた三沢は話を変えた。

「この開場の異様なそのためのか。まあそれはそれとして彼らにタッグ決闘の経験は？」

この言葉に明日香は首を横に振った。

「ないみたい。それに私のためにこんなことになって 本

来なら私がパートナーになるべきだった。それでも何とかしてしま



いそつな気がする、千影なら」

明日香や三沢とは離れたところで座っていた万丈目は会場に入ってくる、千影と翔を見ると誰も座っていない前の席を思い切り蹴飛ばした。

「姫宮千影に遊城十代、貴様らはこの俺の手で握りつぶしてやりたかったのに」

退学が懸かった決闘だというのに笑顔で翔に話す千影を見た万丈目は顔を怒りに振るわせたのだった。

千影と翔は決闘場へと上がると、会場内に走って入ってきける十代と隼人を視界に治めた。

「十代に隼人」

「あつ！アニキたちが手を振ってる」

十代と隼人がこちらにむかって手を振っているのに気づいた千影と翔は手を振り替えたのだった。

そんな千影と翔を遠巻きに見ている人間は他にもいた。翔の兄の亮である。

（翔、この決闘でお前の決闘者としての實力を見せてみる）

その視線に気づいた翔は、亮を一瞥してから視線を外す。

（見ていてお兄さん！今日こそ、決闘者としての第一歩を進んで見せる！！）

そして前へと進みながらそう心に誓ったのだった。

そんな思いが交錯するなか、決闘場の真ん中に立ったクロノスが声を発した。

「ではコレより、タッグ決闘を始めるーノですネ！」

その宣言に開場が沸く中、鮫島校長がクロノスに疑問をぶつけた。

それは

「それで対戦相手は？教員かオベリスクブルーの生徒かね？まさか君がまた相手をするのかね??」

そう、未だに決闘場には千影と翔の対戦者の姿は見当たらないのだ。「いいえ、コレは彼らが立ち入り禁止区域に入った校則違反の罰則ーヲ審議するためーノ、決闘デスーノ。相手はそれ相応ーノ決闘者でなければ意味ありませんーノ！」

このクロノスの言葉に鮫島校長は瞳を輝かせた。

「それで！」

どうやら、それ相応の対戦相手がどのような者であるのか、すごく興味あるらしい。

「不心得者を叩きのめすべく、伝説ーノ決闘者を呼んでありますーノー！」

クロノスのこの宣言と共に、2人の決闘者が決闘場へと飛び出てきた。

2人の人物はバック転や宙返りをしつつ千影と翔の前に立ちほだかつた。

「我ら流浪の番人

頭に迷と書かれた人間が放った言葉を、

「迷宮兄弟！」

頭に宮と書かれた人物が繋ぎ2人で見得を切った。

「彼らはあるの、デュエルキング武藤遊戯と対戦したことがあるという伝説の決闘者なのですーノネ！」

そう、彼らこそ決闘者の王国で遊戯&城之内と激闘を繰り広げたアノ迷宮兄弟である。

「聞いたことがあるわ。その無敵のコンビネーションでデュエルキングを苦しめたと言う兄弟決闘者」

「そんな相手なんて、千影たちが勝てるはずがない」

明日香と三沢は迷宮兄弟の登場に千影たちの勝利が遠のいたことを感じた。

打って変わって万丈目は、その表情を愉悦に歪めていた。

「ふっふっふ、これはいい。みんなの前で無様に負けるがいい、

姫宮千影

そして隼人と十代もそれぞれの反応を示していた。

「ああ、そんなあ」

「伝説の決闘者か！くうううう、俺が決闘したかったぜ！！」

千影と翔を前にした迷宮兄弟は言葉を発する。

「お主等に怨みはないが」

「故あって対戦する」

迷宮兄弟は道を塞ぐようにして、さらに言葉を続ける。

「我らを倒さねば」

「道は開けぬ」

そして、再び見得を切り決めの台詞を放った。

「いざ、勝負っ！！」

迷宮兄弟のこの言葉に千影と翔が言葉をなくしているのを見てクロノスは上機嫌になっていた。

（ビビッてる〜ノ、あいつ、ビビッてる〜ノ〜）

心の中でそう歌うクロノスであったが、そこに鮫島校長から話があった。

「これはまたずいぶん思い切ったことを」

伝説の決闘者を相手にするのはやりすぎ云々と言われるかとクロノスは予想すると鮫島校長を説き伏せるべく鮫島校長のいる席を見たが、いなかった。

「本物だ、本物だあ」

なんと鮫島校長は目に星を光らせながら決闘上の隅まで来て、迷宮兄弟を眺めていたのだ。

「な！っしかし校長！！彼らにーハ、これくらいーノことをしませーノとネ！第一他の生徒に示しがつきませんーノ！！」

そこにクロノスは迷宮兄弟による決闘を許可してもらおうと鮫島校長に詰め寄る。

しかし返ってきた返事は意外なものだった。

「おもしろい、やらせてみましょう」  
なんとGOサインが出たのである。

反対されるばかりだと思っていたクロノスは狐に抓まれたような顔になる。

「第一、彼はもうやる気だよ」

鯨島校長のこの言葉にクロノスは後ろを振り向く。

「この人たちが決闘者の王国で武藤遊戯、城之内克也と闘った決闘者か。おもしろい、相手にとって不足なしだね!!」

千影は両の拳を握り締めていたのだった。

それをみたクロノスは懲りないやつだと心の中で思いながら腰を上げる。

「ま、いいでシヨ」

そして千影、翔、迷宮兄弟に向けて言葉を放つ。

「では、両者位置について！」

決闘上の上に立ち、迷宮兄弟と対峙した千影は、翔が気負っているように見えたので声をかけることにした。

「翔、リラックスして。大丈夫、相手があの人たちでも私たちなら負けない」

「千影君・・・うん！」

千影の励ましを受けた翔は力強く頷くのだった。

準備が整ったところを見て改めてタッグ決闘のルールを説明する。

「タッグパートナーへの助言はだめなのーネ。パートナーのフィールドも、自分のフィールドとして扱えますーノ。いーデスーのネ？」

異議の言葉が上がらなかったので、クロノスは決闘開始を告げる。

「両者共通ライフポイント8000なのーネ!では」

「」「」「決闘っ!!!!」「」「」

千影& amp; 翔LP8000

迷宮兄弟LP8000

ここに制裁タッグ決闘の幕が開けた。  
まずは翔のターンだ。翔はデッキからカードをドロースべく手を伸ばす。

「僕のターン、ドロロー！」

そして手札を確認すると1枚のカードを手に取る。

「ジャイロイドを守備表示で召喚！」

ジャイロイド 3 ATK1000 DEF1000

「ターン終了だ！」

翔の次は頭に迷と書かれた迷路兄弟・兄だ。

「私のターン、ドロロー！地雷蜘蛛を攻撃表示で召喚してターン終了  
！！」

地雷蜘蛛 4 ATK2200 DEF100

タッグルールにより次は千影のターンだ。

「私のターンだ。ドロロー！私はLovサーヴァント・イフリートを攻撃表示で召喚！！」

Lovサーヴァント・イフリート 4 ATK1900 DEF700

「ターン終了！」

そして最後は頭に宮と書かれた迷路兄弟・弟だ。

「私のターン、ドロロー！カイザー・シーホースを攻撃表示で召喚！  
！」

カイザー・シーホース 4 ATK1700 DEF1650

(最初のターンは全員攻撃できない、次のターンが勝負だ！)

ここまでの成り行きを見てきた翔が心の中でそう呟くのだったが、  
迷宮兄弟の弟が早くも仕掛けてきた。

「私は魔法カードを発動、生け贄人形！このカードは自分の場のモ  
ンスター1体を生け贄にささげること発動する」

迷宮兄弟・弟は迷宮兄弟・兄とアイコンタクトを取ると迷宮兄弟・  
兄は頷いた。

「地雷蜘蛛を生け贄に、手札から 7のモンスターを特殊召喚する  
！出でよ、風魔神・ヒューガ！」

迷宮兄弟・弟の場から風が逆巻き、そこから1体のモンスターが姿  
を現した。

風魔神・ヒューガ      7    ATK 2400    DEF 2200

迷宮兄弟のこの連係プレーに三沢と明日香は舌を巻いていた。

「タッグパートナーのモンスターを生け贄に、強力なモンスターを  
呼び出した」

「1ターン目からこの連携。流石だわ」

迷宮兄弟・弟は迷宮兄弟・兄の方を向きながら口を開いた。

「すまない、兄者」

「何、お前のためなら犠牲にもなるっ」

迷宮兄弟・兄のその言葉に迷宮兄弟・弟は首を横に振る。

「いや、礼をせねば私の気が済まぬ」

そして手札のカード1枚を選び出した。

「魔法カード、闇の指名者。このカードは指名したカードが相手の  
デッキにある場合、そのカードを相手の手札に加えることができる

！私が指名するのは」

「迷宮兄弟・弟は迷宮兄弟・兄を指差して言った。」

「雷魔神・サンガ！！」

それを聞いた迷宮兄弟・兄は口元に笑みを浮かべた。

「ふっふふ、ありがたい。もちろん我がデッキにサンガはある」

迷宮兄弟・兄が手札にサンガのカードを加えた所を確認するとターン終了を宣言する。

「私のターンは、これで終了だ」

その完璧なコンビネーションに驚愕している千影と翔に向かって口を開く。

「お前たちに」

「タッグ決闘の真髄を」

「教えてさしあげよう！！」

その気迫とコンビネーションに、翔は圧倒されてしまった。

「そんな・・・ターン目からこんな強力なモンスターを召喚するなんて・・・」

そう呟く翔は、千影を見ると千影の方から声がかかってきた。

「翔、大丈夫。この数日間君はあんなにがんばったじゃないか。だから自分にもっと信じて」

この言葉を聞いた翔は千影に力強くうなずいた。

「うん、そうだよね！」

（僕を信じてくれる千影君や、勝利を待ってるアニキのために。そして）

翔は視線を会場にいる丸藤亮に移す。

（お兄さんに僕の今の力を見せるんだ！！）

その心の叫びとともに、翔はデッキに手を伸ばす。

「僕のターン、ドロー！」

そのカードを見た翔は1つ頷く。

「僕は手札の魔法カード、融合を発動！場のジャイロイドと手札のスチームロイドを融合してスチームジャイロイドを攻撃表示で融合

召喚！！」

スチームジャイロイド      6      ATK 2200      DEF 1600

「僕は見逃していないぞ！ヒューガを召喚するために生け贄にされたのは迷宮兄弟・兄のモンスター、つまり今の迷宮兄弟・兄のフィールドはがら空きだって言うことを！！」

その翔の宣言に迷宮兄弟・兄の表情は驚愕に染まる。

「しまった！！」

「いけー、スチームジャイロイド！迷宮兄弟・兄に直接攻撃だ！！」

そして翔はスチームジャイロイドで攻撃を仕掛けるが

迷宮兄弟・兄は驚愕に染めた顔を喜色に変えた。

「ふん、なんてな。そんなことは百も承知よ！」

迷宮兄弟は互いにアイコンタクトを取ると、迷宮兄弟・弟は頷いた。

「そのとおり。風魔神・ヒューガの特殊効果発動！リフレクション・ストーム・バリケード！！」

迷宮兄弟・弟の声とともにヒューガの発した風の障壁により、スチ

ームジャイロイドの攻撃は無効になってしまった。

「風魔神・ヒューガの特殊効果は相手からの攻撃を1回だけ0にする！！」

この攻防を見ていたクロノスは機嫌よく笑っていた。

「さすがドロップアウトボーズ、考えなしデスーネ。単純な攻撃などあの2人には通用しないーノネ」

そして会場の誰もが翔の攻撃は失敗したと思っていた。

だがしかし、翔はここで終わらなかった。

「まだまだ！僕は速攻魔法、融合解除を発動！この効果により、スチームジャイロイドをスチームロイドとジャイロイドに戻す！！」



スチームロイド 4 ATK1800 DEF1800  
ジャイロイド 3 ATK1000 DEF1000

「そして、僕の戦闘フェイズはまだ有効だ！ジャイロイド、迷宮兄弟・兄に直接攻撃！！」

まさか目の前の少年がこれほどの戦略を取ってくることを予想できていなかったのか迷宮兄弟は揃って驚きの声を上げた。

「何っ!?!」

そして、ジャイロイドの攻撃が迷宮兄弟・兄に決まる。

「ぬううううっ!」

迷宮兄弟LP7000

「そして、スチームロイドで迷宮兄弟・弟のカイザー・シーホースを攻撃する！」

スチームロイドが黒煙を噴出しながらカイザー・シーホースに迫る。

「この時、スチームロイドのモンスター効果発動！相手モンスターに攻撃するときダメージステップの間、攻撃力は500ポイント上昇する！！」

スチームロイド 4 ATK2300 DEF1800

攻撃力の上がつたスチームロイドの攻撃によりカイザー・シーホースは破壊され超過ダメージが迷宮兄弟を襲う。

「ぐぬうううう!!」

迷宮兄弟LP6400

「僕はさらにリバーズカードを1枚セットしてターンを終了!!」

そして翔のターンエンド宣言とともにスチームロイドの攻撃力は元

に戻ったのだった。

スチームロイド 4 ATK1800 DEF1800

これを見て驚いたのは迷宮兄弟ではなかった。

「どういうことですよーノ!?あのダメダメな丸藤翔が伝説の決闘者に先制攻撃を入れるなんーテ!?」

クロノスは手を頭に当てながら表情を驚愕に染めたことを筆頭に、会場のほとんどの人間がクロノスと同様のことを思っていた。

しかし、ここにこの結果が当然だと知っている者たちがいる。

「やるじゃんか。特訓の成果あつたな、翔」

「なんてたつて、千影とマンツーマンで決闘のこと猛勉強したもん  
な」

2人と同室の十代と隼人だった。

「ナイスだよ、翔。ちゃんとできるじゃない」

自分が千影から学んだことをしっかりと生かした翔を千影が褒めた。

「うん、これも千影君のおかげだよ」

「それは何よりだね。でもまだ決闘は始まったばかり。気を引き締め  
めていこう」

「うん!」

そして力強く頷くと、2人は迷宮兄弟に向き合った。

そんな2人を見て、してやられた迷宮兄弟・兄は忌々しげに言葉を  
放ちながら、デッキに手を伸ばす。

「おのれ、よくもやってくれたな!私のターン、ドロー!」

そして、それを見た迷宮兄弟・兄の表情は笑みに変わった。

「手札から魔法カード、クロス・サクリファイスを発動!」

それを見た千影は驚愕の声を上げた。

「あのカードは!!!」

その驚く千影を尻目に迷宮兄弟・兄はカードの効果を発動する。

「このカードは自分の場にモンスターがなく、相手の場にモンスターがある時、相手の場のモンスターを生け贄召喚の生け贄にすることが出来る!」

「そんな!?!」

これを聞きなぜ千影が驚きの声を上げたのかを翔は理解した。

「私は丸藤翔の場に存在するジャイロイドとスチームロイドを生け贄に、水魔神・スーガを召喚!」

水魔神・スーガ      7    ATK2500    DEF2400

翔の場から2体のモンスターが消え、相手の場には強力なモンスターが出現したことに翔は驚愕した。

「僕のビークロイドたちが!!!」

しかし、迷宮兄弟・兄はこれだけでは終わらなかった。

「まだまだ!私は魔法カード、死者蘇生を発動し、墓地から地雷蜘蛛を特殊召喚!!!」

地雷蜘蛛      4    ATK2200    DEF100

「さらに魔法カード、生け贄人形を発動!地雷蜘蛛を生け贄に、雷魔神・サンガを特殊召喚!!!」

雷魔神・サンガ      7    ATK2600    DEF2200

その3体の魔神を従えた迷宮兄弟は笑い声を上げ千影と翔に言い放った。

「くっくくく、これで揃った!」

「今見せてやろう、究極のモンスターを!!!」

その言葉とともに3体の魔神は輝きに包まれる。

「雷魔神・サンガ、水魔神・スーガ、風魔神・ヒューガがフィールドに揃ったとき、この3体を生け贄とし、ゲート・ガーディアンを特殊召喚する!!!」

迷宮兄弟・兄のこの言葉とともに、3体の魔神は合体し新たな姿を現した。

ゲート・ガーディアン      11    ATK3750    DEF3400

その威容の前に千影と翔は気圧された。

「ゲート……」

「……ガーディアン」

呆気にとられる2人を尻目に迷宮兄弟・兄は攻撃をしかける。

「行け、ゲート・ガーディアン！イフリートを攻撃！魔神衝撃波！」

ゲート・ガーディアンから放たれた圧倒的な衝撃波はあっという間にイフリートを飲み込み押しつぶしたのだった。

「くうううっ！」

千影 & 翔 LP6150

その圧倒的な攻撃力を観客席で見ていた三沢は口を開いた。

「彼らのデッキはタッグ決闘用に組み上げられたデッキ。流石に隙がない」

横に座る明日香も頷く。

「それに兄弟だけに息もぴったりだね。翔君自身が腕を上げたといつても、このコンビネーションを前に勝てるの？」

明日香はそう言つと心配げに千影と翔のほづを見るのだった。

「見たか！これぞ我等のタッグ決闘！！」

迷宮兄弟の言葉に、先ほどまでであった勢いを殺がれた翔が萎縮してしまっていた。

「そんな、たった1ターンで僕たちの場のモンスター全部がやられるなんて……」

そんな完全に萎縮してしまつた翔を見たクロノスはニヤケタ笑みを浮かべていた。

（いいデスーヨ、これいいデスーヨ。丸藤翔のあの攻撃には驚きましたーガ、所詮は気の弱いドロップアウトボーイ。そこから切り崩していくのーネ）

そのクロノスの思惑通り、翔は目の前の危機に思考が悪い方向へと進んでいた。

（やっぱり僕は千影君の足を引っ張つてるだけなのかな……）

そして、千影の方を見るが、千影は翔を笑顔で見ている。

「翔、君は何もミスはしていない。相手が1枚上手だっただけさ。だから、もっと自分に自身を持って」

「千影君……うん」

千影のこの言葉に翔は頷き、表情から若干であるが怯えが消えた。

「私はリバーズカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

迷宮兄弟・兄のターンエンド宣言を聞いた千影は反撃の一手を打つべくデッキに出を伸ばす。

「私のターン、ドロー！」

そして引いたカードを手札に加えた千影は、その手札から1枚のカードを選びだした。

「私はL.O.Vサーヴァント・ヴォーパルバニー - を攻撃表示で召喚する！」

LoVサーヴァント・ヴォーパルバニー - 4 ATK1000  
DEF500

「このモンスターが召喚されたとき、デッキからカード1枚をドロ  
ーする！」

デッキから新たにカードを加えた千影はさらにもう1枚のカードを  
選び出す。

「さらに魔法カード、二重魔法を発動！手札の魔法カードをコスト  
に迷宮兄弟・弟が使った生け贄人形を使わせてもらうー！」

「何っ!？」

驚く迷宮兄弟・弟を尻目に千影はカードを天高く掲げ、召喚する。

「ヴォーパルバニーを生け贄に 7のLoVサーヴァント・ワイバ  
ーン - を特殊召喚！」

LoVサーヴァント・ワイバーン - 7 ATK2400 DE  
F2400

千影の召喚した翼竜は雄雄しき咆哮と共に、千影のそばに降り立っ  
たのだった。

そのモンスターの攻撃力を見た迷宮兄弟・弟は鼻で笑った。

「ふん、最上級モンスターを召喚したところで、それでは我等のゲ  
ート・ガーディアンは倒せんぞ！」

しかし、千影はそんな迷宮兄弟・弟に力強い言葉を放つ。

「何もゲート・ガーディアンを倒すことが勝利の条件ではない。貴  
方たちのライフポイントを削りきれば私たちの勝利なのだから！そ  
してLoVサーヴァント・ワイバーン - は攻撃力、守備力を800  
下げることによって戦闘での破壊を無効にする効果がある！！征け、ワイ  
バーン！迷宮兄弟・弟に直接攻撃ー！！」

ワイバーンから放たれた火球がから空きの迷宮兄弟・弟に襲い掛か

る。  
「ぬううううっ!!」

迷宮兄弟LP4000

「くっ」

「なかなかやるな」

このリスクを恐れない千影の攻撃に迷宮兄弟は目の前に立つ銀髪紅眼の決闘者が只者でないことを今はつきりと認識した。

「すごいや、千影君！」

強力モンスターを前にしてもまったく引かない千影の姿勢に翔は尊敬の眼差しで千影を見つめる。

「うん。私のターンはこれで終了だ」

そんな千影も翔に頷きつつターンエンドを宣言したのだった。

「私のターン、ドロー」

自分のターンが来た迷宮兄弟・弟は引いたカードをそのまま決闘盤に差し込んだ。

「私は装備魔法、メテオ・ストライクを発動！ゲート・ガーディアんに装備する!!」

そしてメテオ・ストライクがゲート・ガーディアンへと装備された。

「このカードを装備したモンスターが守備表示モンスターを攻撃したとき、その守備力を上回っていれば、その差だけ相手プレイヤーにダメージを与える！」

この迷宮兄弟・弟の言葉に翔が待ったをかける。

「そうはさせない!!リバーズカード発動、サイクロン!!このカードは場の魔法・罠カード1枚を破壊する!メテオ・ストライクは使わせない!!」

翔は自分の場に伏せてあったサイクロンを発動、迷宮兄弟・弟のメテオ・ストライクを壊しにかかる。

しかし、迷宮兄弟のコンビネーションはさらにその上を行っていた。

「罨カード発動！アヌビスの裁き！！」  
迷宮兄弟・兄が自分の場に伏せてあったリバーズカードを発動したのだ。

「このカードは手札1枚をコストに相手が使った魔法・罨カード破壊効果の魔法カードを無効にする」

迷宮兄弟・兄が手札1枚を墓地に捨てることで、ゲート・ガーディアンに装備されたメテオス・トライクに迫っていたサイクロンが？き消された。しかしそれだけでは終わらない。

「さらに相手モンスター1体を破壊し、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！」

この効果により戦闘で破壊されない効果を使うまもなく、ワイバーンは爆散。2400のダメージが千影と翔を襲う。

「くうううううっ！！」

千影 & amp ; 翔 LP 3750

まんまと自分たちの罨にかかった千影と翔を見ながら、迷宮兄弟・弟はさらなる一手を打つ。

「そしてディフェンス・ウォールを守備表示で召喚」

ディフェンス・ウォール      4    ATK0    DEF2100

「このディフェンス・ウォールが表側守備表示で存在するとき、相手モンスターは全てこのモンスターを攻撃対象とする！私のターンはこれで終わりだ」

この隙のない戦術を目の当たりにした三沢と明日香は心配げに千影と翔を見つめていた。

「攻撃はゲート・ガーディアン、守備はディフェンス・ウォール・  
・全く隙がない」



「彼らはタッグ決闘を知り尽くしている。それに比べて彼らはタッグ決闘は始めてだし、この猛攻に翔君の戦意が持つのかしら……」

明日香の心配どおり、決闘開始してからあつた翔の自信は完全になくなっていった。

千影に教えられた戦術をとって先制攻撃を当てはしたが、その後のサイクロンによるサポートが結果として、千影の破壊耐性モンスターを失うことになってしまったことで、翔の心は半ば折れかかっていた。

「ぼ、僕のターン」

その証拠に声は振るえ、及び腰になっていた。

「僕はサイクロイドを守備表示で召喚」

サイクロイド      3      ATK800      DEF1000

「ターンエンド」

結局モンスターを守備表示で出すことができな自分翔は自身に嫌気が差してきた。

(ごめん千影君、僕のせいで迷惑をかけて……君はああ言ってくれたけど、やっぱり僕は……僕は……)

しかし、翔に自虐に浸る時間はなかった。

「私のターン、ドロー！ いけえ、ゲート・ガーディアン！ 魔神衝撃波！！」

迷宮兄弟・兄のゲート・ガーディアンが放った攻撃がサイクロイドをいともたやすく粉碎した。

「メテオ・ストライクの効果でプレイヤーに貫通ダメージを与える！！」

迷宮兄弟・兄の宣言と共に超過ダメージの2750が翔に襲い掛かった。

「うづうづうつ、ぬわああああっ!!」

この圧倒的な攻撃に会場のほとんどの人間が息をのんだ。

千影& amp・翔LP1000

翔はたまらず片膝をついた。

そんな翔を前にした迷宮兄弟は、絶対の自信を言葉にして放つ。

「我ら兄弟の前に

「敵は無し!!」

なんとか翔は立ち上がったが、この攻防を見ていた三沢は天を仰いだ。

「やはり最初から無理だったんだ。いきなり初めてのタッグ決闘で相手が悪すぎる」

その言葉に明日香も頷く。

「うん。タッグ決闘はひとりひとりの決闘者の力はもちろん、パートナーとのコンビネーションが重要。だけど即席のタッグでは限界がるわ」

「千影と翔とではデッキの性質も違いすぎる。タッグ用の調節もしていないようだし・・・ここまでなのか」

「千影、翔、勝って寮に帰ってくる約束だろう! きばれえ!!」

「翔、まだ決闘は終わってないんだぞ! がんばれ!!」

隼人と十代は千影と翔にあらんかぎりの声援を送る。

「くっくくくく」

万丈目はこの光景を肩を揺らしながら笑って見ていた。

(伝説の決闘者の前に手も足も出ないか姫宮千影。無様に叩き潰されるがいい!!)

暗い笑みを湛える万丈目に取り巻き2人は万丈目を見るが、それに

万丈目は全く気がつかない。

（あいつと遊城十代が現れてから全てがおかしくなった。クロノス教諭からの信頼を失い、明日香さんの前で恥をかき、プライドを踏みにじられて・・・俺は！！）

そして万丈目は自分の手が白くなるほどきつく握り締めたのだった。

迷宮兄弟の猛攻を満足げな笑みでクロノスは見ていた。

「ヒヒヒヒ。いいデスーヨ、コレいいデスーヨ。流石はデュエルキングと闘った伝説の決闘者なのーネ。生意気なドロップアウトボーズもコレで終わりって感じなのーネ、アツハハ」  
そして笑い出すが、鮫島校長の声がそれを遮った。

「決闘は最後までわからないものだよ、クロノス君」

この鮫島校長の言葉に、クロノスは余裕たつぷりといった感じで口を開いた。

「わかってますーノ、校長先生。しかしこれ以上苦しみを長引かせるよりーモ、いっそ退学を言い渡してやるのーガ、彼らのためではないーノ」

しかし鮫島校長は千影の方を指差し言った。

「当の決闘者が諦めていないのにかね」

指し示された先にいる千影の表情は未だ戦意に満ち満ちていた。

その表情を見るやクロノスは驚きの声を上げた。

「オレンジペコー！なんデー、かんデー！わかりませーン、塩海老セーン！！」

それはそうだ。デュエルキングと闘ったというネームバリューだけでなく、実際にも目の前には攻撃力3750の超大型モンスターがいるこの状況。

しかし千影は活路を見出そうとしているのだ。

そんな千影の表情が気に食わないのか迷宮兄弟は口を開いた。

「ふん。その目、ここまで来て未だ諦めていないらしい」



「そしてL0Vサーヴァント・レオンタケンタウロス・のモンスター効果発動！1ターンに1度、フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更できる！ゲート・ガーディアンを守備表示に変更！」

レオンタケンタウロスの眼力に当てられたゲート・ガーディアンは守備表示になった。

この千影の一手に迷宮兄弟・兄は怪訝そうな顔になった。

「守備表示にしてどうするつもりだ？ゲート・ガーディアンは守備力とて3400あるのだぞ、貴様たちに倒せるはずもない」

迷宮兄弟・弟もそれに続いて口を開く。

「それにディフェンス・ウォールがある限り、他のモンスターに手出しはできません！」

しかし、千影は意味ありげな笑みを浮かべるとターンの終了を宣言した。

「私はカードを1枚セットしてターン終了」

迷宮兄弟・弟はその笑みが気になりながらも自分の仕事をこなすべくデッキからカードを引く。

「私のターン、ドロ！。私はカードを1枚セットしてターンエンドだ」

そして迷宮兄弟・兄のほうを向き、後を託す。

「兄者、後は任せた」

迷宮兄弟・兄も獰猛な笑みを持って応えた。

「任せておけ、次で決めよう」

そんな中、とうとう翔のターンが回ってきた。

翔は自分が次にとるべき手を頭に思い浮かべながら、千影の方を向いていった。

「千影君さ、1つ効いていいかな？」

その言葉に千影は？を浮かべながら翔と目を合わせた。

「うん、なに？」

「なんで千影君はそんなにまで僕を買ってくれるの？僕はお兄さんやアニキほど強くないし、臆病だし、なんでなの？」

この翔の問いに千影は笑みを浮かべながら答えた。

「だって翔、君は本当に楽しそうに決闘をするからだよ」

「えっ!？」

「君はどんなカードも大事にして、楽しそうに決闘してる。そういう決闘を心から愛している人が弱いわけではないんだ。それは十代や隼人だってそうだ。だから翔、そんな君だからこそ彼らに勝てると確信してるんだ！」

この言葉に、翔の心に巣くっていた恐れは消えた。

(そうだ、僕はもう逃げないって決めたんだ！そして僕をここまで信頼してくれる千影君のためにも絶対に負けられない!!そのためには )

翔は自分のデッキを見下ろした。

(あのカードがないと逆転はできない。でも今の僕の手札には、そのカードがない……)

今の自分の手札にそのカードはない、ならばこのドローでそのカードを引き当てるしか道はない。

(頼む、来てくれ！僕は千影君やアニキたちと一緒にいたいんだ！)

目を上に向けて、翔は勢いよくカードを引き抜いた。

「僕のターン、ドロー!!」

そして、そのカードを見た翔の顔は笑みへと変わった。

「千影君！」

その笑みを受け取った千影は腕を振り上げ言った。

「カードたちが応えてくれたようだね。今度は君がそれをもってカードたちに応える番だよ、翔！」

「うん！僕はドリルロイドを攻撃表示で召喚!!」

ドリルロイド 4 ATK1600 DEF1600

「このカードは守備表示モンスターを攻撃したとき、そのモンスターを破壊する！」

「なにっ!?!」

迷宮兄弟が、翔のドリルロイドの効果に驚く中、千影は満足げに頷いていた。

「いけえ、ドリルロイド！」

ドリルロイドがゲートガーディアンに迫るが、その前にディフェンス・ウォールが立ちはだかった。

「甘いわあ！」

そしてドリルロイドの攻撃はディフェンスウォールを穿ち、そのモンスター効果を持ってディフェンス・ウォールを破壊した。

千影& a m p・翔LP500

しかし未だにゲート・ガーディアンは健在。さらにダメージ計算は適用され、ただでさえ少ないライフポイントが風前の灯となった。

「残念だったな」

「我らの連携は無敵。ゲート・ガーディアンを倒すことは不可能！」この迷宮兄弟の言葉に千影は笑みを湛えつつ口を開いた。

「それはどうかな？翔！」

千影の呼びかけに翔は頷いた。

「ディフェンス・ウォールが攻撃を受けるのはわかっていた。でも本当の狙いはそうじゃない！」

そう言うや否や翔は手札のカード1枚を選び取った。

「僕は手札から魔法カード発動！シールドクラッシュュー!!このカードの効果はフィールドに守備表示で存在するモンスター1体を破壊する！破壊するのはゲート・ガーディアン!!」

翔の宣言によりシールドクラッシュュより放たれた衝撃波が守備表示のゲート・ガーディアンを完膚なきまでに破壊した。

「わ、我らのゲート・ガーディアンが！！」  
「破壊されるとは！！」

この丸藤翔の金星に会場全体が沸いた。

「やったあ！」

「よっしゃ！やるじゃんか、翔！」

早とは手をたたきながら喜び、十代も我がことのように喜ぶ。

その十代や隼人から距離をとったところに立つ亮は、この決闘を今まで表情一つ変えずに見ていたその顔に微笑を浮かべていた。

三沢もこのことを内心では喜んではいたが、まさか翔があのモンスターを倒すとは夢にも思っていなかった。

「まさか、彼がゲート・ガーディアンを倒すとはね」

「お互いのデッキを調整してないと思っただけど、それでよかったのかも」

この明日香の言葉に三沢は「えっ？」となった。

明日香は千影と翔を見ながら言葉を続ける。

「彼らは迷宮兄弟のようなタッグ用のデッキじゃないわ。だけどそれぞれデッキの特徴を知り、上手く連携させている。こういうタッグがあってもいいと思うわ」

この言葉に三沢も笑顔で相槌を打ちながら千影と翔に視線を戻すのだった。

しかしここに、この光景を信じられないと思う人間が1人。

誰であろう、おなじみのクロノスだった。

「信じられないーノ・背中かいーノ・・・あのドロップアウトボーイズが伝説の決闘者の最強モンスターを！？」

このクロノスの言葉に鮫島校長はニコニコとした顔で当然のようにこう言い放った。

「おかしいことはないですよ。彼らもまた、このデュエルアカデミ



アの生徒なんだから」

そんな中、大徳寺はファラオの頭をなでながら口を開いた。

「ふうん、丸藤君もなかなかやりますにゃあ。しかし、これでマズイことになったかもしれないにゃ」

そして、何かを思わせるような言葉を吐くと千影と翔のほうを見るのであった。

「ターンエンドだ」

このターンエンド宣言を聞いた迷宮兄弟は渋い顔をしながら口を開く。

「少し油断していたようだ」

「まさか彼らにゲート・ガーディアンが破れるとは  
しかし、その表情を一転、獰猛なものへと変化させた。

「だが！！」

この言葉に翔は「えっ？」という表情になる。

「我らの無敵の連携はこれからだ！私のターン、ドロー！！」

そして新たなカードを手札に加えた迷宮兄弟・兄は新たな一手を打つ。

「私は手札より魔法カード発動、ダークエレメント！このカードの効果はゲート・ガーディアンが墓地にあるとき発動する！！ライフポイントを半分払い」

迷宮兄弟LP2000

墓地に眠るゲート・ガーディアンから禍々しいオーラが上がり、それはデッキに眠る1枚のカードを呼び起こす。

「デッキから闇の守護神・ダーク・ガーディアンを特殊召喚する！」

闇の守護神・ダーク・ガーディアン 12 ATK3800 D

EF3500

それは下半身が蜘蛛の巨大な戦士だった。

「そ、そんな！3800だなんて!？」

そのゲート・ガーディアンを超える攻撃力の高さに翔は気圧される。

「これが決まれば我らの勝ちだ！行け、闇の守護神・ダーク・ガーディアン！！ドリルロイドを攻撃！ダーク・シヨック・ウエーブ！！」

ダーク・ガーディアンが巨大な戦斧をドリルロイドに叩き落とそうと構える。

誰もが固唾を呑んだその時！

「手札からモンスター効果発動！Lovサーヴァント・グリフォン  
-！！このカードは攻撃力1500以上の相手モンスターが攻撃したとき、手札から墓地に捨てることにより発動！相手モンスター1体の攻撃を無効にする！！」

千影が発動したグリフオンの効果でダーク・ガーディアンの攻撃は無効になった。

しかし、この攻撃を無効にしたとしても迷宮兄弟の圧倒的有利に変わりはなく、迷宮兄弟たちは余裕の表情で言葉を放った。

「この攻撃をかわすとは」

「中々やる。しかし次はない！」

「そしてダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない無敵の守護神！」

「さらに全てのモンスターはダーク・ガーディアンを攻撃対象にしなければならぬ特殊効果も持つ！この最強のダーク・ガーディアンがいるかぎり、今度こそお前たちに勝機はないのだ！！」

その言葉に翔は心を折りがけるが、しかしなんとか一歩踏みとどまった。

（怖い。こんな勝ち目も見えないモンスターを相手にするのが怖い、完膚なきまでに負けるのが怖い。だけど  
）  
心を恐怖に支配されながらも翔は眸に闘志を燃やして目の前に立つ

ダーク・ガーディアンを睨み付けた。

（僕をこんなにも信頼してくれる千影君や、僕らの勝利を待ってるアニキの期待に応えられないことの方がずっと怖い！だから僕は！）

そしてその心のうちを声に出し、宣言する。それを違わぬように、掴み取れるように。

「だから僕は　　僕たちは勝つんだ！絶対に！！」

この宣言を聞いた、千影は嬉しそうな顔で「うんうん」と頷いていた。

しかし、迷宮兄弟は未だに余裕を持って口を開いた。

「このダーク・ガーディアンを前にして勝つというか」

「その気概はよしとしておこう」

「私のターンは終了だ」

このターンエンド宣言を聞いた千影はデッキに手を伸ばす。

（翔、君のその言葉、絶対に嘘にはさせないから！）

翔の思いを胸に、その眸を紅蓮の真紅に輝かせながら。

「私のターン、ドロ―！さらにL o Vサーヴァント・グリフォン・のもう1つのモンスター効果！無効化したモンスターの攻撃力が2500以上であった場合、次の自分のドロ―フェイズにもう1枚カードをドロ―することができー！！私はもう1枚のカードをドロ―！！」

そして、その手札を確認した千影は頷く。

「リバーズ罨オープン、リビングゲデッドの呼び声！この効果により墓地からL o Vサーヴァント・イフリート・を攻撃表示で特殊召喚する！！」

L o Vサーヴァント・イフリート・　4　ATK1900　DE  
F700

「さらに手札からチューナーモンスター、L o Vサーヴァント・ワ

「ウルフ - を召喚！」

LoVサーヴァント - ワーウルフ -                    3    ATK 1300    DE  
F800

「私たちの血闘をここに見せる！ 3、LoVサーヴァント - レオントケンタウロス - と 4、LoVサーヴァント - イフリート - に 3、LoVサーヴァント - ワーウルフ - をチューニング！！」  
その千影の言葉と共にワーウルフが雄たけびを上げ、その身を星にすると残りの2体も星になり空を飛び交う。

「雄々しき星が、集いてここに混沌を降ろす。混沌よ顕現せよ！ シンクロ召喚！ 汝、混沌の竜戦士LoVサーヴァント - グレンデル -  
！！」

LoVサーヴァント - グレンデル -                    10    ATK 3200    D  
EF1600

光が弾けたそこには雄々しき戦士が立っていた。  
竜の翼と竜の尾を持ち、竜の鉤爪のような手には巨大な女神像からなる大剣を携え、その眼光は太古の神々さえも恐怖するほどの力を湛えている。

しかし、このグレンデルを前にしても未だにダーク・ガーディアン擁する迷宮兄弟は自分たちが有利だと信じて疑わなかった。

「3体合体のモンスターか」  
「しかしダーク・ガーディアンの攻撃力は3800。そして戦闘で破壊されることはない」

「なのにどうしようというのだ」  
その迷宮兄弟の言葉に千影は、

「こうするのさ。翔、君のドリルロイドの力をもらおうよ」  
翔にそう言うと、翔の返事を聞かぬままにグレンデルのモンスター

効果を発動させた。

「LoVサーヴァント・グレンデルのモンスター効果発動！このカードは1ターンに1度、自分フィールド上のモンスターを生け贄に捧げることで、生け贄に捧げたモンスターの攻撃力の半分を得ることができる！！私はドリルロイドを生け贄にその攻撃力の半分、800ポイントをグレンデルに加算する！！」

LoVサーヴァント・グレンデル - 10 ATK4000 D  
EF1600

ドリルロイドの攻撃力の半分を得たグレンデルの攻撃力はダーク・ガーディアンを抜いた。

それを見た迷宮兄弟は驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

「征け、グレンデル！ラグナロク・テンペスト！！」

グレンデルの放った光の奔流はダーク・ガーディアンを呑み込む。

迷宮兄弟LP1800

しかし

「無駄だ！ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない！！ダメージは通ってもそれでは我らを倒すまでにはいたらん！！」

「そのターンが終われば、グレンデルの攻撃力は元に戻る！その時に粉碎してくれるわ！！」

迷宮兄弟の言葉通り、ダーク・ガーディアンは健在だった。

「そんなことは百も承知の上、LoVサーヴァント・グレンデルのモンスター効果はもう1つある！それは相手プレイヤーに与えたダメージ分、自分のライフポイントを回復する！グレンデル、ホーリー・レイ！！」

その千影の言葉と共にグレンデルが放つ光が優しく千影と翔を包み、

ライフポイントを僅かだが回復させた。

千影& amp; 翔LP700

「私のターンはこれで終了だ」

LoVサーヴァント - グレンデル - 10 ATK3200 D  
EF1600

千影のエンド宣言と共にグレンデルの攻撃力は元に戻る。

そして、そのエンド宣言を聞いた迷宮兄弟・弟はこれ以上、グレンデルに効果を使わせないために、ここで勝負に出た。

「私のターン、ドロー！リバーズ畏発動、一騎打ち！！このターン、お互いのプレイヤーは最も攻撃力の高いモンスター1体で戦闘を行う！ダーク・ガーディアンでグレンデルを攻撃！！」

ダーク・ガーディアンの攻撃がグレンデルを襲い、超過ダメージ600が千影に襲い掛かる。

「うぐううっ！」

千影& amp; 翔LP100

しかし煙が晴れた先には破壊されたはずのグレンデルがあった。

「なんだと!？」

驚く迷宮兄弟・弟に千影は口を開いた。

「チューナーモンスター、ワーウルフによってシンクロ召喚されたモンスターは戦闘によっては破壊されなくなる。つまりグレンデルはダーク・ガーディアンと同じ能力を身に着けている訳さ！」

この千影の言葉に迷宮兄弟は余裕を湛えながら言った。

「ふん、それでも貴様らのライフポイントは風前の灯火」

「ここまでよく持ったと褒めてやるっ」

「しかし次で終わりだ。ターンエンド！」

迷宮兄弟・弟のターンエンド宣言を聞いた千影は翔に向かって言葉を放った。

「さあ翔、君の目指すリスペクト決闘を見せて！そして2人で勝利をつかもつー！」

その言葉に翔は胸に熱いものがこみ上げてくる。

「千影君　　うんー！！」

（もう怖くはない。それ以上に僕はこの学園で強くなりたいと本当に感じている。お兄さんのように、アニキのように、そして隣に立つ千影君のように！そのために来て、僕のカード！僕と千影君と一緒に未来を掴み取るうー！！）

そう心で祈りつつ、翔はカードを引くべくデッキに手をかけた。

「僕のターン、ドローー！！」

そして来たカードは

（ありがとう、僕のデッキ。そして僕は今こそ封印を解く！）

「僕は手札から魔法カード発動！パワー・ボンドー！！」

遠回りをした。逆走もした。しかし、ここに今確かに『丸藤翔』という1人の決闘者が誕生したのだ。

「このカードは機械族専用の融合魔法！千影君行くよー！！」

その翔の言葉に千影は力強く頷いた。

「もちろん！！」

「僕の手札にあるユーフォロイドと場にあるL.O.Vサーヴァント・

グレンデルを融合！出でよユーフォロイド・ファイターー！！」

グレンデルとユーフォロイドは火花を散らしながら1つになる。

巨大な円盤に聳え立つ竜戦士がそこにいた。

「ユーフォロイド・ファイターは融合素材にした2体のモンスターの攻撃力の合計がこのモンスターの攻撃力、守備力になる！」

ユーフォロイド・ファイター　　10　ATK4400　DEF4

400

「それがどうした！多少攻撃力が高くとも、ダーク・ガーディアンは攻撃では破壊されないのは先のグレンデルの攻撃で承知しているはず！」

この迷宮兄弟・兄の言葉に翔は勝利を確信した笑みを持って応える。  
「わかつてるさ！さらにパワー・ボンドの効果発動！特殊召喚された融合モンスターの攻撃力は2倍になる！！」

ユーフォロイド・ファイター          10    ATK 8800    DEF 4  
400

この攻撃力を見た迷宮兄弟の表情は驚愕に変わった。

「攻撃力8800だとおおっ！！！」

「千影君が最初に言ったとおり、モンスターを破壊することが勝ちなんじゃない。ライフポイントを0にした方が勝ちなんだ！いけえ、ユーフォロイド・ファイター！フォーチュン・テンペスト！！」  
グレンデルを遥かに超える圧倒的な光の奔流がダーク・ガーディアンを呑み込み、後ろにいる迷宮兄弟たちをも呑み込んだ。

「うぐわああああああっ！！！」

迷宮兄弟LPO

光が晴れた先、ダーク・ガーディアンは消え去り、オーバーキルともいえるダメージを受けた迷宮兄弟は共に膝をついてうな垂れていた。

それを確認した瞬間、会場は一気に大きな完成に包まれた。

十代と隼人は共に抱き合い、千影と翔の勝利を喜んでいた。

「やったああ！！！」



三沢も千影と翔の勝利に安堵の息ついていた。

「よかった、これで彼らはこの学園に残れる」

「強力なライバルになるのに嬉しいの」

この言葉に明日香はそう質問するが

「そんな君はどうなんだい？」

逆にそう聞かれてしまった。

その問いに少し照れながらも明日香は答えた。

「私は別に・・・私のせいで彼らが退学になったら寝覚めが悪いでしょう。それに千影たちが負けちゃったらファンクラブの子たちが暴動を起こすから、それに安心しただけ」

そうは言いつつも、明日香は顔をほころばせて千影と翔を見てこういった。

「でも本当によかった」

この結果を見た万丈目は忌々しげに千影を睨み付けた後、立ち上がってこの場から出て行くのであった。

こちらはクロノスが毎度のことながら千影と翔のあげた戦果に腰を抜かしていた。

「しょ、しょんナー！伝説の決闘者が負けるなんテー！！」

そう叫ぶ、クロノスの元は大徳寺が近寄るが反応しない。どうやらシヨックが大きすぎてアツチの世界にトリップ中のようなのだ。

そんなことはお構いなく、大徳寺はクロノスに向かって口を開く。

「いやあー、うちの生徒も中々やるでしょう。すごかったにや〜」  
そして大徳寺の抱いていたファラオがクロノスの顔をなめると、腰を抜かしてアツチの世界に行っていたクロノスが戻ってきた。

「んぎゃ！？ネコなノ！ネコ嫌いーノ、カプチーノ！！」  
どうやらクロノスはネコ嫌いのようだ。

クロノスの叫び声を聞きながら千影は翔の方を向いて言った。

「やったね、翔。君のおかげで勝てたよ」

「千影君、僕・僕・僕・う、うう・・・」

ここに来て感極まったのか翔はうれし泣きを始めた。

「おおーい、やったな！千影、翔！！」

そこに今までこの決闘を観戦していた十代が千影と翔の下に来ていた。

「アニキ・・・」

翔は涙を拭き、十代と笑いあう。

そして十代は、鮫島校長に向かって口を開く。

「千影と翔は勝ったぜ！これで文句ねえだろ！！」

この言葉に鮫島校長は頷きながら3人に声をかける。

「いい決闘を見せてもらった。もちろん君たちの退学は取り消そう」

鮫島校長からのお許しの言葉に3人は笑顔で「「「イエーイ！！

！！」」とハイタッチをしたのだった。

そんな彼らを見た鮫島校長は何かを思いついたようで、そのことを千影たち3人に向けて言った。

「そんなに元気があるなら宿題をあげよう」

この言葉に十代は凍りついた。

「今回の退学は取り消したが、立ち入り禁止区域に入ったペナルティは別だよ。決闘戦略についてのレポート30枚提出するように」

十代と翔がそのペナルティに呻き声をあげる中、千影は2人を宥めにかかった。

「でも、アレだよ。これを機にまた強くなれるじゃない」

そうは言うが、それで納得できないのが人情というもの。

「がんばりたまえ。それじゃ大徳寺君、監督を頼むよ」

鮫島校長はそういい残すと背を向けて去っていった。

それを見た十代は頭を抱えて、しゃがみ込む。

「うわああ！いやだああ！レポート30枚なんて拷問だああ！

！」

翔はそんな十代を見て苦笑すると、視線を亮に向け心でこう思った。

（お兄さん、僕やつと前に進めた気がするよ）

そしてパワー・ボンドのカードを取り出し、誓う。

（待ってて。きつと追いついて、そして追い抜くから！）

その心の声が聞こえたのか、亮は翔に微笑を贈るとその場から去っていったのだった。

亮の背中を視線で追う中、千影が翔に声をかけてきた。

「カイザー亮は君を決闘者として認めてくれたはずだよ、翔」

それに笑顔で翔は答えた。

「うん。でも今は千影君に認めてもらえたことがすごく嬉しいよ。

いつ僕はお兄さんやアニキや千影君を超える決闘者になってみせる

！」

スタンディングオベーションに包まれる中、翔は新たにそう宣言したのだった。

## 第9話【DA学園篇】（後書き）

今回は「十代&amp;翔タッグデュエル」の前編後編をいつきよにお送りさせていただきました。

ただ、普通に正史をなぞっても面白くないので翔に熱血成分を注入してみました。

熱血が入ったことにより、これで翔の「スキル臆病」はなくなりましたが、「スキル傲慢」はまだ克服できていないので、翔はまだ少しへたれたキャラのままです。

今回の最強カード『LOVサーヴァント-グレンデル-』

10 ATK3200 DEF1600 光属性 戦士族 シン

クロ効果モンスター

チューナ+チューナー以外のモンスター2体

1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄にすることで、その生け贄にしたモンスターの攻撃力の半分をターン終了時までこのカードの攻撃力に加える。

相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えたとき、相手プレイヤーに与えたダメージの分だけ自分のライフポイントを回復する。

## 第10話【DA学園篇】

制裁タッグ決闘からはや数週間。

十代は木陰で平和を謳歌していた。

「ふう〜、いい風。ここ、俺だけのお気に入り場所」

そのお気に入り場所で横になっていた十代に近づいてくる影があった。

「アニキー！！」

その影は翔だった。

翔のその姿を見た十代は驚いた顔になって翔に聞いた。

「どうしてここがわかったんだ？」

その問いに翔は当然という風に答えた。

「どうしてって、アニキよくここでサボッてるじゃない」  
「さもありなん。」

「なんだ、バレバレかよ」

コレを聞いた十代は肩を落としたのだった。

「皆知ってるよ。って、そんなこと言いに来たんじゃなかった」

そんな十代を見つつ、翔は言葉を続けていたが、何のために十代を探していたのかを思い出すと途端に血相を変え喋り始めた。

まったくもって器用なやつである。

「アニキ、大変なことになっちゃった！」

この言葉に十代はただならぬ心配と悪い予感を感じた。

「なんだ、何があつたんだ？」

「隼人君が退学させられちゃうかもしれないんだ！！」  
「悪い予感は見事、予感的中。」

「ええええええええええつ！隼人が退学！？」

十代の叫び声が木霊したのだった。

オシリスレッド寮の大徳寺の部屋の前には、たくさんのオシリスレ

ツドの生徒が中の様子を伺っていた。

そこに話を聞いた十代が翔を連れて駆け寄ってくる。

「十代、翔」

その生徒たちの中にいた千影は2人をの名を呼ぶと、開いている大徳寺の部屋の中を指差した。

十代と翔が部屋を覗き込むと、大徳寺ともう1人見知らぬ大柄な男が対面していた。

「誰だ、あの人？」

十代のこの言葉に、隣に立つ千影が答えた。

「隼人のお父様だよ」

そして、なぜ隼人の父親がここに来ているのかを翔が話す。

「隼人君を実家に連れ戻しにきたんだ」

そこに千影が人差し指を唇に当てた。

「しっ、連れ戻しにきた理由を話してみたいだよ」

詳しいことを知るために千影たち3人は大徳寺と隼人の父、熊蔵との会話に耳を傾けることにしたのだった。

「隼人のやつはオシリスレッドにいただけでも嘆かわしいのに、さらに落第して留年しとるつちゅう。これ以上ないほど情けない男でござす」

「それはまあ、なんといいですか・ハツハハハハ」

筋骨隆々たる熊蔵が醸し出す威圧感に大徳寺は圧倒されているのか言葉に切れがなかった。

「ならばここは潔くデュエリストに見切りをつけ、家業の造り酒屋の跡を継ぐのもまた男の道！違いますか先生」

疑問符がつくべきところを断定するほどの力強い言葉に大徳寺はしどろもどろになりながら声を出した。

「あー、はい確か薩摩焼酎でしたにゃ」

これを聞いた熊蔵はどこから取り出したのか、件の薩摩焼酎を大徳寺の前にドンと置いた。

「よかつたら、どうぞ」

「あややややや！こついうのは困りますにや」

両手を横に振る大徳寺に熊蔵は顔を近づけながら言葉を発した。

「と、言うわけで本日今日限りで隼人を故郷に連れて帰るでござす」

とのことだった。

「どうしようアニキ、千影君？」

翔の質問に当然というような顔で2人は答えた。

「どうするって、決まってるじゃんか」

「隼人の気持ちを確かめにいこう」

そういうや否や、3人は部屋に向かうために階段を駆け上がる。

そして向かった部屋の中では隼人は荷造りをしていたのだった。

それを見た十代は驚きながら隼人に声をかけた。

「隼人、お前本当に学校を辞めるのか？」

「ああ」

その隼人の返事に十代は納得できなかった。

「ああって」

「そういうわけだから、短い間だったけど元気でなあ」

この隼人の言葉に十代は憤り、隼人の肩の手をかけながら叫んだ。

「そう簡単に決闘者の夢、諦めちまってもいいのかよ！ええ！？隼

人！！」

しかし、その憤りもすぐに冷めることになる。

なぜなら振り向いた隼人が涙を流していたからだった。

「隼人君……」

「隼人……」

「泣いてるの隼人……」

3者の自分を気遣ってくれるその言葉に、隼人は自分の本音を吐き出し始めた。

「俺、正直今まで真剣に決闘者になりたいって思ってなかったんだなあ」

隼人は頬を伝う涙を袖で拭きながら話を続ける。

「まあ、なれたらいつかあみたいな感じだね。でも今は違うんだな！十代や千影、翔の決闘を見て、俺初めて本気でがんばってみようって思ったところだったんだなあ」

そしてそう思う理由はそれだけではない。

（それに、俺には精霊の声が聞こえたんだからなあ！）

廃止寮と翔失踪の時に、確かに自分はデュエルモンスターの精霊の声を聞いたのだ。

ここで決闘者の道を諦めてしまえば、きつと精霊の声はもう聞こえなくなる。そう思つての言葉でもあるのだ。

隼人の決意を聞いた千影は至極当然な質問を投げかけてみた。

「それお父様に言つたの？」

これを聞いた隼人は決意の表情から一変、怯えた涙目へと変わった。

「言えるわけないよお！うちの父ちゃん、とつても怖いんだあ！！」

この言葉に我慢ならなくなった十代は、隼人の腕をつかみ隼人を立たせた。

「来い！！」

そして十代が隼人を引きずっていった先は

「そういうことですので、隼人を退学させるのは思いとどまってもらえませんか？」

校長室で鮫島校長、大徳寺、そして隼人の父、熊蔵に煮え切らない隼人に代わって直談判をしていたのだった。

「彼は今まさに道を見つけました。確かに今まで足踏みはしましたが、それでも隼人の決意の固さは先ほど十代が述べたとおりです。ですから私からもお願いします、どうか隼人の退学を考え直してください」

千影も十代と共に頭を下げる。

そんな彼らを見た熊蔵は十代と千影に向かって声を発した。

「おはんら、一体何者でこわす？」



隼人が熊蔵の発する威圧感に後ずさりする中、十代と千影は熊蔵の眸を真つ直ぐ見つめ自分の名を名乗った。

「俺は隼人と同室のもので遊城十代といます」

「同じく姫宮千影です」

翔も遅ればせながら自己紹介をした。

「僕は丸藤翔です」

3人が自己紹介を終えると、今まで黙っていた鮫島校長が口を開いた。

「遊城君、君たちの気持ちはわかりますが、これは前田さんの家族の問題です。部外者が口を挟むのは」

「続きの言葉を発しようとした鮫島校長であった、意外な人物から「待った」の声がかかった。

それは、前田熊蔵。隼人を連れ戻しにきた張本人である。

熊蔵は凄みのある笑みを浮かべながら、言葉を発した。

「よか。ただし条件がある」

「その条件とは？」

千影は熊蔵に何を条件にするのかを問う。もっとも千影の中では何が条件になるかは見当はついてはいたが。

「おいと決闘ばしろ、隼人」

そう言い渡された条件に隼人は「えっ？」といった顔になった。

「もし、おまいがおいに勝ったらこの話はなかったことにしよう。だがもし、おいが勝ったら今すぐおいと故郷に帰るっど」

この条件に皆の視線は隼人に向けられた。

「どうだ、受けるか？」

皆の視線が集まる中、熊蔵にそう問われた隼人は表情を引き締めてこう言ったのだった。

「受ける!!!」

「では、決闘は明朝8時。そういうことでよろしいか、校長はん」  
そう話を振られた鮫島校長は頷いた。

「うむ、正にデュエルアカデミアに相應しい。よき解決法だと思ひ

ます」

鮫島校長の許可も出たことにより、隼人の進退は明日の決闘の結果次第ということになったのだった。

校舎から寮への帰り道、隼人の退学を免れるチャンスを得れたことに十代と千影は上機嫌だった。

「んにしても、あんなにあっさりOKするなんて思ってたよ」

「そうだね、見かけによらず意外と話のわかる人でよかったよ」

そんなすでに退学は取りつけたものと思わす彼らの言葉に翔は釘を指す。

「別にまだOKしたわけじゃないんだよアニキ、千影君。決闘に勝つたらっていう条件付だよ」

その言葉を十代は一蹴する。

「はっ、そんなの勝つに決まってるじゃねえか。相手は素人の親父だけ」

しかし、そうはいかないのが世の常。

「コホン。参考までに1つ教えておいてあげますにや」

大徳寺の咳払いに4人は足を止めて大徳寺の話に耳を傾けた。

「隼人君のお父様は薩摩次元流の使い手として世界中に名を轟かせた伝説の決闘者」

この言葉に十代と翔は「えっ!?!」「」となった。

「薩摩次元流は打突を得意とする一撃必殺の剣、薩摩示現流の極意を応用した一撃必殺の決闘で相手を瞬殺するという恐るべき手馴れ

—

その真実に十代と翔は驚きの声を上げる。そういえば、ずっと隼人の表情が硬かったのもそのためかと思えば合点がいく。

「— という噂なのにな」

しかし、ここで落ちがついた。

今までの話を本当の話だと思っていた十代と翔はズッコケてしまった。

しかし、火のないところに煙は立たぬ。それだけ噂になるといふことは噂ほどではないにしる強力な決闘者であることには変わりはない。

だが千影は何も心配していないといった表情で皆に向けていった。

「でも、仮に伝説の決闘者だとしてもそれは決して超えられない壁じゃない。私と翔だって先日、その伝説の決闘者だっていう迷宮兄弟を退けたじゃない」

千影のその言葉に共にタッグを組んだ翔が頷き、十代もそんな千影と翔の肩を抱き寄せると声を大にして言ったのだった。

「そうだな、倒せないモンスターもいなければ倒せない決闘者もないよな！よおーし帰ってデッキの構築だあっ！！」

隼人もそんな彼らの顔を見て、硬くしていた表情を和らげるのであった。

日が落ち、夕食も数時間前に終え今日することは後は寝るだけになったところで大徳寺と熊蔵は熊蔵が持ってきた自家製の薩摩焼酎で晩酌をやっていた。

「いやああ、はっはは。それでは先生も大変ですなあ」

「やああ、いえいえ。そんなことは」

などとお決まりの大人の社交辞令というべき会話を繰り返す中、熊蔵が腰を上げた。

「失礼してちよつと厠に」

どうやら御不浄に用があるらしい。

しかし、なぜか猫であるアラオが大量の焼酎を飲めるのかは最大の謎だ。

これが後に学園七不思議の1つになったとかならなかつたとか。

#### 閑話休題

御不浄のため外に出た熊蔵は上から聞こえてくる声に歩みを止めた。それは今日、自分に直談判しに来た十代の声だった。

「なんだよ、隼人のカードコアラばっかりだなあ」

隼人のデッキの内容を見た第一声がこれだった。

「コアラデッキなんだな」

「コアラデッキって、こんなんで勝てるのかよ」

そんな十代の発言に千影が口を挟みつつ、隼人のデッキからデス・コアラのカードを引き抜いた。

「ファンデッキで勝ちを拾うのは難しいけど、コアラデッキならリバース効果が強力なデス・コアラがいるから、かなりいけると思うよ」

そしてそれを隼人の前に3枚並べる。

「言うなれば、このデッキの中核だね。これのリバース効果で相手のライフを削りながら闘うんだけど、問題は決定力不足だよ。ビッグ・コアラの存在があるけどこれだけじゃ心もとないし、どうするべきか」

さらにビッグ・コアラのカードを出しつつ、自分のことでもないのに千影は頭をひねる。

そんな時、翔が立ち上がりながら隼人に1枚のカードを差し出した。

「それなら、これあげるよ。こないだ買ったパックに入ってたんだけど、僕使わないし」

それはデス・カンガルーのカードだった。

そのカードを見た隼人は驚いた顔で翔を見た。

「俺にくれるのか？」

「ほら、コアラにカンガルーが加わればオーストラリアデッキになるじゃない」

そんな翔の心遣いに隼人が眸に涙を湛える中、十代と千影はやおら立ち上がった。

「よっし、それじゃちよつと待ってる」

「こつちも、確かアレが使えたね」

そういうと、何かを探し始めたのだった。

熊蔵はそんな彼らの言葉を聞きながら、この夜は更けてゆくのだっ

た。

そして迎えた運命の朝、闘魂と書かれた掛け軸が飾られている道場で隼人と熊蔵は対峙していた。

観客は十代、千影、翔の3人。

「ではこの決闘、僭越ながら私、大徳寺が立会人を務めさせてもらうにやあ」

両者の真ん中に立った大徳寺がそう宣言すると、次に両決闘者に今回の決闘の趣旨の確認を取った。

「前田熊蔵さん、もしこの決闘に負けたら隼人君がこの学校に残ることを許していただけますかにや？」

「よか。男に二言はないでござす」

その言葉に大徳寺は「うん」と頷くと、今度は隼人に向かって確認を取る。

「隼人君、もしこの決闘に負けたら潔く退学してご実家の造り酒屋を継ぐこと。いいかにや？」

「俺はかまわないんだな」

両者、合意と見ていいようだ。

合意の確認を取った大徳寺は決闘開始の合図を出すべく手を振り上げた。

「うーん、よろしい。では、悔いのないよう思う存分闘うにや」

「決闘！！」

「いざ、決闘！！」

隼人LP4000

熊蔵LP4000

ここで熊蔵は何の意味があるのか薩摩示現流独特の構え蜻蛉の構えを取った。

息を詰まらせる一瞬の後、静寂を打ち破ったのは隼人だった。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカード、デス・コアラを確認すると隼人は1つ領いた。

（よし、昨日千影が教えてくれたとおり、このカードで先制ダメージを父ちゃんにあたえるんだな！）

「俺はモンスターを裏側守備表示で出してターンエンドなんだな！隼人は引いたデス・コアラのみをセットしてターンを終了した。」

そして、熊蔵のターンがやってきた。

「おいのターン！ドロー！！」

引いたカードを見て不適に笑う熊蔵から得も知れぬ威圧感を感じた十代たちに大徳寺は声をかけた。

「皆さん、匠の業しかと見ておくのにや」

「薩摩示現流の極意を応用したって言う一撃必殺の決闘……」

「二の太刀要らずの雲耀の太刀。果たしてどれほどのものか……」

大徳寺のその言葉に十代と千影は各々に呟きを漏らし、翔はただ生唾を飲み込むのだった。

皆が2人の決闘を見守る中、熊蔵は徐に口を開き隼人に言葉を発した。

「隼人、お前の考えは読んでいるぞ。その伏せたモンスターはリバース効果により相手の手札の枚数分×400のダメージを与えるデス・コアラ。それでおいのライフを一気に削るうって腹じゃろう」その言葉に隼人の表情は曇る。

「ふん、凶星か。しかし！おいの薩摩次元流の前ではそんな小細工は通用せんと知れ！！酔いどれタイガー召喚！！」

酔いどれタイガー

4

ATK1800

DEF600

薩摩次元流の一撃必殺のモンスターがどのようなものかと固唾を呑んで見守っていたのだが、出てきたのはただの酔っ払った虎だった。

「酔いどれ・タイガー……」

「一撃必殺じゃないんすか……?」

十代と翔の目が点になる中、千影の表情は硬いままだった。

「いや、見た目に惑わされちゃ行けない。たぶんあのモンスターの特殊効果は」

「酔いどれタイガーは攻撃したモンスターがリバーズ効果モンスターだった時、そのリバーズ効果を無効にする特殊効果を持つ!これでデス・コアラのリバーズ効果は使えんぞ!」

リバーズ効果を封じられた隼人だったが、それでも負けじと言葉を放つ。

「だけど互いに攻守は1800同士、破壊されないんだな!」

しかし、そんなことは熊蔵にとっては些細な問題だった。

「それすら甘いといった!おいは手札より装備魔法、酔拳極意の書を発動!酔いどれタイガーに装備する!」

酔いどれタイガーの手に一冊の書が握られただけで見た目に変化は見られず、未だに千鳥足のまま手に持った一升瓶をラツパ飲みを続けるだけだった。

しかし

「このカードは酔いどれと名のつくモンスターにしか装備できない魔法カード。酔拳極意の書の効果により、酔いどれタイガーの攻撃力は300ポイントアップする!」

酔いどれタイガー      4      ATK2100      DEF600

これを見た隼人は驚きの声を上げる。

「攻撃力が1800を超えた!？」

「それだけではない!このカードが装備されたモンスターは攻撃したモンスターの守備力を超えていればその差の分だけ相手にダメージを与える貫通能力を有し、さらにおいのターンの開始時毎に攻撃力が300ポイント上がり続けるのだ!！」

「そんなあ!」

早との驚きの声を尻目に熊蔵は攻撃を仕掛ける。

「いけえ、酔いどれタイガー!泥酔ペアアンチ!！」

酔いどれタイガーは予測不能の歩法で隼人のリバースモンスターに詰め寄り、その拳を振るつたのだった。

攻撃を受けた裏守備のモンスター、デス・コアラは酔いどれタイガーの効果でリバース効果を発動できぬまま破壊されてしまった。

しかし、それだけではすまなかった。

「酔拳極意の書の効果により貫通ダメージを受けてもらうぞ、隼人!！」

いつの間にか隼人のそばには酔いどれタイガーの拳が迫っていた。

そして、その拳が隼人を襲う。

「酒臭!！」

隼人LP3700

主に衝撃ではなく酒臭さではあるが。

「ターンエンドでこわす!」

隼人にダメージを与えたことに1つ頷くと熊蔵はターンの終了を宣言したのだった。

この一連の攻防を見た十代と翔は驚きの表情になっていた。

「伝説の決闘者って眉唾だと思ってたけど

「  
以外に強いっすね・・・」

そんな2人に千影がさもありませんといった視線を送る。



「ほらね、見た目で判断しちゃ駄目だつてことだよ2人とも」  
「でも、これなら隼人の苦戦は必至だぜ。きばれえ隼人!!」  
千影のこの言葉を受けて考えを改めた十代は、隼人へと声援を送るのだった。

十代の声援を聞いた隼人は、十代たちに向かって1つ頷くと、新たなカードをドローするべくデッキに手を伸ばした。

「俺のターン、ドロー!!」  
またしても引いたカードはデス・コアラだった。

(父ちゃんの場に酔いどれタイガーがいる限りリバーズ効果モンスターは無意味なんだな。それに毎ターン攻撃力が上がり続けるのはかなりマズイ。このターンで酔いどれタイガーを破壊するには

よしっ、これでいくんだな!!)

手札の内容から戦術を構築した隼人は攻勢へと移る。

「俺は手札から魔法カード、コアラの行進を発動!このカードの効果で俺の墓地にいるコアラと名のつく 4以下のモンスター1体を特殊召喚し、さらに手札に特殊召喚したモンスターと同じモンスター1がる場合、手札からそのモンスター1体を特殊召喚できるんだな!!俺は墓地と手札からデス・コアラを特殊召喚!!」

デス・コアラ	3	ATK1100	DEF1800
デス・コアラ	3	ATK1100	DEF1800

「そして2体のデス・コアラを生け贄にして、ビッグ・コアラを攻撃表示で召喚するんだなあ!!」

ビッグ・コアラ	7	ATK2700	DEF2000
---------	---	---------	---------

その威容を見た熊蔵は額から汗をたらし戦慄した。

「なんと!?!」

熊蔵が怯んだ隙を見逃さずに隼人はビッグ・コアラに攻撃の号令をおくる。

「いくぞ、父ちゃん！ビッグ・コアラで酔いどれタイガーを攻撃！必殺、ユーカリ・ボム！！」

隼人の命を受けたビッグ・コアラは酔いどれタイガーを掴み取ると有り余る腕力を持って地面に叩き付け、酔いどれタイガーを破壊したのだった。

「くっ！」

熊蔵LP3400

「ターン終了なんだな」

しかし、こんなことで怯む熊蔵ではなかった。

「まだまだあ！おいのターン、ドロー！！」

その引いたカードを見た熊蔵は顔に笑みを湛えた。

「隼人、おまいに薩摩次元流の奥義を見せてやる！覚悟せい！！」

この言葉に隼人だけでなく、この場にいる全員が戦慄した。

「おいは魔法カード、愚かな埋葬を発動しデッキから酔いどれエンジェルを墓地に送る！」

この熊蔵の行為に隼人は驚いた。

「モンスターをわざと墓地に！？」

「おいの薩摩次元流のデッキ最強のモンスターは特殊な召喚方法でしか召喚できないのだ。それは、墓地に酔拳極意の書と酔いどれと名のつくモンスターが2体存在している時、酔いどれと名のつくモンスター2体をゲームから除外すること！おいは墓地にある酔いどれタイガーと酔いどれエンジェルをゲームから除外し、酔いどれジャッキーを特殊召喚する！！」

熊蔵のその宣言と共に1体のモンスターが姿を現した。

酔いどれジャッキー

8

ATK2500

DEF3000

その姿は上半身裸で、例外なく酔っ払い。しかし、その身のこなしは一見隙があるように見えて、その実全くの隙がなかった。どこかで見ただことあるような顔だが、断じてジャッキー・エンではない。

ないったらない。  
どこか似ていたとしてもそれはきつと他人の空似だきつとそうだそ  
ういうことにはしておきなさい。

閑話休題

「酔いどれジャッキーの特殊効果発動！このモンスターが召喚された時、墓地にある酔拳極意の書をこのモンスターに装備する！！」  
熊蔵の言葉と共に酔いどれジャッキーが手に一冊の書を持つと、片手に持った瓢箪を煽った。

酔いどれジャッキー      8    ATK 2800    DEF 3000

「攻撃力2800・・・」

酔拳極意の書の効果で上がった攻撃力に目を丸くしていた隼人の耳に、目の前のモンスターから声が聞こえてきた。

『ぶっは〜、酔えば酔うほど強くなる〜』

(えっ？まただ。また精霊の声が聞こえたんだなあ)

熊蔵の猛攻はこれだけでは終わらなかった。

「さらに永続魔法、お銚子一本！」

熊蔵の場にお銚子が現れた。

そのお銚子に酔いどれジャッキーが釘付けになったのは全くの蛇足である。

「そして永続魔法、ちゃああぶ台返し！！」

このカードの発動と共に、決闘上はちゃぶ台の上と化した。

そして

「でえええあああああ！うおおりやあああああああああ

っ！！」

雄たけびと共に熊蔵は決闘場となったちやぶ台に手をかけると気合とともにおもいきりひっくり返した。

もちろん、ちやぶ台の上にあったモンスターやカードたちは宙に舞い、落下するとそのことごとくが破壊されたのだった。

「くううううっ！」

その破壊の余波に隼人が腕で顔をかばう中、熊蔵は大きな笑い声を上げていた。

「はっははははは！見たか。永続魔法、ちやぶ台返しはこのカードを除く己のフィールド上の全てのカードを破壊し、その枚数分だけ相手フィールドのカードを破壊する正に一撃必殺のカードでござす！！」

これを見ていた翔と十代は期待はずれといった風に熊蔵を見ていた。「さつきは只者じゃないかもと思ったけど、一撃必殺ってそういう意味だったの」

「薩摩示現流関係ねえじゃん」

千影もこの無茶苦茶ぶりに頬をかきつつ苦笑していた。

「確かに、これは反則ギリギリのリセット技だね」

そんな中、ちやぶ台返しを使った熊蔵を非難の視線で隼人は見ていた。

「父ちゃんは都合が悪くなると、いつもそうなんだなあ！」

「はっははは！家長の思い通りにならないことなど何もないのだ！」

その言葉を気にした風もなく、熊蔵は高笑いをあげたのだった。

しかしそんな中、本来破壊されているはずの酔いどれジャッキーが未だに熊蔵の場に千鳥足で立っていた。

「えっ、何で破壊されてないの？ちやぶ台返しで破壊されたんじゃないの！？」

隼人の至極当然な問いに熊蔵は自信満々に答えた。

「ふっふふ、甘いぞ隼人。酔いどれジャッキーは召喚するのに除外した酔いどれと名のつくモンスターのモンスター効果を受け継ぐのだ！そして、このモンスターは酔いどれタイガーのリバーズ効果無効の効果と、酔いどれエンジェルのちゃぶ台返しでは破壊されない効果を持っているのだ！！」

「な、なにいいっ!？」

だが、それだけではない。

「さらに魔法カード、お銚子一本が破壊され墓地に送られたことで魔法効果が発動！お前は500ポイントのダメージを受ける！！」  
500ポイント分のダメージが酒臭となって隼人を襲う。

「うっううう、酒臭いいいいっ!！」

隼人LP3200

「覚悟しろ隼人！酔いどれジャッキーで攻撃！！奥義、酔八仙拳！！」

熊蔵の号令の下、酔いどれジャッキーが独特の歩法で隼人に歩み寄り、8人の仙人を象徴する型から織り成す技を次々と浴びせたのだった。

まずは酒壺を指で持つ呂洞賓、続いて片足だが酔うと蹴りが強い李鉄拐、樽を抱えて歩く漢鐘離、下腹部を狙う藍菜和、連続蹴りの張果老、喉を突く曹国舅、笛の名手である韓湘子、そして止めに色仕掛けの何仙姑。

この8連撃を受けた隼人は香港映画さながらに後ろに勢いよく吹き飛び、顔から着地したのだった。

「うわあああああっ！あべしっ!！」

隼人LP400

しかし、あれだけの攻撃をもらってもなお、隼人は立ち上がった。

「まだなんだなあ!!」

そんな隼人の姿を見た熊蔵は心中で隼人を評価していた。

(ふん、少しはいい目になったではないか)

「ターンエンドでこわす!」

「残りライフ400ポイント。ここからが隼人君の正念場なのです  
にゃ」

この攻防を見た大徳寺は膝の上のファラオをなでながら「ふむ」と  
頷いたのだった。

「俺のターン、ドロー!」

隼人は引いたカードを見て「はっ!」となった。

(このカードは )

その引いたカードは翔から貰ったカード、デス・カンガルー。

(俺、この学校辞めたくないんだなあ!!)

さらに手札を確認すると、そこには千影から譲り受けたカードもあ  
った。

そして、自分の融合デッキには十代から譲り受けた最強といつても  
いい攻撃力を持つモンスターもある。

ここまでしてくれた友人たちに報いるためにも、何が何でも勝たな  
ければならない。

そのためには

「手札から魔法カード、黙する死者を発動!この効果で自分の墓地  
から通常モンスター1体を特殊召喚できるんだあ!俺はビッグ・コ  
アラにすっぞあ!!」

ビッグ・コアラ      7      ATK2700      DEF2000

(俺、この寮でたくないんだなあ!)



そして十代は1枚の融合モンスター、マスター・オブ・OZのカードを隼人に差し出していた。

「攻撃力4200ポイント。こいつをうまく使いりゃ絶対に勝てるぜ！」

十代から手渡された超強力なモンスターに隼人は驚きを隠せないでいた。

「そんなすごいカード、俺にくれるのか？」

そういう隼人に十代は鼻の下をこすりながら言った。

「俺な、お前に勝ってほしいんだよ。せつかく友達になれたのにさ。故郷に帰っちゃうんじゃ寂しいもんな」

その十代の言葉に千影は相槌を打ちながら隼人に歩み寄り、1枚のカードを隼人に渡す。

「そうそう。そして私からはこれ。ちょうどコアラだしいいでしょ」  
「そういうつつ隼人に渡したのはコアラツコのカードだった。」

「このモンスターの効果と、十代のマスター・オブ・OZの攻撃力を合わせれば正に一撃必殺のコンボが完成するよ」

翔、十代、千影のこの好意に隼人は笑顔で頷くのだった。

その光景を思い出した熊蔵は息子がよき友を持ったことに「ふつ」と笑みを零しつつ、隼人に向かって言葉を発した。

「ならば見せてみる！お前の一撃必殺を！前田隼人流の薩摩次元流を！！」

「応っ！！俺はコアラツコのモンスター効果を発動！このカード以外の獣属性モンスターが自分フィールド上に存在する時、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力をこのターンの間0にすることが出来るんだな！」

その効果を聞いた熊蔵の表情は驚愕へと変わった。

「なんとお！？ならば酔いどれジャッキーの攻撃力は……」

「そうだあ！0になるんだなあ！！」



酔いどれジャッキー 8 ATK0 DEF3000

「いくぞおお、マスター・オブ・OZ！ 駆けるお、雲耀の速さで！」

（十代や翔、千影と離れ離れにならないために、俺はこの攻撃に全てをかけるんだなあ！！）

マスター・オブ・OZはまさにこの一撃に全てを乗せるべく超高速で酔いどれジャッキーへと迫る。

「一意専心、乾坤一擲！ エアアズ・ロッキイイイ！！ チエストオオオオオオ！！！」

隼人の気合の声と共に、二の太刀要らずの強力な拳が振り下ろされ酔いどれジャッキーを粉碎、その攻撃力がそのまま熊蔵に襲い掛かる。

「ぐわあああああつ！！！」

熊蔵LPO

熊蔵はその身に4200ポイントという膨大なダメージを受けてその場に膝を着いたのだった。

「お、お」

それを見た隼人は数秒体を震わせると、両腕を振り上げて勝ち鬨を上げた。

「俺の勝ちだああ！！！」

その隼人の叫びと共に十代、翔、千影は隼人のそばに駆け寄った。

「やったな、隼人！」

「すごいっすよ、隼人君！」

「隼人、見事な一撃だったよ！」

3人にもみくちやにされる中、隼人は膝立ちの状態から立ち上がった熊蔵のほうを見た。

「父ちゃん、俺……」

「隼人、確かにお前の薩摩次元流、見せてもらった。まさか留年しとったお前がここまでできるとは父ちゃん、思っとらんなんだぞ」  
笑顔でそういう熊蔵に隼人は首を横に振りつつ答えた。

「俺だけじゃきつと駄目だったんだな。この勝利は十代や翔、千影が力を貸してくれたからこそそのものなんだな」

わずか1日の間に1回りも2回りも大きくなった息子の言葉に熊蔵は頷くと隼人の肩に手を置くところだった。

「そこまでわかっていれば、もう父ちゃんから言うことはない。この学園でその友達たちと懸命に学びなさい」

「うん、俺がんばるよ!!」

隼人は熊蔵とデッキにあるデス・カンガルー、マスター・オブ・OZ、コアラツコのカードにそう誓ったのだった。

## 第10話【DA学園篇】（後書き）

本来ならばタッグ決闘の前の話である一撃必殺！ちゃぶ台返しのお送りしました。

退学がかかった決闘を前にこんなんびりしたことができるのかなと疑問に思い、こちらを後に回させていただきました。

あと、正史では隼人の敗北でしたが千影君の存在もあり、見事勝利。これから彼は前田隼人流の薩摩次元流の使い手として成長することでしょう。

今回の最強カード『酔いどれジャッキー』

8 ATK2500 DEF3000 地属性 戦士族

このモンスターは通常召喚できない。墓地に装備魔法、酔拳奥義の書と酔いどれと名のつくモンスター2体がいる時、酔いどれと名のつくモンスター2体をゲームから除外することのみ特殊召喚できる。

特殊召喚された時、墓地に存在する酔拳奥義の書をこのモンスターに装備する。

このモンスターは特殊召喚のために除外されたモンスターのモンスター効果を得る。

今回の最強カードは映画「ドラゴンキーン酔拳」のあの人です。墓地ソースからの召喚なのでそんなに召喚が難しいわけでもなく、召喚すれば除外したモンスターの効果を引き継ぐという壊れ性能。しかし惜しむらくは酔いどれシリーズがタイガーとエンジェルしかないということです。

## 第11話【DA学園篇】

ある晴れた日の体育の授業、男子生徒たちは寮別に分かれて野球に興じていた。

他のオシリスレッド生の『かつとばせー！十代！』コールが響く中、翔がバッターボックスに立つ十代にエラーを送る。

「アニキー、たのんますよー！」

それを聞いたオシリスレッドの4番、十代は俄然バットを握り締めた。

「おつし、任せとけ！またここで一発打てば、3点追加で一気に決まりだぜー！」

ちなみに現在、9回表オシリスレッドの攻撃、3対0でオシリスレッドがリード。

ツーアウト、ランナー1、3塁。

本日の十代の成績、3打数2安打、2得点、1本塁打。

月光蝶である！……………失礼、絶好調である。

ちなみに後の1点は千影の1回表の先頭打者ホームランである。

千影も4打数3安打、1得点、1本塁打、盗塁2という核弾頭ぶりを発揮していた。

そして現在、3塁ランナーでもある。

そんなライイエラーにダメ押し点を与えられる場面で、球場の入り口から声が響き渡った。

「おい、待てええ！その試合待ったあああつー！」

入ってきた人間はライイエラーの三沢大地だった。

三沢はライイエラーの上級生に遅れた理由を話すと頭を下げた。

「すみません、遅れて。ついデッキ構築論に夢中になっちゃって」それに気にした風もなく、ライイエラーの上級生は三沢に聞いた。

「投げられるか？」

この質問に三沢は「はい」と答えると上級生は審判にわかるように手を上げて大声で叫んだ。

「よし、頼むぞ。ピッチャー交代だ！ピッチャーは三沢！！」

三沢はグローブをはめ、マウンドに立つ。

それを見た十代は、バットをバックスクリーンに掲げるポーズを取った。

「ついに出てきたな、三沢！お前の球もあそこに叩き込んでやる！！」

ホームラン予告である。

しかし三沢は、この自信満々のホームラン予告に首を横に振った。

「いや、俺の球は打たれはしない」

そう言う三沢の体に炎のようなオーラが見えた。

「なぜなら、君の攻略法は既に計算済みだからだ！」

しばらく2人はにらみ合った跡、三沢は投球モーションに入った。

1塁ランナーに盗塁されても、十代を切って取れる自信があるのか、ウィンドアップで振りかぶったのだった。

「いくぜ！方程式、V e r . 1 ！！」

そして放たれた投球は三沢の魂が乗り移ったのか、虎の如く走りキヤッチャーミットへと突き刺る。

十代のバットは球に掠ることすらできずに空を切ったのだった。

「ストライーク！」

それに満足しつつ、三沢がキャッチャーからの送球を受け取ったその時、信じられないものを見た。

「千影がホームスチールだと！？」

そう。3塁にいた千影が果敢にもホームスチールを仕掛けていたのだ。

想定外のこと三沢の頭は一瞬真っ白になったが、すぐに頭を振るとホームに球を投げた。

しかし、その一瞬が命取りになることになった。

なぜなら、キャッチャーミットに球が収まるころにはすでに千影が

ホームベースを叩いていたのだから。

「せ、セーフ!!!」

このプレーに主審も目を白黒させながら、セーフを宣言するのを尻目に十代と笑顔でハイタッチをしていた千影なのであった。と、まあこれでオシリスレッドが1点追加と相成ったのだった。

このプレーで少なからずショックを受けた三沢だったが、すぐに頭を切り替えると十代と対峙する。

「俺の攻略法は計算済みだったが、千影の攻略法はまだみたいだな」この十代の皮肉に三沢は首を横に振った。

「いや、あれは完全に想定外のことだ。しかし十代、千影に点を取られたからにはお前に打たれるわけにはいかない!」

そして、再びウィンドアップで振りかぶった。

結果は

「ストライーク、バッターアウト! チェンジ!!!」

「くやしいいっ!!!」

3球3振で凡退したのだった。

その回の裏、これを守れば勝ちと言う状況でツーアウトまで追い込んだピッチャーの十代は、急に調子が崩れたのか、それとも握力がなくなつたのか、3者連続でフォアボールを与えていた。

それを見かねたキャッチャーの翔は、主審に「タイム」と宣言するとマウンドの十代の元へと駆け寄ると口を開いた。

「ちよつとアニキどうしたんすか? ツーアウトなのに3連続フォアボールなんて」

翔の言葉を聞いた十代は笑いながら、その訳を話した。

「ハッハハハハ! わざと歩かせたのさ」

この言葉に翔と、いつの間にか来ていた内野陣が疑問の声を上げた。当然だ。勝つ寸前になって相手に塩を送るなど正気の沙汰ではない。ちなみに千影はセンターである。

『なんで?』

十代はしれつとした表情でこう言ったのだった。

「そうしないと三沢まで回らないからな」

この言葉に翔は驚きの声を上げた。

「えええ！アニキは三沢君と勝負したくて3人も歩かせたんすかあ！？」

「ああ、借りはキツチリ返さねえといけねえからな！！」

十代は当然のようにそう答えるとバッターボックスに入る三沢を指差したのだった。

「三沢！今度はこつちがお前を討ち取ってやる！！」

この力強い十代の宣言に翔は仕方ないという風にホームベースに戻る中、三沢はその宣言をこう返した。

「それもできないことだな。君を打ち崩す方程式も、もう既にできている！」

そしてヘルメットをかぶるとバットを構えた。

「俺はその数式に則り、お前を叩くまでのこと！」

三沢のこの言葉を受けた十代は眸に炎を燃やした。

「勝負だ！」

それは三沢も同じ。

「来い！十代！！」

2人から只ならぬオーラが吹き出る中、龍虎相打つヴィジョンを誰もが幻視した。

「いくぞおお！食らえ、俺がヒーローだあああああつ！！」

そして、その雄たけびと共に十代は渾身の1球を放ったのだった。

そんな中、クロノスは体育倉庫の横を歩きながら、自分が目にかけていた人物、万丈目が全然成果を挙げないことに苛立っていたことで軽快な「パコーン」という音を聞き逃してしまっていた。

「まったく万丈目のやつは役に立たないーノネ」

そして、これからのことを考え思案に耽っていたクロノスにそれは襲い掛かった。

「早く誰か代わりをおおおおつ！！」

三沢の打ったホームランボールがクロノスの顔面に突き刺さり、ど派手に後ろに飛ばされると、体育倉庫の備品をぶちまけたのだった。「あのー、すみません！」

「大丈夫ですか！？」

そんなクロノスに十代、千影、翔が駆け寄ってきた。

クロノスは自分の上に乗った跳び箱を退かすと、目の前に立っている人物を見て怒りの声を上げた。

「あー！またお前エエツ！！ドロップアウトボーイズなのネ！！」

片目にボールをへばり付けたまま怒り心頭のクロノスの迫力に千影たち3人は後ずさった。

「う、うわあ、ごめんなさあい」

「だ、大丈夫なのか？先生」

「は、早く鮎川先生に診てもらっては」

3人がそう言うが、未だに怒りに体を震わせるクロノスの元にボールを叩き込んだ張本人である三沢が遅ればせながら駆けつけた。

「すみません、打つたのは俺なんです！」

それを聞いたクロノスに1つピンと天啓が降りてきた。

（シニョール三沢と言えば、常に総合成績で次席を取り続ける優秀な生徒なのーネ。万丈目の代わりとして使えるかもーネ」

思っていることを口に出しているのはどうかと思うのだが。

それでいて、いつも苦渋を嘗めさせられているからなのか、三沢の隣に立つ千影が入学以来、筆記、実技両方とも成績が常に主席であるにも関わらずクロノスにはOUT OF 眼中なのだった。

そんなクロノスの奇行を自分が打ったボールのせいだと早合点した三沢は申し訳なさそうに口を開いた。

「治療費、俺持ちですか？」

しかし心配するのがそのことは、三沢とは意外と肝っ玉が小さい男であつた。



三沢の心配とは裏腹にクロノスは腕でばってん印を作る。

「ノンノンノン、ノオオオオオオオン！！成績優秀者には寛容なのが、この学園デース。その代わり」

クロノスはまるで悪代官のような笑みを湛えると三沢にこっそり耳打ちをしようとするとするが  
十代たちが、それをコツソリ盗み聞きしようとしていた。

「なっ！お前たちには関係ないーノネ！！シッシシッ！サシスセシー！！ガLLLLLLLL！！」

それに気がついたクロノスがおっかない形相で猫を散らすようにそう言つと、千影たちは「「すみませーん」「」と謝りながら退散していくのだった。

邪魔者を排除したクロノスは「ふう」と一息つきながら、三沢のほうを振り向いた。

「で、シニョール三沢。治療費の代わりに条件がありますーノ。それは」

どうでもいいことなのだが、さっきの千影たちとのやりとりでポールが取れたようでクロノスの片目の周りには青痣ができていたのだった。

万丈目はいつものとおり、自分の定位置の席に着くと、いつものとおりの言葉をふんぞり返りながら口にした。

「おい！ドリンクとマッサージ」

これでいつもならば自分の取り巻きがその言葉に従うはずだったが。しかし、その言葉を聞いていなかったのか誰も自分のところにやってこなかった。

それどころか「何考えてんだよ」「何様のつもり」といった陰口を叩いていた。

「どうしたんだ」

それを疑問に思っていると、他のオベリスクブルーの生徒が万丈目の横に立つと口を開いた。

「おい、万丈目どこ座ってんだお前」

その言葉に万丈目は？を浮かべた。

「どこって？」

この席は一番ノートが取りやすく、なおかつ出入り口に近い。自分のようなエリートのために用意された席のはずだ。

しかし、目の前に立つオベリスクブルーの生徒はこう言ったのだ。

「ここはもう、お前の席じゃないだろ。早くどけ」

この言葉に万丈目は憤慨した。

「何言ってるんだ！この席にはちゃんと俺の名前が」

そうだ、この席には万丈目の名札がちゃんとして

お

らず『空席』となっていた。

「ないっ!?!」

驚く万丈目を尻目にオベリスクブルーの生徒は当然のように肩をすくめた。

「当たり前だ。お前はあそこに変わったんだよ」

そしてオベリスクブルーの生徒はそういつつ万丈目の新たな席を指差した。

「なんだと？席替え!?!」

万丈目はその指差された先を見てさらに驚いた。

その席とは

「しかもあんな隅っこに!?!」

列の最前列。しかも右隅という、今の環境とは180度違う席だった。

これに苛立った万丈目は教室に入ってきたクロノスに抗議の声を上げた。

「クロノス教諭、これはどういうことです！僕がどうしてあんな席に!?!」

この抗議をクロノスは当然と言う風な顔で万丈目に言った。

「それはシニョールがオシリスレッドの生徒に負けたからデウス。

そしてそれだけではありません。シニョールは明日、ライイエロ

「の三沢大地と寮の入れ替えをかけた決闘をしなければなりません  
ーノー!!」

このクロノスの最後通告に万丈目の驚きは天を貫いた。

「そ、それでは、負ければ俺はライエローに格下げ!？」

そんな万丈目の言葉をクロノスは流しつっパンパンと手を叩いた。

「サササ、早く席に着くのーネ。自分の席にー」

その光景を見た教室の生徒たちから『クスクス』といった笑い声が  
洩れ始めた。

そんな状況に我慢できなくなった万丈目は教室を飛び出した。

しかし、聞こえてくる。自分を蔑み笑う声が。

自分がずつとそうしてきたように、高らかな笑い声が万丈目の耳に  
響く。

逃げてでも逃げてでも振り切れない。

そしてそれは、教室を出てもずつと自分のそばで響き渡っているの  
だった。

そんな万丈目と明日決闘することになった三沢は十代、翔、千影の  
3人を連れて自分の寮に帰宅していた。

「三沢って野球上手いんだな」

「結局アニキ、コテンパンっすもんね」

体育の授業でやった野球の内容を思い返しながらの十代と翔の言葉  
に、三沢はバットを手に持ち、3人に見せた。

「ふっ。秘訣はこれさ」

そのバットを見た千影は驚きながら、そこに書かれていたものを口  
にした。

「数式だ」

千影の言葉に三沢は頷くと話の続きをはじめた。

「そうだ。俺が投げた球も全て計算で編み出された配球だったって  
訳なのさ」

これに十代と千影は感心した風息をついた。

「へえ〜。そんなこともできるのかあ」

「まさにID野球だね」

「まあ、さすがに千影のホームスチールは計算外だったよ。あれがなければ引き分けではなく、こちらの勝ちだったんだけれどね」

「素晴らしいながら笑いあう三沢に、翔はなぜ自分たちがライイエロ一の寮まで来たのかを聞いた。

「ところで三沢君、僕らに手伝ってほしいことって？」

その翔の疑問を聞いた三沢は、まずは自分の部屋に3人を招き入れた。

「まあ、俺の部屋に入ってくれよ」

三沢の部屋に入ってみて、3人は驚きの声を上げた。

「「な、なんじゃ、こりゃああ？」」

「うわ〜、数式でいっぱい」

そう、部屋の壁と床にはびっしりと数式が書かれていたのだ。

「おれが思いつくままに書きとめた計算式さ」

そして三沢は1つ1つ指差しながら、それがどのようなものなのか説明し始めた。

「あそこらへんがシュレツディングの猫、あそこがアボガドロの分子説、そしてそっちが風が吹けば桶屋が儲かる確率式だな。君たちにはこの星々たちのビッグバンを手伝ってもらいたい！」

「「「ビッグバン？」」」

ビッグバンという言葉に首をひねる3人に三沢はペンキとハケを持ち出してこう言ったのだった。

「そつ。ビッグバン」

そのビッグバンとは

「そりゃー！そりゃー！」

「そりゃ、そりゃ、そりゃああ！これぞ

「「「ビッグバンだああっ！」「」」

ペンキによる汚れ消しだった。

「汚した部屋の壁を上から塗りつぶすだけなのに、3人も大げさ

「だなあ」

そんな3人の叫びに苦笑しながら千影も楽しみながら八ケを右に左にやっているのであった。

「消える、消えるお！」

「消えてなくなれ！」

翔と三沢のこの声に自分も負けてたまるかと十代が力をこめたその時

「こっちも消え、うわっ、おっととと！」

脚立の上に乗っていた十代がバランスを崩し、手に持った八ケを翔のほうに放り投げてしまった。

「うわがっ！」

それが翔の顔にジャストミート。

顔を真っ白に染めた翔が恨めしげに十代を見てきた。

「なんだよアニキ、なんてことすんだよお」

「わわわわ、わざとじゃない、故意じゃない」

十代は弁解するが、翔は「そっちがそうくるなら」とペンキの缶を十代に向かってぶっ掛けた。

それを十代は見事にジャンプして回避。

しかし

「何やってんだ、お前たち、ぶっ！」

注意するべく、翔と十代のほうを向いた三沢の顔にかかったのだった。

それを見た十代と翔は笑い出したのだが、当の三沢は全然おもしろくない。

では、どうする？

「こっするー！」

手に持った八ケで十代の顔を真っ白にしてやったのだった。

そうなるともうペンキ塗りも関係ない、2人はフェンシングよろしく八ケの付き合いをはじめたのだった。

「もう、3人ともちゃんとやってよおお！」

そんな笑顔でふざけあう3人に千影は頬を膨らませると、そう叫んだのだった。

三沢の部屋のペンキ塗りも終わり、体についたペンキも落とした4人はライイエローの食堂で夕食を共にしていた。

「悪いな三沢、夕飯までごちそうになっちまって」

「すごいごちそうっすよ」

「うん。とってもおいしいね」

そう言いつつライイエローの食事に舌鼓を打つ3人であった。

「それじゃ、じゃんじゃん食ってくれ。いくらでもご馳走するぜ」

そっぴいつつ、自分の分の定食と共に、大きなロボスターを食卓に置くと十代と翔の目が輝いた。

「うわああ、すごい大きい！」

「こんなの誕生日でも出してもらったことねえ！」

2人が目の前のロボスターにご執心の中、千影が思い出したかのように向かい側に座る三沢に問いかけた。

「そう言えば、さっきはクロノス先生と何を話してたの？」

この千影の問いに三沢は口の中ものを飲み込むと、クロノスに持ちかけられた話の内容を話した。

「ああ。寮の入れ替えテストのことさ」

「寮の入れ替え？」

十代が三沢の言葉を反復すると、翔がなぜ部屋をペンキで塗ったのか合点がいった。

「部屋も綺麗にしたってことは」

千影も親しい人間の祝い事に笑顔になると、三沢に祝辞を述べる。

「とうとうオベリスクブルーに昇格だね。おめでとう」

すでに昇格が決まったものだという風な3人の反応に三沢は辟易していた。

「あ、いや、それはまだ」

三沢がそういう中、3人は入試決闘に思いをはせた。

「入試の時だつてお前、抜群に強かつたもんなあ」

「うん、あのコンボ本当に見事だったよ」

十代と千影が、あの時の決闘の内容をベタ褒めするなか三沢は苦笑するしかなかったのだった。

「オベリスクブルーに入るのは当然だぜ！」

そんな過大とも取れる自分の評価に謙遜しながらも、褒められるのは、特に十代や千影に

そう自分が評価されるのは満更でもなかった。

所変わつて、その三沢と決闘する万丈目はオベリスクブルーの寮で2人の兄とテレビ通信を行っていた。

『おい、準！』

『はい』

『わかっているだろうな』

『はい。長作兄さん、正司兄さん』

あの高飛車ともいえる万丈目だが、2人の兄の前では塩らしかった。

『私は選挙戦、正司は銀行の決算が忙しくて連絡する暇がなかった

が』

『もちろん成績はトップなんだろうな準』

万丈目の成績を気にするのは万丈目を思つてのことではない。

万丈目3兄弟には大いなる野心があるのだ。

『兄者は政界でトップ、私は財界で。準、お前はカードゲーム界に君臨することで我が万丈目一族がガラムやバニングス、覇道を下しゆくゆくは』

万丈目グループでは手も足も出ない天下に名をとどろかす大財閥の名前を出した後、何かを言おうとしたのだが長作に止められた。

『待て、正司！そこから先は言葉にするな』

『そうだったな、いつどこに奴らの目があるとも知れない。すまなかつた兄者』

何かのタブーがあるのか2人の兄の様子がおかしかった。

まるで、何かに怯えているよう。

「どうしたんだ、兄さんたち？何をそんなに恐れているんだ？」

『今のお前には知らなくていいことだ』

何を恐れているのか問いただした万丈目だったが、兄には相手にされなかった。

『ともかく準、我ら万丈目一族が世界を制覇すると言う計画。わかっているな』

『お前の肩に万丈目一族の未来がかかっているのだぞ』

そして兄2人は言うだけ言うと、ブツリと回線を切ったのだった。兄たちが何を恐れているのかが気になるが、そんなことよりも重大なことが明日に迫っている万丈目は、このことを頭の中から追い出すと頭を抱えた。

（どうしよう。トップの座どころか格下げになりそうだななんて言えない。兄さんたちには）

そして窓に近寄り、外の景色を見たところでそれが目に入ってきた。（あれは、三沢大地！）

そう。三沢が千影たちと共に歩いていた。

どうやらオシリスレッドの寮へと向かっているらしい。

そこに気がつくとも万丈目は「はっ！」となり、起死回生の策が思い浮かんだのだった。

オシリスレッドの寮、千影たちの部屋で三沢と十代は千影の敷布団を占領して大鼾を立てていたのだった。

「な、なんだあ、この人は？」

理由を知らない隼人にとっては至極当然な疑問である。

隼人の疑問の言葉に翔と、十代のベッドに腰掛けた千影が訳を話した。

「部屋がペンキ塗り立てで寝るところがないんだよ」

「そこで、うちでよければって招待したの」

だが、隼人の驚きはそれだけではないようだ。



「それにしても、格下の寮に平気でとまりに来るなんて、ラーイエローにも珍しい人がいるんだなあ」

「似たもの同士なんだよ、十代と三沢は」

そんな隼人の言葉に千影は微笑みながらそう言うと、髪を結っていた紐を解くと寢床に着いたのだった。

そして次の日の朝、朝食を食べ終えて5人で談笑していた時、部屋の扉が勢いよく叩かれた。

「大変だよ！大変だよ十代ちゃん！！」

トメさんの切羽詰った声に十代は慌てて扉を開けた。

「どうしたんだよ、トメさん」

「船の荷卸しで棧橋に行ってたんだけど、捨ててあったんだよ。こんなにいっぱいカードが！」

このトメさんのこの発言に皆は驚きの声を上げた。

「…………えええええっ!?」「…………」

驚きながらも隼人を除く4人は現場を確かめるべく棧橋へと走る。

確かにそこにはカードが捨ててあった。

それも

「破壊輪にブラッド・ヴォルスってことは…………！！」

入試で三沢の使ったカードたちだった。

「ここに捨てられているのは三沢のカード！」

この光景に三沢は歯噛みした。

「うかつだったぜ。このデッキは昨日廊下に出してあった机に入れてあったんだ」

千影は海にぶちまけられたカードを一通り集めるとそのカードたちを撫でた。

「水浸しになって、かわいそうに」

しかし、拾い集めては見たものの、とても決闘で使えるような状態ではないし、欠落してしまったカードもある。

「いったい、誰がこんなことを」

「せつかくオベリスクブル―昇格のチャンスだったのによお！これじゃカードを揃えてる時間もないぜ！！」

そして最大の敵は時間だ。

「どうする、もうすぐ試験の時間だぜ！？デッキもなしでどうやって闘うんだよ三沢！？」

そうはいったが問答している時間もない。

4人はとりあえず試験会場へと足を向けたのだった。

三沢たちは決闘盤を用意して試験会場に時間ギリギリで駆けつけたのだった。

「遅いーノネ、シニョール三沢」

「とつくに尻尾を巻いて逃げ出したのかと思ったよ」

試験会場には既にクロノスと万丈目が待ち受けていた。

その万丈目の姿を見た十代は1つのことに行き当たった。

「それじゃあ、三沢の寮の入れ替えの相手って

そうか！

三沢のカードを捨てたのはお前か！！」

この十代の発言にクロノスは「ナンデストオオネツ！！」と驚きの声を上げるが、当の万丈目は知らぬふりを押し通してきた。

「なんの言いがかりだ十代。どうして俺が

しかし、そこで誰かの声が割って入ってきた。

「本当に言いがかりかしら？」

その声をたどってみると、そこに立っていたのは

「明日香、カイザー亮」

明日香と亮の2人だった。

明日香は一步前に踏み出すと、今朝自分が見たことをありのままに皆に話した。

「私見てしまったの。万丈目君、今朝あなたが海岸でカードを捨てたところを」

この明日香の言葉を聞いた万丈目は苦い顔になった。

「気になって事情を聞きに着たけど」

そこまで聞いた十代はもうそれで十分だった。

「汚いぞ万丈目！やっぱりお前が！！」

十代は万丈目を弾劾するが、万丈目はやはり認めなかった。

「だまれ！俺は自分のカードを捨てたんだ。それともそのカードに名前でも書いてあったのか？」

そんな決闘者としてあるまじき姿勢に十代は声を荒らげた。

「万丈目！！」

千影もそんな万丈目を射抜くように睨み付ける。

しかし、これ幸いと万丈目は新たな条件を付け加えるべくクロノスに提言する。

「俺を泥棒呼ばわりした責任は取ってもらうぞ。いかがでしょう、この決闘で負けた方が退学になるといっうのは？」

「無茶苦茶だ！キーカードをなくした三沢のデッキは」

勝手に自分に有利なように話を進める万丈目に食って掛かるうとした十代を留めに入った人間がいた。

「いや、その決闘受けて立つ」

当事者である三沢本人だった。

「デッキにあります。その条件受けましょう」

この三沢の言葉に一番驚いたのは十代たちだった。

「三沢！？」

「三沢君！？」

「大丈夫なの？」

十代、翔、千影が三沢を心配げに見る中、三沢は3人に向かって口を開いた。

「心配かけて悪かったな、3人とも」

そう言いつつ、三沢は自分の制服のボタンをはずしながら言葉を続ける。

「捨てられたデッキは調整に使う寄せ集めのデッキ！俺の本当のデッキは

ここに

上着を脱いだ下のベストに6つのデッキケースがあったのだ。

「見る！俺の知恵と魂をかけて作った6つのデッキを！！風、速きこと風の如く！水、静かなること水の如く！火、侵略すること火の如く！地、動かざること地の如し！闇、悪の闇に光さす！！」

この光景を見た万丈目は一瞬臆するが、見掛け倒しと斬って捨てた。「む、6つのデッキだと！？そんなこけおどし、俺の恨みの炎で焼き尽くしてやるわ！！」

万丈目の言葉を聞いた三沢は笑みを口元に湛えると1つのデッキに腕を伸ばした。

「ふっ、決まった。お前を倒すデッキはコレだ！セットアップ！！」  
そして決闘盤に装着する。

「これがこけおどしのデッキなのかすぐにわかるぜ、万丈目！！」

「こい、三沢ああ！！」

万丈目も決闘盤を起動させ、三沢と対峙する。

「決闘ッ！！」

万丈目LP4000

三沢LP4000

「俺の先行！カード、ドロー！！」

万丈目は引いたカードに目を落とすと、すぐさま2枚のカードを手を取った。

「俺は地獄戦士を攻撃表示で召喚！！」

地獄戦士 4 ATK1200 DEF1400

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！！」

万丈目のターンエンド宣言を聞いた三沢はカードを引くべくデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー！！」

そんな三沢と万丈目の決闘を見守りながら十代は1つ気になっていたことがあった。

「三沢の選んだのはどの属性だ？」

そう。6つのデッキのうちのどれを三沢が選んだかである。

「風？それとも水？」

そして、その答えが今、まさに三沢の手によって示された。

三沢は1枚のカードを手に取り、それを召喚する。

「俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚する！出でよ、ハイドロゲドーン！！」

ハイドロゲドン      4    ATK1600    DEF1000

三沢が選んだデッキは水だった。

「俺はハイドロゲドんで地獄戦士を攻撃する！ハイドロ・プレス！地獄戦士を蹴散らせ！！」

三沢の号令と共にハイドロゲドンが吐き出した水の衝撃波が地獄戦士をなぎ払った。

「ぬううっ！！」

万丈目LP3600

だが、この攻撃を黙って受ける万丈目ではなかった。

「しかし！この瞬間、地獄戦士の特殊効果が発動！！プレイヤーが受けたダメージを相手プレイヤーにも与える！！」

万丈目の宣言どおり、三沢のライフポイントが万丈目に与えたダメージ分だけ下がる。

三沢LP3600

しかし、三沢も負けてはいない。

「こっちも特殊効果を発動するぜ！ハイドロゲドンは相手モンスターを戦闘で破壊した時、デッキから新たにハイドロゲドン1体、特殊召喚することができる！！出でよ、ハイドロゲドン！！」

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

三沢はデッキから2枚目のハイドロゲドンを引き抜き、自分の場に特殊召喚したのだった。

「まだ俺の戦闘フェイズは続いている！俺はこのハイドロゲドンで万丈目に直接攻撃する！！いけえ、ハイドロゲドン！ハイドロ・ブレス！！」

2体目のハイドロゲドンの攻撃が万丈目に襲いかかる。

「う、うわああああっ！！」

万丈目LP2000

万丈目は後ろに飛ばされると倒れふしたのだった。

「ターン終了だ」

三沢のターンエンドを聞いた万丈目は幽鬼のように立ち上がると、三沢をにらみながらデッキから新たなカードを引いた。

「俺のターン、ドロー！俺はここで罠カード、リビングゲデッドの呼び声を発動する！！このカードにより自分の墓地から1体モンスターを特殊召喚することができる！！俺が召喚するのはコレだああああ！！」

万丈目は墓地に存在するカード1枚を手にとると、それを自分の場に特殊召喚した。

「甦れ、地獄戦士アア！！」

地獄戦士 4 ATK1200 DEF1400

そしてここから万丈目の猛攻が始まる。

「さらに俺は速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動し、お互いのフィールドにいるモンスターとタモンスターをデッキ、手札、そして墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する！」

地獄戦士 4 ATK1200 DEF1400

地獄戦士 4 ATK1200 DEF1400

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

地獄の暴走召喚の効果により、万丈目は2体の地獄戦士を、三沢はハイドロゲドン1体を特殊召喚したのだった。

これを見た明日香は万丈目が何を狙っているのかわからなかった。

「何体地獄戦士を揃えようと、攻撃力は1200。ハイドロゲドンには及ばない」

「何か策があるはずだ」

亮のこの言葉に万丈目は当然といった風に答えた。

「当たり前だカイザー！オベリスクブルーで貴方の跡を継ぐのは俺だ！！」

そして万丈目は手札から1枚のカードを決闘盤に差し込んだ。

「俺は装備魔法、ヘル・アライアンスを発動！装備モンスターと同じ名前のモンスター1体につき攻撃力が800ポイントアップ！装備された地獄戦士の攻撃力は

！！」

ヘル・アライアンスが装備された地獄戦士が黒いオーラに纏われ、その姿を巨大化させていく。

その攻撃力

「3600!!」

地獄戦士 4 ATK3600 DEF1400

大型モンスターをさらに上回る攻撃力をその身に宿したのだった。

「いけええ、地獄戦士!」

万丈目の命に従い、地獄戦士は圧倒的な力を持って三沢のハイドロゲドンの1体を一刀の下に両断したのだった。

「ぬわあああ、ぐっ!」

三沢LP1600

しかし三沢は臆することなく自分のターンを開始する。

「なんの!俺のターンだ!!」

そして引いたカードを手札に加えると新たなモンスターを召喚するべく、手札の1枚に腕を伸ばす。

「出でよ、オキシゲドン!」

オキシゲドン 4 ATK1800 DEF800

「攻撃力1200の地獄戦士を攻撃しろ!オキシ・ストリーム!!」  
オキシゲドンの攻撃が地獄戦士1体を破壊し、差分ダメージを万丈目に与える。

万丈目LP1400

「うぬう、しかし!地獄戦士が破壊され、俺が受けたダメージは全て貴様も受けることになるんだぜ!!」

三沢LP1000



万丈目の言うとおり、ライフポイントがとうとう1000にまで下がったというのに三沢は攻撃の姿勢を緩めなかった。

「さらに俺は、ハイドロゲドンでもう1体の地獄戦士を攻撃！」  
もう1体いた攻撃力1200の地獄戦士がハイドロゲドンの放った攻撃に飲み込まれる。

万丈目LP1000

「だが！ダメージ全てはお前も受けることになるんだぞ！！」  
そして、またしても地獄戦士の特殊効果が三沢のライフポイントを削る。

三沢LP600

この光景を見た翔は、天を仰いだ。

「これじゃあ、三沢君のライフポイントが削られていくだけだよお」

「いや」

「これでいいんだよ、翔」

その翔の言葉に十代と千影が口を開いたのだった。

2人の言葉に翔は「えっ？」となるが、その理由を明日香の隣に立つ亮が説明を始めた。

「十代と千影の言うとおりだ。装備魔法のついた地獄戦士の攻撃力は3600。それはよほど強力なモンスターも召喚しない限り倒すことは不可能。しかし見る！」

亮の言葉が指した攻撃力3600の地獄戦士が見る見るうちに攻撃力を下げて言ったのだ。

その攻撃力は



00ポイントアップする！お前の場のモンスターは3体、よってヘル・バーナーの攻撃力は600ポイントアップ！！」

火炎魔人ヘル・バーナー                    6    ATK3400    DEF1800

そしてその攻撃力は3000の舞台を突破したのだった。

「いけえ！恨みの炎を受け、この学園から消え去れ三沢あつ！！」  
ヘル・バーナーが放った炎の奔流が三沢に迫る。  
しかし

「畏発動！アモルファス・バリア！！」

炎は三沢の発動した畏に受け止められた。

「こいつは自分フィールド上に3体以上のモンスターがいる時、相手の攻撃を無効にして戦闘を終了させる！残念だったな万丈目」

「しぶといやつめ。しかし、次のターンで確実にお前は終わりだ」  
握りこぶしを作り、次のターンに自分の勝利を確信した万丈目だったが、三沢がそれに待ったをかけた。

「次のターンがあるとすればな！」

「何っ！？」

万丈目が三沢の科白に驚く中、三沢はデッキから新たなカードをドロ―する。

「俺のターン、ドロ―！」

その引いたカードを見た三沢は口元に笑みを湛えた。  
なぜなら引いたカードとは

「俺は手札より魔法カード、ボンディング・H2Oを発動！ハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を生け贄に捧げ」

2個の水素原子と1つの酸素原子が結合し、ここに新たなモンスターとなる。

「出でよ！ウォーター・ドラゴオオオオン！！」

ウォーター・ドラゴン                    8    ATK2800    DEF2600

巨大な水の龍が姿を現したのだった。

「そして、俺の場のモンスターが減ったことでヘル・バーナーの攻撃力はダウンする！」

火炎魔人ヘル・バーナー      6    ATK 3000    DEF 1800

しかし、それでもなお、万丈目の有利には変わらない

「だが、俺のモンスターのほうがまだ攻撃力が上だ」

  筈だった。

「ふっ、それはどうかな。すでにお前を倒す方程式は完成している！」

この言葉に審判であるクロノスが驚きの声を上げた。

「な、ナントオオツ!？」

この驚きこそ、会場中の人間全てが共有するものだった。

「ここまでの戦闘も計算のうちだというのか!？」

十代のこの言葉の後にそれを実証する現象が起きる。

それは

津波が万丈目のフィールドに襲い掛かっていたのだ。

「うわあああああ!!!」

三沢のウォーター・ドラゴンが発生させた津波は万丈目のヘル・バーナーを飲み込む。

すると、ヘル・バーナーの攻撃力が見る見る下がっていくではないか。

火炎魔人ヘル・バーナー      6    ATK 0    DEF 1800

自分のエースモンスターの力ない姿に万丈目は驚きを隠せなかった。

「これは!?!」

「ウォーター・ドラゴンの特殊効果を発動!このモンスターが場に  
いる限り、炎属性、炎族のモンスターの攻撃力は0になる!」  
万丈目への説明を終えた三沢はウォーター・ドラゴンへ攻撃を命じ  
る。

「ウォーター・ドラゴン、アクア・パニッシャー!」

ウォーター・ドラゴンが吐き出した水の奔流がヘル・バーナーを押し流し、さらに万丈目までもを決闘上の外へと押し流したのだった。  
「うぐわあああ、ぬわあああああつ!」

万丈目 L P O

ソリッドヴィジョンで映し出された水から顔を出した万丈目に三沢は声をかけた。

「万丈目、お前は決闘者として」

「うるさい!お前が偶然、水属性デッキを選んだために俺は

」!

三沢の勝利を幸運で切って捨てようとした万丈目だったが三沢は首を横に振った。

「違うな、偶然なんかじゃない。お前が教えてくれたんだ、決闘が始まる前にデッキの内容を恨みの炎という言葉でな。つまりこの決闘は始まる前から勝負は決まっていた」

三沢のこの言葉に万丈目は啞然とした。

そんな万丈目に三沢は悲しそうな顔をしながら続ける。

「そして万丈目、海に捨てられていたカードは間違いなく俺のものだ」

「なぜわかる?」

「それはこれについてメモをしてしまったからだよ」

万丈目の当然の疑問に三沢はブラッド・ヴォルスのカードを出し、万丈目へと見せた。

そこには三沢の部屋の壁と同じように数式が書かれていたのだ。

「これが証拠だ。こんな落書きがあるカード、世界でたった1枚だけだからな」

これを聞いた万丈目は観念したのか両手両膝を地に着けたのだった。勝負がついたところでクロノスは勝者である三沢の下へと歩み寄り言った。

「シニョール三沢、ユーのオベリスクブルーへの編入を認めるのーネ」

「いえ、そのお誘いはお断りします」

しかし三沢はクロノスのこの誘いを断ったのだ。

「オウ、何故なのーネ!？」

クロノスの疑問は当然だ。自分から昇進の機会を蹴るだなんてことをしでかした人間は僅かな例外　　十代と千影である  
をにおいて他にいないからだ。

だが、それには三沢なりの理由があった。

「俺はオベリスクブルーに入るなら、この学園でナンバー1になった時と入学式の時に決めたんです」

そして三沢は視線を十代と千影に移し言葉を続けた。

「十代、千影。オベリスクブルーに入るのはお前たちを倒してからだ」

この言葉を聞いた十代と千影は嬉しそうになりながら、その言葉に応えた。

「よし!それならすぐ決闘をやるうぜ!」

「私も三沢、君とは1度闘ってみたかった」

そう言いつつ、デッキを掲げる2人であったが、三沢が首を横に振り言った。

「残念だが今は駄目だ」

「なんでだよ?」

「??????」

十代と千影はなぜ三沢が、そう言ったのかに首をひねるが応えはすぐに三沢の口から出た。

「ここにあるデッキはまだ完成していない。この6つのデッキはお前たちのE・HEROとLOVサーヴァントデッキを研究するための試作デッキに過ぎない」

これを聞いた万丈目は愕然となった。

「し、試作のデッキだと！俺はそんなものに負けたのか！！」

万丈目が恨みの視線を三沢に向ける中、三沢は十代と千影に言葉を続けた。

「たぶん、新しく塗った部屋の壁が数式で埋め尽くされるころにはできるだろう。お前たちのE・HEROデッキとLOVサーヴァントデッキを破るための7番目のデッキが！」

この宣言を聞いた千影と十代は共に握りこぶしを作ったのだった。

「私たちを負かす、デッキを作るか。その時を楽しみに待ってるよ、三沢」

「おもしれえ！その時こそお前と勝負だ！！こい、3番！！」

「ああ、行くぞ。1番君にパーフェクト君！」

そう言つと3人は楽しそうに笑いあうのだった。

## 第11話【DA学園篇】（後書き）

さて、今回は我らがザ・エアーマンこと三沢が輝いていた回、酸素＋水素＝H<sub>2</sub>Oドラゴンの回をお送りしました。

いやあ、本当にこの時期は三沢が輝いてますねえ。

第1期のOPで出ていたウォーター・ドラゴンに対を成すファイヤー・ドラゴンをオリジナルで出そうかと考えましたが、水属性デッキに炎はないだろうと思いつ断念しました。

後々登場させるつもりなのでご期待のほどを。

しかし主人公と気が合い、なおかつライバルという好位置につきながらも、あの空気感は未だかつていなかったんじゃないかと思いません。

それと、今回はオリカが出なかつたので今回の最強カードのコーナ―はお休みです。



## 第12話【DA学園篇】

万丈目が学園から去っていったり、研究所から逃げ出したSALに攫われた千影を助けるためにジュンコともえが奮戦したりといった事件が起こっている間に冬休みに入り、その冬休みも「あっ」という間に過ぎた今日。

冬休みに帰省していた生徒たちが続々とデュエルアカデミアに帰ってきていた。

そして彼、姫宮千影もこの度の帰省から戻り、オシリスレッドの寮に帰ってきていたのだった。

「ただいま。そして久しぶり皆」

そう言いつつ、久方ぶりのオシリスレッド寮の部屋の扉を開いた千影に中の十代たちは驚きの声を上げた。

「おかえり、千影　　って！お前、そのかつこう！？」

十代が驚くのも無理はない。

千影の出で立ちが出て行ったときと違うのだから。

制服の変わりに紅色を基調とした陣羽織を羽織り、さらに髪型もいつもの髪型ではなくシニヨンに結い上げられていた。

「ああ、これ。陣羽織は今年の誕生日プレゼントに貰ったのと、この髪型は従妹と妹がこのほうが似合うからって家から出る前にセツトしてもらったんだ。イメージチェンジなんだって」

そう言いつつも、柔らかく笑う千影はいつもの千影だった。

「お前って従妹と妹がいたのか？」

「うん、妹の歌音に従妹の比巫子。2人とも私より1つ年下で今はまほろば村の乙橘学園に通ってるんだ」

しかしなんとというか、こう髪を結い上げた千影には得も知れぬ色気が新たに備わっていたのは蛇足である。

それはそれとして新年が明けてからの初授業である。

その授業とは

「今日の体育はテニスを行いませう」

との鮎川の言葉によりテニスと相成った。

へっぴり腰で望む翔とダブルスを組んだ十代は、ジュンコが打った球を打ち返しながら首をひねった。

「しかしテニスって決闘の何の役にたつんだ？」

その十代の球をももえは十代のコートに返しながら答える。

「鮎川先生も本当はバレーボールがやりたかったそうですね。あつ！」

話していたからなのか手元が狂い、球は大きく上へと上がった。

これを好機と見た十代は飛び上がりスマッシュの動作に入る。

「どっちも同じだよ、どおりやあああ！！」

しかし、変に気合を入れたのがまずかった。

勢いよく打たれた球はあらぬ方向へと飛んでいく。

その先は

「やばい！避ける千影！！」

シングルスで明日香と打ち合っていた千影だった。

千影は十代の声に反応するが、つい先ほど明日香の球を打ち返したばかりなので体勢がどうしても間に合わない。

あわや、ぶつかると思った瞬間どこからともなく現れた影が、千影に迫っていた球を打ち返した。クロノスの顔面に。

クロノスがどうなったのかは推して知るべし。

「あ、あの」

千影は自分を助けてくれた人物にお礼を言おうとしたところで、『姫宮千影ファンクラブ』会長であるジュンコとももえが駆け寄ってきた。

「大丈夫！千影姫！」

「お怪我はありませんでしたか！？」

そんな2人に千影は大丈夫だと片手を振った。

「うん。なんとか」

無傷の千影を見た2人他、十代、翔、明日香は安堵の息を漏らす中、千影を助けた人物は着地の姿勢から体を起こすと千影に向かって口を開いた。

「大丈夫、怪我しなかったかい？」

しかも「キラリ」と歯を光らせながら。

その人物の声は本家『二重の極み』の人の声に似ていた。

閑話休題

ジュンコとももえがミーハー気分丸出しになる中、千影が自分を助けてくれた人物に対して頭を下げた。

「いえ、おかげで助かりました。さすがのアレは私でも対応できないものだったので」

こう言っただけは見たものの。お礼を言われた本人は「ぽーっ」と千影をただ眺めているだけだった。

それもそのはず。

（こんな可憐な子がこの学園にいたなんて）  
なんと千影に一目ぼれしていたのだ。

「あの、私の顔に何か？」

自分が目の前の人物に惚れられているとは露とも知らない千影は小首をかしげながら目の前の人物に問いかけた。

この千影の問いかけに、千影を助けた人物

綾小路ミツル

は顔を振り、照れ笑いを浮かべる。

「いやあ、あはは、失敬失敬。しかし知らなかったよ。我がデュエルアカデミアに君のような可憐な子がいたなんて」

そして綾小路は千影の手を自然にとる。

「君、名前は？」

この行動に千影はタジタジになりながらも答える。

「えっと、姫宮千影」

「千影君か。いやあ名前も素敵だ」

「あ、あの……」

この千影の反応に綾小路は「やってしまった」というような顔にな

ると千影から手を離した。

「あつははは、ちよつと気障だったかな。忘れてください、あーっ  
ははははは！青春、青春！！」

綾小路はそれだけ言うのと笑って去っていったのだった。

後に残ったのはイケナイ妄想を膨らますジュンコとももえに、綾小路のテンションについていけず、ずつと呆気にとられていた千影や明日香、十代、翔だった。

「本当にすみませんでした！ごめんなさい！！」

保健室で十代は治療を受けているクロノスに頭を下げていた。

しかし

「ごめんですんだらポリスはいらないーノネ！」

いつかの野球の時と同様に片目に青痣を作ったクロノスは許す気は更々ないようだった。

そんなクロノスに鮎川は顔を「グイッ！」っと自分のほうに向かせると口を開いた。

「十代君もわざとではなかったようですよ、その変で許してくれたらどうですか。クロノス先生？」

そう言うとクロノスの患部に氷嚢を当てるがクロノスは首を横に振った。

「ノン、ノン、ノン！それでは出しっぱなしーノ、ビールではありませんーカ！！」

その心は？

「生ぬるいーノ」

クロノスの言葉に十代は肩を落とし呟く。

「つーか、直接球当てたの俺じゃないし」

この呟きを耳聡く聞き取ったクロノスは目くじらを立てて十代に詰め寄り一気に捲くし立てた。

「だまるのーネ！この期に及んで他人のせいにするなんーテ！！よろしい！罰として我が名門テニス部ー二、一日体験入部するのーネ

「！！」

この発言に十代は顔を顰める。

「なんだよそれ、無茶苦茶だろ」

しかし、クロノスには絶対に言うことを聞かせる魔法の呪文があった。

それは

「でないと単位はあげませんーノヨ」

これにより十代の未来は決まったのであった。

「はっ！」

青空戴くテニス部グラウンドで気合に満ちた声と共にテニス部部长、綾小路ミツルは鋭いサーブを放った。

「おおっと」

それを十代が打ち返すという動作を繰り返して既に打ち返した球は3桁を超えていた。

「はあ．．．はあ．．．テニス部部长ってこいつのことだったのか。しかしこれはキツイぜ」

かなりの激しい運動にさすがの十代も膝をつき肩を上下させながら息を乱していた。

そんな十代に綾小路は容赦なく次の球を打ち込む。

「たくっ！クロノスのやつ覚えてろよ」

そういつつも打ち返そうとするが、かなり足に来てるのか十代は大きく空振りし尻餅をついてしまったのだった。

「いててて．．．」

そんな十代に綾小路は手を止め、ネット際まで歩み寄ると十代に向かって檄を飛ばしはじめた。

「立て、立つんだ遊城十代君！これぐらいで挫けちゃいけない！！今、がんばらないでどうするんだ！今日という日は今日しかないんだぞ！！」

「当たり前じゃないか．．．なんだ、この暑苦しい奴は．．．」

綾小路の訳のわからない檄に十代は半ば呆れていた。

しかし綾小路はそんな十代の言葉を無視し訳のわからない言葉を続ける。

「そして明日という字は明るい日と書くのだ！さあ、明日のために後50球！！」。

これを聞いた十代は顔を嫌そうにゆがめる。

「うええ！？後50球……」

そんな十代の表情を見ているのかいないのか綾小路は憎たらしいほどの清々しい表情でラケットを振り回しつつ今までの言葉を締めくくりに入った。

「どうだ、元気が出てきたろう！僕と一緒にがんばるんだ、汗と涙は明日の糧になる！！美しき青春、バンザイ！！」

どこをどう聞いたら元気が出てくるのか理解に苦しむ言葉の数々につい今しがた十代の練習風景を見にきた翔、ジュンコ、明日香はあきれ返っていた。

「あの部長、爽やか笑顔で言うこと芝居がかつてるよね」

「って言うか意味不明なんだけど」

「全くね……」

しかし、2人ほど違った感性の持ち主がいた。モモエと千影である。

「いいんですの、顔がよければ」

「いつてることは間違っではないよね、努力することはいいことだし」

そんなこんなしているうちに十代は追加された50球を次々と打ち返していく。

「48、49……50！！……終わった」

そしてやっと最後の50球を打ち終えた十代は体をコートへと投げ出した。

それはもう精も根も尽き果てたという表現がピッタリくるほどに。

そんな十代を見た千影は手にタオルとスポーツドリンクを持って十代へと歩を進めた。

「千影君!？」

今まで練習に集中して千影の存在に気がつかなかった綾小路は、千影の姿と手にするものを確認すると歯を光らせ顔をほころばせた。

「やあ千影君!嬉しいなあ、僕のためにタオルとドリンクまで準備してくれ」  
いい!?あれえええ!?!?」

そんな綾小路に一礼するだけで千影はそそくさと十代の元にタオルとドリンクを手渡しに行ったのであった。

「はい、十代。お疲れ様」

「おお!サンキュー、千影!」

千影から貰ったドリンクで喉を潤し、タオルで汗を拭く光景を目にした綾小路は燃えていた。

「千影君の用意したドリンクを飲み、あまつさえ千影君の用意したタオルで汗を拭くとは……今僕は猛烈に嫉妬している!」  
嫉妬の炎で萌えた……失礼、燃えた綾小路は千影と十代の間に割ってはいる。

「離れたまえ千影君!」

いきなりの綾小路の言葉に千影と十代は「えっ?」となりそちらに視線を向けると綾小路が捲くし立て始めた。

「あまりこういうことを言いたくないが千影君、可憐な白百合のよな君にオシリスレッドの十代君は似合わない!」

不幸なことに千影は校長からの許しを得て、オシリスレッドの制服から私物の陣羽織に着替えていたので綾小路には千影の所属がオシリスレッドだということは知らないことだった。

それ以前に未だに千影を女の子だと思っっている点でアレなのだが。

「千影君、君には僕のような男こそが相応しい。さあ早く君の用意してくれたタオルとドリンクを僕に渡してくれないか!」

両の目を禍々しく光らせながら言い寄る綾小路に十代と千影は誤解を解こうとする。

「ちよ、ちよつと待て!あんた何か勘違いしてないか!？」

「それにタオルとドリンクはもう十代に渡しちゃったから替えがな

いし……」

千影の指摘するところが相変わらず天然だったが。

「それにコイツはお」

十代が決定的な言葉を放つ前に綾小路が十代の眼前に迫る。

「今さら言い訳とは見苦しいぞ十代君!!」

「いや、だからあ……」

話を聞いてくれない綾小路に辟易した十代だが、当の綾小路はダークサイドに落ちた様な目になっていた。

「ふうん、千影君をコイツ呼ばわりかあ。もおそこまで深い関係だったとは……」

綾小路はラケットを握り締めると十代に向かって宣戦布告の言葉を放った。

「十代君、僕と決闘だ!!」

「人の話を聞け」

全く、十代の言うとおりだ。

しかし、嫉妬の炎に燃えた綾小路には言葉が通じないのは今までのやり取りを見て当然のこと。なんといつでも通常字ですら意思疎通が難しいのだから。

「君も決闘者なら、ここは潔く決闘で決着をつけようじゃないか！」

「だから決着ってなんのだよ？」

未だに綾小路の言葉の意味を理解できないでいたが、次の言葉でこの場にいる全員がどよめく事になる。

「ズバリ、勝った方が千影君のフィアンセになるのだ」

「……な、なんだってええええええええ!!!!!!!!」

「フィアンセってなんだ？食えんのか??」

約1名、フィアンセの意味がわかってない奴がいたが、各々の綾小路の言葉に対する心境はこうだろう。

『どこをどうすればそういう話になるのか』と。

しかし、売られた決闘は買うが主義の十代だ。二つ返事でOKをだす。



「なんだか知らねえが、いいぜ！その決闘、受けて立つぜ！！」

テニスの練習後そのままにコートに立ったまま決闘盤をつけた両者が対峙した。

「勝負だ十代君！」

「おう！望むところだ！！」

決闘盤が展開し、ソリッドヴィジョンシステムが起動する。

「「決闘ッ！！」」

綾小路LP4000

十代LP4000

そんな2人の決闘をミラー気分丸出しで見ているのが『姫宮千影ファンクラブ』会長の2人だった。

「千影姫をめぐって二人の殿方が決闘だなんて、ステキすぎます！」

「これは次の会報の1面記事ね」

カメラを構えたモモエと記事にするための情報を書き留めるメモを開いたジュンコの姿に明日香は頭に手を当てていた。

「はあ、馬鹿馬鹿しい・・・というか千影にはご愁傷様としか言いようがないわね」

「まあ、ファイアンセ云々はアノ人に私の正体教えれば済む話だしね。それよりも噂では綾小路ミツル、彼はカイザー亮に勝るとも劣らない決闘の腕前と聞くよ。そんな彼と十代との決闘なんて見逃す手はないでしょう？本当は私がやりたかったんだけどね」

「貴方らしいわね、全く」

そついうと二人は十代と綾小路の決闘に目を戻した。

「僕のターン、ドロー！」

引いたカードを確認した綾小路は手札にある1枚のカードに手を伸ばす。

「先手必勝！魔法カード、サービスエース発動！！」

その綾小路の手に十代は驚きの声を上げた。

「いきなり魔法カードか！？」

「このカードはね、僕が選んだカードの種類を君が当ててるギャンブルカードさ」

そう言いつつ、綾小路は手札の1枚を抜き取る。

「魔法が畏か、はたまたモンスターか、見事当てることができればOK。だがもし間違えたら」

全く持つて決闘には関係ないことなのだが。ここで齒を『キラリ』と光らせるのが綾小路クオリティ。

「十代君、君は1500ポイントのダメージをくらうことになる」

「おもしろいじゃんか。よおおおっし」

十代は綾小路の選んだカードを見極めようと目を細める。

「ううううううううううううううううぬぬぬぬうううううううううううううううう」

眉に皺を寄せてカードを睨む十代に綾小路はあきれ返った。

「おいおい、まさかカードを透視しようていうんじゃないだろうね？」

できるはずがないとわかっていても一応やってみるのが十代クオリティというところか。

「よし、決めた魔法カードだ！」

「えっ？それでいいのかい？？変えるのは今のうちだよ」

十代の答えに心理戦を仕掛ける綾小路。

その綾小路の言葉に十代は表情を変えて待ったをかける。

「ちよ、ちよつと待て・・・畏だ、畏カードに変更だ」

この答えに綾小路は笑い声を上げた。

「ふふふふん、モンスターカード。残念、両方とも外れだったね」綾小路の選んだカードはメガ・サンダーボールだった。

「くそっつ！」

「そして、このカードをゲームから除外してサービスイースの効果により相手プレイヤーに1500のダメージを与える……！」

「サービスイースから放たれた光弾が十代に降り注ぐ。  
ぬぐう、うわああ！」

十代LP2500

「15-0、さらに僕はリバーズカードを1枚セットしてターンエンドだ」

「よし！今度は俺の番だ、ドロー……！」

十代は引いたカードを確認しながら、これからどうするかを考えていた。

（いきなり大きなダメージを食らっちゃったか、でもあいつの場にモンスターはいねえ……行くぜ……！）

「E・HEROフェザーマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROフェザーマン      3    ATK1000    DEF1000

「いつけえええ！爽やか部長に直接攻撃……！くらえ、フェザー・クラッシュ……！」

十代の号令の元、フェザーマンが羽による弾幕攻撃を綾小路に放つが、それをそのまま受けるほど綾小路は甘くなかった。

「リバーズカードオープン！罨カード、レシーブエース……！直接攻撃を無効にし、相手に1500のダメージを与える……！」

綾小路が発動した罨にフェザーマンの弾幕が跳ね返され、十代を襲う。

「えっ！？うっうっうっ……！」

十代はいきなりすることに顔を腕でかばうのが精一杯だった。

「30・0、コストとしてデッキからカードを3枚墓地に送る」  
「リバーズカードを1枚セットしてターンエンドだ」

あつというまに追い詰められた十代に翔が声をかける。

「しっかりしてよアニキ！このままじゃ千影君、勘違いさえれたまま爽やか部長のフィアンセになっちゃうよ！！」

その言葉にモモエとジュンコが本当に黒い 違った、いい

笑顔で誰とも聞こえずにこう呟いたのだった。

「妄想の中ではそれでかまいませんが……」

「……本当にそうなると困るのよね」

「そうなれば月のない夜には気をつけていたただかないと。うふふふふふ……」

2人の放つ黒いオーラに明日香は思い切り引いていたことを追記しておく。

「僕のターン、ドロ―！どんどんいくぞ、それ！！魔法カード、スマッシュエースー！」

自分のターンが来るや否や、綾小路がすぐさま魔法カードを使用し勝負に出た。

「このカードの効果はデッキの上からカードを1枚めくり、そのカードがモンスターだった場合十代君、君に1000ポイントのダメージを与える！」

綾小路のバーン戦術に十代は半ば面食らっていた。

「なんだよ、そんなのばっかじゃん」

「悪いがそれが僕の決闘でね」

綾小路は歯を光らせ、デッキの上のカードに手をやる。

「さあ1番上のカードは……モンスターカードだ！」

その手に握られていたカードは神聖なる球体、モンスターカードだ



然としていた。

高笑いをやめた綾小路は自分の圧倒的有利を未だに笑い続ける十代に向かって言い放つ。

「残りLP1000ポイントで笑っている場合じゃないだろう、十代君。それとも開き直って笑っているのかな？それもまたオシリスレッドの君らしいけどね」

その言葉にカチンときたのか十代は笑うのをやめると、綾小路の場を指差した。

「笑ってられねえのはそっちの方だろ。自分の場をよよく見てみる！」

そう、綾小路の場にはモンスターも伏せカードもないのだ。

「さつきは罠にやられちまったけど、今度こそお前の場はがら空きだ！いくぜ、俺のターン！ドロー！！」

十代は引いたカード、融合を見ると1つ領き、手札のカード2枚を手取る。

(よし！)

「魔法カード、融合を発動！クレイマンとバーストレディを融合して、E・HEROランパートガンナーを攻撃表示で召喚だ！！」

E・HEROランパートガンナー      6      ATK2000      DEF  
2500

「いくぜ、覚悟しな！フェザーマンとランパートガンナーの連続攻撃だ！！」

フェザーマンの風とランパートガンナーのミサイルが綾小路を襲い、一気にLPを削る。

「ぬ、ぐわあああ！！」

綾小路LP1000

「ターンエンドだ」  
土煙が晴れ、苦虫を嘔み潰した綾小路の表情を見た十代は満足そうにターンエンドを宣言したのだった。

「さあ、これで振り出しに戻ったわけだ」

互いのLPが並び、さらにモンスターの数でも勝っている十代は強気にこういったが、未だに綾小路の表情には余裕があった。

「ふっ、はたしてそうかな？僕のターン、ドロ」

そして引いたカードを手に取ると綾小路は歯を光らせた。

「僕はこのチャンスを待っていたんだよ、十代君。僕は手札全てをコストに強い歩道LV12を特殊召喚！！」

強い歩道LV12      12      ATK500      DEF0

それは何事もない歩道だ。どこをどうみれば強いのかわからないほど歩道だった。

「なんだ！？なんで今までテニスしてていきなり歩道が来るんだよ！しかも 12のモンスターだつてええ！？」

十代のもつともなツツコミを歯を光らせることでスルーした綾小路はこのモンスターの説明を始めた。

「このモンスターは特殊な条件化でしか召喚できないモンスターなのさ。それは互いのLPが1000以下の時に自分の手札を全て捨てるというね」

「でも攻撃力たったの500で何ができるって言うんだよ！こっちは攻撃力1000のフェザーマンと2000のランパートガンナーがいるんだぜ！！」

そう、どんなに が高くても攻撃力は十代の場のモンスターに遠く及ばない。

しかし

「このモンスターの真骨頂は攻撃力じゃないんだよ、十代君！この

モンスターが特殊召喚された時、このモンスターを除く全てのモンスターを破壊する!!」

「なんだって!?!」

綾小路の言葉と共に歩道が波打ち十代のモンスター全てを空の彼方へと弾き飛ばしてしまったのだ。

「ぐうう! フェザーマン、ランパートガンナー!!」

「そしてこの効果で破壊したモンスターの数だけ、僕はデッキからカードを選んで手札に加えることができるのさ。僕は2枚のカードを手札に加えさせてもらうよ」

この効果に千影は珍しく大きな声を上げる。

「いけない! これれで相手が通常召喚を行ったら十代の負けだ!!」  
しかし、その答えは意外なところからやってきた。

「そうしたいのは山々なのだけどね、千影君。このモンスターが場に存在する限り全てのプレイヤーはモンスターを召喚することができないんだよ」

綾小路のこの言葉に翔がはっとなった。

「てことは、アニキももうモンスターを召喚できないんじゃない!」

「そう、すでに彼に勝ち目は残されていないのさ。そして、このカードで息の根を止める!」

綾小路は十代のほうに向き直り、先ほど手札に加えたカードを切る。

「魔法カード、サービスエース発動!!」

「あのカードは!?!」

「さあ、もう一度だ十代君。選びたまえ、このカードの種類を当てればこのターン、君は生きながらえることができるが、はずすことをオススメするよ。なんととっても君はもうモンスターを召喚することはできないんだからね」

「ふざけんじゃねえ! そこにデッキがある限り諦めてたまるか!!」  
そう憤る十代は頭の中で、あのカードが何かを考えていた。



(あれは何だ、さつきは確かモンスターカードだったよな。てなると……)

確立3分の1を当てる勝負に緊張感が走る。

そして十代が口を開く。

「よし！そいつはモンスターカードだ！！」

この十代の言葉に綾小路は驚いた顔になった。しかし、自分の有利には変わらない。すぐに表情を戻すとそのカード、メガ・サンダーボールを十代に見せた。

「お見事」

「よっしゃー！」

雄たけびを上げる十代だったが、未だに危機は去っていないかった。

「ただどね、十代君。僕の勝ち揺ぎ無い！強い歩道LV12で十代君に直接攻撃だ！！」

歩道が波打ち、大きなコンクリートの津波となって十代を襲う。

「うっうっうっうっ！！」

十代LP500

「これで、次の僕のターンで決着だ。ターンエンド！」

この危機的状況下、十代はいかにしてこの状況を打破するか考えていた。

(やるな爽やか部長。爽やかな顔してえげつい事やってくれるぜ。

次で決めなきや俺の勝ちはない。しかもモンスター召喚を封じられているこの状況……頼むぜ俺のデッキ！)

「俺のターン、ドロー！」

そのカードを見た十代はガッツポーズを取った。

「きたー！この決闘貰ったぜ！！」

「なに！？」

勝利を確信していた綾小路はこの十代のアクションに動揺した。

「こいつがお前の息の根を止めるぜ!!」

先ほど引いたカードを掲げた十代に、綾小路は笑いを持って答えた。  
「はっははははは!!これだからオシリスレッドは馬鹿なんだ!どんな強いモンスターを引いてきても召喚することができなければ全くの無意味じゃないか。強い歩道LV12が場にある限り全てのプレイヤーはいかなる召喚をおこなうことができない!!」  
この言葉に十代は口に手を当てて失笑を漏らした。

「くっくく、これだからオベリスクブルーは阿呆なんだ!誰が、このカードがモンスターカードだなんていった?俺は手札から速攻魔法、トラップ・ブースター発動!手札1枚をコストにさつき引いた罠カードを発動するぜ!!発動せよ、ヒーロー・ブラスト!!」  
「なに!?!」

「このカードは自分の墓地にあるE・HEROと名のつく通常モンスター1体を手札に加え、さらに手札に加えたモンスターの攻撃力が相手の場のモンスターの攻撃力を上回っていれば、そのモンスターを破壊する!俺が手札に加えるのはE・HEROフェザーマン!!」

十代は墓地からフェザーマンを選択してそれを手札に加えた。

「フェザーマンの攻撃力は1000・・・しまった!!」

「そうさ、ただの歩道にヒーローが負けてたまるかあ!吹き飛ばえ!!」

攻撃力500の強い歩道LV12が吹き飛び、綾小路の場はがら空きとなった。

「これでモンスターの召喚ができるぜ、フェザーマンを攻撃表示で召喚して直接攻撃だ!!」

E・HEROフェザーマン      3      ATK1000      DEF1000

「いけえ!フェザー・ブレイク!!」

フェザーマンの放った風の衝撃が綾小路を襲い、残ったLPを全て

持っていったのだった。

綾小路LPO

「わぁ！」

「逆転勝利ね！」

「やったー！さすがアニキー！」

この逆転劇を見ていたモモエ、ジュンコ、翔は諸手を挙げて十代の勝利を喜んでいた。

「うん、さすが十代」

「そうね」

千影と明日香も顔をほころばせながら頷いていたのだった。

一方、負けた綾小路は両手両膝をつき体を震わせていた。

「ま、負けた……」

「いえええい！ガツチャー！！いいだ」

そんな綾小路に十代はいつもどおりのガツポーズを取ろうとしたのだが

「この僕が負けたああああ！?!?!?うわああああああ！?!?!?うおおおおおおお！?!?!?」

さながらナイアガラの滝のように涙を流しながら逃げ去って行ったのだった。

十代はそれを呆然と見送るしかなかった。

そんな十代の元に翔や千影が歩み寄ってきた。

「やったねアニキー！やっぱすごいやー！」

「いい決闘だったよ」

その言葉に鼻を高くした十代が胸を張る。

「へへん、楽勝楽勝。でもさ、千影1つ質問があるんだけど」

「うん？何??？」

千影が小首をかしげて十代の問いかけに耳を傾ける。

もちろん、この表情がモモエのカメラにより激写されていたことは全くの蛇足である。

「フィアンセって結局なんだ？俺は食いもんかなんかだと思っただけど、お前は知ってるか??」

この言葉に千影を除く全員がずっこける中、千影が十代にフィアンセについて教えると

「えええええ！婚約者って意味だったのか!!でも、俺と千影は男同士だろ!!」

「うん、だからこの話はどちらにしろんでもなかったことになるんだよ。私に衆道の趣味はないし」

「衆道ってなんだ？」

「それはね」

「まじかよ!?そんなのがこの世の中にあるのかよ!!」

「うん、それも幕末までには隠すことなく世間一般にあったらしくて」

そっついいつつ、二人肩を並べてテニスコートから出て行ったのだっ  
た。

しかし、その光景はそのまま見ると中睦まじいカップルに見えるんだから不思議である。

こうして、デュエルアカデミアの新年は明けたのであった。

## 第12話【DA学園篇】（後書き）

さて、GXの正史から2話ほど話数を飛ばしましたが青春のデュエルテニスの回をお送りしました。

これも飛ばそうかなと思いましたが新年が明けての回で、しかも千影君がイメチェンしたのでどうしてもはずせない回となってしまいました。

その千影君、シニヨンに髪の毛を結び上げ陣羽織を羽織つての登場です。

これからこの姿が千影君のデフォルトになります。しかも勘のいい人は、この回で千影君の母親と叔母の名前がわかってしまったのではと思います。

今回の最強カード『強い歩道LV12』

12 ATK500 DEF0 地属性 戦士族 効果モンスター

このモンスターは通常召喚できない。

相手と自分のLPが1000以下の時、このカード以外の自分の手札を全て捨てることでしか特殊召喚できない。

このカードの召喚に成功したとき、全ての場のモンスターを破壊し破壊したモンスターの数だけデッキからカードを選び手札に加える。このモンスターが表側表示である限り、全てのプレイヤーはモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚ができなくなる。

本来ならあそこの場面、綾小路は永続魔法デュースを使うのですが、それでは面白くないと勝手にこちらでオリカを作り使わせました。それがこれです。まあわかる人にはわかるネタでしょう。

デュースと同じく厳しい発動条件ですが、あちらよりも効果は絶大になっております。

しかしながら所詮は歩道というわけで攻撃力500に落ち着きました。

### 第13話【DA学園篇】

1年目前期も後半に入り早数週間。闇の巨人デュエリスト事件、黄金の卵パン消失事件とのんびりする暇もないくらいに日々は駆け抜け、待ちに待った日が明日へと迫った。  
そう、それは

平和な午後の昼下がり、十代と千影はドローパーンを買おうと購買までやってきたのだが、その目にはいつもは見ない人ばかりが見えていた。

「おっ？」

「なにかやってるのかな？」

2人は駆け出すと、後ろのほうにいた三沢に声をかけた。

「なんだ、なんだ？」

「何か問題でも起こったの？」

そんな2人に三沢は「まあ見てみればわかるよ」といって、2人が見やすいように体を少し横にどかしてくれた。

そこでは見慣れないライイエローの生徒が決闘していたのだった。

「誰だ、あいつ？」

「神楽坂、ライイエローの生徒だ」

「見りゃわかるよ、そんなこと」

十代の疑問に三沢が答えるが名前以外、見たままの情報に眉を寄せたが千影によって宥められた。

「まあまあ、十代も聞き方が悪いよ。どうしてあの神楽坂っていう生徒が、ここで決闘してるのかってちゃんと聞かないと」

その言葉に十代は頬を書きつつ三沢に頭を下げた。

「そうだったな、悪いことしたな三沢。で、相手はというと

翔！？」

「みただね」

そう、十代の弟分、丸藤翔が相手だったのだ。

「どうしたんだ、翔？」

「どうしてライエローの生徒と決闘なんか？」

十代と千影は翔の前に出て行き事の説明を求める。

「どうもこうもないっすよ、アレアレ」

翔の指差す方向に2人が視線を向けると、その先には数枚のポスターがあり、そこにはデュエルキング武藤遊戯の全身写真と共にこう書いてあった。

「デュエルアカデミアにて初代デュエルキング、武藤遊戯のデッキ特別展示」

「ああ、そう言えば明日からだったかあ」

「てことはあの遊戯さんが使ってたデッキがこの島に来るのか・・・  
うわあああ」

そう、明日はこのデュエルアカデミアに武藤遊戯が使っていたデッキが来る日なのだ。

それを今、初めてしった十代は顔をほころばせるとそのまま心ここにあらずといった風になってしまったのだ。

「おおい、アニキ。大丈夫っすか？アニキー？」

翔が十代の目の前で手を振るが全くの反応がない。

「感動のあまり、少し放心してるみたいだね」

そんな十代の様子に千影は苦笑をもらすのであった。

「神のカードは入っていないらしいけどブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガール、他にもお宝カード満載の激レアデッキ！絶対見なきゃ損だよ！！」

翔がそう説明している間に戻ってきたのか十代が首を傾げつつ、この現状を翔に問いただした。

「それはわかったけど、この事態と何の関係があるんだ？」

その質問に答えたのは購買部のおばちゃんことトメさんだった。

「購買部で朝一番で見られる整理券を配ってたんだけどさあ。最後の1枚になって決闘で決着つけようってことになったのよ」



そのトメさんの手には最後の1枚であろう整理券が握られていた。

「ええっ！？無茶すんなって翔」

弟分のあまりに無謀な行動に十代は翔をたしなめるが

「何言ってるんすかぁ。あの整理券はアニキの分ですよ。僕の分はホラ」

そう言いつつ翔はポケットから1枚の整理券を取り出す。十代の横に立つ千影を見ると申し訳なさそうな顔になった。

「でも、あれが最後の1枚だから・・・ごめんよ千影君。千影君の分までは確保できなかったんだ」

そう謝る翔に千影は手を振りながら笑顔で答えた。

「ああ、そんなこと。大丈夫。だって・・・ほら」

その千影の懐から出てきたのは件の整理券だった。しかも番号1番。「ええ、千影！お前いつのまに！？」

「うん、今朝ジュンコとモモエがくれたんだ。いつも感動をありがとう、僅かばかりのお礼だってさ。でもなんだろうね？彼女たちに特別何かをしたわけでもないのにお礼だなんて・・・」

未だに『姫宮千影ファンクラブ』の存在を知らない千影に会長2人からの日々の感謝を送られてもピンとこないのだろう、終始頭をひねる千影であった。

「がんばれ翔！」

それを見た十代は、いきなり翔の肩をつかむと励ましの言葉を翔に贈ったのだった。

「わかってるつすよ」

期待のこもった十代の目に半ば引きつつ翔は千影と十代から離れて決闘の場に戻っていった。

「決闘再開！」

そして再び購買部は決闘の緊張感に包まれた。

「俺のターン」

神楽坂は引いたカードを確認すると、そのままそのカードを決闘盤

へと差し込んだ。

「魔法カード、大嵐！場の全ての魔法、罠カードを破壊するのーネ」

この言葉を聞いた十代と千影は表情を変えた。

「げっ、なんかデジャヴユが」

「あるね、これは確かクロノス教諭の戦術だ」

十代と千影の言葉に三沢は頷きつつ説明に入った。

「そう、神楽坂のデッキはクロノス教諭のコピーデッキだ」

「わっ、びっくり」

「三沢、いつの間にも前へ」

この声にギョツとしたのが他ならぬ千影と十代であったが。

大嵐の効果で神楽坂の場にある2枚のカード、黄金の邪心像が破壊され、神楽坂の場に邪心像トークン2体が出現した。

「2体のトークンを生け贄に古代の機械巨人を召喚！」

デッキと言葉遣いどころかポーズまで真似て神楽坂はクロノスの切り札モンスター、古代の機械巨人を召喚したのだった。

古代の機械巨人      8    ATK3000    DEF3000

「いけ！古代の機械巨人！！」

神楽坂の古代の機械巨人の腕が翔に迫るが、迷宮兄弟との決闘を乗り越えた翔の敵ではなかった。

「ジェット・ロイドの効果発動！このカードが攻撃対象になった時、手札から罠を発動できる」

そして翔が手札から選んだ罠カードは

「魔法の筒！僕の受けた攻撃はそのままお返しだあ！！」

翔の魔法の筒の効果により古代の機械巨人の攻撃は神楽坂へと降り注いだ。

「なに！？ぐああああ！！」

「やったー、僕の勝ち！」

勝鬨を上げる翔に十代と千影が走りよる。

「すごいじゃないか、翔！俺と千影が苦労したコンボをあっさり破りやがって」

「うん、本当に翔は強くなったね」

2人が翔を絶賛する中、翔は頭をかきつつ勝因を2人に語りだした。「アニキと千影君の入試決闘覚えてさ、それに千影君に教えてもらった戦術も組み合わせで、相手の油断したところにカウンターを仕掛けたのさ。おっと」

そこまで話した翔は思い出したかのようにトメさんに駆け寄ると最後の整理券を受け取った。

「これは僕が貰うよ。悪く思わないでね」

これにて一件落着となったのを確認したトメさんは集まったギャラリィに向かってお開きを告げる。

「さあさあ皆、これでおしまい。帰った帰った」

オシリスレッドに惨敗した神楽坂を声には出さないが蔑み去つていく生徒たちの中、最後に残った三沢が未だに肩を落とす神楽坂に声をかけた。

「ドンマイ！ま、ついてない時もあるさ」

「うるさい！」

しかし神楽坂から帰ってきた答えは険しいものだった。

「いつでもオベリスクブルーにいけるお前に何がわかる！！」

そついうと神楽坂は逃げ出すように駆け出したのだった。

「くっそう！どうして、どうして勝てない！！」

その夜、神楽坂は寮の自室で自分が整理した有名決闘者の資料に当り散らしていた。

「武藤遊戯、海馬瀬人にカイザー亮！そしてクロノス・・・名だたる決闘者のデッキは全て研究した、対戦記録も全部暗記した。なにどうして勝てないんだ！何が違うんだ!!!」  
そう悔しそうに拳を握る神楽坂の目の前に1枚のチラシが落ちてきた。

それは武藤遊戯のデッキ特別展示のチラシだった。

「何が違うのか、この目で確かめてやる」

所変わってオシリスレッド寮の千影たちの部屋。

十代はあの時、遊戯から貰ったハネクリボーのカードを眺めつつあることを考えていた。

「ねえ十代」

そんな十代に千影がにこやかな顔で声をかけてきた。

十代はハネクリボーから千影に視線を移した。

「なんだよ、千影」

「十代の思ってること当ててあげようか」

この言葉に十代は「へえ」と声を漏らすと千影に挑戦的な声でこう返した。

「じゃあ、当ててみな」

「明日の武藤遊戯のデッキの特別展示が開くのは、朝の9時。それならこの時間には既に準備は終わってるはず。ちょっとフライングして武藤遊戯のデッキを見に行こう」  
「違う?」

千影の言葉を聞くにつれて十代の顔が驚きに変わっていき、最後には半ば呆然と千影の話聞いていたのだった。

「ドンピシャ。どうしてわかったんだ千影?」

その十代の言葉に千影はクスリと笑いながら答えた。

「それは、私も同じ事を考えてたから」

それを聞いた十代は顔をほころばせ、千影の肩に手を回しつつ翔と隼人に向かって口を開いた。

「と、いうわけでお前たちもいくよな」

この提案に諸手を挙げて賛成したのは隼人だった。

「それはいい考えなんだな。明日じゃやっぱり込み合うだろうから。人ごみは苦手だし」

しかし翔はその話には若干の異議を唱えた。

「ええ、それじゃあ僕の手に入れた整理券は使わないって事？」

折角、格上との決闘で十代の整理券を勝ち取ったのにそれが使われないとなると、かなり不満があるようだ。

「それはそれ、明日の朝もまた見に行くって。いこうぜー」

その言葉により、全会一致で遊戯のデッキを見に行くことになったのだった。

「デッキの展示が終わりましたので、展示室とケースの鍵をお渡しします」

展示室前の廊下でクロノスが警備員2人から鍵を受け取っていた。

「今回の警備は助かりますよ、怪しいものがうるつく事もありませんし。我々は宿舎に戻ります。では明日」

そういつつ警備員は敬礼をすると踵を返して去っていったのだった。

「ご苦労様なノーネ」

そんな警備員の後姿を見送りながらクロノスは笑みをこぼした。

「フヒヒヒヒ。一足先ーニ、シニョール遊戯のデッキを見られるなノーテ教師の役得なノーネエ、ドンビラキ」

そう言いつつ、展示室の鍵を開けるとその先のケースには武藤遊戯のデッキが展示  
されていなかった。

「なんでスーノオオオ!!!」

そこには割られた展示用ケースの破片が散乱してただけで、肝心のデッキがなくなっていたのだった。

夜の校舎を駆ける影が4つ、千影たちである。

十代と千影を先頭に展示室へといたる道のりを走るが、展示室前に

なつて千影たちとは反対の道から1つの影が見えた。  
それは

「おう、十代に千影」

「三沢、どうしたんだ？」

そう、ライイエローの三沢大地だった。

「はははは、ちょっとフライングしてキングのデッキを拝みにね」

「皆、考えること同じなんだね」

三沢の言葉に千影が微笑みを湛える中、展示室のほうから誰かの叫び声が聞こえた。

『マンマミーアアアア！！！』

その叫び声にハツとなつた5人は展示室へと駆け出した。

「なんだ今の？」

「アノ声は」

「クロノス教諭だ」

「十代、千影！」

「おう！」

「征こう！！」

そして扉を開いた向こうにあつたのは慌てるクロノスと空の展示ケースだった。

「キングのデッキがないんだな！」

「まさかクロノス先生が！？」

隼人と翔の言葉に首をふるクロノスだったが、それを見るや否や十代、三沢、千影は踵を返した。

「皆に知らせようぜ」

「ああ」

「こういうのは初動が命だからね」

そして全員で駆け出そうとするが

「ちよと待ッーノオオ！！」

「……………あいたーっ！！！！……………」

クロノスの器用なダイビングキャッチにより5人は勢いあまって顔

から倒れることになったのだった。

「何するんだよ!？」

当然の如く文句を言う十代にクロノスは目に涙をためながら5人に向かつて口を開いた。

「事が公になると私が責任とらされるノーネ」

そうは言うクロノスだったが事が事だ。

「だったら早く」

「そうだぞ、校長に知れたら」

「もしかしたら免職かも」

三沢、隼人、翔の言葉に自分が疑われていると勘違いしたままのクロノスは誤解を解こうと必死だった。

「だ、だから違うノーネエエ!ワタシじゃないノーネ!!ないノーネエ.....」

そういつつ肩を落とすクロノスだったが意外なことに杞憂で終わることになる。

「そんなこと最初からわかってるよ」

十代の言葉にクロノスは「えっ?」と声を上げる。

そんなクロノスに続けて千影がそういきついた推理を話す。

「教諭ならケースを割る必要はないでしょう、ここの責任者なんだから盗むのなら鍵を使えばいい」

「そ、そうなのーネ。ガラスケースの鍵があるノーネ」

クロノスは懐から鍵を取り出しつつ、取り敢えず一息はつけたようだ。

千影たちは立ち上がりつつ、これからの捜査をどうするのか確認しあう。

「まだそんなに時間はたつてない、皆で手分けして犯人を捜そう! まずは」

捜査の指揮を執る千影にそれに頷く十代たちにクロノスは涙を流して感謝した。

「ウツウウウ...ドロップアウトボーイ、シニョールたちだけ

「ガ頼りなノーネ！」

「ではクロノス教諭は校舎の搜索をお願いします」

「ようし、行くぞ隼人、翔！」

「俺もいるぞ！！」

こうして遊戯のデツキを盗んだ犯人の搜索が始まったのだった。

崖に面した波打ち際で1人の影が、戦利品を眺めていた。

ブラック・マジシャンにクリボー、そしてブラック・マジシャン・ガール　　展示室から盗まれた遊戯のデツキだった。

「すごい！こんな伝説のカードが・・・俺の手に！！」

そんな興奮した声を聞きつけてここら一帯を搜索していた翔がその人物の元にやってきたのだった。

「ああ！君！！君がデツキを盗んだのか！？」

その言葉にデツキを盗んだ犯人、神楽坂は堂々とした態度で翔に向き合った。

「お前か、丸藤翔。ちょうどいい、俺は今このデツキを試したかった所なんだ」

そついつつ翔に向かって決闘盤を投げてよこす。

「デツキはもつてるな！？」

「当たり前だ！！」

翔はその決闘盤を腕にはめるとデツキをセットし決闘盤を起動させる。

神楽坂も盗んだ遊戯のデツキをセットし決闘盤を起動したのだった。

「だめだ！」

「怪しい奴はいなかったぞ」

「こつちも手がかり全くなしだったぜ！」

一時集合場所の鉄橋前で千影は三沢、隼人、十代からの報告を聞いていた。

「こつちも駄目みたい。クロノス教諭もまだ連絡がないところを見



ると何も掴んでいないようだし……そう言えば翔は？」

千影はこの場にまだ翔が来ていないことに気がついた、その時。

『うわあああああつ!!!』

翔の叫びが夜の闇に轟いた。

その声の先に4人が視線をやる。

「あつちか！」

「翔の担当区域なんだな！」

「急ごう！」

「無事でいてよ、翔！」

4人は駆け出し、翔の声が聞こえた場所へと飛び降りる。

そこには

「すごい……！俺がこんなに強い……!!はっはははははははは  
!!!!」

翔を降り高らかに笑う神楽坂と決闘に負けて倒れ付した翔だった。

「翔！大丈夫か!？」

それを見た十代は翔に駆け寄るとそう声をかける。

すると翔は案外なんともなかったようで体を起こすと自分の不甲斐  
ない姿にしょげ返っていた。

「アニキ、悔しいよ……あいつが……」

その視線の先には逃げもせず未だ堂々と神楽坂が立っていた。

「神楽坂!？」

「お前が犯人か!!」

三沢と十代が声を上げる中、千影が軽い身のこなしで岩場に立つと  
神楽坂に向かって口を開いた。

「デッキを今すぐに返して。そうすればクロノス教諭も大事にしな  
いと約束してくれている」

この千影の説得を神楽坂は一笑に伏した。

「断る。これこそ俺が求めていた最強のデッキだ！俺なら……武藤  
遊戯の決闘を完全に研究してる俺なら！彼の決闘を100%再現で  
きる!!もう俺は誰にも負けない！クロノスだろうが、カイザーだ

るうが、誰にも!!」

そんな神楽坂の表情は嬉々としていて尚、絶対の自信に満ち溢れていた。

「そうか……翔、決闘盤を私に」

いつもとは違う冷たい千影の言葉に十代たちが驚きの声を上げる。

それはそうだ、いつもは温厚な千影がここまでの敵意を明らかにしたのは彼らの知る限り片手で事足りるほどの回数しかないからだ。

これは千影独自の美学から来るものだった。

（瀬人さんの生涯の好敵手、武藤遊戯のデッキを手にするだけでは飽き足らず、それを使いこなせるだなんて妄言……彼とその彼と決闘してきた決闘者に対する冒瀆だ!）

そんな千影の心のうちを知らない神楽坂は、その千影の言葉を鼻で笑って返した。

「お前、本当に俺に勝つ気でいるのか？」

その言葉に千影は腕を組みつつ神楽坂に問うた。

「そのデッキは武藤遊戯が組み、信頼を託し苦楽を共にした存在だ。君には過ぎたるものだよ神楽坂。慢心に溺れて溺死する前に返す気はないか？」

「そういうことは俺に勝つてから言っただな!!」

もはや語ることなしと神楽坂は決闘盤を起動する。

そして千影も翔から投げてよこされた決闘盤を装着するとデッキをセツト、決闘盤を起動する。

「ならばその盲執と慢心、この私が断罪する!!」

「決闘ッ!!」

千影LP4000

神楽坂LP4000

「私が先行を取らせてもらっ!ドロー!!」

引いたカードを手札に加えた千影は今ある手札で、すぐさま戦術を

組み立て行動に移す。

「私はL o Vサーヴァント・ケルベロス・を守備表示で召喚！」

L o Vサーヴァント・ケルベロス・                    3    A T K 1 4 0 0    D E  
F 7 0 0

「さらにリバースカードを1枚セットしてターン終了！」

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂は引いたカードを確認するや迷いなく手札を選び、そのカードを発動した。

「幻獣王ガゼルとバフオメットを手札融合！出でよ、有翼幻獣キマイラ！！」

有翼幻獣キマイラ                    6    A T K 2 1 0 0    D E F 1 8 0 0

千影は神楽坂の迷いないキマイラの融合召喚に半ば驚きを隠せなかった。

「この手は・・・武藤遊戯の序盤の定石・・・！！」

そう武藤遊戯も決闘の序盤はかなりの確率でこのキマイラを召喚し序盤戦を有利に進めていたのだ。

その驚いた千影を尻目に神楽坂はキマイラに号令を降す。

「いけ、キマイラ！幻獣衝撃粉碎！！」

千影のケルベロスはキマイラの体当たりによって粉碎されたが、それも千影の計算の内だった。

「L o Vサーヴァント・ケルベロス・の特殊効果発動！このモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のL o Vサーヴァントと名のついたモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚できる！！私はL o Vサーヴァント・ヴォーパルバニー・を特殊召喚！！」

LoVサーヴァント・ヴォーパルバニー - 4 ATK1000  
DEF500

「LoVサーヴァント・ヴォーパルバニー」の特殊効果！このモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロウする！！」

千影と神楽坂の攻防を見ていた隼人は「そういえば」と翔に尋ねる。「翔、やつと闘ったんだろう？何か千影にアドバイスはないのか」その言葉に少し恥ずかしながら翔は口を開いた。

「それが・・・僕、キマイラだけでやられちゃったんで」

この言葉に隼人は啞然となるが、至極当然の意見を述べ始めた。

「けど、翔が1度勝てた相手なら千影だって大丈夫さ。強いデッキには高いレベルのタクティクスが必要」

その隼人の言葉に三沢が異を唱えた。

「それはどうか」

この三沢の言葉に翔と隼人は「えっ！？」となった。

「神楽坂は記憶力がよすぎて、自分が組んだデッキは無意識に誰かのデッキに似てしまう。そこをつかれて、いつもは勝負に負けるが、デッキを真似るって事は一瞬で他人のデッキの特徴を読み取るということだ」

三沢は神楽坂のその才能がどれほど恐ろしいのかを再確認したのか、頬に汗が伝う。

「デッキからそれを作った決闘者の人格まで読み取り、そのタクティクスを再現する」

「ああ、俺もそう思うぜ。あいつは翔に負けたとはいえクロノス先生のデッキでクロノス先生の戦術を完璧に再現していたしな」

十代のこの言葉に三沢は頷きながら言葉を続ける。

「今、あいつの持っているデッキが最強というのなら今のあいつは無敵の決闘者ということだ」

この言葉に翔と隼人は神楽坂に武藤遊戯の姿を見たのだった。

三沢の言葉を聞いた千影は心の中で幾分か彼の評価を修正していた。  
(ならば、本当に君がそのデッキを使うに相応しいか見せてもらおう  
！)

そして、それを確かめるべく千影はデッキに手を伸ばす。

「私のターン、ドロー！私はチューナーモンスター、LOVサーヴァント-クアール-を召喚！！」

LOVサーヴァント-クアール-      2      ATK1000      DEF0

「そして 4、LOVサーヴァント-ヴォーパルバニー-に 2、  
LOVサーヴァント-クアール-をチューニング！」

雷を纏った獣と兎の獣人が星となり夜空に舞う。

「煌く星が、集いてここに獣を誘う。魔の獣よ、顕現せよ！シンク  
口召喚！汝、暴食魔獣LOVサーヴァント-オルトロス-！！」

LOVサーヴァント-オルトロス-      6      ATK1700      DEF1500

そして2頭を持つ魔獣がここに降臨したのだった。

しかし、これだけでは攻撃力2100のキマイラには及ばない。

そう、これだけでは。

「さらにリバースカードオープン！畏カード、アルカナストーンシールド！！このカードは発動後、装備カードとなり装備したモンスターの攻撃力と守備力を500ポイントアップさせる！さらに装備されたモンスターが戦闘によって破壊されたとき、このカードを破壊することでモンスターの破壊を無効にし、戦闘ダメージを0にする効果も持つ！！オルトロスよ、アルカナストーンシールドの恩恵を受けよ！！」

LOVサーヴァント - オルトロス - 6 ATK 2200 DE  
F2000

千影の発動した畏カードの効果により攻撃力を上げたオルトロスはキマイラの攻撃力を超えたのだった。

「オルトロスでキマイラを攻撃！ハンターダッシュユ！！」

オルトロスがキマイラに襲い掛かり、キマイラを粉碎したのだった。

神楽坂LP3900

「くっ！キマイラのモンスター効果発動！！このカードが破壊された時、墓地にあるバフォメットかガゼルを特殊召喚できる！よみがえれ、バフォメット！！」

バフォメット 5 ATK 1400 DEF 1800

しかし神楽坂もただでは転ばない。キマイラの効果でバフォメットを壁として守備表示で特殊召喚したのだった。

「そうくると思った！故にオルトロスの選択だ！！オルトロスは1回目の攻撃後、相手フィールドにモンスターがいる時もう1度攻撃ができる！ハンターダッシュユだ、オルトロス！！」

そう、千影がダメージを稼げるセイレーンよりもオルトロスを選んだ理由がこれだ。

そして、2回目のオルトロスの攻撃がバフォメットを砕く。

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂は引いたカードを手札に加えると、またも澱みなくカードを選んで発動する。

「手札から魔法カード、死者転生を発動！このカードは手札を1枚

捨て、墓地のモンスター1体を手札に加える！墓地より幻獣王ガゼルを手札に加え、召喚！！」

幻獣王ガゼル      4    ATK1500    DEF1200

神楽坂が回収したのは幻獣王ガゼル。神楽坂はガゼルをそのまま攻撃表示で召喚したのだった。

「さらに魔法カード、光の護封剣を発動する！」  
天から光り輝く剣が降り注ぎ千影の周りを牢獄のように囲んだ。

「これで貴様のモンスターは3ターンの間、攻撃できない！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

千影は自分を取り囲む護封剣を見やるとデッキに手を伸ばす。

「光の護封剣・・・厄介なカードだけど破壊する手はある！私のターン、ドロー！！」

そして手札の中から1枚のカードを選び出す。

「魔法カード、シンクロキャンセル発動！この効果でオルトロス融合デッキに戻し、墓地に存在するクアールとヴォーパルバニーを特殊召喚！！さらにヴォーパルバニーの効果でカード1枚をドロー！！」

LOVサーヴァント-ヴォーパルバニー-      4    ATK1000

DEF500

LOVサーヴァント-クアール-      2    ATK1000    DEF0

千影の場に2体のLOVサーヴァントが出現、守備表示を取ったのだった。

この戦術に隼人は千影の狙いに気がついた。

「上手いぞ、千影！これでガルーダにシンクロ召喚しなせば、モンスター効果で光の護封剣を破壊できるんだな！！」

そう、LOVサーヴァント・ガルーダも 6のシンクロモンスターなのだ。

翔もタイタン戦で見た、強力な効果に瞳を輝かせるが神楽坂は不敵に笑っていた。

「ふっ、お前がモンスターを召喚するのを待っていたぜ」

神楽坂は伏せていたりバースカードを発動する。

「俺はこの瞬間、罨カード、黒魔族復活の棺を発動！！このカードは相手がモンスターを召喚、反転召喚、特殊召喚した時、そのモンスターの魂と自分のモンスターを引き換えに墓地にある魔法使い族1体を復活させる！！」

それを見た千影は怪訝そうな顔をするが、その顔はすぐさま驚愕に染まる。

「墓地にあるカードはキマイラとバフォメットのみのはず、魔法使い族なんて……まさか！！」

「そう、死者転生の時コストとして墓地に送っていたのさ！さあ、ガゼルとクアールの魂を生け贄に復活せよ！！」

棺が開き、ガゼルとクアールは棺に取り込まれ、墓地から彼のモンスターが復活する。

「出でよ、ブラック・マジシャン！！」

ブラック・マジシャン      7      ATK 2500      DEF 2100

武藤遊戯の代名詞とも言えるモンスターがその威容を現したのだった。

「これがブラック・マジシャン……武藤遊戯のデッキを象徴するモンスター……！！」

その威容に千影も戦慄を覚えると同時に、神楽坂の評価を大きく改めていた。

（神楽坂、どうやら私は君を見誤っていたようだ。決闘開始から黒



魔族復活の棺までの流れに全くの無駄がない。瀬人さんに聞いたとおりの武藤遊戯の戦術そのままだ。認めよう、君は確かに武藤遊戯のデッキを使いこなしている……だが、負けるわけにはいかない!!)」

しかし、千影の手札にはチューナーモンスターはなく、この状況下で召喚できるモンスターもいなかった。

「私はカード1枚をセットしてターン終了だ!!」

「俺のターン、ドロー!!」

それを知ってか知らずか神楽坂は一気に攻勢に出た。

「おれは魔法カード、千本ナイフを発動!!」

神楽坂とブラック・マジシャンの周りに千本のナイフが出現する。

「このカードは自分の場にブラック・マジシャンが存在する時、相手モンスター1体を破壊する!!」

そしてブラック・マジシャンが杖を振ると同時に空中に展開されたナイフがヴォーパルバニーに降り注ぐ。

「うっ、くうう!!」

千影は爆炎から顔をかばうが、その場はがら空きとなっていた。

そんな千影に神楽坂は容赦なく攻撃を仕掛ける。

「ふっははは、これで貴様の場にモンスターはいなくなった。ブラック・マジシャン、直接攻撃!黒・魔・導!!」

ブラック・マジシャンから放たれた魔導波が千影に襲い掛かる。

「ああっ!つくう!!」

千影LP1500

「くっくくく、貴様程度の決闘者が俺に勝とうなんて1000年早いぜ」

しかし、ここで引き下がる千影ではなかった。

「リバース罠オープン、ゲート発動!!」

「なに?」

「このカードの効果はこのターン、相手から与えられたダメージの合計値分以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札から特殊召喚できる！」

この言葉を聞いた神楽坂は自分が千影に与えたダメージを思い返す。

「貴様が受けたダメージはブラック・マジシャンの2500……」

千影は頷きつつ、手札の1枚に手を伸ばす。

「そう、私は手札より攻撃力2400のLOVサーヴァント・ワイバーン - を守備表示で特殊召喚！」

LOVサーヴァント・ワイバーン -	7	ATK2400	DE
F2400			

「ふん、どんなにモンスターを並べようともブラック・マジシャンで撃破してやる！ターン終了だ！」

「私のターン、ドロー！」

ワイバーンを召喚してみたものの、未だに千影の不利には変わりない。

（なんとかワイバーンの効果でここは凌ぐしかないか……）

「私はこのままターンを終了する！」

これを見ていた三沢が眉に皺を寄せながら口を開く。

「まずいな。流石はキングのデッキといったところか、全くの隙がない。総合力で言えば千影のLOVサーヴァントデッキも大した物だが、キングのデッキに1歩……いや半歩追いついていないというところか」

十代も珍しく険しい顔で頷いた。

「ああ、でもその半歩がかなりでかいようだけどな……」

「どうした？手も足も出ないか！？俺にターン、ドロー！！行け、

ブラック・マジシャン！黒・魔・導！！」

神楽坂の号令の元、ワイバーンにブラック・マジシャンの攻撃が襲いかかる。

「これで再び、貴様の場はがら空き・・・何！？」

ブラック・マジシャンの攻撃による煙がはれた先にあったワイバーンの姿に神楽坂は驚きの声を上げたのだった。

「ワイバーンは攻撃力、守備力を800ポイントダウンさせることで戦闘での破壊を免れる効果を持つ！」

LOVサーヴァント - ワイバーン -            7    ATK 1600    DE  
F1600

それでも尚、ブラック・マジシャンと光の護封剣を有する神楽坂の有利は揺らがない。

「小賢しい、ターン終了だ」

神楽坂優位に進む決闘に十代は千影に声援を送った。

「耐えるよ、千影！このターンで光の護封剣の効果は消える。そうすればきつと反撃のチャンスはあるはずだ！！」

十代の声援を受けた千影は十代に1つ頷くとデッキからカードをドロースる。

「私のターン、ドロー！」

その引いたカードを見た千影は勝機を見出した。

(っ！見えた、逆転の一手！！)

「私はワイバーンを生け贄にLOVサーヴァント - ワータイガー - を攻撃表示で召喚する！」

LOVサーヴァント - ワータイガー -            5    ATK 2100    D  
EF1200

この千影の手に神楽坂は笑みをこぼした。

「ふん、血迷ったか。貴様を護っていた破壊耐性モンスターを捨てて、攻撃力2100のモンスターを攻撃表示だ」と

「ならば次のターン、その身で確かめてみるといい！私はカード1枚をセットしてターンエンドだ！」

「よし、3ターン経過！」

「これで光の護封剣は消滅するんだな！」

「よおーし、これで千影君も攻撃が仕掛けられるぞ！」

十代たちの言葉通り、千影の周りを取り囲んでいた光の護封剣が消え去っていったのだった。

「ふっ、やつに次のターンが回ってくればだがな！俺のターン、ドロー！」

このターンで決着をつけることができると踏んだ神楽坂はブラック・マジシャンに攻撃の命を下した。

「ブラック・マジシャン、やつのモンスターを攻撃しろ！」

神楽坂のこの言葉に千影は不敵な笑みを浮かべた。

「この時を待っていた！リバーカード、オープン！」

神楽坂は千影のこの宣言に身構える。

「何!？」

「罨カード、【バスター】モード！！自分フィールド上に存在するワータイガーを生け贄にして効果発動！！デッキまたは手札からL O Vサーヴァント - 【激昂】ワータイガー - を特殊召喚する！！」

千影は手札にあった【激昂】ワータイガーを攻撃表示で特殊召喚した。

L O Vサーヴァント - 【激昂】ワータイガー -      7      A T K 2 6  
O O    D E F 1 7 0 0

生け贄により捧げられたワータイガーは更なる力を持って千影の場に降り立ったのだった。

この千影の一手に翔は諸手を挙げて喜んでいた。

「やった！これでブラック・マジシャンの攻撃力を上回った！！」

「神のいない今、ブラック・マジシャンは遊戯デッキのエースモンスター。確かに倒せれば千影に勝機はある！」

「しかし、【バスター】モードか・・・千影のやつ、まだこんな隠し玉持つてやがったんだな！」

腕を組み頷く三沢の隣で十代は嬉しそうに千影のワータイガーを眺めていたのだった。

「この【激昂】ワータイガーは畏れカード【バスター】モードの効果でのみ召喚可能なモンスターだ！さらにこのカードが戦闘以外で破壊された時、このモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える効果も持つ！！これでブラック・マジシャンの攻撃力を上回った！！」

そう宣言する千影だったが神楽坂は一笑に伏すことでそれに答えた。「ふっはははは！それがどうした！？このデッキはお前たちの想像を遥かに超えている！！神の抜けた穴を十分に埋めるほどになあ！それを今見せてやる！！」

そう言うと神楽坂は一枚のカードを決闘盤に差し込んだ。

「俺は手札より速攻魔法、光と闇の洗礼を発動！自分の場のブラック・マジシャン1体を生け贄に、自分のデッキ、墓地、手札の中から混沌の黒魔術師を特殊召喚する！！」

この神楽坂の宣言に十代、翔、隼人、三沢は驚愕の表情を浮かべていた。

「あいつも千影と同じ戦術を！？」

「それに混沌の」

「黒魔術師って……」

「伝説の魔術師……最強レベルモンスターの1人……」

神楽坂はカードを掲げ高らかに宣言する。

「そつだ、貴様らは今から伝説を目にする！出でよ、混沌の黒魔術師！！攻撃表示だ！！」

混沌の黒魔術師      8    A T K 2 8 0 0    D E F 2 6 0 0

かつて、決闘者の王国でペガサスを下したモンスターが新たな力を得て、千影の前にその威容を現したのだった。

「このカードの召喚に成功した時、墓地から魔法カード1枚を手札に加える！」

神楽坂は死者転生を選択し手札に加えた。

「そして混沌の黒魔術師の攻撃力はブラック・マジシャンを上回る2800ポイント！！いけ、混沌の黒魔術師！滅びの呪文・デス・アルテマ！！」

混沌の黒魔術師が放った滅びの魔導波が千影の強化されたワイタイガーを完膚なきまでに破壊したのだった。

「くうううううううっ！！」

千影 L P 1 3 0 0

「言ったはずだぜ、俺に勝とうなんて1000年早いってなあ！！混沌の黒魔術師の効果で破壊されたモンスターをゲームから除外させてもらつぜ」

腕で顔をかばうことしかできない千影に神楽坂は高らかにそう言い放ったのだった。

「くっ・・・私のターン、ドロー！私はLoVサーヴァント・ガーゴイル - を守備表示で召喚してターン終了だ！！」

LoVサーヴァント・ガーゴイル -           4   ATK1800   DE  
F1000

デッキから引いたモンスターを守備表示で出すしかない千影に翔は弱気の声を出していた。

「あの千影君が防戦一方だなんて・・・」

「神楽坂の場には攻撃力2800の混沌の黒魔術師が1体、しかも千影が与えたダメージはたったの100。これは勝つにはちよいとキツイ闘いになってきたな」

三沢の言うとおり、厳しい闘いになりそうだった。

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂は引いたカード、クリボーを見ると遊戯の心情をトレースしているためか、優しく微笑んだ。

「俺はクリボーを攻撃表示で召喚！」

クリボー           1   ATK300   DEF200

「いけ、混沌の黒魔術師！ガーゴイルを攻撃！！」

混沌の黒魔術師の攻撃がガーゴイルに襲いかかる。

「くっ！！」

「続けてクリボーで直接攻撃だ！！」

がら空きとなった千影にクリボーがパンチをお見舞いしたのだった。  
「くっ！！」

千影LP1000

「さらにカードを1枚伏せてターン終了だ」

「私のターン、ドロー！」

千影は新たに引いたカードを確認すると1つ領いた。

(よし、これなら！)

「私はLovサーヴァント - コカトリス - を攻撃表示で召喚する！」

Lovサーヴァント - コカトリス -           2   ATK1000   DE  
F300

「コカトリスの特殊効果発動！このモンスターの召喚に成功した時、相手モンスターを1体選ぶ！！そして選ばれたモンスターはこのカードが表側表示で場に存在する限り、攻撃と表示形式の変更ができなくなる！私が選ぶのは混沌の黒魔術師！！」

コカトリスの吐き出した石化ガスが混沌の黒魔術師の動きを止めた。

「なに！？」

神楽坂が驚く中千影は次の命をコカトリスに下す。

「そしてコカトリスでクリボーを攻撃！」

これが通れば僅かながらダメージを与えることができる。

だが、それを許す神楽坂ではなかった。

「魔法カード発動！増殖！！」

増殖のカードの効果によりクリボーが消え、神楽坂の場に4体のクリボートークンが出現したのだった。

クリボートークン	1	ATK300	DEF200
クリボートークン	1	ATK300	DEF200
クリボートークン	1	ATK300	DEF200
クリボートークン	1	ATK300	DEF200



「増殖はクリボーを生け贄に捧げ、空いているモンスターゾーン全てにクリボートークンを守備表示で特殊召喚する！よってコカトリスが攻撃するのは――」

コカトリスの攻撃は守備表示のクリボートークンが受け、神楽坂には1ポイントのダメージも与えられなかったのだった。

「流石に簡単にはやらせてはくれいか・・・私はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

「これでますますやつの守備は鉄壁になったんだな」

「これが武藤遊戯のデッキ・・・なんと言うデッキだ。攻守にわたって完璧なバランスを持っている・・・それにしても、これだけのデッキを使いこなす神楽坂のタクティクスも流石だ」

「くううう！見てるだけでゾクゾクするぜ！！俺が決闘したかったなあ！！」

「もう、アニキったら！千影君が未だにピンチなんつすよ！！」  
そんな十代を翔が諫めながら4人は視線を決闘へと戻したのだった。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、天よりの宝札を発動！！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードを引く！！」

千影と神楽坂はそれぞれ手札を補充、確認する。  
神楽坂はその中から1枚のカードを抜き出す。

「俺はワタポンを特殊召喚。このカードは通常のドロー以外のドローで手札に来た時、場に特殊召喚できる！」

ワタポン     1     ATK200     DEF300

なんでもない低級モンスターの召喚。しかし神楽坂のこの召喚は次への布石。

「そしてワタポンを生け贄に、出でよ！ブラック・マジシャン・ガ

ール!!」

ブラック・マジシャン・ガール 6 ATK2000 DEF1700

遊戯のデッキのアイドルモンスターといえるブラック・マジシャン・ガールの召喚だった。

「ブラック・マジシャン・ガールは墓地に存在するブラック・マジシャン1体につき攻撃力が300ポイントアップする!」

ブラック・マジシャン・ガール 6 ATK2300 DEF1700

墓地に眠る師匠の魂を受け継いで、ブラック・マジシャン・ガールは更なる力を手に入れたのだった。

ブラック・マジシャン・ガールの登場に翔は頬を赤く染めていた。

「か、かわいい・・・僕、千影君には勝ってもらいたいけど、あの娘だけは応援しちゃうのかなあ」

デレデレのフニヤフニヤ、まさに骨抜きである。

そんな翔を十代と隼人がジト目で見ていた。

「おいおい、翔」

「なんてこといつてんだあ」

翔をたしなめる2人に逆に翔は食って掛かる。

「だって!ブラマジガールは遊戯さんのデッキにしか入ってないし、今夜限りの恋かもしれないんだよ!!」

「そ、そうか・・・」

「わっ、わかつたんだな・・・」

そんな「命賭けてます!」な翔の発言にドン引きする十代と隼人だった。

「これで決まりだ！ブラック・マジシャン・ガール、黒・魔・導・爆・烈・破！！」

これが決まれば1300の超過ダメージでライフポイント1000の千影の負けが確定してしまう。

だが、千影もそう簡単にはやらせはしない。

「永続罫、ライフモニュメント発動！」

「何だと!？」

「このカードは自分のライフポイントが1000以下の時に発動！このカードがある限り、私は相手からの効果ダメージを受けず、相手モンスターから受ける戦闘ダメージを半分にする！さらにこのカードは魔法、罫、モンスター効果では破壊されない効果も持つ!!」  
コカトリスはブラック・マジシャン・ガールが放った魔導波により破壊されたが、千影のライフポイントが尽きることはなかった。

千影LP350

「だが、コカトリスが消えたことで混沌の黒魔術師が攻撃できる！どの道貴様はここで終わりだ!!」

「それはどうかな？罫カード、サーチアイ発動！このカードの効果は戦闘でモンスターが破壊された時発動、デッキか手札から4以下のLovサーヴァントと名のついたモンスター1体を特殊召喚できる！私はデッキよりLovサーヴァント・酒呑童子・を守備表示で特殊召喚!!」

Lovサーヴァント・酒呑童子・ 4 ATK1700 DEF  
1000

「それがどうした！混沌の黒魔術師で撃破してくれるわ!!」  
神楽坂の命を受け、酒呑童子に攻撃を放つが、酒呑童子はビクとも

しなかった。

「なっ!?!これは破壊耐性モンスターか!?!」

「その通り。LOVサーヴァント・酒吞童子は戦闘では破壊されないモンスター・・・とはいっても私がダメージを受ければ破壊されるというデメリットを持つけどね」

千影が新たに呼んだLOVサーヴァントに神楽坂は舌打ちしつつタインの終了を宣言した。

「くっ!しぶといやつだ!?!タイン終了!?!」

そんな神楽坂に千影は笑みを浮かべつつ口を開いた。

「神楽坂、君の天からの宝札は君に好機を運んだようだけど、私にも勝機を与えてくれた!」

「何を戯言を!?!」

「ならば、その目でしかと見よ!私のタイン、ドロォー!?!」

千影はこの場をひっくり返すための切り札を切る。

「私は手札より魔法カード、二重召喚を発動!このタインこれにより2回の通常召喚を行える!?!そして私はLOVサーヴァント・エルダーワイバーンとチューナーモンスター、LOVサーヴァント・ワーウルフを召喚!?!」

LOVサーヴァント・エルダーワイバーン	2	ATK1000	
0 DEF600			
LOVサーヴァント・ワーウルフ	3	ATK1300	DE
F800			

「4、LOVサーヴァント・酒吞童子と2、LOVサーヴァント・エルダーワイバーンに3、LOVサーヴァント・ワーウルフをチューニング!」

3体のモンスターが9つの星となり夜空を舞う。

「雄々しき星が集いてここに、東方からの神を降ろす。東方の彼方より、顕現せよ!シンクロ召喚!汝、四神が一柱LOVサーヴァン

ト - 青龍 - ！！」

LOVサーヴァント - 青龍 -                    9     ATK 2800     DEF 2500

天地開闢の時に生まれ、幾星霜と人の営みを見てきた東方が四神の一柱が千影の場に降り立ったのだった。

しかし、大仰な召喚をした割に低い攻撃力に神楽坂は鼻で笑った。

「ふん、それでも攻撃力は混沌の黒魔術師と同じではないか！相打ち狙いか！？」

しかし、千影は首を横に振り、否と答えた。

「青龍の本当の力はここからだよ。手札より魔法カード、手札抹殺を発動！このカードにより全てのプレイヤーは手札のカード全てを墓地に捨て、捨てた手札の枚数分、デッキからカードをドローする！！」

互いにカードを捨てデッキからカードをドローした瞬間、千影は高らかに宣言する。

「この時、LOVサーヴァント - 青龍 - の特殊効果、五行法陣が発動！相手がカードを1枚ドローする度に攻撃力が500ポイントアップする！！」

この千影の言葉に神楽坂は表情を驚きに変える。

「なに！？俺が引いたカードは4枚・・・と、いうことは・・・」

「そう、青龍の攻撃力は2000ポイントアップする！」

LOVサーヴァント - 青龍 -                    9     ATK 4800     DEF 2500

大きく攻撃力を上げた青龍の姿に神楽坂は驚愕した。

「攻撃力、4800だと！？」

「LOVサーヴァント・青龍・で混沌の黒魔術師を攻撃！天魔降伏斬！！」

その身をまるで神鉄で鍛えた刃のようにして混沌の黒魔術師を切り裂くと共に神楽坂のライフポイントを大きく削った。

「ぐわあああつ！！」

神楽坂LP1900

「やったあ！混沌の黒魔術師を破ったんだなあ！！」

「大逆転だよ、千影君！」

「こうなったら、この決闘は貰ったもんだな！」

千影の青龍の登場に大はしやぎの隼人、翔、十代であったが、三沢は1人冷静に千影のすごさを再確認していた。

（姫宮千影・・・なんてやつだ。俺のしている限り神楽坂は1度もプレイングミスをしていない。なのに武藤遊戯のデッキと互角に渡り合うとは・・・。確かに千影のデッキは総合力で武藤遊戯のデッキに僅かに及ばないが、シンクロモンスターの対応力でそれを補っている）

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

（やっと思いつめたよ、神楽坂・・・否、武藤遊戯！たとえ影武者だろうと貴方のデッキと闘えることを誇りに思う。そして貴方が使わないデッキだからこそ、私はこの決闘で負けるわけにはいかない！！）

「この程度で俺のデッキを破れると思うなよ！ドロー！！」

「相手プレイヤーがドローした瞬間、青龍の攻撃力が500アップ！！」



LOVサーヴァント - エルダーワイバーン - 1 ATK100  
0 DEF600

本来 2のエルダーワイバーンが を1つ下げて千影の場に復活したのだった。

「そしてLOVサーヴァント - エルダーワイバーン - を生け贄にLOVサーヴァント - 木霊 - を攻撃表示で召喚する!」

LOVサーヴァント - 木霊 - 6 ATK2500 DEF1200

この疾風怒濤の展開に翔は喜び声を上げていた。

「やったー!」

「超強力なモンスターと引き換えに相手の場のモンスターを一掃することで直接攻撃を通す戦法か」

三沢も千影の戦術を超えた戦略に感嘆していた。

「これが決まれば千影の勝ちなんだな!」

「いっけえ!千影え!!!」

そして隼人と十代も千影にあらん限りの声援を送る。

千影は神楽坂に止めを刺すべく、木霊に向けて命を下した。

「征け、木霊!爆裂閃光花!!!」

木霊の放った光の爆撃が神楽坂に迫る。

「俺は、クリボーのモンスター効果を発動!」

神楽坂の宣言と共に神楽坂と木霊の間にクリボーが割って入り、木霊の攻撃を受け止めた。

その光景を見た千影は1つ悔しそうな顔を見ると呟いた。



「手札から捨てることで1度だけ戦闘ダメージを0にする効果を持つクリボーをこのために死者転生で手札に加えていたか……私はいこれでターンエンドだ！」

千影のターンエンド宣言を尻目に神楽坂は墓地に目をやると優しげにクリボーへと語りかけた。

「ありがとうクリボー。さすが、俺が数千枚の中から選んだモンスターだけ。お前にはこれまで何度も助けてもらったな」

精霊が見える千影と十代には、「そういわれても困る」といった表情をしたクリボーを見たのか、共に苦笑をもらした。

そして呆れかえっていたのは他のギャラリーも一緒だった。

「何度もって！？それは盗んだデッキじゃん！！」

「本当に武藤遊戯になりきってるんだな……」

しかし未だに遊戯になりきっている神楽坂には、そんな外野の声など耳には入ってきていなかった。

「クリボー、お前がくれたチャンス無駄にはしないで。俺のターン！」

そして、それを見た神楽坂は「はっ！」と表情を変えた。

「行くぜ。お前はこのターン、このデッキの本当の力を思い知ることになるぜ！」

その宣言の後に神楽坂は墓地からクリボーとワタポンのカードを選び出した。

「俺は墓地より、闇属性と光属性のモンスターを1体ずつゲームから取り除き」

それを見た千影は表情を驚愕に変えた。

「その召喚条件は！！」

（瀬人さんが持つ混沌帝龍・終焉の使者・と全く同じ！そして武藤遊戯のデッキに入っているということは、混沌帝龍・終焉の使者・に対を成す、開闢の使者たるあのカードか！！）

千影の予想通り、神楽坂は高らかにそのモンスターの名前を宣言した。

「そう、このカードこそがこのデッキの真のエース！出でよ、カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ！！！」

クリボーとワタポンが螺旋を描き、そこから開闢の使者たる混沌の戦士が生まれ出でた。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -           8   ATK3000   DE  
F2500

その威圧感に千影は自然に体を身構えてしまう。

「受けてみるがいい、デュエルモンスターズ界最強モンスターの攻撃を！」

神楽坂の声と共にカオス・ソルジャーが攻撃の構えを取る。

「いけ、カオス・ソルジャー！開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーの攻撃が木霊を一閃の元に切り伏せる。

「くっ！永続罫、ライフモニユメントの効果発動！！受ける戦闘ダメージを半分にする！！」

千影LP100

本来ならここで負けていた千影であったが、永続罫、ライフモニユメントの効果で一命を取り留めたのだった。

しかし、神楽坂の攻撃はここで終わることはなかった。

「まだまだ！これからがこのカードの真の力だ！！カオス・ソルジャーは戦闘で相手のモンスターを破壊した時、2回目の攻撃が行える連続攻撃能力がある！！」

そして神楽坂はカオス・ソルジャーに2回目の攻撃命令を下した。

「いけ、カオス・ソルジャー！時空突刃・開闢双破斬！！」

カオス・ソルジャーが無防備の千影に迫る。

「手札から、L o Vサーヴァント・グリフォン - の特殊効果発動！」  
千影はグリフォンのカードを墓地に送り、カオス・ソルジャーの攻撃を無効化したのだった。

「これはクリボーと同じ効果・・・!!」

それを見た神楽坂は驚きの声を上げる中、千影は頷いたのだった。

「少し効果内容が違うけど、その通りさ。L o Vサーヴァント・グリフォン - は相手のモンスターの攻撃力が1500以上の時、手札から捨てることでその攻撃を無効にする。そして無効にしたモンスターの攻撃力が2500以上の時、次のターンのドローフェイズにもう1枚カードをドロー出来る！」

これで仕留められると思っていた神楽坂は舌打ちを打った。

「くっ、俺はこれでターンを終了する」

「そして、この時、L o Vサーヴァント - 木霊 - の特殊効果発動！このモンスターが墓地にいったターンのエンドフェイズ時に苗床トークン2体を自分フィールド上に特殊召喚することができる!!」  
千影の宣言と共に苗床トークンが守備表示で現れたのだった。

苗床トークン	1	ATKO	DEFO
苗床トークン	1	ATKO	DEFO

「私のターン、ドロー！さらにグリフォンの効果により、もう1枚ドロー!!」

千影は2枚のカードをドローすると、その中にサキュバスがいることに気がついた。

(ここで来るか、サキュバス)

それを見ると千影は頬を緩めサキュバスに語りかける。

《もう！出番がないかと思っ たわよ!!》

今までの空気の扱いに頬を膨らますサキュバスを千影が宥める。

(そうはいつてくれないでよ。こんないい場面で君を引いたんだから)

この千影の言葉にサキュバスは嬉しそうに頷く。

《確かに真打は遅れて登場するってね》

(それは何よりだが、相手は武藤遊戯のデッキ。しかもそれを使うものは本人と寸分違わぬ担い手と来た。君にやれるかな、サキュバス?)

そう聞く千影に当然の如くサキュバスは答えた。

《言ってくれるわね。いいわよ、マイロード。私が貴方に勝利をあげる》

(それを聞いて安心したよ。征くよサキュバス！私たちの血闘の幕開けだ！！)

そうサキュバスに問う千影の双眸は紅蓮に燃えていた。

《Yes, my lord》

そして、千影は勝利のための札を切った。

「私は手札より魔法カード、レベル・チェンジャーを発動！このカードは手札にあるモンスターを墓地に送ることで、墓地に送ったモンスターの を場にあるモンスターの に加える魔法カード！私は手札にある 2のLOVサーヴァント・ヒップグリフ - を墓地に送り、苗床トークンに 2を加える！！」

苗床トークン 3 ATK0 DEF0

千影のレベル・チェンジャーにより苗床トークン1体は 3となった。

「そしてチューナーモンスター、LOVサーヴァント・サキュバス - を召喚！」

千影のデッキのアイドルにして千影の相棒であるサキュバスが満を持して召喚された。

LOVサーヴァント - サキュバス - 3 ATK1500 DE  
F100

「千影の場のモンスターの が合計7になったということは・・・  
はっ！」

「来るぜ！千影のデッキのエースモンスターが！」

千影の場に揃ったモンスターを見た三沢と十代は千影の狙いを見抜き、それぞれ驚愕と期待の声を上げたのだった。

「 3、苗床トークンと 1の苗床トークンに 3、L o Vサーヴァント - サキュバス - をチューニング！」

夜空に7つの星が妖しく踊る。

「妖しき星が、集いてここ破滅を誘う。破壊よ、顕現せよ！シンク  
口召喚！汝、絶対破壊者L o Vサーヴァント - バハムート - ！！！」

L o Vサーヴァント - バハムート - 7 A T K 2 5 0 0 D E

F 1 4 0 0

集いし星が砕け散った後に現れたのは破壊の権化にして破壊の体現者、バハムートがその威容をここに現したのだった。

「さらにサキュバスの効果により、このターン攻撃力が1000アップする！」

千影の宣言と共にバハムートがその身を神秘的で且つ、より凶暴な  
白金へと変えていく。

L o Vサーヴァント - バハムート - 7 A T K 3 5 0 0 D E

F 1 4 0 0

サキュバスの効果によりバハムートの攻撃力は神楽坂のカオス・ソ  
ルジャーの攻撃力を超えたのだった。

「征け、バハムート！メガフレア・エクステンション！！」  
千影の号令の元、バハムートはその両の腕に無限熱量のエネルギーを圧縮すると、それをカオス・ソルジャーに向けて解き放った。  
「なあっ！？カオス・ソルジャーが！！」  
灰も塵も残さず焼き尽くされたカオス・ソルジャーに神楽坂は驚きを隠せなかった。

神楽坂LP1400

「だが、俺にはまだライフポイントが残っている！」  
しかし、そのライフポイントはすでにないも同然だった。  
なぜなら

「バハムートの特殊効果、発動！」

「なに！？」

驚く神楽坂を尻目に千影は手札のカード2枚を墓地に送って高らかに宣言する。

「手札2枚をコストにもう1度、攻撃を追加する！」

「やつも連続攻撃能力を持っているのか！？」

それを聞いた神楽坂は表情を驚愕に染めたのだった。

「これで、止めだ！バハムートの追加攻撃！！メガフレア・エクステンション！！」

カオス・ソルジャーを焼いた無限熱量が神楽坂を襲い、全てのライフポイントを奪いつくす。

「うわああああああっ！！！」

神楽坂LP0

後に残ったのは瞳の輝きを元に戻し、威風堂々と立つ千影と崩れ落

ちた神楽坂だった。

「この俺が・・・負けた!!!」

崩れ落ちた神楽坂の元に武藤遊戯のカードたちがハラハラと落ちてくる。

それは正に今の神楽坂を体現しているようだった。

「俺はこんな強いデッキを使っても・・・勝てないのか・・・  
・・・!俺にはやはり才能がまるでないんだ!!!」

そう、自虐に耽る神楽坂に1人の男から声がかげられた。

「いいや、そうでもないさ」

崖の死角から現れたのは

「お兄さん!?!」

「明日香!?!」

亮と明日香だった。

「2人とも、どうしてここに!?!」

その十代の問いかけに亮は少し恥ずかしそうにここにいる理由を話してくれた。

「俺たちも一足早くデッキを見たくてね」

その亮の言葉に明日香が続きを述べる。

「会場に行ってみたらケースが壊れてて、デッキが消えていた。それであたりを探してみたら貴方たちを見つけたわけ」

「止めようと思ったが、止めるには余りにも惜しい決闘だったからな」

そう言いつつ、亮は満足げに微笑んだのだった。

始めからこの決闘を見ていた三沢も亮の言葉に相槌を打つ。

「そりゃ、そうだ」

そんな2人の言葉に十代は苦笑しつつ千影の首に手を回しながら、千影に聞いた。

「おいおい、必死に闘った千影の身にもなれよ。なっ、千影?」

「そういうけど十代こそ、本当は自分が決闘したかったんじゃない?」

そんな十代に千影は片目をつぶりながら質問を返すことで十代は頭を掻いたのだった。

「あらら、バレバレか」

そんな2人のじゃれ合いに亮は崖の上へと視線をやりながら口を開いた。

「それに、どうやら見ていたのは俺たちだけじゃないようだ」

その視線の先には

たくさん生徒がそこにはいた。

それも所属を問わずオシリスレッド、ライエロー。オベリスクリューの生徒でさえもその中にいたのだ。

千影たちの視線に気がついた生徒たちはスタンディングオベーションの万雷の拍手で千影たちに答えた。

「いやあ、すごい決闘だったぜ」

「いいもん見させてもらった。勉強になったよ」

昨日、神楽坂を侮蔑の表情で見ていたライエローの生徒たちも千影と共に神楽坂を賞賛していた。

「皆……。けど俺は負けた、どうして……………」

その皆の反応に神楽坂は顔を上げるが、どうして最強のデッキを使っても勝てないのかの疑問が尽きなかった。

そんな、神楽坂の元に千影が歩み寄り、手を差し伸べた。

「それはね、そのデッキへの君の愛が借り物だったからだよ」

「借り物の愛……………」

千影の言葉を反芻しながら神楽坂は千影を見上げた。

千影は頷きながら言葉を続ける。

「君は確かにこれ以上とないほど武藤遊戯になりきって、そのデッキを愛していたさ。でもそれは君がデッキを愛していたんじゃない。武藤遊戯がデッキを愛してたんだ。君はそれを借りただけなんだよ」千影の手を取って立ち上がる神楽坂に千影は続ける。

「本当のデッキへの愛は自分自身が時間と労力をかけて悩みに悩んで考えた、タクティクスやコンボをデッキへ託した時に始めて生ま



れいずるものなんだ。この決闘の相手が本物の武藤遊戯であったなら、この勝敗はわからなかったよ」

この言葉に神楽坂は戸惑いながら首を振る。

「じゃあ、俺はどうすれば!？」

そんな神楽坂の手に両手を添えて諭すように千影は語った。

「でも、君のその才能は誇っていいものだ。一目見ただけでそのデッキの特性を理解する、その才能に君のオリジナリティが加われば、君は確実に強くなる」

この言葉に神楽坂は千影を見て問う。

「俺は強く慣れるのか？」

「君と決闘した、この姫宮千影が保証しよう」

その問いに千影は笑顔を持って答えたのだった。

こうして、今回の騒動は幕を閉じた。

デッキは元に戻り、デッキを盗んだ神楽坂は皆が申し合わせたことで、その罪は問われることはなかった。もちろんクロノスの監督責任でもある。

そして、今日も展示室にはたくさんの人で賑わう。

全ての決闘者の財産として輝く、武藤遊戯のデッキを中心として。

### 第13話【DA学園篇】（後書き）

VS遊戯デッキの前後編をお送りしました。

前回到続いて、闇夜のキングゴブリンとドロー！ドロー！ドロー！は飛ばさせていただきました。

いつか行き着くところまで行き着いたら外伝的な話でこういうドタバタ劇を書いてみたいと思います。

今回からLOV由来のサポートカードがどつと出てきましたがどうでしたでしょうか？

個人的には「**【使い魔へとパワーアップさせるカードの名前が思いつかず、【バスター】モードとしてしまったのはどうかとも思っています**が他にいい案がなかったのでこれで落ち着きました。

今回の最強カード『神々への離反』

通常罫

自分の場にいる攻撃力3000以上のモンスター1体を生け贄にすることで、場にある全てのカードを破壊する。

今回はモンスターではなく、まさかの罫カードです。

遊戯王では短い説明文ほど効果は強力という不文律があります。これもそれを体現するカードでしょう。

発動すれば問答無用に敵味方問わずキレイサッパリとリセットしてくれます。

名称はLOVのver1.1のサブタイトルからです。

効果は強力ながら、通常罫であることで即使用できないことと、攻撃力が3000以上のモンスターを生け贄にしなければならぬという縛りがあります。

しかし、これでもハードルは低いかとも思いましたが、OCGでは

ブラックローズの存在もあるのでコレもありだろつとつことになりました。

## 第14話【DA学園篇】

とある日の夕餉時のオシリスレッド寮食堂。

皆思い思いに夕食の時間を満喫する中、大徳寺が皆に聞こえるように声をかけた。

「にゃー、皆さんに紹介したい人がいますのにゃ」

皆の視線が集まったのを確認すると大徳寺は頷き、後ろに控えた生徒を紹介する。

「編入テストを受けて、この度オシリスレッドに入ってきた早乙女レイ君だにゃ」

早乙女レイと紹介された人物は小柄な体に大きな帽子を被った可愛らしい人物だった。

レイは1つ頭を下げて礼をすると、後は視線を下に落としてしまった。

「女の子みたいに綺麗な子なんだな。千影みたいな子が他にもいるもんなんだな」

そのレイを見て隼人は感心したように呟きつつ、向かいに座る千影を見た。

「??確かに可愛らしい子だね」

隼人の後ろ半分の言葉に首をひねりつつも千影は隼人の言葉に合意したのだった。

翔はそんなことよりも、レイの元気のなさが気になっていた。

「編入先がオシリスレッドなんで落ち込んでるのかな?その気持ちわかるなあ」

といつつ、頷く翔に十代は「よし!」と思い切り立ち上がった。この十代の行動に皆の視線が集まる中、立ち上がった十代は、やおらレイに向かってエールを送り始めた。

「フレイ!フレイ!レイイ!!」

このいきなりのエールに驚いたのは当然、レイだった。

「えっ!?!」

面食らうレイに十代は駆け寄ると肩を叩きつつ、励ましの言葉をかけはじめた。

「なーに、成績悪くても気にするな。俺たちと一緒に楽しくやろうぜ」

十代の言葉に大徳寺は十代が大きな勘違いをしていることに気づく。「何を勘違いしてるんだにや」

しかし、未だに勘違いしたままの十代はレイの肩を抱いたまま、話を続けるが

「心痛めてる編入生に慰めの言葉をかけてるんじゃない……スルリとレイは十代から逃げ出し、大徳寺の後ろに隠れてしまう。

大徳寺は十代の誤解を解くためにデュエルアカデミアの決まりを話し始めた。

「早乙女君は成績が悪くてオシリスレッドに入ってきたんじゃないのに」

その大徳寺の言葉に十代は「えっ?」となる。

「途中編入生はまず、この寮にはいるんだにや。早乙女君の成績なら近いうちにライイエローに移るのにや」

この驚愕の事実には十代は頭をかき、誤魔化しにかかった。

「えっ……いやあ、あつははは。とにかくオシリスレッドの仲間が増えることは大歓迎だぜ。なあ千影、翔、隼人」

十代の言葉に3人は頷くと立ち上がり、レイに向かって「「もちろん」「」と答えた。

しかし、その言葉を待っていましたとばかりに大徳寺が満面の笑みを浮かべていた。

「よかったにやー。部屋が足りなくてどうしようかと思っていたにやー。しばらくは十代君たちの部屋を使わせてもらいなさい」

この大徳寺の言葉に千影たち4人が驚く中、レイは頬を赤らめつつ「はい」と答えたのだった。

その目に千影の姿を映しながら……

.....

千影たちが部屋に戻ると、そこには千影用の布団に枕がもう一つ用意されていた。

それはすなわち

「ごめんね、私との同衾になっちゃって」

レイに謝る千影だったが、どうも1つの布団に並べられた2つの枕を見てからレイの調子がおかしかった。

「いや、別に.....」

妙にモジモジしつつ、視線を下に落としたままなのだ。

そんなレイの行動を気にした風もなく十代は制服の上着を脱ぎつつ口を開いた。

「まあ、こういうのもいいじゃん。どんなに狭くたって、食べるものと寝るところがあればそれでいいのさ」

そして脱いだ制服を投げ出しつつ、タオルと石鹸の用意をする。

「さあ、皆で風呂行こうぜ！男同士、裸で背中を流し合えばもう仲間だぜ」

この言葉に千影が頷き同意するが、少々之苦言を十代に向ける。

「裸の付き合いはいいとしても、脱いだ制服はきちんとしないと駄目だよ十代」

そういつつつ、世話焼き女房みたいに十代が脱ぎ散らかした制服を集める。

そんな2人のやり取りを少し羨ましそうに見ていたレイだったが、

十代の風呂の言葉を思い出すと、急に咳を出し始めた。

「い、いやぁ.....ゴホッ、ゴホッ。ボク今日は風邪気味で」

「大変、ちよつとこつち来て」

レイのこの言葉に千影はレイの手を引っ張ると自分の方に引き寄せ  
る。

「えっ?.....っ!」

いきなりのことに驚くレイだったが、千影が自分の額に額を引っ付

けてきたことでレイの顔は真っ赤になった。

「1つ・2つ・・・うん、ちよつと熱があるね。大丈夫？」  
千影は熱を測り終わると額を離し、小首をかしげてレイに問いかけた。

「あ・・・あの、あ・・・あ、あわわわわっ」

千影の行動と仕草にレイは口を空いたり閉じたりを繰り返すだけだった。

そんなレイに千影はあごに指を添えると、部屋の出入り口に体を向けた。

「お風呂は控えなきゃならないけど、体は拭かないとね。ちよつと待ってて、お湯を貰ってくるよ」

「じ、自分でやるから結構ですううう！皆さんはお風呂に入ってきてくださいiiiiiiiiiiii！」

その千影の言葉にレイは顔を真っ赤にしたまま早口で捲くし立てたのだった。

なんとか、千影からのお世話を断ることに成功したレイはドツと千影の布団に倒れ伏していた。

「はぁ、びっくりしたなあ。いきなり千影様がおでこにおでこをくつつけて来るんだもん・・・それに体を拭いてもらっただなんて・・・」

その場面を思い浮かべたのかレイは再び顔を赤く染めて、頭を振った。

「それにこの布団、千影様が毎日使ってるんだ・・・この中で千影様と一緒に寝るだなんて・・・」

レイは再び頬を染めると悶々としたのだった。

所変わって、オシリスレッド用の浴場では千影、十代、翔、隼人は背中を流し合いをしていた。

「ねえ、レイってちよつと変じゃないっすか？」

翔のこの言葉を皮切りに隼人も頷きつつ自分の思ったことを口に出した。

「なんか女の子みたいなんだなあ」

隼人の言葉に十代は唸るが、自分の背中を流してくれている千影を見ると些細な問題に思えてきた。

「まあ人間いろいろだつて。千影みたいなのもいるんだし」

「？私がどうしたの??」

十代の言葉に首をひねる千影だったが、十代から訳を聞きだす前に十代が先手を取る。

「よし、交代！」

こうして上手いこと千影の疑問を煙に巻いたのだった。

そして就寝の時間、レイは隣で安からな寝息を漏らす千影の姿にドキドキしっぱなしで寝むるに寝むれなかったのだった。

寝不足のレイが欠伸をかみ殺す中、全生徒を前にして鮫島校長が間近に迫ったノース校との友好決闘に関する話を行っていた。

「毎年恒例、北にある姉妹校デュエルアカデミアノース校との友好決闘が近づいております。昨年は2年生だった丸藤亮君がノース校の代表を倒し、本校の面目躍如となりました。今年の本校代表はまだ決まっていませんが誰が選ばれてもいいように、皆さん努力を怠らないように」

この鮫島校長の言葉にがぜんやる気を出したのが十代だった。

「よし！代表目指していつちよがんばるか！！」

「はりきってるね、十代」

そんな握りこぶしを作る十代に千影は微笑を浮かべた。

しかし、昨年代表者の弟である翔は腕を組むと2人に反論を返した。「いくらアニキや千影君でも、やっぱ今年もカイザー亮で代表は決まりっすー！」

「やっぱ、そうかぁ……ん？」



確かな鉄板論に十代は肩を落としたのだったが、レイが少しふらついているのを見逃さなかった。

本日の授業も全て消化し、レイと千影を除いた十代、翔、隼人は寮への家路についていた。

「腹減ったなあ。寮の食事はまだだし」

腹を押さえながらいう十代に翔は購買部のほうを指差す。

「戻ってトメさんのところで何か買ってきてく？」

この言葉に隼人が翔を茶化す。

「翔が卵パン、ドローするのかわ？」

「まさかあ」

などと、いつもの他愛のない会話を繰り返す3人だったが、いつも皆の纏め役であり、フォロワー役でもある千影がいないことに一抹の寂しさを覚えていた。

「しっかし、千影のやつも運が悪いよな。大徳寺先生の書いてる論文の手伝いだなんて」

千影は帰り際、大徳寺につかまり論文製作の手伝いをさせられていた。

「千影君、決闘のこと以外でもすつごく頭が良いっすからね」

「千影のできないところを探すほうが少ないんだな」

翔と隼人は何でもできるスーパーマンのような千影を思い返すと頷いていた。

しかし、その時大徳寺から聞いた千影の経歴を思い出した十代は、その話題を2人に振った。

「でも千影がもう飛び級で大学出てるなんて、大徳寺先生から聞いたときは驚いたぜ」

この十代の言葉に翔が大きく頷く。

「僕も僕も。確かアメリカの大学だったけ？」

「アーカムシティにあるミスカトニック大学なんだな」

翔の疑問に隼人が大徳寺から聞いた大学名をきちんと答えた。

隼人の出した大学名に十代は頷きながら、ここで千影のことを思い返した。

「そうそう、それぞれ。でも俺たちって千影のこと知ってるようで、けっこう知らないよな」

十代の言葉に翔が頷きながら腕を組む。

「確かに、千影君は自分のことについてはあんまり喋ってくれないっすよね」

「ああ、家の事とか千影に聞くといつもはぐらかされるんだな。なんか、話せない理由でも千影にはあるのかな？」

隼人も若干表情を曇らせながら翔の言葉に続くが、十代は2人に諭すように語りだした。

「まあ、千影が俺たちの仲間だっていうことには変わらないぜ。理由があるにせよ、話してくれるまで信じて待つさ」

この十代の言葉に翔と隼人は「うん」「と頷く。

その答えに満足した十代は話題を変えるべく、口を開いた。

「しっかし、腹減ったなあ」

「最初に戻ってますよ、アニキ」

そしてまた他愛のない会話が始まる。

そんな中、道の先に視線をやった十代は寝不足でフラフラと歩く、レイを見かけた。

その足取りは酷く、見るほうにヒヤヒヤするものだった。

レイに気がついたのは十代だけで、レイはすぐに3人の視界からいなくなった。

「俺の分のパン頼んだぞ！」

それを見た十代は、レイを追いかけなるべく駆け出したのだった。

(眠いな・・・昨日は千影様の寝顔がすぐ横にあって緊張して眠れなかったし、編入初日の授業で寝るわけには行かないからずっと我慢してたけど・・・)

フラフラと夢遊病者のように歩くレイはいつ倒れてもおかしくなか

った。

そして限界はおのずと訪れる。

(駄目……もう……限界……)

「危ない！」

前のめりに倒れこもつとするレイに間一髪、十代が駆けつけた。

「ふうー、ギリギリセーフだったな……おっ」

レイを受け止めた十代だったが、受け止めた時の衝撃でレイの帽子と髪留めが取れ、レイの長い黒髪があらわになったのだった。

それだけではない、抱きとめたことでわかったが男にはない女の子独特の柔らかさがレイにはあつたのだ

「これって……。レイ、お前は……！」

そう、レイは女の子だったのだ。

それから数刻が過ぎたところでレイが眠りから覚めようとしていた。

(……っん……あれ……？そうかボク……我慢できなくて倒れちゃったんだ……でも地面にしては頭のところが柔らかいな……)

そう思いつつ、目を開いた先には

「お、目が覚めたか」

十代の顔があつたのだった。

これにはレイもびっくりである。

それはもう、頭のところが柔らかいはずだ。十代がかいた胡坐の上に自分の頭があつたのだから。

そう、いわゆる膝枕である。

「あ！これは、一体……！ああっ！！」

その状況に慌てふためくレイだったが、自分が髪留めと帽子をしていないことに気がつく。

そこからのレイの動きは早かった。

自分の脇に置かれていた帽子と髪留めを手に取ると脱兎の如く、駆け出していったのだった。

「おい！待てよ！！」

十代が待ったをかけるが、その背はすでに見えなくなっていた。  
「たくつ、なんだってんだよ」

そう声を漏らすと十代は立ち上がりズボンについた砂を払うと、とりあえず寮へと戻るべく歩き出したのだった。

そんな十代に後姿を茂みに隠れていたレイは測るような目で見つめていた。

「なぜなんだ……アイツ……」

大徳寺から千影が開放されたのは日が沈んでからだだった。

「全く、大徳寺先生も人使いが荒いな。それに十代たちに私のこと勝手に教えちゃうし。でもこれはいいのかな？お爺様とお父様から禁じられてるのは、私の家のことを私から話すことだけだし……でも、それにしても相手が私の情報を集めたり、気がつく分には構わないって言うてたからなあ……。未だにあの人たちの考えてることはわからないなあ、我が祖父と父ながら」

そついいつつ、ため息をつくると千影は寮の自分の部屋の扉を開いた。  
「ただいまー」

千影の帰宅の言葉に、ついさつき風呂から帰ってきた翔とベッドから顔を出した隼人が迎えてくれた。

「おかえり、千影君」

「遅くまでご苦労様だったんだな」

千影は聞こえてくる声が足りないと思い部屋を見渡してみると、十代とレイがいないのに気がついた。

「あれ、十代とレイは？」

「それは僕も聞こうと思ってたんだ」

千影と翔の2人はそのあたりの事情を聞くべく隼人に視線をやる。

「十代はレイと一緒に出て行ったんだな」

この言葉に千影は小首をかしげた。

「こんな夜遅くに？」

「え、まさかアニキ風呂に入らない理由を無理矢理確かめようだな  
んて……」

そこに翔は見当違いの推理をしてみせる。

「違うんだな。レイの方から誘い出したんだな」

が、隼人によって否定されてしまった。

「なんだろう？」

「さあ？」

翔と千影は2人して頭を捻ったのだった。

かつて制裁タッグ決闘の前に十代と翔が闘った海岸際に十代とレイ  
はいた。

「お前、なんでボクのことを黙ってたんだ？それに倒れたボクに・  
ひ、膝枕なんかして」

「昼間のことか？だめだぜ、ちゃんと寝ないと……っていつて  
も千影も男だし、女の子が男と同じ布団で眠るなんて無理な相談だ  
からな」

十代は視線をレイから海へと変えると話の続きを始めた。

「それに女の子が男の格好をしてこんあところまで来るなんて何か  
訳がありそうだから」

そこまで聞いたレイは十代の言葉をさえぎった。

「言うな！昼間見たことは絶対人に言うんじゃない！！」

「人に物を頼むときはまずは事情を説明するもんだ」

レイの言葉にそう答えつつ十代は身をかがめると、持ってきたバツ  
クパックを開き始めた。

「できない！！」

そう言い放つレイに十代は笑顔で決闘盤を差し出した。

「じゃあ、決闘しようぜ」

この十代の提案にレイは面食らう。

「なんだ？それはどういう理屈だ！？」

十代は立ち上がりながら、その理由を語った。

「決闘は誰も嘘はつけない」  
「ボクが勝つたら事情を聞かずに黙ってるっていつのか」  
レイのその問いに十代は頷いた。  
「ああ、その必要もなくなるからな」  
この言葉を聞いたレイは十代から決闘盤を受け取ったのだった。

このやりとりを盗み見ていた翔、隼人、千影はレイの正体に驚いていた。

「レイって女の子だったのお!？」

「俺も驚いてるんだな」

「私も、流石のこれにはびっくり」

しかしながら事の解決方法を決闘に託す十代に翔は肩を落とした。

「いつものことだけどいきなり決闘って……」

「十代らしいやり方じゃない」

そういう翔に千影は微笑みつつ、言葉を続ける。

「決闘には人となりが顕れるんだよ。その心の人間のありようまでね。制裁タッグ決闘の前に十代が翔と決闘した時と、私がカイザー亮と決闘した時があったでしょう」

千影の言葉に翔は頷くのを見てから、千影は言葉を続ける。

「あれは翔やカイザー亮の人となりを知ろうって言う目的でやってたんだよ。私も十代も」

そんな理由があったのを今の今まで知らなかった翔は驚きの声を上げる。

「ええ!？あの決闘ってそういう意味があったの!！」

「まあ、翔に奮起してもらおうっていう目的もあったけど、概ねの目的はそっちだったね」

この千影の言葉に隼人はしきりに感心していた。

「本当に決闘って奥が深いものなんだな」

「そう言う訳で、理由を聞く必要がなくなるわけだよ」

隼人の言葉に頷きつつ千影はそう言って締めたのだった。

そして崖下では十代とレイの決闘が始まっていた。

「決闘ッ!!!」

レイLP4000

十代LP4000

先行はレイが取った。

「ボクのターン、ドロー！」

引いたカードを見たレイは笑みを浮かべると、そのカードを早速場へと出した。

「恋する乙女、召喚！」

恋する乙女 2 ATK400 DEF300

レイの場に可憐な乙女が攻撃表示で現れたのだった。

そしてレイはそのままターンエンドを宣言する。

「ターン終了！」

「俺にターン、ドロー！」

引いたカードを手札に加えた十代は手札の中から1体のモンスターを選び取る。

「E・HEROフェザーマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROフェザーマン 3 ATK1000 DEF1000

「戦闘だ！」

そしてすぐさま攻撃へと移った。

「フェザー・ブレイク!!!」

フェザーマンの放った突風が恋する乙女に襲い掛かる。

「くっ！」

しかし、恋する乙女は破壊されていなかった。

「恋する乙女のモンスター効果発動！攻撃表示である限り戦闘によつては破壊されない！！」

この破壊耐性効果に十代は身構えるが、いきなり場の雰囲気が変わつた。

「なんだ、これは？」

いきなり変わった雰囲気、十代は戸惑う中、ハネクリボーがデッキから出てきた。

（ハネクリボー？）

《クリクリ》

いきなりの相棒の登場に十代は驚くがハネクリボーの示す先にはもつと驚く光景が広がっていた。

それは

《お、お嬢さん！大丈夫ですか？》

崩れ落ちた恋する乙女に駆けより助け起こすフェザーマンの姿だった。

しかし自分で攻撃しといてそれはないだろう、フェザーマン。

「なんだー?!?!?」

《クリクリー!!》

この光景に十代とハネクリボーは揃って仰天してしまった。

「しつかりしろよフェザーマン！女の子に恋するなんてヒーローらしくないぜー!!」

しかし十代の見ている光景は他に千影以外には見えず端から見れば十代が1人で何かしらの芸をやっているようにしか見えない。

「アニキの様子が何か変だ」

そのことは翔のこの言葉を聞いても明らかである。



「確かに、これはちよつとね……」  
十代と同様に精霊が見える千影もその光景に苦笑を浮かべていた。  
(きつと十代や千影には俺たちには見えないものが見えているんだな)

そんな十代と千影を見ながら隼人は、そう確信を抱いたのだった。

「フェザーマン、一体どうしちゃったんだ……?」

この十代の疑問にレイが一指し指を立てながら話し始めた。

「もう1つのモンスター効果、恋する乙女を攻撃したモンスターに乙女カウンターを1つのせる!」

レイの言葉と共に恋する乙女の両手から出てきたハートがフェザーマンの心臓へと突き刺さった。

「お、乙女カウンター?」

初めて聞く効果に十代は訝しげにフェザーマンを見ると、フェザーマンの胸にはハートがときめいていたのだった。

「ええーい!何かは知らないけど、ターンエンドだ!」

その十代の言動にレイは不敵に笑った。

「ボクのターン、ドロー!」

デッキから引いたカードを見たレイは手札を見渡し、1枚のカードを選んだ。

「手札から装備魔法、キューピッド・キスを発動する!」

恋のキューピッドが恋する乙女を祝福するようにキスをした。

「戦闘よ!一途な思い!」

そのレイの言葉と共にまたもや、決闘の雰囲気は不思議空間へと変貌する。

恋する乙女はフェザーマンへと駆け出す。

《フェザーマンさ〜ん!私の一途な思いを受け止めて〜!》

その言葉と共にフェザーマンの胸へと飛び込もうとするが、フェザーマンは咄嗟のことで避けてしまう。

《あぁんっ!》

当然、恋する乙女は転ぶのだが

《ひ、ひどい！ひどいわあ〜！！》

なんと泣き出してしまったのである。

そんな恋する乙女にフェザーマンは身をかがめて恋する乙女を助け起こす。

《す、すまない！そんなつもりじゃ》

そして顔を近づけたフェザーマンに

《ちゅっ》

投げキッスを贈ったのだった。

これを受けたフェザーマンはもう、メロメロだった。

《私の言うこと聞いてくれるわよね》

《もちろん！》

もういろんな意味で駄目だった。

そんな自分にメロメロになったフェザーマンに恋する乙女は十代を指差してお願いする。

《じゃあ、十代を攻撃して》

《もちろん、君の為ならできる！！》

フェザーマンは十代に向けて突風を起こし攻撃したのだった。

「ぐわあああああ！！」

《クリー！！》

フェザーマンの攻撃は十代はおろか精霊化しているハネクリボーにも襲い掛かったようだ。

まさかのフェザーマンの裏切りに十代は声を荒らげる。

「フェザーマン！女の子にメロメロになるなんて、それでもヒーロ

「か!」

だが、虚しい事に十代の声はフェザーマンには届かないのであった。自分の場に降ったフェザーマンを見せながら、レイはこの現象の説明を始めた。

「乙女カウンターののっているモンスターを攻撃し、逆にダメージを負ったら装備魔法、キューピッド・キスが発動。そのモンスターをコントロールできる!」

すなわち『恋する乙女は十代のHEROを盗んでいきました』ということだ。

「カードを1枚伏せて、ボクのターンは終わりだ」

今まで体験したことのない決闘に十代はペースを乱されていた。

「なんか調子狂うぜ。とにかくドローだ」

十代は恋する乙女の対策を1つ見抜いていた。

(恋する乙女に攻撃しなければ、モンスターを奪われることはない)そこに気がついたなら、恋する乙女以外のモンスターに攻撃あるのみである。

「よおおおし! E・HEROスパークマンを召喚!」

E・HEROスパークマン      4      ATK1600      DEF1400

「悪いがフェザーマン、お前を攻撃させてもらうぜ! スパークマン、フェザーマンにスパーク・フラッシュだ!」

スパークマンの放った電撃がフェザーマンへと迫る。

すわ、血の粛清かと思った瞬間!

「畏カード、ディフェンス・メイデン発動!」

レイの発動した畏カードにより恋する乙女がフェザーマンの前へと立ったのである。

《きゃあああああ!》

当然、スパークマンの攻撃は恋する乙女が受けたのだった。

「ディフェンス・メイデンの効果によりスパークマンの攻撃は恋す

る乙女に移った！」

レイLP1600

そして発動する、超時空空間！

スパークマンの攻撃により崩れ落ちた恋する乙女に寄り添うフェザーマンがスパークマンを非難する。

《スパークマン！お前、ヒーローの癖にか弱い女性を攻撃するなんて！！なあんてやつだああ！！！！》

このフェザーマンの非難の言葉にスパークマンは頭を抱える。

《あ、ああ・・・俺はなんて事をしてしまったんだああああ！お嬢さん、大丈夫ですか？》

そして恋する乙女を助け起こそうとするスパークマンに恋する乙女は見えないようにニヤリと笑う。

その笑みは、某死のノートを持つ青年のそれにそっくりだった。笑みを隠し、顔を上げた恋する乙女は瞳に涙をためるとスパークマンに語り始めた。

《自分を責めないで。闘うこと、それは宿命なのだから！ねっ》  
恋する乙女のウインクにスパークマンは心を射抜かれた。

フェザーマンと同様、胸に胸キュンポイント・・・・・・・・・・・・・・・・  
・失礼、乙女カウンターがときめく。

《惚れたああああ！！！！》  
もう、十代ドン引きである。

「なんなんだよ、お前たち！！！」

端から見れば1人コントのような十代に翔は心配げな声を上げた。

「まただ、アニキしっかりしてくれよお」

翔とは違い隼人は純粹に決闘の内容を見定めていた。

「苦しいところなんだなあ」

「でも、何か緊張感にかける決闘だね」

千影も十代と同じものが見えるため、そう眩くのだった。

「ボクのターン、ドロー！」

引いたカードを見たレイは待っていましたといった表情で、そのカードを決闘盤に差し込む。

「装備魔法、ハッピー・マリッジを発動！」

レイのハッピー・マリッジの発動と共に鐘の音がなり、恋す乙女のドレスが花嫁衣裳へと変わる。

「この効果により、恋する乙女の攻撃力はフェザーマンの攻撃力だけアップする！」

恋する乙女     2     ATK1400     DEF300

ザ・ワールド！時は止まる！！

《スパークマン様〜！》

花嫁衣裳を身に纏った恋する乙女がスパークマンへと駆けて来る。

そして、咄嗟のことに思わず避けるスパークマン以下同文。

レイLP1400

この光景に十代はハネクリボーとともに呆れ返るしかなかった。

《スパークマン様、ひどおiiiiい！》

泣き崩れる恋する乙女を助け起こすスパークマン。

《そ、そんなつもりは………》

ここで恋する乙女のお願ひ攻撃が炸裂する。

《では、私のために闘ってくださいますか》

《もちろん！》

そして簡単に寝返るスパークマン。

「あつがあああ………」

この蝶展開に十代の開いた口がふさがらないようだった。

《お願いスパークマン様》

恋する乙女をお願いにより、スパークマンは十代へと攻撃を浴びせる。

「ぐわあああああ！」

恋する乙女は十代を指差し、フェザーマンにお願いする。

《フェザーマンさんも》

そのお願いを受け入れ、フェザーマンを十代を攻撃する。

駄目だこいつら……早くなんとかしないと……

この光景を見た恋する乙女は顔を伏せると、ニヤリと笑いこぼした。

《計画どおり！！》

そして、時は動き出す！！

この会心の一撃にレイは帽子を髪留めを外し、長い黒髪を夜風に靡かせると十代に向けて言い放つ。

「女の子は恋をすれば強くなる！不可能なんてないの！！」

十代LP400

十代の苦戦に3人が言葉重くなる中、歩み寄る2つの影から声が発せられた。

「流石の十代もレイの前にはタジタジだな」

「決闘のモンスターを夢中にさせるくらい簡単でしょ」

千影たちはそちらのほうを向くと、驚きの声を上げた。

「お兄さん！」

「明日香さんも！」

「2人でどうしてここへ……」

千影の問いには明日香が答えた。

「昼間、妙にフラフラしてる生徒を見かけたものだから気にはしていたので、昼間に倒れたところを十代に助けられる場面に遭遇してね。びっくりしたわ、だってオシリスレッドに編入したのが男装

の女の子だったんだもの」

明日香の言葉に亮が続く。

「明日香から事情を聞いた俺が、鮫島校長に詳細を聞き、その情報を伝えるために落ち合った時、偶然にこの決闘を目撃した次第だ」そして、明日香はその亮から聞いたレイの事情を語り始める。

「初恋の人を追いかけて、遙か南の島まで飛んできちゃうんだもの」これを聞いた隼人と翔は驚きの声を上げた。

「ええっ!?!」

「そうだったの!?!」

明日香は頷きつつ、言葉が続ける。

それも千影を見ながら。

「しかも、難しい編入試験を突破してね」

「??？」

千影はレイが自分の事を好きでいるということをもだに理解していなかった。

絶体絶命のピンチの中、ハネクリボーから1つの提案がだされる。

《クリクリ》

十代はハネクリボーの提案に頷く。

「ああ。女の子に男のヒーローをぶつけたのが間違いだったぜ」

そしてカードを引くためにデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー!」

十代が引いたカードは融合だった。

十代は引いた融合を手札に加えると、手札から女性のモンスターを選ぶ。

「やっぱ、女の子には女の子だろう。E・HEROバーストレディを召喚!」

そう、HEROデッキの紅一点バーストレディだ。

E・HEROバーストレディ      3      ATK1200      DEF800

「バーストレディ、お前に任せた！」

そして不思議時空が展開される。

バーストレディの登場にたじろぐフェザーマンとスパークマン。

《なげかわしいこと。そのような小娘ごときに惑わされるとは》

バックに怒りのオーラを燃やすバーストレディにフェザーマンとスパークマンを思い切りビビッていた。

《クリクリ》

「おおおー！なんかバーストレディ、いつもよりか迫力あるぜ」

そんなバーストレディにハネクリボーと十代は、そう感想を漏らすと十代は手札から1枚のカードを抜き取った。

「魔法カード、バースト・リターンを発動！このカードは自分の場にバーストレディがいるとき発動可能！！E・HEROのフェザーマンとスパークマンを手札に戻す！！」

この十代のバースト・リターンの発動によりフェザーマンとスパークマンの胸にときめいていた乙女カウンターが消えたのだった。

そして正気に戻る2人のヒーロー。

《あああつ！俺たちは何をしていたんだ！！》

《恋に現をぬかすなんて！！》

《《ヒーローにあるまじき行為だあああつ！！！！》》

そしてバーストレディの姐御からの指示が下る。

《あんたたち、さっさと帰ってきなさい！》

《《はーいっ！！》》

バーストレディのハウスの命令に従いフェザーマンとスパークマンは十代の手札へと帰っていったのだった。

この展開についていけないのが恋する乙女である。《えーっ！！？》と左右に侍らした下僕のいきなりの離反に驚きの声を上げていた。

そして完全に消える爆裂不思議時空。

手札に戻した2体のヒーローを掲げながら高らかに言った。



「ヒーローの絆はそんな恋愛ごっこより強いってことさー！」  
「くっ！」

十代の言葉にレイが悔しそうにするが、すでに勝利の鍵は十代の手にあった。

その勝利の鍵を十代は発動する。

「さらに融合を発動！フェザーマンとバーストレディを融合してフレイム・ウィングマンを召喚ー！」

E・HEROフレイム・ウィングマン      6      ATK2100      D  
EF1200

そして十代はレイに止めを刺すべく、フレイム・ウィングマンに号令を下した。

「いけええ！フレイム・シユートオオー！」

フレイム・ウィングマンの発した炎が恋する乙女とレイに襲い掛かる。

「うわあああっー！！！」

この攻撃により、レイのライフポイントは尽きたのだった。

レイLPO

十代はハネクリボーと視線を合わせると2人で笑う。

《くくり〜》

そしてハネクリボーはデッキのカードへと還っていったのだった。

それを見送った十代は蹲るレイへと笑顔でガッツポーズを取る。

「ガッチャー！レイ、おもしろい決闘だったぜー！！！」

「十代、ボク」

そういう十代にレイは顔を上げると、約束どおり事情を話そうと口を開くが、それを十代が止めた。

「おっと、皆まで言うな。そこから先はずっと見ていた後ろのやつ

に言ってくれないか」

十代はそういつつ後ろを指差す。

レイが十代の指す方向に振り向くと、そこには今までの決闘を見ていた千影たちの姿があった。

レイがこちらを向くのを確認した明日香は千影へ向かって口を開いた。

「出番よ」

「だから何が？」

しかし、未だに現状を理解できてない千影だった。

「いいから、さっさと行ってあげなさい！」

明日香はそれに痺れを切らして千影の背中を叩いて押したのだった。

「おおっっ！」

たたらを踏みつつレイの前に出る千影にレイは頬を赤く染める。

「千影様……」

そしてレイは手を組みつつ千影に向かって語りだす。

「千影様は覚えてないかもしれないけどね、ボク、1年前までアーカムシティにいたんだ」

アーカムという懐かしい言葉に千影は1つ思い当たることがあった。「君もアーカムに？」

1年前、千影がアーカムシティで暮らす最後の年に、とある人物と結社によって起こされた事件があった。

「うん。あの時、大きな怪事件があったでしょ。ボクは父様の運転する車で怪人に遭遇したんだ」

レイは思い出していた。

父の運転する車の前にいきなり現れた異形の怪人を。

「あの時はすごく怖かったんだ……もう死んじゃうんじゃないかって思った。でもそのその時、助けてくれた人がいた。それが千影様だったの！」

パンチカードで作られた奇妙な本を持った、あの時の千影の姿をレイは思い浮かべた。

『これ以上犠牲者を増やさせはしない！霸道玻璃が盟友、千影』

の名にかけて！！』

あの光景を思い出したのか、レイはうつとりとした表情をしながら話を続けた。

「あれから、すぐに怪人を追って千影様はいなくなってしまうけど、その場に落ちていたデュエルアカデミアのパンフレットを見て思ったわ。ああ、あの人は来年そこに行くんだって！」

「それで、ここまで？」

千影の問いにレイは頷きながら続ける。

「でも、いざ千影様を目にしたら頭の中がグルグルになって、何も考えられなくなって、お礼も私の気持ちも伝えられなかった！」  
「そこまで言うと、レイは十代のほうを見る。」

「でも、十代との決闘をして思ったの。言葉にしなきゃ私の想いは届かないって！だから、千影様！！」

そしてレイは万感の想いをこめて千影に告白をする。

「私は貴方のことが大好きです！貴方に助けられたあの日からずっと！！」

このレイの一世一代の告白に千影は微笑みに少しの困惑を湛えつつ口を開いた。

「君の気持ちはすごく嬉しい」

この千影の返事にレイは顔を喜色に染める。

「じゃあ！！」

「けど、私は君の気持ちには応えられない」

しかし、千影の答えは否だった。

千影のNOの返事にレイは顔を伏せると、弱弱しい声で千影に聞いた。

「理由を聞かせてもらえますか・・・？」

「婚約者がいるんだ。私には」

そのレイの問いに少し申し訳なさそうに千影は答えたのだった。

この千影の発言に十代、翔、隼人が大声を上げた。

「ええええええええつ！！！！！！」

その驚きようといったら驚いているはずの亮、明日香、レイでさえポカンとさすほどの驚きようだった。

「千影！お前、そんな話し初耳だぞ！！」

「話してないからね」

「お相手は！？」

「この前話した従妹の比巫子だけど」

「式はいつなんだな！？」

「2人が成人してからだけど」

などなどの十代、翔、隼人の質問に千影は答えつつレイに向き直った。

「だから、私からの返事はごめんなさい。でも、友達でなければなつてくれるかな？」

そっぴいっつ、千影はレイに手を差し伸べたのだった。

レイは瞳に湛えた涙をぬぐうと、千影の手を取って頷いた。

「はい、私でよければ千影様……ううん、千影さん」

「うん、これからもよろしくねレイ」

こうして1人の乙女の淡い恋物語は終わりを告げて、友としての生活が始まるまじだったのだが

「水を差すように悪いが、レイはこの島を出なければならぬ」

この亮の言葉に十代が食って掛かった。

「なんでだよ、カイザー！折角千影とレイが友達になれたのに！！」

女の子ならオベリスクブルーの女子寮に入ればいいじゃないか！！」

しかし、亮は鮫島校長から聞いたレイのもう1つの秘密を話す。

「レイは小学5年だ」

この驚愕の事実にもたしても十代、翔、隼人は「ええええええええええつ！！！！」と大声を上げて驚いた。

「なんなんだよお！俺ってば小学生に苦戦してたのかよお！！っはあ……」

そして、レイと決闘をした十代に至ってはその後、真っ白になったり、地団駄を踏んだり、ため息をついたり、orzになったりと、かなり忙しいリアクションをとったのだった。

「ごめんね。ガツチャ！楽しい決闘だったよ！！」

そんな十代にレイは舌をペロツとだして謝ると、十代式のガッツポーズを取ったのだった。

そしてレイが定期船に乗り、島を出る日。

あの時の決闘に立ち会った全員がレイを見送りに着ていた。

船に乗ったレイは見送りに来てくれた千影たちに手を振っていた。

「来年小学校を卒業したら、またテストを受けて入学するからねー！」

レイのこの言葉に皆は笑顔で手を振り答えると、船は出航する。

しかし、ここでレイは大きな置き土産をおいて行くこととなる。

それは

「まっててねー！十代様ー！！」

なんと十代へのラブコールだった。

それを聞いた十代はあごが外れんばかりに口をあぐりと開けてしばらく呆然とした後、腹のそこから叫んだ。

「な、何で俺なんだよおおお！！」

この叫びに千影は笑顔で十代のほうを向く。

「きつと十代の決闘に惚れたんだね。いやあ、これにて一件落着だね」

などと暢気にそういうとニコニコしながらその場を立ち去ったのだった。

他のメンバーも頷きながら、その場を去っていく。

「あとはまかせた」

「じゃあアニキ、先に帰るね」

「ゆっくり見送ってあげるんだな」

「船が見えなくなるまで見送ってあげなきゃねえ」

とのことで埠頭には十代一人が残されることになった。

「ええ・あれえ・うそおお・」

十代は信じられないといった顔をしながらレイに向かって手を振り続けたのだった。

## 第14話【DA学園篇】（後書き）

今回は恋する乙女は強いのでデッキの回をお送りしました。

そうです、レイの初登場の回なのです。このままGX3期で十代には明日香とレイで修羅場ってもらいましょう。

今回もオリジナルカードが未登場なので最強カードのコーナーはお休みです。

## 第15話【DA学園篇】

とうとう前期のカリキュラムも残り僅かといったデュエルアカデミアに定期船から積荷が降ろされていた。

「ああ、それはあつちに持ってって！そつちよあー！」

荷の積み下ろしの陣頭指揮を執るトメさんは海面に何かの影が映ったのを見た。

「ううん??」

ほら！足止めないの！！運んで、運んで！

早く、早くー！」

しかし、その影はすぐに消えてなくなつたようで、トメさんは魚か何かだろうと気に留めなかつたのだつた。

しかし、その影は魚などではなかつた。

埠頭から少し離れた海岸にその影が上がってくる。

「俺にかかればこんなもんさ、デュエルアカデミア」

それは潜入用の黒いダイバースーツを着た1人の男だつた。

「その秘密、この国崎康介が暴いてやるぜ！」

そんな国崎なる人物が潜入してるなど露とも知らない教員たちはオベリスクブルーの3年、丸藤亮も参加して職員室で会議を開いていた。

その議題とは

「なぜでスーノオ!?デュエルアカデミアノース校との友好決闘ー二八、昨年と同じヨーニ、シニョール亮・丸藤が代表に決まっていたはずなノーネー！」

そう、先日鮫島校長が集会で話したノース校との友好決闘に出る代表の会議であつた。

しかし、その代表に決まっていたデュエルアカデミア本校のナンバーワン決闘者である亮が代表から外されるという事態にクロノスは鮫島校長に説明を求めていたのだ。



「それが、向こうの代表は1年生だというんだな」

この鮫島校長の言葉にクロノスは驚きの声を上げる。

「1年生イイイツ!？」

鮫島校長は頷きながら言葉を続ける。

「そう言うことで、こちらも代表は1年生がいいだろうという事になってね。どうだろう、丸藤君？」

そして、会議に参加していた亮に鮫島は意見を求めたのだった。

「俺も構いません」

この亮の言葉に「うんっ!」と頷いた鮫島は次の議題、誰が新しい代表になるかの話を始めた。

「では問題は、誰を次の代表にするかということだ」

ここで亮からとある人物の名前が挙がった。

「遊城十代、そして姫宮千影」

この亮が推した名前にクロノスは顔が引きつった。

他の教員たちもオシリスレッドの生徒の名前が亮から挙がったことに戸惑いを隠せなかった。

そんな中、亮は教員を説き伏せるべく口を開く。

「彼らならおもしろい決闘を見せてくれると思います」

この亮の言葉に鮫島校長は頷く。

「うん、彼らなら実力も申し分ない。問題はどちらを代表にするかだな」

どちらを代表にするかの問題も、亮が解決策を提示する。

「それなら決闘の勝敗で決すればいいかと。彼らの見せる決闘は他の生徒たちの糧にもなります」

この亮の言葉にほとんどの教員が賛成の意を表する中、クロノスだけが心中穏やかではなかった。

（嫌なノーネ!ドロツプアウトボーイイが代表になるなノーテ!!  
誰か対抗できるよーナ・・・うにようにようによ

あっ!!!(

どうやら何か閃いたようだ。

「では私は三沢大地を推薦するノーネ！」

クロノスから出てきた新しい候補に鮫島校長は少し眉をひそめる。

「ラーイエローの？」

クロノスはここが勝負どころと机をまたぎ、鮫島校長の前まで詰め寄ると話し始めた。

「彼も実力は折り紙つきでスーノ、ここは3人でバトルロイヤル形式の決闘を行うというのはどうでシヨーン？」

このクロノスの発言に鮫島校長は亮を見る。

「どう思うね、丸藤君？」

「それでいいかと」

鮫島校長の問いに亮は頷きクロノスの提案を支持したのだった。

デュエルアカデミアの校舎に潜入した国崎はロッカールームへと来ていた。

変装用の制服を手に入れるためである。

「ようし、これだ！」

国崎はロッカーの中からオシリスレッドの制服を手にとるとそれに袖を通し、堂々とロッカールームから出て行くのだった。

国崎が制服を手に入れたと同時に、授業の最後に大徳寺から告げられた言葉に十代と千影はキョトンとなっていた。

「えっ、俺と？」

「私が？」

大徳寺は頷きながら詳しい説明をする。

「そうなのにあ。2人に三沢君を加えた3人でバトルロイヤル形式の決闘を行い、勝ち残った1人がノース校との決闘に出場できるのじゃー」

この言葉に名前を呼ばれた3人は視線を合わせると、笑いあった。

「いい決闘を期待してるじゃー」

そんな3人を見た大徳寺は満足そうに頷くと、そう締めたのだった。

授業終了と同時に翔と隼人が千影と十代に歩み寄る。

「すごいよアニキ、千影君！学園の代表なんて！！」

「今までオシリスレッドから代表が選ばれたことはないんだな！」  
そう期待の言葉を受けると二人の元に三沢が降りてくる。

三沢を視界に収めると十代が三沢に向かって口を開いた。

「案外早く闘う機会が来たな」

十代の言葉に三沢は頷く。

「ああ。俺はあれから日夜研究を続けている。お前たちのE・HE  
ROデッキとLOVサーヴァントデッキに対抗できる7番目のデ  
ッキを」

三沢のこの言葉に千影は問いかける。

「じゃあ、もうすぐ完成と見ていいのかな？その7番目のデッキは  
「現在8割がた完成といったところだ。だが、決闘までには間に合  
わせるさ」

そう答えた三沢は拳を突き出した。

「楽しみにしてるぜ」

「全力で楽しもうね」

三沢の差し出した拳に十代と千影は己の拳をぶつけ合ったのだった。  
そして去っていく三沢を見ながら翔が声をかけてきた。

「7番目のデッキ、いったいどんなだろう」

隼人もはやる気持ちを抑えながら言葉を発する。

「これはすごい決闘になる予感がするぞお」

三沢の言葉を聞いてから既に十代のボルテージは最高まで達してい  
た。

「よおおしっ！早速帰ってデッキの調整だ！！」

「そうだね、準備をキチンとしないとね」

そんな十代を見て笑顔で頷く千影であった。

そして寮に帰るため、教室から出た4人は奇妙な人物を目にする。  
それはライイエローの生徒にあしらわれている、妙に年を食ったよ

うな生徒だった。

「あ、アニキ!?!」

そんな生徒の下に向かって歩いていく十代に翔は驚きの声をあげる。  
「なあ、あんた?」

この十代の言葉に国崎は正体がばれたかと一瞬、ヒヤツとする。

「や、やあ……」

何とか誤魔化そうとするが中々いい考えが出てこない。  
もはやこれまでかと思っただが

「わかった!おっさん、万年落第生だろ!」

十代のこの言葉にどうやら杞憂に終わったようだ。

しかしながら、十代のおっさん発言には力チンときた。

「お、おっさん!?!」

しかし、十代は国崎の肩をたたくと勝手に続きを喋りだした。

「いいって、いいってわかってるよ。がんばればそのうち進級できるぞ」

そういつて無理矢理に握手を交わす。

「あきらめるなよ。さあ、寮に帰ろうぜ!」

「やあ、俺は……!!」

国崎の握った手をそのままにして十代は駆け出していったのだった。

「あ、アニキ待つてよー!!」

「もう、十代は強引だなあ」

そんな2人の後を追いかける翔と千影。

さらにその後ろを走る隼人1人が怪訝そうな顔をしていた。

(あんな人いたかなあ?)

そして連れてこられたオシリスレッド寮の食堂で国崎を迎えたのは  
オシリスレッド寮定番のメザシ定食だった。

「あぐあぐあぐ、うんめええ!」

「うん、今日の夕餉も美味しいね」

そんな粗食を美味しそう食べる十代と千影の2人に国崎は面食らっ

ていた。

いっこうに食事に手をつけない国崎に十代は言葉をかけた。

「おっさん、早く食べないとご飯のおかわりなくなるぜ」

「ほとんど、十代が平らげちゃうもんね」

十代の言葉に千影がクスクスと笑いながらおかわりがなくなる理由を口にしたのだった。

「あ、ああ……」

しかし未だに呆けたままの国崎は生返事を返すことしかできなかった。

そんな中、十代と千影は本当に美味しそうにメザシ定食を平らげていく。

「ここのご飯をそんなに美味しそうに食べるのはアニキと千影君だけだよ」

翔はそんな2人を見ながらそう評したのだった。

夕食後、千影と十代は互いに背中を合わせてデッキを広げると、学園代表決定バトルロイヤル決闘に向けての準備を始めた。

そんな2人を見ながら翔は三沢のことが気になって仕方がなかった。

「三沢君はどんなデッキで来るんだろう？」

「彼のことだ。きつと十代や千影のデッキを研究し尽くしているだろうな」

翔の言葉に隼人がそう返すが、結局のところ蓋を開けてみなければわからないというのが現状だった。

「アニキ、千影君……」

そんな現実翔が弱気の声を漏らす、十代と千影には関係なかった。

「んー、やっぱりこれがいいや」

「やっぱり、これ以上では望めないね」

結局、2人ともデッキの中身を変えることはなく、カードを束ねると同じタイミングで立ち上がった。

「よしっ！」

「うん」

そして立ち上がった千影は未だ不安そうにしている翔を見ると、笑顔で言った。

「三沢がどんなデッキで来ようとも、私はこの子たちを信じる」

「俺もだぜ」

この2人の言葉に翔は苦笑を浮かべると2人はこういう人間だということを再確認した。

「2人らしいっすね」

翔の言葉に隼人も頷くが、国崎は心の中で2人を一笑に伏していた。  
(ハッ、餓鬼だな……おっ?)

国崎は視線の先に1枚のカードが落ちていることに気がつくときそれを拾い上げた。

それは十代のスカイスクレイパーのカードだった。

このカードを見た国崎は苦い過去を思い返す。

夜の大都会で勢いのまま、名を上げるために名のある決闘者に挑み惨敗した苦い記憶が。

今でも忘れられない。自分に止めを刺した青い眼を持つ白き龍と、それを従える決闘者の姿を。

その記憶の悔しさが滲みかける寸前に十代から声がかげられた。

「おっ！おっさん、どうした？」

苦い過去を振り返っている最中に気に入らない言葉をかけられたものだから、つい国崎は一端ではあるがボロをこぼしてしまう。

「おっさん言うな！俺は国崎康介！！……あっ！！」  
そう、本名をこぼしてしまうというボロを。

しまったとは思っても後の祭りである。

しかし十代をはじめ、他の3人も国崎を現時点では追及することはなかった。

そんな中、十代は国崎が持つカードに気がつく。

「そっか、国崎さんね。スカイスクレイパーか。国崎さんも好きな

のか？」

この十代の問いに国崎はそっぽを向きつつ答えた。

「俺は決闘なんか好きじゃない」

国崎の言葉に翔から疑問の声が上がる。

「えっ？じゃあどうしてデュエルアカデミアに??」

翔の疑問はもつともだった。エリート決闘者養成機関であるこの学園に決闘が嫌いで来る人間はいない。

またも自分自身がだしたボロに慌てて誤魔化し始める国崎。

「あああつ！いやぁ・・・そのぉ・・・落第ばかりで楽しくないなぁ、とか」

この誤魔化しの言葉に頷いたのは、現に落第していた隼人だった。

「ああ、その気持ち俺にはよくわかるんだなぁ。俺は自分が駄目なんだって諦めてたから・・・でも、千影や十代の決闘を見ているうちに俺もまたやりたくなって気持ちになっただぁ！」

隼人の言葉に十代と千影は照れながら頬をかく。

翔もかつて自分が体験した躍動感を思い出し、国崎に言葉をかける。

「隼人君・・・。そうだよ！国崎さんもアニキや千影君の決闘を見たらきつとワクワクするよ！！ちよつど学園代表決定決闘があるし！！」

「あ、ああ・・・」

翔の提案に国崎は生返事を返しながら心で舌打ちを打っていた。

（チツ！俺はお遊びに付き合ってる暇はないんだよ・・・。そうだ！！こいつらなら何か知ってるかもしれないな）

そう考えると国崎はさり気ない装いで十代たちに話を振った。

「なぁ、ところで噂で聞いたんだけど学園の生徒が行方不明になってるって本当かな？」

この国崎の言葉に千影や十代たちはタイタンと出会った、廃止寮を思い返した。

「幽霊寮のことか」

十代の言葉に国崎が反応する。

「幽霊寮？」

しかし千影はあの場で起きた闇のゲームを思い返すと、国崎に遠まわしな釘を刺す。

「詳しいことは知らない。けど倫理委員会の眼があるから近づくのは止めたほうが懸命だね」

しかしここまで潜入してきた国崎である、この千影の言葉に国崎は何かあると確信をもったのだった。

廃止寮に今日も明日香は花を手向けに来ていた。

兄の冥福よりも兄の無事を信じて。

「兄さん……。ッ！誰！？」

明日香は後ろで聞こえた茂みを揺らす音に振り返った。

「やあ、お嬢さん」

そんな明日香の下に十代や千影の話聞いた国崎が現れたのだった。いきなりでてきた初対面の男に明日香は訝しげな視線を向ける。

「オシリスレッドの生徒……」

国崎はここにいる明日香が行方不明者の関係者であると当たりをつける口を開いた。

「ここで何人もの生徒が行方不明になってるんだってねえ。君には、そのいなくなつた生徒と関係が？」

「そんなこと聞いてどうするの？」

国崎は逆に明日香に聞き返されてしまった。

「いやあ、ちよつと興味があつてね」

この国崎の言葉に明日香は険しい顔をして国崎に言い放つ。

「余計なことしないで！関係ない人にかき回されては迷惑なの、さつさと自分の寮にお帰りなさい！！」

言うだけ言つと踵を返して寮へと戻る明日香を尻目に国崎は肩をすくめた。

「おお、怖ッ。ハッ、ここで諦めてたまるかよ。折角いい金になる特ダネなんだからな」



そして取り出した小型カメラで廃止寮を撮影し始めたのだった。

同じころ、寮の自室で三沢は今まで集めた十代と千影のキーカードのデータを見ながら、どうやってそれらを封じるかを考えていた。「いよいよあいつらと闘うことができる。こんなに熱くなってるのは久しぶりだ」

そういうと、まずは十代の主力モンスターの分析に入る。

「フレイム・ウィングマン。倒した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える、十代のキーカード。こいつを潰すにはバーストレディかフェザーマンを封じておけばOK」と

次に三沢はサンダー・ジャイアントのファイルを開く。

「こいつはやっかいだ。攻撃力2400以下のモンスターを召喚時に破壊してしまうからな。スパークマンとクレイマンの融合には要注意だ」

ここで一旦、考えを纏めるべく椅子に大きく身をゆだねて天井を仰ぐが、すぐに問題にぶちあたる。

「これじゃ駄目だ。個々のモンスターに対処していたのでは俺のデツキが回らなくなる。それに千影のシンクロ召喚はもつと厄介だ。アレはチューナーと他のモンスターを揃えさえすればいいから十代の融合よりも対応力が高い」

そういつつ三沢は千影のシンクロモンスターのデータを呼び出した。

「貫通効果と追加攻撃の効果を併せ持つバハムート。召喚時に相手モンスターの攻撃力を0にするベルゼバブ。自分のモンスターを生け贄にすることでその攻撃力の半分を加えることができ、相手に与えたダメージ分ライフポイントを回復できるグレンデル。召喚時に魔法・畏ゾーンのカードを一掃するガルダ。相手がドロウするたびに攻撃力が上がる青龍……。他にもやっかいな効果を持つシンクロモンスターは多いし、まだ俺の知らないシンクロモンスターを千影はもっている可能性も否定できない」

そこまで考えると、三沢は今まで見ていたファイルを全部閉じた。

「なにかもつと、決定的な方法があるはずだ。やつらのモンスターを封じて召喚させなくする方法が………ツ！」  
ここで三沢に閃きが走った。

「そうだ、厄介なモンスターなら召喚させなければいい!!」

三沢はキーボードを叩くと、とあるカードを探し始める。

「あつたはずだ！確かあのカードなら　　ツ、こいつだ!!」

目当てのカードを探し当てた三沢は、立ち上がると自信満々に言い放った。

「遊城十代、姫宮千影！お前たちの融合ヒーローとシンクロモンスターは俺の前に現れることはない!!ふ、ふふふ、ふっははははははははは!!」

三沢の笑い声と共に7番目のデッキは完成したのであった。

そして夜が明けて決戦の朝がやってくる。

「いったただきまああつす!!」

そんなオシリスレッド寮の食堂で十代の元気な声が木霊した。

「朝飯、朝飯！米がうめええ。おかずはメダカの黒焼きかあ、あむつ……これもうめえ!!」

幸せそうに朝食を頬張る十代に千影は苦笑しつつ1つ十代の勘違いを指摘する。

「十代、それはメザシだよ。メダカは普通食べないの」

「そうだよ、アニキ!!」

千影の言葉に翔が何かイライラしつつ同意したのだった。

そんな翔の様子をいぶかしんだ隼人は翔に声をかける。

「なんか気がたつてるんだなあ、翔」

隼人のこの言葉に翔は当たり前だという風に喋りだした。

「なに言ってるんすかあ、今日は代表決定戦つすよ！本当は緊張して食欲ないよう、とか。はあ、昨夜は全然眠れなかったよお。つていのが相場でしょう!!」

しかし十代と千影はキョトンとした顔で翔に尋ねる。

「そうなのか？」

「そうなの？」

翔の語る相場に2人は当てはまらないようだ。

「.....」

2人の返事に絶句する翔に隼人は笑いかけた。

「ははは、翔のほうが緊張してるんだな」

そんな隼人と翔を見た十代と千影は笑顔で食事を再開する。

「とにかく決闘の前にはいっぱい食べて力をつけきな」

「腹が減っては戦はできぬってね」

朝食を心置きなく楽しむ2人の言葉に翔は微笑む。

そう、これがこの2人の強さなんだと。

しかし、気になることが1つあった。

「そう言えば国崎さん、どこ行っちゃったんだろっ？」

そう、国崎の朝食が手付かずで置かれていたのだった。

そして遂にその時がやってきた。

「シニョール、シニョーラ！お待たせしたノーネ！！ただいまから学園代表決定サバイバル決闘を始めるノーネエ！！」

クロノスの開会宣言に会場に集まった生徒たちから歓声上がる。

そしてクロノスは代表決定決闘の選手の紹介を始める。

「ライイエローからは三沢大地！そして、オシリスレッドからは遊城十代と姫宮千影ツト」

三沢を高らかに紹介した後には十代と千影の紹介をめんどくさそうにするが決闘上へとあがった3人には最早どうでもいいことだった。

「その顔だとできたみたいだね」

千影の問いに三沢は頷く。

「ああ、楽しみにしている。お前たちを倒す7番目のデッキを！」

そう高らかに宣言した三沢に十代が答え、さらに千影に向かって口を開く。

「俺だつて負けないぜ。それと千影、今まで負け越してる分を今日で取り返させてもらうからな!!」  
3人はそういうと笑いあつたのだった。

1人で観戦していた明日香の元に亮が歩み寄りつつ口を開く。

「おもしろい決闘になりそうだな」

「ええ、そうね」

しかし返ってきた明日香の返事が硬いことに亮は気がついた。

「明日香?」

「ああ、なんでもないわ」

亮は気遣わしげな声に明日香はなんでもないと笑って見せたのだった。

出入り口から洩れる歓声を聞きながら国崎は、殆どの生徒や教員が代表決定戦を見に行っているため人気のない廊下を走っていた。

「盛り上がってるねえ、こつちにとってはチャンス到来ってか」

しかし、決闘場から発せられる歓声と独特の秀囲気を感じた国崎は先日の千影と十代の姿を思い出す。

昔の自分と同じように決闘を精一杯楽しんでいる姿を。

国崎は頭を振り、そのヴィジョンを追いやる。

「決闘なんて所詮はお遊びさ!特ダネが俺を呼んでるぜ!!」

そして、電気が落とされた暗い図書室に忍び込むと国崎はPCを探しあてる。

国崎はPCの電源を入れると持参した端末を接続し、学園のデータベース閲覧のためのセキュリティシステムの突破を試み始めたのだった。

そんな中、決闘場では決戦の火蓋が気つて落とされた。

「では、始めるノーネ!!!」

クロノスの開始の宣言と共に3人は決闘盤を起動させる。

「「決闘ッ！！」「」

三沢LP4000

十代LP4000

千影LP4000

まず先行を取ったのは三沢だった。

「俺のターン、ドロー！」

三沢は早速いいカードを引き当てたのか笑みを浮かべると、そのカードを召喚する。

「カーボネドンを守備表示で召喚！」

カーボネドン 4 ATK900 DEF600

三沢の場に炭素で構成されたドラゴンが現れ守備表示を取る。

「ターンエンドだ！」

油断のならない相手だと気を張っていた翔だったが、三沢のこの戦術に逆の意味で驚く。

「守備力600！？それじゃ壁にもならないよ。リバースカードもないし」

「うーん……」

隼人も、この三沢の選択が何を狙っているのか分からないのか、唸り声を上げるしかなかった。

しかし、十代は微塵も油断などしていなかった。

「お前の7番目のデッキ、見せてもらっぜ！」

そしてデッキの手を伸ばし、カードを引く。

「俺のターン、ドロー！E・HEROバーストレディを守備表示で召喚！！」

E・HEROバーストレディ 4 ATK1200 DEF800

十代が早々と召喚したモンスターに三沢は感嘆していた。

(バースト・レディ。フェザーマンと融合する事で十代の切り札、フレイム・ウイングマンへと姿を変える。いきなり引き当てたか!)  
「バトルロワイヤル決闘では最初のターン、全員が攻撃を行うことができない。俺はリバースカードを1枚セットしてターンを終了する!」

そして3人目の千影にターンが回ってきた。

「私のターン、ドロロー!私はLOVサーヴァント・イエティ・を攻撃表示で召喚!」

LOVサーヴァント・イエティ・ 4 ATK1800 DEF600

千影の場に巨大な白い毛に覆われた獣が現れた。

「LOVサーヴァント・イエティ・の特殊効果、1ターンに1度、このモンスターの攻撃を放棄する代わりにフィールド上にあるモンスター1体を破壊できる!」

空かさず宣言された千影の言葉に十代と三沢は揃って驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

「私は三沢の場のカーボネドンを選択し、破壊する!」

千影の宣言により、カーボネドンは凍てつき粉々になった。

「だけど、破壊されたモンスターのコントローラーはデッキからカードを2枚ドロローできるといふ効果もあるけどね」

この千影の戦術に三沢はデッキからカードを2枚引きながら驚嘆していた。

「やるな千影、攻撃できないターンからモンスターを破壊してくる

なんて」

「私はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

そしてターンは2回目を迎えた。

「まだこれからだ！俺のターン、ドロー！！」

その引いたカードを見た三沢は心の中で歓喜する。

(来た！十代、千影お前たちを倒すキーカードがな！！)

そのキーカードを手札に加えると、三沢は1体のモンスターを選び取り召喚する。

「俺はオキシゲドンを攻撃表示で召喚！」

オキシゲドン      4    ATK1800    DEF800

(千影の場のイエティは脅威だが、オキシゲドンの攻撃力では相打ちに終わる……。そうなると次の俺のターンまで俺のフィールドはがら空き……。ならば十代を攻撃するのみ！)  
「オキシゲドンでバースト・レディを攻撃！」  
しかし、それを許す十代ではなかった。

「罠カードオープン、ヒーローバリア！このカードはフィールドにE・HEROがいる時、1度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする！！」

バースト・レディに向けて放たれたオキシゲドンの攻撃は十代の罠に阻まれ無効化された。

「そう簡単に俺のE・HEROは倒せないぜ！！」

「そうだろうな、それでこそ倒し甲斐があるというもの！」

十代の言葉に三沢はそう返しながら手札のカードを見て勝機は自分にあると踏んだ。

(だが、このカードたちでお前たちの切り札はもう使えなくなる！)

「俺はリバースカードを3枚伏せてターンエンドだ！」

この攻防を見ていた亮は3人の総評を明日香へと述べていた。

「頭脳派の三沢は遊城十代と姫宮千影のデッキを研究しつくしているはずだ。これからどんな展開をみせてくれるか」

明日香はそれに頷きつつも若干の反論を述べる。

「でもデュエルは計算だけでは勝てない。十代にはデュエルの流れを掴む才能が、千影にいたっては2人の長所に加えて確かな戦略眼もあるわ」

そう評する明日香に亮は目を向けるが、明日香はそれに気がつくとは勘違いをとくべく喋りだす。

「ひいき目でいっているんじゃないわ！ただあいつらのデュエルを見ててそう思っただけよ」

そして3人の決闘へと目を向けたのだった。

「俺のターン、ドロー！」

新たにカードを加えた十代は攻勢に出るべく、手札からカードを選び出す。

「俺はE・HEROSパークマンを攻撃表示で召喚！」

E・HEROSパークマン      4      ATK1600      DEF1400

「バーストレディを攻撃表示に変更し、さらに手札から装備魔法、スパークガンを発動！スパークマンに装備する！！」

スパークマンの手に一丁の銃が握られた。

「このカードの効果により、3回までモンスターを表示形式を交換することができる！三沢のオキシゲドンと千影のイエティを守備表示に変更！！」

スパークマンの放ったスパークガンの電撃によりオキシゲドンとイエティは守備表示となった。

「バーストレディ、オキシゲドンに攻撃だ！バースト・ファイヤー！！」

守備表示となったオキシゲドンにバーストレディの攻撃が決まる。



しかし三沢にとって、この攻撃は計算のうちだった。

「十代！酸素に炎がぶつかるとうなるか知っているか！！」

この三沢の宣言に千影は1つ思い当たる現象があった。

「しまった！バツクドラフトか！！」

「えっ！？」

しかし未だに理解できていない十代に三沢は高らかに宣言する。

「今、身をもつて知るがいい！オキシゲドンの特殊効果！！オキシゲドンが炎属性モンスターに戦闘によって破壊されたとき、全てのプレイヤーは800ポイントのダメージを受ける！！」

三沢の言葉が終わると同時に炎に包まれたオキシゲドンが大爆発を起こし、決闘場に立つ3人を襲う。

「くくくうううぐううううっ！！」「」

三沢LP3200

十代LP3200

千影LP3200

「やるな、三沢。これでお前のフィールドがから空きだけど、千影のイエティのほつが怖いからな。スパークマンで千影のイエティを攻撃！」

スパークマンの放った電撃が千影のイエティを襲うが千影も十代と同じ手を打った。

「そう来ると思ったよ、十代！畏カード、和睦の使者発動！！」

「なんだと！？」

千影の発動した畏カードによりスパークマンの攻撃は露と消えたのだ。

「和睦の使者はこのターン、戦闘によるダメージを0にし、モンスターの戦闘破壊も無効にする畏カード」

「さすがだな千影」

「千影も、そう簡単にはやらせてはくれないか」

この読みに三沢と十代は千影に賞賛を送ったのだった。

「俺はこれでターンを終了するぜ」

そして十代のターンエンドの宣言と共に千影のターンが回ってきていた。

「私のターン、ドロー！私はLOVサーヴァント・ドライアド・を召喚するー！」

LOVサーヴァント・ドライアド - 4 ATK1600 D  
EF1000

千影の場に下半身がラフレシア、上半身が女の使い魔が姿を現した。

「ドライアドで三沢に直接攻撃！リーフカッターー！」

「うづうづうづー！」

千影の攻撃宣言によりドライアドは無防備な三沢に葉の手裏剣を浴びせかけたのだった。

三沢LP1600

しかし千影の戦術はこんなところでは終わらない。

「戦闘を終了してメインフェイズ2に移行！イエティの効果でドライアドに使うー！」

この言葉に十代と三沢は驚きの声を上げた。

「なにっ!？」

「自分のモンスターにだと!？」

ドライアドは凍てつき粉々になると同時に千影は宣言する。

「この時ドライアドの効果発動！このカードが場から離れた時、自分フィールド上に苗床トークン1体を特殊召喚できるー！」

苗床トークン 1 ATK0 DEF0

千影の場に苗床トークンが守備表示で出現。しかしこれはほんのおまけでしかなかった。

「イエティの効果によって破壊されたモンスターのコントローラーはカードを2枚ドロワーできる。私はカードを2枚ドロワー！」

千影の攻撃後の守りを固めると同時に手札を補充して見せた戦術に多くの生徒たちから感嘆の声が上がるのだった。

この千影や十代の見事な一手一手に鮫島校長は後ろに座る大徳寺に声をかけた。

「今年のおシリスレッドはやるねえ、大徳寺君」

「はい。彼らはおシリスレッド期待の星ですよ」

その鮫島校長の言葉に大徳寺は笑顔を持って答えたのだった。

鮫島校長が「うむ」と頷く中、クロノスだけが心中穏やかではなかった。

(なんとということなノーネエ！三沢が押されているノーネエ！！これでは何のために屈辱に耐えてライイエローの三沢を推したのか分からないノーネエエエツ！！！)

後半部分が声に出ていることにも気づかず、頭をかき続けるクロノスなのであった。

千影は引いたカードを確認してみると1つ頷いた。

(よし！やっとチューナーモンスターが来てくれたか。これで次のターンから大きく攻勢に出られる)

「私はカードを2枚伏せてターンエンド！」

一転して不利になった三沢に十代は声をかける。

「どうだあ、三沢！千影もそうだけど俺のE・HEROも強いだろうー！！」

だが、三沢はそんな十代の言葉に強気の言葉を返す。

「確かに、お前たちのE・HEROやLOVサーヴァントは強い！だがお前たちの勝つ確率は1パーセントもない！！見せてやるよ！

俺の7番目のデッキの力を!!」

その三沢の絶対の自信に十代と千影は頬に汗を伝わせる。

そして三沢はカードを引くべくデッキに手を伸ばした。

「俺のターン、ドロー!俺はハイドロゲドンを攻撃表示で召喚!!」

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

「ハイドロゲドンでバーストレディを攻撃!」

三沢の号令の下、ハイドロゲドンの攻撃がバーストレディを襲い粉砕する。

「うわっ!」

十代LP2800

しかし三沢の攻撃はこれで終わらなかった。

「ハイドロゲドンの特殊効果発動!相手モンスターを戦闘で破壊した時、デッキからもう1体ハイドロゲドンを特殊召喚することができる!!」

三沢はデッキからハイドロゲドンを選び出し攻撃表示で召喚する。

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

「いけえ、新しく召喚したハイドロゲドンで千影の場の苗床トークンを攻撃!」

ハイドロゲドンの攻撃が千影の場の苗床トークンを押し流す。

「さすがに抜け目がないね三沢」

その光景に千影は苦笑を浮かべながらそう言ったのだった。

「お褒めに預かり光荣だね。そしてまたハイドロゲドンの効果が発動!来い、ハイドロゲドン!!」

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

三沢の場に3体のハイドロゲドンが揃ったのだった。

「3体目のハイドロゲドンで守備表示のイエティを攻撃だ！」

そしてまたしてもハイドロゲドンに千影の場のモンスターがやられるが、ここで引き下がる千影ではなかった。

「この時罨カード、サーチアイを発動！戦闘によってモンスターが破壊された時、デッキか手札から4以下のLOVサーヴァントと名のついたモンスター1体を特殊召喚できる！！私はをLOVサーヴァント - 酒呑童子 - 守備表示で特殊召喚！」

LOVサーヴァント - 酒呑童子 - 4 ATK1700 DEF  
1000

これを見た三沢は心の中で舌打ちした。

（チッ！あれは厄介なモンスターだぜ。戦闘では破壊できず、破壊するにはカード効果か千影になにかしらのダメージを与えなければいけないからな。まあ、いい。ならばここは俺のエースモンスターを出させてもらっぞ千影、十代！！）

その結論に至ると三沢はすばやくカードを選ぶ抜く。

「俺は装備魔法、リビング・フォッシルを発動！このカードは自分の墓地からモンスター1体を特殊召喚し、そのモンスターに装備される！！」

そして三沢は墓地からオキシゲドンのカードを選び取る。

「生きた化石となり、甦れオキシゲドン！！ただし、攻撃力は1000ポイント下がり、効果も封じられる」

オキシゲドン 4 ATK800 DEF800

三沢の場にオキシゲドンが再び現れたのだった。

この三沢のモンスターラツシュに翔が驚きの声を上げた。

「一気にモンスターが4体!!!」

「いいや、それだけじゃない!!!」

隼人はこの布陣から繋がる三沢のコンボを思い出し戦慄していた。

「これで揃った」

そう言うと三沢はエースモンスター召喚のための最後の札を切る。

「手札から魔法カード、ボンディング・H20を発動!このカードは自分フィールド上のハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体。つまり水素2と酸素1を化合することで水を精製する!!!」

2体のハイドロゲドンと1体のオキシゲドンが合わさり新たなモンスターとなって新生する。

「ウォーター・ドラゴンを特殊召喚!!!」

ウォーター・ドラゴン     8     ATK2800     DEF2600

かつて万丈目を破った水の龍が姿を現したのだった。

「ウォーター」

「ドラゴン」

かつてのその雄姿を思い出したのか十代と千影は身構える。

だが、三沢のエースモンスターはこの1体だけではなかった。

「さらに俺は手札から魔法カードを発動する!」

「えっ!?!」

その言葉に十代と千影は驚きの声を上げた。

「魔法カード、因果律量子論の証明!このカードは自分の場のモンスター1体を選択し発動!!!自分の場のモンスター1体を生け贄に選んだモンスターと同     ・同攻撃力・同守備力のモンスター1体をデッキ、手札、墓地から召喚条件を無視して特殊召喚できる!!!俺はウォーター・ドラゴンを選択し効果発動!!!」

三沢の場に残った最後のハイドロゲドンが生け贄に捧げられ、ウォーター・ドラゴンから生まれ出でた光が輝きを発する。

「因果を超えて、来い！ウォーター・ドラゴンのもう1つの可能性、ファイアー・ドラゴン！！」

そして光がはじけ、その中から炎で構成された龍が姿を現した。

ファイアー・ドラゴン      8    ATK 2800    DEF 2600

こうして三沢の場に1対の炎と水の龍が揃ったのだった。

2体の龍の雄姿に翔と隼人は驚愕がいつまでも引くことはなかった。

「す、すごい！」

「まだ、三沢にはエースモンスターがいたんだな」

鮫島校長も三沢のこの手に感嘆の声を漏らす。

「ほう、三沢君もすばらしいタクティクスだ」

「うーん、ちょっとピンチかじゃあ。十代君に千影君。ねえフアラオ」

「ニヤー」

大徳寺も2体の龍の出現に十代と千影が、どうやってこの劣勢を跳ね返すか楽しみにフアラオに語っていたのだった。

「さすがオベリスクブルーに入れるだけの実力の持ち主なノーネ！

ウフフフ、そのままドロップアウトボーズを叩き潰すノーネン！！」

先ほどまで三沢のピンチに慌てていたクロノスも三沢の猛反撃に上機嫌のようだった。

「ウォーター・ドラゴンの効果により炎属性、炎族モンスター。フアイアー・ドラゴンの効果により風属性、植物族モンスターの攻撃力はこれらのカードがあるかぎり0になるぜ！そして千影、お前の酒吞童子は炎属性モンスター！！」

三沢はそう言って千影の場の酒呑童子を指差すと、ウォーター・ドラゴンから発せられた水の波動に苦しみ始めた。

LOVサーヴァント - 酒呑童子 - 4 ATK0 DEF1000

攻撃力が0になった酒呑童子に悔しそうな表情になると千影は三沢に言い放った。

「しかし、この場で攻撃力0になろうとも酒呑童子の効果は生きている！」

そう、三沢の2体の龍は攻撃力こそ下げられるものの効果を無効にはできなかったのだ。

そして千影は三沢のプレイングミスを見逃さなかった。

「それに君の龍の片方、ファイアー・ドラゴンも炎属性！ウォーター・ドラゴンの効果で攻撃力が0になるはずだ！」

そう、ファイアー・ドラゴンは炎属性。酒呑童子と同様、その攻撃力は0になるはずだった。

しかし三沢は高らかに宣言する。

「甘いな、ファイアー・ドラゴンにはウォーター・ドラゴンの効果を受けないというモンスター効果がある！」

三沢のこの言葉に十代と千影は苦しそうな表情になる。

「ッ！」

2体の龍を従え、6属性のうちの2つを半ば支配した三沢は余裕の表情でターンエンドを宣言した。

「俺がそんな初歩的なミスをするでも思ってたか。俺はターンを終了する」

(これで俺の場は鉄壁。仮にやつらが融合やシンクロ召喚をしてきたとしても、それを封じる畏も仕掛けた。勝機は正に我にあり！) 1ターンでモンスター0から強力な最上級モンスター2体の召喚の手際よさに十代と千影は三沢に賞賛の言葉を贈る。

「流石だな！」



「うん、すごいコンボだ」

しかし、2体の龍を前にしても十代と千影の瞳に宿った闘志は衰えることを知らなかった。

「だが、まだこれからだ！俺のターン、ドロー！！」

十代はこのドローで引き当てた融合のカードを見ると心の中で頷いた。

(よし！)

「お前がエースモンスターを呼び出したんなら、俺も全力を持って応えるぜ！場のスパークマン、そして手札からフェザーマン、バブルマンを融合させE・HEROテンペスターを召喚するぜ！！」

十代の場に3体のヒーローが現れ、その力を1つにせんと集まる。

「魔法カード、融合発動！！」

しかし、ここで三沢は十代と千影の融合とシンクロ封じのカードを発動する。

「やはりそう来たか！だがそれも計算のうちだ！！罠カードオープン！王宮の弾圧！！さらにもう1枚永續罠、巫力儉約術を発動！！」

この三沢の発動したカードに十代と千影は息を詰まらせる。

「ッ！?!?!?」

「王宮の弾圧は800ポイントのライフを払うことでモンスターの特殊召喚を無効にする永續罠！さらに巫力儉約術の効果は、罠カードの発動に必要なライフコストが0になる効果！！これによって俺はライフコストを支払わずに王宮の弾圧の効果を使用できる！十代、お前のテンペスターの特殊召喚を無効にする！！」

三沢の発動した王宮の弾圧により融合のカードが砕け散り、十代の融合は失敗に終わった。

「なにっ!?!?」

「このカードがあるかぎり、お前たちは融合召喚、シンクロ召喚を含めた全ての特殊召喚を封じられた！出てくる融合、シンクロモンスターが厄介なら、そのモンスターがでてこれない状況を作ればいい！！故にこの選択だ！！」

この三沢の言葉に十代と千影は苦い顔をしたのだった。

この三沢のコンボに翔は悲鳴を上げた。

「そんな！アニキの融合コンボが破られるだけじゃなくて、千影君のシンクロ召喚も封じられるなんて！！」

翔だけではない。他の観客たちも三沢のこのコンボに十代と千影が窮地に陥ったと見ていた。

「ライフポイントでは十代や千影が有利だけど……」

隼人はそう言うが、三沢の場にある2体の龍と2枚の特殊召喚封じのコンボに、それは気休めでしかないと感じていた。

そんな中、三沢の戦術に感嘆していたのは亮だった。

「さすがライエロートップの三沢だ。十代のデッキの切り札はE・HEROを融合し特殊召喚するモンスター。千影のデッキの切り札であるシンクロ召喚も特殊召喚ならば個々に対応せずに特殊召喚そのものを禁じてしまえばいい」

この亮の分析を明日香が要約する。

「つまり特殊召喚を禁じてしまえば、十代には決め手がなくなり、千影のシンクロ召喚独自の対応力を使えなくなる」

「そういうことだ」

亮は明日香の言葉に頷きながら決闘場に立つ3人へと視線を戻したのだった。

そしてやけに上機嫌なのがクロノスである。「ウヒョヒョヒョヒョ！」と高らかに笑いながら子供のようにはしゃいでいた。

「いいノーネ、いいノーネエ！このまま一気にドロップアウトボイイイズを叩き落してやるノーネ！！」

「まだまだ、このデッキはこんなもんじゃないぜ！お前たちのために考え抜いた、お前たちを倒すためのタクティクス、俺の計算に間違いはない！！」

この三沢の特殊召喚封じに十代は舌打ちすると守りを固めるべく動

いた。

「くっ！俺はフェザーマンを守備表示で召喚！」

E・HEROフェザーマン      3    ATK1000    DEF1000

しかし、三沢の場には風属性モンスターの攻撃力を0にする存在があった。

「ファイアー・ドラゴンの効果で風属性のフェザーマンの攻撃力は0になる！」

三沢の宣言と共にフェザーマンの周りに炎が渦巻き、フェザーマンの力を奪い取っていく。

E・HEROフェザーマン      3    ATK0    DEF1000

「そんなことは百も承知さ！今は守りを固めるぜ。さらにスパークマンを守備表示に変更してターンエンドだ」

しかし、今は守りを固めることが肝要なので、十代にとっては効果よりも2800の攻撃力を持つモンスターが2体並んでいることが脅威だった。

十代や千影が危機に直面していたそのころ、デュエルアカデミアのデータベースへとハッキングを試みていた国崎は最後のセキュリティ突破に取り掛かっていた。

「………ビンゴー！」

全てのセキュリティを突破した国崎はデータを閲覧していくと、特待生の項目に行き着いた。

「おっ？」

その項目に記された特待生たちの特記事項に不自然な一致が見られた。

「天上院吹雪、決闘研究のためアメリカ留学………こい

つも留学……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……こいつも……

・！いくらなんでも多すぎるだろう、不自然じゃん！！」  
そう、全ての特待生が留学の名目でこの学園にいないということが記されていたのだ。

「もしかして、こいつらが行方不明の生徒？それを留学にして片付けてるとしたら……こいつらが本当に留学しているかどうかは調べれば分かることだ」

そういうと、その特待生たちのデータを自分の端末へと転送し始める。

「もし全部嘘だったら大騒ぎになるぜ！」

自分のターンが回ってきた千影は、三沢の戦術を独自に分析していた。

（まさか、特殊召喚自体を封じてくるなんて……さすがデータの申し子、三沢だ。これでシンクロ召喚を含めた特殊召喚は行えない・私のデッキはシンクロ召喚の性質上、特殊召喚を行う効果のカードが多い。これは十代よりも対私を意識した戦術だなしかし！）

「ここで負けるわけには行かない！私のターン、ドロー！！」

（来た！）  
その引いたカードを見た千影は笑みを浮かべると三沢の向けて口を開く。

「三沢、君が特殊召喚を封じる戦術を打つなら、私は戦術を超えた戦術で相手をしよう！！」

「おもしろい、見せてもらおうか！その戦略とやらを！！」

三沢の返答に、千影はその引いたカードを最大限生かすべく即座に戦術を組み立てると行動に移す。

「私は酒吞童子を生け贄にL・O・Vサーヴァント・木霊・を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント - 木霊 -                   6   ATK 2500   DEF 1200

千影の場面上級モンスターが召喚されるがファイアー・ドラゴンが発する炎の渦によりその攻撃力は弱体化された。

LOVサーヴァント - 木霊 -                   6   ATK 0   DEF 1200

「迂闊だったな、千影！木霊は植物族モンスター、よってファイアー・ドラゴンの効果でその攻撃力は0になる！！」  
その三沢の指摘に千影は笑みを持って応えた。

「わかってるさ、まだ私の戦略へと繋がるここの戦術はまだこれからだ！手札から魔法カード、コード・チェンジを発動！！」

この千影の出したカードに三沢と十代は声を上げた。

「コードチェンジだと!？」

「その手があつたか!!!」

千影は頷きつつ、効果の説明に入る。

「このカードはモンスターの種類か効果を書き換えることができる魔法カード。私は木霊を戦士族に変更！」

そしてコード・チェンジの効果により、木霊はその身を変貌させる。巨大だった樹の体は細身になり、両の腕を棘の剣に変えた戦士となっていたのだ。

「これによりファイアー・ドラゴンの効果は適用されない！」

LOVサーヴァント - 木霊 -                   6   ATK 2500   DEF 1200

「だが、それでも攻撃力は2500！俺のウォーター・ドラゴンと

ファイアー・ドラゴンの2800には届かないぜ!!」

しかし、千影の狙いは三沢ではなかった。

「わかっているさ! 私は木霊で十代のフェザーマンを攻撃!!」

この窮地にさらに追い討ちをかけられることとなった十代は驚きの声を上げた。

「俺が狙いかよ!」

「悪く思わないでね、十代」

千影は両手を合わせ十代に1つウィンクすると、木霊の棘の剣の乱舞がフェザーマンを襲う。

「ううっ!、フェザーマン!」

破壊されるフェザーマンに十代は腕で顔をかばうのが精一杯だった。

「さらに場にカードを1枚伏せてターン終了だ!」

千影のターンエンド宣言に三沢は頭を捻っていた。

(千影は何故ああ言っておきながら、さっきのターン俺に仕掛けては来なかった? ならばあの言葉はハツタリか? いや、千

影は確実に何かを企んでいる。奴は俺のターンに何かをしでかす気だ。ならば、それを真正面から打ち砕いてくれる!)

「俺のターン、ドロー!」

そしてドローしたカードを見た三沢は完全に風は自分に吹いていると確信した。

(ここでこのカードがくるか! 今日の俺の運には何か怖いものを感じるぜ) だが、これで奴らの融合モンスターとシンクロモ

ンスターは真に死に絶えることになる!!)

そのカードを手札に加えると、1枚のモンスターカードを選び取る。

「俺はマスマティシヤンを攻撃表示で召喚!」

マスマティシヤン 3 ATK1500 DEF500

三沢の場にビン底眼鏡をかけた老博士が現れた。

「このカードは召喚時、カードを1枚墓地に送る!そしてマスマテ

イシャンが攻撃で破壊された時、デッキからカードを1枚ドロウすることができる!!」

そして三沢による攻撃が始まった。

「行くぞ! ウォーター・ドラゴンで十代のスパークマンを攻撃!!  
アクア・パニツシヤアア!!」

ウォーター・ドラゴンから放たれた水の激流がスパークマンを荒い流し、十代の場はがら空きになった。

ここで三沢は一瞬、思案に耽る。

(どうする? ここでファイアー・ドラゴンでライフポイント2800の十代を攻撃すれば十代には勝てるが、そうすれば千影が何をしでかさか分からない………確固撃破が戦術の常識だが、やつ等はそれに囚われず、千影はそれに加えてその上を行く存在………なら、ここは千影を攻撃する!)

そう決めると、三沢はファイアー・ドラゴンへと命を下す。

「ファイアー・ドラゴン! 千影の木霊に攻撃だ!!」

三沢の攻撃命令にファイアー・ドラゴンは口を開き、灼熱の炎弾を発せんとする。

「ブレイズ・インパクト!!」

三沢の言葉と共にファイアー・ドラゴンから発せられた攻撃が木霊に迫る。

しかし、その攻撃に千影は笑みを浮かべていた。

「三沢、君ならこの状況下、十代のとどめより私への攻撃を優先すると読んでいたよ!」

「なんだと!?!」

千影の言葉に三沢が驚く中、千影が伏せてあったカードを開く。

「畏カード、アルカナストーンシールド!」

「あのカードは!?!」

三沢は神楽坂戦で使われたそのカードの効果に戦慄した。

「そう、このカードは発動後装備カードとなり、装備されたモンスターの攻撃力・守備力が500ポイントアップする!!」

LoVサーヴァント・木霊・ 6 ATK3000 DEF1700

アルカナストーンシールドの効果で強化された木霊がファイアー・ドラゴンの炎弾を掻い潜ると、その両の腕でファイアー・ドラゴンを切り裂いた。

三沢LP1400

この千影の反撃に三沢は苦い顔となった。

「ぐっ、ファイアー・ドラゴンが!!」

（しまった！迂闊だったぜ、まさかの反撃を貰うとはなだが!!）

「ファイアー・ドラゴンのモンスター効果発動！」

この三沢の宣言に千影と十代は身構えた。

「ッッ!？」

「このモンスターが破壊され墓地にいった時、破壊したプレイヤーにこのカードの元々の攻撃力分のダメージを与えることができる!千影、お前は2800ポイントのダメージを受けてもらっぞ!!」

その三沢の言葉と共にファイアー・ドラゴンの爆発が千影を襲う。

「あああああっ!!」

千影LP400

爆発と爆風が一気に千影のライフポイントを削ったのだった。

（これでいい。それに俺の場にはまだウォーター・ドラゴンが残っている。そして、なにより）

三沢は手札のカード1枚を見るとほくそ笑んだ。

（このカードで完全にあいつ等の融合とシンクロを封じれる。なら、



ファイアー・ドラゴン1体くらいの損害は！)

「必要経費だ！戦闘続行！！マスマティシャンで十代に直接攻撃、バトル・カリキュラム！！」

マスマティシャンが杖から発せられた数字のビームが十代を襲う。

「ぐあああああつ、つく！！」

十代LP1300

「そして、俺はカードを1枚伏せてターンを終了する！！」

三沢の猛攻に千影、十代共に追い詰められていた。

そんな2人に翔と隼人は心配げに決闘場に立つ2人を見つめていた。  
「ああ、どうしよお・・・アニキの場にモンスターがいなくなっちゃった」

「千影も、場に攻撃力3000のモンスターがいるけど、ライフポイントが風前の灯なんだな」

千影と十代が不利になれば不利になるほど喜ぶ人間が1人、ご存知クロノスである。

「シビれるノーネエエ　さすが私が推薦しただけのことはあるノーネエエ」

彼は上機嫌に歌を唄うが

「でも彼はライイエローの生徒なのにや」

大徳寺のこの言葉に言葉が詰まった。

「ドレ」

さらに鮫島校長が大徳寺に続き言葉を投げかける。

「オベリスクブルーの生徒以外にもこれだけの決闘をできるだけの生徒が育っている。喜ばしいことじゃないかね」

この鮫島の言葉

1人でも多くのエリート決闘者を養成する機関であるという、この学園の目標を体現している、目の前の3人にクロノスは忌々しげな視線を向ける。



「このカードが召喚された時、俺の場に他のカードがない場合、デッキからカードを2枚ドローする！」

カードを2枚ドローした十代は1つ頷くと、さらに手札からカードを切る。

「そして手札から装備魔法発動！バブル・シヨット！！」

十代の場のバブルマンにバブル・シヨットが装備された。

「この効果によりバブルマンの攻撃力が800アップする！」

E・HEROバブルマン      4      ATK1600      DEF1200

攻撃力のアップしたバブルマンに十代は攻撃の命を下す。

「バブルマンでマスマティシヤンを攻撃！バブル・シヨット！！」

水の砲撃がマスマティシヤンを襲い、超過ダメージが三沢のライフポイントを削る。

「ぐっ！」

三沢LP1300

「マスマティシヤンが破壊されたことで効果発動！デッキからカードを1枚ドローする！！そして      ！！」

三沢はデッキからカードをドローすると決闘盤を高らかに掲げた。

「この時、墓地にあるカーボネドンの上に10枚のカードが積み重ねられた！カーボネドンは瞬間的な圧力を受け、ダイヤモンドに変化する！！」

そう言うとき墓地にあるカーボネドンを手に取り高らかに宣言した。

「このカードを除外することでダイヤモンド・ドラゴンを特殊召喚する！！」

しかし、ここで十代と千影は三沢のプレイングミスを見逃さなかった。

「お前らしくないぜ、三沢！」

「そう、君の場にある王宮の弾圧は私たちも使うことができる永續罨！巫力儉約術は君にしか効果のないカードだから、私は支払うライフコストが足りない」

「けれど！」

千影の視線を受けた十代が頷く。

「俺が800ポイントのライフを支払い、三沢！お前のダイヤモンド・ドラゴンの特殊召喚を無効に」

今は敵同士の人だが、この窮地に力を合わせることにしたようだ。そして十代が効果の使用を宣言する

その直前に三沢が動いた。

「この程度の対策、俺が採っていないと思ったか！リバーズ罨、オープン！！武力による統制！！」

三沢のカードの発動に2人は驚きの声を上げた。

「えっ！？」

「この永續罨がある限り、お前たちはライフコストを必要とするカードの効果が使えなくなる！どうだ、これが対お前たちへの切り札の1つ、三式永續罨特殊召喚封印戦術『ピタゴラスの定理』だ！！」

そう宣言する三沢のバックに王宮の弾圧、巫力儉約術、武力による統制の3枚が三角形を形作ったのだった。

「そして俺はこのままダイヤモンド・ドラゴンを攻撃表示で召喚させてもらうぜ！」

ダイヤモンド・ドラゴン      7      ATK 2100      DEF 2800

三沢の場にダイヤモンドで出来たドラゴンが現れたのだった。

光り輝く金剛石の龍と濁流猛る水の龍を従えた三沢は千影と十代に高らかに言い放つ。

「これでお前たちの運命は決まった！特殊召喚という決闘の1法則を従えた俺にお前たちは勝つことは不可能！！」

しかし、千影はその言葉に笑みを持って返した。

「三沢、君が法則という名で私たちを縛るなら、その3つの縄を私のカードで断ち切る！ゴルディオスの結び目を断ち切った征服王イスカンダルのように！！」

「なら証明してもらおうか！お前が俺の法則を断ち切れるかどうかを！！」

千影の言葉にそう返す三沢だったが千影は腕を払い、発動を待ちわびていた1枚のカードを開ける。

「ならばしかと見よ！これが法則を断罪する我が剣にして我が戦略だ！罨カード、神々への離反発動！！」

千影が発動した、罨カードに十代は驚きの声を上げる。

「こいつは！！そうか、アルカナストーンシールドでの攻撃力アツプの真の狙いはこれだったのか！！」

神楽坂戦で見た威力に十代は戦慄するが1つ腑に落ちない点があった。

「でも千影、なんで俺のターンエンド宣言を待たずに発動したんだ？それが一番タイミング的にいいはずなのに！？」

そう、神々への離反を発動する理想のタイミングは自分のターンが始まる直前の十代のターン終了時だ。

それなのに千影は十代のメインフェイズ2で神々への離反を発動していたのだった。

そんな十代に千影はにこやかな笑顔で答える。

「さっきの借りだよ十代。君はダイヤモンド・ドラゴンの召喚を阻止するためにその身を削ろうとしてくれた。私のこれはその返答だよ。何よりこんな楽しい決闘で君にここで脱落してもらうのは惜しいからね」

そう言葉をかけると千影は神々への離反の発動に入る。

「このカードの効果は自分の場にある攻撃力3000以上のモンスターを生け贄に全てのカードを破壊する！私は木霊を生け贄にして効果を発動！三沢、これが戦術を超えた私の戦略だ！！」

木霊が生け贄に捧げられ、場のカード全てが吹き飛び煙があたりに

蔓延する。

「……つつつつう!!」「」

3人が爆風から身を守る中、三沢の口元が笑みに歪んでいたのだった。

この爆発に翔は喜びの声を上げていた。

「やったー！これでアニキと千影君は融合とシンクロ召喚ができるぞ！」

隼人も千影の上げた反撃の狼煙に鼻息を荒くしていた。

「ああ、千影には超絶効果のこのカードがあつたんだな！」

そんな2人から離れた場所で観戦する明日香はホッと息を漏らしていた。

「これで仕切り直しね」

「それはどうかな」

しかし、そこに入ってきた亮の言葉に明日香は「えっ?」となる。

「三沢は千影がこのカードを持っていることを知っている。ならば

あの三沢が何の対策も立てていないとは考えにくい」

この亮の言葉に明日香は驚きの声を上げる。

「じゃあ、まさかこれも彼の計算のうちだというの!?!」

「おそらくはな」

そしてその亮の考えは見事に正鵠を射ていた。

「これで三沢、君の『ピタゴラスの定理』は崩れた！ここからが本当の闘いだ!!」

千影は未だ煙の晴れきらぬ中、三沢を指差すとそう言ったのだった。

「覚悟しろよ、三沢!!」

十代も千影に続いて言葉を発するが、三沢の顔には笑みが浮かべられていた。

「確かに、千影お前の戦術さえも覆す戦略は脅威だ。しかし！その戦略さえも俺の計算のうちだったのさ!!」

「「なにっ!?!」」

この三沢の言葉に驚きの声を上げる千影と十代に三沢は言葉を続ける。

「俺の真の融合・シンク口封じの切り札は永続罨からなる『ピタゴラスの定理』ではない!

それは、このカードだ!」

三沢のその言葉と共に決闘場を覆っていた煙が晴れる。そこには

「罨カード、悪のデッキ破壊ウイルス! このカードはセットされたこのカードが破壊され墓地にいった時に効果が発動! 全ての融合デッキのモンスターを墓地へと送る!」

そのカードの効果に十代と千影はこれまでにない衝撃を受ける。

「今までの特殊召喚封じは前座って訳かよ!」

「まさか・・・三沢、君はその発動を狙って・・・!!!」

千影と十代は苦い顔をしながら融合デッキをそのまま墓地へと送ったのだった。

先ほど、大喜びしていた翔と隼人もこの三沢の戦術に意気消沈していた。

「ああ・・・折角、三沢君のコンボを破ったのに・・・」

「絶体絶命なんだな・・・」

亮と明日香も、この三沢の二重の戦術に舌を巻いていた。

「まさか、三沢がここまでやるとはな」

「彼は幾度となく2人の決闘を見て研究してきた。それ故に2人の融合とシンク口召喚がどれほどに脅威なのか良く知ってるからかもね」

皆が固唾を呑んで見守る中、三沢は墓地に手を伸ばしながら口を開

いた。

「ウォーター・ドラゴンが破壊され墓地におくられた時、墓地にあるハイドロゲドン2体とオキシゲドン1体を特殊召喚できる！」

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

ハイドロゲドン 4 ATK1600 DEF1000

オキシゲドン 4 ATK1800 DEF800

そして三沢は3体のモンスターを守備表示で召喚したのだった。

融合デッキは完璧にやられて、なおかつ相手の場にはモンスターが3体という絶体絶命の状況だが、まだ十代は諦めていなかった。

「だが、まだ俺のターンは終了してないぜ！俺はカードを2枚セツトして手札から永續魔法、悪夢の屋気楼を発動する！！これで俺のターンは終了だ」

そしてそれは千影も同じだった。

「この十代のエンドフェイズにLovサーヴァント・木霊・の効果が発動！墓地におかれたターンのエンドフェイズに2体の苗床トークンを特殊召喚できる！！」

苗床トークン 1 ATK0 DEF0

苗床トークン 1 ATK0 DEF0

千影の場に2体の苗床トークンが守備表示で出現すると千影は三沢に向かって口を開いた。

「確かにこのデッキの軸はシンクロモンスターであることは否めない。しかし！たとえシンクロ召喚を完全に封ぜられようと、特殊召喚が可能となった今なら、私はこの子たちの力を信じて勝機の1つでも見出してみせる！！」

この千影の言葉に十代も続く。

「俺のE・HEROも融合だけだと思ったら大間違いだぜ！E・H



ERROの真の力は魔法・罨・モンスター全ての連携から繰り出される多彩なコンボにある！！俺もまだ負けたと思っちゃいけないぜ！！」  
2人の未だに折れぬ不屈の心に三沢は目をつぶりながら言葉を発する。

「確かに俺はお前たちの融合とシンクロ召喚から生まれる強力モンスターのみに集中し、それ以外の計算を少々見誤っていたかもしれない」

そこまで言うと、三沢は目をカッと見開き2人を見据えると高らかに宣言した。

「だが、俺の融合デッキ破壊によりお前たちの力の大部分を封じ込めたのは事実！このまま押し切らせてもらう！！」

千影はそうはさせないとデッキへと手を伸ばす。

「そう簡単にはやらせないよ、三沢！私のターン、ドロー！！」  
そしてその心は十代も同じだった。

「ここで永續魔法、悪夢の蜃気楼の効果が発動！相手のスタンバイフェイズに手札が4枚になるようにドローする！！」

手札0の十代は4枚のカードをデッキからドローし、さらに次の行動に移る。

「そしてリバーズカード、オープン！速攻魔法、非常食！！このカードは自分の場の魔法または罨カード1枚を墓地に送ることで1000ポイントのライフを回復する！墓地に送るのは悪夢の蜃気楼！！」

十代LP2300

十代は次の自分のスタンバイフェイズで発動する悪夢の蜃気楼のデメリット効果を自分のライフポイントへと変えたのだった。

千影と十代の諦めない姿勢と、窮地を脱するための戦術に国崎は表情を子供のようにワクワクとさせていた。

「へええ、やるねえ！十代は悪夢の屋気楼のリスクを上手いこと回避しやがったし、千影は場を一掃するカードを使ってもモンスターを特殊召喚して次につなげやがった！！」  
そこでハツとなると国崎は頭を振る。

「いやあ、こんなところでこんなことしてる場合じゃなねだろう。俺は」

そして踵を返し会場から去ろうとする国崎だが、後ろ髪引かれる思いがあるのか、その場を立ち去れなかった。

「そう簡単に十代と千影の力を封じることが出来ないか」

「ええ」

そして亮と明日香も、諦めない2人の姿勢に笑みを浮かべていたのだった。

千影は三沢の場にある3体のモンスターを見ると、手札から1枚のカードを選び出す。

「私は苗床トークン1体を生け贄にLOVサーヴァント・マンドレイク-を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント・マンドレイク -      5      ATK1500      D  
EF500

千影の場に大根の姿をした使い魔が姿を現す。

三沢は千影の新たに召喚したモンスターに身構える。

「マンドレイクでオキシゲドンを攻撃！球根爆弾！！」

千影の号令と共にマンドレイクの爆撃がオキシゲドンを襲い、爆散させる。

「ぐうっ！だが、俺の場にはまだ2体のハイドロゲドンがいる！」

三沢は腕で顔をかばいながらそう口にするが、千影はそれを承知でマンドレイクを召喚していた。

そう、それは

「マンドレイクの特特殊効果！このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、このカードを墓地に送ることで、相手の場のモンスターゾーンか魔法・罫ゾーンのどちらかのカード全てを破壊する！！」この効果に三沢は驚きの声を上げる。

「なんだと！？じゃあ」

「そう！マンドレイクを墓地に送り、三沢、君のモンスターカード全てを破壊する！！」

千影の宣言と共にマンドレイクが《いいやっほい》と陽気な声を上げて大爆発を起こしたのだった。

その爆発は三沢のモンスター全てを吹き飛ばす。

「うううっ！！」

それを見た千影は1つ頷くと、墓地へといったマンドレイクを優しげな瞳で見送ると残りの手札に手をかけた。

「さらに私はカードを2枚伏せてターン終了だ！」

「俺のターン、ドロー！」

千影のターンエンド宣言を聞いた三沢はカードをドローすると、そのカードをそのまま決闘盤へと差し込む。

「魔法カード、強欲な壺発動！この効果でカードを2枚ドローする！！」

2枚のカードを手札に加えた三沢は1つ頷く。

（これならいける！）

「さすがだな千影、十代。だが、俺の計算が悪のデッキ破壊ウィルスまでの融合・シンクロ召喚封じで終わっていると思っただら甘い！

俺は手札から魔法カード、再練成を発動！！」

三沢は墓地からボンディング・H20、ハイドロゲドン、オキシゲドンを手に取ると、高らかに宣言する。

「自分の墓地にあるボンディング・H20とハイドロゲドン2体、オキシゲドン1体を除外して墓地に眠るウォーター・ドラゴンを特殊召喚する！！」

その言葉と共に三沢の場に水柱が立つ。

「ウォーター・ドラゴン復活!!」

ウォーター・ドラゴン      8    ATK 2800    DEF 2600

水柱が弾け、三沢の場にウォーター・ドラゴンが姿を現したのだ。た。

そして三沢はモンスターのいない十代に止めを刺すべくウォーター・ドラゴンに命を下す。

「十代、これで止めだ!ウォーター・ドラゴンで十代に直接攻撃!アクア・パニツシャアア!!」

しかし、ここで倒れる十代ではない。

「畏カード、オープン!攻撃の無力化!!このカードにより相手からの攻撃を無効にして戦闘フェイズを終了させるぜ!!」

十代の発動した畏カードがウォーター・ドラゴンの攻撃を受け止めたのだ。

「ふう」

ウォーター・ドラゴンの攻撃を凌いだ十代は一息ついたが、これで真正銘の丸裸になってしまった。

そんなしぶとい十代と、危機にあってもなお攻めの姿勢を崩さない千影に三沢は笑みを浮かべていた。

「ふっ、これだけの攻撃を受けてもまだ倒れないか」

「言つたる!俺はまだ負けたと思ってないってな!!」

「私もだよ、三沢!!」

三沢の笑みを湛えた言葉に十代と千影も笑いながら応えたのだ。俺はカードを2枚セットしてターン終了だ!

この宣言に十代は「よし!」と1つ気合を入れると、自分を心配そうに見つめる隼人と翔に親指を立てた。

「大丈夫、俺は負けないって!」

「私も、こんなところで終わるつもりはないよ」

千影も隼人と翔に微笑みかけたのだった。

そんな2人の姿に国崎は何かを払拭するかのようのように自分に言い聞かせる。

「たかがカードゲーム！何を熱くなってるんだか！！」

そうはいうが、足は根を下ろしたように動かず、視線は決闘場から離なせないでいることに国崎自身がまだ気づかないでいた。

そしてここから十代の反撃が始まる。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、戦士の生還を発動！！この効果は墓地にある戦士族モンスター1体を手札に加える魔法カード。バブルマンを手札に加え、攻撃表示で召喚！！」

E・HEROバブルマン 4 ATK800 DEF1200

再び十代の場にバブルマンが姿を現した。

「バブルマンの効果でカードを2枚ドロウ！」

2枚のカードを手札に加えた十代はさらに手札のカードを切る。

「さらに魔法カード、バブル・シャッフル！このカードの効果はバブルマンと相手の場のモンスター1体を守備表示に変更する！！」

十代のバブル・シャッフルの効果により、バブルマンとウォーター・ドラゴンが守備表示をとった。

この光景に三沢が表情を硬くするが、この効果はここで終わりではない。

「さらに守備表示のバブルマンを生け贄に捧げることで、E・HEROと名のついたモンスター1体を手札から特殊召喚することができる！召喚するのはE・HEROエッジマン！！」

十代の場のバブルマンが光と消え、その光が新たなヒーローとなる。

E・HEROエッジマン 7 ATK2600 DEF1800

十代の場に十代デッキ最高攻撃力を持つモンスター、エッジマンが攻撃表示で現れたのだった。

この十代のコンボに亮は感嘆の言葉を漏らした。

「ここで攻撃力2600のモンスターを融合なしで、しかも生け贄を使わずに召喚するか！」

翔もエッジマンの登場に息を漏らす、すぐにそのままでは駄目なことに気がついた。

「うわああ・・・でもウォーター・ドラゴンの守備力も2600でこのままじゃ倒せないよ!!！」

その翔の指摘に隼人はまだ十代の手が残っていることに気がついた。「いや、違う！」

その隼人の考えどおりのカードを十代は手札から選び取る。

「そして、これを使うぜ！フィールド魔法、スカイスクレイパー！！」

十代の発動したフィールド魔法が決闘場を夜の摩天楼に変える。

この光景に国崎はかつての自分を幻視する。

が、すぐに首を振るとその考えを振り払うのだった。

「E・HEROと名のつくモンスターが攻撃する時、相手のモンスターより攻撃力が低い場合、攻撃力を1000ポイントアップする！」

E・HEROエッジマン      7      ATK3600      DEF1800

スカイスクレイパーの効果で攻撃力を上げたエッジマンに十代は攻撃の号令をかける。

「いけ、エッジマン！ウォーター・ドラゴンに攻撃だ！！」  
エッジマンは摩天楼の中を駆け抜け、ウォーター・ドラゴンを真っ二つに引き裂いた。

「そしてエッジマンの特殊効果は守備表示モンスターの守備力をこのカードが上回った数値分だけダメージを与える貫通効果！」

三沢LP300

三沢はそのダメージに一瞬怯むが、負けじと伏せたカードを開く。  
「ぐっ！だがこの時、罠カードを発動！ラスト・マグネット！！このカードは自分のモンスターが破壊された時、発動できる！！」  
十代のエッジマンの上に巨大な磁石の錘が現れるとそれがエッジマンへとくっついた。

「破壊したモンスターの装備カードとなり、攻撃力を800ポイント下げる！」

E・HEROエッジマン      7      ATK1800      DEF1800

攻撃力が下がったエッジマンを見た十代は悔しげな顔を見ると、そのままターンエンドを宣言した。

「これで俺のターンは終了だ！」  
そして千影へとターンが回ってくる。

しかし、千影の手札は0枚。ここで何かしらのカードを引かなければ千影に勝機はない。

「私のターン、ドロー！」  
引いたカードを見た千影は笑みを浮かべると、そのカードを決闘盤へと差し込んだ。

「私は手札から魔法カード、天よりの宝札を発動！！全てのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする！！！」

千影の天よりの宝札の効果で3人は手札を補充し、確認する。

千影は手札の中にサキュバスがいることに気がつく。サキュバスが精霊化する。

《ピンチね、マイロード》

(全くだよ、シンクロを封じられるとここまで辛いとは)

《もう、泣き言いわないの。それに私の魅力はシンクロ召喚に使われるチューナーだけじゃないんだから》

(わかってるよ、でも今はその時じゃない。君は正真正銘、私の相棒であり切り札なんだから)

《ふふっ、嬉しいこと言ってくれちゃって。それなら、今日はめいっぱいご奉仕してあげる》

サキュバスはそう言っているとカードの中へと帰って行ったのだった。

そんな彼女に微笑を浮かべた千影はその時を創るために動き出す。

「さらに私は苗床トクン1体を生け贄にLOVサーヴァント・ディアボロス - を攻撃表示で召喚! !」

LOVサーヴァント・ディアボロス -	7	ATK2600	D
EF1400			

その手札の中から千影はディアボロスを選び取って召喚したのだ。た。

「このモンスターは相手の場にモンスターがいる時、1体の生け贄で召喚できる!」

そして千影はディアボロスに攻撃を命令するべく腕を掲げる。

「ディアボロス、三沢に攻撃だ! 悪いけどこれで決めさせてもらおうよ、三沢! !」

千影の命令の元、三沢の下にディアボロスが迫る。

しかし、三沢もライエローのトップ。ここでやらせるわけには行かない。

「それはどうかな! 俺は罫カード、メタル・リフレクト・スライムを発動! ! このカードは発動後、モンスターとして場に守備表示で



特殊召喚される!!」

メタル・リフレクト・スライム      10      ATK0      DEF3000

「くっ、私はこのままターンを終了する」

三沢の場に出現した守備力3000のモンスターに千影は悔しそうな顔になると攻撃を取りやめたのだった。

この有利不利が2転3転する状況に会場の全ての人間は感嘆の息を漏らしていた。

「3人とも全力を尽くして闘ってる……………」

「すごい攻防だ……………」

それは隼人と翔も例外ではなかったようだ。

互いのしぶとさに千影は笑みを浮かべると言葉を発した。

「簡単にはやらせてくれないね、三沢」

千影の言葉に三沢は笑顔で頷く。

「お前たちもな」

「へっ、これだから決闘は楽しいんだ」

十代も2人に笑いかけながら口を開いたのだった。

そんな3人の姿と十代の言葉に国崎は、また摩天楼の下に立った昔の自分を幻視した。

今から始まる決闘の興奮を予感して高ぶる気持ちを、手にしたデッキに寄せる信頼の想いを。

そこまで来て、やっと国崎は自分の決闘者としての原初にたどり着いたのだった。

十代、千影と笑みを交わした三沢は勝利のためにデッキからカードをドローする。

「俺のターン、ドロー！」

三沢はそのカードを見ると、口元に笑みを浮かべた。

（来た！この時を待ってたぞ！！）

そして、三沢はそのカードを発動する。

「手札から儀式魔法、リトマスの死儀式を発動！手札から場から

8以上になるように生け贄を捧げ

」

三沢の場にあるメタル・リフレクト・スライムが溶け出し、それが新たな姿を精製する。

「リトマスの死の剣士を特殊召喚する！！」

リトマスの死の剣士     8     ATK0     DEF0

そして三沢の場に2刀を持つ戦士が降り立ったのだった。

「このカードの効果は罠のカードの効果を受けず、戦闘でも破壊されない正しく死の剣士！そしてフィールドに罠カードが存在する時、このカードの攻撃力、守備力は3000となる！！」

十代に装備されたラスト・マグネットから力を受けたリトマスはその身にオーラを滾らせる。

リトマスの死の剣士     8     ATK3000     DEF3000

「千影、まずはお前からだ！そして十代、千影に止めを刺したら、今度はお前の番だ！！」

千影にリトマスの死の剣士が剣を向ける。

この千影の絶体絶命のピンチに翔が声を上げる。

「あああ！これを受けたら千影君のライフポイントが0になっちゃう！！」

国崎も緊張しつつ、千影を見ると声を漏らす。

「もう千影には打つ手はないよな……千影の場には伏せられ

たカードがあるけど、向こうのやつには罨カードは効かない……  
……もう諦めるよな」

国崎の頭ではこれからの決闘に期待する自分と挫折した自分が闘ぎあっていたのだ。

そしてこの千影のピンチにクロノスの機嫌は天元突破だった。

「きたノーネエ！ドロップアウトボーイズ共がドロップアウトする瞬間ーガッ！！」

会場の人間全員もシンと静まり、この決着を眼に焼き付くと決闘場を見つめる。

リトマスに剣を向けられた千影だったが、その顔は笑顔で彩られていた。

「楽しいね十代、三沢。こんなに心躍る決闘は久しぶりだ」

この千影の言葉に十代が頷く。

「ああ！こんなワクワクする決闘、楽しいったらないぜ！！」

「そうだな、お前たちのために俺の全力を傾けたデッキで、全力でお前たちに挑む。俺もここまで熱くなつたのは初めてだ」

三沢もそんな二人に笑みを浮かべながらそう応え、己の全力を込めるべく言葉を放つ。

「その礼に、俺の全力でお前たちを倒す！いけ、リトマスの死の剣士！！千影のディアボロスに攻撃だ！！」

そして三沢の号令が下され、リトマスが千影のディアボロスに迫る。

「ここだ！罨カード、狂宴への招待状発動！！」

それを見た千影が罨カードの発動を宣言するが、三沢の言葉が遮る。「無駄だ！リトマスの死の剣士に罨カードは効かない！！」

そう、リトマスの効果により罨カードは無効にできた三沢は考えていたのだ。

しかし、千影の打つ手は戦術を超えた戦略。

「そんなことは知っているさ！この罨が効果を及ぼすのはモンスターにはではない！！決闘の法則だ！！」

「なんだと!?!」

千影の大胆な発言に三沢に釣られて十代までも驚きの声を上げた。そんな2人に千影は、その罫カードの説明を始める。

「狂宴への招待状の発動には特殊な手順が必要だね。その発動条件は攻撃力3000以上のモンスターの攻撃により自分のライフポイントが0になる場合にのみ発動できる罫カード!」

そこまで言うと、千影は腕を振りかざし、狂宴への招待状を発動する。

「そして、その効果は戦術をひっくり返す戦略でもある!相手の戦闘を無効にして相手ターンを強制終了させ、自分ターンのメインフェイズへと移行する!!発動せよ、狂宴への招待状!」

千影の発動した狂宴への招待状により、リトマスの攻撃は空振りに終わる。

さらに三沢、十代のターンを飛ばして千影のターンへと変わる。

「これが、戦術を超えた戦略だよ三沢!そして、ようこそ狂気の宴へ。ここから先は私が支配する血闘の場だ」

千影はそう高らかに宣言したあと恭しく頭を下げる。

そして下げた頭を上げると、その瞳は紅蓮に輝いていたのだ。

瞳を紅蓮に輝かせた千影は手札にあったサキュバスを手に取る。

「私はLOVサーヴァント・サキュバスを攻撃表示で召喚!さあ、出番だよサキュバス!」

《待ってました》

LOVサーヴァント・サキュバス - 3 ATK1500 DE  
F100

嬉しそうな声と共にサキュバスが千影の場に降り立った。

千影の擁する淫魔の登場に翔は肩を落としていた。

「だめだあ、チューナーモンスターを出しても召喚すべきシンク

ロモンスターがないんじや意味ないよ………」  
しかし隼人が、そんな翔に反論する。

「いや、千影がここで出したんだ。何か考えがあるはずなんだな」

そう、隼人の言葉通り千影には狙いがあった。

それは

「手札から魔法カード、エキサイトキッスを発動！」

千影の出した新たなカードに三沢と十代は身構える。

「このカードは場にサキュバスがいる時、発動！相手の場のモンスター1体のコントロールをターン終了時まで得ることができる！！私が選択するのはリトマスの死の剣士！！」

この千影の宣言に三沢が驚きの声を上げる。

「なにっ！！！」

「サキュバス、エキサイトキッス！！！」

《キャハハハハハハ》

千影の命の下、サキュバスは妖しい笑い声を上げてリトマスに近づく、ハートを振りまき籠絡する。

リトマスを従えた千影は3体のモンスターへと号令を下すべく腕を掲げた。

「これでリトマスのコントロールは貰った！リトマスで十代のエッジマンを攻撃！」

「っ！！！」

驚く十代のエッジマンの元にリトマスが迫ると、両手の剣でエッジマンを切り裂いた。

「あぐううううっ！！！」

十代LP1100

十代は何とか踏ん張るが、その目の前にはディアボロスのトライデントが迫っていた。

「続けてディアボロスで十代に直接攻撃！」  
「うわああああっ！！！」

十代LPO

十代に打つ手はなく、その身にディアボロスの攻撃を受けライフポイントを一気にもっていかれたのだった。  
そして千影は残ったサキュバスに命じる。

「これでこの宴は終わりだ。サキュバスで三沢に直接攻撃！！」

「これが、千影の決闘か！ぬううううぐううっ！！！」

サキュバスの攻撃が三沢を貫き、三沢は膝をついたのだった。

三沢LPO

「計算では読みきれない理不尽なやつだな千影は。十代もそれに当てはまるが」

この結果に亮はそう言うとその場を去っていった。

「あいつらはそんなとんでもない力を秘めているのよ」

その場に残された明日香はそう呟くと下のほうから大きな声が聞こえてきたのに気がついた。

「いいぞお、千影！がんばったな十代！！あの三沢ってやつに2人も負けちまうかと思っただけど、勝ちやがった！！」

明日香の視線の先では国崎が大人気なく子供のようにはしゃいでいたのだった。

その姿に気がつくとも明日香は国崎の元へと駆ける。

「待ちなさい！貴方一体何者なの！？」

そして会場から出ようとする国崎に追いつくと国崎を呼び止めた。

そんな明日香に向かって国崎は語りだした。

「俺も思い出した。昔はこれでも決闘者で世界を渡り歩いたことがあったんだ。だけど世界の強豪たちの前に敗れて、夢を捨てて・・・今じゃジャーナリストとは名ばかり。金になれば汚いこともやっただよ」

この国崎の独白に明日香は驚く。

「だけど、あいつらの決闘を見て！あいつらがあれだけ熱くなれる決闘を！」

そこまで言つと、学園の秘密を吸い出した端末を取り出す。

「夢を忘れて逃げ出した俺に取り上げる権利はないって気づいた。

そして俺ももう1度やってみたくなった！今度こそ正義の追及つてやつをさ」

この独白を静かに聴いていた明日香は千影と十代の力がまた1人の人間を変えたのだと悟った。

「こいつを記事にするのは止めだ。俺なりに真実を調べてみる。何かあつたら知らせるよ」

そついうと国崎は明日香の前から立ち去つて言ったのだった。

熱気覚めやらぬこの会場で負のオーラを撒き散らす人物が1人。

「オー、そんなことありえなイーノネエ・・・」

この結果に尻すぼみになっていくおなじみのクロノスだった。

そんなクロノスを尻目に鮫島校長は立ち上がると勝者の名を高らかに宣言する。

「勝者！オシリスレッド、姫宮千影！！おめでとつ、君が我がデュエルアカデミアの代表だ」

この言葉に会場に下りてきた翔、隼人に立ち上がった十代が眸を元に戻した千影の周りに集まっていた。

「やったね！千影君！！」

「おめでとつなんだな！！」

翔と隼人が賞賛の言葉を贈る中、十代が少しブスツとした顔で千影の前に歩み出た。

「あれで俺のターンが飛ばされてなかったらワイルドマンとサイクロン・ブーメランを使って俺の勝ちだったんだけどな」

そこまで愚痴ると十代は表情を笑顔に変えて千影に言葉を贈る。

「でも、おめでとう千影!!」

「うん」

千影が3人の言葉に頷く中、三沢が4人の下へやってくると口を開いた。

「負けたぜ。十代のその口ぶりからすると、十代にもあの場を逆転できる何かがあったようだな。また1から計算のし直しだ」

三沢は笑みを浮かべると言葉を続ける。

「いつかお前たちを超える8番目のデッキを作れるようにな!」

この言葉に千影と十代は笑顔になると頷いた。

「うん!その時がくるのを楽しみにしてるね」

「俺もだぜ!また決闘しような!!ガツチャ!!」

十代のそのガツポーズに三沢は手を差し出して、その台詞の続きを言った。

「楽しい決闘だったぜ!」

この言葉に十代と千影は一瞬驚くが3人とも再び笑顔になる。

「ハイツ!あつはははははは」

そして3人でハイタッチのあと握手をしながら笑いあったのだった。



## 第15話【DA学園篇】（後書き）

学園代表決定戦である十代VS三沢の前後篇、今回は非常に難産でした。3人のバトルロイヤルの組み立てが難しいの何の。

アッチを立てればコッチが立たずがさらにあり、かなり無茶な演出もしましたがどうかご容赦ください。

今回の最強カード『狂宴への招待状』

カウンター罠

攻撃力3000以上のモンスターへの攻撃により自分のライフポイントが0になる場合のみ発動。

相手の戦闘を無効にして相手ターンを終了させ、自分ターンのメインフェイズへと移行する。

神々への離反に続いての戦略兵器級カードの登場です。

効果は相手のターンを問答無用ですつ飛ばし、自分のターンにするもの。

3人の三つ巴の戦いを終結させるために創らざるを得なかったカードです。

神々の離反以上に発動が難しく、実質的なアドバンテージが稼げないという物です。

## 第16話【DA学園篇】

千影、十代、三沢のバトルロイヤル決闘の結果に納得できなかったクロノスが差し向けた刺客、茂木もけ夫を決闘で降し今日、とうとうノース校との友好決闘の日がやってきた。

「とうとう、今日だな千影！」

校舎の屋上で十代は隣でデッキを眺める千影にそう言ってきた。

「うん。どんな相手と戦うのか楽しみだよ」

千影はそういつて微笑むと、1枚1枚のカードを手に取り、語り掛けるかのように撫でる。

そんな千影に十代は激励の言葉をかける。

「気合入れてノース校との決闘がんばってくれよな！」

「当然」

言葉を交わしながら笑いあう2人の下に翔が血相を変えて駆け込んできた。

「千影君にアニキー！こんなところにいたんすかー！もう皆集まってるよー！！」

そんな慌てている翔を見た2人は翔の方に振り向くと首をかしげる。

「集まってるって？」

「何が？」

完全に行事予定を忘れている2人に翔はため息をつきながら、その理由を述べる。

「出迎えつすよ、出迎え！ノース校代表団のお出迎えだよー！！」

この言葉を聞いた千影と十代は思い出したのか「しまった！」という顔になると、その場から駆け出した。

「いけない、忘れてた！」

「急げ、翔ー！！」

「ええええ！そんなあ、置いてかないですよ！千影君、アニキーー！！いきなり駆け出して行った2人に置いてけぼりにされた翔は二人を

追いかけていったのだった。

デュエルアカデミア本校の教員、生徒たちはノース校の代表団の歓迎のために港に集まっていた。

港に横付けされた潜水艦からノース校校長、市ノ瀬が出てくると鮫島校長は握手を交わした。

「おお、よくいらしたな。市ノ瀬校長」

「しばしうちの学童らがお世話をかけますがよろしくお願いしますよ」

「いや、私のほうこそ」

一応の社交辞令をすませると、市ノ瀬は鮫島校長にとあることを聞いた。

「ところでトメさんはお元気ですか？」

この市ノ瀬の質問に鮫島校長は頷いて答えた。

「もちろん。トメさんはこの対抗試合に欠かせない人ですから」

この2人のやり取りにシビレを切らした十代が千影を引っ張って2人の前に進み出る。

「校長先生、挨拶はその辺にしてさ早く千影の相手を紹介してよ！」

「ちよつと十代！挨拶中に失礼だよ」

十代のこの言葉に引っ張られて来た千影はたしなめる。

「そうだよ、十代君。行儀が悪いぞ」

鮫島校長も千影の言葉に頷き、そういうと十代は少しシユンとなる。

「でも俺、早く対戦相手を見たくってさ」

そしてバツが悪そうにそう言うと千影がやれやれと首を振り鮫島校長と市ノ瀬に頭を下げた。

「もう、それなら静かに待ってるの。すみません、失礼しました」

そんな2人に市ノ瀬は声をかける。

「そうか、君が噂の千影君に十代君か」

この言葉に十代は顔を輝かせて市ノ瀬のほうを向く。

「よろしくう！おっさんがノース校の校長先生！？」

相変わらずの発言に市ノ瀬がこける。

そんな十代に千影は頬を膨らます。

「十代つてば、もう!」

しかし、十代は対戦相手が気になって仕方ないようだ。

「で!千影の対戦相手は!？」

「それはだな」

十代の言葉に立ち上がった一之瀬が口を開こうとすると他の誰かの声が遮った。

「俺だ!」

その声の方向を向いてみると、そこには驚きの人物が立っていた。

「「万丈目ツ!？」」

この言葉に万丈目はお約束の言葉を返す。

「万丈目さんだ」

万丈目が代表ということに千影はかなり驚いた。

「じゃあ、私の相手って万丈目、君か」

しかし、万丈目のこだわるところは名前の敬称のほうだった。

「万丈目さんだ!」

「「「サンダー!」」」

前キング、江戸川を筆頭にした四天王が凄みを利かせる。

「貴様!さつきから聞いてればサンダーさんの事を呼び捨てにしく

さつて!!」

「いっちょよ、しめてやろうか!!」

血気逸る彼らに万丈目は声をかける。

「放っておけ」

そう言うとき万丈目は千影に視線を向ける。

(千影、いつかの雪辱、今日こそ晴らす!)

千影もその万丈目に視線に気づくと、その眼を黙って見つめ返す。

(君に預けた決闘、とうとう決着の時だね)

2人の間に静かな火花が散っていた。

そんな彼らの元にヘリコプターの爆音と強風が襲い掛かる。

「なんだ!？」

十代が爆音と強風の元凶たるヘリコプターを見上げる。そのヘリコプターに描かれた万のマークを見た三沢が驚きの声を上げた。

「あつ!あのマークは万丈目グループの!！」

そう、そのヘリコプターは万丈目グループのものだった。

そしてそれに乗っているのは

「そつだ!！」

「久しぶりだな、準!元気でやっているかあ!？」

万丈目の兄、万丈目長作と万丈目正司だった。

「長作兄さん、正司兄さん!何しに来たんだ!？」

いきなりの2人の兄の登場に万丈目は2人にそう問いかけた。

その問いに正司は高らかに答える。

「もちろん、お前の勝利を祝福するためにさ!！」

「あまり心配をかけるなよ、準!」

長作がそついうが、まるで万丈目を心配している風には見えなかった。

他のヘリコプターが降りるや否や、カメラや集音マイクを抱えたテレビ局の人間がどやどやと現れ、カメラを回し始めた。なかにはどうやって空輸したのか中継車や撮影用クレーン車まであった。

この招かれざる人物たちの登場に市ノ瀬はテレビ局のディレクターに声をかける。

「何の騒ぎですかな？」

「ありや、聞いてないんすか?今年は大々的に対抗試合を全国でテレビ中継するんすよあ!！」

『全国放送おおおおおつ!!!』

この言葉に十代や千影はおるか本校、ノース校の教員、生徒たちも驚きの声を上げたのだった。

まほろば村にある姫宮邸で2人の少女がテレビに映る千影を見てい

た。

1人はハニーブロンドの長髪に赤い眸のにこやかな、お陽様のような少女。

「あ、見てみて歌音ちゃん。千影ちゃんが映ってるよ」

もう1人は黒い長髪をカチューシャで留めた朱い眸の凜々しい、お月様のような少女。

「本当、お兄様の顔をこうしてみるのは冬休みぶりね」

千影の従妹の比巫子と妹である歌音だった。

「千影ちゃん、大丈夫かな？」

比巫子が心配そうな顔になるが、そんな比巫子の頭を撫でながら歌音が答えた。

「お兄様ですもの、心配しなくてもきつと勝つわ」

全世界の鉄道と鉄道流通を握る旋風寺コンツェルン本社の一室に1人の少年が駆け込んできた。

「舞人！舞人！テレビつけて！！」

書類の整理をしていた旋風寺コンツェルンの若き総帥、旋風寺舞人はいきなり乱入してきた親友、浜田満彦に疑問の視線を向けた。

「どうしたんだ、浜田君。そんなに慌てて？」

息を切らせた満彦が息を継ぐと、慌ててここに駆け込んできた理由を話した。

「千影がテレビに映ってるんだよ！なんでも万丈目グループ主催で千影の通ってる学校と姉妹校の決闘の放送をやるらしいんだ！！本校代表は千影だってさ！！」

これを聞いた舞人の行動は速かった。

「何っ！千影が！？いずみさん！！」

「はい。千影さんの決闘が終わるまでの時間の調整ですね」

すぐに専属秘書の松原いずみを呼ぶとスケジュールの調整してもらう。

「お願いしますー！」



ちなみにテレビに映る千影の姿を見た月詠真那が「はあ・・・はあ・・・」と何やら熱い眼差しで熱い吐息を漏らしていたのは蛇足である。

代表選手控え室に入った万丈目は兄2人に今回の件を問いただしていた。

「どういうことなんだ、兄さんたち？」

この万丈目の質問に長作はシレッツとしながら答えた。

「決まってるじゃないか。このテレビ中継は俺たち兄弟の約束を現実に移す1プランだ」

政界、財界、カードゲーム界を兄弟それぞれでトップを取り万丈目グループが大財閥へと飛躍する  
それが約束だった。

「そこで今日はお前をプロモートし、カードゲーム界のスターにするのが我らの狙い」

この長作の言葉に万丈目は何かを言おうとするが、その前に正司の言葉によって遮られた。

「準、クロノス教諭とかに聞いたがお前3ヶ月前にここを退学したそうじゃないか」

「そ、それは・・・」

この言葉に万丈目は視線を下に落とす。

そんな万丈目に兄たちは辛辣な言葉を投げかける。

「いいか、準！お前は元々、俺たち兄弟の落ちこぼれ！！」

「我が万丈目グループ主催でテレビ中継するからには、絶対に負けることは許さん！！」

そこまでいうと正司は自分の横に置いたアタツシケースを掲げた。

「ここには俺と兄貴が金にものを言わせたカードが山と入っている！これを使い最強のデッキを組み立てるのだ！！」

そしてそのアタツシケースを万丈目の前に置くと、2人は咎めるかのごとく万丈目へと言葉をかける。

「いいな、準」



「決して万丈目グループの顔に泥を塗るようなことはするなよ準」  
「準!!!」  
そんな2人の兄が発する重圧に万丈目は怯えた顔のまま言葉を受け入れるしかなかった。

決闘の前に用を足そうと思った千影がご不浄へと向かっていた。

「ふう、しかしテレビ中継、しかも全国でなんて万丈目グループの人はすごいことするなあ。ひよつとして歌音や比巫子も見てるのかな？なら、お兄ちゃんとして恥ずかしいところを見られないようにがんばらないと」

そう言うと、ご不浄の前に立ち止まり両の拳をギュツと握ったところでご不浄の中から万丈目の声が聞こえてきた。

そこでは万丈目が苦しげな顔で洗面所の鏡を叩いていたのだ。

「駄目だ、駄目だ……！くそお……勝て、勝て……  
……俺は兄弟の落ちこぼれであるはずがない！勝って勝って勝ち続けるんだ！！勝つんだ！！明日も！明後日も！その次も！その次の次も！勝って勝って勝ち抜くんだ！！」

そこまで言うと、万丈目はうな垂れ膝を突き蹲る。

「誰も俺の背負っているモノの重さなんてわかりやしない！勝てと言っただけだ。ただ勝てと！！……つぐ……ああ……  
ああ……」

そして嗚咽を漏らし始める万丈目。

彼の心情を慮ったのか千影は万丈目に声をかけることなくその場を去っていったのだった。

そして対抗決闘の開始が間近に迫った会場のボルテージは最高潮に達していた。

「さあ！皆さん、いよいよ始まります！世紀の学園対抗決闘大会！拍手も応援もよろしく!!!」

拡声器を手にしたディレクターの言葉にノース校側からはち切れん

ばかりの声援が巻き起こった。

『万丈目サンダー！サンダー！サンダー！』

サンダーコールが響く中、市ノ瀬は鮫島校長のほうを向くと声をかける。

「今年も勝った方が例の褒美、よろしいかな？」

この市ノ瀬の問いに鮫島校長は頷く。

「もちろん。この日が楽しみで1年を過ごしているのですからな。

はっははははははは！」

「はっはははははははははははははは！」

鮫島校長の笑い声に伴い市ノ瀬も笑い始めたのだった。

「がんばっていけよ、千影！」

「千影君は前に万丈目君に勝ちかけたんだから楽勝つすよ」

十代と翔の激励に千影は浮かない顔で口を開く。

「そうかな？」

この千影らしくない言葉に十代と翔は驚きの声を上げる。

「えっ？」

隼人も心配そうに千影に声をかける。

「弱気は禁物なんだな」

隼人の言葉に千影は両手を横に振りながら言う。

「別に弱気なわけじゃないよ。ただ、今の万丈目には以前なかった強さを感じる」

3人は、その千影が向ける視線の先にいる万丈目を見ると十代が頷いた。

「確かにな。一人で別の学校の頭とって、ここへ殴りこんで来たんだからな」

「うん、今の彼は魅力的だよ」

この十代の言葉に千影は笑みを浮かべ、そう言つと決闘場へと向かっていったのだった。

そして鮫島校長、市ノ瀬の2人が立ち上がると開会の宣言を始める。

「ではこれより、デュエルアカデミア本校」

「ノース校」

「対抗決闘大会の開催を宣言する！！」

鮫島校長は決闘場の上に立つクロノスに視線を向けると言葉を発する。

「クロノス教諭！決闘者の紹介を！！」

その鮫島校長の言葉を受けたクロノスは緊張でカチンコチンに固まっていた。

「信じられないノーネ！ワタシの姿ーガ、今全国に流れているなんーテー！！」

どうやらクロノスはテレビに映るのは初めての経験のようだ。

「そ、それではこれヨーリ、デュエルアカデミア本校・ノース校の対抗決闘始まるノーネエエ！！」

気を取り直したクロノスは選手の紹介を始める。

「まず紹介するは、ドロップアウトボウ・・・じゃなかった姫宮千影！」

千影の紹介に本校側から大きな歓声上がる。

「対するはノース校」

「いらん！俺の名は俺が告げる」

そしてノース校の代表を告げようとしたクロノスを万丈目は遮った。万丈目のいきなりの言葉に啞然となるクロノスに万丈目は口を開く。

「黙って引つ込めつていったんだ、おカッパ野郎！」

万丈目の罵倒にクロノスは地団駄を踏む。

「お、おカッパじゃないワイヨオ！これは有名なカリスマ美容院ーデ・・・アラツ？」

地団駄によって足に絡みついたマイクのケーブルを引っ張ることによって自分自身で足を縛っていたのだった。

「いつの間にヤーラ、雁字搦メーナ・・・ナ、ナ、ナ・・・ドロップアウトオ！」

そしてケーブルを解こうともがいた所で決闘場の下に落ちたのだ  
た。

「大丈夫ですかクロノス教諭？」

頭にヒヨコをピヨらせるクロノスに千影がそう言葉をかけるが、会  
場に万丈目の声が木霊する。

「お前たち、この俺を覚えているかあ！！この学園で俺が消えて清  
々したと思っているやつ！俺の退学を自業自得だとほざいたやつ！  
万丈目はそう言いつつ、会場を見渡すと高らかに宣言する。

「知らぬならいつて聞かせるぜ！その耳かっぽじってよく聞くがい  
い！！地獄の底から不死鳥の如く復活してきた、俺の名は！！一！  
十！

この万丈目の掛け声にノース校の全生徒が続く。

『百！千！』

「万丈目さんだ！！」

そして名乗りを上げた万丈目にノース校の生徒たちは大歓声を上げ  
る。

『オオオオオオオオ！サンダー！万丈目サンダアアア！！』

この光景を見た翔は驚きの声を上げる。

「うわあ、すごい人気だ」

翔と同様の感想を本校の生徒たちが抱くなか、万丈目はノース校の  
生徒たちに言葉を続ける。

「俺は！？」

『サンダー！！』

「万丈目

『サンダアアア！！』

ここまで叫んだ万丈目が千影のほうを振り向くと、決闘盤を掲げる。

「いくぞ、千影！この決闘負けるわけにはいかないからな！！」

千影も決闘盤を起動させると万丈目に言葉をかける。

「かつて君に預けた決闘、決着の時だね万丈目！」

「万丈目さんだ！」

万丈目はもはやお約束となった言葉を返しながら決闘盤を起動させた。

「決闘ッ!!!」

万丈目LP4000

千影LP4000

まず先手を取ったのは万丈目だった。

「俺の先行、ドロー!」

その引いたカードを見た万丈目はそのカードをそのまま召喚する。

「俺は仮面竜を守備表示で召喚!出でよ、仮面竜!!!」

仮面竜 3 ATK1400 DEF1100

「ターンエンド!」

万丈目は仮面竜1体を召喚してそのままターンエンドを宣言したのだった。

「私のターン、ドロー!」

千影は引いたカードを手札に加えると、手札の中から1枚のカードを選び取る。

「私はLOVサーヴァント-酒呑童子-を攻撃表示で召喚!」

LOVサーヴァント-酒呑童子- 4 ATK1700 DEF1000

千影の場に大きな瓢箪を持った使い魔が姿を現した。

その酒呑童子に千影は攻撃の命を下す。

「酒呑童子で仮面竜に攻撃!」

酒呑童子が仮面竜に迫ると、渾身の一撃を持って仮面竜を粉碎した。しかし万丈目の口元には笑みが浮かんでいた。

「ふつ、狙い通りだぜ。仮面竜の効果発動！このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚することができる！！」  
そして万丈目はデッキから1枚のカードを選び出す。

「俺は、アームド・ドラゴンLV3を特殊召喚！出でよ、LV3！  
！」

アームド・ドラゴンLV3      3      ATK1200      DEF900

万丈目の場に1体のドラゴンが新たに現れたのだった。

万丈目のこの戦術にノース校側の生徒が歓声に沸く中、翔は見たことないモンスターに驚きの声を上げていた。

「れ、LVつて!？」

翔の疑問に明日香が答えてくれた。

「条件を満たすと、どんどんレベルアップしていくモンスター」

だが、三沢には1つ気にかかることがあった。

「しかし、伝説とも言われている非常にレアなカード。やつは一体どこで……?」

「伝説のレアカードかあ！くうううっ！！千影のやつ、そんなモンスターと闘えるなんて羨ましすぎるぜ！！」

皆がそんなカードの登場に表情を硬くする中、十代だけが相変わらずワクワクとしていたのだった。

そしてこれに驚いていたのは鮫島校長も同じだった

「ぬお!?あ、あれはノース校に伝わる秘宝のカード……市ノ瀬君、君は!!」

隣で笑う市ノ瀬に鮫島校長は、彼が万丈目のそのカードを託したことに気がついた。

「言ったはずですよ。私は本気なのだよね。例の褒美は必ずいただきますよ!!」

「そうは行くか！今年も褒美は私のもの！！」  
市ノ瀬の言葉に鮫島校長はそう言つと立ち上がり、千影に向かって  
檄を飛ばす。

「千影君、負けるなあ！負けてはならんぞおおっ！！」

この鮫島の言葉を聞いた千影は頷きながら目の前にいるドラゴンを見  
ると口を開く。

「当たり前です。それにこんな面白そうなモンスターがどうなるの  
か、見届けないと損というもの」

そんな千影に万丈目は笑みをもって答えた。

「強がつているのも今のうちだ」

千影は手札から1枚のカードを決闘盤へ挿し込むとターンの終了を  
宣言する。

「私はカードを1枚伏せてターンエンド」

この千影のターンエンド宣言を聞いた万丈目は笑みを浮かべる。

「そして恐怖の俺のターンが始まる！ドロー！！」

カードをドローした万丈目は場に出ているアームド・ドラゴンLV  
3を手取る。

「ふっふふ、俺のスタンバイフェイズが訪れたことでアームド・ド  
ラゴンLV3の効果が発動！このカードを墓地に送ることでアーム  
ド・ドラゴンLV5を手札から特殊召喚できる！！」

その万丈目の宣言に千影は驚きの声を上げる。

「それがそのカードのレベルアップの条件か！！」

「そうだあ！アームド・ドラゴンLV3を生け贄に、出でよアーム  
ド・ドラゴンLV5！！」

アームド・ドラゴンLV5      5      ATK2400      DEF1700

その手に取ったアームド・ドラゴンLV3を墓地に送ると万丈目は  
デッキからアームド・ドラゴンLV5！を攻撃表示で特殊召喚した

のだった。

アームド・ドラゴンLV5の威容にノース校側の生徒が沸く中、三沢が決闘場に立つ千影に声をかける。

「気をつける、千影！　が上がったことでアームド・ドラゴンの特殊効果も飛躍的に上がったはずだ！！」

この三沢の言葉に翔が不安そうな顔になる。

「千影君……」

対して自信満々なのが鮫島校長の隣に座る市ノ瀬だった。

三沢の警告に千影は頷く。

「ああ、わかってる。どんな特殊効果を持っていようとも、対応してみせる！」

この千影の言葉に万丈目は絶対の自信を持ってアームド・ドラゴンLV5の特殊効果を発動する。

「なら特と味わえ！アームド・ドラゴンLV5の特殊効果！！それは、手札のモンスターを墓地に送ることで、その攻撃力以下のモンスター1体を破壊する！！」

「なにっ!?!」

アームド・ドラゴンLV5の効果に驚く千影を尻目に万丈目は手札の1枚を墓地へと送る。

「俺は手札のX-ヘッド・キャノンを墓地に送り、攻撃力1800以下の酒呑童子を破壊！いけえ、アームド・ドラゴンLV5！！デストロイド・パイル！！」

アームド・ドラゴンLV5から発射されたスパイクの絨毯爆撃が振り注ぎ、酒呑童子を貫く。

「くうっ！」

舞い上がる爆風に腕で顔をかばう千影に万丈目は攻撃の手を緩めることはなかった。

「まだだあ！貴様への攻撃が残っている！！アームド・ドラゴン」



V5、やつに直接攻撃!!」

万丈目の命令の元、アームド・ドラゴンLV5!の豪腕が千影を襲う。

「ああああっ!!」

千影LP1600

「どうした、千影。それで終わりか!」

アームド・ドラゴンLV5の攻撃により大ダメージを受けた千影に万丈目は満足そうな顔で言葉をかけたのだった。

この万丈目の攻撃に万丈目以上に上機嫌なのが2人の兄だった。

「やるじゃないか、準のやつ」

「だが、やりすぎてもらっても困る」

長作の後に発せられた正司のこの言葉に長作が怪訝な顔になる。そんな兄に正司はにやけた顔でその訳を話す。

「早々に終わられては放送時間が空いてしまうからな」

この弟の言葉に長作は笑い出した。

「そうか、そうだな!はははははははははは!」

「はははははははははははは!」

正司も兄に釣られて笑い出したのだった。

しかし、千影もここで終わる者ではない。

「冗談!決闘はここからだよ!!!リバーズ罨オープン、ゲート発動!!!」

千影は自分の場に伏せられたカードを即座に発動する。

「ッ!?!」

「このカードの効果はこのターン、相手から与えられたダメージの合計値分以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札から特殊召喚できる!私が受けたダメージは2400!!!」

そこまで言つと千影は手札から1枚のカードを選び出す。

「よつて手札から攻撃力2000のL o Vサーヴァント・オーガを攻撃表示で特殊召喚!!!」

L o Vサーヴァント・オーガ -           6    A T K 2 0 0 0   D E F 1  
3 0 0

千影の場に新たなL o Vサーヴァントが姿を現したのだった。

しかし、そのモンスターの攻撃力を見た万丈目は笑みを浮かべる。

「何を出したかと思えば、それじゃあ俺のアームド・ドラゴンL V 5は倒せないぜ!」

だが、そんなことは千影には百も承知だった。

「そうでもないさ! L o Vサーヴァント・オーガ - の特殊効果は墓地にいるモンスターの数×100ポイントアップする!」

この千影の言葉に万丈目は自分の墓地へと眼を向ける。

「俺の墓地には3体、お前の墓地1体ということは……. . . . .  
っ!!!」

「そう! オーガの攻撃力は2400!」

千影の宣言と共にオーガの攻撃力が上昇していく。

L o Vサーヴァント・オーガ -           6    A T K 2 4 0 0   D E F 1  
3 0 0

その攻撃力を見た万丈目は1つ舌打ちをすると手札のカードへと手を伸ばす。

「くっ、アームド・ドラゴンL V 5に並んだか! 俺はカードを2枚セットしてターンエンドだ!」

万丈目のターンエンド宣言と共に千影のターンがやってくる。

「私のターン、ドロー!」

ドローしたカードを見た千影は1つ頷くと高らかに宣言する。

「私は手札のモンスターの特殊効果発動！Lovサーヴァント・雷獣 - を生け贄なしで召喚する！！」

千影の場に雷が走り、巨大な4足歩行の使い魔が姿を現した。

Lovサーヴァント - 雷獣 -                   6   ATK2400   DEF1500

このモンスターの召喚に驚いたのは万丈目だった。

「生け贄なしで上級モンスターを召喚だと！？」

「Lovサーヴァント - 雷獣 - はそのターンのエンドフェイズに墓地に送られることを条件に、生け贄なしで召喚できるのさ！」

そして千影は腕を掲げ、己の使い魔に号令を下す。

「雷獣でアームド・ドラゴンLV5に攻撃！！」

万丈目もアームド・ドラゴンLV5に命令する。

「迎え撃てアームド・ドラゴンLV5！！」

雷獣が電撃を伴った体当たりを、アームド・ドラゴンLV5が迎え撃つためにその豪腕を振りかぶった。

そして2体のモンスターがぶつかると共に相打ちとなり爆散したのだった。

「この時、2体のモンスターが墓地に行ったことでオーガの攻撃力が2000アップする！！」

Lovサーヴァント - オーガ -                   6   ATK2600   DEF1300

さらに攻撃力を上げたオーガに千影は万丈目への直接攻撃を命じた。

「オーガで万丈目に直接攻撃！！」

モンスターのいなくなつた万丈目にオーガが迫ると、その手に持つ刃で万丈目を切り裂いた。

「う、うわあああつ！！」

万丈目LP1400

万丈目は数歩あらずさるが何とか踏みとどまると伏せられたカードを開いた。

「やるなあ、千影！だが畏発動、ホーリージャベリン！さらにリビングデッドの呼び声！！」

万丈目の発動させた2枚のリバースカードに千影は驚きの声を上げた。

「そのカードは！！」

「そお！ホーリージャベリンは相手モンスター1体の攻撃力分のダメージを回復し、リビングデッドの呼び声は自分の墓地にあるモンスター1体を選択して場に特殊召喚するカード。俺は2600のライフを回復し、アームド・ドラゴンLV5を呼び出す！甦れ、アームド・ドラゴンLV5！！」

万丈目LP4000

アームド・ドラゴンLV5      5      ATK2400      DEF1700

万丈目はライフポイントを元に戻すと同時に、墓地にあるアームド・ドラゴンLV5を場に特殊召喚したのだった。

「そして、墓地のカードが減ったことでお前のオーガの攻撃力も下がるぜ！」

万丈目の指摘どおりオーガの攻撃力が僅か100だが下がった。

LoVサーヴァント - オーガ -      6      ATK2500      DEF1300

万丈目のアームド・ドラゴンLV5を見た千影は神算を廻らせる。  
(それでもアームド・ドラゴンLV5の攻撃力を超えてはいるが、

あの特殊効果はやつかいだ……そうなるよ、ここは

そこまで考え結論を出すと、千影は手札の1枚へと手をかける。

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

再び出てきたアームド・ドラゴンLV5の姿に翔は弱気な声を出していた。

「また墓地からアームド・ドラゴンが……」  
しかし、隼人は翔とは全く違った意見を述べる。

「でも、大丈夫だと思っただな」

隼人の言葉に十代も頷く。

「俺もそう思うぜ」

2人のこの言葉に翔がどういふことかわからないでいると三沢が説明を始めた。

「千影は記憶力が抜群で発想力も群を抜いている。そんな千影は1度見た戦法に2度目からは完璧に対処してくるんだ」

三沢の言葉に亮も頷き、翔へと語る。

「翔、お前も千影とタッグを組んだことがあるならわかるはずだ。

姫宮千影がどれほどの決闘者だったのかを」

「そっか、そうだったよね。がんばれえ！千影君！！」

兄の言葉に翔はあの時のことを思い返すと、弱気だった表情が明るくなったのだった。

そんな彼らの言葉に万丈目は自身のアームド・ドラゴンに絶対の自信を持っていた。

「ふん、お前がどんなに凄かろうが俺のアームド・ドラゴンLV5が全てをなぎ払っぜ！俺のターン、ドロー！！」

引いたカード、闇より出でし絶望を見た万丈目が笑みを漏らす。

「アームド・ドラゴンLV5の効果発動！手札の闇より出でし絶望を墓地へと捨てる！このカードの攻撃力は2800！！よって攻撃

力2500のオーガは破壊!!」

「ッ!!」

万丈目の宣言に千影は身構えた。

「いけ、アームド・ドラゴンLV5!デストロイド・パイル!!」

アームド・ドラゴンLV5の体から放たれた幾多のスパイクがオーガへと殺到する。

「罨カード、サーヴァントチェンジ発動!このカードの効果は場にあるLOVサーヴァント1体を手札に戻す!!」

スパイクの雨霰が直撃する寸前に千影の発動した罨カードによりオーガは千影の手札へと逃れ、何もない空間にスパイクが降り注ぐ。

「さらに手札に戻したモンスターの未満のLOVサーヴァントと名のついたカード1枚を手札から特殊召喚できる!私は手札より

2のLOVサーヴァント・エルダーワイバーンを守備表示で特殊召喚する!!」

LOVサーヴァント・エルダーワイバーン - 2 ATK100

0 DEF600

オーガの代わりにエルダーワイバーンを壁として特殊召喚したのだ。  
った。

だが、この千影の戦術も万丈目のアームド・ドラゴンLV5の前には無駄な抵抗でしかなかった。

「しかし、アームド・ドラゴンの攻撃はまだ残っている!アームド・ドラゴンLV5、エルダーワイバーンを攻撃!アームド・バスター!!」

アームド・ドラゴンLV5の豪腕の前にエルダーワイバーンは粉々に砕け散ったのだった。

「くぬううっ!」

爆風から顔を庇う千影に万丈目は笑みをこぼす。

「ふっふふふ、千影!さっきの効果を罨カードで回避したのは失敗

だったな！これで俺のアームド・ドラゴンはさらなるレベルアップを遂げることが出来る！！見る、アームド・ドラゴンのさらなる進化を！！」

万丈目の言葉と共にアームド・ドラゴンLV5が光に包まれる。

「アームド・ドラゴンLV7の姿を！！」

そして万丈目のこの宣言と共に光が弾ける。

アームド・ドラゴンLV7      7    ATK2800    DEF1000

光が弾けたあとには巨大なドラゴンがその威容を知らしめていたのだった。

「これがアームド・ドラゴンのさらなる姿か……！！」

アームド・ドラゴンLV7の放つ咆哮に千影は驚きの声を上げたのだった。

万丈目のエースモンスターの登場に長作は笑みを浮かべるが正司はあることに気がついた。

「あんなモンスター、俺がやったカードの中になかったはずぞ！」

「なにっ!？」

弟のこの言葉を聞いた長作は笑みを消して驚きの声をあげたのだった。

対してノース校が誇るレアカードを託した本人は余裕の表情で笑みを浮かべていた。

「ふふふふ、ふん」

市ノ瀬のこの余裕の表情に、隣に座る鮫島は悔しそうな顔になると立ち上がる。

「がんばれ、千影君！負けるんじゃないぞお！！」

『サンダー！サンダー！万丈目サンダーアアアアー！！』

しかし、その激励もノース校の生徒たちのサンダーコールによってかき消されたのだった。

バックに聞こえるサンダーコールを背に万丈目は高らかに宣言した。  
「見たか！これが伝説のレベルアップモンスター、アームド・ドラゴンLV7だ！！」  
しかし

「万丈目、君は変わったね」

千影は強大なアームド・ドラゴンLV7を前にして微笑んでいたのだ。

「なっ！？何を暢気なことを！！」

いきなりの千影の言葉に万丈目は面食らってしまった。

「君はここに居る間はただ力を振りかざしてるだけだった。でも、今の君は力の使い方を覚え、こんな強いモンスターまでも従える資格を持った。今の君はすごく魅力的だよ」

千影のこの言葉に万丈目は歯噛みした。

「どこまでも鼻につくやつ！俺はお前のようにのほほんと日々を過ごして行く訳にはいかないんだ！」

万丈目は背中に突き刺さる2人の兄の視線を感じながら言葉を発する。

「見る！！この張り詰めた視線を！！万丈目家の夢と野望を全部俺の肩に乗せた、この重い視線を！！俺は兄さんたちの期待に応えるため、そして俺の価値を証明するため！どんなことがあっても・・・  
・・・姫宮千影！お前を倒さなければならぬ！！」

万丈目の言葉に笑みを消した千影は万丈目に対し宣言する。

「私だつて君には負けられない！そんな盲執に囚われた君にはな、  
万丈目！！」

「万丈目さんだ！ターンエンド！！」

そして千影にターンが回ってくる。

「私のターン、ドロー！私は魔法カード、手札抹殺を発動！！この効果により互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数分だけカードをドローする！そして、この時手札から捨てたLOVサーヴ



アント・カトブレパス - の効果発動!!このカードが手札から墓地に置かれた時、このモンスターを特殊召喚できる!私は守備表示で特殊召喚!!」

千影は墓地に置かれたカトブレパスを手にとるとそれを場へと特殊召喚した。

LOVサーヴァント - カトブレパス -                   4   ATK1500   D  
EF300

そして手札を見た千影は1つ頷くと、そのカードに手をかける。

「さらに手札からLOVサーヴァント - ハーピー - を守備表示で召喚!」

LOVサーヴァント - ハーピー -                   4   ATK900   DEF5  
00

千影の場に可愛らしい鳥の少女が現れた。

「リバーズカードを1枚伏せてターンエンドだ!」

千影が壁と並べた2体のモンスターに万丈目は言い放つ。

「往生際が悪い!今の俺にそんな雑魚が通用するか!!俺のターン、ドロー!!」

ドローしたカードを手札に加えた万丈目がアームド・ドラゴンLV7の効果を発動する。

「俺はアームド・ドラゴンLV7の効果発動!手札のモンスターを墓地に送ること、その攻撃力以下の相手モンスター、全てを破壊する!!」

「ッ!!」

その万丈目の宣言に千影は身構える。

「なんだとっ!?!」

「コストにしたモンスターの攻撃力以下を

「全部ウウツ!?」

「その効果もパワーアップしたということか!」

このアームド・ドラゴンLV7の全体除去効果に十代、明日香、クロノス、亮が驚きの声を上げたのだった。

万丈目は手札の1枚を高らかに掲げると宣言する。

「俺は手札からY・ドラゴン・ヘッドを墓地へ捨て、場にある攻撃力1500以下のお前のモンスター全てを破壊する!」

そしてY・ドラゴン・ヘッドを捨てて、アームド・ドラゴンLV7に命を下す。

「いけえ、アームド・ドラゴンLV7! ジェノサイド・カッター!」

アームド・ドラゴンLV7の腹に備え付けられた巨大な回転鋸が高速回転し、射出された。

射出された回転鋸は猛スピードで千影のカトブレパスとハーピーに迫る。

しかし、千影が何の対策もしていないはずがなかった。

「Lovサーヴァント・ハーピー」の特殊効果、発動! 相手モンスターがモンスター効果を使った時、場にある自分のモンスター1体を生け贄にすることで相手モンスターの効果を無効にし、このターンの相手モンスターの効果を封じる!」

この千影の言葉に万丈目の表情が驚きへと変わる。

「なにっ!?!」

「私は場にあるカトブレパスを生け贄に、アームド・ドラゴンLV7の効果を無効にする! ハーピー、リセットボイス!」

カトブレパスを生け贄として放たれたハーピーの声アームド・ドラゴンLV7の放った回転鋸をかき消した。

しかし、万丈目にはまだ幾分か余裕があった。

「だが、俺にはまだアームド・ドラゴンLV7の攻撃が残っている

「!!」

だが、それすらも千影は見越していた。

「それはどうかな?リバース畏発動、【バスター】モード!このカードの効果により、場にあるハーピーを生け贄にハーピーは新たな姿へと進化する!!」

「っ!?お前のモンスターも進化だとお!??」

万丈目が驚く中、千影はデッキから1枚のカードを抜き出し、掲げる。

「発動せよ、【バスター】モード!LOVサーヴァント - 【狡猾】ハーピー - を攻撃表示で特殊召喚!!」

LOVサーヴァント - 【狡猾】ハーピー -                   6   ATK1400  
DEF1000

【バスター】モードにより姿を変えたハーピーは可憐な表情から悪女の如き表情へと変わっていた。

だが、その攻撃力を見た万丈目が笑い声を上げる。

「はっはははははははは!進化したかと思えば攻撃力たったの1400か!?そんなモンスターでこのアームド・ドラゴンLV7を止められると思ったか!!」

「【バスター】モードにより召喚されるモンスターの真骨頂は攻撃力ではなく特殊効果にある!【狡猾】ハーピーの特殊効果は、このモンスターが表側表示でいる限り、相手プレイヤーは攻撃宣言が出来なくなる!!【狡猾】ハーピー、サイレスウイング!!」

【狡猾】ハーピーから発せられる風が音をかき乱し、万丈目の声がアームド・ドラゴンLV7に届かなくなる。

「くっ、小癩な!だが、まあいい。俺の優位には変わらないのだからな。次のターンでその猪口才な雑魚モンスターをアームド・ドラゴンLV7の効果で葬ってやるぜ!!ターンエンドだ!!」

そう高らかに告げる万丈目に千影は万感の想いを込めてデッキへと

手を伸ばす。

(私の手札は0。このままでは次の万丈目のターンを凌ぐことは不可能だ。なら、ここで逆転の1手を引くしか道はない!!)

「私のターン、ドロー!」

そして千影はデッキから引いたカードを見ると笑みを浮かべた。

(さすが、いいところに来てくれたねサキュバス)

そう、千影が引いたカードは千影のアイドルカードにして絶対の信頼を寄せる相棒、サキュバスだった。

《アイツに我が愛しのロードがやられちゃうなんて見たくないからね》

(言ってくれるね。でも、正直助かった。頼むよ、サキュバス!)

《おまかせ》

「私はLovサーヴァント・サキュバスを攻撃表示で召喚する!」

Lovサーヴァント・サキュバス - 3 ATK1500 DE  
F100

499

そこまでの会話を終えると、千影はサキュバスを召喚したのだった。

「そのモンスターは・・・っ!」

かつて、自分に土をつけた要因であるサキュバスの登場に万丈目は険しい顔になった。

しかし、その万丈目の険しい顔も長くは続かなかった。

なぜなら

《ねえ、ねえ兄貴い》

呼ばれてもいないのに万丈目の手札から、おジャマ・イエローが出てきたからだった。

《あいつならオイラの兄弟のことを知ってるかもしれないよ。なあ、オイラを決闘に出して聞いておくれよお》

おジャマ・イエローがサキュバスを指差しつつ、万丈目へと懇願する。

「うるさい！この大事な決闘にお前の出番などあるか！！」  
だが、取り付く島もなく無碍にされたのだった。

《そんなこと言わずに！兄貴いゝゝ！！》

だが、それでも尚おジャマ・イエローは万丈目にすがりつくのだった。

そんなおジャマ・イエローの姿にサキュバスは千影へと口を開いた。

《ご主人様、あれって……》

千影もサキュバスの言葉に頷くと万丈目へと言葉をかける。

「万丈目も精霊の加護を受けてるみたいだね。ねえ！万丈目、それ  
つて」

しかし、千影のその指摘に万丈目はおジャマ・イエローを捕まえる  
べくアッチヘコッチへと手を伸ばす。

「なっ、まずい！！早く引つ込め！お前なんか使はずないじゃな  
いか！！でええいつ、引つ込まんかつ！！」

そしておジャマ・イエローは万丈目につかまり、哀れカードの中へ  
と無理矢理戻されたのだった。

そんな万丈目とおジャマ・イエローのやり取りに千影は笑みを浮か  
べた。

「そうか。万丈目、それが君を変えたきっかけなんだね」

この千影の言葉に万丈目は大声を上げる。

「何を戯言を！俺がこんな雑魚モンスターに影響されただど！？あ  
りえん！！」

「そう思いたければ、思えばいいさ。でもこの世の理は、君にその  
カードの加護を与えたことには変わりはない。やっぱり君は真の決  
闘者の資格を手に入れたんだよ」

千影の言葉に万丈目は齒噛みすると千影を睨んだ。

「くっ、いつまでもつまらん事を……！！」

そう応える万丈目に千影は高らかに宣言する。

「だから君には私の全力を持って迎えよう！ 6のLOVサーヴァ  
ント - 【狡猾】ハーピー - に 3、LOVサーヴァント - サキュバ

ス・をチューニング!!」

千影の場の2体のモンスターが星となり決闘場を妖しく舞う。

「妖しき星が、集いてここに頭尾連環の蛇を解き放つ。魔の蛇よ顕現せよ!シンクロ召喚!汝、終末の始まりLOVサーヴァント・ヨルムンガンド-!!」

LOVサーヴァント・ヨルムンガンド - 9 ATK2800  
DEF2000

9つの星から連なった環が解き放たれると、そこには巨大な蛇が鎌首をもたげていたのだった。

「そしてこのターン、サキュバスの効果により攻撃力が1000ポイントアップ!」

千影の宣言と共にヨルムンガンドはその身に力を宿していく。

LOVサーヴァント・ヨルムンガンド - 9 ATK3800  
DEF2000

この圧倒的な攻撃力に万丈目は慄いた。

「こ、攻撃力3800だと!?!」

驚愕に染まる万丈目に千影は腕を掲げ、ヨルムンガンドに号令を下す。

「LOVサーヴァント・ヨルムンガンド・でアームド・ドラゴンLV7を攻撃!!」

千影の号令の元に放たれた一撃が万丈目のアームド・ドラゴンLV7を飲み込み爆散させる。

「ぐわあああああつ!がつ、だああ!!」

万丈目LP3000

万丈目は勢いよく後ろへ吹き飛ばされると倒れ伏してしまった。

「私はこれでターンを終了する」

LOVサーヴァント - ヨルムンガンド -           9   ATK2800  
DEF2000

千影のターンエンド宣言と共にヨルムンガンドの攻撃力は元に戻ったのだった。

ノース校が秘宝であるアームド・ドラゴンLv7がやられるのを見た市ノ瀬は口をあぐりとあけていた。

「な、情けない・・・」

対して上機嫌なのが鮫島校長だった。

「これで勝者への褒美の行方はまだまだわからなくなりましたなあ。市ノ瀬校長」

そうにやける鮫島校長に市ノ瀬は万丈目へとエールを送る。

「立て！立つんだサンダーアー！！」

市ノ瀬校長の応援にノース校の生徒たちも続く。

『立つんだサンダーアー！！』

ノース校の仲間たちが必死になって万丈目を応援している中、万丈目の兄2人は、この体たらくの万丈目に侮蔑の視線を送っていた。

「これだから、あいつは・・・！！」

「まったく！何をしているのだ準は！なぜ、俺たちのカードを使わない！！」

そんな2つの想いを背に受ける万丈目は立ち上がるとデッキへと手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー！」

そして手札の中から1枚のカードを抜き出し、決闘盤へと挿し込む。「魔法カード、四次元の墓を発動する！このカードの効果は墓地に

存在するLVと名のつくモンスター2体をデッキに戻し、シャッフルする！！」

万丈目は墓地からアームド・ドラゴンLV7とアームド・ドラゴンLV3を選び抜いた。

「俺が戻すのはこの2枚！アームド・ドラゴンLV3とLV7！！」その2枚をデッキに戻した万丈目はあらに手札のカードを切る。

「さらに仮面竜を守備表示で召喚！！」

仮面竜     3     ATK1400     DEF1100

万丈目は次へのアームド・ドラゴン召喚の布石を打ったのだった。

この万丈目の手に市ノ瀬は喜びを顕にする。

「ほつら、見るお！さすがサンダーと呼ばれる漢お！！」

翔と十代たちもアームド・ドラゴンで押し切るつもりでいる万丈目にそれれぞえの感想を呟いた。

「すぐにまた自分の場にモンスターを呼び出した」

「あのコンボじゃまた次の万丈目のターンにアームド・ドラゴンLV5が出てきちゃうぜ」

2人の言葉に三沢は首を振りつつ自論を述べる。

「だが、逆に言えば今のあいつの頭の中にはそのパターンしかないということだ。焦ってきたか」

三沢の分析どおり、万丈目は焦っていた。

目の前に立つ千影でもヨルムンガンドでもない、後ろに控えた2人の兄の視線に。

（そんな目で見ると、兄さん！）

2人の兄の視線が万丈目を苛む。

視線を僅かにそらした万丈目に千影は、その視線がどこにいつているのかに気がついた。



万丈目は少し怯えたように2人の兄を視線の片隅に入れていたのだ。  
った。

(万丈目のお兄さんたち……………。万丈目、やっぱり君は……………)

そこで千影は万丈目の3ヶ月前の三沢との決闘に何としてでも勝とうとした姿と、今日の洗面所で見えた苦しむ万丈目の姿を思い出した。(勝ち負けを絶対の価値にして、それもただただ人の…………2人の兄のためにする決闘。辛いだろぅに……………。ならば万丈目、君を縛る鎖を私が代わりに断ち切ろぅ！だから……………！！)

「今は私だけを見て決闘しろ、万丈目！！」  
しかし、万丈目に千影の真意は届かない。

「万丈目さんだ！何を寝言を！！ターンエンドだ！！」  
万丈目のターンエンド宣言と共に千影のターンがやってくる。

「私のターン、ドロー！ヨルムンガンドで仮面竜を攻撃！！」  
千影がヨルムンガンドへと攻撃を命じ、万丈目の仮面竜にヨルムンガンドの攻撃が炸裂する。

「だがこの時、仮面竜の効果により、俺の場にアームド・ドラゴンLV3を守備表示で特殊召喚するぜ！！」

アームド・ドラゴンLV3      3      ATK1200      DEF900

そう宣言した万丈目の場にアームド・ドラゴンLV3が姿を現したのだった。

「私はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

千影のターンエンド宣言を聞いた万丈目は自分のターンを始める。

「俺のターン、ドロー！このスタンバイフェイズにアームド・ドラゴンLV3はLV5へと進化する！！来い、アームド・ドラゴンLV5！！」

アームド・ドラゴンLV5      5      ATK2400      DEF1700

再び万丈目の場にアームド・ドラゴンLV5が姿を現したのだった。

「だが、俺のアームド・ドラゴンの進化はまだ止まらないぜ!!」

この万丈目の言葉に会場が騒然とする中、千影は身構えた。

「俺は魔法カード、レベルアップ!を発動する!!」

万丈目は手札から発動した魔法カードの説明に入る。

「フィールド上のLVモンスターの召喚条件を無視して、そのLVをアップさせるカード!再び我が前に出でよ、アームド・ドラゴンLV7!!」

レベルアップ!の効果を受けたアームド・ドラゴンLV5はLV7へと進化を遂げた。

アームド・ドラゴンLV7      7      ATK2800      DEF1000

この万丈目の手に千影は驚きの声を上げる。

「そんな手段も持っていたのか!?!」

「ただだぞ、千影!俺は手札より魔法カード、死者転生を発動!!手札のおジャマ・イエローを墓地に捨て、墓地にある闇より出でし絶望を手札に加える!!」

この言葉を聞いて驚いたのは誰であろう、おジャマ・イエローだった。

《ええええつ!?!兄貴い、そんなああ!!》

この万丈目の仕打ちにおジャマ・イエローが精霊化して抗議するが、万丈目には欠片も響かなかった。

「黙れ!雑魚のお前が俺の役に立つのはこういう時しかないんだよ!!」

そして無理矢理、おジャマ・イエローを墓地へと捨てる。

《あああれええええ!!》

おジャマ・イエローが断末魔の悲鳴を上げる中、万丈目は墓地から闇より出でし絶望を手札に加えたのだった。

「そして！手札に加えた闇より出でし絶望を墓地に捨て、！アームド・ドラゴンLV7の効果を発動！」

万丈目は闇より出でし絶望を墓地へと捨てるとアームド・ドラゴンLV7の効果を宣言した。

「これにより、お前のヨルムンガンドを破壊するぜ！ジエノサイド・カッター！」

万丈目の言葉と共にアームド・ドラゴンLV7から放たれた回転鋸が千影のヨルムンガンドを切り裂く。

「ううううっ！！」

がら空きとなった千影に万丈目は止めを刺すべく腕を振り上げる。

「アームド・ドラゴンLV7で千影に直接攻撃！！これでえ、決まりだあああっ！！」

万丈目の号令の元、振り下ろされるアームド・ドラゴンLV7の攻撃に会場の殆どの人間が千影の敗北を予感した。

しかし、千影はそう簡単に倒せる決闘者ではない。

千影は己に迫る豪腕を見据えると、伏せていたカードを開く。

「畏カード、新たなる胎動発動！！」

このカードにより、アームド・ドラゴンLV7の攻撃は千影の前で止まっていた。

「なにっ！？これは一体どういうことだ！？」

万丈目のこの驚きに千影が答える。

「新たなる胎動は直接攻撃を受ける時に発動できる永続罫。その効果は発動時のみ相手の直接攻撃を無効にし、その直接攻撃のダメージ1000ポイントにつき1つ、このカードに胎動カウンターを乗せる！！」

この効果により、アームド・ドラゴンLV7の攻撃が弾かれると、新たなる胎動に2つのカウンターが置かれた。

「あれで止めをさせると思ったら大違いだよ、万丈目！！」

この千影の言葉に万丈目は愉悦の表情を浮かべる。

「だが、それがどうした！お前の場にはモンスターも伏せカードも

なく、手札も0!!お前には万の一つも勝ち目などない!ふっはははははははは!!」

この万丈目の勝利宣言にカメラが万丈目をアップで映した。

「千影、今ならテレビの前で恥をかく前にサレンダーすることを認めてやる!ふっはははははははははは!!」

万丈目の降伏宣告に会場が騒然となる中、千影は凜として万丈目に向かい合う。

「見くびつてくれるな万丈目。サレンダーだって?冗談じゃない!こんなに血沸き肉踊る血闘にサレンダーなど無粋の極み!それに、私は次のターンで奇跡を起こす!!」

千影は眸を紅蓮の真紅に爛々と輝かせながらそう言った。

「奇跡だと!?!」

「そう!かつて君と始めて戦った6ヶ月前の決闘での奇跡を超える奇跡をだ!!」

千影の言葉に万丈目はその時の光景を思い出したのか顔を怒りにゆがめて叫ぶ。

「そうそうあんなことが起こってたまるか!ターンエンドだ!!」

万丈目のターンエンドの言葉に千影は高らかに宣言する。

「ならば、ここでまた奇跡を起こす!私のターン、ドロー!!」

その引いたカードを見た千影は笑みをこぼした。

「奇跡は起こったよ、万丈目!!」

この千影の宣言に万丈目は驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

驚く万丈目を尻目に千影は、そのカードを決闘盤へと挿し込む。

「私は手札より魔法カード、天よりの宝札を発動!これにより互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローする!!」

一気に手札を6枚補充した千影は、その内容を見て1つ頷く。

「私は墓地にあるヨルムンガンドの効果発動!墓地にこのカードがあるとき、手札1枚を捨てることで場に特殊召喚できる!!甦れ、ヨルムンガンド!!」

LOVサーヴァント - ヨルムンガンド - 9 ATK2800  
DEF2000

千影の場にヨルムンガンドが甦った。

「だが、その攻撃力じゃ相打ちが精々だぞ！」

「わかっているさ！手札から魔法カード、シンクロキャンセルを發動！！この効果により、場のヨルムンガンドを【狡猾】ハーピーとサキュバスに戻す！！」

LOVサーヴァント - 【狡猾】ハーピー - 6 ATK1400  
DEF1000  
LOVサーヴァント - サキュバス - 3 ATK1500 DE  
F100

ヨルムンガンドのシンクロを解除した千影はさらに宣言する。

「さらに墓地にあるエルダーワイバーンの効果発動、このモンスターが墓地にいるとき、 を1つ下げることによって自分の場に特殊召喚できる！！来い、エルダーワイバーン！！」

LOVサーヴァント - エルダーワイバーン - 1 ATK1000  
DEF600

千影の場に3体のモンスターが並んだのだった。

そして千影がその3体のモンスターを束ねるべく、腕を振り上げる。

「征くよ！ 6、LOVサーヴァント - 【狡猾】ハーピー - と 1、  
LOVサーヴァント - エルダーワイバーン - に 3、LOVサーヴァント - サキュバス - をチューニング！！」

千影の上に10個の星が瞬き煌く。

「妖しき星が、集いてここに奇跡をなす。奇跡よ顕現せよ！シンク

口召喚！汝、混沌の竜騎士LoVサーヴァント・グレンデル――！！」

LoVサーヴァント・グレンデル - 10 ATK3200 D

EF1600

光り輝く星が一振りの大剣を創ると、それに続いて巨大なモンスター、グレンデルが現れ出たのだった。

「さらにサキュバスの効果で攻撃力が1000ポイントアップ！！」

LoVサーヴァント・グレンデル - 10 ATK4200 D

EF1600

強大な攻撃力を持つグレンデルを従えた千影は万丈目へと声をかける。

「万丈目、これでこの決闘は終わるけど、次からはもっと本気の決闘をしよう」

この千影の言葉に万丈目が驚きの声を上げる。

「俺が本気じゃないだと！？」

それはそうだ、自分は万丈目一族の命運を背負い闘っていたのだ。それが本気でないはずがない 万丈目はそう思っていた。

「うん。君はずっと私を見ないで違う敵と闘っていた。違う？」

千影は視線を万丈目の兄2人にやりながらそう問うた。

「くっ！！」

千影の問いかけに心当たりがある万丈目は苦い顔をする。

「この次はもっと楽しみながら決闘しよう」

この千影の言葉を万丈目は反芻する。

「決闘を楽しみながら……」

「そう！それさえ出来れば精霊の加護を受けた君は真の万丈目……サッダーへと成れる！！」

「決闘を楽しむ……か」

そして千影は最後の切り札を切る。

「これは、その万丈目への手向けだ！新しく生まれ変わる万丈目サ  
ンダーのための！！永続罨、新たな胎動の効果発動！！このカー  
ドを墓地に送ることで、その上に乗った胎動カウンター1つにつき、  
モンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップする！！」  
千影の場の新たな胎動が砕け散り、そこに溜めた力をグレンデル  
へと捧げる。

L o Vサーヴァント - グレンデル - 10 ATK6200 D  
EF1600

「こ、攻撃力6200だと!?!」

「これで決まりだ!!グレンデル、万丈目サンダーのアームド・ド  
ラゴンLV7に攻撃!!」

グレンデルが本体である大剣を天高く掲げると、万丈目のアームド・  
ドラゴンLV7を一刀両断にするべく天を舞う。

510

これを見て慌てたのはテレビ局のディレクターだった。

「ああ!まずい、まずい!!カットだ!カットオー!!」

しかし、そのディレクターの元に上司であるプロデューサーからの  
連絡が入る。

『カットせんでいい!このまま映し続ける!!』

このいきなりの上司の命令にディレクターは説明を求める。

「ど、ど、どという事です!?!プロデューサー!!」

『この番組の主催は旋風寺コンツェルンと御剣財閥との共同主催に  
代わった。他に何か聞きたいことがあるかね?』

いきなりプロデューサーから告げられた有名すぎる2つの大財閥の  
名前にディレクターを開いた口がふさがらなかったのだった。

そして千影がグレンデルへと号令を下す。

「ラグナロク・テンペストオオツ!!!」  
大上段からの唐竹割りにアームド・ドラゴンレベル7が真つ二つに立たれたのだった。  
そして超過ダメージ3400が万丈目に襲い掛かる。  
「うわあああああつ!!!」

万丈目LPO

その強大な攻撃力を一身に受けた万丈目はその場に両手両膝をついたのだった。

そんな万丈目の元に兄2人が万丈目の元に来ると万丈目を罵倒し始める。

「準！貴様、何をやっているんだ！自分のやったことが分かっているのか!!!」

「万丈目一族に泥を塗りよって!!!」

そう責めてくる兄たちに万丈目はただ謝るしかできなかった。

「すまない・・・兄さんたち・・・」

しかし、兄たちは尚、厳しい言葉を万丈目へとぶつける。

「貴様、俺たちの与えたカードはどうした!?!」

「なぜ使わない!?!そうすればもつと強いデッキが出来たはずだ!?!」

その兄たちの言葉に万丈目は答える。

「俺は自分のデッキで勝ちたかつたんだ」

この言葉に正司は激昂し、万丈目の胸ぐらを掴み上げる。

「この馬鹿弟があつ!」

「だから貴様は落ちこぼれだというのだ!?!」

放っておけばいつまでも万丈目を罵倒していそうな兄2人の元に眸を元に戻した千影が歩み寄り言葉を放つ。

「やめろ！万丈目は負けたけど、立派に闘った!?!それを踏みにじる権利など例え兄弟であろうともありはしない!?!」

千影の後ろに立つ、十代たちも千影のこの言葉に頷く。



「他人が我らのことに口出しするのか！」

長作の言葉に十代が返す。

「兄弟ならなおさらそんな態度はないだろ！万丈目・サンダーも千影と持てる力を振り絞って決闘したんだ！」

しかし、そんな十代の言葉を正司は切つて捨てた。

「我々は途中経過に興味などない！結果を問題にしているのだ！」  
この正司の言葉にクロノスは頷くが、何か釈然としないものを感じていた。

「ソーネ、ソーネ。結果は大事なノーネ。デモなにか癪に障るノーネ」

長作はその場にいる全員に言っただけの言葉を放つ。

「我々兄弟にとつて重要なことは結果だ。結果こそが全て！勝利こそ全てなのだ！！だいたい」

そして、この会場に設置されたクレーンとカメラを指差すと声を張り上げる。

「この決闘のために、どれだけの金をつぎ込んだと思っているのだ！！」

この長作の言葉を聞いた、千影は懐から一枚の紙切れを取り出すとそれを長作へと投げつけると、彼には珍しい険しい顔で言い放つ。

「そんなに金が惜しいのなら、そこに好きなだけ金額を書き込むがいい！」

長作が投げつけられた紙切れ　何も書かれていない小切手に目を落とすとその顔を驚愕へと染めた。

「この・・・紋章は・・・・・お、お前っ！お前はっ！！」

長作の驚きように正司万丈目を放すと、その小切手を横から除く。

「どうした、兄貴？・・・・・っ！こ、これは！！」

そして正司までも顔を真っ青にすると、2人は千影をまるで化け物か何かを見るような目で見る。

そんな2人に、なお険しい顔を見せる千影は最後に一喝する。

「貴方たちのような人たちに私と彼の決闘を汚させはしない！疾く

去ね、俗物!!」

「ひいっ!!」

千影の一喝を受けた長作と正司は情けない悲鳴を上げると脱兎の如く逃げ出していったのだった。

そして、その後に巻き上がる千影と万丈目への大歓声。

本校の生徒を加えた万丈目サンダーコールは長い時間止むことはなかったのだった。

そしてノース校代表団が帰る時間となってしまうた。

本校の生徒たちも彼らを見送るために港へと集まっていた。

「もう帰っちゃうんすね」

「元気でね万丈目」

翔と千影は万丈目との別れを惜しんでいた。

「今度は俺と決闘やろうな!」

十代も別れを惜しみつつ、そう万丈目へと言う。  
しかし

「いや、俺はノース校へは帰らん」

万丈目の言葉に、この場が集まった一同は驚きの声を上げた。

特にノース校の驚きは一入だ。

「俺はここでやり残したことがある。江戸川、キングの座はお前に返すぜ!」

「か、返すって言われても!?サンダー!!」

いきなり返されたキングの座に江戸川は、万丈目を引きとめようとするが、万丈目の決意は固かった。

「校長、そう言うことだ。またやっかいになる」

鮫島校長は、この万丈目の言葉に頷くと復学を了解した。

「もちろん。万丈目君は元々はここの生徒ですからな」

万丈目の復学が決まったところで市ノ瀬が万丈目へと声をかけようとする。

「だがそうなると我が校に伝わる」

しかし、ここでいきなりクロノスの声が響き渡った。

「デハデハデーハ、出航の時間もありますノーデ、これより表彰式を行いたいと思いますノーネエ！そしてご褒美を渡すのはミス・デュエルアカデミア！」

このクロノスの言葉に生徒たち全員の視線が集まる。

「ミス・デュエルアカデミアって!？」

「そんな人いたかなあ？」

十代と千影が頭を捻る中、そのミス・デュエルアカデミアが登場する。

それは何と、厚い化粧を施したトメさんだった！

そんなトメさんの姿に生徒たちが固まる中、クロノスは粛々と進める。

「それデハ、勝者の校長はこちラーニ」

このクロノスの言葉にほくほくとした顔で鮫島校長が歩み出ると、その頬にトメさんからの熱いキツスが贈られた。

どうやら、これが市ノ瀬校長と賭けあっていた褒美らしい。

この光景を見た市ノ瀬は滂沱の如く涙を流すと、万丈目へと最後の言葉を贈った。

「万丈目君！強くなれよ！来年こそ強くなれよ！！あああああああ  
あんっ！！！！」

別に強くなっても本校に復学した万丈目が来年、ノース校の代表として出れるわけがないのに、シヨックな光景を見たのかテンパっているようだ。

そして、先ほどまで言いかけていた言葉も忘れて潜水艦へと飛び乗った。

市ノ瀬がこのことに気がついたのは出航してすぐである。

市ノ瀬のノース校秘宝のカードを返してもらい損ねた悔し涙を、別れを惜しんだ漢泣きと受け取ったノース校の生徒たちがもらい泣きを始めるという珍事があったが、ここでは割愛しておこう。

そんな水平線に消えるまで手を振ってくれたノース校の生徒たちを

見送った鮫島校長は万丈目へと口を開いた。

「これでよかったのかね？」

「もちろん」

鮫島校長の言葉に頷く万丈目だったが、世界は割りと厳しかった。

「ここに残っても万丈目サンダーは3ヶ月もの欠席でオベリスクブル―では進級できないのにな」

「うへえっ!？」

大徳寺から語られた衝撃の事実には万丈目は驚きの声を上げる。

つまり、このままではだぶるということだ。

しかし大徳寺は1つの解決策を提示する。

「もしも進級したければ出席日数の関係ないオシリスレッドに入るしかないのにな」

「何っ!?!この俺がオシリスレッドだと!こいつらと同じ!?!」

嫌そうな顔を隠そうともしない万丈目に翔と十代は笑いかけた。

「文字通り同僚になるんだね」

「よろしく頼むぜ同僚!」

「うるさい!断る!何で俺がこいつらとおおおおっ!?!」

そんな2人に万丈目は叫ぶが誰も聞いていなかった。

「それじゃあ、万丈目の入寮を祝して!」

千影が笑顔で手を叩き音頭をとる。

『一、十、百、千、万丈目サンダーアアー!?!』

全員がサンダーコールを合唱し、万丈目をもみくちゃにする。

「信じられん!俺様がこいつらの仲間とは.....」

こうして、万丈目の物語が終わり、万丈目サンダーの物語が始まったのだった。



LoVでは自身は固くなれないのに、こちらでは超硬いモンスターとして登場です。

表側守備表示の間は戦闘では破壊できず、手札がある限り何回倒しても、何回倒しても復活してきます。

これを何とかするには除外したりするしかないでしょう。

## 第17話【正義の味方部篇】

万丈目がデュエルアカデミア本校に復学し、1年目前期を締めくくった学園対抗決闘も既に1ヶ月も前のこと。

今日、4月12日。千影はヘリコプターに乗って日本の東京湾を埋め立てて造られた新都市、ヌーベルトキオシティへと向かっていた。千影がなぜデュエルアカデミアを離れ、こんなところまで来ているのかという理由は、数日ほど遡らねばならない。

春休みを終え、実家からデュエルアカデミアへと戻った千影は早々に鮫島校長に呼び出されていた。

「失礼します。鮫島校長」

校長室の扉を開け、中に入ると鮫島校長のほかに懐かしい顔ぶれが2人いた。

「ドウクス！ペガサス小父様！！」

そう、以前の月1試験の時、カードを運んできた千影の従者で師匠のドウクスと、インダストリアル・イリユージョン社の名誉会長にしてデュエルモンスターの生みの親であるペガサスがそこにいたのだ。

「オウ、プリンセス千影。元気そうで何よりデース！」

久しぶりに目にする千影の姿にオーバリアクションで喜びを表現するペガサス。

「こちらは数日振りといったところか」

対してドウクスは静かに微笑んでいた。

しかし千影は自分が呼び出されたことと、2人がこの場所にいることの意味を理解できなかった。

「しかし鮫島校長、これはどういうことですか？」

千影はここに自分を呼んだ意図を聞くために鮫島校長の方を向いた。「うむ、それなのだが。千影君、君にはとある学院へ2ヶ月間短期

留学してほしいのだよ」

この鮫島校長の言葉に千影は眉をひそめた。

「短期留学ですか？」

「うむ。実は」

鮫島校長が説明をしようとした時、ペガサスが鮫島の言葉をさえぎった。

「そこからはワタシが説明します」

そして千影の視線が自分に向くのを確認してからペガサスは喋りだす。

「実は1ヶ月前に、とあるボーイから新しい決闘の形式を確立したので、そのためのカードを作って欲しいという依頼があったのです」

この言葉に千影は頭を捻る。

「新しい決闘形式？」

「そう、それは決闘盤の機能を持つバイク  
D・ホイールを使った騎乗決闘というものだったのデース！」

ペガサスの発した言葉に千影は信じられないといったような顔になった。

「バイクに乗って決闘する!？」

千影の驚きの声にペガサスは頷きながら続ける。

「そうデース。ワタシも最初は戸惑いましたが、そのD・ホイールの設計は完璧だと共に立ち会った海馬ボーイも珍しく絶賛していたのデース」

ペガサスのこの言葉に千影は考えるように手を口に当てる。

「あの技術者としても凄腕の海馬さんが絶賛するほどの出来……」

「そして、ワタシはこの1ヶ月間寝る間も惜しんで依頼された新たなカード  
騎乗決闘専用の魔法カード、スピードスペルを作り上げたのデース。それがこれになりマース」

ペガサスの差し出したカードの束を受け取ると千影はその1番上の



カード、フィールド魔法、スピード・ワールドを見て驚いた。

「スピードスペルと名のつく魔法カード以外の魔法カードを使った時、2000ポイントのダメージ!? しかも騎乗決闘時に発動し、破壊も無効化も除外もされないって小父様これは!?」

驚きの表情を向ける千影にペガサスは頷く。

「そうデース。騎乗決闘ではそのスピード・ワールドが決闘を支配しマース。事実上、そこで使えるのはスピードスペルのみになるという訳デース」

ペガサスの言葉を聞きながら千影は、渡されたスピードスペルと、それに関して新たに作られた罫カードを見ていく。

そこで短期留学の意味を見抜いた千影が鮫島校長へと向き直った。

「それで、私とその騎乗決闘を考え、D・ホイールを開発した者のいる所に留学するわけですか」

この千影の言葉に鮫島校長は申し訳なさそうに口を開いた。

「うむ。本当はこちらに留学してもらうはずだったが、その少年がこちらに来ることを拒んでね。悪いが千影君、騎乗決闘のノウハウを吸収してきてくれ」

鮫島校長の言葉に千影は頷いた。

「そう言う話なら、仕方ないでしょう。こちらが教えを請うのですからこちらから出向くのが礼儀というものです。それにこのカードを見て騎乗決闘という物にも興味がわいてきました」

「おお、そうかね! そういつてもらえるとありがたい!」

千影の心いい返事に鮫島校長は嬉々となる。

そこまで話すと千影はドウクスの方を向いた。

「で、ドウクスがいるのもやっぱりその留学関係?」

「ああ、千影。私もその留学に関してお前に渡す物があつてここに来た」

千影の言葉にドウクスは頷きながら千影の前に進むと小さな箱を差し出したのだった。

千影はヘリコプターの中で左の耳たぶにつけられた  
クスから渡された紅蓮に輝く奇石のピアスに手をやると呟く。  
ドウ

「ドウクスの持つてきたのが、まさかネクロノミコンだなんてね」  
そして思考の海へと入る。

（かつてのアーカムシティでネクロノミコン機械言語版を使った身  
とはいえ新しいネクロノミコンのマスターだなんて、お爺様とお父  
様は一体私になにをさせたいんだ？）

ドウクスからの話しによると、覇道に協力している大十字九朔と紅  
朔の兄妹のDNA、ネクロノミコン血液言語版を旋風寺コンツェル  
ンが誇る超AI、ガインを通して解析し電子データ化、そのデータ  
を御剣が開発した電子データを保存できる石に閉じ込めるとい  
う荒業でこの世に新たなネクロノミコン、機械言語新訳版を作り出  
したのだった。

（聞けば聞くほど頭が痛くなる内容だ。舞人もよく協力してくれ  
たな）

一つ間違えばガインが壊れてしまう可能性も大いにあったのだ。

（まあ舞人のことだ勇者はこの程度では負けないとか言っていたん  
だろうなあ。そして現実に勇者は健在のまま魔導書を解析し終えた  
か）

全く持つて友人の非常識さに笑みをこぼす千影だった。

「あと、今から行く美咲輝学院にダーレス学院の卒業生がいるから  
その人にD・ホイールの製作を依頼したってお爺様はいつてたな。  
全く、考えることはわからないのに根回しだけは早い人だ」

そう呟く千影を乗せたヘリコプターはヌーベルトキオシティの特別  
区、美咲輝区へと降りていったのだった。

ヌーベルトキオシティ特別区、美咲輝区に立てられた学校法人、美  
咲輝学院高等部に千影は降り立っていた。

「ええっと、一応の書類手続きはお爺様やお父様がしてくれました

いだからいいとして。授業は明日から受けるのか。しかし、決闘者養成機関のデュエルアカデミアに入学してながら、留学先で普通科の授業を受けることになるうとは思いもよらなかつたなあ」

そう、ここ美咲輝学院には決闘者育成の科がないのだ。

「でも部活動で決闘は活発なんだよね、この学校」

その代わり、この学院にはカードゲーム部があり、その活動は話を聞く限り非常に活発で、さらにその部からは何人ものプロの決闘者を輩出している。

このことは他の部にもいえることだ。

それもそのはず、この学院の校風は『自由自在』。

自分の思いのままにできるさま、という言葉の意味どおり、生徒の自由な意思に重きを置き、夢を持つ生徒にはあらゆる援助を惜しまず、無意味な規律で縛りはしないのだ。

この方針を顕著に表したのが部活動で特待制度や専門設備も多く、生徒からの厚い要望があれば色々と用意もしてくれる。

ここはそんな学院だった。

「さてと、まずはお昼時だし昼餉かな。それにしても広いなあ。こ

この学院は1つの街みたいだ」

千影は先ほど渡された美咲輝学院の星徒手帳を開き地図を見ながら息をついた。

この学院は幼等部、初等部、中等部、高等部、大学部のほかに各種専門学校のみならず図書館、体育館、音楽堂、区民館に特待生用の居住区。それらをつなぐ私鉄にモノレール、リニアカーに、果てはレジャー施設『Leviathan』までもあるのだ。

喫茶店や食堂の数も推して知るべし。  
千影がどこで食事を取ろうかとキョロキョロしていたその時、ピンポンパンポン という音と共に放送が流れた。

「えー、皆様楽しいお昼休みに失礼いたします・・・ただいま高等部食窓街のカフェ『リバル』にて『世界征服部』が活動を始めました！近くの生徒は巻き込まれないように注意を・・・えー、

『正義の味方部』の方は大至急活動を始めてください!!』  
この放送に千影は呆然となる。

「世界征服部に正義の味方部って……」  
さすがの千影もこの2つの部には驚きを隠せないようだった。

周りを見てみると野次馬なのか、現場である『リバル』に向かう人の流れが見えた。

「とりあえず、いつてみよう!」

千影はそう決心するとその流れの先へと駆け出したのだった。

その『リバル』にて征服活動を行う人物が4人。

せつせとバリケード作りをしている男子生徒が2人と、延々とギターをかき鳴らす白衣の男子生徒が1人、そしてとがった耳をした少女が1人、この4人が世界征服部のメンバーらしかった。

白衣の男子生徒はギターをかき鳴らしながら高らかに宣言する。

「このカフェ『リバル』は世界征服部が頭脳にして『緑狂』、大・天・オ!ドクタァー・ウエエスト3世が征服したのである!」

そのウエスト3世が握るギターには緑の極星章がつけられていた。ちなみに極星とは美咲輝学院の部活動において特筆すべき成績を修めた生徒が、生徒会から贈られる称号である。

そしてそれをつけている彼は科学部が極星にして、今は世界征服部の部員だった。

しかし、そのウエスト3世の隣に立つ少女が鬱陶しそうな顔で口を開く。

「3世うるさいロボ。すこしは静かにするロボ」  
独特な語尾をつける少女にウエスト3世は涙目になる。

「エエエルザ!そんな物言いはないではないであるか!!じつちゃんのだ造ったお前は完璧な人造人間のはずである!なのに嗚呼それなのに、いつもいつも我輩をそうやってこき下ろすのであるか!!折角、じつちゃんのロボに眠っていたお前をオーバーホールして起

こしてやったというのに!!」

ウエスト3世の言葉に人造人間エルザは何を当然なといった顔で言った。

「3世は博士とかわらない馬鹿口ボ、だからかつての博士と同じような対応をしている口ボ。それに誰も起こしてくれだなんて頼んでない口ボ」

「エエエエエルツザアアアアア!!」

この1人と1体の掛け合いにバリケードをせつせと築く世界征服部が下つ端、松田七月男と新井祐之介はため息をついていた。

「はあく、なんであんなキチ イが極星なんだか……」

「いうな七月男。できるだけ、あのキ ガイを目に入れないようにしてるんだから……」

世界征服部も内部では結構大変そうである。

その場にたどり着いた千影はそんな世界征服部の面々を見ると息を漏らした。

「あれが世界征服部かあ。やってることは不法占拠っぽいけどいいのかな？」

しかし、この学院の星徒会に正式に認められた部であることは星徒手帳の部活紹介欄を見ても明らかだった。

「うーん、どうしよう。悪いことをしてるなら放っておけないし……」

「ちよつと、ごめんなさい」

そう悩む千影の横を1人の少女が通り過ぎる。

その身に白い鎧を纏って。

新井と松田がバリケードを完成させるのを見たウエスト3世はギタ―をかき鳴らす。

「よおーし!よくやったのである、下つ端共!!後は先日、浅凧九郎と武居和麻を倒したという正義の味方部をケチヨンケチヨンに

してやるだけなのである！！」

このウエスト3世の発言にタイミングよく返す言葉が1つあった。

「その活動待ってもらいます！」

その言葉の元に視線を向けると、そこには白い鎧を身に纏った1人の少女、鈴鳴はやなの姿があつた。

その姿にウエスト3世は声を上げる。

「ようやくきたであるか、正義の味方部とやら！」

そんなウエスト3世にはやなは名乗りを上げる。

「皆の楽しいお昼休みと美味しいお昼ご飯を護るため、正義の味方部、ティンクルセイバー活動開始ですっ！」

この場に、この学院が誇る2大色物部活動、世界征服部と正義の味方部が対峙したのだった。

「では、いきますよー」

はやなはティンクルセイバーの基本武装であるプラズマリボンを構えるが、そこでウエスト3世から待ったの言葉がかかった。

「待つのである！我輩は決闘者、貴様が正義の味方だというのなら、ここは正々堂々と我輩と決闘するのである！！」

はやなはこの言葉に出鼻をくじかれることになった。

「はい？決闘つてあの決闘ですか？カードゲームの??」

頭にクエスチョンマークを浮かべるはやなにウエスト3世はギターかき鳴らしながら答える。

「そう、決闘で決着をつけるのである！もしも貴様が決闘できないとなれば我輩の不戦勝となり、晴れてこのカフェは世界征服部のものになるのである！！嗚呼、この考えを思いついた我輩の頭脳が怖いっ！！」

このウエスト3世のオーバーリアクションが癪に障ったのかはやなの親友である京月葵がはやなに声をかける。

「はやな！そんなことはいいから、そのキ　ガイをぶっ飛ばしちゃうなさい！！」

「えええ、でもお……」

しかし、正々堂々という言葉をかけられたらそれに乗らなければ正義の味方とはいえない。

はやなは親友のこの言葉に戸惑った。

「対して、こっちは世界征服部！正々堂々、卑怯な手を使うのである！いけえ、今がチャンスだ下つ端共っ！！」

ウエスト3世のハイテンションの命令に新井と松田は頷く。

「あんな奴に命令されるのは癪だが・・・了解！」

「我が命、鈴鳴はやなと共にあり！！」

特に昨日発足したはやなファンクラブゴールドメンバーの松田はこのために世界征服部に参加したといっても良かった。

戸惑うはやなに隙ありと襲い掛かる2人だったが

「プラズマリボン！」

「どへー！！」

超人的な反射神経を見せたはやなの前に倒れ伏したのだった。

そんな新井と松田の不甲斐ない姿を見たウエスト3世はエルザへと声をかける。

「ぬうううう！使えないやつらである！！こうなったら今こそ、じつちゃんの最高傑作の出番である！エルザッ！！」

「断るロボ」

しかしにべもなく断られてしまった。

「エエエルザッ！！」

「3世は自分から決闘を申し込んだロボ、決闘者なら申し込んだ勝負の前に不意打ちはあまりにも汚いロボ、侮蔑に値するロボ。でも3世の評価は連日ストップ安だからこれ以上下がないロボ、残念ロボ」

エルザの言葉にうな垂れるウエスト3世だったが、ゴキブリ並みの生命力を発揮し復活する。

「ならば、今度こそ正々堂々、決闘で決着をつけるのである！さあ、ティンクルセイバー、決闘盤をセットするのである！！」

ウエスト3世はそう言うと、手にしたギターをかき鳴らすと、変形

させ、そのまま決闘盤とした。

「ううう、だから……」

決闘準備OK、いつでもカモーンなウエスト3世の姿にはやなが困惑するなか、1人の人間が言葉を発した。

「その決闘、私が引き受ける！」

この場が集まった、全員の視線が集中する。

その声の主は長い銀髪をシニヨンに結び上げ、真紅を基調としたの陣羽織を風になびかせ、眸と同じ色のピアスが第3の目のように輝く美しい人物だった。

誰であるう、ここまでのいきさつを見ていた千影である。

千影が歩き出すと、モーゼの十戒の如く人が道を開ける。

その道を王者の如く歩きウエスト3世の前、はやなの横まで歩み言葉を放つ。

「私は決闘者だ。決闘者でない彼女の代わりに私が決闘する！」

そう言うと、バックパックから決闘盤を取り出すと腕に装着する。

その千影の姿にはやなは困惑したままの顔で千影に顔を向けた。

「あ、あの、いいんですか？」

このはやなの言葉に千影は笑顔で頷いた。

「うん。困ってる人を放っておけないし」

はやなと2人で語り合う千影を見たウエスト3世は笑みを浮かべて言葉を発した。

「ふん、どこの誰だかわからん奴ではあるが、我輩に勝負を挑んだからにはギツタンギツタンのケツチヨンケツチヨンにしてやるのであーる！！」

「できるものなら！」

2人は決闘盤とギター型決闘盤にデッキをセットする。

「決闘ッ！！」

ウエスト3世LP4000



千影LP4000

まずはキチ イ……じゃなかった、ウエスト3世が先手を取る。

「我輩のターン、ドロー！我輩は古代の歯車を守備表示で召喚するのである！！」

古代の歯車 2 ATK100 DEF800

ウエスト3世はさらに手札からカード1枚を選び出す。

「さらにリバースカードを場に1枚セットしてターンを終了するのである！」

「私のターン、ドロー！」

千影は引いたカードを手札に加えると即座に戦術を組み立てると、即座に1枚のカードを抜き出す。

「私はLOVサーヴァント-イフリート-を攻撃表示で召喚！！」

LOVサーヴァント-イフリート- 4 ATK1900 DEF700

千影の場に炎の魔神が姿を現したのだった。

その炎の魔神、イフリートに千影は命を下す。

「イフリートで古代の歯車を攻撃！地獄の業火！！」

イフリートから発せられた炎が古代の歯車を襲い燃やし尽くす。しかし、イフリートの攻撃はこれで終わりではなかった。

「この時、イフリートの特殊効果が発動！相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手プレイヤーに500ポイントのダメージを与える！！」

千影の言葉と共にイフリートから放たれた炎がウエスト3世を襲う。

ウエスト3世LP3500

「ぬうううっ！やるではないかつ、しかし！！」

ウエスト3世は笑みを浮かべると伏せたカードを発動した。

「畏カード、エンジェル・リフトを発動！この効果により我輩の墓地にある 2以下のモンスター1体を場に攻撃表示で特殊召喚してこのカードを装備するのである！！」

古代の歯車 2 ATK100 DEF800

ウエスト3世の場に古代の歯車が甦った。

それを見た千影はウエスト3世の戦術を推し量っていた。

（下級モンスターを場へと呼び戻したということは上級モンスターの生け贄にするためか、または別の目的があるのか……ここは用心に用心を重ねるべきか）

そう考えると千影は手札からカードを選び出し、リバーズカードとして決闘盤へと差し込む。

「私はカードを2枚伏せてターンを終了」

千影のターンエンド宣言にウエスト3世はギター型決闘盤をかき鳴らしつつデッキからカードをドロースると言う無駄に器用なことをやってみせる。

「我輩のターン、ドロー！」

その妙技に周りで見ていた者たちから拍手が巻き起こる。

その拍手を尻目にウエスト3世は場にあるモンスターの効果を起動する。

「我輩は、場にある古代の歯車の効果を発動！このカードが場にあるとき手札からこのカードと同名のカードを攻撃表示で特殊召喚するのである！！我輩は手札にある2体の古代の歯車を特殊召喚するのである！！」

古代の歯車	2	ATK100	DEF800
古代の歯車	2	ATK100	DEF800

ウエスト3世の場に並んだ3体の古代の歯車を見て千影は身構えた。  
「っ!？」

千影の予想通り、ウエストはここで切り札を切る。

「そして我輩は場にある3体の古代の歯車を生け贄に、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を攻撃表示で特殊召喚するのである!!」

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜	8
ATK3000	DEF2500

ウエスト3世の場にまるでドラム缶に手足が生えたような機械の巨人が現れた。

「ぬわっははははははは!これが我輩の切り札、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜である!!このカードは場にある機械族3体を生け贄にした場合、特殊召喚できるモンスター!さらにっ!!」

ウエスト3世はさらに手札からモンスターを召喚する。

「我輩はイエロー・ガジェットを攻撃表示で召喚するのである!!」

イエロー・ガジェット	4	ATK1200	DEF1200
------------	---	---------	---------

「このカードの召喚に成功した時、我輩のデッキからグリーン・ガジェット1枚を手札に加えるのである!!」

イエロー・ガジェットの効果でグリーン・ガジェットを手札に加えたウエスト3世はさらに叫ぶ。

「そして、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果発動!自分の場にある機械族のモンスター1体を生け贄

にすることで相手の場のモンスター1体を破壊するのである!!」  
ウエスト3世のこの言葉に千影は驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

驚く千影を尻目にウエスト3世はイエロー・ガジェットを生け贄に捧げるとスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果を起こさせた。

「喰らうがいい、ジェノサイド・クロス・ファイアー!!」

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜から放たれる鉛弾の嵐にイフリートは蜂の巣にされ爆散したのだった。

「見たであるか、我輩のスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果を!そして我輩の前に立ち塞がった生意気な小娘に直接攻撃なのである!!」

ウエスト3世の号令のこと、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜がギユインギユインとドリルを回転させるとそれを千影に向けて打ち出した。

「我輩のドリルは世界一いいいいっ!!!!」

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜から放たれたドリルは千影を貫くと千影のライフポイントを大きく削った。ドリルだけに。

千影LP1000

「くううっ!!」

千影が圧倒的な攻撃力にしし後ずさるが、何とか踏みとどまると伏せたカードを開く。

「リバース罠オープン、ゲート!!このカードの効果はこのターン、相手から与えられたダメージの合計値分以下の攻撃力を持つモンスター1体を手札から特殊召喚できる!私が受けたダメージは3000!!よって手札から攻撃力3000のLOVサーヴァント・ギガス-を攻撃表示で召喚!!」

千影の場に猛る鬼の使い魔が姿を現した。

「えええいつ、小癩なやつである！我輩はカードを1枚セットしてターンエンドである！！」

そんな千影を憎憎しげな目でウエスト3世は見るとカードを1枚セットしてターンエンドを宣言したのだった。

「はわわ、どうしよう葵ちゃん」

素人目に見ても不利な状況に追い込まれている千影に後ろに下がったはやなは葵に声をかける。

「どうしようって私たちは決闘のことに関しては門外なだから手のうちようがないでしょうに」

そこまで言うと葵はジト目で後ろに隠れる正義の味方部顧問の藤代霧瀬を見る。

「それにしても先生、世界征服部がこういう勝負を持ちかけてくることは予想してなかったんですか？」

この葵の言葉に「ギクツ！」となった霧瀬は往生したのか2人の前へと出てくる。

「ごめんねえ、まさか世界征服部があんな部員を確保してたなんて知らなかったのよお」

るーと涙を流しながら霧瀬は2人に謝る。

「それにうちの学校に決闘の名門、デュエルアカデミアから留学生が来るから私のほうで面倒を見てやってってくれて言われてたから、本当はこつちが新しい戦力を確保できるはずだったのよお」

この霧瀬の言葉に葵は嫌な予感が走る。

「まさか、その留学生も正義の味方部に勧誘する気じゃ……………」

「

さめざめと涙を流していた霧瀬は涙を止め、親指を立てると当然の如く言い張った。

「もちろんよ！しかも留学生のデータを見てみたらすごい可愛い。ほらこれ……って、今その子が世界征服部の極星と戦ってるうううっ!!」

今の今まで、千影の姿に気がついていなかったのか、後姿で顔が見えなかったからなのかはわからないが、話していた留學生が今正に決闘してる姿に霧瀬は驚きの声を上げたのだった。

千影は全ての場を見渡すと、相手の戦力の分析を始めた。

(スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜……  
……万丈目のアームド・ドラゴンと似通った効果だが、こちららは場に出ている自分のモンスターを生け贄にしなければいけない分、デメリットに見えるが、ガジェット3種のお互いを呼び合う効果でそのデメリットをメリットに変えている。これはやつかいだ……  
……だが!!)

「それでも、私の使い魔たちは負けない！私のターン、ドロー!!」  
そして千影はもう1枚のリバースカードを発動する。

「リバース罨発動、【バスター】モード！この効果によりギガスを生け贄にギガスを新たなる姿へ進化させる!!」

この千影の宣言にウエスト3世は驚きの声を上げる。

「なんですとおっ!?!」

千影はデッキから1枚のカードを選び取ると、それを召喚するべく決闘盤へと置く。

「発動せよ、【バスター】モード！LOVサーヴァント - 【猛鬼】ギガス - を攻撃表示で特殊召喚!!」

千影の場のギガスが猛々しい姿へと生まれ変わる。

LOVサーヴァント - 【猛鬼】ギガス -      10      ATK3500

DEF2000

場に解き放たれた【猛鬼】ギガスは猛々しいほどの咆哮を上げたのだった。

千影はさらに手札からカードを選び取る。

「さらに手札からLoVサーヴァント - ガーゴイル - を攻撃表示で召喚！」

LoVサーヴァント - ガーゴイル -           4   ATK1800   DE  
F1000

場に2体の使い魔を揃えた千影は号令を下す。

「【猛鬼】ギガスでスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を攻撃！！」

【猛鬼】ギガスがスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜に突進をかけると、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜は青天にひっくり返り大爆発を起こす。

「あああああつ！我輩のスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜がああああつ！！」

無残の爆散したスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の姿にウエスト3世は悲鳴を上げる。

ウエスト3世LP3000

だが、まだ千影は攻撃の手を緩めない。

「ガーゴイルは戦闘フェイズの間のみ攻撃力が200ポイントアップする効果を持つ！よって今のガーゴイルの攻撃力は           」

LoVサーヴァント - ガーゴイル -           4   ATK2000   DE  
F1000

「2000ですとおおっ!?!」

ウエスト3世が悲鳴を上げるが現実是非常だった。

「ガーゴイルでウエスト3世に直接攻撃! ストーンブラスト!」

攻撃力を上げたガーゴイルの闇の衝撃波がウエスト3世に牙をむく。

「のおおわあああっ!」

ウエスト3世LP1000

LoVサーヴァント - ガーゴイル - 4 ATK1800 DE

F1000

そして戦闘終了と同時にガーゴイルの攻撃力も元に戻った。

ウエスト3世が後ろに吹き飛ばされるが、空中で綺麗に体勢を直すと着地し、ギター型決闘盤を鳴らしたのだった。

本当に無駄に芸の細かい人物である。

その大道芸差ながらの体捌きに観衆から拍手とおひねりが飛び交う中、ウエスト3世は高らかに言葉を発した。

「こんなところで我輩は負けられないのである! 偉大な発明家であつたじつちゃんの名にかけて!」

この叫びに千影はツッコミを入れる。

「いや、それは決闘の勝敗と関係ないのでは」

だが、千影の話を聞いていないウエスト3世はギター型決闘盤をかき鳴らす。

「はあ。とにかく、私のターンはこれで終了だ」

そんな姿に千影はため息をつく。ターンエンドを宣言したのだった。今までギター型決闘盤をこれでもかとかき鳴らしていたウエスト3世は、そのターンエンド宣言を待っていたのだ。

「しっかああし! この大・天・才たるドオクタア・ウエエエエス ト3世がこの程度の攻撃を予測していないと思ったら大間違いなのである!」



「っ!?!」

ウエスト3世のこの言葉に千影は身構える。

「畏カード、オオープンッ! 科学者の狂信!!! このカードは次の我輩のドローフエイズを飛ばすことで我輩の墓地にある機械族モンスター1体を特殊召喚する畏カード!!!」

ウエスト3世は墓地から1体のモンスターを選び天高く掲げる。

「もちろん、我輩が甦らすのはスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜!!!」

そう宣言したウエスト3世は、その手に持ったスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を勢いよくギター型決闘盤へと置く。

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜 8

ATK3000 DEF2500

ウエストの場にスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜がドリルをこれでもかどギョインギョイン回しながら甦る。「そして我輩のターン! ドローは出来ないが、我輩の手札には前のターン、イエロー・ガジエットの効果で手札に加えたグリーン・ガジエットがあるのである! 我輩はグリーン・ガジエットを攻撃表示で召喚!!!」

ウエスト3世は場にスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果の生け贄とするモンスターを召喚した。

グリーン・ガジエット 4 ATK1400 DEF600

「さらにグリーン・ガジエットの効果でデッキにあるレッド・ガジエットを手札に加えて、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果を発動!!!」

レッド・ガジエットを手札に加えたウエスト3世は場のグリーン・

ガジェットを生け贄にスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル  
の皇帝の紋章の効果を起動する。

「生意気小娘の【猛鬼】ギガスを破壊するのである！レッツ、ロツ  
クンロオオオオオル！ジエノサイド・クロス・ファイアアアッー  
ー！！」

ウエスト3世の命令の下、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシ  
ヤルの皇帝の紋章から放たれた鉛弾の嵐に千影の【猛鬼】ギガス  
が蜂の巣にされ爆散する。

そして残ったガーゴイルにウエスト3世はスーパーウエスト無敵ロ  
ボ28号スペシャルの皇帝の紋章に攻撃命令を下す。

「スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャルの皇帝の紋章でガ  
ーゴイルを攻撃！こおおれでええ、とおどめえええ！！」

これで勝ったと思ったウエスト3世は上機嫌にギター型決闘盤をか  
き鳴らす。

しかし、千影はここで終わるほど甘い決闘者ではない。

「手札からLOVサーヴァント・グリフォンの特種効果を発動！  
相手のモンスターの攻撃力が1500以上の時、手札から捨てるこ  
とでその攻撃を無効にする！！」

この千影の宣言にウエスト3世は驚きの声を上げる。

「ぬうわぁにいつ!？」

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャルの皇帝の紋章が放つ  
たドリルはグリフォンの効果によってかき消されたのだった。

しかし、それでも自分の有利には変わりはないと思ったウエスト3  
世がギター型決闘盤をかき鳴らす。

「だが、しかあつし！我輩の場にはスーパーウエスト無敵ロボ  
28号スペシャルの皇帝の紋章、手札には効果起動のためのレッ  
ド・ガジェットがいるのである！！これはもう我輩が勝つ以外に道  
がないのである！おい、生意気小娘！！今ならこの我輩にごめんな  
さいするのを許してやるのである！！さあ、その小さなおでこを地  
面にこすり付けて謝るのである！ハァー！ハァー！！」

このウエスト3世の言葉に決闘を見守っていたはやなは飛び出そうとする。

「ちよつと、はやな!？」

そのはやなを葵が止めるが、はやなは葵を振り返ると笑顔で言った。

「ごめんね、葵ちゃん。でもあんな小さな子ががんばっているのに正義の味方の私が見ているだけなんてできないの」

葵はそれでもはやなを引きとめようとする。

「でも、あんた決闘なんてできないでしょう!？」

しかしはやなの決意は硬かった。

「うん。でも、できるだけのことはやってみる!」

だが

「心配することないわよ」

霧瀬のこの言葉にはやなと葵は「えっ!？」となる。

「それってどういうことですか?」

「藤代せんせい?」

疑問の視線を向ける2人に霧瀬は千影のことを話し始める。

「あの子はデュエルアカデミアに入学してからずっと決闘では負けなしの決闘者なの。こんなピンチは何回も潜り抜けているわ。それに」

「それに??」

「あの子の眸からは闘志は消えていないわ」

頭にクエスチョンマークを載せる2人に霧瀬はウインクしながら答えたのだった。

霧瀬の言うとおり、千影の眸は紅蓮の真紅に爛々と輝いていた。

それに呼応するかのように千影の左耳に輝くネクロノミコン機械言語新訳版も千影の第3の目のように輝きを放つ。

「目の前に強大な敵がいて、それを打倒するための手がまだデッキリ眠っているというのにサレンダー?冗談じゃない!デュエルアカ

デミア以外にもこんなに楽しい血闘ができるんだから!!」  
この千影の宣言にウエスト3世は額に怒りマークを浮かべて言い放つ。

「ぬうわにを強がりをして!この状況を逆転できるものなら逆転してみろである!!もうごめんなさいしてきても許してあげないのである!ターンエンド!!」

そのウエスト3世のターンエンド宣言を聞いた千影はデッキからカードをドローするべくデッキに手を伸ばす。

「私のターン、ドロー!さらに前のターンで墓地に捨てたグリフォンの特殊効果!!無効にしたモンスターの攻撃力が2500以上の時、次のターンのドローフェイス すなわち今、もう1枚カードをドロー出来る!もう1枚カードをドロー!!」

2枚目のドローで引いたカード、サキュバスを見た千影は口元に笑みを浮かべた。

(本当に君は私の勝利の女神だね、サキュバス)

《当然よ でも、この状況ライフポイントは別としてデュエルアカデミアの入学決闘を思い出すわね》

そう。この状況、サキュバスの語る千影のデュエルアカデミアの入学決闘の焼き増しのような感じだ。

(なら、これがこの学院の入学決闘だね)

《ふふっ、そうね かつてのようにあのデカブツも容赦の欠片もなく粉碎してやりましょう》

(頼むよ、サキュバス)

《Yes, my lord》

そして千影はサキュバスを召喚するべく、手札から手に取る。

「私はチューナーモンスター、LOVサーヴァント - サキュバス - を攻撃表示で召喚!!」

LOVサーヴァント - サキュバス -                    3    ATK1500    DE  
F100

千影の場に千影が最も信頼する使い魔、サキュバスがその身を躍らせながら出現したのだった。

しかし、ウエスト3世はこの千影の手に笑い声を上げる。

「ぶわっははははははは！何を出したかと思えば、攻撃力たったの1500の下級モンスターではないか！そんなモンスターでは我輩のスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル（皇帝の紋章）は倒せないのである！！それともそれが貴様のごめんなさいの言葉であるか！？」

このウエストの言葉に千影は笑みを浮かべる。

「冗談を！これこそが私の勝利への一手！！征くよ、サキュバス！！」

《まかせて》

「4、Lovサーヴァント - ガーゴイル - に 3、Lovサーヴァント - サキュバス - をチューニング！」

サキュバスが3つの星となりガーゴイルの周りを飛び、そしてガーゴイルもその身を4つの星に変える。そして一直線に7つに並んだ星は光に包まれ、その姿を雄雄しく、そして凶悪なものに変えていく。

「妖しき星が、集いてここ破滅を誘う。破壊よ、顕現せよ！シンク口召喚！汝、絶対破壊者Lovサーヴァント - バハムート - ！！！」

Lovサーヴァント - バハムート -           7   ATK2500   DE  
F1400

光が弾けその中から赤銅色の巨大な竜が、破壊の権化が姿を現したのだった。

この千影のシンク口召喚にウエスト3世は驚愕の表情になる。

「こ、これは！？じゃあ、貴様が噂の！！！」

しかし千影は驚くウエスト3世を尻目に続けて言葉を発する。

「そして、サキュバスによってシンクロ召喚されたモンスターの攻撃力はそのターンの攻撃力を1000ポイントアップする!!!よって、このターンの攻撃力は」  
千影の宣言により、バハムートは赤銅色の巨体を白金へと変えていく。

LoV	サーヴァント - バハムート -	7	ATK	3500	DE
F	1400				

「しかし、それでは我輩のライフポイントは0にならないのである!じつちゃんは我輩にいつていたのである!!!ピンチの裏にチャンスあり、だけど既に崖っぷちってそれは駄目であるよ、じつちゃん!!!」

ウエスト3世はたぶん草葉の陰で見守っているだろう偉大な祖父にツッコミをいれる。

だが、そんなこと千影にとっては些細なことだった。

「それは違うよ、ウエスト3世!バハムートの特殊効果は手札を2枚捨てるたびに攻撃を1回追加できる!!!私は手札を2枚捨てて、攻撃を2回可能にする!!!」

「ぬうわぁんとおおお!?!?!?」

この効果を聞いたウエスト3世は仰天するしかなかった。

そして千影はバハムートに攻撃の号令を下す。

「バハムートの攻撃!メガフレア・エクステンション2連弾!!!」  
バハムートの放った無限熱量はスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を分子まで分解し、ウエスト3世にも襲い掛かる。

ウエスト3世LP0

「のおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!!!!」

ウエスト3世はそのまま空高く天を舞うとキラリとお星様へと  
なつてしまつたのだつた。

この千影に大逆転劇に観衆はわつと沸きあがつた。

決闘盤の電源を落とし、眸も元に戻した千影の元にはやなが歩み寄ると頭を下げる。

「今回は本当にありがとう。助かつたよ」

そんなはやなに千影も微笑みながら答える。

「ううん。ここに来てこんな楽しい決闘ができたんだから、こつ

ちがお礼をいいたいよ。正義の味方さん」

そのウインクを載せた千影の言葉にはやなも笑顔になると、自己紹介を始める。

「私は正義の味方部所属のティンクルセイバー、鈴鳴はやな」

「私は今日からこの学院に2ヶ月間お世話になる姫宮千影」

そして2人の『姫』は手と手を合わせたのだつた。

「「よろしくね」」

## 第17話【正義の味方部篇】（後書き）

と、いうわけで第2部【正義の味方部篇】始動です。

【三幻魔篇】を希望していた皆さん、期待を裏切ってしまったて申し訳ない。

この作品を構想した段階からライティング・デュエル騎乗決闘を書こうと思っていたので、ここは千影君の騎乗決闘導入篇にあたります。

舞台はなんとティンクルセイバーNOVAの世界です。

ティンクルセイバーNOVAは私の最も好きな作品にあたりますのでどうしてもクロスさせたかったです。

そして出てきましたドクター・ウエストの孫、ドクター・ウエスト3世。

デモベといえは西博士。西博士といえはデモベです。

オリキャラとなりますが、背格好に顔、性格までも呪いレベルで祖父とそっくりという設定です。

今回はとうとう、千影君と3世の騎乗決闘になります。どうか次回もお楽しみに。

今回の最強カード『スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル』  
皇帝の紋章』

8 ATK3000 DEF2500 光属性 機械族

自分の場にある機械族モンスター3体を生け贄にすることで特殊召喚できる。

自分の場にある、このモンスター以外の機械族モンスター1体を生け贄にすることで相手モンスター1体を破壊する。

今回の最強カードはコレです。

西博士と破壊ロボは切っても切れません。しかし名前が絶望的に長



いな。よくキ ガイも千影君も噛まずにいえるものですw w  
効果は条件を満たすことで行える特殊召喚と、モンスター破壊効果  
です。

これは原作の神出鬼没さ時には邪心のシナリオをブツチする破壊  
力を元に考えさせていただきました。

3世は2つ目の能力をガジェットを使って途切れることなく毎ター  
ン効果を使うというコンボを使っていました。

## 第18話【正義の味方部篇】

世界征服部の極星が1人、ドクター・ウエスト3世を降した千影は、はやなや葵、霧瀬に連れられて霧瀬が根城にして正義の味方部の部屋、第4保健室『湊』に招待されていた。

「ここが正義の味方部の拠点ですか」

最先端の設備を備えた以外にどこと変わりがあるわけではない保健室に千影がそう言葉を漏らした。

そんな千影の呟きに霧瀬はクスリと笑う。

「もつとゴテゴテしてモノモノしいと思った？」

「あ、いえ。そんなことは」

霧瀬の言葉に少しあたふたする千影に葵が耳打ちした。

「そんなことあるのよ。この先生、部屋を改造しちゃってて特撮アニメばりの仕掛けがあるんだから」

この葵の言葉が聞こえたのか霧瀬は腕を組みながら口を開く。

「あら浪漫溢れる部屋といって欲しいわね」

そう3人が話しこむ中、白い鎧　アクティブドレス、ティ

ンクルセイバーから制服に着替えたはやなが千影の前に進み出た。

「ねえねえ、千影ちゃん。お昼まだでしょう？さっきのお礼に美味しいところ紹介してあげるよ」

そう言うはやなに千影は少し困惑する。

「いや、さっきも言った通り、楽しい決闘ができたんだからお礼を言うのはこちのほうで……」

そんな千影に葵からの声がかかる。

「いいのよ、いいのよ。この子が運動の後のおやつを食べに行くついでなんだから」

この葵の言葉に千影は頷いた。

「あ、そうなんだ。そういうことならお供するよ」

千影が頷いたのを見た葵は霧瀬の方に向くと声をかける。

「先生はどうします？」

「昨日のアレを見た貴方がそれをいう……」

しかし、霧瀬は「る」と涙を流しながらそう答えた。

霧瀬の言葉に葵は昨日の惨劇を思い出す。

「ああ、そう言えば先生、昨日はやなにやられたんですね」

「うとうう……しばらくは水のみ我的生活……皆、楽しんできて……ああ、それと姫宮さんには後で話しがあるから戻ってきてね……」

影を背負いながら元気なく手を振る霧瀬に千影は小首を傾げると、後半の言葉に頷く。

「??はい、ここに帰ってくればいいのですね」

「それじゃあ、3人でれつつごー！」

そんな中、はやなの間延びした元気な声が響いたのだった。

はやなのオススメのお店まで少しあるので、3人は歩きながら自己紹介を行っていた。

「さつきも言ったかも知れないけど、私は鈴鳴はやな。高等部2年紅組で所属する部活は正義の味方部」

はやなの紹介に葵が続く。

「で、私が京月葵。学年とクラスははやなと一緒に。私は正義の味方部には所属してないけど、まあこの子のお守りみたいなものよ」  
「そういつつ、葵ははやなの頭をなでる。」

「はやなと葵ね。私は姫宮千影。デュエルアカデミアから2ヶ月間の短期留学でこっちに来たんだ。デュエルアカデミアは欧米式の学期システムだから、今は1年目の後期  
こっちでいうとまだ高校1年生にあたるね」

この言葉に少し葵は驚く。

「貴女、高校生だったの!？」

葵の言葉に千影は苦笑をもらす。

「うん。まあこんななりだからよく間違われるけどね」

そんな千影にはやなは声をかける。

「でも、さっきの決闘はすつごくカッコよかったよ」

「そうね。素人の目から見ても貴女がすごいのはよくわかったわ  
はやなと葵が賞賛する中「でも！」と葵が続ける。

「貴女みたいな女の子が無理するものじゃないわ」

この葵の言葉に千影はキョトンとすると口を開く。

「あの、ひよつとして2人とも私が女の子だって思ってる？」

「「??？」」

千影のこの言葉にはやなと葵の頭にクエスチョンマークが浮かび上  
がると、千影の口から驚愕の事実が語られる。

「私、こう見えても男なんだ」

この千影の言葉にはやなと葵の時間が止まったのだった。

あまりの驚きにはやなと葵が固まったのとちょうど同じころ。

「のおおおおおおおおおおおおつ！へぶしっ！！」

前回、お星様となったウエスト3世が衛星軌道を一周し地球へと帰  
還してきたのだった。

地面と熱いベージュを交わしたウエスト3世に、律儀に帰ってくるの  
を待っていたエルザがしゃがみ込むと指先でウエスト3世をつつ  
いた。

「3世、生きてるロボ？」

しばらくえびぞりの状態で足先をピクピクさせていたウエスト3世  
は勢いよく立ち上がる。

「ぬをおおおおお、超イタイのである！どれくらいイタイかとい  
うと街中でいきなり自分はシン世界の神だとほざく奴なみにイタイ  
のである！！」

どうやらウエスト3世は自分自身そのイタイのカテゴリーに入るこ  
とを自覚していないらしい。

「それだけ喚ければ、大丈夫ロボ」

そこにエルザのもつともらしいツツコミが入るが、強かに打ちつけ

た顔の痛みと敗北という屈辱に支配されたウエスト3世には届かない。

「くううううつ、まさかあの生意気小娘が、ペガサスの言っていた姫宮千影であつたか！」

どうやら、騎乗決闘のカード作成の申し入れをするとき、なにやらペガサスから千影のことを僅かながら聞いていたようだ。

「この大・天・オ！たる我輩に土をつけるだけの人物……  
っは！！これは物語の主人公によく有り勝ちな強力なライバルの登場！？と、いうことはこの物語の主人公は我輩！？」

ウエスト3世は天を仰ぎながらイタイ言葉が続ける。

「そうか、それなら物事の辻褄が合うのである！そうであるか、我輩の前に立ち塞がるライバル！好敵手と書いてライバルにアノ、姫宮千影！！これは相手にとって不足なしなのである！！」  
そこまで言つと、ウエスト3世は勢いよく腕を振り上げる。

「そうと決まればこうしてはおれんのである！ライバルの初回登場の次の回で主人公は新兵器を持ってライバルを迎え撃つのがお約束！！と、なれば……  
エエルザッ！！」

今の今まで他人の振りをしていたエルザは面倒くさそうにウエスト3世の方をむく。

「なに口ボ？イタイ演説は終わった口ボか？」

「ツッコミどころ満載な返答であるが、今はそんなことをしている場合ではないのである！でも、ツッコムって何かエロい？」

ウエスト3世自身がツッコミどころ満載で、どこからツッコンでいいのかわからんレベルであることだけは確かだった。

「そんな事はどうでもいいのである！我がライバル、姫宮千影を倒すためにアレを出すのである！！」

自分で言った言葉に自分でツッコみつつウエスト3世はそう言つとズビシッ！と指を立てた。

「アレ、口ボか」

エルザもウエスト3世の言うアレに心当たりがあるようだ。

「そう！それを持って我がライバル、姫宮千影にギャフンといわせ  
てやるのである！！」  
ウエスト3世はさらに調子を乗せると指を天高く掲げて、そう叫ん  
だのだった。

ウエスト3世の中で千影がいつの間にかライバルにされてはいたが、  
.....

キ ガイに勝手にライバルにされているなど露とも知らない千影は、  
一通り驚いたはやなと葵と共に、はやなオススメの店、喫茶『Ar  
iel』に来ていた。

白を基調とした落ち着いた雰囲気な店内のカウンターでナイスミド  
ルなおじ様、森南康史が3人を出迎えた。

「お、いらっしやい。今日は新人連れかい？」

そんな森南に常連客であるはやなは手を上げて答えた。

「どうも〜」

それに釣られて千影も森南にお辞儀する。

そんな千影を見た森南は優しげに口を開く。

「ふむ、男の子でも可愛い子はいるんだねえ」

この言葉に驚いたのははやなと葵だ。

「マスター、一目見ただけでわかっちゃった」

「さすがと言うか、何と言うか.....」

よく女子生徒の相談事に乗る森南は千影の性別を見抜くなど造作も  
なかったようだ。

「はっははは、これも年の功というものだよ。で、何にするんだい  
？」

そんな2人に森南は笑いながら注文を聞いた。

この森南の言葉にはやはなはすぐさま答える。

「私はアレ2つ〜」

しかもさすがは常連。アレで注文を済ましてしまった。

「私はいつものやつで、彼には」

葵もはやなに続いて注文を済ますと、千影に何かオススメを注文しようとするが、千影はそれには及ばなかった。

「この店のオススメランチがあればそれをお願いします。」

3人の注文を聞いた森南は「少し待ってて」と言葉を残すと調理を始めた。

注文を終えた3人は先ほどの千影男の子宣言のためストップしていた話を再開させた。

「千影ちゃ……男の子なら千影君のほうがいいかな？」

はやなのこの言葉に千影は首を横に振る。

「うん、千影ちゃんでもいいよ。従妹も私のことそう呼んでるし」

この千影の発言に葵が口を開く。

「へー、千影君には従妹がいるんだ」

どうやら葵は千影君で行くようだ。

「うん。比巫子っていうんだけど……あつ、ちょっと感じがはやなと似てるかな」

葵の言葉に頷く千影は、目の前にいるはやなが比巫子と少しだぶっで見えたようだ。

千影の言葉にはやなは自分を指差す。

「私と？」

このはやなの仕草に千影は頷く。

「うん。ほんわかした所とか、笑顔が柔らかいところとか」

その千影の答えにはやなは嬉しそうに、でも照れたように笑顔を浮かべる。

「えへへ、そうなんだ」

そんなはやなに千影は言葉を続ける。

「でも感じは似てるけど、持っているイメージは違うかな」

この言葉にはやなと葵は首をかしげる。

「イメージって？」

「例えばどんなの？」

はやなと葵の質問に千影は手を口に当てながらはやなを見ると少し





妙な空気は霧散していた。

3人の微妙な空気を感じ取ってのこの行動。

さすがはナイスミドル、森南康史といったところか。

しかし、そんな森南の介入がなくてもあの空気は完全に霧散していたであろう。

それほどの衝撃がこの後に控えていた。

それは

「で、こっちがはやな君のね」

森南がはやなの前に出したのは人の顔の大きさ程ある器に、これでもかと天を突かんばかりにアイスやクリーム、果物が盛られたパフェだった。

こういう小洒落たお店では絶対聴くことのないだろう『どん!』という音と共にそれがはやなの前に置かれた。

それも2つ。

「.....」

千影、絶句。

「はわわ〜」

それを見たはやなは目を輝かせる。

「今回は暴れなかったおかげで少な目ね」

葵の言葉を信じるならば、どうやらいつもはまだこれ以上の数を食べるらしい。

余りの大きさのパフェに絶句する千影に森南が声をかける。

「驚いたかい。うちの裏メニュー『はやなスペシャル』だよ。何時ぞや、はやな君が山のようなパフェを食べたいってリクエストしてね。僕が創り上げたんだけど、まさか複数個頼むとは僕も予想してなかったよ。いやぁー、あの時は僕もそんな顔してたのかなぁ。はっはははは」

完成したはやなスペシャルのお披露目時に、はやなが複数個頼んだ時の衝撃を未だに忘れられないでいる森南は、そう笑うのだった。

「いったただつきまゝっす！」

はやなの元気ないいただきますの声に千影はこっちの世界へと返ってきた。

「ねえ、葵……はやなのあれっってお昼は抜いてたり……」

千影は紅茶を啜る葵に声をかけるが、葵はしれっと答えた。

「ああ。はやなの胃袋は構造がどうなってるのかブラックホールみたいになってるのよ。お昼ごはんは、あの騒動の前にカルボナーラを5皿食べていたわね。言うなれば底なしの腹ペコ姫よ」

2人がそう話すうちにはやなは1つ目のはやなスペシャルを平らげると2つ目に取り掛かる。

「しあわせだよ」

はやなの食べっぷりに最初は驚いていた千影だったかがはやなの幸せそうな顔を見ると千影も顔をほころばせた。

「でも、本当に美味しそうに食べるね。そこまでたくさんは食べないけど、気持ちい食べっぷりで言えば十代といい勝負かも」

千影の出した十代の名前に葵が聞き返す。

「それってデュエルアカデミアの友達？」

「うん。デュエルアカデミアは寄宿制だから本当の意味で同じ釜の飯を食うからね」

千影は頷きつつ、アイスティーを口に含む。

そんな千影に早々と2つ目のはやなスペシャルを食べ終えたはやなが声をかける。

「そう言えば、千影ちゃんはこっちに留学ってことは特待生用の宿舍に住むの？」

このはやなの発言に千影は首を横に振る。

「ううん、ヌーベルトキオシティに友達がいるから、その友達の家にもホームステイだよ」

「そうなんだあ」

そう3人で楽しくお喋りをしつつ、千影もランチセットを食べ終え

るとお会計を済ませて店を出た。

店を出た3人は霧瀬の待つ保健室に足を向けつつ、千影が口を開いた。

「でも、あのはやなスペシャルが1つ税込み1280円なのがびつくりだよ」

千影はお会計の時に聞いたはやなスペシャルの値段に驚きを隠せな  
いでいたのだ。

この言葉に葵も頷く。

「私も、あれはほとんど原価なんじゃないかって思うわ」

「マスターはとおつても、いい人だよお」

そう2人が言う中、はやなは満足そうに笑ったのだった。

そんなはやなに千影は先ほどのはやなの食べっぷりを思い出すと、  
保健室でうな垂れていた霧瀬と、その霧瀬に葵がかけた言葉が繋が  
った。

それを確認するために葵に声をかける。

「ひよっとしてだけど、藤代教諭が元気なかったのって  
そう言いつつはやなを見た千影に葵は頷いた。

「ご明察通り、正義の味方部初部員の獲得に気をよくした藤代先生  
は無謀にもはやなに奢ったのよ。上限なしでね」

それを聞いた千影は額へと手を当てた。

「うわぁ……………」

「まあ、この子の食べっぷりを知らなかったとはいえ、あれは高く  
ついた部員勧誘費だったわね」

葵はそこまで言うと、千影へとある忠告を發した。

「それと藤代先生、あなたを正義の味方部に勧誘する気満々だから  
注意しておいた方がいいわよ。なんか貴方の世話を仰せつかった事  
をいいことに抱き込む気満々だから」

この葵の言葉にはやなは目を光らせる。

「千影ちゃんも正義の味方部に入るの？」

はやなのこの発言に千影は頭を捻る。

「どつだろつ？ここに留学してきた目的は、ここの生徒が考案したつて言う騎乗決闘のノウハウをデュエルアカデミア本校に持ち帰ることだし。それにまだ、こちらで用意されているはずのD・ホイールもまだ受け取ってないし……あれ？藤代教諭が私の世話を仰せつかったってことはひょっとして」

「名答」

千影がそこまで思いついたとき、目の前の扉

藤代霧瀬が

根城の保健室の扉が開き霧瀬から声がかけられた。

どうやら3人で話し込んでいるうちに保健室の前まで来ていたようだ。

開いた扉の前で仁王立ちした霧瀬は千影たちを保健室に招き入れると、出て行くときにはなかったアタツシケースを千影に差し出した。

「私がああなたのお爺さんから依頼を受けたダールレス学院の卒業生、藤代霧瀬よ。そして、これが貴方のD・ホイール」

差し出されたアタツシケースを手に千影は霧瀬にとある疑問をぶつけた。

「でも、これバイクにしては小さすぎやしませんか？」

そう、D・ホイールはバイクなのだ。

しかし、霧瀬は千影が手にしたアタツシケースの中身がD・ホイールだと言う。

「まあ、中身を開けてみなさいな」

霧瀬のその言葉と共に千影はアタツシケースを開く。

そこには

「わあ、アクティブドレスだあ」

はやなの言葉通り、今日はやなが纏っていた白い鎧に似た黒い鎧が収まっていたのだった。

それに啞然とする千影に霧瀬は笑いながら口をあける。

「ふっふふ、それこそがD・ホイールの能力を付加したアクティブドレスよ！ダールレス学院時代、偶然にも資料室でみつけたDemo

n B a n e っていうロボットの設計図をこんなこともあるのかと写しておいたのよ。でも設計図はあっても各術式を構築するための理論がどうしてもわからなかったから今までお蔵入りしてたけど、半月前に光明が見えたわ!!」

そこで霧瀬は大仰に両手を掲げる。

「貴方のお爺さんの伝手で霸道から、その理論が手に入ったのよ!そして、設計図と理論と私の夢と浪漫と熱意の全てを持って、そのアクティブドレス型デモンベインが完成したのよ!!」

千影の手にもつ黒いアクティブドレスをズビシッ!と指差したのだつた。

「これが・・・デモンベイン・・・私の魔を断つ剣・・・」

千影はそっぴいながら左の耳についたピアスをなでる。

(そうか、それでお爺様はネクロノミコンを)

いかに科学とのハイブリッドとはいえ、魔導書なしではデモンベインの各術式は起動しない。

(そして、唯一この生まれたての魔導書にある不自然なりソースはこのため!この鬼械神を登録するための空きだったんだ!!)

そこまで考え付いた千影が霧瀬に何かを言おうとしたその時、放送からあのキ　ガイ　ウエスト3世の言葉が響いた。

『聞こえているか!我が終生のライバル姫宮千影!!今回は世界征服部が頭脳にして『緑狂』、大・天・オ!ドクタアア・ウエエエエスト3世が貴様に挑戦状を叩き付けるのである!!』

けたたましいハウリング音と共にウエスト3世の言葉が続く。

『決闘方式は我輩が考案した騎乗決闘!すでにペガサスとこちらの協力者からスピードスペルとD・ホイールを受け取っていることは判っているのである!!姫宮千影、高等部入り口にてお前を待つのである!我輩を恐れぬのならかかってこいなのである!!』

そこまでいうとブツッ!と放送が切れた。

この放送にはやなと葵は目を合わせると千影の方を向く。

「千影ちゃん……」

「どうする？世界征服部の罠かもしれないわよ」

2人の言葉に千影は首を横に振る。

「ううん。私は騎乗決闘を数多く経験するためにここに来たんだから、この状況は好都合だよ。藤代教諭」

そこで千影は霧瀬に顔を向ける。

「世界征服部と戦うのが正義の味方部でしたね？」

この言葉に霧瀬は頷く。

「ええ、そうよ」

「なら、私は正義の味方部に入部します。そうした方が彼と闘える機会が増えますし」

この千影のいきなりの入部宣言にはやなは喜び、葵は何ともいえない顔になった。

「よろしくね、千影ちゃん」

「まあ、貴方の留学の目的がそうなら、こっちがとやかく言う立場にはないわね」

そんな2人を見た千影は微笑を浮かべると再度、霧瀬のほうを向きアクティブドレスを掲げながら聞いた。

「で、藤代教諭。この子の名は？」

その千影の問いに霧瀬は笑みを浮かべると自信満々に言い放つ。

「千の影を敷く夜（Night）の剣にして、万の魔を断つ騎士（Knight）の剣。ナイトセイバーよ……」

千影の手に持つナイトセイバーにネクロノミコン機械言語新訳版は歡喜の輝きを人知れず放つのだった。

黒い甲冑

アクティブドレス・ナイトセイバーに着替え終

え、シニヨンに纏めた銀髪を解き放ち、さらにアクティブドレスの上に陣羽織を羽織った千影は美咲輝学院高等部入り口にやって来ていた。

千影の近くには同じくティンクルセイバーに着替えたはやなや付き

添いの葵、霧瀬の姿も見られる。

そして、その千影たちの視線の先には

「遅かったであるな。我が終生のライバル姫宮千影」

そこにはサイドカーをつけたハーレーに跨ったウエスト3世が待ち構えていたのだった。

その言葉に千影はその身に纏う黒い鎧を示して言った。

「少し、これに着替えるのに手間取ってね」

そんな千影の姿を見たウエスト3世は鼻で笑う。

「ふん、それが貴様のD・ホイールであるか。だが！そんな脆弱な装備に我輩が考案した騎乗決闘に耐えられると思っただら大間違いである！！エルザッ！！」

千影に向かってそう言い放つと、ウエスト3世はエルザを呼ぶ。

「運転はまかせるのである！You Have Controlなのである！！」

呼ばれたエルザがサイドカーに飛び乗ると、ウエスト3世に答えた。

「I have Controlポ！」

すると、ウエストの跨るハーレーに火がつき、けたたましいエンジン音が鳴り響く。

「さあ！貴様も早く騎乗決闘の準備をするのである！！」

この言葉に千影は各部位の最終チェックを始める。

「脚部位、断鎖術式番号『セレス』、式号『ウィングダム』 接続確認・

・・・。 右腕部、魔爪型支援術式『レクサス』 接続確認・

・・・。 左腕部、魔砲型召喚術式『レガリア』 接続確認・

千影がその名を呼ぶごとに各部位が喜ぶかのような唸り声を上げる。

「ネクロノミコン機械言語新訳版、鬼械神『ナイトセイバー』登録完了！！ナイトセイバー・騎乗決闘形態 起動！！」

【Knight Mare mode Drive】

その千影の声に反応して千影のピアス、ネクロノミコン機械言語新訳版に文字が浮き上がると同時にヘッドセットの両端からバイザーが出現する。





千影の言葉にネクロノミコン機械言語版が文字を浮かび上がらせると、千影の足場の時空間が歪曲し反発、それが巨大な推進力となって千影を前へと押し出した。

ウエスト3世LP4000:SPCO

千影LP4000:SPCO

先行を取ったのはウエスト3世だった。

「まずは我輩のターンである！ドロー！！」

手札に加えたカードを見ると、ウエスト3世は手札からモンスターを召喚する。

「我輩は古代の歯車を守備表示で召喚するのである！！」

古代の歯車 2 ATK100 DEF800

ウエスト3世はさらに手札からカード1枚を選び出す。

「さらにリバースカードを場に1枚セットしてターンを終了するのである！」

このウエスト3世の戦術に千影は眉をひそめた。

(これはさっきの決闘と同じ戦術……と、いうことは相手の伏せたカードは墓地ある 2以下のモンスターを復活させるエンジンジェル・リフトと見るべきか)

そこまで考えた千影は左腕部の『レガリア』にセットされたデッキへと右手を掲げる。

「私のターン、ドロー！」

アクティブドレスを纏っているが、ほとんど生身の状態で高速移動しながら決闘する千影のための支援用として造られた『レクサス』が千影のドローと同時にサポートアームを展開し千影の手からドロしたカードを取ると、その内部の手札へと加えた。

ウエスト3世LP4000:SPC1  
千影LP4000:SPC1

千影のスタンバイフェイズが来たことで千影、ウエスト3世の2人に1つずつスピードカウンターが乗る。

千影は手札を見ると、この騎乗決闘の独特の制約に歯噛みした。

（強力な効果のスピードスペルになればなるほど発動するために必要になるスピードカウンターが増えていく。と、言うことは序盤から強力な魔法カードの連続使用で攻勢に出ることはできないと言うことか……。これは今まで体感したことのない決闘になりそうだ）

そう考えた千影はすぐさま、現在に適した戦術を組み立てると行動に移す。

「私はLOVサーヴァント・ヴォーパルバニー - を攻撃表示で召喚！」

LOVサーヴァント・ヴォーパルバニー -      4      ATK1000  
DEF500

「この時、LOVサーヴァント・ヴォーパルバニー - の効果発動！このモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする！」

ヴォーパルバニーの効果でカードをドローした千影はヴォーパルバニーに号令を下す。

「ヴォーパルバニーで古代の歯車を攻撃！フラッシュストライク！」

ヴォーパルバニーが光の弾を作り出すとそれを蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた光の弾はウエスト3世の古代の歯車を粉碎した。

「だが、ここで畏カード、エンジェル・リフト発動なのである！このカードの効果により、墓地にある古代の歯車を復活させるのであ



スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜

8

ATK3000 DEF2500

「やはり、来たか！」

ピタリと予測を当てた千影にウエスト3世からの声がかかる。

「こいつの効果は知っているであるな。場の機械族モンスター1体を生け贄にすることで相手の場のモンスター1体を破壊する効果！我輩は手札より、グリーン・ガジェットを召喚するのである！！」

グリーン・ガジェット 4 ATK1400 DEF600

ウエスト3世の場にスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の効果起動のための生け贄されるモンスターが現れた。否、それだけではない。

「そしてグリーン・ガジェットの効果でデッキからレッド・ガジェットを手札に加えるのである！！」

デッキから手札に新たなモンスターを加えたウエスト3世に千影は歯噛みした。

「くっ！生け贄モンスターを手札に加え、確保し続けることができるコンボか！！」

千影のこの言葉にウエスト3世は満足げに声を上げた。

「その通り！この大・天・オ！ドクタアア・ウエエエエスト3世が考えに考え抜いたコンボである！！さあ、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜！グリーン・ガジェットを鋼鉄の弾丸に変えて、やつのウサギちゃんを粉碎してやるのである！！レッツ、ジャム！！」

ウエスト3世の場のグリーン・ガジェットが生け贄に捧げられ、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜の全砲門がヴォーパルバニーに向けられる。



「しかし、このときケルベロスの効果が発動！このカードが戦闘で破壊され墓地に送られたとき、自分のデッキから攻撃力1500以下のLOVサーヴァントと名のついたモンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚することができる！！」

千影はそう言つと『レガリア』にセットしたデッキからカード1枚を手に取る。

「私はチューナーモンスター、LOVサーヴァント・サキュバスを攻撃表示で召喚！！」

LOVサーヴァント・サキュバス - 3 ATK1500 DE  
F100

千影の場にサキュバスが姿を現した。

そんな召喚されたサキュバスから千影に声かけられた。

《風を切るって気持ちいい》

そんな暢気なサキュバスの台詞に千影は頷きつつ、忠告する。

（うん。でも油断しないで。あのウエスト3世はさつき1回倒したとはいえ、この学院の強者の称号である極星の持ち主。さらにこの騎乗決闘の考案者なんだから）

《わかつてるわよ それにしてもご主人様、似合ってるわねえ、それ。まるで変身アニメのヒロインみたい》

そんな千影にサキュバスはそう指差しつつ茶化したのだった。

（まさか、こちらで用意されていたD・ホイールがこんなモノだなんて全く予想してなかったよ。でも性能は申し分ないね）

自分に与えられたアクティブドレス・ナイトセイバーの性能の高さに千影は舌を巻いていた。

サキュバスはそんな千影の頭に載せたヘッドセットを指差す。

《そのヘッドセットも私の角そっくりだし、お揃いみたいね》

（全く。サキュバスも今が決闘中だつてこと忘れないように！ほら征くよ！！）

サキュバスの言葉に息を1つついた千影は地面を踏みしめ、地面を蹴る。

ただ、それだけの事なのに2基の断鎖術式が与えた推進力が千影に大いなる速度と飛翔距離を与える。

《ああん 置いてかないでよお》

千影に置いてけぼりをくらいそうになったサキュバスは空を飛び、千影に追隨する。

千影がサキュバスとそんな話をしているなど露も知らないウエスト3世は、千影の場に現れたサキュバスに苦い顔になった。

「ぬぬぬっ！アレはさっきの決闘で我輩に土を付ける要因となったチューナーモンスター！！ここでそれを持ってくるのであるか！！」  
このままではさっきの決闘同様、バハムートをシンクロ召喚され連続攻撃を喰らうのは必定。

「しかし、我輩はこの物語の主人公！こんなところで貴様には屈しないのである！！Sp・エンジェル・バトン発動なのである！！」  
このウエスト3世の行動に千影は身構える。

「っ！！」

千影にとってはスピードスペルの初発動なのだ。

「このカードの効果は自分のスピードカウンターが2つ以上あるときに発動！デッキからカードを2枚ドロし、その後手札1枚を墓地に送るのである！！我輩はカードを2枚ドロ！！」

デッキから2枚のカードを引いたウエスト3世はガッツポーズを取り心の中で叫んだ。

（キタキタキタキタアアアアツなのである！！これさえあれば如何なモンスター出てこようとも返り討ちなのである！！）

そしてウエスト3世は手札のカード1枚を捨てながら天を仰ぐ。

「ああ、我輩のこの主人公補正が眩しいのである」

「ただの運がいいだけロボ」

ウエスト3世の言葉にサイドカーでハーレーの運転制御をするエルザからツッコミが入る。

「オウツ！アイ・アム・ヒーロー！！ターンエンドなのである！！」  
しかし、ウエスト3世の耳には全く入っていないようだった。

ウエスト3世のターンエンドを聞いた千影はデッキへと手を伸ばす。  
「私のターン、ドロー！」

ウエスト3世LP4000：SPC3

千影LP4000：SPC3

千影は、勝負に出るべく『レクサス』内部の手札から1枚のカードを右手へと移す。

「私はLOVサーヴァント-ヴォーパルバニー-を召喚！」

LOVサーヴァント-ヴォーパルバニー- 4 ATK1000

DEF500

「ヴォーパルバニーの効果でカードを1枚ドロー！」

デッキからカードを1枚ドローした千影が、サキュバスへと目をやる。

その視線にサキュバスは頷くと、千影が高らかに宣言する。

「4、LOVサーヴァント-ヴォーパルバニー-に3、LOVサーヴァント-サキュバス-をチューニング！！」

千影の声と共に2体の使い魔は星になると千影の周りを飛び回る。

「妖しき星が、集いてここ破滅を誘う。破壊よ、顕現せよ！シンク口召喚！汝、絶対破壊者LOVサーヴァント-バハムート-！！」

LOVサーヴァント-バハムート- 7 ATK2500 DE

F1400

そして星が砕け、千影の場には千影のエースモンスター、バハムートがその威容を知らしめていた。



「さらにサキユバスの効果で攻撃力が1000アップする！」  
千影の宣言と共にバハムートがその身を白金へと変えていく。

LOVサーヴァント - バハムート -      7      ATK3500      DE  
F1400

そしてバハムートはウエスト3世のスーパーウエスト無敵ロボ28  
號スペシャル〜皇帝の紋章〜の攻撃力を上回ったのであった。

この光景を千影のナイトセイバーに搭載されたカメラや各種機器で  
実況される映像を眺めていたはやなから声が上がる。

「やったあ！これでさっきと同じように千影ちゃんの勝ちだね！！」  
しかし葵や霧瀬は、はやなの用に楽観はできなかった。

「そうは言ってもはやな、あのキチ イはキ ガイだけれど、一応  
極星なのよ。私はそう簡単にはやらせてはくれないと思うわ。キチ  
イだし」

「それにこの騎乗決闘、姫宮さんは初体験。これはどうなるか判ら  
ないわ………」

そう言う霧瀬だったが、いきなり拳を握ると立ち上がり、感極まっ  
たかのように涙を流し始めた。

「やっぱり、バイクじゃなくてアクティブドレスにしておいて正解  
だったわ！流石、私！！」

この霧瀬の言葉に葵が首をかしげる。

「あれ？先生、千影君のお爺さんから依頼を受けてアレ造ったんで  
すよね？」

葵の問いに霧瀬は首を縦に振る。

「ええ、そうよ。でも始めはバイクでって依頼だったんだけど、私  
が趣味でこんなの造ってますよあってアクティブドレス見せたら、  
姫宮さんのお爺さんが親指立てて、ソレで造ってくれ、資金は上限  
なしで用意しよう、必要な資料があったらワシが集めるって言って

くれたから張り切っちゃって」

霧瀬から返ってきた答えに呆れ帰った葵は、どうやって映しているのか千影を横から映した映像に指を向ける。

「………で、アレになったと」

「千影ちゃんのアクティブドレスにそんな誕生秘話があったんだねえ」

対するはやなはお気楽そうにそう述べたのだった。

まさかD・ホイールをこんなにした原因が祖父にあることなど知らない千影は、バハムートに攻撃の号令を下していた。

「バハムートでウエスト3世のスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を攻撃！メガフレア・エクステンション！」

バハムートから放たれた無限熱量がウエスト3世のスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜を塵も残さず焼き尽くす。

そして超過ダメージ500がウエスト3世のハーレーを揺らす。

「おおっうっ！！」

「ロボオオッ！！」

ウエスト3世LP3500:SPC3

そして場のカードが全てなくなったウエスト3世に千影は高らかに宣言する。

「これでバハムートの効果を起動すれば、君に3500のダメージ！この勝負、私の勝ちだ！！」

しかし、ウエスト3世はこの時を待っていた。

「それはどうであるかな！我輩は手札のモンスターの効果を起動するのである！！」

このウエスト3世の言葉に千影が驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

驚く千影を尻目にウエスト3世は手札の1枚を高々と掲げる。

「我輩は手札より、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYのその力見せ付けるガグ!」を攻撃表示で特殊召喚するのである!」

ウエスト3世の場が一瞬光に包まれると、その場に新たなロボットが出現した。

蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYのその力見せ付けるガグ!」  
8 ATK3000 DEF2500

その姿に千影の表情は驚愕に染まる。

「新しい最上級モンスターを特殊召喚した!?!」

そう驚く千影にウエスト3世は自信満々に言い放つ。

「蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYのその力見せ付けるガグ!」はスーパーウエスト無敵ロボ28号と名のつくモンスターが相手によって破壊された時、このカードが手札にあれば場へと特殊召喚できるモンスター!」

見た目、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャルの皇帝の紋章と変わらない蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYのその力見せ付けるガグ!」はフィールドに召喚されたのが嬉しいのか両手のドリルをこれでもかとギョインギョイン廻しながら空を飛ぶ。

「しかし!現時点ではバハムートの攻撃力は蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYのその力見せ付けるガグ!」を超えている!」私はバハムートの効果を発動!手札を2枚捨て、攻撃を追加する!」

だが、千影は負けじとバハムートの効果を起動するためのコスト、手札2枚を墓地に捨てるとバハムートへと命を下す。

「バハムート!蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTI

NY〜その力見せ付けるガグ！〜に攻撃！！メガフレア・エクステンション！！」

バハムートがスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル〜皇帝の紋章〜にやったのと同様に蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY〜その力見せ付けるガグ！〜にも無限熱量の炎弾を放つ。

「甘いのである！蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY〜その力見せ付けるガグ！〜が攻撃対象となった時、墓地にある機械族モンスター1体を除外することで相手モンスターの攻撃を無効にできるのである！！」

ウエスト3世は墓地から古代の歯車1体をゲームから取り除くと蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY〜その力見せ付けるガグ！〜に向かって叫んだ。

「ええええい、左舷弾幕薄いであるぞ！なにやってんのつである！！」

このウエスト3世の言葉共に蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY〜その力見せ付けるガグ！〜が弾幕を展開、バハムートの攻撃を打ち落とすのだった。

この効果を見た千影は歯噛みした。  
（くっ！ウエスト3世の墓地にはあと4体の機械族モンスター。対してこちらは全手札を投入してもバハムートの攻撃追加回数は2回これではこちらが不利だ……。今は受け手に廻るしか手はない）

そう考えた千影は手札から2枚のカードを選び出す。

「私はカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

LoVサーヴァント - バハムート -      7      ATK2500      DEF1400

千影のターンエンド宣言と同時にバハムートの攻撃力は元へと戻る。

そしてターンはウエスト3世へと廻った。

「我輩のターン、ドロー！」

ウエスト3世LP3500:SPC4

千影LP4000:SPC4

デッキからカードをドローしたウエスト3世は場に存在する蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYはその力見せ付けるガグーを指差すと高らかに宣言する。

「そして、このモンスターのもう1つの特殊能力を起動するのである！！」

そのウエスト3世の声と共に、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYはその力見せ付けるガグーは体中のいたるところからペンチや鋸、ドライバー、工具ナイフ、金槌など様々な工具が握られたアームを千手観音が如く出現させた。

この異様な姿に千影は驚く。

「っ！？」

驚く千影を尻目にウエスト3世は効果の説明を始める。

「蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYはその力見せ付けるガグーが表側表示で場に存在する時、墓地にある機械族モンスター1体を選択！そのモンスターの に達するまで墓地に存在する他の機械族モンスターを除外することにより、選択したモンスターを場に特殊召喚できるのである！！」

そう言ったウエスト3世はスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシヤル皇帝の紋章とグリーン・ガジェット、古代の歯車2枚を手に掲げる。

「我輩はスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシヤル皇帝の紋章を選択！その は8、よって 4のグリーン・ガジェットと 2の古代の歯車2体を除外し、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYはその力見せ付けるガグーの特殊効果を発動す

るのである！ロツクンロオオオオオル！！」

ウエスト3世の叫び声と共に蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYとその力見せ付けるガグーがウエスト3世に選ばれた4体のモンスターのスクラップをガチャコンドガンと、その工具で弄り倒す。

そして、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYはその力見せ付けるガグーがその場から離れると、そこには破壊されたスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル皇帝の紋章がピッカピカの姿で甦っていたのだった。

スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル皇帝の紋章 8

ATK3000 DEF2500

これを見たウエスト3世が笑い声を上げる。

「ふはははは！これが『リフォームの匠』と恐れられた我輩の実力である！暗くじめじめした居間も家族の笑顔溢れる清潔な破壊ロボに！！劇的ビフォーアフターバーナー・オーギメンター！！しかし、その代償にこのモンスターが表側表示で場に存在する間は、このカードのコントローラーは通常召喚が行えないのであるが、そんなことは我輩の頭脳によつて全て解決済みなのである！Sp・サモン・スピダー発動なのである！！」

ウエスト3世が手札から新たなスピードスペルを発動する。

「このカードは自分のスピードカウンターが4つ以上の時、発動！自分の手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できるのである！！我輩はレッド・ガジェットを特殊召喚するのである！！」

レッド・ガジェット 4 ATK1300 DEF1500

これでウエスト3世の場にスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル皇帝の紋章の効果起動のための生け贄が出てしまった。



しかし千影も然る者。この攻撃を利用しワイバーンを特殊召喚した。  
「だが、こちらにはまだ蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYとその力見せ付けるガグ！の攻撃が残っているのである！！ワイバーンを攻撃するのである、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYとその力見せ付けるガグ！！！」  
ウエスト3世の命令が響き渡り、蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYとその力見せ付けるガグ！！から射出されたドリルがワイバーンを襲う。

「しかし、ワイバーンは攻撃力と守備力を800ポイントダウンさせることにより戦闘での破壊を免れる効果を持つ！！」

LOVサーヴァント - ワイバーン -                    7    ATK1600    DEF1600

蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINYとその力見せ付けるガグ！！の攻撃を耐え切ったワイバーンの姿にウエスト3世は悔しそうに顔を歪めた。

「全く！本当に往生際の悪い奴なのである！！いや、それでこそ我輩のライバルに相応しいとも言えるのである！！我輩はこのままターンを終了するのである！！」

ウエスト3世のターンエンド宣言に、千影は目の前を行く2体の破壊ロボを見ると険しい顔をしたのだった。

「わわわ！千影ちゃんがピンチだよお！！」

その光景をモニターでみていたはやなは大声を上げる。

葵と霧瀬の表情もよくはない。

「かなり厳しいですね」

葵のその言葉に霧瀬は腕を組みつつ答えた。

「ええ。流石は極星といったところかしら。性格には大いに問題あ



りでもスキルは超一流といったところね」

「千影ちゃん！がんばれええっ！！」

2人の顔が険しくなる中、はやなはモニターに移る千影にエールを送り続けたのだった。

千影はバイザーに映る戦況に表情を険しくすると頭の中で、この先をどうするかを考える。

（流石に攻撃力3000のモンスターが2体だとかなりきついな。

それにさっきの攻撃で大きくスピードカウンターを削られた。これじゃ強力なスピードスペルでの逆転も望めない……………

・・ならば、ここは耐え凌ぎ勝機を待つ！！）

その考えにいたった千影はデッキからカードをドロースるべく右手を『レガリア』へと持っていく。

「私のターン、ドロース！」

ウエスト3世LP3500：SPC5

千影LP1000：SPC2

引いたカードを見た千影は1つ頷く。

（よし！これなら！！）

そして1枚のカードを『レガリア』へと挿入する。

「私はSp-エンジェル・バトン発動を発動！この効果でカードを2枚ドロース、手札から1枚を捨てる！！そして、この墓地に捨てたLovサーヴァント・カトブレパス-の効果発動！このカードが手札から墓地に置かれた時、このモンスターを特殊召喚できる！私は守備表示で特殊召喚！！」

千影は墓地に置かれたカトブレパスを手にとるとそれを場へと特殊召喚した。

Lovサーヴァント-カトブレパス- 4 ATK1500 D



自分のスピードカウンターが4つ以上の時に発動！自分のモンスター1体の攻撃力の半分のダメージを相手に与えるのである！！」

「っ！！」

この言葉に千影は身構えた。

「我輩は蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY！その力見せ付けるガグー！の攻撃力の半部1500を貴様に与えるのである！！」

ウエストの宣言と共に蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY！その力見せ付けるガグー！から無数のドリルが放たれる。

「さらばである！我輩の永遠のライバル、姫宮千影！！こうして我輩の前に立ち塞がった巨悪は潰えたのであった……完！！」  
勝手に物語を完結させたキチ イだったが、千影はこんなところで終わる気はさらさらなかった。

「永続罫、ライフモニメント発動！」

千影の発動した罫カードによって千影に迫っていた無数のドリルは目標を見失ったのか明後日の方角へと飛んでいった。

この怪異な現象に驚きの声を上げたのはもちろんウエスト3世だ。

「ぬうわぁにいつ！？」

そんなウエスト3世に千影が、発動した罫カードの説明に入る。

「このカードは自分のライフポイントが1000以下の時に発動！このカードがある限り、私は相手からの効果ダメージを受けず、相手モンスターから受ける戦闘ダメージを半分にする！さらにこのカードは魔法、罫、モンスター効果では破壊されない！！」

「ぬぬぬぬっ！」

千影の言葉に歯軋りするウエスト3世だったが千影がしかけた罫はこれだけではない。

「さらに私は罫カード、スリップ・ストリーム発動！このカードはスピードカウンターが相手より少なく相手がスピードスペルを使った時に発動！次のターンのスタンバイフェイズで相手のスピードカ

ウンターの数と同じ数に出来る！！」

自分の攻撃を回避するどころか利用までされたウエスト3世は怒り狂った。

「ぐぬぬぬぬっ！こうなったら、もう自棄である！！いけい！蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY！その力見せ付けるガグー！、スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル！皇帝の紋章！よ！！やつの雑魚2体を蹴散らすのである！！」

ウエスト3世の号令を受けた2体の破壊ロボはそれぞれカトブレパスとグレムリンをドリルで粉々に砕いた。

この光景に溜飲を下げたウエスト3世は高らかに笑った。

「ぶわっはははははははははは！さすが、我輩である！！例えSp・ソニック・バスターが無効にされたとはいえ、未だに我輩が有利！我輩の勝利に間違いはないのである！！ターンエンド！！」  
ウエスト3世のターンエンド宣言を聞いた千影はデッキへと手を伸ばす。

「私のターン、ドロー！この時、スリップ・ストリームの効果で私のスピードカウンターは君に並ぶ！断鎖術式番号『セレス』、式号『ウインダム』  
出力全開！！」

【Explosion】

千影の両足の時空間が大きく歪むと、千影は爆発的な速度を得る。

ウエスト3世LP3500：SPC7

千影LP1000：SPC7

引いたカードに目を落とした千影は大きく目を開く。

（っ！これならば！！）

そして引いたカードを見た千影は一筋の光明が見えた。

「私はLovサーヴァント・マンティコア - を攻撃表示で召喚！！」

Lovサーヴァント・マンティコア - 1 ATK100 DE

千影の場に獅子の体に蠍の尻尾を持つ使い魔が現れた。

しかし、ウエスト3世はそのモンスターを見るなり笑い声を上げる。

「ぶわっははははは！それが今の貴様の精一杯であるか！！そんな雑魚モンスターでは我輩の蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号 DESTINY！その力見せ付けろガグ！とスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル！皇帝の紋章！は倒せないのである！！」  
だが、千影にとってはそんなことは百も承知だった。

「わかつているさ！この子の能力は戦闘能力にあらず！！このモンスターの特殊効果は自分の場にあるトークン以外のモンスターを生け贄にすることで、1体の生け贄につき2枚のカードをドロウできる！！私はワイバーンとマンティコアを生け贄に捧げ、デッキからカードを4枚ドロウする！！」

千影の場の2体の使い魔が消え、4枚の新たな可能性を秘めたカードに変わる。

新たに加わったカード4枚を見た千影は大きく頷いた。

（来た！私はこの時を待ってたんだ！！）

そして千影は逆転のための札を切る。

「私はS p - オーバーブーストを発動！自分のスピードカウンターが6つ以上ある時、スピードカウンターを4つ増やす！！ネクロノミコン機械言語新訳版、接続！！術式開放！凍てつく荒野、舞え『シヤンタク』！！」

【Flight unit Drive】

千影の言葉と共にネクロノミコン機械言語新訳版がその中に記載された術式を千影の背中に展開する。

それは黒い翼だった。

否、黒い小さな粒子が数多く噴出し、それが翼に見えるのだ。

両足2基の断鎖術式と背中に顕現した飛翔術式が一気に千影のスピードを押し上げる。

千影LP1000:SPC11

ウエスト3世を大きく抜き去った千影の眸は紅蓮の真紅に爛々と輝いていた。

「これで血闘の舞台は調った！私は手札からSp・ジ・エンド・オブ・ストームを発動！！」

千影の発動したスピードスペルにウエスト3世は驚愕の表情になる。

「そ、そのカードはあ！！」

「Sp・ジ・エンド・オブ・ストーム！その効果は自分のスピードカウンターが10以上ある時、発動。フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する！！」

千影から巻き起こった嵐がウエスト3世の2体の破壊ロボをスクラップへと変える。

「のおおおおおっ！！我輩の蒼穹のスーパーウエスト無敵ロボ28号DESTINY！その力見せ付けるガグ！！とスーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル！皇帝の紋章！がああっ！！」

悲鳴を上げるウエスト3世に千影は言葉を続ける。

「そして、この効果で破壊されたモンスターの数×300ポイントのダメージをモンスターのコントローラーへと与える！！ウエスト3世、君には600ポイントのダメージを受けてもらおうよ！！」

千影の言葉と共にウエスト3世の場に巻き起こった嵐はスクラップを舞い上げ、それをウエスト3世へとぶつける。

「あぎやあああっ！！」

ウエスト3世LP2900:SPC7

だが、千影の手はこれだけではない。

「さらに私はSp・スーパー・エリクサーを発動！！自分のスピードカウンターが9以上ある時、自分の墓地からモンスター1体の特

殊召喚する！甦れバハムート！！」

LOVサーヴァント - バハムート -                    7    ATK 2500    DE  
F1400

千影の場に赤銅の破壊竜が復活し咆哮を上げた。  
最後に千影は止めとなる切り札を切る。

「そして、私はSp-パワー・バトンを発動！！このカードはスピ  
ードカウンターが6つ以上ある時、自分のデッキからモンスター1  
体を墓地に送る！！」

千影はデッキから1枚のカードを選ぶとそれを高々と掲げる。

「私はLOVサーヴァント - 【猛鬼】ギガス - を墓地に送る！そし  
てバハムートで戦闘だ！！」

千影は体勢を反転させるとウエスト3世と向かい合う。

「ま、待つのである！正義の味方が有無を言わずに鉄拳制裁など  
非人道的なのである！！ここは1つ膝を付き合わせて平和というも  
のを語り合おうではないであるか！！」

千影が発動したスピードスペルがどういいうものかを理解していたウ  
エスト3世は必死に千影を説得する。

「君も悪を謳う者ならば大志を抱いた悪であれ、ウエスト3世！！  
バハムートでウエスト3世に直接攻撃！！」

バハムートの腕に無限熱量が集まっていく光景にウエスト3世はエ  
ルザに泣きついた。

「エ、エ、エ、エ、エルザッ！なんとかするのである！！」

しかし、世界というものは余りにも無常だった。

「3世、人生諦めが肝心口ボ」

「諦め速すぎっ！！」

顔をムンクの叫びのようにするウエスト3世に千影は先ほど発動し  
たSp-パワー・バトンの効果を起動する。

「この時、Sp-パワー・バトンの効果が発動！墓地に送った【猛

鬼】ギガスの攻撃力3500を、バハムートに加算する!!」  
バハムートの腕に、まだエネルギーが集まる。まだ、まだ、まだ

いつまでも膨張を続けると思われた無限熱量の炎弾はバハムートの全長を超えたあたりで止まった。

その攻撃力

LOVサーヴァント - バハムート -           7   ATK6000   DE  
F1400

そして千影はバハムートへと号令を下す。

「灰は塵へ還り、塵は無へと還る!昇華せよ!!!メガフレア・ノヴァ!!!」

千影の号令の元、バハムートから放たれた炎弾はウエスト3世を包み込み大爆発を起こした。

「のわあああああつ!!」

「ロボオオオオオオ!!」

ウエスト3世LP0:SPC1

ウエスト3世とエルザはその爆発の衝撃により、ハーレー共々どこかへとすっ飛んでいったのだった。

初の騎乗決闘を終えた千影は、眸の色を元に戻して、はやなたちの待つ高等部入り口へと帰ってきていた。

「千影ちゃん!」

そこではやなが千影に抱きついてきた。

「やったね。正義の味方部での初勝利だよ」

はやなのこの言葉に千影は「うん」と頷くと、バイザーをヘッドセットへと収納する。



そして千影ははやなどの抱擁を解くと霧瀬に向かって頭を下げる。

「藤代教諭、こんなにいいD・ホイールを造ってくれたことに感謝します」

そんな千影に霧瀬は手を振りつつ答える。

「いいのよ、いいのよ。私も楽しく造れたし。これから君も正義の味方部の部員だし」

そう言う霧瀬に千影は笑みを浮かべると、はやなが1つの提案を出した。

「そうだ！千影ちゃんの正義の味方部入部と、初勝利を祝してお祝いしようー！」

このはやなの言葉に霧瀬はギクリとすると抜き足差し足でこの場を逃げようとする。

しかし

「あれー、どこいくんですか藤代先生？ここは新たな部員をもてなすために顧問は絶対出席でしょう」

葵の意地悪い発言が霧瀬を縫い付ける。

そんな葵の言葉に霧瀬は涙を流しつつ葵に懇願する。

「そんなあ、京月さん！後生だから、後生だから今月のお給料はいるまでそれは待ってー！」

しかし、既にはやなは千影と手をつなぎ歩き出していた。

「ああなつたはやなはもう止められません。ここは大人しく往生してください、先生。骨は拾ってあげますから」

「慰めになつてないいいいいいっ！」

そんな葵の言葉に霧瀬の悲鳴が木霊したのだった。

そんな悲痛な叫びが聞こえているのかいないのか、はやなと千影は改めて手を握り合う。

「よろしくね、ナイトセイバー」

「こちらこそ、ティンクルセイバー」

こうして千影は新たな力であるD・ホイール、アクティブドレス型デモンベイン『ナイトセイバー』を手に入れたのであった。

## 第18話【正義の味方部篇】（後書き）

千影君、新たな力を得るの巻きであります。

ティンクルセイバーを知っている方は、千影君のD・ホイールがこうなると予測できたかも知れませんが、全く知らない方は、さぞ衝撃を受けた回でしょう。

かなり物理法則を無視したり、超設定があつたりしますが、この話 はかなりの部分ご都合主義によつてできていますのであまりツツコまないでください。

ティンクルセイバー本編でも人が何も無い場所から転移してきたり、鋼鉄さえ切り裂く刃が人を傷つけなかったりと、かなりご都合主義入つてる作品です。

あまり細かいことは気にしないでください。

あとティンクルセイバーNOVAは私の一押しでもありますので未読の方は是非読んでみてください。コミックが3巻、ドラマCDも3枚でております。

どうか1度、ご賞味あれ。

今回は最強カードのコーナーをお休みにして、千影君のD・ホイール『ナイトセイバー』の設定を書かさせていただきました。

Active Dress - Type Demon Bane - 00E

x

ナイトセイバー《(K)night Saber》

姫宮千影専用のD・ホイールの機能を付加させたアクティブドレス。黒いカラーリングは闇を支配する夜と、魔を伏す黒騎士を連想させる。

製作者の霧瀬曰く、千の影を敷く夜(Night)の剣にして、万

の魔を断つ騎士（Knight）の剣とのこと。

科学と魔術のハイブリッドで、ここは機械工学と生物工学、魔導機械工学の最高学府『ダールレス学院』の薫陶を受けた霧瀬ならではの作品といえる。

左右の脚部に騎乗決闘では重要な機関となる断鎖術式番号『セレス』と式号『ウインダム』。

右腕には高速での騎乗決闘のため2つの副腕と手札の収納区域を持つて千影を支援し、戦闘時には5本の指から真紅の光刃を発生させるスタンデヴァイスでもある、魔爪型支援術式『レクサス』。

左腕には決闘盤の機能を持ち、戦闘時には左腕から切り離し、ネクロノミコン機械言語新訳版から一部を除いた各種術式を顕現させる魔法の杖となる、魔砲型召喚術式『レガリア』。

そして名前はないが決闘の状況を映し出してくれる、蝙蝠の翼をかたどった収納式バイザーつきヘッドセットからなる。

決闘形態であるKnight mode、騎乗決闘形態であるKnight Mare mode、魔術戦闘形態であるNight mode、召喚戦闘形態のNight Mare modeの4形態に切り替えが可能で、霧瀬によれば隠された第5の形態もあるとのこと。

デッキを含むカードが『レガリア』に収納されており決闘、騎乗決闘と違った状況によるデッキ変更を自動でやってくれる。

これは千影のLovサーヴァントが世界に1枚ずつしかないために決闘用と騎乗決闘用の2種のデッキを用意できない弱点を補うためである。

これでも立派な鬼械神であり、デモンベインの1つの可能性でもある。

もちろん魔力の源である魔導書がないと起動しない。

このことを見越して、千影の祖父と父は使用者に負担の少ない機械言語版を新調するため、あちこちへと協力を頼んだようだ。

しかもそれがものすごい豪華なのである。

写すオリジナルは原本「アル・アジフ」を母に持つ大十字九朔と紅朔。

それを解析するのは、勇者特急計画のために創られた超AI、ガイーン。

そして、解析した電子データを閉じ込める器  
電子データを保存できる奇石を新開発した御剣。

1つの魔導書を創るのに、物凄い金額が動いたことは述べるまでもない。

こうして、ネクロノミコン機械言語新訳版はこの世に生まれ出でた。本当に生まれて間もないため、精霊は宿っておらず、いかに「アル・アジフ」に近い写本とはいえ、精霊を宿すにはかなりの時間を要するだろう。

しかし、ネクロノミコン機械言語新訳版はいいとしても、千影専用D・ホイール、ナイトセイバーの製作過程が不純に塗れている。

霧瀬がかつて在籍していたダールレス学院の資料室で偶然目にしたデモンベインの設計図を写し、再現しようとしたことに始まり、本来なら真つ当なバイクのD・ホイールとしてこの世に生まれいずるはずだったのだが、千影の祖父と霧瀬の暴走により、変身アニメのヒロインのようなモノになってしまった。

しかし、当の千影は気にした風もなく、その性能の高さに満足しておる模様。

これを着込む時は、千影はシニオンを解き、陣羽織を羽織るというスタイルとなる。

ちなみに覇道の地下基地にある虚数展開カタパルトに設置することで離れた位置からでも、異世界からでも召喚し、装着することもできる。

## 第19話【正義の味方部篇】

朝日が昇る、ヌーベルトキオシティの一角に建てられた豪邸、旋風寺邸にて千影は目を覚ました。

「ううん……あれ？あつ、そうか」

千影はオシリスレッド寮と違う広すぎる部屋に一瞬、困惑したが直ぐに手をたたき頷いた。

「2週間前から美咲輝学院に留学してて、舞人の旋風寺邸にホームステイしていたんだっ」

そう。先日、千影がいつていたホームステイ先とは旋風寺コンツェルンが若き総帥、旋風寺舞人の元だったのだ。

「しかし、すっかりオシリスレッド寮の暮らしに慣れちゃったなあ。デュエルアカデミアに入学するまでこのメーカーのベッドに寝ていたのに、今ではこっちの方に違和感を感じるよ」

そう言いつつ、千影はキングサイズのベッドから降りてパジャマを脱ぎ始めると、1日中肌身離さず付けている真紅の奇石がはめ込まれたピアス  
ネクロノミコン機械言語新訳版が朝日に照らされ輝く。

そして動きやすい服に着替え、髪の毛をいつものシニヨンではなく、簡単なポニーテールに纏めると部屋を後にしたのだった。

約1時間後

一通りの鍛錬を終えた千影が部屋に戻る道すがら、両手に家庭菜園で取れた新鮮な野菜を抱えた老執事、青木桂一郎と出くわした。

「おや千影様、おはようございます」

「おはようございます、桂一郎さん。それは今日の朝餉の食材ですか？」

千影に恭しく頭を下げる桂一郎に千影は、その手に持つ食材を覗き

込むとそう聞いた。

「ええ、そうですね。千影様はその様子を見るに、これからコレですか」

そう言うと桂一郎は手の中にある野菜からアスパラガスを取り出して見せた。

「?????」

何故にアスパラガスなのか理解できない千影は首を捻る。

そんな千影に桂一郎は笑いながら答えた。

「はっははは。アスパラガス アサカラバス 朝から風呂、つまり今からシャワーの時間ですかなと言うことです」

その言葉に千影は苦笑をもらしつつ頷いた。

「ええ、今から汗を流すところです。それと、駄洒落を言うなら、もう少しわかり易い方がいいですよ。それだと相手が気付きにくいので少し間抜けに見えます」

この千影の言葉に桂一郎は笑い声を上げた。

「はっははは。いやはや千影様は手厳しいですな」

そんな千影は何か思い出したのか、少しバツが悪そうな顔になると桂一郎に言った。

「すみません、桂一郎さん。今日の朝食は学院の十月で一緒に食べようって、はやなたちと約束してまして……………」

この言葉に桂一郎は優しく微笑むと頭を下げた。

「かしこまりました。本日の朝食は千影様は参席できないのですね」「はい。夕餉はこちらで頂くので、舞人にもそう伝えて置いてください」

そう言うと千影は部屋へと戻っていったのだった。

汗を流し、いつもの服装に陣羽織を羽織り、髪の毛をシニヨンに丁寧に纏めた千影は美咲輝学院高等部の正門ではやなたちを待っていた。

「おっはよー、千影ちゃん」

「おはよー」

声がしたほうを向くと、はやなと、葵がやって来ていた。それに気がついた千影は2人に笑顔を向ける。

「おはよう。はやな、葵」

待ち合わせていた3人が揃ったところで葵が口を開いた。

「さて、じゃあ朝ごはんにいきますか」

「うっどん うっどん きょくのあさは、じゅくのうがつとくせい、かまたまうどん」

葵の言葉に、はやなは待ちきれないのか歌を歌いながらスキップしていた。

そんな嬉しそうにはやなに千影は声をかける。

「確か、朝限定のメニューだよな？」

「そうなんだよお。すっごくおいしいの」

暢気なはやなの声に葵は頬笑みながら、少しあきれ返る。

「限定とはいえ、早起きしてまで行くんだから・・・」

「でも、こうして美味しいところをいつも案内してくれるんだから、私にはありがたい限りだよ」

千影のこの言葉にはやなは指を折り数える。

「この千影ちゃん向けの食べ歩きツアーも、今週で3週間目だもんねえ。確か先週で高等部の食窓街は8割がた廻ったかな」

はやなの言葉を信じるならば高等部はもうほとんど攻略済みらしい。

「まあ、いつもお腹すかせてるはやなに付き添っていれば、こうなるわよね」

葵がいつものごとく、そうコメントしたところで放送部から『いつも』の放送が入った。

『はいはいっ！朝の緊急征服部情報です！！』

この放送にはやな、千影、葵は思い思いの声を上げる。

「お」

「今日は早速だね」

「今日は朝から活動と来たか」

『ただ今、『十月』で活動開始い!』

しかも今から3人が朝食を取ろうとしていた店を征服しているらしい。

『正義の味方部は活動開始よろしくっ!!』

「うどんのぴんちだ」

「朝餉を抜かれるのはきついしね」

「いこか」

この放送を聴いた3人は、アクティブドレスがある第4保健室へと急ぐのだった。

大食堂『十月』の前で、世界征服部副部長の浅風九郎が高笑いを上げていた。

「はーっはっはっはっは！まさか征服部にも朝練があるとはおもわないでしょう!!この『十月』は征服させていただきますっ!!」  
そう高々と宣言するが、周りの野次馬化した生徒からの評判は以下の通りだった。

「ああ、また何かやっとなるな」

「朝からね」

「ヒマだね」

「あのコらはまだ来とらんのか」  
散々である。

この評価に九郎は苦笑する。

(うーん……失敗しかしてないせいで威厳が全くないですね……)

そう。今まで征服できた例がないのである。

「まあ、気にしても仕方ありませんね。新井君、松田君！バリケードのほう早めに準備お願いします」

「おす」

「うーっす」

九郎の言葉にそう答える世界征服部が下っ端2人であったが、少々



愚痴をもらす。

「あつてもなくても一緒なのになあ」

「どーせなあ」

そんな2人の愚痴を耳聴く聞いていた九郎は苦笑しつつ言った。

「まあ、そう言わずに」

この九郎の発言に「おおおっ!!」と驚きの声を上げた2人はせつせとバリケード構築に勤しみながら口を開いた。

「こんな準備より早くはーちゃんとちーちゃん来ないかなあ」

「まあ、いつも同じイベントが起きるだけだがな」

そんな言葉を漏らす2人の元にどこからともなく声が響く。

「その活動」

「待ってもらいますっ」

その声を耳にした新井と松田は造りかけのバリケードを放りだす。

「きたっ!!」

世界征服部が征服をもくろむ大食堂『十月』に2本の正義の剣が舞い降りる。

「正義の味方部、ナイトセイバーと」

「ティンクルセイバー、活動開始ですっ」

アクティブドレスに身を包んだ千影とはやなの登場に観客と化した生徒たちは「わあーっ!」と声援を送る。

「おー、来た来た」

「がんばれー」

そんな生徒たちに、はやなは手を振って応える。

「どもども」

千影もはやなの様に声はかけないが会釈することで生徒たちに応えたのだった。

麗しの2人の正義の味方の姿に生徒の1人が銅色のカードを出すと他の生徒に話を振った。

「そう言えばお前、ファンクラブはいった?」

その声に大多数の生徒たちが手に手にはやなファンクラブと千影ファンクラブのブロンズメンバーのカードを出した。

そんな中、1人の生徒がため息をつきながら懐から銀色のカードを出す。

「いつの話だ……ほれ会員証」

それを見たブロンズメンバーの生徒たちは驚きの声を上げる。

「おー、シルバーだよ！」

「うそお！？ブロンズだけじゃないん!？」

そう騒ぐはやなファンクラブと千影ファンクラブのメンバーの下に、一際背の高い女子生徒が歩み寄ってきた。

「すみません……通してもらえますか？」

見たところ、どうやら1年生のようだが先ほどシルバーメンバーの会員証を見せた生徒は体をどけて最前列を譲る。

「あ、天宮さん！どーぞどーぞ」

この生徒の行動にブロンズメンバーの生徒たちは口々に不満の声を上げる。

「なんで、後輩に敬語なん？」

「最前列まで譲っちまって……」

「いいなあ」

そう言うブロンズメンバーの生徒たちにシルバーメンバーの生徒はため息をつく、口を開く。

「はあ、若いなお前ら。彼女は俺より上……各ファンクラブに10名しかいないプラチナメンバー、それも両ファンクラブ共にプラチナメンバーだ!!」

「……な、なんだってええええええつ!?!?!?!」

シルバーメンバーの発言に大きく驚くブロンズメンバーの面々だった。

ファンクラブの存在など露とも知らないはやなと千影は世界征服部の野望を阻止するため、行動に移る。

「それじゃ千影ちゃん、いくよ」

「了解、はやな」

2人は互いに頷くと、手にスタンデヴァイスを掲げる。

そんな正義の味方部の姿に九郎は申し訳なさそうに新井と松田に向かって口を開く。

「くっ・・・新井君、松田君！いつも通りで大変心苦しいのですが

」

九郎のこの言葉に、2人は望むところといった風に応える。

「何言ってるんすか！」

「任せてくださいって!!」

この部下2人の心強い言葉に九郎は号令を下す。

「　　　　　お願いします！」

「　　イエス・サー!!」

そして新井と松田ははやなと千影に向かって駆け出す。

「　　いつも通り、やられてきますっ!!」

はやなと千影に突進する新井と松田に、はやなと千影はいつも通りの対処を施す。

「ごめんなさいっ」

「いつもながらのその不屈の闘志は尊敬に値するよ」

はやなと千影はそう言いながら、プラズマリボンを掲げ、『レクサス』から光の爪を走らせる。

「プラズマリボン！」

「魔爪型支援術式『レクサス』！」

電撃を帯びたりボンと光刃が一閃すると、新井と松田を一瞬にして地に伏せた。

「　　どへーっ!!」

そんな地に伏せた2人にはやなは両手をあわせて申し訳なさそうに言う。

「　　いつも通り、やっつけてしまいましたっ」

しかし、はやなFCゴールドメンバーにして千影FCinn美咲輝学

院の会長である松田と、同じく千影FC in 美咲輝学院会長の松井にとつては本望だったようで、恍惚とした表情で気絶していた。そんな部下2人を見た九郎は苦笑をもらす。

「やっぱり今回も無理でしたか……また次の活動でお会いしましょう」

そう言い、パツと手を開くと気絶した新井、松田と共に手品のようにならなくなったのだった。

「あっ、また逃げられた」

はやなは暢気そうにそう言うが、千影は九郎の撤退の判断と迅速さに半ば舌を巻いていた。

「彼の引き際のよさもさすがと言うべきか、勝ったと言ってもやっぱり油断できないね」

そんな正義の味方部の2人の元に観戦していた生徒たちから「わーわー」と声が変わえられる。

「おー！」

「はーちゃん、ちーちゃんバンザイ！」

「やったぞ味方部」

「ごくるーさま」！

十人十色の声援を送る生徒たちにはやなと千影は手を振って応えろと、そこに今まで外野で見ていた葵が2人の元に歩み寄ってきた。

「おつかれ、じゃあ朝ごはんにしようか」

そして開放された大食堂『十月』にアクティブドレスのまま入り、できたてホカホカのかまたまうどんをおばちゃんから受け取ると席につく。

「そういえば、今日もウエスト3世は来てなかったね」

千影は朝食のかまたまうどんを啜りながら嫌と言うほど出てきていたのに3日ほど前からめつきり顔を出さなくなった世界征服部の極星の話題をはやなと葵に振った。

はやなはセットで頼んだ特大おにぎりを頬張りつつ頷く。

「言われてみれば、こここのところの活動は副部長さんとあの2人だ

「けだよねえ」

「まあ私はキチ イを目に入れることがなくて精神的に楽だけど、千影君の場合はそうはいかないのよね」

葵の言葉に千影は一回箸をおくと湯呑みに手を伸ばしつつ答える。

「うん。1回でも騎乗決闘を多く経験して、そのノウハウをデュエルアカデミア本校に持ち帰らないといけないんだけど、たぶんウエスト3世は私に勝つ方法でも模索してるんじゃないかな」

そんな千影にはやなは3つ目の特大おにぎりを頬張りながら言う。

「千影ちゃんに連戦連敗だったもんねえ」

はやなの言うとおり、初日の2戦を含めて今日まで連戦連勝を千影は重ねていたのだった。

そう楽しく喋りながら朝食を食べていた3人の下に声かけられる。

「あの………」

声をかけられたほうを向くと、そこには1人の女子生徒、先ほど最前列に立っていたはやなFCと千影FCのプラチナメンバーである天宮さつきが3段お重を手立っていた。

「あの……これ、差し入れです………」

さつきははやなに手に持っていた3段お重を差し出すと、葵から声をかけられた。

「差し入れてはやなと千影君に？」

この言葉に少し緊張しているのか、さつきは頬を赤らめつつ答えた。

「はい……私……正義の味方部のファンで……いつも京月先輩がお弁当をたくさん用意しているのを見て……やっぱり食べるものが喜んでもらえるかと思って……」

そんなさつきに葵は「なるほど」と頷き、はやなと千影は笑顔を浮かべるとそれぞれさつきに礼を述べる。

「ありがとう」

「す……喜んでます」

そしていつの間にか、かまたまうどんと特大おにぎりセットを胃袋

に片付けたはやなはさつきが持つてきた3段お重のお弁当を笑顔でパクパクと食べ始める。

千影も、少しおかずを摘む程度にご相伴に預かる中、葵がさつきに向かうと口を開いた。

「えっと、お名前は？」

「あ、天宮……天宮さつきですっ……」

さつきから名前を聞いた葵は話を続ける。

どうでもいいことなのだが、3段お重をペロリと平らげたはやなが、苦笑を受かべる千影を余所に食堂のおばちゃんにラーメンを注文していた。

「さつきちゃんか。正義の味方が好きなら入部すれば？霧瀬せんせも死ぬほど喜ぶよ」

この葵の言葉にさつきは少し困惑したような顔になると口を開く。

「正義の味方は私の憧れなので……入れるものなら入りたいんですけど……でも……」

そういうと、さつきは自分の背丈を指し示す。

「私……背丈がこの通りなので。この身長で……あの格好は似合わないかなと」

さつきが指し示す通り、彼女の身長は170cmオーバーと日本人女性にしては長身に位置する高さだった。

対して160cmと平均な葵、155cmとやや小柄なはやな。そして151cmと、男の子でありながら、この中では最も低い千影だった。

そんなさつきに、葵はラーメンを啜るはやなを指差しつつ聞く。

「つまり、コレが着てみたいと？」

図星を指されたさつきは赤かった頬をより一層赤らめる。

「あ……それも……あり……ます……けど……正義の味方がそんな不純な動機で入部したら駄目ですよ……」

そう恥じるさつきにはやなが声をかける。

「そんなコトないよ」。部活に入るキツカケなんて、何でもいいんだよ」

はやなのこの言葉に千影が頷く。

「そうだね。私なんか留学の目的を果たすのに都合がいいから正義の味方部に入ったものだし」

「私も超なりゆきで入部しちゃった人だしねえ」

この2人の言葉にさつきは少し呆然となる。

「都合・・・なりゆき・・・」

呆然となるさつきにはやなと千影はそれぞれの言葉を発する。

「そーそ。入る理由よりも入ってからね、自分で頑張った〜とか楽しい〜って思えたらそれでいいんじゃないかな」

「何をするかよりも何を成したかが重要だと私も思うよ」

そんな2人の言葉に未だ呆然とするさつきの元に、いつのまにやらやって来ていた霧瀬が声をかける。

「その通りよ。鈴鳴さん、姫宮さん」

いきなり現れた霧瀬はさつきの手をとると嬉しそうに喋り始める。

「アクティブドレスのステキさがわかるなんて、あなたいい趣味しているわね〜」

「あ・・・いえ・・・」

霧瀬のいきなりの行動にさらに啞然となったさつきだったが、霧瀬は気にした風もなく話を続ける。

「心配は、おるおあなっしんぐ！おっきなコにもバッチリ似合うあなた用のかわいいヤツをつくっちゃくから！！あなたは安心して入部していいのよー！！」

「・・・は、はい？」

いつのまにかトントン拍子に進んでいく話にさつきはついていけないようだ。

「なんだか聞いてたトコが違ったみたいだね〜」

「新入部員は絶対逃さないって感じよね・・・」

「この熱意は流石と言うか何と言うか・・・」

そんな霧瀬とさつきを遠巻きに眺める3人は霧瀬の行動に苦笑をもらしていたのだった。

「よしっ！」

そこではやなは立ち上がると、霧瀬の勧誘口撃にさらされるさつきに声をかける。

「さつきちゃんっ」

このはやなの言葉に少し涙目になったさつきがはやなの方を向く。

「は、はいっ……!？」

そしてはやなはさつきに、にぱつと笑顔を向けると魔法の呪文を口にする。

「正義の味方、一緒にやろっ」

この言葉にさつきの心は一瞬にして動いた。

「……はいっ！」

さつきは笑顔ではやなの言葉に頷いたのだった。

今回も征服を失敗してしまった九郎はため息をつきつつ、校舎間連絡通路を歩いていた。

「やれやれ……僕と彼らだけでは回数を稼ぐのも限界でしょうかね。御堂さんたちのアレが仕上がると助かるのですが……」  
しかし、2人を相手にするのは少々骨が折れますね。ナイトセイバーに関しては相手をしてくれていた『緑狂』であるウエスト3世君は研究室にお籠りしてしまいましたし、他に決闘ができる我が部の極星『灰速』は新学期が始まってから行方知れずですし、『金輝』は日本選手権のために遠征してますし。ティンクルセイバーかナイトセイバーどちらかを、いや両方足止めできれば勝機はあるんですけどねえ……」

そんな彼の目の前に2人の人物が目映る。

片方は、世界征服部初活動時に助っ人として参加し、ティンクルセイバーに敗れた極星『紅刃』の武居和麻。

そしてもう1人は、農作業用の服装に両手に大振りの美味しそうな



オレンジを抱えた2年生の生徒だった。

「武居君、ゴットバルト君！」

九郎に呼ばれた和麻と作業着の男、ジエレミア・ゴットバルトは先輩である九郎に対してお辞儀をして応えた。

「武居君、しばらく学校に来ていなかったなので心配しましたよ」

九郎のこの言葉に和麻はなんでもないと聞いた風に答えた。

「ええ、少しばかり・・・自分を研ぎなおしてきただけです」

和麻のこの言葉に九郎は「そうですか」と頷くと、今度はジエレミアの持つオレンジを覗き込む。

「ゴットバルト君が育てたオレンジはいつみても美味しそうですね」

「ありがとうございます、先輩。おお！そうだ先輩、ここは1つ味見をしていただけますかな。武居殿もよければ」

そう言うとジエレミアは手に持ったオレンジを1つずつ九郎と和麻へと渡す。

「では失敬して・・・っ！」

「いただきます・・・っ！」

そしてオレンジを口に入れた2人は驚きと喜びが混ざった表情へと変わる。

「このきつ過ぎない酸味がまた甘味を引き出していますねえ」

「はい。これは中々の一品です」

手に塩をかけて育てたオレンジの高評価にジエレミアは顔を綻ばせる。

「これでも園芸部が極星『橙忠』ですからな。今度の全国大会もこの学園に錦の御旗を飾って見せましょうぞ、全力で」

九郎はそう言うジエレミアに声をかける。

「これで、今期の収穫は終わりですか？できればそろそろこちらに戻ってきて欲しいのですが・・・」

この九郎の言葉にジエレミアは頷く。

「ええ、これで世界征服部に参加できますよ。収穫期を待ってもらったのです、誠意には全力の誠意を持ってお応えしますよ」

その表情は先ほどまでの朗らかな農夫の顔ではなく、1人の戦士としての顔だった。

そんなジエレミアの言葉に和麻も続く。

「次の活動、僕も手伝わせていただけませんか？」

この言葉に九郎は少し驚く。和麻はジエレミアとは違い、世界征服部の部員ではないのだ。

「部員不足なので助っ人は大歓迎ですが、あの部になにか固執する理由が？」

「………ただの可能性ですよ」

九郎の質問に和麻はそうとしか答えなかったのだった。

そして翌日、入部届けを持ったさつきを連れて、はやな、千影、葵は正義の味方部の部室、第4保健室「湊」にやって来ていた。

しかし、扉には「お休み中。起こさないでね」と書かれた表札があった。

4人は中に入ってみると、そこには案の定保健室のベッドでZZZZと眠る霧瀬の姿があったのだった。

気持ちよく眠る霧瀬の姿に一筋の汗をさつきは流した。

「あの……これは……本当にお休みですね………」

「今日来なさいって言ったのにね」

葵も呼ぶだけ呼んどいて、自分は爆睡する霧瀬に頭を振ったのだった。

そんな霧瀬を見たさつきは仕方がないとクスリと笑う。

「先生もお休みのようですよ……今日はもうひとつのほうに行きますね」

このさつきの言葉に千影が小首をかしげる。

「もうひとつ？」

その言葉を意味するところを理解した葵が、ひょっとしてとさつきに聞いてみる。

「……もしかしてさつきちゃんって部活掛け持ち？」  
「ほえ!？」

葵の言葉にはやなは驚きの声を上げた。

そんな3人に対してさつきは少し照れつつ言う。

「あ……はい。実はそうなのです」

その事実にはやなはさつきに申し訳なさそうに口を開く。

「あや……それじゃ誘っちゃって迷惑だったかな？」

しかし、さつきは気にした風もないといった感じで微笑む。

「いえ……大丈夫です！両方頑張れるようにしてきましたから！  
！」

この言葉に3人がほっと息を漏らした次の瞬間にピンポンパンポンの音と共に放送がかかった。

『はい、放送部より緊急放送ですよ！ただいま高等部第2体育館におきまして、世界征服部が活動中ですよ!!』

どうやら、世界征服部がまた懲りずに征服活動を始めたようだ。

それを聞いた葵はアクティブドレスを引き出すためのパスワードをPCに打ち込む。

「えーつと……確か『正義は君の心の中に』……と!」

すると、ガチャコンガシユンと部屋の壁が變形し、そこからアクティブドレスが収まったアタツシユケースがどん!と出てきた。

「お……葵ちゃん、す〜」

葵の手際によさにはやな、千影、さつきはパチパチと拍手を送る。

そんな3人からの賞賛に葵は頬を赤らめる。

「毎日見てれば覚えるわよ」

しかし、取り出されたアタツシユケースを見るとそこに書かれたナンバーが違った。

「あれ、でもこれ私のも千影ちゃんのもないよ。002って……  
もしかしてさつきちゃんの？」

「んふ〜……その通りよ〜」

この言葉にさつきが「えっ」と驚く中、ベッドから霧瀬がノソノソ

と起き上がったきた。

葵は、この霧瀬の言葉に驚きの声を上げる。

「た、たった1日で仕上げちゃったんですかあ!？」

葵の叫びに霧瀬は欠伸をしつつ答える。

「新入部員が嬉しくてつい、ね」

「つい徹夜ですか、藤代教諭」

千影はそんな霧瀬に苦笑するしかなかった。

「急いでつくったけど出来はバツチリよん。ティンクルのスペアまわして組んだから少し似てるけど、姉妹みたいなもんだしいいでしょ」

この霧瀬の言葉にさつきは嬉しそうに呟く。

「姉妹……」

「コードはAS-002……アークセイバーよ!」

霧瀬はさつきの手に持つアークティブドレスの名を告げると、その由来を語りだす。

「アークってゆーのは孤月状の放電現象のコト……あなたの部活に合わせた名前を考えたりもりよ」

それを聞いたはやなは嬉しそうにさつきと手を叩き合う。

「初部活がんばろう」

「はいっ!」

そんな2人を千影は微笑みながら見ていたのだった。

それぞれのアクティブドレスに着替えた3人は一路、第2体育館へと急いでいた。

走りながら千影はアクティブドレスに初めて袖を通したさつきに聞く。

「初活動だけど、アクティブドレスの調子はどう？」

「はい。まるで今まで長いこと着ていた着物のように肌に合いますね。これならば全力を出せます」

そう答えるさつきに今度ははやなが疑問を口にする。

「そういえばさっちゃんのもう1つの部活って……」

「あ、それは……」

はやなの質問にさつきが答える前に、3人の前に立ち塞がる影が2つあった。

「あなたは……『紅刃』さん！」

そう、影の1つは剣道部が極星『紅刃』こと武居和麻。

そしてもう1人は

「お初目にお目にかかる。私は園芸部が極星『橙忠』にして、世界征服部が一員ジエレミア・ゴットバルトと申すもの」

紳士の如く3人に頭を下げたジエレミアは左腕に付けられた決闘盤を掲げる。

「ナイトセイバー姫宮千影、今日は貴方と決闘せんがために参上した。いざ、私と尋常に決闘ッ！！」

ジエレミアはそう言うのと決闘盤にデッキをはめ込み、決闘盤を起動する。

それを見たはやなは和麻に向けて言葉を放つ。

「あなたも征服部のお手伝いですか、『紅刃』さん？」

しかし、和麻は首を横に振る。

「……いえ、貴女と再戦せんがために参りました！！」

そして竹刀袋から木刀を取り出すと、正眼に構える。

それぞれに指名されたはやなと千影は、さつきの方を向いた。

「え〜つと……指名なので」

「さつきは征服された第2体育館の開放を」

この言葉にさつきは戸惑う。

「でもはやな先輩、千影さんも、お1人で極星の相手なんて……」

しかし、はやなと千影は微笑みながらそれぞれの武器、プラズマリボンと魔砲型召喚術式『レガリア』を構える。

「大丈夫。このスーツもあるし」

「先を任せられる仲間もいるしね」

そう信頼を寄せられればさつきも応えないわけにはいかない。

「はいっ！」

さつきの元気のいい返事を皮切りにまずは、はやなが動く。

「よ〜し、いきますよ〜！」

はやながプラズマリボンをしならせ和麻に攻撃する。

「プラズマ・・・リボンっ！」

しかし和麻は目を閉じ、心眼を発動するとはやなの攻撃を全てかわす。

その隙にさつきはここを突破し、第2体育館へと駆け出していった。自分の攻撃を尽くかわされたはやなは少し苦笑を浮かべる。

「あらら・・・見逃してくれたと言うか、見切られちゃってる感じですね〜」

「・・・まだまだ見切れてなどいません。今日は本当の貴女を見切らせていただきます！」

そんな苦笑を浮かべるはやなに和麻は木刀を握りなおすと、鋭い瞳ではやなを射抜いたのだった。

さつきが和麻を突破したところで千影は己が敵、ジェレミア・ゴットバルトの方に向き直った。

「待たせたね、ジェレミア。さあ決闘を開始しよう。ナイトセイバ

ー・決闘形態 起動!!！」

【Knight mode Drive】

千影の声と共に『レガリア』の中にあるカードの中から決闘用のデッキが生まれ、『レガリア』のデッキゾーンへとセットされる。

「デュエルアカデミアでは不敗と言われる貴公と決闘できることを誇りに思うぞ、ナイトセイバー姫宮千影」

ジェレミアは不敵に笑いつつ、千影にそう言葉を贈る。

千影もそんなジェレミアに言葉を返した。

「それはどうも。しかし、貴方もその立ち居振る舞いから察するにかなりの猛者と見た」

「ふつ。では、言葉はここまでとして決闘で語り合つとしよう」  
「そこまで言つと、ジェレミアは決闘盤を構える。」

「望むところ」

千影もジェレミアにならない『レガリア』を構えた。

「決闘ッ！！」

ジェレミアLP4000

千影LP4000

先手を取つたのはオレンジ・・・・・・・・・・じゃなかった、ジェレミアだった。

「私のターンだ。ドロロー！」

手札に加えたカードを見ると、それをそのまま決闘盤へと置く。

「私はKMF - グラスゴーを攻撃表示で召喚する」

KMF - グラスゴー 4 ATK1500 DEF1200

ジェレミアの場に2足歩行のロボットが出現する。

「さらにカードを1枚セットしてターン終了だ」

ジェレミアのターンエンド宣言に千影は『レガリア』にセットされたデッキへと手を伸ばす。

「私のターン、ドロロー！」

引いたカードと手札を見た千影は、そこから最適な戦術をはじめ出すと行動に移る。

「私は、Lovサーヴァント - ガーゴイル - を攻撃表示で召喚！」

Lovサーヴァント - ガーゴイル - 4 ATK1800 DEF1000

千影は自分の場に使い魔を召喚すると、攻撃の命を下す。

「ガーゴイルでグラスゴーを攻撃！」

ガーゴイルがその手に闇を集め力に変えていく。

「この時、ガーゴイルのモンスター効果発動！攻撃力が200ポイントアップするー！」

LOVサーヴァント - ガーゴイル -                    4    ATK 2000    DE  
F1000

攻撃力が上がったガーゴイルに千影は腕を振り下ろしながら、号令を発する。

「ストーンブラストー！」

千影の号令と共にガーゴイルから放たれた闇の衝撃波がグラスゴーを粉碎し、ジエレミアにダメージを与える。

ジエレミアLP3500

グラスゴーの爆発に舌打ちするジエレミアだったが、ここで引くほど柔な漢ではなかった。

「くっ！だが、この時グラスゴーの特殊効果が発動！戦闘によって破壊された時、手札から5以下のKMFと名のつくモンスター1体を特殊召喚する！！私は手札よりKMF - サザーランドを特殊召喚ー！！」

KMF - サザーランド                    5    ATK 2000    DEF 1700

新たな2足歩行ロボットを召喚したジエレミアは、さらに伏せたカードを開く。

「さらに私は畏カード、大国の威信を発動！このカードは自分のモンスターが戦闘で破壊された時に発動できる畏カード。破壊されたモンスターの数だけデッキからカードをめくり、その中からカ



ード1枚を手札に加え残りはデッキへと戻しシャッフルする！！破壊されたグラスゴーのは4！よってデッキからカードを4枚めくる！！」

ジエレミアはデッキからカード4枚を引くと、その中から1枚を手札に加え、残りをデッキへと戻すとシャッフルし、決闘盤のデッキゾーンへと納めた。

それを見た千影は、防御を固めるべくメインフェイズ2へと移行する。

「私は戦闘を終了してメインフェイズ2に移行！この時、ガーゴイルの攻撃力は元に戻る！！」

LoVサーヴァント - ガーゴイル - 4 ATK1800 DE  
F1000

攻撃力を元に戻したガーゴイルを尻目に千影は手札のカードを『レガリア』へと挿入する。

「私はカード1枚をセットしてターンエンド！」

「私のターン、ドロロー！サザーランドでガーゴイルを攻撃！！」

千影のターンエンド宣言を聞いたジエレミアはデッキからカードを引くと、そのままサザーランドへ攻撃を命じた。

このジエレミアの行動に千影は驚きの声を上げる。

「戦闘時にガーゴイルは攻撃力が200上がるの効果があるのは知っているはずなのに？相打ち狙いか！？」

LoVサーヴァント - ガーゴイル - 4 ATK2000 DE  
F1000

千影の叫びと共にガーゴイルの攻撃力は上がるが、ジエレミアは静かに笑う。

「いや、違う」

ジエレミアのサザールランドがガーゴイルにスラッシュハーケンを打ち込むと、それを巻き戻しながらスタントンフアを振り上げ、肉薄する。

千影のガーゴイルも体にスラッシュハーケンを打ち込まれたものサザールランドを迎撃するために腕を振りかぶる。

そして互いの強烈な一撃が決まると、ガーゴイル、サザールランド共に爆散した。

千影とジエレミアは巻き起こる爆炎から腕で顔を護る。

「くうっ！」

「ぐっ！この瞬間、サザールランドの効果が発動！このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、デッキまたは手札から同名のカードを攻撃表示で特殊召喚できる！！」

ジエレミアはそう宣言するとデッキを手に取り、その中からカードを選びつつ、さらに言葉を続ける。

「さらに！このカードが戦闘によって破壊されたときも同名のカードをデッキか手札から攻撃表示で特殊召喚できる！！」

そう高らかに宣言したジエレミアはデッキから引き抜いた2枚のカードを決闘盤へと置く。

「いざ馳せ参じよ！2機のサザールランドよ！！」

KMF - サザールランド	5	ATK2000	DEF1700
KMF - サザールランド	5	ATK2000	DEF1700

ジエレミアの場にサザールランドが2機連携を組みつつ出現した。

しかし、千影も然る者。追撃を貰わぬように仕掛けた罠を発動する。「罠カード、サーチアイ発動！この効果により戦闘によってモンスターが破壊された時、デッキか手札から4以下のL・O・Vサーヴァントと名のついたモンスター1体を特殊召喚できる！！私はL・O・Vサーヴァント - 酒呑童子 - を守備表示で特殊召喚！！」

LoVサーヴァント - 酒呑童子 - 4 ATK1700 DEF  
1000

千影の場にもモンスターが現れ出でたのだった。

そして、LoVサーヴァント - 酒呑童子 - は防御に特化した千影の使い魔。

「酒呑童子は戦闘で破壊されない効果を持つ！これで君が2体のサザールランドを従えようともし攻撃は無意味だ！！」

ジェレミアに対して千影がそう高らかに言い放つが、ジェレミアは不敵に笑っていた。

「ふっふっふ。確かに、そのモンスターの効果は厄介だが私が2機のサザールランドを特殊召喚したのは攻撃のためではない」

千影はジェレミアの言葉に驚きの声を上げる。

「なにっ!？」

驚く千影を尻目にジェレミアは手札にある切札を切る。

「私は儀式魔法、オレンジの洗礼を発動！！」

ジェレミアの発動した儀式魔法から大きなオレンジが出現する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・オレンジ・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・・・・・・・・・なぜに？」

これには流石の千影も開いた口が塞がらないようだ。

そんな千影にジェレミアは笑みを浮かべながら言葉を続ける。

「このカードの効果により、10以上になるように生け贄を捧げ

「

ジェレミアの言葉とともに2機のサザールランドが巨大なオレンジに呑み込まれ、その体を機械的に変化させていく。

そしてジェレミアは手札からデッキ最強のモンスターを降臨させる。

「手札からKGF - ジークフリートを攻撃表示で特殊召喚する！！」

KGF - ジークフリート 10 ATK3000 DEF3000

ジエレミアの場には巨大なオレンジ色のロボットが威容を放っていたのだった。

このジエレミアの召喚した巨大なKGFに千影は驚きの声を上げる。「攻撃力3000の儀式召喚モンスター!？」

超大型のモンスターを従えたジエレミアは、そんな千影の言葉に頷く。

「しかり。先ほどのサザーランドは、我が愛してやまないオレンジの化身たる、このモンスターの召喚のための布石。そして

！」

ジエレミアは腕を大きく振ると、千影に向かって言い放つ。

「このKGF - ジークフリートが君を葬る! 全力でだ! ! ジークフリートの特殊効果発動! ! !」

このジエレミアの宣言に千影は身構える。

「っ! ?」

「1ターンに1度、デッキの上からカード5枚をゲームから除外することで相手モンスター1体を破壊する! ! !」

ジエレミアはデッキからカード5枚を除外しつつ、そう宣言するとジークフリートはその身を高速回転させ、酒呑童子に迫る。

「砕け散るがいい! ! !」

このジエレミアの叫びとともにジークフリートの体当たりを喰らった酒呑童子はジエレミアの言うとおり粉々に砕け散った。

「くっ! 酒呑童子までも! ?」

折角、特殊召喚した使い魔が1ターンも持たず破壊されたことに千影は歯噛みしたのだった。

そんな千影にジエレミアは笑みを浮かべながらジークフリートの効果の説明する。

「さらにジークフリートは戦闘では破壊されず、相手のカード効果の対象にならないという特殊効果を持つ。だが、その代償としてターンエンド時に手札2枚かライフポイント1000のいずれかを支払わねばならないがね」

だが、ジェレミアの戦術はこれで終わりではなかった。

ジェレミアはさらに手札のカードを切る。

「さらに私は永続魔法、純血派の掟を発動！この効果により、私がコントロールするカードから発生する維持コストは相手も支払わなければならぬ！さらに私はもう1枚の永続魔法、ギアスキャンセラーを発動！！私に要求されるカード維持のコスト、及び私に効果を及ぼす相手カードの効果を無効にする！さらに、このカードが破壊された時、手札1枚を捨てることにより、その破壊を免れる効果も持つ！！」

これを見た千影の表情は驚愕へと変わる。

「しまった！このコンボで　　！！」

「そう、このカード2枚の効果で私は維持コストを支払うことなく、君のみがその枷を負うこととなる。私のターンはこれで終了だ！この時、ジークフリートの維持コストが君を蝕む！さあ、選びたまえ。手札2枚かライフポイント1000か！？」

「ならば私はライフポイントを選択する！」

千影LP3000

ジェレミアがターンエンド宣言と同時に発生したジークフリートの維持コストに千影はライフポイントを選んだのだった。

この危機的状况に千影はこの場をどうやって切り抜けるか頭を悩ませていた。

（どうする？相手の場には高攻撃力、破壊耐性、そして対象を取れない効果を持つジークフリート。その維持コストを無効にしつつ私に押し付けるコンボを成す永続魔法カードが2枚……………  
・ここは相手のコンボから崩す！！）

その結論に至った千影はデッキからカードをドロウする。

「私のターン、ドロウ！」

デッキから加えたカードを手札に加えると、千影は先ほど頭に描い

た戦術を実践する。

「魔法カード、二重召喚発動！！この効果により、このターン2回の通常召喚を行える！私はLOVサーヴァント-キメラ-とチューナーモンスター、LOVサーヴァント-インキュバス-を召喚！！」

LOVサーヴァント-キメラ- 3 ATK1000 DEF600

LOVサーヴァント-インキュバス- 3 ATK800 DEF300

「チューナーモンスターと言うことは、アレが来るか！？」

すでに世界征服部の情報で、千影がシンクロ召喚の使い手であるということを知っていたジエレミアはシンクロ召喚のキーとなるチューナーモンスターの召喚に身構えた。

そんな中、千影は新たなモンスター召喚のために星を束ねる。

「3、LOVサーヴァント-キメラ-に 3、LOVサーヴァント-インキュバス-をチューニング！！」

千影の場に6つの星が妖しく踊る。

「妖しき星が、集いてここに輝きとなる。輝きよ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、輝ける守護鳥LOVサーヴァント-ガルダ-！！」

LOVサーヴァント-ガルダ- 6 ATK2000 DEF1000

光が弾けた千影の場に赤い羽根を輝かせる守護の鳥が守備表示で降り立っていた。

「インキュバスの効果、このカードを使ったシンクロ召喚が成功した時デッキからカード1枚をドロウする！」

デッキからカード1枚をドロウした千影は、自分の場に召喚されたガルダの守護を持ってジエレミアに向かって言葉を放つ。

「さらにL・O・Vサーヴァント・ガルダは守備表示でシンクロ召喚された時、全ての魔法・罠カードを破壊する効果を持つ!!」

「なんとっ!?!」

千影の宣言にジェレミアが驚く中、千影が高らかに号令を放つ。

「ホールドフェザー!!」

ガルダの巻き起こした、輝く赤い羽根を散らした嵐が場を蹂躪し、ジェレミアの場にあつた2枚の永続魔法を破壊する。

「ぬぐっ!だがこの時、ギアスキャンセラーのもう1つの効果も発動する!!このカードが破壊された時、手札のカード1枚を捨てることでこのカードの破壊を免れる!!」

ジェレミアは手札のカード1枚を捨てることにより、ギアスキャンセラーの破壊を免れたのであつた。

「だが、これに私に対する足枷は消えた!!そして、ガルダの効果はまだ続く!破壊した相手のカード1枚につき、ライフポイント1000回復する!!」

そう宣言した千影をガルダが輝きで包み込み、破壊できた1枚のカード分のライフポイント、1000を回復していく。

千影LP4000

「さらに私はカードを1枚セットしてターンエンドだ!」

自分の場にカードを1枚伏せながらターンエンドを宣言したのだつた。

「まさか、私の永続魔法のコンボから崩してくるとは……しかし!ジークフリートを従えたこのジェレミア・ゴットバルトに敗北の文字はない!!私のターン、ドロー!!」

デッキからカードをドローしたジェレミアはジークフリートの効果を起動する。

「ジークフリートの効果でデッキの上から5枚のカードを除外し、ガルダを破壊する!!」

デッキから5枚のカードを除外しつつ、そうジエレミアが宣言するとジークフリートはまたも高速回転しはじめ、ガルーダを粉みじんに粉碎した。

「そして、ジークフリートでナイトセイバー姫宮千影に直接攻撃！  
！」

ジエレミアの号令とともにジークフリートは巨大円錐型のスラッシュハーケンを千影に向けて打ち出した。

「ああああっううう！」

ジークフリートの攻撃により千影のライフポイントは大きく削られたが、千影は何とか踏ん張って耐えた。

千影LP1000

そんな千影にジエレミアは止めを刺すべく手札からカードを切る。

「そして私は手札より魔法カード、電磁ユニットを発動！このカードは相手プレイヤーの直接攻撃に成功した時、直接攻撃したモンスターの攻撃力の半分のダメージを互いのプレイヤーは受ける！！ジークフリートの攻撃力3000の半分、1500をその身に受けてここで倒れる、全力で！！」

ジエレミアの高らかな宣言とともに発動したカードから放たれた電撃が場を走る。

「ぐううううっ！」

ジエレミアLP2000

ギアスキャンセラーは自分のカードの効果が無効に出来ないのでジエレミアもその身に電撃を受けることになるが、勝利を確信し千影の方を見る。

しかし

「永続罠、ライフモニュメント発動！このカードの効果によりこの



カードがある限り、私は相手からの効果ダメージを受けず、相手モンスターから受ける戦闘ダメージを半分にする!!!」  
千影が開いた罠カードによって、そのダメージは0にされたのだった。

この千影の手を見たジェレミアはその強かな戦術に笑みを浮かべる。  
「やるではないか。流石にあの『緑狂』を降した決闘者だけのこと  
はある。私のターンはこれで終了だ!!!」

しかし、ライフモニメントで凌いでは見たものの、千影の手札に現状を打破できるカードはなかった。

(ならば、次のドローに全てをかけるしかない!)

「私のターン、ドロー!!!」

そして千影は万感の想いを込めてカードをドローしたのだった。

千影が絶体絶命のピンチに陥る中、はやなも和麻との勝負を続けていた。

斬ッ!と音を立てて、廊下を切り裂く斬撃をはやなは飛ぶようにしてかわす。

(.....今のをかわすか。この『紅刃』の太刀筋を見切る.....  
.....この女は、やはり.....!!)

はやなの今までの動きに和麻は自分の考えが間違いないことを確認すると、着地したはやなに声をかける。

「テインクルセイバー.....でしたか」

いきなりの和麻の言葉にはやなはキョトンとなる。

「はい?」

「この技は貴女でも見えないでしょう.....いえ、たとえ見えても避けられない」

そんなはやなに和麻は言葉を続けると、独特の構えを取る。

「.....だから.....避けなさいっ!!!」

その言葉を発するとともに和麻は消えた。

刹那の間もない中、変わったのは和麻の立つ位置と、アクティブド

レスの肩部を切り裂かれたはやなだった。

静寂が空気を支配する中、和麻が口を開く。

「奥義の名は、我が称号と同じく我が唯一の刃にして絶断の刃！」「紅刃」！！」

そう言うと、和麻は斬撃の後の体勢から体を起こしつつ言葉を続ける。

「今のは肩を狙いました。そのスーツでも、まともに受ければただでは済まないことはわかりましたか？ここで負けを認めてくれれば僕も剣を引きましょう」

この和麻の降伏勧告に、はやなは笑顔をもって答える。

「『紅刃』さん、正義の味方は自分から負けなんて言ったらダメなんですよ」

このはやなの笑みに和麻は彼女の實力の底を推し量れなかった。

「なぜ・・・そこで笑えるのですか！それが、『姫』の余裕なのですか！！」

「・・・なんのコトでしょう？」

和麻の発した『姫』の言葉にはやはなは汗を流しつつ、しらばっくれる様に答えた。

はやなのこの答えに和麻は今一度、奥義を放つために構えを取る。

「わかりました。あなたの正義、見せてもらいましょう！！」

木刀を構える和麻にはやはなはプラズマリボンのリボンを消すと、笑顔で応える。

「はいっ！あなたの技にわたしも応えまして！『ひっさつわざ』ですっ！！」

奇しくも、この時が千影が万感の想いを込めてカードをドロートした瞬間だった。

「私のターン、ドロート！！」

デッキから引いたカードを見た千影は、口元に笑みを浮かべた。

「ありがとう。私の使い魔たち」

千影はそう呟くと、そのカードを召喚する。

「私はL o Vサーヴァント・メデューサ - を攻撃表示で召喚!!」

L o Vサーヴァント・メデューサ -                    2    A T K 1 0 0 0    D E  
F 1 0 0

千影の場に蛇の髪を持つ使い魔が出現した。

「ジェレミア!この使い魔が君を倒す!!」

千影の発したこの宣言にジェレミアは鼻で笑う。

「なにを痴れ事を!その攻撃力では我がジークフリートに遥かに届かん!!」

しかし、千影はそのジェレミアの言葉に笑みを浮かべ言葉を放つ。

「私が相手にしているのはそのオレンジの化け物ではない、君だ

ジェレミア!!L o Vサーヴァント・メデューサ - は相手の場にモンスターがいても直接攻撃を仕掛けられるモンスター!!」

「なんだと!?!」

千影の言葉にジェレミアが驚きの声をあげる中、千影はメデューサに号令を発する。

「メデューサでジェレミアを直接攻撃!フレイムサーペント!!」

メデューサから放たれた炎がジークフリートをすり抜けジェレミアを襲つ。

「ぬうううううっ!!」

ジェレミアLP1000

ジェレミアはメデューサの攻撃を耐え切ると、勝利を確信した笑みを浮かべる。

「だがしかし!これで攻撃可能なモンスターはもういまい!!これで次のターンでのジークフリートの効果と攻撃により、私の勝利は揺ぎ無い!...」

「何を勘違いしている！！まだ私の戦闘フェイズは終わっていない！これからが真の血闘だ！！」

だが、千影はこのジエレミアの勝利宣言を真紅に眸を輝かせながら切って捨てた。

「なにっ!?!」

千影の言葉にジエレミアが驚く中、千影は手札から切り札を切る。

「手札から速攻魔法、超大紅蓮韋駄天の称号を発動！このカードの効果により、私の場の4以下のモンスターはもう1度攻撃することが出来る！！」

この千影の切札にジエレミアは歯噛みした。

「メデューサの攻撃力は1000・・・私のライフポイントの残りも1000・・・っ!!」

そんなジエレミアに千影は腕を振りつつ言い放つ。

「たとえ敵が強大だろうと、必ずしもそれを打倒しなければならぬ訳ではない！！これが私の勝利への一手だ！メデューサでジエレミアに2回目の直接攻撃！フレイムサーペント！！」

そして千影の号令の元、メデューサから放たれた攻撃がジエレミアを焼く。

「ぬおおおおおおっ!!」

ジエレミアLP0

ライフポイントがつき片膝を突いたジエレミアは、眸の輝きを元に戻す千影を見ながら口を開いた。

「まさかジークフリートを従えた私を降すとは・・・くっ！ナイトセイバー姫宮千影！！その名、私の魂にしかと刻んだ！次に再戦せん時は、この借りしつかりとお返ししよう！！」

そう言い残すと、軽い身のこなしでこの場を去っていったのだった。そんな中、はやなの高らかな声が千影の耳に入った。

「スターダストインパルスっ!!」

その声をしたほうを千影が振り向くとそこにはリボンで創った星で回避不能の攻撃を繰り返すはやなの姿と、それに打たれる和麻の姿だった。

「やはり……貴女が………銀星が……姫……でしたね………」

はやなのプラズマリボンに打たれた和麻はそう言つと、その場に倒れ伏したのだった。

そんな和麻の言葉にはやなは苦笑しつつ答える。

「私は……ティンクルセイバーですよ」

そう苦笑するはやなに千影が声をかけようとする、後ろのほうからさつきの大声が響き渡った。

「先輩！千影さん！」

どうやら、第2体育館は無事に開放できたのか、さつきが戦いを終えたはやなと千影に走りよった。

「はやな先輩、千影さん勝ったんですね！」

2人の元に駆け寄ったさつきの言葉にはやなと千影は頷き答える。

「なんとかね」

「少し危なかったけどね。そっちは？」

ここにさつきがいると言うことは第2体育館の戦いは勝ったと同異議のことなのだが、一応さつきに千影が聞いてみる。

「あっ、勝ちました！」

そう答えたさつきに、はやなは笑顔になると背伸びしてさつきの頭をなでる。

「初勝利おめでとう！」

「はい………」

はやなの行動にさつきは頬を赤く染めると、思い出したかのように口を開く。

「でもはやな先輩は『紅刃』を2回も倒したり、千影さんは『緑狂』に続いて『橙忠』まで倒してしまうなんて………すごいんですね！」

極星でもない生徒が極星を何度も降すと言う現実にはさつきは驚きを隠せないようだ。

そんなさつきの言葉に少しはやなは焦りつつ答える。

「いや、まぐれでリボンが当たってくれてね」

この言葉に千影は首を捻る。

（あれがまぐれ？ そんなはずはない。アレは相手との立ち居地や距離を3次元的に理解し、そこに踏み込むだけの体術的技量を持ち合わせていなければ行うことが出来ない、云わば奥義のようなもの。

それに『紅刃』の彼が言っていた銀星が姫という言葉と関係あるのか？そしてそれこそが彼女の隠すもの？私のように………

……）

はやなに何かあると千影は感じたが、自分もとある秘密を抱える人間として詮索はやめにした。

そこまで考えた千影が周りを見渡してみると、はやなの攻撃により倒れ伏していた和麻の姿が消えていた。

（また征服部の副部長かな？私に気付かれることなく気を失った人間を回収して撤退するとは………世界征服部で一番注意すべき人物はやはり彼か）

千影の中でまさかの九郎の株が急上昇するのであった。

この後、葵がはやなの肩部の損傷に心配げになったり、さつきの初勝利を祝うために『Ariely』にてはやなスペシャルを奢るなどあったが、ここでは割愛するとしてよう。

なにはともあれ、正義の味方は新たな部員アークセイバーにして長刀部極星『蒼雷』の天宮さつきを加えたのだった。

## 第19話【正義の味方部篇】（後書き）

ティンクルセイバー篇も第3話へと入り、新たな仲間も加わりました。

そして世界征服部に、まさかのオレンジが出現です。

一応、彼の性格、思考はギアス嚮団によって改造手術を受けたオレンジ（真）がベースとなります。

まかりまちがっても純血派時代のオレンジ（笑）やブラックリベリオン時のオレンジ（未）ではありませんので悪しからず。

今回の最強カード『KGF - ジークフリート』

10 ATK3000 DEF3000 光属性 機械族 儀式

効果モンスター

「オレンジの洗礼」により降臨。このカードは植物族としても扱う。このカードは戦闘では破壊されず、相手のカード効果の対象にならない。

1ターンに1度、自分のデッキの上からカード5枚をゲームから取り除くことで相手の場のモンスター1体を破壊できる。

このカードが場に表側表示で存在している時、このカードのコントロールは自分ターンのエンドフェイズ時に手札2枚を捨てるか、ライフポイント1000を支払わなければならない。

ギアス1期ラストで大暴れしたオレンジ型ナイトギガフォートレスの登場です。

その効果は原作同様の理不尽な硬さと強さをかね添えた化け物となっております。

しかし、ながらデメリットもあり問答無用でターンエンド時に手札かライフを否応なしに持っていけません。

しかし、そこはオレンジ。ギアスキャンセラーの効果で回避しやがりました。

さすがの我らがヒロイン（マテ、千影君も打倒を諦めざるを得なかったモンスターです。

しかしながら対象が取られないだけなので絶対的な耐性を持っているわけではなく、今回は手札が悪かったようで、ああいう戦術に落ち着きましたが、千影君お得意のオーバーキル攻撃をもってすれば案外楽に決着がつきそうか？



## 第20話【正義の味方部篇】

アークセイバーこと、天宮さつきが正義の味方部に加入してはや3日。今日は朝からそのさつきを干影、はやな、葵が見送りに来ていた。

「すみません。入部早々こっちの試合が入ってしまって……」  
そう、今日は長刀部の試合があるのだ。

少し申し訳なさそうにするさつきにはやなと干影は笑顔で返す。

「なぎなた部のエースだもん。がんばれ」

「『蒼雷』の名に恥じない試合をね」

そして最後に葵が手に持ったお重を差し出す。

「お弁当、邪魔じゃなかったら持ってって」

「ありがとうございます！」

さつきは葵から渡されたお弁当にお礼を言いつつ受け取ると、バスに乗るために踵を返すが思い返したように後ろを振り返った。

「あ、えっと……ですね……勝ってきますと、藤代先生にも」

「うん」

「伝えておくね」

このさつきの言葉に3人は頷いたのだった。

さつき以下長刀部の部員を乗せたバスは発車しようとするが、そこに1人の男から声がかけられた。

「そのバス！ただちに全力で止まり、全力で私を乗せるおおっ！」

しかし、バスはプシューッと音を立てると扉を閉めそそくさと発車してしまっただった。

「ぜ、全力で置いていかれてしまった……」

男は発車してしまったバスにうな垂れつつ、肩で息を「ぜえぜえ」と漏らす。

そんな男を呆然と見ていた千影たち3人は、その男に見覚えが会った。

「あなたは！」

「世界征服部の……！」

「ジェレミア・ゴットバルト……！」

そう。数日前の活動に顔を出した世界征服部が部員たる『橙忠』ジェレミアだった。

「おお、これは正義の味方部の諸君。おはよう、いい朝だな」

息を整えたジェレミアは額の汗を拭いつつ、朗らかな顔で3人に挨拶した。

そんなジェレミアに葵は警戒しながらジェレミアに言葉を放つ。

「朝からこのバスターミナルを征服ってわけ」

千影とはやなも葵の言葉に身構える。

しかしジェレミアは首を横に振り3人にここにいる理由を話す。

「いや、今日は本来の部活動だね。全国オレンジ品評会があるのだよ」

このジェレミアの言葉に葵、はやな、千影は不思議そうに首を捻る。

「全国？」

「オレンジ？」

「品評会？」

首を捻る3人にジェレミアは顔を輝かせながら語る。

「そう！それぞれの農夫たちが血と汗と涙を持って育てたオレンジを、燦々と輝く太陽の恵みを受けたオレンジを発表する云わばオレンジの全国大会なのだよ！！私は園芸部極星『橙忠』の名にかけて全力で優勝を手にするために会場に向かうのだ！全力で……！」  
そう叫ぶジェレミアの元に次のバスが到着する。

「と、いうわけでリベンジはまたの機会だ、ナイトセイバー姫宮千影。次に合間見えるときは全力で貴公を倒す！あ、これはおちかづきの印だ。受け取ってくれたまえ」

千影をズビシツ！と指差した後、手に持った袋からおおぶりのオレ

ンジを3つ千影に握らせるとジェレミアはバスに飛び乗った。

「では、さらばだ！正義の味方部の諸君！！全力で私の凱旋を待っていてくれたまえ！！」

そしてバスの扉が閉まり、ジェレミアはバスに揺られて全力でこの場から去っていったのだった。

ジェレミアのオレンジへの熱意に呆気に採られた3人はしばらくした後にはハツとなると顔を見合わせた。

「緑のキ ガイといい、あのオレンジといい、世界征服部の『極星』はなんか独特ね……………」

葵の厳しい言葉にはやなが笑顔になりつつ千影の手に収まるオレンジを見る。

「でも、こんなおいしいそうなオレンジをくれるなんていい人だよお」  
「オレンジにかける彼の情熱は本物だね。あ、3つあるし1個ずつ分けようか」

千影も初対面の時と違うジェレミアの印象に苦笑をもらしながら手にあるオレンジをはやなと葵に差し向けたのだった。

後の3人は語る。ジェレミアの育てたオレンジはすごく美味しかったと。

その日の昼休み世界征服部が副部長、浅風九郎は4月期の活動報告を纏めて、世界征服部の部室に来ていた。

暗幕が引かれた暗い部屋の中、その報告書を読み終えた1つの影が椅子をキイツと鳴らしながら九郎に声をかける。

「 報告書は見せて貰った」

美しい顔に鋭い視線と確固たる自信を匂わせる佇まいで座るこの部屋の主、世界征服部が部長、秋篠夕霞の言葉に九郎は頭を書きつつ苦笑を浮かべた。

なぜなら、そこに書かれた戦績は正義の味方部に全戦全敗だからだ。  
「は……………申し訳ありません」

しかし、そんな九郎に夕霞は責めることもなく逆に労いの言葉をか

ける。

「いや、向かないお前に無理をさせたな」

「いえ、情けない限りで」

夕霞の言葉に九郎が苦笑をもらす中、夕霞は九郎に言葉を続ける。

「今までご苦労だった。今後、お前は内部補佐に回れ」

九郎に前線から外すことを告げると、夕霞は九郎の後ろに控える人物に向かって言葉を発する。

「八草重、お前にこれよりしばらく指揮を任せる。いいな？」

名前を呼ばれた長髪の女顔な人物、極星が1人『紫閃』たる八草重遊は恭しく頭をたれた。

「は。夕霞様のご期待のままに」

八草重は面を上げると、早速次の作戦のための、とある承認を夕霞に求める。

「まずは極星衆の使用許可を頂きたい」

どうやら戦力の中核たる極星を正義の味方部に当てららしく、その理由を続けて述べる。

「敵の新人部員が極星である以上こちらにも複数投入の時期です。御堂のVSSもいくつか仕上がったと聞いています」

この八草重の言葉に九郎も頷く。

「あ、僕ももうそれしかない。同等の戦力を用意しないと流石に……」

九郎の言葉に八草重は「ふっ」と笑みを漏らすと目を瞑りながら九郎に向かって口を開く。

「浅凧先輩、やっぱり貴方は向いてませんよ」

「えっ？」

八草重のこの言葉に驚く九郎に八草重は、当然と言ったような顔で言葉を続ける。

「この部活動には1人に対して1人……なんてルールはないでしょう？同等にする意味などないのでから『白』『黒』『朱』『紫』『緑』『灰』『橙』『金』の全ての極星を出す。それで終わりです

よ

この言葉に夕霞は「ふむ」と少し考えるそぶりを見せるとすぐに口を開く。

「目下行方不明中の『灰』、未だ研究室に籠っている『緑』、本来の部活の全国大会に出かけている『橙』と『金』は無理として・・・よかるう。ならばこの4者以外なら好きに使ってみるがいい。ただし」

そこで一旦言葉を区切ると、鋭い視線をより一掃鋭くしながら八草重に言う。

「相手は女の子と、我が学院にやってきた留学生だ。怪我などは極力させるな。わかったか？」

「はっ・・・」

その射抜くような視線に八草重は背筋をゾクリとさせながら頷くしかなかった。

夕霞は直ぐに威圧感を和らげると、九郎に言葉をかける。

「浅凧もご苦労だった、下がってよいぞ」

そう言うと夕霞は2人に退室を促したのだった。

八草重の後に部屋を出た九郎は一つ安堵の息をついた。

「ふう。あれなら八草重君も無茶はしませんかね」

そして八草重が去っていったほうを向くと、言葉を漏らす。

「あの方のお気持ちが理解できているといいのですが」

そんな九郎の元に元気のいい声が響き渡った。

「くーろつくんっ!」

この声の方に視線を向けると、そこには2人の少女が立っていた。

「御堂さんに、鶉神さん」

九郎に名を呼ばれたボーイッシュな少女、御堂あきは「やつ!」と元気に手を振り、その後ろに控える物静かそうな少女、鶉神冴は頭を下げに一礼した。

この彼女たちこそが世界征服部が部員にて、先ほどの話に出ていた

極星『白煌』と『黒帝』である。

あきは1つウインクをしながら茶化すように九郎に向かって口を開く。

「夕霞に絞られちゃった？」

冴も言葉足らずながら、心配そうに九郎に声をかける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・た？」

そんな2人に九郎は手を横に振りながら答えた。

「いえいえ。あ、そうだ！」

そこで1つ九郎は何かを思い出したのか、あきに向かってとあるコトを聞きはじめた。

「科学部の研究室にお籠りしているウエスト3世君はとうですか？ VSSを作成していたのなら顔は合わせたと思いますが・・・・・・・・・・・・・・・・」

この九郎の言葉に2人の顔は少し曇る。

「ごめんね、九郎君。実はぼくたちにもわからないんだ」

あきの言葉に九郎は首を捻る。

「わからない・・・・・・・・とは？」

「3世君の研究室は科学部の最深部、核爆発にも耐えれそうな重厚な扉の奥にあるんだけど、その扉ここ1週間は開いた形跡がないんだ。もちろん僕たちもここ十数日はVSSの開発のために科学部に居座ってたけど、最後に見たのはその部屋に入った1週間前の時だけだし・・・・・・・・・・・・・・・・」

この情報に九郎は呆然となる。

「と、いうことは本当に比喻表現なしにウエスト3世君は・・・・・・・・・・・・・・・・」

「完全にお籠りしちゃってるのよ、しかも1週間」  
ウエスト3世のあまりにキチ イな日数に3人が表情を引きつらせる中、あきが無理矢理話題を変えた。

「あ！それはそれとして、ぼくたちのVSS遂に仕上がったんだよ。なんだったら次の部活動の時には手伝おうかって・・・・・・・・・・冴

がね言ってるんだよ」

あきはそう言いつつ冴の方を指差すと、冴は少し頬を染めながら九郎に聞いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・か？」

どうやら冴は九郎に惚れている様である。

それに九郎が気付いているのかは飄々とした九郎の態度で推し量れないのだが、それはそれとして九郎は2人のこの言葉に苦笑をもらす。

なぜなら

「いや、申し訳ない。じつは今、前線の担当を外されまして」

そう。つい先ほど内部補佐に回れとのお達しがあつたばかりなのだ。この九郎の言葉にあきは「えーーーーーっ！」と大声で驚き、冴は残念そうに俯いた。

そんな2人に九郎は新たな担当者の名前を告げる。

「新しい担当は八草重君になったんですよ」

九郎から出た八草重の名前にあきは顔を苦渋に歪める。

「うえ、ぼくアイツ嫌い・・・・」

冴も自分たちがようやく参戦できるようになったのに、九郎と共に戦えないことを非常に残念がっていた。

「まあ、そんな感じで。あ、お気持ちのお礼にもならないかと思いますが」

そんな2人の表情に九郎は謝りつつ、懐から3枚のチケットを取り出す。

「軽茶色の割引チケットがあるのですが、男1人で行くにはあそこはちょっと恥ずかしくて・・・・よろしければ」

「もちろん！お付き合ひさせていただきますとも！！」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

思いもよらぬお茶のお誘いにあきと冴は笑顔でそう答えたのだった。

そんな和気藹々と話す3人を見る影が2つ。

「ふん。あんな腑抜けた男に任せているから」

談笑しながら去っていく3人を見ながら八草重は毒づくように言葉を漏らした。

そんな八草重にもう1人の男が口を開く。

「いーじゃねーの」

制服を着ず、革ジャンを纏った少し不良っぽい生徒、世界征服部が部員にして極星が1人、『朱砂』司木燈也が自信満々に言葉を続ける。

「今日からはこのオレも出るんだ。邪魔な奴らは全部殴り倒してやるよ」

この言動に八草重は不快を露にする。

「先輩に敬語も使えないとはな。礼儀を一から刻んでやるうか？」

しかし司木は挑発的な笑みを浮かべると八草重に向かって口を開く。

「いちいちこまけーセンパイだな！やることちゃんとやりや文句はねーでしょ」

何を言っても聞きそうにない司木に八草重はため息をつきつつ、釘だけは指す。

「まあいい。今日の放課後4時・・・忘れるな」

どうやら作戦の開始は間近のようだ。

八草重の言った4時の時間が迫る中、全身を紅の衣装で包んだ人物が高等部校舎内を歩いていった。

その強烈過ぎるインパクトにすれ違う生徒たちは目を点にする。

「何、あの真っ赤な人は？ウチの生徒？？」

「まあ、ここは変なの多いから・・・」

この言葉に真っ赤な人本人は笑み。

「真っ赤な人・・・ね」

そして、その真っ赤な人はとある部屋の前で立ち止まった。

どこであろう、藤代霧瀬が根城である第4保健室『湊』だった。しかし



「……………で、まったく。人呼びつけてどこ行ってるんだか」  
部屋の扉には『おでかけ中』の表札がかかっていたのだ。

呆然と立ち尽くす真つ赤な人を通りすがりの生徒が声をかけてきた。  
「あのー、藤代先生なら屋上にいるかとー。最近いつもいるみたいなのでー」

この言葉に真つ赤な人は、その通りすがりの生徒に礼を述べる。

「親切にどうも。いつてみるよ」

そこで、その通りすがりの生徒は目の前にいる人物が何者かに気がついた。

「……………あのー、不和センパイですよね？」

この言葉に真つ赤な人、不和久遠はサングラスを外しつつ、その生徒にウインクを飛ばした。

「私のコトなんて覚えてくれているコもいるんだ？」

そんな久遠の姿を通りすがりの生徒は感極まったかのように言った。

「『姫』のファンでしたから！」

「ありがと。ま、昔の話だよ昔の、ね」

通りすがりの生徒の言葉に久遠はそう返すと、足を屋上へと向けるのだった。

高等部第2校舎の屋上で藤代霧瀬は黄昏ていた。

「……………ふう……………」

ため息をついたかと思えば、また思案にふけるの繰り返し。この状態がここ数日しばらく続いていたのだった。

そんな霧瀬を千影、はやな、葵は遠巻きに眺める。

「あの調子じゃ今日も反応は鈍そうね」

葵のこの言葉に千影とはやなは心配そうに頷く。

「うん……………」

「そうだね……………。やっぱりスーツを壊されちゃったのはショックだよね」

はやなは特に、霧瀬が落ち込んでいるのは自分のせいだと思ってい

るようだ。

「あれは部活上仕方がないことだつてば」

「そう。闘うからには装備の損壊・消耗はつき物だよ、はやな」

そんなはやなに葵と千影は励ましつつ、はやなの両隣に腰を下ろす。

「あのセンセのことだから直ぐに元気に戻るつて」

葵の言葉に千影が続く。

「はやなまで元気がないのはよくないよ。ほら、笑顔笑顔」

そして浮かべた千影の笑顔にははやなは少し頬を染める。

「あ、それは……」

「??？」

「どしたの？」

はやなの歯切れの悪い言葉に首を捻る2人にははやなは、気まずそうに言うか言うまいかを迷う。

「じつはですね……」

と、そこで葵ははやなの言わんとしたことに気がついた。

「……さては」

葵が何かをいう前に『ぐうううううう』という音が盛大に鳴ったのだった。

その音の出所がはやなのお腹だと言うことに気がついた葵と千影は笑みを浮かべる。

「そついう時間だったか」

「おやつ時だもんね」

はやなは「やーん」と恥ずかしがりながら自分の指を指で突つつく。

「わたしのおなかつては正直さんで……」

そんなはやなの仕草に笑みを湛えた葵はベンチから立ち上がる。

「それじゃ、腹ペコ姫のお腹を満たしに行きますか」

続けて千影も立ち上がりながら、今まで食べ歩いた記憶からここから一番近い店の名前を出す。

「どこにする？軽茶色がここからなら近いけど」

「彩がいいな」

このはやなのリクエストに葵が「はいはい」と頷くと、そう言えば  
と思い出したかのように言った。

「春限定の紅茶、出たらしいよ」

「それは注文しないと」

「まだ試していないから楽しみだね」

葵の言葉に喜びながら階段を降っていくはやなと千影の姿を尻目に見ていた、1人の女子生徒が携帯電話を手に取った。

「目標を確認。第2校舎昇降口に向かうようです」

この言葉に電話の相手は女子生徒に謝辞を述べたのか、女子生徒の顔が緩む。

「……いえ、遊様のお役に立てれば光栄です」

だが、この女子生徒も気付いてはいない。千影やはやなたち3人を目で追っていたのが自分だけではないと言うことを。

自分の教え子が何気に危機に陥りかけている状況で霧瀬は空に輝く太陽を仰ぎ見ていた。

「太陽……ブライト……シャイン……うん違う、もつと相応しい強烈な……」

何かに悩む霧瀬に屋上へと上がってきた久遠が声をかける。

「人を呼び出しといて、ひなたぼっこですか？」

「いえ、太陽の名前をね……って」

久遠からかけられた言葉に一瞬誰かと思っただけ振り向いてみると、見知った顔に安堵の息を漏らした。

「不破さん、来てくれたのね！」

そんな霧瀬に久遠は左手を掲げて応える。

「センパイの呼び出しですからねえ」

自分の隣に立った久遠の姿に霧瀬は笑みを漏らす。

「相変わらず赤いわね」

「紅といってくださいよ」

霧瀬のそう返した久遠は自分の身に纏う紅の外套、アクティブドレ

スの試作第1号たる『紅《CRYMSON》』を指差しつつ言葉を続ける。

「コレは私の誇りでこだわりですから」

「……ありがと」

この言葉に霧瀬は製作者冥利に尽きるといった風に礼を述べたのであった。

そこで久遠は自分を呼び出した理由を聞こうと、霧瀬の方に向き直る。

「それより、今回はわざわざ呼び出すなんてなんの用ですか？」

久遠の最もな疑問に霧瀬は口を開く。

「そう、ソレなのよ。私のこだわりのためにあなたの……」

「……む？」

そこで霧瀬は自分の発した言葉に何か気がついたのか、少し思案に耽ると次の瞬間その顔をペツカーと輝かせた。

「そーよ！ソコにこだわんなきゃいいのよ！！」

そして、どこから用意したのか花吹雪を撒き散らす霧瀬に久遠はため息をついた。

「……センパイもお変わりないようで……自分の世界に入っちゃうと人の話聞きやしない」

霧瀬の奇行に、これは少し長くなるかもと苦笑する久遠だった。

第2校舎昇降口にたどり着いた葵は思い出したかのように2人に聞く。

「ムーンライトに寄っていてもいいかな」

この問いに断る理由もなくはやなと千影は快く首を縦に振る。

「はいはい」

「いいよ」

2人から了解を取った葵は靴を履きつつ千影の方を向きながら言葉を続ける。

「明日のお弁当、サンドイッチにしようかと。千影君のも作ってあ

げようか？」

「え、いいの？」

葵の申し出に小首をかしげる千影だったが、葵が手を振りながらはやなを指差した。

「遠慮しない遠慮しない。どうせこの娘のでたくさん作るんだから量的にはそんなに変わらないし」

ここまで言われては断る理由もない。

「ん。じゃあお願い」

千影は明日の昼食を葵に作ってもらうこととなった。

「たまごさんと希望」

「もちろん」

はやなのリクエストに葵が答える中、3人を通せんぼするかのように入り口に影が立ち塞がった。

「暢気なものだな」

誰であろう、世界征服部が極星『紫閃』たる八草重だった。

いきなりの闖入者に葵は、はやなと千影を後ろに庇いつつ睨みを利かせた。

「……………ナンパならお断りだけど」

「いや、そんな軽薄な用件ではないさ」

しかし八草重は葵の言葉を否定すると、微笑を浮かべながらその手にナイフを握った。

「ただの部活動だよ」

あまりに物騒な得物と『部活動』という言葉に葵は「なるほどね」と顔をしかめた。

「担当さんが変わったってワケ？」

今までにない強硬な出方に千影とはやなも緊張を強いられたが、少々面食らってもいた。

「こういう手合いは初めてだね」

「征服部さんも悪っぽいコトするんですね」

3人それぞれの反応に八草重は1つ鼻で笑う。

「今までののが腑抜けていただけですよ」

そして次の瞬間には八草重の姿が消えうせていた。

「あんまり、ナメられても困る」

否、目にも留まらぬ素早さで3人へと肉薄していたのだ。

あまりの速さと不意を突かれたことで動けないはやなの首筋に八草重の持つナイフが迫ろうとした次の瞬間に千影が動いた。

「なにっ!?!」

八草重が驚くのも無理はない。千影が2人の前に出て、八草重のナイフを2本の指の間ではさんで止めていたのだった。

「いかに当てる気がないとはいえ、無防備な女の子にそんな物騒なモノをつきつけるのは余り関心しないな」

「それも・・そうね!」

そんな千影の言葉に続けて葵が千影に止められ動けない八草重の腕に手刀を放つ。

「パンッ!」という小気味のいい音が第2校舎昇降口に響き渡った。

「くっ!」

想定してないなかった人物からの反撃に八草重は驚きナイフから手を離してしまった。

思わぬ手傷を負った八草重は浮かべていた笑みを消す。

「優しく済ませてやろうかと言うのに」

そしてその手の指に3本のナイフを挟むとそこから刃を飛び出させた。

「少し強引にしたほうがお好みのようだ」

ピンツと空気が張り詰める中、八草重の後ろから1人の影が「やれやれ」といった感じで八草重に蹴りを放った。

「あぶねえエモノ増やしてどうすんだよ。そういうモンに頼んなくてもいいようにオレらが来てるんだろっが」

蹴られた八草重はたたらを踏むと、後ろを振り返り蹴りを放った人物、今回の作戦のメンバーの1人たる『朱砂』の司木を睨んだ。

「ったく!オマエ、脅しだということくらいわからんのか!?!」

仲間内で言い争いが始まったことをコレ幸いと思った葵は、はやなと千影の手を引く。

「今のうちに、中に戻るよ!」

しかし、それもまた望めぬことだった。

「ごめんね」

「……!?」「」

校舎に通じる出入り口に白い神官のような装いをしたVSS『聖』を纏った『白煌』のあきとそれに対を成すような、黒い魔女のごとき装いのVSS『静』を纏った『黒帝』の冴が立ち塞がっていたのだ。

「数に任せてなんて趣味悪いけど、こっちも本気なんだよね」

いかにも乗り気でないあきであったが、これも仕事と割り切って3人に向かつて鶴嘴とも鎌とも見えるTT『烈風』を構えたのだった。これで出入り口は完全に封鎖、逃げ道はどこにもなくなってしまった。

「敵を排除するのに全力で当たることで後の憂いが減る。だかららとやっていた今までのやり方がおかしいのだよ」

この八草重の言葉に葵が敵意ありといった顔で言葉を返す。

「こっちに活動させさせないのがあなた流ってわけ」

「させる理由も意味もないからな」

八草重のいっそ清々しいほどの答えに葵は顔を怒りに染めた。よく見てみれば手も硬く握られてプルプルと震えている。

「こいつ………本当の『敵』ね!」

「葵ちゃんおちついて」

「こっという時こそ心を平に保たないと」

今にも爆発しそうな葵はやなと千影は宥めながら4人の立ち居地を伺う。

しかし極星4人の包囲網には一部の隙もなかったのだった。

そんなライブでピンチな3人と、王手をかけた世界征服部の極星4

人を盗み見る影が2つ。

「俺らのボスが休みだと思ったら、あんな野郎が場をしきっているとは……………」

世界征服部の下っ端、新井と松田だった。

「このままだとはーちゃんとちーちゃんが激ピンチだぜ！」

千影のFC会長でもあり、FCには所属していないがいつもやられてはいるはやなにも愛着がわいている新井は現在の状況に歯噛みしていた。

しかし両FCの会員であり千影FCにいたっては新井と並び会長を務める松田は葛藤していた。

「だが俺たちが邪魔に入るわけにもいかんだろう……………」

「！」  
そう。自分たちは『世界征服部』の部員なのだ。現在進行形で危機に陥っているはやなと千影は『正義の味方部』。そしてその彼女らの危機も自分たちが所属する『世界征服部』での活動の結果なのだ。そんな葛藤に悩まされ、松田にはもうどうしていいのか判らないでいた。

しかし

「バカ野郎っ！！！」

「おぶうっ!？」

なぜか新井から右ストレートが飛んできたのだ。

左頬を殴られ這い蹲った松田に新井は怒りのオーラを纏いながら己が魂を言葉にして松田にいい放つ。

「俺の知ってる七月男はそんな台詞は言わない奴だぜっ！ちーちゃん、はーちゃんと部活とどっちが大事なんだ！！！」

まさに魂の叫びである。

その魂の叫びを聞いた松田はユラリと立ち上がると殴られた衝撃で左レンズが割れた眼鏡を架けなおす。

「……………すまん新井……………そんなのは、迷うまでもないコトだな！！！」



その顔は晴れやかに澄み渡り、新たな決意がにじみ出ていた漢の顔だった。

「やるぞ、新井ッ！！」

「おおよ、七月男ッ！！」

2人は互いの腕を組み、今まで以上の友情を得たのだった。しかし

「あ、それはそれとして眼鏡壊れたから弁償しろよな」

「パンチ1発で真実に気付けた代償なら安いだろ」

早速、友情に亀裂が走った様子。

「安いなら出せ！」

「オマエに出すパンチはあっても金はねーよ！！」

そして遂には殴り合いになり2人共に綺麗なクロスカウンターが決まったあたりで自分たちが今、何をすべきかを思い出した。

「て、こんなコトやつてる場合じゃねえんだっつもの！」

「とりあえず征服部員だつてバレないように・・・だな！」  
非常に不安な2人であった。

僅か後方で馬鹿2人が馬鹿なことを考えていたとは露とも知らない八草重は千影たち3人に向かって言葉を発した。

「とりあえず、改めてこちらの要求を告げる。黙つての吞めば危害は加えない」

この八草重の言葉に「待った」をかけたのは同じ部員である司木だった。

「おいおいおいおい！それだとオレが戦う場がねえだろーが！！俺が来た意味が」

黙つてればいつまでも喚き散らしそうな司木に八草重は司木の額にナイフを当てて言葉を遮った。

「黙れイノシシ」

そして猪武者な司木が黙つたところで再度改めて八草重は要求を口にする。

「部活用のスーツを出してもらえれば、それで貴女たちを解放しよう」

彼の要求を要約するところだ。

どこの部にも所属しておらず、運動大会でも目立った成績を残していない女子学院生が『極星』を2度も降した。

このような話は同じ『極星』であれば話は通じるが、普通の生徒では無理からぬこと。

そこでその力の源泉はADにあると目をつけたわけだ。

ADこそが正義の味方部の強さであり、それさえ奪ってしまえば大幅な弱体化が見込める上に、新たなADを作る合間に征服の手を大きく進めることができるそうだ。

星徒手帳からはやなの戦績まで抜粋してここまで言い終えた八草重に千影は苦笑をもらした。

「悪人っぽく見えただけど結構律儀な人だね」

この千影の感想に八草重は少し赤くなった。

「うっ、うるさい!!」

悪く言われることには慣れていても、逆のことには慣れていないようだ。

「なるほど、今日のはそう言う作戦だったんだな」

コト此処にいたってようやく作戦を理解した司木に八草重は頭痛を覚えた。

「オマエはわからずに参加していたのか!？」

しかし相手は猪武者の司木である。

「って、それだとオレの戦う相手がいなくなるってコトじゃねーか!」

「だ・か・ら、そう言う作戦だと言っているんだ!!」

作戦を理解していなかった猪武者と現場責任者の不毛な言い争いを残りのあきと冴はあきれ返っていた。

「何やってるかな、あの2人は……」

しかし2人の言い争いはさらに激しさを増す。

「そんなおもしろくもねえ作戦、オレは抜ける！オレは戦えるって聞いたから来たんだ！！」

「これだから体育会系の莫迦は使いづらい。今回の活動の全権は僕が預かってている・・・勝手は許さない」

「抜ける」だの「許さない」だのと言い合ってる司木と八草重だったが包囲をまったく緩めないのは流石『極星』といったところか。

それを見た千影は、はやなと葵に顔を向けてヒソヒソと口を開いた。「どうする？相手は4人とはいええ、突破するだけなら私とはやなの力でなら不可能ではないし」

この千影の言葉にはやなと葵はギョツとする。

「も、もしかして・・・」

「千影君、はやなの秘密に気がついてたり・・・」

この2人の反応に千影は微笑を浮かべた。

「あ、やっぱり秘密あつたんだ」

どうやら鎌をかけていたようだ。

そんな千影にはやなは少し恨めしそうな顔を向ける。

「うう、千影ちゃん卑怯だよ」

「でも、2人が何を隠してるのかは私は知らないし、詮索するつもりもない。いつか話してもいいと思ったときに話してくれればいいから」

千影はここで言葉を切ると表情を真剣なものに変えて言葉を続ける。

「で、どうする？流石に私1人じゃ荷が重いけどやってできないことでもないし、はやながどうしても秘密を護りたいのならば私は力を貸すよ」

この言葉にはやなは微笑みの中に凜とした表情をにじませると首を横に振った。

「千影ちゃんの心遣いは嬉しいけど、私も正義の味方だもん。それに今までもなんとかしてきたんだし、今回もなんとかするよ」

そこまで言ってはやなは葵の方に笑顔を向けた。

はやなに笑顔を向けられた葵は苦々しい顔になる。

「もぉ、そこまで言われちゃ止められないじゃない……」  
・でも、ケガだけはするんじゃないわよ！千影君も！！」

結局は葵ははやなと千影の言葉を呑み、心配しながらも2人を送り出すことにしたのだった。

「はいはいっ」

「大丈夫。はやなが出来るだけ怪しまれないように私がフォローするから」

そして2人が血路を開くために1歩を踏み出した、その時

「待てえいつ！！」

どこからともなく声が木霊した。

「世界征服部さんとやら、可愛い娘ちゃん3人相手に頭数そろえて刃物突きつけて脅しをかけるとはちつとセコい活動じゃねえか！？」

「そんな様はなかなかなかなか見過ごすわけにはいかねえなああ！

！」

声のしたほう、あきと冴が封鎖した扉の方を7人は振り向く。

「何者だ！」

八草重の言葉に答えるように影は言葉を放つ。

「聞かれて名乗るのもおこがましいが止められる間に名乗っちゃまうか！」

そして2つの影は高々と名乗りを上げる。

「鈴鳴はやなちゃんと姫宮千影ちゃんのピンチに現れる、ファンの思いの集合体！」

「それが俺たち！！」

2つの影は擬音が聞こえてきそうなポーズを取ると高らかに名乗った。

「はーちゃんマスクここに参上！！」

「同じくちーちゃんマスク推参！！」

誰であるう世界征服部の部員であることをバレないようにするため購買部で買った紅蓮姫サングラス（レプリカ）1980円と紅蓮姫グローブ（レプリカ）1480円を身につけた新井と松田だった。

「・・・・・・・・・・オマエら浅風の部下の阿呆2人だな？」  
バレバレである。

「「違うぞ!!」」

「どこも違わねえだろーが」

司木の言うとおり、誰がどこからどう見ても新井と松田であることはいかんともしがたい事実だった。

「・・・・・・・・俺たちの正体なんてつまらんコトはどうでもいい!」

「我らはなすべき使命のために戦うだけだ!」

ついには開き直りをはじめた新井と松田であったが

「そのダサさで口上だけ格好つけてもなあ」

全く持つて司木の言うとおりである。

「ダサくない!格好いいの!!」

心の底からそう叫んだ新井は松田と肩を組み、司木と八草重に呐喊を試みる。

「「ええい、細かいコトはいいっ!!」」

しかし相手は『極星』、一撃入れることもかなわずフルボッコにされていく。

「確かに、あの方がカッコいいよね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ん」

あきと冴は未だにフルボッコされている新井と松田を見ると、その身を横にどかした。

「「「えっ!?!」」」

3人が驚くのも無理はない。その身をどかすと言っことは自分たちを無条件で逃がしてくれろと言っことなのだから。

驚く3人にあきは笑顔で口を開いた。

「うちの部にも理想があるから戦わないってワケにはいかないけど、征服だつて正々堂々のほうがいいよね!」

冴も笑顔で頷く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ね」

この言葉にはやなと千影は笑みを浮かべる。

「ありがとっ！」

「感謝するよ『白煌』、『黒帝』」

そして3人は『極星』4人の包囲から脱したのだった。

「なにいつ！」

「御堂、鴉神！お前たちは……！！！」

莫迦2人を相手している間の仲間の裏切りに司木と八草重はフルボッコしていた新井と松田を放り投げる。

「くっ、追うぞ！今ならまだ間に合う！！！」

「おおよっ！！！」

あきが何かを言う前に駆け出そうとした八草重と司木の前にどこからともなく千影とはまた赴きの異なる陣羽織に鬼を象った仮面をつけた男が立ち塞がった。

「また莫迦2人の続きがいたか！？」

八草重は新たに現れた邪魔者を見てうんざりとした顔を見せると、手に持ったナイフを仮面の男に向けて放った。

しかし仮面の男はそのナイフを苦もなく、手に持った刀の鞘で全てのナイフを弾き返した。

「なっ！？」

「今度の敵は歯ごたえありそうだぜ！！！」

驚く八草重を尻目に仮面の男がやり手と見た司木は嬉々とした顔で仮面の男に殴りかかっていった。

司木の放つ拳と蹴りを見事と言える体裁きで交わしきると司木の顔に向かって鞘に入ったままの刀を突き出した。

「ぬおっ！？」

しかし、すんでのところ司木は腕でのガードに成功、その突き出された運動エネルギーを使って一旦、仮面の男から距離をとる。

「てめえ、何モンだ！？」

「新たな味方部の部員か？」

司木と八草重の言葉に仮面の男は初めて口を開いた。

「いや、私は君たちの思うところの人間ではない」

仮面の男の言葉に八草重は声を荒らげる。

「では、なぜ我らの活動の邪魔をする!?」

「何、少し私の恋焦がれる相手にちよっかいを出されたようだね。

彼の者とは万全な状態で死みたいのが私の望みなのだよ。すなわち

「

そこまでいうと仮面の男は腰を落とし、左手に鞘に入った刀を持ち  
右手を柄にそえる。

「私にしてみれば、君たちのしようとしたことは余りにも無粋極ま  
るということだ!」

まさに神速。目にも留まらぬ抜刀術が八草重に迫る。

「なっ!!!」

八草重が気付いた時は既に手遅れだった。銀に煌く刀身が八草重の  
体に吸い込まれようとした次の瞬間

「・・・・・・・・・・・・・・・・門」

冴の言葉と共に八草重と、ついでに司木までもが掻き消え仮面の男  
の一撃は空を切る。

「大丈夫!? 八草重君!!」

「・・・・・・・・ぶ?」

冴のVSSの能力で八草重の危機を救ったあきと冴は己が武器であ  
るTT『烈風』と『響』を構え仮面の男に対峙する。

さすがに気に食わない相手とはいえ、同僚が切られるのを黙ってみ  
てられるほど冷酷ではないようだ。

「ボクたちも人のコトいえないけど流石にあれは当たると怪我では  
すまない一撃だったよ、仮面の人」

そう。仮面の男はまさに八草重の命を刈り取らん勢いで一撃を放っ  
たのだ。

八草重も先ほどの一撃を思い出し冷たい汗を流していた。

『極星』ですら回避の間に合わない一撃を放つ謎の人物。

「貴方、本当に何者?」

あきの質問に仮面の男は口元に笑みを浮かべると再び抜刀術の態勢

に入った。

「ふむ、名乗るほどのものではないのだが………  
は、Mr・ブシドーと名乗っておこうか!!」

そして仮面の男、Mr・ブシドーは地面を蹴って世界征服部の『極星』4人に肉薄しようとしたその時

「両者、そこまで!」

緊張漂っていた空間に凜とした千影の声が響き渡った。

声のしたほうを振り返ると、そこにはそれぞれのADに着替えたはやなと千影の姿があった。

「何がなにやらわかならい展開になっておりますが、世界征服部の皆さんと仮面の人!乱暴狼藉は私たち正義の味方部、ティンクルセイバーが許しませんっ!」

「同じくナイトセイバー!そこは生徒共同スペースになる。私闘なら迷惑のかからないところでやってもらおう!!」

この正義の味方部の登場にMr・ブシドーは歓喜に震え上がった。

「はじめましただな、ナイトセイバー!」

今まで対峙していた世界征服部の面々などいないものと言った風に無防備に背中を向けると嬉々として千影へと向かっていった。

「よもや、この場面で君に出会えようとは!やはり乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない!それとも、ここで私たちの逢瀬を邪魔した輩に灸をすえていたからこそ立ち会えたのか……恐らく後者だ!!さあ、今こそ死合おうぞナイトセイバー!!」

そういうとMr・ブシドーは千影に向かって神速の一撃を放つ。

千影は『レクサス』から伸びた5本の光の爪を1つの剣に束ねるとMr・ブシドーの一撃を弾き返す。

「くっ!貴方はいつたい!」

「今はまだ真なる名はいえないが、私はMr・ブシドー。君の存在に心奪われた男だ!!」

千影の問いに鞘と刀による二刀流を繰り出すMr・ブシドーは高ら



かに名乗りを上げたのだった。

「何を、言っている！」

「好意を抱くよ。興味以上の対象だということだ!!！」

Mr・ブシドーの剣戟がさらに早くなる。『極星』4人を相手にしているはやなが気になるが、そつちに気を裂くことなど目の前の相手にとっては自殺行為だ。

「ええいつ！ナイトセイバー、形態選択！魔術戦闘形態!!！」

【Yes, your Highness. Mode change  
e Night mode Drive】

千影の命令をネクロノミコン機械言語版が復唱し、千影の左耳につけたピアスの輝石が光り輝く。

「続けてネクロノミコン機械言語版、接続!!！術式選択『バルザイの偃月刀』、単体召喚!!！」

【Yes, your Highness.】  
二刀流相手に『レクサス』のみでは捌き切れないと悟った千影は空いていた左手にバルザイの偃月刀を召喚する。

いきなり千影の左手に現れた剣にMr・ブシドーはさらに喜びの声を上げた。

「ほう！それははじめて見るなナイトセイバー!!！」

「出し惜しみしていて勝てる相手ではないでしょう！貴方はツ!!！」

「うれしい事を言ってくれる!!！」

求愛を求めるダンスのように2人は立ち居地を入れ替え、切り結び、舞う。

「征ッ!!！」

鏢迫り合いでMr・ブシドーを押し返した千影は左手に持ったバルザイの偃月刀をMr・ブシドーに向かって投擲する。

しかし、Mr・ブシドーもさるものいったん刀を鞘に納め、今一度神速の一撃をバルザイの偃月刀に向かって放つ。

「破ッ!!！」

Mr・ブシドーの一撃により弾かれたバルザイの偃月刀は一瞬では

あるが千影の姿をMr・ブシドーから遮った。

(はやな、君の必殺技使わせてもらおうよ!!)

千影はこの数少ない好機を生かすべく僅か数メートル隣で戦っている戦友にそう念を贈ると千影は素早く、ネクロノミコン機械言語版へと接続した。

「接続！術式選択『アトラックIIナチャ』!!」

【Yes, your Highness.】

千影の命により『レクサス』から伸びた光の刃がネクロノミコン機械言語版から引き出されたアトラックIIナチャの紅い糸に変わった。しなやかにしなる紅い糸の様は幻想の世界に足を踏みいえたような錯覚に陥る。

千影は『レクサス』から伸びた5本の糸をしならせると前回はやなが武居和麻にやったように星を形作った。

そしてその紅いの星はMr・ブシドーを中心にして煌く。

「スターダスト・インパルスッ!!」

千影の放った力ある言葉と共に星が強く煌いた。  
しかし

「疾ッ!!」

完全なる死角からの一撃をMr・ブシドーはその身を翻すことで威力を大幅に増した抜刀術で千影の必殺の一撃を切り払ったのだった。その一撃は空を裂き、カマイタチとなって千影に襲い掛かった。

「そう来るのなら!!」

千影はMr・ブシドーの攻撃を受け止めるべく、右手をしならせアトラックIIナチャの糸を蜘蛛の巣のように張り巡らした。

そしてカマイタチのような飛ぶ斬撃と全てを絡め採る蜘蛛の糸がぶつかり合う。

ぶつかり合った攻と防の力があたりに渦を巻く。

「英雄雄々オオオッ!!」

「霸々アアアアッ!!」

その渦を巻く中をMr・ブシドーと千影は互いに雄たけび距離をつ

めていく。

己が信じる最も威力の高い、その名の通り『必殺』の一撃を相手に叩き込むために。

「我流式抜刀術、奥義!!」

「断鎖術式、壱号『セレス』・弐号『ウイングダム』出力全開!!」

そして共に力ある言葉を紡ぎ、そこに破壊を顕現させる。

「壱の閃・魁ツ!!」

「アトランティス・ストライクツ!!」

放たれた剣戟と蹴りはまるで惹きつけあうかのように、ぶつかり合おうとした次の瞬間

「やめときな」

静かな、それでいて何よりも力強い言葉が響き渡った。

誰に向かうとなしに放たれた言葉に死合っていた千影とMr・ブシドーは互いの得物がぶつかり合う直前でピタリと止めたのだった。

そこで初めて千影は周りを見る余裕が出来た。

はやなは無傷、世界征服部の面々が少し焦っているところを見れば、はやなにいいようにあしらわれたのだろう。

どうやら心配は無用だったようだ。

そしてはやなの前に立つ全身紅色の女性、彼女が先ほどの言葉を放った人物だった。

どうやら紅の女性が止めたのは向こうの戦いのようでこちらに意識は向けていないようだった。

紅色の女性、久遠の一声に動きを止められたMr・ブシドーは何を思ったのか一刀を鞘に収めた。

「興が冷めた。今日のところは勝負を預けておくぞナイトセイバー」この言葉に千影も蹴り上げようとしていた足を下ろす。

「それは、こちらの台詞だ。貴方のような使い手がこんなところにいるとは、世界と言うのは存外狭い」

Mr・ブシドーと千影は今まで死合っていたのが嘘のように笑みを浮かべる。

「次にあうときまで私以外に負けてくれるなよナイトセイバー」

「私は誰にも負けるつもりはないが、物事に絶対はない。それが嫌ならば速く私を倒しに來い、Mr・ブシドー」

千影のこの言葉にMr・ブシドーは何かを思いついた顔になると千影の元に歩み寄った。

「では、手土産の1つでも貰っていくかな」

さきほどの張り詰めた殺気の中でなら千影は対処できたであろう。

しかし、相手も自分も殺気を既に拡散させた後だったので、千影はMr・ブシドーの急な動きに対処できなかった。

「???.....っ?!?!?!」

何であろう、Mr・ブシドーが千影の唇を奪っていたのだった。

いきなりのMr・ブシドーの暴拳に千影は顔を赤くすると、Mr・ブシドーを突き飛ばした。

「い、いつたい!?なにを!」

珍しく慌てふためく千影に突き飛ばされ距離をとらされたMr・ブシドーは笑みを浮かべる。

「言っただろう、好意を抱くと。興味以上の対象だと。これはソウいうことさ。ではな、ナイトセイバー。今度はその体もその魂も全て私が刈り取らせてもらおう」

未だに「あわあわ」と本当に珍しく慌てる千影を満足げに見るとMr・ブシドーはきびすを返し去っていったのだった。

そんなMr・ブシドーの去りいく姿を顔を真っ赤にしながら見ていた千影にはやなから声がかかった。

「千影ちゃん」

「はっうっ!?!」

いきなり自分の名前を呼ばれた千影は普段あげないだろう情けなくも可愛い叫び声を上げる。

「はやな、さっきの見た?」

恐る恐る聞く千影にはやなは頭の上に?を浮かべて小首をかしげた。

「何を?それより千影ちゃんは大丈夫?何か顔が赤いよ??」

どうやら先ほどのは見られていなかったらしい。

千影は「ほっ」と息をつくとそのさっきの事を胸の奥に嚴重にしまうことを決意するとはやなに自分は元気であることをアピールする。

「あ、うううん。何でもないよ、ほら体も大丈夫だし」

そんな中、紅色の女性が千影の前に歩み寄ってきた。

「ふうん。この子がはやなの新しい友達？」

久遠の問いにはやなが元気に答える。

「こつちに留学してきてる子で千影ちゃんって言っんですよ久遠せんぱい」

そういうはやなの頭を久遠は優しくなでる。

「そうかそうか。葵以外にも友達できたんだね」

「後輩もできましたよ」

未だにじゃれ合う2人に千影は小首をかしげながら久遠に向かって声をかける。

「あの、久遠さん？」

千影の声に久遠は、はやなから離れると千影に改めて向き直った。

「おっと、ごめんねえ。自己紹介がまだだったね。私は不破久遠。

よろしくね」

これが千影の先々代『紅蓮姫』にして永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術・我流『紅』の使い手たる不破久遠とのファーストコンタクトであった。

追記としてさつきとジェレミアが見事にそれぞれの大会で優勝してきたことをここに記すと共に、さつきの優勝祝いのために霧瀬の財布がさらに軽くなったことをここに記しておく。

それはそうと、千影とMr・ブシドーのキスを見ていた人物が2人だけおり、その2人がフルボッコされたことによって血を流しすぎた後にさらに血の涙を流していたことで生死の境を彷徨ったとか彷徨わなかったとか。

## 第20話【正義の味方部篇】（後書き）

さて、今回は全く決闘場面がない珍しい回となりました。

ここいらで第4部のために戦闘描写の練習をしておかないと思ひ、第2部ではノーマルな戦闘モノも書くことにしております。

千影君の決闘 and 騎乗決闘を楽しみにしていた方には申し訳ない  
とです。

そして今回も他作品からキャラを出向させていただきました。ガンダム00からアノ人です。この作品では皆かなりはっちゃけた性格に改変しておりますのでこんなの原作とは違うというのは平にご容赦  
お願いします。

あとティンクルキャラの不破久遠の流派ですが後々の他作品とのクロスを狙って改変しておりますので、そちらもご容赦を。

今回は最強カードのコーナーはお休みとなります。

## 第21話【正義の味方部篇】

とある昼下がりの美咲輝学院高等部が科学部部室のさらに最深部。核シエルターのような重厚な扉のその奥、ドクター・ウエスト3世の研究室に高らかな笑い声が響き渡った。

「ハーツハハハハ！ ついに出来たのである！ 苦節10日、寝る間も惜しみ夜なべどころか昼なべまでもを積み重ね、つ・い・に！ 我輩自身の最高傑作が世に生まれ出たのである！！」

誰であろう、この部屋の主にして『緑狂』たるドクター・ウエスト3世だった。

「思えば長い道のりだったのである。我がライバル、姫宮千影に連戦連敗を喫してからがケチの付け始め……」

ずっと眠っていなかったために壊れた頭がさらにハイになってしまったようで、ここにはウエスト3世とエルザしかいないのに大演説をぶちまけ始めた。

「しっかーし！！ここで諦める我輩ではないのである！ 『白煌』のVSSを元にこの我輩がさらに大きく進化、発展させたD・ホイール内蔵型VSS、『VSS-TD』ヴァーサス・タイプデモンベインがあれば姫宮千影に遅れは取らないのである！！」

そのウエスト3世が指差す先に、あきや冴のような凝った装飾が全くなく、色も着色が終わっていないのか、むき出しの金属が光る一着のVSSが鎮座していた。

そんなハイになっているウエスト3世に今まで助手をしていたエルザが鼻をつまみながらウエスト3世に向かって口を開いた。

「そんなことより終わったのならさっさと風呂に入りに行く口ボ。10日間風呂に入ってなかった3世は酷く臭う口ボ。ぶっちやけろと臭い口ボ」

このエルザの言葉にウエスト3世は自分の体の臭いをかぐと驚きの声を上げる。

「おおうつ！！そういえば何か臭うと思ったら我輩の体臭であったか！ちようどいいのである。垢と汗と、ついでに疲れも温泉部の温泉『しゃぼん』で洗い流してくるのである！！」

そう言うや否や、どこから取り出したのかシャンプーハットを頭にかぶり、風呂桶にタオル、石鹸、シャンプー、リンスにアヒルのおもちやまで万全の銭湯スタイルをとる。

「エルザもお風呂く口ボ」

エルザもウエスト3世に右に倣えとばかりに同じ装備を用意するとスキップしてそそくさと出て行ったのであった。

「待つのである、エルザ！！我輩を置いていくななのである！！」

それを見たウエスト3世は慌ててエルザの後を追いかけていったのだった。

研究室の扉を開けっ放しにしたまま

そして誰もいなくなった科学部の前の廊下にけたたましいエンジン音と1人の男の音が木霊する。

「春休みを利用して愛車に乗って気ままな一人旅をしていた俺だっただんだがな道中が弱い女性があーれーなんて悲鳴を上げつついわゆるやられ役みたいな奴らに追いかけているのを見たんで俺の中にある正義感が沸々と湧き上がってきたしか弱い女性を助けたんなら精神的にも肉体的にもお礼があるかなあっと思つて最速で登場したわけだなんせ俺はグッドスピードで『灰速』<sup>ハイスピード</sup>だからなそれにやられ役の男たちが俺に向かつて何か言おうとしてきたんだが最速であることを信条としている俺は会話をせずに男たちを蹴り飛ばして最速で女性を助けることに成功したのさそしたらか弱い女性がお礼のちゅっの1つでもしてくれかと思つたらいきなり怒り出してよくよく聞いてみたらやられ役の男たちは彼女の使用人で鬼ごっこして遊んでたつてらしたよオイオイ！そんな誤解を招くような遊びをするんじゃないと思つたけど最速を信条としている俺は即座に謝つて即座にトングラしたワケだがその女性の家がなあとヤのつ



く自営業的な会社の社長さんでなその会社の構成員もとい社員たちが集まって俺を追いかけてきたんだからさあ大変！喰うや喰わずの逃亡劇が始まってはや3ヶ月ああそんなこんなしてる途中で目の前が行き止まりにてここに碎けちるう！！」

今までのいきさつを誰も聞いていないのに早口に捲くし立てながら校舎の廊下をバイクで疾走するというとんでもないことをやった人間は開きっぱなしになっていた科学部部屋ウエスト3世専用の研究室に突っ込んだ。

「ヒヤーツハハー！！ドラマティック、エッセティック、ファンタスティックorランディングー！」

乗っていたバイクが壁に激突し鉄くずに変わる中、『灰速』と名乗った男は壁にぶつかる前にバイクから跳躍していたようで空中で綺麗にトンボを切ると無傷で着地したのだった。

その男、車両部が極星『灰速』にして世界征服部にも籍多くストリート・クーガーは鉄くずと化した愛車を尻目にキョロキョロとあたりを見渡す。

「っと、ここはイーストの研究部屋か。いつの間にやら学院に帰ってきたようだな」

ウエスト3世の名前を素で間違うと、その中をいろいろと物色し始めた。

「さてと、俺の愛車は粉々になっちまったし、あいつまた面白いもんつくつてないかなあつと　　おっ！」

そこでクーガーは鈍く光るモノ、先ほどウエスト3世が完成させたVSS-TDに目をつけた。

「こいつは……こりゃあいい！D・ホイールの機能もついているのか！！こいつは俺のようなグッドスピードにこそ相応しい……ハッ！そうかイーストの奴、粋な計らいをしてくれるなあ。俺のため専用D・ホイールとは……んじゃ、ありがたく貰っていくぜイースト！！」

こうしてウエスト3世いぬ間にウエスト3世の最高傑作はクーガー

に持っていかれてしまふのであった。

狂信的な研究開発と喜劇的な逃走劇をしていた2人を見ていれば忘れそうなことだが今は1学期の真つ最中であり、今日も土曜日で半ドンながら授業があるのだ。

そんな本日の終業を知らせる鐘が鳴り響く中、千影は「うん」と伸びをする。

「千影さん」

そこに隣のクラスから帰り支度をしてやってきたさつきが声をかけた。

「あ、さつき。来てくれたんだ。ちょっと待ってて」

そう言うと千影もそそくさと帰り支度をする。陣羽織を翻してさつきの隣に立った。

「お待たせ、じゃあはやな達と合流しようか」

「はい」

そして2人並んで仲良く廊下を歩き出す。

「今日は確か昼餉の前に温泉に入りに行くんだっただよね？」

「そうです。我が学院の温泉部が誇る温泉『しゃぼん』、きつと千影さんも気に入りますよ」

どうやら今日は正義の味方部揃って温泉につかりに行くらしい。

「温泉部なんてのもあるんだ。まあ世界征服部に正義の味方部なんである時点で何があってもおかしくないけどね」

しかも自分はその正義の味方部の部員なのだ。人様のことは笑えない。

さつきも千影の言葉に笑みを返す。

「それもそうですね。でも私はそんな『自由自在』なこの校風が大好きですよ」

「そうだね。こんなにのびのびとしたところ他にないかもね」

そんな他愛もない言葉を繰り返すうちに2人は集合場所となっている正義の味方部の部室、第4保健室『湊』の前まできていた。

「ん・・・あれは？」

そこで千影は『湊』の前にはやなや葵、久遠のほかに5人組の女の子がいることに気がついた。

さつきもそれに気がついたようで小首をかしげる。

「先輩たちの他にも誰かいますね。お客様でしょうか？」

「さあ、それにしてもあの5人は久遠と親しげに話してるようだけど・・・あつ！」

そこまで言っていると千影はその5人組の中に見知った顔を見つけると驚きの声を上げると、その人物の名前を呼んだ。

「アリサ！すずか！」

千影の言葉に久遠と話していた5人は千影の方を向くと、その中の1人アリサ・バニングスと月村すずかは笑顔で千影に駆け寄ってきた。

「千影！久しぶりじゃない！！」

「本当、ひさしぶり千影君！！」

「アリサとすずかこそ。どうしたの、わざわざヌーベルトキオシテイまで」

互いに互いの手を握り合うとそれぞれの近況を報告しあっていく。

「へえ。じゃあ2人は友達とこっちの温泉にかりに来たんだ」

「ええ。いつもは海鳴の月守台の温泉かスーパー銭湯を利用するんだけど、久遠さんがこっちの温泉もすごいって言ってたからつかりにきたのよ」

そこで千影は今まで疑問に思っていたことを口にする。

「そう言えば、久遠となんだか親しげだけど知り合い？」

「知り合いも何も私の友達の従姉妹のお姉さんよ。あ、そうそう。」

名前だけは前から言ってるから知ってるかもしれないけど改めて私の友達を紹介するわ」

千影の言葉にアリサは今まで蚊帳の外だった3人を呼ぶ。

その3人

栗色のサイドポニーの少女と金髪の長髪の少女、

栗色の短い髪の少女

は千影の事を何か懐かしむような視

線で見ながらも自己紹介を始める。

「高町なのはです。まだ初めましてだよね」

「フェイト・Ｔ・ハラオウンです。……よろしくね」

「八神はやてです。うわー、なんか不思議な感じやわあ」

3人が3人とも意味不明な言葉を発するが千影以下他の面々にも何のこともやら全くわからなかった。

「初めまして、姫宮千影です。3人のことはアリサとすすかごしに少しだけだけ聞いてるよ」

しかし千影はそれを気にすることなく、3人に歩み寄るとそう言っ  
て笑顔を向けたのだった。

海鳴組みの自己紹介が終わったところで正義の味方部の面々と海鳴組みの5人は連れ立って温泉に向かうことになった。

「へえー、じゃあ久遠せんぱいが言ってた従妹ってなのはちゃんのことだったんだね」

「どんなことをクーちゃんが言ってたの？」

「平気で無理や無茶を重ねる向こう見ず、だったわよね。はやな」

「ひつどーい！クーちゃん、それはいいすぎだよお！！」

「いや、こればかりはいいすぎじゃあないね。土郎さんといい、美沙斗さんといい、恭也といい、無茶する人たちの血筋なんだから。

ああ、それを言えば私もか」

「そうやで。なんといいっても、なのはちゃんはいつでもどこでも全力全開やからなあ。シャマルもいつも泣かされとるもん」

「そうだよ、なのはは目を離すとすぐに無理するんだから」

「なのはさんが、どんなことをしてきたのか聞いてみたい気がしてきましたね」

女3人寄れば姦しいというのが姦しさを過ぎれば華やかになると言うもの。

年も同じが近いこともあり、始めてあって少ししかたっていないにもかかわらず海鳴り組みと正義の味方部の面々はキヤイキヤイと楽

しいおしゃべりに興じていた。

「そういえば」

そこに今まで黙っていた千影が思い出したかのように口を開く。

「アリサとすずかは判るんだけど、なのは達と私どこかであったことある？何か3人とも私を知ってそうな雰囲気なだけ」

この千影の言葉になのは、フェイト、はやての3人は表情を引きつらせた。

「そ、そんなことないよね！ね、フェイトちゃん、はやてちゃん！

！」

「そ、そうだよ！千影が私達と会うのは今日が初めてのはずだよ！

！」

「そや、そや！それは勘違いと言うもんやで！！」

いかにも拳動が怪しくはあるが、まあアリサとすずかとを介した関係から、そう言う態度をとっているのだろうと千影は納得したのだ。つた。

それからというもの千影が話しかけるたびになのは、フェイト、はやての3人は何ともいえない微妙な顔をし、それを見たアリサとすずかがクスクス笑い、千影が小首をかしげるを繰り返すうちに温泉部が活動の集大成たる施設『しゃぼん』へとたどり着いたのであった。

「じゃあここからは別々だね」

温泉施設『しゃぼん』の前でそう言う千影に皆が『えっ！？』とした驚きの声を上げる。

「千影ちゃん、温泉はいらないの！？」

「まさか温泉の成分にアレルギーでも持っているのですか！？」

「あちゃー、それを知らずに誘ったのは悪いことしたかな」

はやな、さつき、葵が千影の言葉に千影をいたわる様な声をかける。他の面々も何か残念そうな顔をしているのを見て、千影は皆が忘れていた事実を口にするにした。

「皆忘れてない？私、男の子だよ」

この言葉に皆が皆『ハッ!』とする。

「そ、そうだよね! 千影ちゃんはおトコのコだったよね」

「い、今まで見てきた千影さんが余りにも可愛らしかったので殿方であると言つことをつい忘れていました」

はやなとさつきが顔を赤くする中、他の面々も千影が言わなければ千影と一緒に温泉につかる場面を想像してか顔を赤くしていた。

しかし、ここにそう言うことを気にしない大人が1人。

「まあ、でも姫宮さんなら可愛いから別に女湯でもいいんじゃない。ほら、よく言うじゃない可愛いは正義って!!」

全く持つてダメな大人の発言に久遠がヤレヤレと首を振りつつ霧瀬に釘を刺す。

「まったく・・・そう思ってるのはセンパイだけですよ。それに仮にも正義の味方が公序良俗を乱さないでください。ほら皆、行くよ」そして1人盛り上がる霧瀬を置いて久遠は皆をともなうと『しゃぼん』へと入っていった。

「ああ、不破さん!? 皆も待つてよおお!!」

置いていかれそうになった霧瀬は情けない声を上げながらみんなの後を着いて暖簾を潜ったのであった。

男湯に足を踏み入れた千影はかけ湯をし、並々と温泉が注がれた湯船に体を浸すと「ふいふ」と体を伸ばすと心に思ったことをそのまま言葉に出す。

「いい湯だな」 「いい湯なのである」

見事にハモツた言葉に同じ言葉を発した2人が驚いた顔でその声をたどり互いに後ろを振り返った。

「おっ?」

「えっ?」

千影が驚くのも無理はない。

なぜなら今の今までずっと姿を見せなかったウエスト3世が頭にたたんだタオルを乗せて千影の直ぐ後ろで湯船につきりながらアヒル

のおもちゃで遊んでいたのだから。

驚いたのはウエスト3世も同じで、しばらく固まった後自分が誰と見詰め合ってるのかを理解するとザッパア！と水しぶきを立てて思い切り立ち上がると千影をズビシツと指差した。

「オマエは我輩の終生のライバル姫宮千影！！まさかこのような場所で見るとは、これこそまさに偉大なるじつちゃんの思し召し！さあ今日こそは尋常に勝負　　って今はデツキもギターも持

ってきてないのであったー！！」

しかし手元にリベンジを果たすべきものがないことに気がついたウエスト3世はブクブクと湯船の中に沈んでいく。

最初は身構えていた千影だったが相手が戦う力がないことがわかると浮かしていた腰を元に戻し、湯船に沈んでいくウエスト3世に言葉投げかけた。

「こら、ウエスト3世。湯船にタオルをつけたらだめでしょう」

「おおっと、そうなのである。これは重大なマナー違反なのである」

千影の言うことを珍しく聞いたウエスト3世は改めて「どっこいしょ」と千影に並んで湯船につかる。

「今日は命拾いしたであるな、姫宮千影」

「それはこっちの台詞。でもまあ、今は一時休戦と行こう。こんな場所で争うのは余りにも無粋だよ」

「ほう。珍しく意見があつたのであるな」

共に同じ湯につきりながら2人は笑みを浮かべると、今まで敵同士であることを忘れたかのように語りだした。

「今の今まで姿さえも見なかったけど何をしていたの？」

「貴様を倒すために新装備を作っていたのである。ふふんっ！あの装備にかかればいかに貴様とてケチヨンケチヨンのギツタンギツタンなのである」

「そうか、それは楽しみだね」

「ふん。今に首を洗って待っている、なのである」

友人の語らいと呼ぶには余りにも不穩すぎ、敵との会話と呼ぶには余りに平和的な言葉を交わすと、ウエスト3世は湯船から体を起こした。

アヒルのおもちやを横においていた風呂桶に入れるウエスト3世に千影は疑問の声をかける。

「もう上がるの？」

「すでに我輩は1時間この『しゃぼん』を堪能したのであるからな。温泉部も中々いい仕事をするのである」

「そうか……短い休戦期間だったね」

まるで、この時間を惜しむようなことを千影は口にするが、その表情は凜と引き締められていた。

言葉とは裏腹に内に隠した闘気を漂わせる千影にウエスト3世は口元に笑みを浮かべる。

「そんな貴様だからこそ、大・天・オ！たる我輩がライバルに選んだのである。ではな、姫宮千影。次にあつた時が貴様の決闘者人生に初黒星がとれる時なのである」

そしてウエスト3世は頭にタオルを乗せたまま、風呂場から出て行くとしたのだが隣から聞こえる騒がしさにウエスト3世は足を止めた。

「うん？なにやら隣の女湯が騒がしいのである」

そう何やら女湯で騒動が起こっているのだ。

「本当だ。何だろう？」

2人が首を捻っている隣りの男湯の更衣室のほうからも何やら人の声が聞こえてきた。

否、声というよりもそれは魂の叫びだった。

「ハーツハハハツ、ハーツー！！この世の断りは即ち速さだと思いませんか物事を速く成し遂げればその分時間が有効に使えます遅いことなら誰でも出来る20年かければバカでも傑作小説が書ける有能なのは月刊漫画家よりも週刊漫画家週刊よりも日刊ですつまり速さこそ有能なのが文化の基本法則うっ！そして俺の持論なのですうう



うっ!!!」

自分の持論をぶちまけながらも人では決して出しえない速度で走ってきた男は、男湯の扉を蹴破り

「くぁwse driftgyふじこ1p!？」

さらに進行方向にいたウエスト3世までをも轢き飛ばし千影の眼前で止まると、その人物は天を仰ぎ見た。

「嗚呼アアツ・・・2分20秒・・・また2秒世界を縮めたアアツ・・・!!!」

誰であろう、銀色の鎧を身に纏ったストレイト・クーガーだった。

「あ、貴方はいつたい・・・?」

いきなりの扉を蹴破つての登場に面食らった千影は湯船に使ったままクーガーに名前を問う。

「おお!ここは女湯だったか!?これは失礼お嬢さん。俺は世界征服部所属の極星『灰速』又の名をグッドスピードのストレイト・クーガー。本日はここ温泉施設『しゃぼん』の男湯を征服しに来たのだが・・・ふむ、ここは男湯で間違いないようだ」

驚きの顔に染まる千影を見たクーガーは一瞬ここが女湯なのかと肝を冷やしたが自分が蹴破ってきた扉の奥に残骸として残る男湯の暖簾にほつと息をなでおろす。

「まさか、お嬢さん!隣の女湯に征服に言ってる浅凧九郎や下っ端2人が何か粗相をしてこちらにくるを得なくなったのでは!?おのれ、なんてうらやま・・・もとい文化的でないやつらだここは最速を信条とする俺が最速で男湯を征服し最速で女湯に向かい無体を働いている奴らを蹴り飛ばさなくては!!!っというわけでお嬢さんしばらくの辛抱です。それとお名前も聞かせてもらっても?」

サングラスを上の方にクイツと上げて片膝をつく、クーガーは湯船につかる千影に視線を合わせた。

「えっと・・・姫宮千影です」

いつもなら世界征服部と聞いた時点で臨戦態勢に入れるのだが余りに相手の登場の仕方と言い、この言動といいとっぴ過ぎてついてい

けていないようだ。

そんな千影から名前を聞いたクーガーは立ち上がると体全体で大きなリアクションをとると、その名をかみ締める。

「千歌音さん！ 嗚呼アツ！ なんてすばらしい名前なんだ！ 名前はその身を体現する正にこの名前は打てば響く凜とした刹那的高潔さのなかに父性本能をくすぐる永久的な可憐さを併せ持つあなたにピッタリの名前です！！」

しかし流石に名前を間違えられては千影も黙ってはいない。

「それは私の名前ではなく母の名前だ！ 私の名前は千影、ちなみに私はお嬢さんではなく男の子！！それに世界征服部といったね！ならば正義の味方部たる私、ナイトセイバーが貴方の活動をここで阻止する！！」

この言葉にクーガーは雷に打たれたように体に電撃が走る。

「な、なにいつ！！こ・・・こんな可憐で愛らしい子が男だと・・・俺が男と女を見誤った・・・俺が遅い？俺がスロウリイイツ！？これでは俺のキャラの文化的2枚目があつ！！・・・いや、しかし。これはこれで文化的な恋愛ではないか？男と男、性別の垣根を越えた究極の愛・・・はっ！そうかこれが文化の最先端にして文化の真髄か！！」

何やら1人で自己完結してしまったクーガーは千影の方に向き直った。

「千歌音さん！」

またしても名前を間違えるクーガーに千影は珍しく声を荒らげる。

「だからそれは母の名前だってば！！」

しかしクーガーはそんなことを気にかけるような人物ではなかった。「そんな細かいことはどうでもいいんです！俺は貴女に惚れました！！」

「なっ！？」

このまえのMr・ブシドーにつづいて同姓からのとんでもない告白

に千影は顔を真っ赤にした。

「つきましては騎乗決闘でランデヴーでもどうです？本当は貴女に弓引きたくはありませんが、何分こちらも部活動ですので活動したという実績がないとダメなのですよ。そこでどうでしょう？貴女も決闘者ならば挑まれた決闘からは逃げられないはず」

顔を真っ赤にした千影にクーガーは不敵な笑みを浮かべて千影に騎乗決闘を申し込んできた。

この申し入れに千影も顔を赤みを消し決闘者の顔になるとクーガーに口を開く。

「不純な動機が多分に含まれた決闘のようだけれど、決闘と聞いて逃げたとあつては決闘者の名折れ。その騎乗決闘」

「オンドウルルラギツタンディスカー！！なのである！！」

「受ける」と言いかけた千影の声にクーガーに引かれたウエスト3世の怨嗟の言葉がかぶった。

そんなウエスト3世の姿を確認したクーガーは頭をかきつつウエスト3世に声をかける。

「おっ、いたのかトースト」

「誰が外はパリツと中はモツチリであるか！！我輩はウエストである！！それに貴様が着ているそれ！それは我輩が我輩のために創った新型装備なのである！！な・ん・で、貴様が着ているのであるか！！」

ウエスト3世が怒るのも無理はない。クーガーの纏う銀色に鈍く輝く鎧はウエスト3世が10日かけて作り上げたVSS・TDなのだから。

「固いコトいうなよ。これはグッドスピードで『灰速』でもある俺が着こなしてやるから安心しとけ」

「そういう問題ではないのである！！」

クーガーとウエスト3世がVSS・TDの所有権をめぐりいい争いを始めたので、すっかり蚊帳の外に追いやられた千影にどこかしらから声が聞こえた。

「姫宮さん、姫宮さん」

声をたどってみると、混浴露天風呂の方で白衣を纏った霧瀬が千影に向かつて手招きしていた。

「なんて格好でいるんですか藤代教諭………」

裸に白衣のみを着ると言う変態的な格好の霧瀬に千影は頭痛を覚えながら長タオルで胸元から下半身を隠しながら霧瀬が手招きしている混浴露天風呂へと出る。

そんな千影の姿を見て霧瀬から一言。

「あら、なかなかそそられるポーズね姫宮さん」

「真面目にしないと私怒りますよ」

「もお、本当に姫宮さんは可愛いわねえ……っと、今はそれよりもコレ」

怖いと言うよりも可愛らしいと形容したほうがしっくりくる千影の睨み顔に霧瀬は笑みを浮かべると、千影にA Dの入ったアタッシュケースを渡してきた。

千影はここにあるはずのないものに驚きの声を上げる。

「ナイトセイバーじゃないですか！？なんでこんな温泉に!?!」

「ふっふーん、こんなこともあるつかとってね」

いつかは言ってみたかった言葉の1つをさらりと言ったのけた霧瀬だったが、今日の千影は手ごわかった。

「ろくでもない事を考えて持ってきたのが怪我の功名になったってところですか」

「ぎっくうんっ！そ、そんなことはないわよ姫宮さん」

実のところは千影の言うとおりでA Dを温泉の湯で洗おうと目論んだ霧瀬が持ち込んできていたのだ。

「ま、いいです。こっちにこれをもってきたってコトはやっぱりそちらも?」

「そうよ、世界征服部が征服をしかけてきたの。今は鈴鳴さんと天宮さんが向こうで戦ってるわ」

さきほどの女湯の騒がしさはやはり世界征服部の活動が原因だった

ようだ。

「わかりました。こつちも極星が1人征服活動に乗り込んできたので撃退してきます」

千影は霧瀬からADを受け取ると力強く頷いた。

「頼んだわよ」

未だに手をヒラヒラさせる霧瀬に千影は非難の視線を投げかける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どしたの？」

千影の視線に霧瀬は首を傾げるが、とうとう千影にも我慢の限界が来た。

「着替えますから女湯に戻ってください!!!」  
「さもありなん。」

ナイトセイバーに着替えた千影は男湯の中に戻ると、そこではクーガーとウエスト3世の言い争いは佳境に差し掛かっていた。

「んじゃ、俺が試験運用のデータ採ってやるからそれでいいだろう」

「ぐっ・・・！確かに騎乗決闘の腕前は貴様のほうが上なのは事実なのである」

「じゃあ俺に任しとけて」

「納得できないのであるが、納得しておいてやるのである」

「どうやら落ち着くところに落ち着いたようだ。」

「つてなわけで千・歌・音・さくん！つと、おお！？さすが千歌音さん！文化的な速さ、俺が惚れただけのことはある」

混浴露天風呂からナイトセイバーに着替えた千影が入ってくるのを見たクーガーは千影が短時間のうちに自分に気付かないうちに『しやぼん』を離脱してADに着替え、そして戻ってきたと思ってるらしい。

うんうんと頷くクーガーに千影は頬を赤く染めながら魔砲型召喚術式『レガリア』を構える。

「運よく顧問の教諭がここに持ってきてただけだよ！それよりこっちは騎乗決闘の準備はいいけど、そっちは？」

「どうやら千影はクーガーの名前間違いはなるべく気にしないことにしたらしい。」

クーガーもナンパな顔は半分鳴りを潜め、その代わりに戦士の表情が顔に浮かぶ。

「いつでも、どこでも、どこからでもOKですよ」

クーガーは千影に倣い、決闘盤の装着された左腕を掲げた。

そんなクーガーに千影は表情を引き締めるとクーガーの隣に立つ。

「では・・・ナイトセイバー・騎乗決闘形態 起動！」

【Yes, your Highness. Knight Mare mode Drive】

千影の言葉に呼応してネクロノミコン機械言語新訳版に文字が浮かび上がると『レガリア』に内蔵されたカードから騎乗決闘用に設定されたデッキを組み、デッキゾーンへとデッキをセット。さらに千影のヘッドセットからバイザーが出現する。

それを見たクーガーも自分の前髪で頭の上に置かれたサングラスを留めた前髪を跳ね除けるようにしてサングラスをかける。

「じゃあ、いきますよ千歌音さん！フィールド魔法、スピード・ワールド発動！！」

「千影だつて、もお！・・・フィールド魔法、スピード・ワールド セット！！」

【Speed World Get laddy】  
2人の発動したスピード・ワールドによりこの騎乗決闘はスピード・ワールドに支配されたのであった。

そして2人はスピードの支配するフィールドをいち早く己が足で駆け抜けるためにクーガーはクラウチングスタートの、千影はスタンディングスタートの姿勢をとる。

そして示し合わせたかのように2人の声が重なった。

「騎乗決闘・加速開始ッ！！」

スタートを切ると同時に千影は先手を取るために脚部の術式を起動する。

「断鎖術式番号『セレス』、式号『ウイングダム』 開放！」

「！」

【Ignition】

時空間歪曲による推進力で千影は一気に速度を上げる千影にクーガーが後ろから声をかけてきた。

「第1コーナーを先にクリアした方が先行でいいですね！」

この手の先攻後攻取得の方法は初めてで一瞬千影は逡巡したが是非もなしと首を縦に振った。

「その勝負乗った！！」

「それでこそ千歌音さんだ！」

「千影だつてば！！」

クーガーの名前の間違いに律儀に応えながら千影は先行をとるためにさらに力強く時空間歪曲力場を踏みしめる。

しかし

「そんな走り方じゃ、俺の前は走れませんよ！」

千影の1歩よりもさらに速く、さらに大きな跳躍でクーガーが千影の前に躍り出る。

「なっ！？」

そして驚く千影を尻目にクーガーはVSS-TDの踵部分に取り付けられたピストン型の擬似断鎖術式を使い、華麗な三角飛びで第1コーナーを制したのだった。

クーガーLP4000：SPCO

千影LP4000：SPCO

「と、言うわけで俺の先行！ドロー！！」

先行をとったクーガーはデッキからカードを引くと、その中から1枚のカードを選び出す。

「俺はリバーズカードを1枚セットしてターンエンド!!」

場にモンスターを出さないままターンの終了を宣言したクーガーに千影は驚きつつも警戒心を強める。

(手札事故!?!いや・・・彼の手に迷いはなかった。ということ  
は彼は私の攻撃を誘っている?・・・ならばこちら  
はただ進むのみ!!)

そう決心した千影はカードを引くべくデッキへと手を伸ばした。

「私のターン、ドロー!!」

クーガールP4000:SPC1

千影LP4000:SPC1

千影のターンの始まりと共に2人にスピードカウンターが1つずつ加算された。

千影は引いたカードを見ると、それを即座に召喚する。

「私はLOVサーヴァント-サムヴァルタ-を攻撃表示で召喚!」

LOVサーヴァント-サムヴァルタ- 4 ATK1800 D

EF1200

千影の場に溶鉱炉の体を持つ鉄の馬が現れたのだった。

そして千影は壁のいないクーガーに向かって手を翳す。

「戦闘ツ!LOVサーヴァント-サムヴァルタ-でクーガーに直接  
攻撃!!魂の高炉!!」

命令を受けたサムヴァルタはその身に宿す炎をクーガーへと向けて  
放った。

「ぐうっ!!」

そして灼熱の炎がクーガーを焼く。

(よし!これでライフと共にスピードカウンターも削れた)

騎乗決闘のルールによりダメージ1000ポイントごとにスピード



カウンターは削られる。これでクーガーは失速するはずだった。しかし

クーガーLP2200：SPC1

「何っ!? スピードカウンターが減っていない!?!」

「理由はこれですよ。畏発動! デス・アクセル!」

千影が驚きの声を上げる中、クーガーは不敵な笑みを浮かべると自分の場に伏せられたカードを発動し、その効果を千影に語る。

「戦闘でダメージを受けた時発動! スピードカウンターの減少を無効にし、さらにダメージ500ポイントごとにスピードカウンターを1つ乗せる畏カード! 俺が受けたダメージは1800、よって

┌

クーガーはその足に力を込めるとVSS-TDに搭載された擬似断鎖術式が唸りを上げてピストンが上に持ち上がる。

「俺のスピードカウンターは3つ加算される!」

クーガーLP2200：SPC4

そしてピストンの下降と共に開放された時空間歪曲の推進力がクーガーのスピードを一気に押し上げたのだった。

「ああっ! 千影ちゃんと灰色の極星さんとの間にもうこんなに差ができてちゃった!」

女湯の世界征服部を撃退したティンクルセイバーことはやなは、いつの間にか霧瀬が用意したモニターでグングン差を付けられる千影に声を上げた。

隣のアークセイバー、さつきも険しい顔でモニターを見ながら口を開く。

「千影さんの話ですと、この騎乗決闘と言うものはスピードがあれ

ばある分だけ有利になるとか……これは千影さんには厳しい戦いになるかもしれませぬ」

2人の言葉に海鳴組みの面々も難しい顔になる。

そんな中

「ふんつ、当然と言えば当然のことなのである。奴、『灰速』の極星ストリート・クーガーは騎乗の申し子。馬であろうが自転車であろうがバイクであろうが車であろうが、それが乗り物である限り何でも速く走らせることのできる速さの天才なのである。しかも奴が今纏っているVSSは大・天・才！たる我輩が苦心して作り上げた傑作！！アノ程度は朝飯前どころか昨日の晩飯、昼飯前なのである！！あれ？朝飯に戻ってる？？」

いつの間にか海鳴組み&amp;正義の味方部+エルザの面々と共にモニターを見ていたウエスト3世の姿にアリサは驚きの声を上げる。

「何よ！？この緑の気色悪い奴！？」

アリサらしいといえばアリサらしいウエスト3世に向けた第一声であった。

「気色悪いとは失礼な金髪娘であるな！！」

いきなりの失礼発言に腹を立てるウエスト3世だったが、アリサはまるでウエスト3世を汚物を見てしまったという風に視線を外すと温泉で仲良くなったエルザの手をとってこちらの方に引き寄せる。

「エルザは、あんなキガイに近寄っちゃダメよ」

「貴様！我輩のエルザに何を吹き込んでいるのであるか！エルザは我輩の所有物なのである！！」

「なっ！？何を言ってるのよ！この変態！！変質者！！性犯罪者！！」

「言うに事欠いて、数々の暴言許すまじなのである！おかげで我輩のグラスハートはハートブレイクなのである！！」

キヤーギヤーと罵り合いを始めたアリサとウエスト3世に他の面々は苦笑をもらすしか出来なかった。

アリスとウエスト3世が壮大な罵り合いを繰り広げているとは露とも知らない千影はクーガールの騎乗決闘独特の戦術に笑みを漏らした。「スピードスペルで勝負と言っわけか……面白！」

千影は『レクサス』内部の手札の内容を見ると、そこから2枚のカードを選び出す。

「カードを2枚伏せてターン終了！」

「俺のターン、ドロー！」

千影のターンエンド宣言にクーガールはデッキからカードをドローした。

クーガールLP2200：SPC5

千影LP4000：SPC2

「今こそ、俺の真の力を見せてあげましょう！」

クーガールはそう叫ぶと手札の1枚に手をかけた。

「Sp-ラディカル・グッドスピード- 脚部限定-、発動！！スピードカウンターが4以上あるとき、手札からラディカル・グッドスピード-ライトレッグ-とラディカル・グッドスピード-レフトレッグ-を特殊召喚する！！」

そしてクーガールは手札のカード2枚を場へと特殊召喚する。

ラディカル・グッドスピード-ライトレッグ- 2 ATK60

0 DEF0

ラディカル・グッドスピード-レフトレッグ- 2 ATK60

0 DEF0

クーガールの場に灰色に輝く脚部甲冑が現れたのだった。

「このモンスターは専用の魔法・畏カードでしか召喚できない特殊なモンスター……そして！その効果は……！！」

クーガールの言葉と共にラディカル・グッドスピード・ライトレッグ  
・と・レフトレッグ・は光の粒子になり、それがクーガールの両足に  
纏わりつくとも光がはじけた。

「なっ!?!」

千影が驚くのも無理はない。

場に召喚されたモンスターを決闘者たるクーガーが装備していたの  
だから。

「俺のデッキのモンスター、ラディカル・グッドスピードはプレイ  
ヤーの装備カードとなることで真価を発揮する特殊効果モンスター  
!最終的な と攻撃力、守備力は俺に装備されたラディカル・グッ  
ドスピードのそれぞれの値の合計で決まる!!!」

その合計

ラディカル・グッドスピード・ストレイト・クーガー - 4 A  
TK1200 DEF0

「行きますよ、千歌音さん!!!」

「千影だつてば!!!」

千影が名前の訂正を叫ぶ中、クーガーは擬似断鎖術式の出力を一気  
に上げるとピストンを開放し空へと跳ぶ。

そして、千影の場のサムヴァルタに狙いを定めると

「ヒイール・アアアンド・トウウウウッ!!!」

一迅の流星になり、跳び蹴りを放ってきたのであった。

「まさか!攻撃力1200で攻撃力1800のモンスターに攻撃だ  
なんて!?!」

クーガーの攻撃に千影が驚く中、クーガーの蹴りがサムヴァルタへ  
と迫る。

「この時!ラディカル・グッドスピード・ライトレッグ・の特殊効  
果を発動!!!」

クーガーの宣言と共に攻撃力では勝っているはずのサムヴァルタが

クーガーに蹴り抜かれると破壊され爆炎を生み起こした。

「そ、そんな莫迦な!？」

驚く千影にクーガーは口元に笑みを浮かべて先ほどの現象の説明に入った。

「ラディカル・グッドスピード・ライトレッグは攻撃する時、ダメージ計算を無視して相手モンスターを破壊することができるのですよ。さらに相手モンスターを破壊したことでラディカル・グッドスピード・レフトレッグの効果が発動! 戦闘で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを貴女に与えます」

そしてクーガーは再び空へと舞い上がると、千影に狙いを定める。

「受けてください! 衝撃のおおツ、ファーストブリットオオオオオツ!!!」

今度は自分に放たれた蹴りに千影は『レクサス』が装着された右腕を前に翳しクーガーの蹴りを受け止める。

「んんツツツツ!!!」

千影LP2200:SPC1

しかし、衝撃は殺しきれずに千影は減速を余儀なくされてしまったのだった。

「さらに俺はカードを2枚セットしてターンエンド! どうです、俺の速さは　　って、ええええええっ!？」

ターンエンド宣言をしたクーガーは距離の大きく空いた千影を振り返ると驚きの声を上げた。

なぜなら

「私のターン、ドロー!」

大きく距離を離れたはずの千影がクーガーの直ぐ後ろにいたからであつた。

クーガーLP2200:SPC6

そしてついに隣に並んだ千影にクーガーは驚くが、そのトリックの存在に気がつく。

「な、なんでスピードカウンター1の貴女が……って、ああああッ!! スリップ・ストリームかああッ!!」

そう千影の場に表側で表示された畏カード、スリップ・ストリームがあつたのだ。

「君がSp-Ladical・グッドスピードを発動した時に発動させてもらった! 君がスピードに乗って私との距離を離れたのがあだになつたな!!」

千影の言の通り、千影との距離を離しすぎたクーガーは先ほどのターンのスリップ・ストリーム発動に気がつかなかつたのだ。

「そしてスリップ・ストリームの効果!! 相手よりスピードカウンターが少なく、相手がスピードスベルを使用したときに発動! 次の自分のスタンバイフェイズ　つまり今、相手のスピードカウンターの数と同じになるように自分のスピードカウンターを増やす!!」

横に並んで駆ける千影の姿にクーガーは嬉しそうな顔になると千影に向かって口を開く。

「流石です千歌音さん!! 貴女は情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ、この世のありとあらゆるものを備えたお人です! だがしかし、そんな貴女にも唯一足りないものがある!! それは　速さが足りない!!!」

そしてクーガーは決闘盤へと手を伸ばし、1枚の伏せカードを発動する。

「畏カード、アクセルゾーン発動!!」

クーガーは畏カードの発動と共に天に向かって指を突き上げた。

「風力・温度・湿度、一気に確認!! さあて……世界を縮めに行きますか!!」

そして擬似断鎖術式のピストンを最大限に絞り、一気に解き放つ。その加速は辺りにソニックウェーブを撒き散らし、折角詰めた千影の速さをあざ笑うかのように千影との距離を大きく、大きく引き離す。

そのスピード

クーガール P 2200 : S P C 11

「スピードカウンター11!?!」

千影の驚きの声に遙か前を走るクーガールの声がヘッドセットのイヤホンから聞こえてきた。

「アクセルゾーンは相手プレイヤーがスピード・ワールド以外の効果でスピードカウンターを増やした時、カウンターを5つ増やすことが出来る罠カード!?! いかにも貴女とはいえ、このスピードにはついてこれない!?!」

遙かに前を走るクーガールの姿に歯噛みする千影だったが、今の自分の最善を尽くすべく手札にあるカードを切る。

「私は S p - サモン・スピダーを発動!?! このカードは自分の場のスピードカウンターが4つ以上ある時、発動! 手札から 4 以下のモンスター1体を特殊召喚できる! 私は L o v サーヴァント・ヴォーパルバニー - を攻撃表示で特殊召喚!?!」

L o v サーヴァント・ヴォーパルバニー - 4 A T K 1000

D E F 500

「L o v サーヴァント・ヴォーパルバニー - の効果! このモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドロウする!?! さらに手札からチューナーモンスター、L o v サーヴァント・ケリユネイア - を攻撃表示で召喚!?!」

ヴォーパルバニーのモンスター効果でデッキからカードを引いた千

影はさらなる使い魔を召喚した。

LOVサーヴァント - ケリユネイア - 4 ATK1500 D  
EF1300

人型の兎と青銅の蹄をもつ鹿を従えた千影は前を走るクーガーに向かつて手を振りかぶる。

「LOVサーヴァント - ケリユネイア - でクーガーを攻撃!!」

「やはり、そう来ましたか!」

アルテミスの矢よりも速く走ると言われるケリユネイアは、その速度を武器にしてクーガーに角を突き立てるとクーガーは迎え撃つように右足を蹴り上げるが

クーガーLP1900 : SPC11

ラディカル・グッドスピード - ストレイト・クーガー - 2 A

TK600 DEF0

クーガーのライフポイントが削られると共にラディカル・グッドスピード - ライトレック - が壊れ、光と消えたのだった。

「ラディカル・グッドスピードは装着したプレイヤーの攻撃力、守備力以上の攻撃を受けた時、ダメージ計算の後に場にあるラディカルグッドスピードと名のついたカード1枚を破壊しなければならぬ効果を持つ………地味ながらいい手です、千歌音さん!」

しつこく名前を間違うクーガーに千影は懲りずに訂正を入れると、ヴォーパルバニーにも攻撃を命じる。

「千影だつてば!! 続けてLOVサーヴァント - ヴォーパルバニー - で攻撃! フラッシュストライク!!」

ヴォーパルバニーは遙か先を走るクーガーを見据えると、足元に光の球体を作り出し、それをクーガーに向けて蹴り放つ。



「なんのっ！」

クーガーも振り返りざまに光弾を左足でけり返そうとするが、如何せん攻撃力が足らなかった。

クーガール P 1500 : S P C 11

ラディカル・グッドスピード・レフトレッグ - までも破壊され、丸裸と鳴ったクーガーに千影は必殺の一撃を放とうと、リバーズカードに手をかける。

「今だ！！罨カード、緊急同調を発動！！このカードの効果は戦闘フェイズに自分の場にあるモンスターでシンクロ召喚が行えると言うもの。そしてシンクロ召喚されたモンスターにも攻撃は有効だ！！」

「シンクロ召喚による連続攻撃だ！？」

千影の猛攻にクーガーが驚く中、千影が星々を束ねるべく腕を振りかぶった。

「4 L O V サーヴァント - ヴォーパルバニー - に 4、L O V サーヴァント - ケリユネシア - をチューニング！！」

千影の言葉に導かれ2体の使い魔は星となり宙を舞う。

「迅き星が、集いてここに王の獣を呼び覚ます。獣の王よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、獣となりし王 L O V サーヴァント - ワーライオン - ！！！」

L O V サーヴァント - ワーライオン - 8 A T K 2600 D  
E F 2500

星が砕け散ると共に、その身を憤怒で獣に変えたかつての賢王が雄たけびを上げて千影の隣に降り立ったのだった。

その千影の召喚した L O V サーヴァント - ワーライオン - の姿にモ

モニターを見つめるはやなは喜びの声を上げていた。

「やったあ。これで千影ちゃんの勝ちだね」

「まだよ、はやな。相手の場にはまだ伏せられたカードがある。内容はどんなものなのか見当がつかないけど、このまま行かせてくれないことは確かだね」

はやなと違い、的確に状況を分析する葵に霧瀬からの言葉がかかる。

「あら、京月さん。決闘者でもないのによくお分かりね」

「まあ、何回かは特等席で千影君の決闘を見ましたからね。これぐらいは」

そして再び、モニターに移る千影とクーガーの決闘に視線を戻す。

「千影さん……………」

「千影……………」

「千影君……………」

そんな中、ナイトセイバーを駆る千影を本当に懐かしそうに見つめるのは、フェイト、はやての3人の姿に気がついていたのは親友であるアリサとすずか、そしてなのはの従姉である久遠のみ。

彼女達は千影の事を知っていて、千影は彼女達の事を知らない。

千影となのは達の関連性に謎が深まるばかりだった。

場面を騎乗決闘の方に戻すと、ワーライオンを従えた千影はクーガーに向かって口を開いていた。

「L o Vサーヴァント・ワーライオン - は戦闘フェイズに2回の攻撃が行える効果を持つが、ここは一撃あれば十分だ！ L o Vサーヴァント・ワーライオン - でクーガーに直接攻撃！！」

千影の命を受けたワーライオンが腕に装着された剣を振りかぶり、クーガーへと迫る。

「そうはさせませんよ！ 畏発動、ラディカル・グッドスピード・スピードレーサー - ！！このカードは墓地にある全てのラディカル・グッドスピードと名のついたモンスターをデッキに戻すことで、戻した枚数分だけ、自分の場にスピードレーサートークンを特殊召喚

することができるのです!!」

クーガーは自分の墓地から2枚のカードを掲げて宣言する。

「俺は墓地にあるラディカル・グッドスピード・ライトレグとラディカル・グッドスピード・レフトレグをデッキに戻し、場に2体のスピードレーサートークンを守備表示で特殊召喚!!」

スピードレーサートークン	3	ATK1000	DEF1000
スピードレーサートークン	3	ATK1000	DEF1000

クーガーの場に趣味の悪い色と形をした車が2体現れたのであった。だが千影はそれでも攻撃の手を緩めない。

「しかし、戦闘続行!!ワライオン、スピードレーサートークンを一掃しろ!!」

千影の号令の元、ワライオンの放った2連撃がスピードレーサートークンを切り裂いたのだった。

「カードを1枚伏せてターン終了」

千影のターンエンド宣言と共に、ついにその瞬間はやってくる。

「俺のターン!」

クーガールP1500:SPC12

千影LP2200:SPC7

クーガーの高らかなターン開始宣言と共に、騎乗決闘でのMAXスピード、スピードカウンター12の領域にクーガーは突入したのであった。

「どうです、千歌音さん!このスピードこそが俺の騎乗決闘!世界を縮める俺の決闘です!!」

そう千影に宣言したクーガーは手札から1枚のカードを決闘盤へと挿入する。

「手札からSp-アクセル・ドロを発動!自分の場のスピードカ

ウンターが12個ある時に発動、デッキからカードを2枚ドロースる！！」

そしてアクセル・ドローにより引いたカードを見たクーガーはその顔に笑みを浮かべる。

「残念ですが千歌音さん。この楽しいランデヴーもここまでのようです」

「何をつ！？」

「貴女に見せて差し上げましょう、俺の真の速さを！！手札からS p・ラディカル・グッドスピード・フォトンブリッツを発動！！」  
クーガーの台詞に驚きの声を千影が上げる中、クーガーは手札にある切札を切った。

「このカードは自分の場のスピードカウンターが12以上あるときに発動できるスピードスペル！！その効果は自分のデッキにあるラディカル・グッドスピード・アーマー、ラディカル・グッドスピード・ライトアーム、ラディカル・グッドスピード・アーマー、ラディカル・グッドスピード・ライトアーム、ラディカル・グッドスピード・ライトレッグ、ラディカル・グッドスピード・レフトレッグを自分の場に特殊召喚する！！」

ラディカル・グッドスピード・アーマー	2	ATK600
DEF0		
ラディカル・グッドスピード・ライトアーム	2	ATK60
DEF0		
ラディカル・グッドスピード・レフトアーム	2	ATK60
DEF0		
ラディカル・グッドスピード・ライトレッグ	2	ATK60
DEF0		
ラディカル・グッドスピード・レフトレッグ	2	ATK60
DEF0		

クーガーの場に現れた一式の灰色の鎧に千影の表情は驚愕に染まる。

「ッ!?!?!?」

「そして、ラディカル・グッドスピードのモンスター効果発動!」  
5つのラディカル・グッドスピードはクーガールの叫びと共に光の粒子になるとクーガーを取り巻き、その身に次々と灰色の鎧を装着していく。

「ここで生き抜くためには迷ってる暇はない迷いが迷いを産みそれが他者に伝染して誰一人動けなくなる自分の中にある多情を捨て目標を唯1点のみに集中させる!コレが俺の速さだあああッ!」  
クーガールの叫びと共に光の残滓が弾け跳んだ。

ラディカル・グッドスピード - ストレイト・クーガー - 10  
ATK3000 DEF0

そこには流線型の装甲でできた鎧を身にまとう『灰速』ストレイト・クーガールの姿があった。

「いきますよ!」

そしてクーガーは反転して千影と向き合くと、信じられない速度で千影のワーライオンに肉薄する。

「ッ!!!リバーズ罨オープン!!!アルカナストーンシールド!!!」  
クーガーの攻撃に攻撃力を500ポイント上げ、さらに1回であるが戦闘及び効果による破壊を無効に出来る装備型罨カードで対抗しようとした千影であったが、それはクーガーには通用しなかった。

「だが、速さが足りない!!!ラディカル・グッドスピード - ライトアーム - のモンスター効果!このカードを装備しているプレイヤーと装備されたディカル・グッドスピードは自分のターンである限り相手の罨カードの効果を受けず、さらに手札を1枚捨てることで相手の発動した罨カードの効果は無効にして破壊することができる!俺は手札を1枚捨ててアルカナストーンシールドの効果は無効にして破壊!!!」

クーガーにアルカナストーンシールドを無効化された千影は、それ

でも諦めずに手札のカードを切る。

「ならば！手札からL・O・Vサーヴァント・グリフォン・のモンスター効果発動！！」

「やりますね千歌音さん！だが、それでもまだ速さが足りない！！ラディカル・グッドスピード・アーマー・のモンスター効果！このカードを装備しているプレイヤーと装備されたディカル・グッドスピードは自分のターンである限り、相手の効果モンスターの効果をを受けず、さらに手札を1枚捨てることで相手の発動した効果モンスターの効果を無効にして破壊することができる！！手札を1枚捨てて、グリフォンの効果を無効化！そして破壊！！」

「そ、そんな……！！？」

幾度となく千影のピンチを救ってきたグリフォンでさえ破られた千影に、もはや身を守るすべはなかった。

そんな千影のワーライオンにクーガーが必殺の蹴りを放つ。

「壊滅のおおっ、セカンドブリットオオオオッ！！」

ワーライオンは一矢報いようとしたのだが、それすらかなわずに爆煙へと散ったのだった。

「くううっ！！」

千影LP1800：SPC7

クーガーの攻撃によってできた爆煙から抜け出た千影の目の前に今だ攻撃態勢を緩めないクーガーの姿があった。

「ラディカル・グッドスピード・レフトレッグ・の効果、忘れていませんよね！？先ほどの戦闘で破壊したワーライオンの攻撃力、2600ポイントのダメージを受けてもらいますよ千歌音さん！！」  
そう。まだクーガーには最後の1撃が残っていたのだ。

「受けてください、俺の速さをおおおおっ！！」

そしてクーガーは天高く空を舞うと擬似断鎖術式のピストンを空中で開放。時空間歪曲による力場でその体を高速回転させていく。

そして

「瞬殺のおおおっ、ファイナルブリットオオオオオオッ!!!」  
竜巻と化したクーガーの一撃が千影を飲み込んだのだった。

「うそ……よね……」

「千影さんが負けた……」

葵とさつきは未だに信じられないものを見るかのようにモニターに移る爆煙を眺めていた。

はやなはモニターに備え付けられたマイクに向かって千影の名前を叫ぶ。

「千影ちゃん！千影ちゃああんっ!!!」

が、返ってくるのはノイズばかりで千影の声は返ってこなかった。

他のメンバーも千影の敗北が決定的だと感じる中、誰かがが口を開いた。

「まだなのであーる」

それはこの中で唯一、千影と決闘をしたウエスト3世であった。

皆が『えっ!?!』とした顔になる中、ウエスト3世は言葉を続ける。

「奴がここで負けるような決闘者であるなら、すでに我輩がその首級を上げているのである！奴は今までここ一番のピンチをドラマティックに、そしてファンタスティックに乗り越えてきたのである。確証はないが奴についての1つの確信があるのであーる。」

姫宮千影。奴にはそう……絶対勝利という荒唐無稽な御

伽噺を紡ぐ力があるのであーる」

ウエスト3世の言葉に呼応するかのようにモニターに映る煙の奥で3つ、紅蓮の光が燃え盛る3つ目のように燈ったのだった。

攻撃を終えて距離をとったところに着地したクーガーは今だ晴れぬ爆煙に信じられないと言った表情を向けていた。

「どういうことだ……これは？」

確かに手ごたえはあった。さっきの攻撃で確実に千影に2600ポ

イントのダメージを与えたはずだ。

相手には伏せカードも手札もすでになくこの攻撃を回避する手段はなかったはず。

なのに

「なんで・・・なんで貴女は立っていられるんです!?!」

クーガーの叫びと共に千影の周りを纏っていた煙が晴れた。

そこには

千影LP200:SPC5

「残念だったな、ストレイト・クーガー。さあ仕切りなおしという」

両の眸と紅の輝石を紅蓮に燃やした千影が立っていたのだった。

この姿にクーガーはこの決闘始まって以来初めて戦慄の表情を浮かべる。

「そんなバカな!?!確かに俺は貴女に2600ポイントのダメージを与えたはずだ!?!」

「そう確かに君の最後の攻撃は見事だったさ。アルカナストーンシールドもグリフォンも無効化されて場と手札には私を護る術はなかった」

そう語る千影にクーガーは1つの可能性に行き当たった。

「じゃあ、これは一体・・・まさかっ!?!」

「そう。場と手札になくてもココにあったのさ」

千影はそう言うと言った墓地から1枚のカードを抜き出しクーガーに見せる。

LOVサーヴァント・ケリユネイアのカードを。

「LOVサーヴァント・ケリユネイアは墓地にある時、ゲームから除外することでプレイヤーのライフポイントを1000回復する効果を持つ。あの時、このカードによってライフポイントを2800に回復していたのさ」



この千影の説明にクーガーは悔しそうに眉を顰める。

「しかもその時の俺の手札は0枚………ラディカル・グッドスピード・アーマーのカウンター効果も発動できない」

「そこで言葉を区切ったクーガーだったが、次に顔を上げた時にはその表情は180度変わっていた。

「素晴らしい……素晴らしいですよ！千歌音さん！！やはり貴女の世界は縮めることなど出来ないほど無限に広い！！そう、だからこそ挑みがある！決闘続行！！」

クーガーは顔に満面の笑みを浮かべると、地面を蹴って再び走り出す。

「千影だつてば！」

クーガーにそう言い返すと千影も地面を踏みしめ一気にスピードに乗った。

そして互いに騎乗決闘の速度に達するとクーガーが高らかに宣言する。

「俺はこれでターン終了です！さあ、見せてください貴女の世界を！俺が挑むべき貴女の世界の一端を！！」

クーガーのターンエンド宣言と共に千影のターンがやってくる。

（ここで私が勝利するためには超えるべき条件はあまりにも厳しい………しかし！！）

相手の手札も0枚だが自分も0枚。しかも相手の場には攻撃力3000のクーガーがいる。

だが、今の千影には何でもできそうな予感があった。

それは今まで何度も感じてきた不思議な感覚。

どんな危機の中でも自分が望んだ最良の結果が手繰り寄せられるかのような、そんな感覚。

「ならば見せよう！！私の世界を！私のターン！！」

そして今回も物語の歯車は回る。

千影の勝利へと向かって。

クーガーLP1500：SPC12

千影LP200：SPC6

千影は引いたカードを見ると「よしっ」と頷くと、そのカードを発動する。

「手札からSp-シフト・ダウンを発動！スピードカウンターを6下げることデッキからカード2枚をドローできる！！」

千影LP200：SPC0

スピードカウンターを減らした千影はクーガーとの距離が絶望的に開くのを意にも介さず『レガリア』に収まるデッキを見つめた。

（これで前提条件はクリア。次はあのカードを引けば私の勝ち、引なければ私の負け　このドローで全てが決まる！）

そして千影は万感の思いを込めてデッキから2枚のカードを引き抜いた。

（ツ！！！！）

千影は、そのカードが自分を勝利へと導くカードであることを確認するとデッキと使い魔たちに笑みを向けた。

（ありがとう。皆のおかげで最終条件もクリアできた。あとは

征くのみっ！！）

そして千影は手札へと来た絶対勝利の切札を、ここで切る。

「Sp-ヘル・アンド・ヘヴン発動！！」

千影のスピードスペル発動と同時に決闘フィールドに雷鳴が轟く。

「こ、このスピードスペルは！？今だかつて俺でさえ発動したこともない超上級、発動難易度EXクラスのスピードスペル

！！」

このカードの発動に立ち会えたことの喜びのほうが大いのかクー



「は満ち足りた様子で仰向けに倒れていた。」

「ハッハハハハ！流石は千歌音さんだ！！」

負けたと言うのにカラカラと笑うクーガーの元に、その千影がやってくると頬を膨らます。

「だから、それは母の名前だつてば！私は千影！！」

「そうでしたね・・・と」

可愛くむくれる千影の姿に笑みを浮かべたクーガーは体をばねのようにして起き上がるとサングラスをクイツと持ち上げた。

「今日は俺との騎乗決闘につきあっていたただけで真に光栄でしたよ、またやりましょう『千影』さん」

そして千影に向かってウインクを1つ放つと、クーガーは踵を返し去っていったのだった。

「と、ここで終わればよかったんだけど・・・なんでこんな展開に・・・」

千影はげんなりとした様子で温泉部が誇る温泉施設『しゃぼん』の混浴露天風呂で顔を真っ赤にしながら口元まで湯につかりブクブクと泡を立てていた。

そんな千影にこの諸悪の根源が声をかけてきた。

「だつてええ、征服阻止のご褒美に温泉部が私達正義の味方に1日だけ貸切にしてくれたんだから、このチャンスを逃す手はないでしょう」

その手にはお調子とお猪口が握られていて、尚且つ息が酒臭い。

しかも裸の上に白衣を羽織ると言う変態さんルックで、である。

「藤代教諭だいぶ呑んでますね」

そんな霧瀬をジト目で千影は見るが霧瀬は全く応えなかった。

「もう！姫宮さんは気にしすぎよお！！皆だつて姫宮さんならって良い言ってくれてるんだし。ねえ？」

霧瀬に降られた面々は顔を赤くしながらもしどろもどろに了承の意を述べていく。

「ちよつと恥ずかしいですけど……」

「千影ちゃんなら、ねえ」

「それに千影君の様子じゃあ万一もないから、その点は安心できるからね」

さつき、はやな、葵の言葉に海鳴組みも照れつつ乾いた笑みを漏らす。

「こつという経験は殆ど出来ないわよ。今のうちに楽しまなくっちゃねえ。それにしても姫宮さんの髪の毛も肌も本当に綺麗ねえ」

そしてこの霧瀬の一言がまた新たな波乱を生む。

「本当だ！ねえねえ千影ちゃん、私が千影ちゃんの髪の毛洗っても良い？」

「あ、あの失礼かもしれませんが、ち、千影さんの肌を触らせてもらってもいいでしょうか！？い、いえ、何も不埒な意味はなくてです。ね！後学のためといえますかなんといえますか……」

「さつちゃん、良い機会だから千影君の体を洗わせて貰えば？」

はやなが元気よく立ち上がり、さつきが顔を赤くして早口で捲くし立てれば、葵がノリをよくしてからかう。

そんな正義の味方部の面々を見ながら、なのは、フェイト、はやては千影を見て微笑ましげに笑いあう。

「あれで男の子なんだから本当にびっくりだよねえ」

「私も初めて千影を見たときは女の子だっておもったもん」

「ほんまに千影君の可愛らしさはもう犯罪レベルやなあ」

そこで3人は声を少しだけ潜めて話題を変える。

「そういえば、もうすぐちゃうん？」

「千影がアノ頃に跳ぶ時だよ？時間的に後半年くらいかな。」

「うん。私達が千影さんを知ってて、千影さんが私達を知らないのは少しさびしいけど」

そこで3人はあの冬の日の事に思いをはせる。

「千影君がいたから、ラインフォースの事にも望みをつなげた」

「千影がいたから、母さんやエイミー、アースラの皆が助かった」

「千影さんがいたから、悲しみの輪廻を断ち切れた」

そして現在に生きる彼女達は千影の方を見ると声をそろえると千影に聞こえぬように呟く。

「……だから、私達の所に行ったらよろしくね」「……」

そんな彼女達を天に輝く月と星達が美しく照らしていたのだった。

## 第21話【正義の味方部篇】（後書き）

今回はティンクルセイバーNOVA第1巻の初回限定版に付属するドラマCD、『湯煙 スター』を下地にしてお送りしました。

いやあ、しかし・・・可愛いよ千影君、可愛いよ。

もうヒロイン路線を一直線で突き進んでおりますです、はい。

え？千影君は生まれたときからヒロインだった？真にその通りでございます。

しかしイイトコホイホイと化している千影君ですが、彼はまだ知らない。千影君の尻を狙う強大な敵の姿を                    とかなり先の

事を言っで見ますが、このことは本当に当分先、光の結社篇で語られることとなりますので、その時をお楽しみを。ヒントは略奪愛に禁断の愛です。

そしてお待ちかね、恒例の他作品からの出向者はロストグランド出身の頼れる兄貴、ストレイト・クーガーさんです！

いやあウエスト3世もそうだけどクーガーも書いてて楽しいキャラクターだww

こっちが何もしなくても勝手に動いてくれる。

それだけ魅力の詰まったキャラクターということでありませう。

なお、ティンクルキャラの不破久遠ですが、第4部と絡めるためかなり大幅な諸設定の改編を行っています。どうか平にご容赦を。

そして遂に出てきました第4部のメインキャラたちが！

これでもいい第4部がどうなるかは予想がついたはずですので、wktkしながらお待ちください。

そして次回はお待ちかね、とうとうアノ！噂のナイスガイが旋風を巻き起こしますのでご期待ください。

今回の最強カード『S p ・ヘル・アンド・ヘヴン』

## 通常魔法

自分と相手の場のスピードカウンターの差が12ある時のみ発動できる。

全ての手札とフィールド上に存在する全てのカードを墓地に送り、このカードの効果で墓地に送ったカード1枚につき相手ライフに300ポイントのダメージを与える。

こ、この効果は!?

そうです。かつて猛威を振るった混沌帝龍の効果とほとんど、というか発動条件以外は全部同じという恐ろしいカードです。

しかしながら発動にいたる条件が厳しいことこの上なく、スピードカウンターの数 $0:12$ か $12:0$ にしなないと使えないという別の意味でトンデモなカードになっております。

しかしながらその威力は脅威の一言に着き申す。

そこは腐っても混沌帝龍というところでしょうか。



## 第22話【正義の味方部篇】

今日も平和なヌーベルトキオシティ。そんな街角に彼らの姿は会った。

誰であろう、我らが主人公である千影と、世界の鉄道事業と鉄道流通を司る大富豪の1人であり千影のホームステイ元でもある、旋風寺舞人だった。

「千影とこうして休日をごすつて初めてだな」

「社交界とかパーティじゃ、いつも顔を合わせてたのにね」

そう言つて笑いあう2人は見目麗しく、周りから羨望の視線を向けられていた。

方や美男のナイスガイ、舞人。方や顔や体つきに幼さが未だに色濃く残るが芯にある凜々しさを時々滲み出す千影。

まさに王子様とお姫様である。

そんな視線を向けられているなど露とも気付かない千影はいつも舞人の隣にいる人物の姿がないことに肩を落とす。

「満彦も一緒に遊べればよかったのになあ」

千影の言つとおり、舞人の親友である浜田満彦の姿はどこにも見えなかった。

「まあ浜田君は今度の新人賞に挑戦する漫画の締め切りが近いって言つてたしな」

「残念だね」

千影がそう言つたところで舞人は思い出したかのように千影に問いかける。

「そう言えば、今日は美咲輝学院の部活動紹介があるんじゃないかか？」

そう。今日は休日であると同時に美咲輝学院では各部活がデモンストラーションを交えての部活動紹介がある日なのだ。

そして千影も『正義の味方部』に籍を置く身で本来ならココにはい

ないはずなのだが

「それなんだけど、一緒に部活紹介する世界征服部と話し合っただけで、なるべく密度を濃くするために2対2のデモンストラーションにしようってことになったんだ」

正義の味方部と世界征服部は共に部員不足。

世界征服部は一見、部活動の頂点たる極星を8人も擁してはいるが、その大半は他の部との掛け持ち、手足となるべき末端の構成員の数も両手の指で足りるという実情で実際に自由に動かせる人員は限られていた。

正義の味方部は言わずもがな現在部員3名、内掛け持ち1名、短期留学生1名。正規の部員は、はやなのみである。

両者とも正規部員獲得に躍起になるのは必然であった。

「で、千影は休みって訳か」

「まあ私が留学生で、後1ヶ月で学院を離れるってのも大きな理由なんだけどね」

少し寂しそうに笑う千影に舞人は千影を元気付けるべく口を開く。

「こっちに新しくできた友達と離れることになっても会いに来ればいいさ。今、旋風寺コンツェルンでは日本・アメリカ間太平洋リニアレールにデュエルアカデミア本校までのレールを繋ぐ事業を推進中なのを知ってるだろう？もう10ヶ月程度で繋がるんだから、気軽には言えないけど、コッチには今までよりも楽に来れるようになるさ」

「うん」

笑顔で頷く千影に舞人は満足そうにしながらも、「そうそう」と付け足した。

「やっぱり千影は笑顔が1番似合うからな」

そして2人はヌーベルトキオシティの雑踏へと消えていったのだ。た。

千影と舞人がデート？を続ける中、こちらもちちらで人々の視線を

集めていた。

「おい、クエスト」

「1文字違うのである！我輩はウエストなのである！！」

世界征服部に籍を置く『灰速』ストレイト・クーガーと『緑狂』ドクター・ウエスト3世であった。

自室で読書に勤しんでいたところを引つ張り出されたクーガーは腹を立てながらウエスト3世に向かって言葉を続ける。

「んなこたあ、どうでもいいんだよ。でだ、何で俺がオマエの買い物に付き合わなきゃなんねえんだ」

それを聞いたウエスト3世は額に青筋を浮かべつつクーガーに言うてやった。

「それは貴様が先日、姫宮千影との騎乗決闘で我輩の最高傑作を壊してしまっただからであろうが！」

以前の千影との騎乗決闘後、千影にウイंकを決めて立ち去ったまでは良かったのだがその後、不穏な煙を噴出しウンともスンとも言わなくなってしまったのだ。

「おいおい！装備の磨耗、消耗は不可抗力だろうが！！」

ウエスト3世の言葉に、そう言い返すクーガーだったが主導権は未だにウエスト3世にあった。

「ふん。上手く使いこなす、任せておけといったくせに言い訳とは女々しい奴であるなストレイト・クーガー」

「うっ……でもな、荷物もちならオマエの所のエルザにでもやらせればいいだろうが！！」

言葉を詰まらせたクーガーだったが即座に正論でウエスト3世に問いかけたのだが

「もちろんエルザも誘ったのであるが、エルザに『休日まで働かせるなんて労働基準法違反口ボ、3世は鬼畜口ボ、連れて行くなら暇にでもしてる連中を連れて行く口ボ』と言われたので、流石に労働基準法違反はヒドイと思ったのであるから代わりにお前達を連れ出したのである」

そう言つて腕を組みエツヘンと胸を張るウエスト3世にクーガーは頭痛を覚えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なあ、ロボットにも労働基準法って適用されたか」

そう、エルザはウエスト3世の祖父、ドクター・ウエストが創つた人造人間なのである。もちろん労働基準法の適用外だ。

「あつ　　しまつたああああああ!!!」

コトここにいたつてウエスト3世はエルザに騙されたことに気がついたのである。

そんな掛け合いを繰り広げる2人に買い物籠を手に提げた男、『橙忠』ジエレミア・ゴッドバルトがため息をつく。

彼は街での買い物途中でクーガーを引きずるウエスト3世に捕まつたのだ。

「それを言われれば私も暇そんな連中の1人というわけか」

「そうなのである」  
嫌味を込めた視線を送るが、それを華麗にスルーしたウエスト3世の言葉にジエレミアはもう1つため息をつく。「やれやれ」と首を振つた。

「・・・・・・・・・・終わるなら早くしてくれ」

その以下にも私は忙しい的な発言にクーガーがジエレミアの方を向き問いかける。

「何か予定でもあんのか？」

「私が住み込みで庭師をさせていたでいるブリタニア家は、本日主たるシャルル様とマリアンヌ様が明日までお留守なのだ。そこでこの私、ジエレミア・ゴッドバルトがルルーシュお嬢様とナナリーお嬢様のお世話をしてさしあげなければならんだ、全力で!!!」  
クーガーの問いにジエレミアは、オレンジの栽培にも勝るとも劣らない情熱を込めて語つたのだつた。

よくよく彼の買い物籠の中を見てみれば、それは2人の姫君に振舞うであるう夕食のオカズとなる食材が入っていた。

クーガーは聞いたことのある名前に一瞬思考を巡らせると、彼女達の二つ名を思い出す。

「ああ、あの初等部と幼等部のお姫様か」

ブリタニア家のお嬢様と言えば、その見目麗しい容姿から美咲輝学院ではそれぞれが在籍する学部のアイドルだった。

方や頭脳明晰で礼儀正しい黒髪の姫、方やお転婆ではあるが天真爛漫な妹姫。

2人とも成長すれば美人になるであろうことは明らかだった。

「そう言うことで手短に頼むぞ」

意外に思われがちだが、幼い子供の世話をほったらかしにさせるほどウエスト3世は腐ってはいない。ただのキチイなだけである。

「誰に向かってモノを言っているのであるか。この！大・天・才たるドクターウエスト3世！！時間配分もパーペキなのである！！さあ！キリキリとついてくるのである！！」

そして電子部品の取扱店やジャンクパーツ屋が介在するエリアへと足を不意入れて行ったのだった。

世界征服部の3人が周りから奇異の視線を向けられる中、千影と舞人はヌーベルトキオシティの散策を楽しんでいた。

そこで千影はある建物を見つける。

「あつ！海馬ランド。瀬人さんの事業もヌーベルトキオシティまで進んでるんだね」

独特の『青眼の白龍』の顔を模したアミューズメント施設、海馬ランドに千影は顔を綻ばせた。

そんな千影に舞人は海馬ランドを見ると、千影の方に向き直る。

「ああ、ここは去年できたんばかりなんだ。寄ってくかい？」

当然、千影の答えは決まっていた。

「もちろん。こう言うアミューズメント施設は初めてだから楽しみだよ」

そして2人は海馬ランドへと足を踏み入れると、入って直ぐの1回

のフロアが1種類の筐体で埋め尽くされているのに驚きの声を上げる。

「うわあ。これってバルジャーノンだよな？」

話の上では海馬に聞いていた千影だったが、現物を見るのは初めてだった。

そんな千影に舞人は腰に手を当てながら答える。

「ああそうさ。決闘盤が普及して海馬ランドで決闘場を使う人が少なくなったからな。その代わりに主戦力として開発されたのが、このバルジャーノンさ」

「そう言えば、昔の軍需産業時代に企画されたヴァーチャルシミュレーションシステムが元になってるって瀬人さん言ってたっけ」

かつて剛三郎が提唱し瀬人の怒りを買ったソリッドビジョンによるヴァーチャルシミュレーションの軍事利用がゲームになるとは世の中というものは中々どうして判らないものだ。

「ね、舞人。やってみようよ」

子供のように舞人の手を引く千影の姿に舞人は表情を綻ばせた。

「OK、じゃあGRターミナルでIDを買わないとな」

そう言つと千影を連れてIDカード販売機の方に千影を連れていく。そんな何度もこの施設を利用したかのような舞人の姿に千影は少し小首をかしげた。

「なんだか舞人手馴れてるね」

千影のこの問いに舞人は頬をかきつつ答える。

「よく浜田君と学校の帰りにやるんだ。それにマイトウィングに搭載されたシミュレーターよりもずっと性能が上なんだから、海馬コーポレーションには恐れ入るよ」

そして千影のIDを購入した舞人は2つ並んで空いている筐体を探そうと視線を巡らすと、それはすぐに見つかった。

「よし、千影コレでいいっす」

「わかった」

舞人の指差す筐体へと千影は体を滑り込ますと、筐体の前面に浮か

び上がるソリッドビジョンに表示された『IDカードを挿入してください』の表示に従う。

続いてIDカード登録、硬貨の投入、シートベルトの着用と次々浮かび上がる表示に従いながら千影は全ての行程を終えると

シートが自動で前に進み筐体の中と外界を遮断し密閉するかのよう

に閉じられたのだ。

そして目の前にソリッドビジョンで『神攻電腦バルジャーノンのタイトルロゴが光踊る。

「すごい……！決闘でのソリッドビジョンと大差ないと思ってたけどコレは段違いだ……！」

周囲360度をソリッドビジョンによるモニターとすることの臨場感に千影は驚きを隠せなかった。

そんな中、目の前に移るソリッドビジョンのモニターに隣の舞人から通信が入ったことを知らせる表示が出たのを見ると千影はすぐに

回線を開く。

『どうだ？千影は初めてだけど、大丈夫か？』

シートの耳元にある通信用スピーカーとソリッドビジョンのモニターによって見えないが、モニターの奥に仕込まれた指向性マイクによる通信は中々に快適だった。

「うん。今操作手順を確認してたけど、これなら前に舞人に触らせてもらったマイルトガインのシミュレーターとそんなに変わらないから大丈夫だよ」

この千影の言葉に舞人は『そうか』と頷くと言葉を続ける。

『それじゃ、俺のランク結構高いから全国大戦で強い人と当たるかもしれないけど恨むなよ……って千影にはいらぬお節介だつたな』

舞人は以前、千影が初めて乗ったマイルトガインのシミュレーションで高スコアを叩き出したのを思い出し笑みを漏らした。

そのスコアは操縦に熟達した舞人の最高スコアの2つ下、歴代記録3位という、初めて乗った人間には到底出しえぬモノだったからだ。

しかし、そんなバケモノじみた記録を叩き出した張本人はあっけからんとした様子で舞人の気遣いに表情を綻ばす。

「そんなことないよ。ありがとう、舞人」

『それじゃあ、始めるぞ！』

「うん！」

舞人の言葉と共に千影は頷くと手元のスティックを操作して機体を選択する。

同じチームを組む舞人は格闘戦も遠距離もそつなくこなせる万能機カイゼルを選択、千影は初心者故か、余り機体パラメータには眼を向けず自分のインスピレーションにピンと来た機体を選んだ。

千影の選んだ機体は

悪魔のような姿形に黒を中心とした装甲を身に纏う、まるで死神のような機体、アポカリプスだった。

その姿同様、攻撃力、移動速度、旋回性能、近中遠と死角のない豊富な武装など他の機体とは頭1つ飛びぬけた性能を誇る機体ではあるのだが、その代償として耐久値が全機体の中で最低だった。

それだけではない。旋回性能が優れすぎているということもあり扱いが非常に難しく、武器の豊富さは逆にその場その場での適切な判断が要求されるデメリットも併せ持つ。

装甲がないに等しいので被弾を許されない機体であり、一瞬の迷いや1回の判断ミスが即敗北に繋がるかなりシビアな機体。

機体番号が666であることと、選択したプレイヤーを諸共に敗北へと誘う姿からついた渾名は『ダミアン』。

そのことからこの機体は上位ランカーでさえも使うものはおらず、使用者は極一部の狂信的なファンのみで使用率は稼働当初からぶちぎりの最下位。それがアポカリプスだった。

初心者が選ぶべき機体ではない。

いや、初心者だからこそ耐久値以外のパラメータに眼がいてこの機体を選び、そして洗礼を受けて帰ってくる　と、いうこ

とはよくあることなのだが今回この機体を担うのは前述したとおり



マイトガインのシュミレーションで初乗り高スコアを叩き出した千影である。

『アポカリプスとは、また面白い選択だな千影』  
舞人の楽しそうな声は千影なら御し切れるのではないかという期待の気持ちも多々あるものだった。

そしてすぐさまマッチングが行われ対戦相手が決まり、闘劇の幕が上がる。

その相手とは

『はっ！』『ダミアン』連れとは少々拍子抜けだな！！この俺、バルジャーノン部が極星『炭散』たるパトリック・コーラサワー。全国大戦2000戦負けなしのスペシャル様には物足りない相手だ……ま、部活紹介のデモンストレーションには打って付けか！！』

何と美咲輝学院の部活紹介で行われているバルジャーノン部のデモンストレーションとマッチングしてしまったようだ。

しかも向こう側が開きっぱなしにしている回線から聞こえた名前、パトリック・コーラサワーと言えば現在のトップランカーの名前でもある。

『どこの物好きか、初心者か知らないがお前から狩らせてもらっぜー！！』

そしてコーラサワーは千影のアポカリプスに狙いを定めると高機動の機体、ノエルクローシュを駆ってアポカリプスへと肉薄する。

『落ちろよおおおおっ！！』  
数多くのプレイヤーを葬ってきた高機動形態からの流れるような変形による強襲が千影に牙をむく。

だが

『ッ！？消えた！！』  
コーラサワー必殺の剣戟を放った場所にはアポカリプスの姿はいなかったのだ。

消えたアポカリプスを探そうとコーラサワーは視線を巡らす。

『どこだ！？どこにいる！！』

「ここだ！」

コーラサワーが千影の声に気がついたとき、すでに目の前には先ほど掻き消えたアポカリプスの姿があった。

アポカリプスはノエルクローシュに蹴りを放ち、その機体を空へと蹴り上げる。

「残念だけど、ここまでだ」

そして刹那の間もおかずに空へとあがったノエルクローシュに追いつくとその手にもつ巨大な処刑剣を構える。

『俺はなあ！』

まずは下段から切り上げノエルクローシュの左腕を切り飛ばし

『 スペシャルで！！』

その反動を回転運動として利用し片腕で巨大な処刑剣を振り下ろすことで両足を切断し

『 2000回で！！』

ほぼ同時に空いた片手でノエルクローシュの頭を爪で切り裂き

『 全国大戦なんだよおおおおおおつ！！！！』

そして最後に両手で振りかざした処刑剣の重たい一撃が袈裟懸けにノエルクローシュを切り捨てたのだった。

「うん。悪くない」

トップランカーを一蹴してみせた千影は自分の要求に満足に伝えてくれたアポカリプスが気に入ったようだ。

そこに舞人からの通信が入る。

『 やっぱり俺の助っ人はいらなかったな』

それと同時にソリッドビジョンの画面に『WIN！！』の字が躍つてるところを見ると舞人のほうも相手を瞬殺してきたようだ。

「舞人のほうこそ相手を瞬殺じゃないか」

『 俺のほうの相手は俺よりもランクが低かったからな。それよりも』

出る時にIDカード忘れるなよ』

そこまで言う通信は切れ、密封されていた空間に空気の入るような音がしてシートが迫下がる。

どうやら、これでゲームは終了みたいだ。

千影は舞人にいわれたとおり、IDをしつかり回収し筐体から出ると目の前に広がっていた状態に呆然となった。

「あー……まあこうなるか」

隣の筐体から出てきた舞人が「やっぱりなあ」といった風に頬をかき周りの状況に視線を巡らす。

何であろう、千影と舞人の筐体の前には黒山の人だかりができていたのだった。

そしてその人だかりは筐体から出てきた2人の姿を確認すると盛大な拍手と歓声を送ってきたのだった。

「ねえ、舞人。これって一体？」

千影はこの状況にひたすら首を捻るがコレは当然の帰結と言える。トップランカーとのマッチングはバルジャーノンを嗜む者は見逃せないモノであり、例え相手が初心者でカモであろうともコーラサワの技量は見て損となるものではない。

故にマッチングが成立した瞬間からこの勝負を観戦するために人が集まったのだが、そこでまさかの大番狂わせが起きた。

千影が芸術的なまでの技量でアポカリプスを乗りこなしたトップランカーを一蹴したのだから。

しかも筐体から姿を現した千影はいわずもがな可愛らしい容姿である。

鬼のようであり、悪魔のようであり、死神のようであった先ほどの勝負とのギャップに観客から黄色い声援が飛んでくるのも無理からぬものであった。

そんな観客達の様子に未だに可愛らしく小首をかしげる千影に舞人は笑みをこぼす。

「それはな、千影がすごいってことさ」

「?????」

興奮冷めやらぬ観客達の輪の中、千影は小首を傾げ続けるのであった。

その翌日

「はえ、じゃあ私たちの次に部活紹介したバルジャーノンの極星さんを倒しちゃったのは千影ちゃんだったのなあ」

学院ではやな達に昨日の顛末を語った千影に、はやなは「なるほど」と手を合わせた。

「千影さんはすごいですね。『緑狂』、『橙忠』、『灰速』、加えて昨日の『炭散』と1ヶ月の間に既に4人の極星を降しているんですから。まるで久遠先輩みたいですよ!」

数々の部活の極星に勝負を挑み、それらを完膚なきまでに叩き潰してきた伝説の極星『紅蓮姫』のごとき千影の活躍にさつきは目をキラキラと輝かすのだった。

「まあ、千影君もバケモノじみているといえはいるからねえ」

「こらこら葵、誰がバケモノだって」

葵の言葉に久遠がそう言い返すと「まあ確かに」と言葉を続ける。

「この子が私の卒業までに現れてれば『紅』を継がしたいほどの逸材ではあるんだけど、それはバカ弟子に譲っちゃったからなあ」

「でも、千影さんなら何かしらの星を手に入れられますよ!」

興奮するさつきの言葉に千影は頬をかきつつもそれを否定した。

「それは無理だよ。私は留学生で後1ヶ月しかココにいれないのだから」

この千影の言葉に久遠を除く3人が悲しそうな顔をする中、千影は話題を変える。

「だから、私が抜けてもいいように新しい部員の獲得なんだけど

「  
そこで周りの顔を見渡し言葉を続けた。

「その顔を見れば、はやなもさつきも答えは出てるようだね」

千影との残された時間に肩を落としていたはやな達であったが、話題が部員勧誘の話になると顔つきが少々凛々しいもの変わった。

「うん！やっぱり正義の味方部には入りたいて思ってくれる人が入って欲しいし」

「私もその結論にいきました」

「ま、勧誘活動は一切なし。私たちらしくいきましょってことではやな、さつき、葵の言葉に千影は笑顔で頷く。

「そうか。なら私たちらしくのんびりいくことにしよう」

今日も今日とてユルユルな正義の味方部だった。

正義の味方部が勧誘活動せず、お喋りに花を咲かせている今。世界征服部が誇る下っ端の2人、新井と松田は精一杯の勧誘活動に勤んでいた。

その方法とは

「「いーつかがでえすか」」

ミカン箱を並べたみすぼらしい足跡の舞台上上がったの漫才だった。以下が彼らの披露する漫才である。

「いよ、そこゆくお姉さん征服部どうだい？いまなら安いよ」

「何が安いんやっちゆうねん、ホンマ」

「今なら初期加入料も手数料も、オマケに半年分の会費も今なら免除！」

「ウチの部活はいつからカネとってんねえん！携帯電話かインターネットか！」

「いやいや、とつとらんけどなあ」

「じゃあ安くないやろう」

「いやいや、安いのは俺ら！」

「安いお誘いかあ！上手くないわあ！！」

「お後がよろしくないようであええつ！！」

下手糞な関西弁を操り、オチも中途半端な3流漫才に2人の周りには閑古鳥が鳴いていたのだった。

「はあ……誰だよ、俺らの持ち味を生かしてコントで勧誘とか言ってたのは」

猫の子一匹さえも通らないこの状況に「絶望した！」な状態で呻く新井に松田はツツコミをいれる。

「オマエの大好きな、あきちゃんだな」

新井祐之介。好きな女の子級では御堂あき、好きな大人の女性級では藤代霧瀬、無差別級では姫宮千影と非常に節操なしな男であった。「冴ちゃんも頷いてたな」

まあ下っ端2人の周りからの評価なんて誰が聞いても喜劇的な役回りしか出てこないということ当の本人達は全く知らない。

「愛ゆえについ二つ返事だったが……見失ってたか」

「……見失いすぎだなあ、自分を」

全く持つて適材適所だったのだが、芝居を打ったのが悪かったのだ。彼らのボケは作られた芝居では発揮されない。彼らの真の実力は自然体で、しかも欲望に忠実になることで発揮されるものなのだから。

「……はあああああ……」

しかし、そんな事に気付かない2人は盛大なため息をつく。

まあ、それに気がついた所で必死になって否定し自己補完するのは目に見えているのだが。

「帰るか」

「そうだな」

やる気をなくした2人は撤収準備に取り掛かる。いつもの下っ端働きでこういう仕事は嫌に早くなった自分達に2人はまたしてもため息をついた。

「……はあああああ……ツ!?」「」

新井と松田だけではない、3人目のため息に、ため息を漏らした3人はそのため息のしたほうへと視線を向ける。

「オマエは！」

「俺達の後の部活紹介でコテンパンにやられた『炭散(笑)』!」  
そう、3人目のため息はバルジャーノン部の極星、『炭散』のコー

ラサワーだった。

「なんだと、てめえら！！だいたい（笑）ってなんだよ！？（笑）つて！！！」

コーラサワーの怒りの言葉に新井と松田は互いの顔を見ると共に頷く。

「だつて」

「なあ」

なんとも意味深な会話にコーラサワーは握った拳を震わせる。

「お前達には判らねえだろうがなあ！俺は今まで無敗のスペシャル様だったんだぞ！それを昨日のヤツが・・・昨日のヤツが・・・・うがああああッ！！！」

そんな苦惱をさらけ出すコーラサワーに2人の反応はシレッとしたものだった。

「んなこといつたつて俺達はやられることが前提だからなあ」

「今まで勝つてたヤツの気持ちなんてなあ」  
「そうなのである。」

彼らは世界征服部の下っ端AとB、生れながらの最下層が今まで隆盛を極めていたモノが凋落した時の気持ちなど知る由もない。

しかも、新井と松田の2人は負けたことにいつまでもウジウジとしているコーラサワーに若干の憤りを感じた。

「だいたい、1回やられたくらいでなんだよ」

「全くだ。俺達はいつもやられてはいるが、それでも明日の勝利を信じて日夜活動している」

勝利の美酒の味を今まで占めていたやつを妬ましい視線で射抜くと2人は声を合わせて言い放つてやった。

「あんたはそれでいいのか『炭散（笑）』さんよあ！！！」

「だから（笑）をつけるな（笑）を！！！」

さきほどのコントよりも何倍も面白い見世物だったが、悲しいかな  
「ご見物は誰1人としていなかった  
かに思えた。」

「2人いればちょうど良いと思ってたけど都合よく3人いるわね」

言い合っている3人が自分の方を振り返るのを待ってから、その人物は意味深げに次の言葉を放つ。

「君達、私に協力する気はないかな？」

正義の味方部顧問、藤代霧瀬が3人に不敵な笑みを浮かべていたのだった。

所変わって、今度は美咲輝学院の中心に位置する中庭。

ここで『黒帝』たる冴は顔を真つ赤にしながら歩いていた。

(うわあ……どうしようどうしようどうしよう)

彼女が顔を真つ赤にしている理由、それは横を歩く1人の男の存在であった。

「うん！御堂さんのオススメだけあってココのソフトクリームはおいしいですねえ」

世界征服部の副部長、浅凧九郎。冴の思い人その人である。

「……はい」

「鴉神さんのもおいしいですか？」

「……あ、その……はい」

冴は好きな人との事実上のデート　名目は部員勧誘の妙案を考える会　に始終顔を真つ赤にしっぱなしだった。

(あきちゃん、どうしよう……)

奥手で人と話すことも苦手な冴は今は隣にいない親友に助けを求めるが、このデートをセッティングしたのは他の誰でもない、あきだった。

2人の遅々として進まない関係に一石を投じるべくお邪魔虫な自分は退散し、2人にいい雰囲気になってもらおうとこの中庭を勧めたのだった。

(これじゃあ、お話しもできないよお……)

元来の恥ずかしがり家でもある冴は、隣を歩く九郎の顔を直視できずにいたのだが、そんな2人に天は少しだけ救いの手を差し伸べた。

「お姉さま！こっちこっちー！！」



「待つて、ナナリー！はあ．．．はあ．．．走ると危ないよお！！」  
目の前をウエーブのかかったハニーブロンドの髪を靡かせて元気に走り去っていく幼等部の少女と、その娘の姉と思われる黒い癖のない長髪の初等部の少女が息も絶え絶えに懸命に妹の後を追っていく。そんな仲の良い姉妹の姿に冴も九郎も顔を綻ばす。

「．．．．．可愛い」

「そうですね。あの頃が子供の可愛い盛りですから」

2人は互いの顔を見て笑いあうと冴の口から自然と言葉が洩れた。

「あの子たちを見ていると．．．．昔のあきちゃんと私を．．．思い出します」

初めて冴から自分に話しかけてきてくれたことに少しの驚きを感じつつも九郎は笑顔を絶やさずに聞き返した。

「そうなんですか？」

「はい．．．．昔、私はもつと人見知りが激しくって．．．．．  
．．．．いつもあきちゃんが引つ張っていつてくれました．．．．  
それに今でも．．．．．」

昔も今も何も変わっていない自分に少し自己嫌悪に陥りかけた冴に九郎は声をかける。

「そんな事はありませんよ。鴉神さんはこうして僕ときちんと話をしているではありませんか」

この言葉に冴は自分の気持ちを伝えようと頑張るが

「そ．．．それは、その．．．．九郎さんが私の．．．．  
．．．．」

「はい？僕がどうかしましたか??」

「な、なんでも．．．ありません」

結局恥ずかしくて気持ちは伝えられなかった。  
しかし

（私．．．九郎さんとちゃんとお話できてる．．．．．  
?）

そう。親友のあき以外でココまでスムーズな言葉のキャッチボール

を、しかも自分の思い人である九郎と交わすことが出来たのだ。

その事実だけで冴の心の中は幸せで一杯だった。

何ともいえない、しかし決して不快ではない空気が漂う中、ソレは突如として起こった。

「なっ！？なんですか、この揺れは！！！」

「じ、地面が・・・盛り上がって・・・！！？」

中庭に立つ人たちは判らないかもしれないが俯瞰してみると、なんと中庭が変形し始めていたのだ。

そしてその機械的なフォルムを頭にしていく。

それはまさに

「これは・・・ロボット!?」

九郎が驚きの声を上げる中、冴は変形して行く中庭に取り残された2つの影を見つけた。

「九郎さん・・・！あそこに・・・あの子たちが・・・！！！」

誰であろう、先ほど九郎と冴の前を走り抜けていった姉妹、ルルーシュとナナリーだった。

2人が姉妹を助けようと身を起こそうとするが、この揺れの中、体を起こすことさえ叶わない。

そうこうしているうちに姉妹は変形していく中庭の中に囚われてしまった。

「ああ・・・！！！」

中庭に閉じ込められていく姉妹の姿に冴は顔を手で覆うが、九郎が何とか身を起こすと冴の手をとる。

「仕方ありません、鶉神さん！今はここからの脱出を！！VSSがあればあの子たちを助けられるかもしれません！！！」

「・・・はい！」

九郎の力強い言葉に冴は悲しんでいる場合でないことを悟ると力強く返事をしたのであった。

中庭変形の揺れは正義の味方部の部室、第4保健室『湊』まで響いてきていた。

「この音は？」

最初に気がついた千影の言葉と共に皆が耳を澄ましてみると確かに地鳴りのような音が段々大きく響き渡ってきた。

「中庭のほうから・・・ですね」

さつきが地鳴りのするほうに当たりをつけると、今度は人の悲鳴が響き渡ってきた。

この尋常ならざる自体に全員は臨戦態勢を取る。

「何か騒ぎっぽいね・・・皆、いくよ！！」

「征服部が活動しているのかもしれないから、3人とも！」

久遠、葵の言葉に3人は頷くと、葵はAD開放のパスワードを入力する。

そして千影、はやな、さつきの前にADが収納されたアタツシユケースがでてくると、それぞれのナンバーのアタツシユケースを手にとった。

「それじゃあ」

「正義の味方部」

「活動開始いつ！！」

その頃、騒ぎの大本である中庭の『中』では

「ぬおおおおおおつ！！」「」

「はーっはははははは！コイツはすげえ！！」

世界征服部の下っ端、新井と松田が驚きの声をあげ、バルジャーノン部が極星、『炭散』たるコーラサワーはいたく機嫌の良い声を上げていた。

「君達、乗り心地はどうかにゃあ？」

この霧瀬の問いかけに新井と松田は何故か敬礼をしながら答える。

「縦揺れ横揺れが酷くて今にも酔いそうです！！」

「乗る前に酔い止め飲まされたの納得ですにゃ！！」

しかし、そんな中でもコーラサワーはあっけからんとしていた。

「この程度の揺れ、日々バルジャーノンで鍛えられた俺にはどうってことないぜ!!!」

それはそうだ。あのゲームは人体に影響がない程度に衝撃や揺れまでも再現するものなのだ。

それに揉まれて来たコーラサワーには逆にこの揺れは心地いいものであった。

「流石はバルジャーノン部の極星ね。今からこの、中庭変形ガーデニオンは貴方のモノよ!」

「よっしゃー!!!一回は本物のロボットに乗ってみたかったんだよなあ!!!」

コーラサワーはバルジャーノンのコックピットそのままなシートに身を沈ませる。

「ああ……でも、これは頑丈なだけのハリボテだから。正義の味方がくるまで適当に歩いて時間を稼いで頂戴」

と、霧瀬がそこまで言った時だった。

「そこまでだ!」

どこからともなく響き渡る声にカーデニオンに乗る4人は、その声のしたほうを振り向くと、そこに1台の新幹線が走ってきていた。

「あれは、一体!?!」

霧瀬がいきなり現れた新幹線に驚きの声を上げる中、その新幹線は驚くべきことをやってのけた。

「チエインジツ!!!」

なんと人型のロボットに変形したのだった。

「嘘おつ!あんな精巧なロボットがあるだなんて!?!」

霧瀬の知る限り、この世にある完全な巨大人型ロボットといえば図面でしか知らないがデモンベインのみである。

しかし、目の前のロボットは図面で見えたデモンベインとは全く違う。それ即ち別系統で作られた巨大ロボットということだ。

「そのデカイの、お前の悪事もそこまでだ!」

「しかも喋るなんて！これは魂の練成と定着！？」

さらにロボットが口を開き人語を解したのだが、これには霧瀬は心当たりがあった。かつてのダーレス学院の魔術工学カリキュラムで習ったが、それを成功させたのは後にも先にもウエスト3世の祖父、ドクター・ウエストが作り上げたエルザのみである。

もちろん、ガインの思考は新たに開発された新技術超AIによるもののだが、この時の霧瀬には知る由もなかった。

「はっ！！ちようどおあつらえ向きなやつが出てきたな！！」

そんなガインの登場にコーラサワールのテンションは天元突破、ガーデニオンを駆ってガインへと迫る。

「ちよつと、ちよつと！聞いてなかったの！このガーデニオンは頑丈なだけのただのハリボテだって！！」

しかし、ハイになったコーラサワールに霧瀬の声は届かなかった。

「機体の性能差が戦力の決定的差でないことを教えてやるよ！！」

そして、ガーデニオンのカタログスペックではありえない機動でガインに肉薄すると、その腕を振り上げた。

「ギツタギツタにしてやるぜえッ！！」

そして腕が振り下ろされガインへと迫るが、ガインは「ハッ！！」と空へと飛び上がりガーデニオンの一撃を回避すると腰から一丁の銃を抜いた。

『ガインシヨット！！』

そこから放たれたビームはガーデニオンを貫くはずだった。

しかし、ガインのビームはガーデニオンの装甲、ADにも使われている多層アルピスト装甲に弾かれたのであった。

『なにっ！？』

必殺の一撃が通用しなかったことに驚いたガインの隙を見逃すコーラサワールではなかった。

「落ちろ、カトンボッ！！」

いっそ惚れ惚れするぐらいの華麗な左回し蹴りがガインに決まり、

ガインは地面へと横たわったのだった。

「こ、これは嬉しい誤算というのでいいのかしら……」  
霧瀨は本来ではここまでの機動戦を行えないはずのガーデニオンを手足のように操るコーラサワールの姿に冷や汗を流していた。ちなみに世界征服部の下っ端2人は先ほどの機動で眼を廻し伸びていたのだが、まあどうでもいいことだろう。

ガーデニオン駆るコーラサワールは未だに横たわるガインの元に歩み寄ると、その腕を振り上げる。

「これで、とどめだああっ!!」

そして、その腕がガインに叩きつけられようとした、次の瞬間ガーデニオンに数発のミサイルが着弾した。

「誰だ！俺の邪魔をしゃがったやつはあッ!?!」

コーラサワールが視線を向けた先には空飛ぶ新幹線と、海の上を走るSLの姿が見えたのだった。

ガインとガーデニオンが激しい攻防を繰り広げる中、着替え終わった正義の味方部の面々は中庭へと続く道を急いでいた。

ちなみに自分を護るすべがない葵は第4保健室『湊』でお留守番である。

「だんだん振動と物音が大きくなって。これは暴れ方が尋常じゃないな」

「急がないと学院が壊れちゃうよ」

千影とはやなの言葉にさつきと久遠が表情を厳しくする中

「……………あっ!!!!」「……………」

十字路の真ん中で正義の味方部と世界征服部の面々が鉢合わせてしまったのだ。

「まさか極星5人を使って足止めとは剛毅なことだねえ征服部も！」  
目の前に立ち塞がった浅凧九郎以下、極星である『黒帝』の牙、『白煌』のあき、『緑狂』のウエスト3世とお供のエルザ、『灰速』

のクーガー、そして何かに焦っている『橙忠』のジェレミアに久遠は険しい視線を送る。

流石に母校を壊させるわけには行かない久遠はOGではあるが、今回の活動には積極的に参加するようだ。

かつての『紅蓮姫』の放つ色濃い殺気に空気が凍る中、世界征服部の部員の1人、ジェレミアが鬼気迫る顔で久遠に言葉を放つ。

「そんなことをしている暇ではない！速くお嬢様たちを全力でお救いせねばならんだ！！」

「……お嬢様？？」

この意外な言葉に久遠も含めて正義の味方部の面々は眼を丸くしたのだが、九郎から話されたことの顛末に正義の味方部の面々は今回の騒ぎが世界征服部の仕業ではないことを理解した。

「でも、それなら一体誰が？」

「原因を探るのは最後だ！今は中に閉じ込められた2人の女の子を助けないと！」

もつともな疑問を口にするさつきであったが、千影は優先すべき順位を見誤ることなく言葉にすると中庭に向かって駆け出した。

そんな千影に他の面々も慌てて走り出す。

「感謝するぞ、ナイトセイバー姫宮千影」

「謝礼も2人を助け出してからだよ、ジェレミア・ゴッドバルト」

千影の横に並び走りながら感謝の意を述べるジェレミアに、千影はそう返したのだった。

「大丈夫か！ガイン！？」

危機一髪、援護に間に合った舞人はガインの方を見た。

『ああ、ここからが本番だ！』

損傷の少ないガインの姿に舞人は1つ息をつくるとガインへと声をかける。

「よおし！ガイン、合体だ！！」

『オウツ！！』

そして舞人は左腕の高く掲げ、『合体』のためのキーワードを解き放つ。

「レーエエツツ・マイトガイנטツ!!!」

舞人の叫びと共に3体の列車は逆三角形を描くと、その姿を徐々に変形させていく。

ガインは左腕、舞人の乗るマイトウィングは右腕となり、足から頭までを構築するロコモライザーにドッキングする。

そしてロコモライザーから出現したロボットの頭部にコックピットを移動させると、操縦桿が引っ込み、新たに2つのレバーが出現すると、舞人はそのレバーを一気に起こす。

「マイトガイーン、起動!!!」

その言葉と共に両腕から蒸気と共に手が飛び出し、完全な人型ロボットへの変形が完了したのだった。

この合体したロボットを見た霧瀬はヌーベルトキオシティで実しやかに囁かれる1つの噂が頭をよぎる。

「ま、まさか、これが噂の マイトガイנטツ!?!」

霧瀬の驚きの声に目の前に降り立ったマイトガイーンから声が聞こえてきた。

「そう……その通り!」

『銀の翼に希望を乗せて、灯せ平和の青信号!勇者特急マイトガイーン!定刻通りに只今到着!!!』

この舞人とマイトガイーン言葉にコーラサワーは不敵な笑みを浮かべる。

「おっもしれえ!ロボットに乗って敵の合体ロボと一騎打ち、血が滾るぜえええツツ!!!」

ハイになりすぎてキャラが変わっていることにも気がつかないコーラサワーはガーデニオンを走らせ、マイトガイーンへと迫る。

「いかに頑丈な装甲だろうと、マイトガイーンの攻撃力ならば!!!」

マイトガイーンの攻撃力はガイーンやマイトウィングの攻撃力を遙かに凌ぐ、その一撃を持ってガーデニオンを粉碎しようとした舞人であ



つたが

「待つてくださいー!!」

中庭に響いた浅凧九郎の声にマイトガインの攻撃は止められた。

「一体何が、つつうううッ!!」

しかし、その隙をコーラサーワは見逃さずに殴りかかったが、そこは流石の舞人とマイトガイン。

殴りかかってきた手を握り止め、力比べの膠着状態へと持っていていったのだ。

そこにADとVSSを纏った正義の味方部と世界征服部の面々が出てきたのであった。

「千影!?」

その中に見知った顔を見つけた舞人は驚きの声を上げるが、すぐに千影から通信が入ってきた。

「舞人、よく聞いて。あの機体の中に2人の女の子が閉じ込められているんだ!」

「なにっ!? ガイン、生命探知だ! 急げ!!」

マイトガインに搭載された探査装置が唸りを上げ、ガーデニオンのコックピットと思われる場所意外に2つの生命反応を見つけた。

「あのロボットの右脚部分だ舞人!」

場所は特定できたが、それでも中にいる女の子を怪我させないように倒すとなると、その難易度は並ではない。

「くっ! しかも向こうは手加減して倒せる相手じゃないか……」

千影、そつちで中の女の子を助けられないか!?

「わかった、3分頂戴。こつちで救出作戦を考えてみる」

千影からの色よい返事に舞人は1つ頷く。

「了解だ! 聞いたなガイン、何としてでも3分持たせるぞ!!」

「任せろ!!」

マイトガインはさらに足を踏みしめ、力比べの膠着状態を長く続けることに努めたのであった。

そして、舞人が時間を稼いでくれている間、正義の味方部と世界征服部は円陣を組んでどうやってルルーシュとナナリーを救出するのかを話し合っていた。

「おそらく、あのロボットの装甲はADやVSSと同じ多層アルピスト装甲、フレームはこれまたADやVSSと同じクレスフレームなのである」

「はつきり言つて、これをボクたちの武装で切断ないし穴を開けて突入するのはとても無理だね。逆にあのマイトガインの武装ならできるけど、あれは威力が大きすぎて中の2人が無事ですむ保証もないし」

まずは科学者の視点からウエスト3世とあきが1番の難題を提言する。

「それに結構高さもあるね、あれは私でも昇るのは骨が折れそうだ」  
久遠の言葉通りガーデニオンはかなりの高さを持つロボットだ。

脚の高さと言つても10メートルはあるし、足場とすべき取っ掛かりも少ない。

「そうだ、『黒帝』の使っていた空間転移は？アレなら無事に救出が出来る！」

一番の妙案が千影から飛び出し、この言葉に他の面々も訝えを見るが、訝は申し訳なさそうに俯くと首を横に振った。

「ごめん……なさい……『門』は出口を……正確にイメージできないと……使えないの」

まさに八方塞な状況にジェレミアは悔しげに地面を殴りつけた。

「くっ！どうすればいいのだ！お嬢様たちは今もあの中で恐怖と孤独に戦っていらっしやるというのに！！」

ジェレミアの焦りはこの場にいる全員の焦りとなっていく。

「私達の中でADと同じ素材の装甲を切り裂くことの出来る攻撃なんて」

そう呟くはやなは、なにかの突っかかりを覚える。

「ADを切り裂く攻撃、ADを……」

ああっ！！！！」

はやなは大声を上げて思い出す。

いたではないか、唯一自分のADを切り裂いた人物が。

「『紅刃』さんですよ！！」

「バカ弟子がどうしたの、はやな？」

いきなり出てきた弟子の名前に久遠は頭を捻ると、いつかあった和麻との戦いの顛末を話していく。

それを聞いた他の面々は活路を見出したことに顔色をよくする。

「よし！そういうことならバカ弟子を探さないと！！」

久遠が勢いよく踵を返そうとすると、そこにちょうどタイミングよく件の人物が顔を覗かせた。

「何か中庭が騒がしいと思っってきてみれば、僕がどうかしましたか師匠？」

どうやら騒ぎを聞きつけてここまでやって来たらしい。

「ナイスタイミングだ、和麻！」

「はいいいっ！？」

いきなり久遠に引つ張られた和麻は驚きの声を上げるが、次の瞬間に表情を真剣なものに変えた久遠につられて表情を引き締める。

「説明は後だ。アレ、切れるか？」

久遠の指差す先に映るガーデニオンを仰ぎ見た和麻は厳かに頷く。

「我が刃を持つてすれば」

その和麻の答えに満足した久遠は頷くと千影に向かって親指を掲げた。

「よし！なら今から救出作戦の内容を伝える」

千影はマイトガインへの通信を開放しながら組み立てた作戦の説明を始める。

「まずはヤツの足止めが第1フェイズ。担当は『黒帝』、空間転移であいつの右足を……つま先だけでもいいから転移させて動きを止めて」

千影は冴の方を見ると冴は力強く返事をする。

「……はい！」

「続いて第2フェイズ。『紅刃』による攻撃で突破口を開く。エルザはカタパルトとして『紅刃』を投擲、動かなくなつた右脚へ投げる。精密な計算を可能とする人造人間の面目躍如だぞ。そして『紅刃』がヤツの右足を切つた後、落下地点へのリカバリーは『白煌』が担当。落ちてきた『紅刃』を拾つたら即座に離脱だ。そのVSSの走行性能期待させてもらう」

「任せるロボ」

「応ッ！」

「ご期待に応えさせてもらうよ！」

第2フェイズを担当する面々を千影は見るが、その誰しも気負いは一切なかった。

「第3フェイズ、『紅刃』が切りつけた装甲の穴を広げる。担当ははやな、葵、久遠、ウエスト3世。『紅刃』と同じようにエルザのカタパルトと『白輝』のリカバリーで一撃離脱の波状攻撃を」

「まっかせて〜」

「はい！」

「ま、ここは1つ派手にやらせてもらおうか」

「ふん！貴様に指図されなくとも、この大・天・才！たるドクター・ウエエエスト3世がヤツの脚に風穴あけてやるのである！！」  
正義の味方部の面々は朗らかに、ウエスト3世も千影が仕切るのは気に入らないのか少しツンケンしていたが、それでも自信満々に答えてくれた。

「そして第4フェイズ。断鎖術式が使える私とクーガーが広げた穴に侵入して女の子達を救出する」

「待つてましたあ！俺と千歌音さんとの共同作業……くううううっ！！生きてて良かったあああああ！！！」

千影と共に行動できると言うことで幸せの絶頂に浸るクーガーであった。

「最後に」

「

「待つていただきたい！私を、このジェレミア・ゴッドバルトを、お嬢様たちの救出に加えて欲しい！この通りだ！！」

ジェレミアは千影の前に自分の体を割りこませると、なんと千影に向かって土下座をしたのだ。

「私が日々を生きる活力はオレンジの栽培もそうだが、何よりも私が仕えるブリタニア家のお嬢様方！そのお嬢様たちの救出に馳せ参じることができないのであれば私が生きる意味はなし！！ナイトセイバー……いや千影殿！！何卒、このジェレミア・ゴッドバルトを第4段階の作戦にお加えください！！この通りだ！！！！」

頭を地面にこすり付けるジェレミアの姿にいかにもジェレミアが2人の姉妹を大切に思っているのかを感じ取れた。

「漢がそう安々と頭を下げるものではない」

「しかし」

千影の言葉にジェレミアは顔を上げて何かを言おうとしたが、それよりも早く千影が1つ息をついた。

「はあ、最終フェイズとして救出した2人の護衛を君に頼むつもりだったのだが……まあいいか」

そして千影はクーガーの方を見ると、クーガーは「やれやれ」と言った風に肩をすくめると、両足の両腕に取り付けたVSS-TDを外し始める。

「では、改めて第4フェイズ……いや、最終フェイズの説明を行う！」

クーガーからVSS-TDを受け取った千影は目の前に土下座の姿のままにいるジェレミアに向かって口を開いた。

「私と共に内部に突入し、内部に囚われた2人の少女を救出！救出した後、クーガーと共に2人の少女を連れてすぐに前線より離脱せよ！！」

そして王が騎士に剣を下賜するがごとくジェレミアに差し出されたVSS-TDを前にジェレミアは王にするかのように片膝をつき、頭をたれる。

「平に・・・平に感謝する!!」

そしてその手にVSS・TDが手渡されたのであった。

全ての作戦を話し終わった千影は後ろを振り向くと、そこにいる九郎に向かって口を開く。

「作戦が終わった後の撤退のタイミングは九郎、君に任せるよ」

「いやいや、僕には出番がないかと思いましたがよ。まあ最後の最後ですが僕も張り切りさせてもらいましょかね」

九郎の言葉に千影は頷くと、マイトガインを仰ぎ見た。

「以上だ!そういうことだから、全工程終了までヤツの両腕はよろしく頼むよマイトガイン!!それでは」

そして千影は腕を横に払い、まるで王であるかのように号令を下す。  
「作戦開始だ!!」

ここに最初で最後の『勇者』と『正義の味方』と『世界征服』を理想とする者達の共同作戦の幕が斬って落とされたのだった。

「ようし、ガイン!何としてでもこのままを維持するぞ!!」

『了解だ、舞人!!』

ガーデニオンが暴れないように2本の腕をマイトガインが押さえ込み、両腕の自由を奪いとる。

「えええええいつ!小癩な・・・って脚が!?!」

その状況にコーラサワーは右足で蹴りを放とうとするが、ガーデニオンの右足が上がらないことに気がついた。

「そうは・・・させない・・・!!」

冴が『門』を展開してガーデニオンの足を踝まで沈めて、そのまま固定する形で『門』を維持していたのだった。

「それじゃあ、いつく口ボー!!」

「『紅刃』、武居和麻!推して参る!!」

大きくないエルザの手の上に足を乗せた和麻を空へと放つべく、エルザはカタパルトとなる。

「口、ボオオオオオオオ!!」

エルザの声と共に投げ飛ばされた和麻は木刀を構えると、かつてテ  
ィンクルセイバーの肩を切り裂いた絶断の刃をここに顕現させる。

「これこそ、我が唯一の刃　　『紅刃』!!!」

エルザの射出により付加された運動エネルギーも手伝ってその威力  
は倍となり、絶対傷つかないはずの多層アルピスト装甲を切り裂い  
たのだった。

しかし、高さ10メートルもの高さから落ちてはいかに極星である  
うと無事ではすまない。

だが

「『白煌』!!!」

「OK!!!」

和麻の声に呼応したあきは、すぐさまVSS『聖』の機能を稼働さ  
せる。

「Dッ！レヴ・トルネード!!!」

あきの声にブーツに取り付けられたローラーが反応、一気に離れた  
位置から和麻の落下地点に体を割り込まずと急制動をかけて速度を  
殺し、和麻をキャッチすると再び加速して2人を安全圏へと運ぶ。

そして作戦は和麻のつけた傷を広げる第3フェイズへと移る。

「さてと、じゃあ私達も行きますか」

「はいっ！久遠先輩!!!」

「じゃあ、エルザちゃんよろしくねえ」

「任せるロボ!!!」

そしてエルザは今度は正義の味方部の面々をカタパルトとして射出  
していく。

まずは狭い切り口を広げる意味で一番適任な久遠が跳ぶ。

「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術が派生、我流『紅』  
の使い手、不破久遠！」

久遠は無刀で左手を弓のように絞った。

「奥義之参『射抜』が派生の我流『紅』奥義

『紅天衝』

!!!」

そして力ある言葉とともに放たれた高速の左ストレートが和麻のつけた切り口に突き刺さり、大きくへこませると次に続くさつきにエールを送る。

「さつきちゃん、がんばれ！」

「はい！アークセイバー、天宮さつき行きます！！」

憧れの久遠に声援を送られたことで奮起したさつきは己が武器であるスタンデヴァイス『巴』を鋼鉄すら断ち切る高周波ブレードの形態、『スラッシュモード』に切り替えると奥義を放つべく『巴』を振りかぶった。

「月華流……蒼水月！！」

さつきの放った一閃は和麻、久遠の攻撃で脆くなった多層アルピスト装甲を切り裂いたのだった。

「はやな先輩！！」

そして次に続くはやなにさつきは声をかける。

「りょうかい！ティンクルセイバー、鈴鳴はやな。いつくよ〜！」  
はやなはプラズマリボンを掲げるとリボンをしならせ銀に煌く星を作り出す。

「スターダスト・インパルスっ！！」

そしてその星が煌き、さらに傷を大きくするがそれでも人が通る穴にはまだまだ小さかった。

「ふん、やはりここは我輩の出番であるな！」

その傷を見たウエスト3世は不敵に笑うとどこから取り出したのか巨大なドリルをその手に装着する。

「これぞ我輩の浪漫たる発明、ドリルの中のドリル！その名も『次元突破ラガンブリット』なのである！！さあ、ドリルよ！我輩を導けええええええええええッ！！」

ウエスト3世は『次元突破ラガンブリット』に仕込まれたブースターにより空を飛ぶと、4人のつけた傷に大穴を空けるべく突っ込んだ。

ガーデニオンの装甲とウエスト3世の『次元突破ラガンブリット』



がギユインギユインと火花を散らす中、ウエスト3世の口が僅かに動いた。

「もつとなのであーる……………」

その咳きは叫びとなり

「もつと……………！もつと振れるおおおおおおおッ！！！」

ついには力ある言葉となる。

「テラア・ドリイイル・ブレイイイイイック！！！」

そのウエスト3世の魂を乗せた攻撃は小さな傷口を大きく穿ち、広々とした大穴を開けたのだった。

「人間にとっては小さなドリルだが、人類にとっては偉大なドリルだ」

攻撃を終えたウエスト3世は地面へと落下しながら自分の空けた穴に感慨深いものを感じていたのだが

「プゲラッ!?」

あきのリカバリーは間に合わず、背中を10メートル下の地面に強かに打ちつけ奇怪な悲鳴を上げた。

「ごつめーん、3世君。リカバリー間に合わなかった」

弱弱しくピクピクツと痙攣するウエスト3世にあきは両手を合わせて苦笑すると首根っこを掴み、そそくさと未だに痙攣するウエスト3世を回収したのだった。

「よし、道は開いた！征くよ、ジェレミア！！」

「了解だ！！」

千影とジェレミアはそれぞれ断鎖術式とピストン型擬似断鎖術式を起動させると皆があけてくれた穴へと突入していく。

「ルルーシュお嬢様、ナナリーお嬢様……………このジェレミア・ゴッドバルトが今参りますぞ、全力で！！！」

ジェレミア・ゴッドバルト、まさに忠義の漢だった。

その頃、ガーデニオンの中に取り残されたルルーシュは気絶したナナリーを抱きしめて震えていた。

(暗いよお・・・怖いよお・・・でも私はお姉さんなんだからナナリーを護らないと・・・) 断続的に続く振動と不気味な機械音の中にありながら、恐怖と絶望に染まらなかつたのはひとえに腕の中の妹、ナナリーの存在だった。いつもお転婆で、手を焼かされる妹だが、しかしそんな妹をルルーシユは愛していた。

いかに体力で年下の妹に負けようとも、妹は姉が守るものと言ふ不文律をルルーシユは確りと持っていたのだ。

しかしそれでもルルーシユは初等部低学年の子供だ。そんな強がりも長くは続かない。

それに先ほどから、ココの近くで何かが起こっているのか振動と衝撃が強くなってきたこともルルーシユの恐怖を増大させる一因だった。

「うつ・・・うつ・・・ぐすつ・・・ひつく・・・」

そしてとうとう、ルルーシユは恐怖に耐え切れずに泣き出してしまった。

「・・・助けて・・・お父様・・・お母様」

ルルーシユはいつも自分を護ってくれる家族の名前を口にする。ここに来る筈はないと、その明晰な頭脳は分かっているのに。

でも願わずに入られなかった。家族の名前を呼ばねば本当にこの世界で自分は孤独になってしまうような感情に包まれたのだから。

「ジェレミア」

そして不意に出た、家に住み込みで働いてくれている青年の名前を呟いた時、奇跡は起きた。

「お嬢様アアアアアアツッ!!」

目の前の不気味なオブジェに見えていた機械が吹き飛び、そこから外の光と共に自分の見知った人間が飛び込んできたのだ。

「・・・ジェレ・・・ミア？」

信じられない。そういった風にルルーシユは自分の前にかしづくジ

エレミアの姿に夢を見ているような不思議な感覚に囚われた。だって、絵本の中の御伽噺の騎士のようにジエレミアが自分を助けに来てくれたのだから。

「はい、そうでございます。不肖、このジエレミア・ゴッドバルト、お嬢様たちをお迎えにあがりました」

しかし、そんなジエレミアの姿にルルーシュはコレが夢でないことを悟るとナナリーを抱えたまま泣き出してしまった。

「ジエレミア・・・ジエレミア、ジエレミアああっ!!」

「もう大丈夫ですよ。よく頑張ってくださいましたね」

ジエレミアは両手でルルーシュをナナリーごと抱きかかえるとルルーシュの頭を優しくなでたのだった。

『千影たちが中に取り残された少女達と接触!』

力比べを続けていたマイトガインは生命探査装置で千影とジエレミアが姉妹の下にたどり着いたことを教えると舞人は大きく顔を上げた。

「よおおおしっ!千影たちが脱出し次第、一気に決めるぞ!!」

『了解だ、舞人!』

ガインが舞人にそう答えた次の瞬間、右脚の穴からそれぞれルルーシュとナナリーを抱えたジエレミアと千影の姿を現した。

よく見ると千影が1つ頷いたのが分かる。

即ち、救出完了。目の前のデカブツを倒してもいいということだ。

舞人は千影に向かって頷き返すと、必殺の一撃を叩き込むべく力比べから一気に力を抜き相手のバランスを崩すと距離をとる。

「いくぞおっ!動輪剣!!」

『動輪剣!!』

舞人の言葉にマイトガインは腰に備え付けられた一振りの剣を取り出すと、その剣に内蔵された車輪を高速で回転させ始めた。

回転が速くなることに刀身が光り輝いていくのを見たガーデニオンの霧瀬は背中につめたい汗を流す。



そんな中、千影が今まで霧瀬から聞きだした話しを要約すると以下の通りだ。

「で、正義の味方部の部員勧誘のためのハク付けとしてあんな巨大ロボットを用意して八百長をするつもりだった………」

「まあ、今回は幸いなことに負傷者は0人ですが、なんら係わり合いない少女2人を巻き込んでしまったと言うのは余りにもいただけませんね藤代教諭」

そこで千影は言葉を区切ると、ルルーシュの方に視線をやるとそれに気がついたルルーシュが頷き返す。

「彼女達からの許してあげて欲しいという嘆願に、まあこの件は表沙汰にはならないでしょうが、覚悟しておいたほうがいいですよ」千影の意味深な台詞に霧瀬は首を捻る。

「どういうこと？」

「彼女達の家、ブリタニア家は美咲輝学院の大出資者です。人事評価に響かないといいですね、藤代教諭」

この千影の口から放たれた衝撃の事実には霧瀬は大きく机にその身を投げ出すと突っ伏した。

「しょ、しょんにやあああああ!!」

しかし、そんな霧瀬に千影は攻撃の手を緩めない。

「あ、それと今回の償いは別口で償ってもらいましうか。そうですねえ」

そう言つて「何がいいかな」と考える千影にはやなが元気よく手を上げた。

「ハイハイハイ！藤代先生へのバツはあ、ここのオゴリがいいと思いまーす!!」

それは財布的な意味での死刑宣告だった。

「え？えええええつ!?奢りいいいいツ!!ちよつと待つて……鈴鳴さんが20人分を食べると想定して……私を除いて35人分……!!鈴鳴さん、奢りは」





## 第22話【正義の味方部篇】（後書き）

ジェレミア……この、ロリコンめ!!  
な回  
をティンクルセイバーのドラマCD1巻。SCRAMBLE ST  
ARを下地にしてお送りしました。

今回は奮発して他作品からのゲストは2人。

死亡フラグクラツシャーのパトリック・コーラサワと、ゼロレク  
イエムから後に輪廻転生の輪に戻り生まれ変わった（蝶噓）ルルー  
シュちゃんでした。

いやあ、ロリルルめがっさ可愛いよ。ナナリーはオマケというかオ  
プシヨンだね、うん。

しかし、ジェレミア。君は紳士と言う名の変態だったんだねという  
冗談はさて置き、やはりジェレミアの忠義の中心にあるものはマリ  
アンヌでありヴィイ家であろうと思ひ、シャルルパパとマリアンヌマ  
マもつけてブリタニア家という形で幼女化したルルを出させていた  
できました。

ブリタニア家のヒエラルキーはもちろんマリアンヌママがトップ、  
シャルルパパが最下位ですww

おかげで、正典ギアスのブリタニア皇家骨肉の争い？なにそれおい  
しいの???な位、平和で羨ましがられる家庭を築いております。

まあ、この世界のブリタニア家は一資産家でシャルルパパの奥さん  
もマリアンヌママだけですからね。それに浮気がばれたら命はあり  
ません。

もちろんシャルルパパは命を懸けてまで他の女の尻を追いかけるよ  
うな甲斐性もちでないと言うのがこの世界での設定です。

と、まあどうでもいい設定は置いておくとして

そして!とうとうマイルトガインを出すことができました。

勇者シリーズの中で一番好きなのが、このマイルトガイン。

コミカルだけど、あまり少年モノくさくない作風が今の年になって



も愛せている証拠でしょう。

では、次回も新たなゲストキャラにw k t kしながらお待ちください。

なお、今回の最強カードのコーナーはお休みです。

### 第23話【正義の味方部篇】

藤代霧瀬が起こした巨大ロボット事件で壊れた校舎の修復や大破したガーデニオンの撤去も完全に終わった5月も中旬。

そんな校舎の中を休日だと言うのに正義の味方部の1人であるさつきは久遠と連れ立って部活動回りを行っていた。

何故か？それは4人目となる部員　　他の部の極星確保のためである。

VSSとは違いADは防御面に重きを置いているので、何の心得のないものが着用しても世界征服部が擁する極星を相手にするには決定打に足らず、倒れない的になるだけが開の山だからである。

そこで世界征服部と同じく他部の極星の協力を仰ごうと元『紅蓮姫』久遠の伝手をあたり色々と回ったのであるが、現在その目論見は全滅という散々たるもので、次とその次の部活で久遠の伝手は全て巡ったということになる。

その部活とは　　レオタードを着た少女達が舞う新体操部だった。

「そこのお前さん！腰の入りが甘えですよ！！」

元気よく他の部員に声をかける江戸っ子口調の少女、先代新体操部極星『桜凜』の芳奈ひろりに久遠は声をかけた。

「おい、江戸っこー！」

部活動中にいきなりかけられた声に眉を顰めるひろりだったが、声をかけてきた人物が誰であるか分かると顔をほころばせる。

「はん？って久遠ねーさんじゃありませんか！」

そう言うひろりは新体操部の面々に自主練習の指示を出すと久遠との会話を始めた。

「とんとご無沙汰でしたねえ」

この言葉に久遠は少し申し訳なさそうな顔になる。

「ココにはあんまり顔出せた義理じゃないからね」

「何をおっしゃいます。あたしはちいとも気にしちやいせんよ」  
そんな久遠にひろりは笑って返すと、さつきの方に視線をやった。  
「あのコは残念なコトになっちまいましたが……今は楽しく  
やっていると聞いていますし」

ひろりからの視線にさつきが首をかしげる中、ひろりは久遠の方に  
向き直ると本題へと入る。

「それより、ただ顔見せにきてくれたってえワケでもないんでしょ  
う？」

この鋭いひろりの指摘に久遠はどうやって言い出そうかと考えたが、  
いい案は1つも浮かばなかつたので正直に言うことにした。

「あ……まあ真つ向でいくとだな………極星  
ちゃん貸してほしいだね」

「………なんです？」

余りにも突飛な発言にひろりはついていけないようだった。

それはそうだろう。1つ部活には1人の極星が大原則。

所属は別とし、客将として部に極星を参加させる正義の味方部や世  
界征服部のほうが異端であるのだ。

そう言う反則スレスレであることは分かっているのではあるが、そ  
うも言ってられない事情と言うものが正義の味方部にはある。

「力を貸してほしいんです！正義の味方部が3人……いいえ、  
3人ならば今の状況でもがんばれます！！でも、半月後には千影さ  
んがデュエルアカデミアに帰ってしまうんです！そうなのは、多  
数の極星を擁する世界征服部に押し切られてしまいます！！」

さつきの言うとおり、現在は千影がいるおかげで世界征服部との均  
衡を保っていられるのだ。

しかし千影の留学期間のタイムリミットが刻一刻と迫ってきている  
中、そんな均衡も砂上の楼閣でしかない。

千影がこの学院から去った後、はやなとさつきだけで世界征服部を  
止めることはできない　だからこそその嘆願であった。

そんなさつきの熱意に押されたひろりは

「なるほど」

1つの部が複数の極星を抱えることに納得してくれたようだ。

「じゃあ」

そこで顔を明るくしたさつきだったが、世の中と言うものはそう簡単に運ばないもの。

「だが、ちよいと難しい話だ」

ひろりの言葉に、さつきは今年に入って起こっている極星の移籍話が頭をよぎる。

テニス部の『白』にはじまり馬術部の『黒』や柔道部、料理部などが擁していた極星が、ココ1ヶ月半で別の部へと移籍しているのである。しかも移籍先の部活が不明と言う摩訶不思議な現象であった。「まさか、ココの極星も移籍に!？」

そう問い詰めるさつきにひろりは首を横に振る。

「いやいや、『桜』はウチにありますかね」

そこまで言うひろりは上の方を向くと観客席に言葉を放った。

「翔の字!ちよいと起きてきな。お客さんが見えてる」

このひろりの声に上のほうからモゾモゾと人がうごめく音が聞こえる。

「ん〜・・・ふあ・・・ウチに?」

「つたく、寝ぼけてんじゃないよ!」

未だに夢現であるその人物にひろりがそう一喝すると、その人物はノソノソと動き出したのだが

「ふあ〜い・・・・・・あっ」

「っっ!」

さつきと久遠が驚くのも無理はない。件の人物がバランスを崩し手摺から落ちたのだから。

しかし、そんな2人とは裏腹にひろりは頭を抱えた。

「あのバカ・・・」

このひろりの言葉が真実であったことはすぐさま証明された。

「な〜んてなっ」

頭から落ちると思われた件の人物は空中で綺麗に姿勢を直すと、地面に着地したのだった。

「10点！」

自分の観客席からの着地をそう表現した件の人物だったが、ひろりはその人物の頭を思いつきりはたいた。

「0点ッ！！」

「なんでやのっ！？お客さんたちへのサービスやのに！」

「いらんわ大バカものが！」

この2人のやり取りに愕然となるさつきと久遠に、ひろりは気を取り直して2人にその人物を紹介する。

「こんなんですが、コレがあたくしの跡継ぎ」

「『桜流』の翔子です。よろしゅう」

そう軽く自己紹介する少女が、ひろりから『桜』を継いだ新体操部の極星『桜流』こと天羽翔子だった。

そんな底抜けに明るい翔子にさつきはお願いを口にする。

「あ、あの・・・ウチの部活に入ってほしいんですけど・・・」

簡単には色よい返事は貰えない。厳しい説得になるだろうと心していたさつきであったが翔子から帰ってきた言葉は度肝を抜くものだった。

「なんやー、おもしろそうなら入るでー」

「えっ！本当ですか！！」

などといういきなりのOKサインにさつきは顔を輝かせるが

「考えずに即答するない！」

再びひろりからの強烈な頭はたきが翔子へと炸裂した。

「またなんっ！？」

頭を抑える翔子にひろりは1つため息をつく、言い聞かせるように翔子に向かって口を開く。

「お前さんがこないだ入った部活なんでした？」

「あつ」

このひろりの言葉に何かを思い出したのか、翔子は申し訳なさに、しかしそれでもにやぱつと笑ってさつきに頭を下げた。

「ゴメンなあ。ウチ世界征服部の方に入ったんやったわ」

「えッ・・・・・・・・・・・・・・・・」

まさかの世界征服部という言葉にさつきの世界は停止したのだった。

さつきと久遠が新入部員獲得に精を出す中、他の正義の味方部の面々は何をやっていたかというと

ヌーベルトキオシティの二画にあるデザイン事務所兼撮影スタジオ、『あとリエ都』で絶え間ないフラッシュが焚かれている中に彼女達はいた。

「はい！はい！いいよ、いいよー！！」

カメラのシャッターが切られることにクラシカルな少女服を纏った3人の人物がポーズを取っていく。

「その表情！輝いて、テレビアン！！えくせれんっ！ごーじゃす！でかだんすっ！！」

モデルの3人が新たなポーズを取り、シャッターが切られるたびに喜びの声を上げるのはココ、『あとリエ都』の主であり、3人が纏う服『QJ』ブランドのデザイナーであり、京月葵の母親でもある京月都だった。

そんな都は自分のデザインした服のモデルとして被写体となっている千影、はやな、葵の3人が自分がデザインした服を身にまとうことで、普段よりも一層に増した可憐さに感極まっているのである。

「とにかくサイコー！モデルもアタシのデザインもっ！！」

そこまで言ったところでカメラマンの女性から「はい、OKです」との言葉がかかった。

「はい、おつかれさまでーす」

「おつかれ」

「お疲れ様でした」

3人がカメラマンの女性に返事を返す中、ニコニコ顔の都が3人へと歩み寄ってきた。

「ごめんねー、いつもながら急な仕事で」

都のこの言葉にはやなは笑顔で答える。

「いえいえー、都さんの服好きですし。これでごはんもたべられちゃうんですから」

「そう言ってくれると都さん、助かつちゃうー」

そこまで言つと、都ははやなから千影の方に振り向き言葉を続ける。

「それと君も今日はありがとうね。それにしても葵ったら、こんなに可愛い子が友達でいるのに紹介してくれないなんて」

可愛く拗ねる都だったが、娘の葵は厳しかった。

「都さんは可愛い子がいるとすぐモデルの餌食にするんだから、これくらいは当然です。それと」

そこで言葉を区切ると葵は電卓を弾いていく。

「はやなは当日依頼だったからギャラは2倍。千影君は依頼料の他に初回費と紹介費をこめてコレだけね」

電卓の液晶に移る数字に都は目を点にした。

「そんなこと言われると都さん困っちゃうううううっ！！それになんで葵が2人のマネージャーなんかしてんのよおおおおっ！！」

都が「オーボーだー」と声を上げる中、葵はため息をひとつつくとその理由を説明する。

「都さんが適当だからだし、こうでもしないと際限なく可愛い子を引っ張ってくるんだからその予防策」

それでもブーたれる母親に葵は一層深いため息をつくと止めの一言を放つ。

「それに見合う写真は撮れたでしょう」

こうまで言われては都も引き下がるほかない。

るーと涙を流しながら「わかったわよおおー」といいつつ、十数人の諭吉さんの背中に羽が生えて飛んでいく幻覚を見た都であった。

都が部屋から退出した後、ヒラヒラした少女服から私服へと着替えるために部屋の真ん中でカーテンを引いた千影にカーテンの向こう側から葵が声をかけてきた。

「ごめんね、千影君。ウチの母親があんなんで」

葵の言葉に千影は自分の身を包む、ヒラヒラ少女趣味としか形容できない服を摘むと苦笑を返す。

「ううん、いいよ別に。まあこんなヒラヒラの服着せられるとは思わなかったけどね」

「でもお、千影ちゃんが一番似合ってたよ」

はやなからの率直な感想に葵も頷く。

「あ、それは私も思った。ねね、本当に千影君ってオトコのコ？」

あのときの事を思い出したのか、千影は顔から火を噴出しそうなほど赤くした。

「……………前に一緒に温泉入った時にまじまじとみていたでしょう！もおおっ！！」

「ごめん、ごめん。でも千影君も私達のを見たんだからおあいこでしよ」

そう言われては嫁入り前の女の子と混浴した罪悪感が千影を苛む。

仮に向こう側が許していても自分自身が許さなければ納得できない、中々どうして難儀な性格であった。

「うっ……………そう言われると……………」

千影が言いよどむ中、隣からはやなの元気のいい声がカーテンのすぐ近くから聞こえてきた。

「っと、お着替えおっわり〜！千影ちゃん、そっち終わった？」

「あ、うん。あとは髪を結い上げるだけだから、カーテン開けるねはやなの言葉に千影はそう返すとシャツと音を立ててカーテンを開け放つ。

「おっ！千影君の髪を下ろした姿はAD着た時によく見るけど、私服の時に髪を下ろした姿はなんか新鮮」



葵の言うとおり、シニヨンに結び上げていない千影の銀の長髪姿は、千影の持つ幼さが少し薄れたような不思議な感覚を他者へと与える。そんな千影の姿にはやなは何かを思いついたような顔になった。

「そうだ！千影ちゃんの髪の毛、私が結ってあげるね」

そう言うや否やはやなは千影の後ろに回りこむと、背中を押して化粧台へと導いていく。

多少強引ではあったが、自分でやることの手間を考えると千影ははやなに頼むことにした。

「まあ折角だからね。お願いするよ」

「りょうかーい！」

そんな2人の後ろに葵が立つと、その手にブラシを握るとはやなの千影の髪をセットするはやなの髪をすく。

「じゃあ、私ははやなね」

「よろしく」

その姿は仲のいい3人姉妹のように映り、これを見た都が「どっちか葵の嫁に来てくれないかしら」と真剣な顔で呟いていたのだった。

正義の味方部の3人が仲良く髪を弄り合う中、再び美咲輝学院に舞台を戻してみよう。

「これが・・・ウチの!？」

「うん！さっき仕上がったばかりだけどね」

科学部の部室の中であきと、先ほどさつきからの誘いを断った翔子が1着のVSSを囲んでいた。

「ボクもねー、シルエット的に気に入りなんだ。VSS・007

『桜』、翔子ちゃんの色に合わせたからちょっと派手だね」

確かに新体操のレオタードを模したVSSはあきや冴のVSSとはまた異なる趣を醸し出していた。

「いやいや、ばっちりやし」

しかし翔子本人もいたく気に入ったようで、その顔には笑顔が浮かんでいたのだった。



あきはそう言って嬉しそうに端末を叩くと、そこに先日共闘したマイトガインが映し出された。

「あの噂のマイトガイン。どうやら人格や感情までも持つ超高性能な人工知能を搭載してるみたいなの。この技術が一端でも手に入ればボクの夢も夢のままじゃないだよね」

「でも、その人工知能をどうするん？別に噂のマイトガインと知り合いでもないやろーし」

いや、実はバリバリのお知り合いなのである。

先日の中庭変形ガーデニオン事件でADやVSSの高性能さに眼を見張った舞人が製作者であるあきを

霧瀬はガーデニオン

事件の主犯なので呼ばれず 勇者特急隊の整備をしている

大阪次郎と引き合わせたのだ。

そうしたら2人は意気投合。

父親と娘ほどの年の差がありながら2人は心友とも呼べるほど仲良くなってしまうのだ。

しかし大阪次郎、腐っても旋風寺鉄道青戸工場、工場長にして勇者特急隊の整備を一身に引き受ける身。

そうおいそれと勇者特急隊の秘中の秘である超AIの技術は渡さないであろうが、あきが時々青戸工場に出向いてはそこで行われている勇者特急隊の面々の修理や新機体の開発を手伝っている現状をかんがみるに「教えはしない。欲しいのならば盗んでみせろ」という所であろう。

大阪次郎は朗らかな人格者ではあるが、中々に昔ながらの職人気質な人物でもあったのだ。

翔子のもっともな問いに正直に答えるわけにはいかないあきはお茶を濁していると、科学部部室の扉が手荒くノックされた。

「失礼しまっスー!!」

「え！司木君!？」

あきが驚くのも無理はない。威勢のいい挨拶とともに入ってきたのは世界征服部が極星の1人『朱砂』の司木だったからだ。

傍若無人で唯我独尊。敬うことを知らないと言っていいほど粗野な振る舞いが目立つアノ司木がノックをして、しかも断りを入れて入ってきたのだから、あきの驚きは当然である。

「……………ども」

まるで珍獣を見るかのようなあきの視線に司木が居心地の悪さを感じていると翔子から声がかかってきた。

「司木ちゃんもVSSのお願いしにきたんか？」

この翔子の言葉にあきは前に司木から言われたことが未だに頭にきているのかツンケンした態度で言い放つ。

「いや、前に『そんな弱気なモノはいらねえ！』って断られた」

「もつたいないコトいうなあ」

2人のこのやり取りに司木はビクツと体を震わせると、慌てて頭を下げた。

「そ、そのっ！それを撤回した上で御堂センパイにお願いが！」

「お、お願い！？」

重ねて言うようだが、粗野を人間大に引き伸ばしたのが司木という人間だ。

その司木が敬語を使って頭まで下げる現象にあきはカルチャーショックに似たものを感じていたのだった。

美咲輝学院につづく道路をけたたましいエンジン音を上げて走る車が1台。

一見ランボルギーニカウンタックのようだが、この時代には現存数は少なくその車はランボルギーニカウンタックを模して作られたランボルギーニ・ミヤコ（仮名）  
京月都の車であった。

そんなランボルギーニ・ミヤコ（仮名）は見事なドリフトで美咲輝学院高等部正面玄関に駐車するとそこから千影、はやな、さつきの3人が降りてきた。

「とうちゃ〜く」

「ふう。3人乗りの車だからどうなるかと思ったけど千影君が小柄

だから何とかなつたわね」

「外車をベースに作られてるからシートも大きかったしね」

しかもこのランボルギーニ・ミヤコ（仮名）、本来なら2人乗りのはずなのだがベンチシート式の席が取り付けられた特殊使用のモノだった。

しかしながら2人分のシートに3人身を寄せて座っていたのはお世辞にも快適とは言えず3人は凝った体を各々伸ばす。

そんな3人にランボルギーニ・ミヤコ（仮名）の所有者であり運転手でもあつた都が降りてくると「やれやれ」といった調子で口を開いた。

「休日も学校なんてねえ」

その都の言葉にはやなは微笑みながら頭を下げる。

「すいませんー。お仕事の後なのに車だしてもらっちゃって」

都のもつともな疑問、なぜ学校に来ているのかという理由は新入部員の勧誘をさつきと久遠に任せっぱなしと言うのが気が引けたからだ。

そこで新入部員勧誘のお礼も込めて皆で夕食を食べようということになり、こうして学院までやって来たのである。

もちろんスポンサーは都だ。

そんな都は礼を言つて頭を下げるはやなに笑つて返す。

「いいのよー。私も正義の味方部の活動見てみたかつたし」

この都の言葉に葵は顔をしかめた。

「つて、そんなコト考えてたの!？」

母である都の言葉にあきれ返つた葵は都に諦めてもらつべく言葉を続ける。

「今日はどうせ世界征服部も活動しなだろっし何も見れないわよ」

「え〜〜〜!」

葵のこの言葉にブーたれる都であつたが、そこに放送部部长、貴野沙利亜の発する全校舎への放送が入つた。

『放送部より緊急放送です』

世界征服部が活動を始めたのかと表情を固くする3人だったが次に述べられた言葉に眼を丸くする。

『正義の味方部、アークセイバーさんから世界征服部の皆様へメッセージをお預かりしております』

それは3人のよく知る人物から出されたものだったからだ。

3人がさつきの名前に首を捻る傍ら放送は続く。

『果たし状。爽やかな初夏の風も感じ始める今日この頃、世界征服部の皆様はいかがお過ごしでしょうか。つきましては、この度果し合いを申し込みたく願います。ご都合などよろしければ、本日午後5時高等部の武道場までお越しくださいませ。お待ちしております』  
なんと世界征服部への『果たし状』だったのだが

「ん……貴野さんのかーいい声で読み上げると果たし状と言うより」

「恋文だね、これは」

はやなと千影が苦笑するとおり、果たし状独特の緊迫感も生々しさも全く感じさせない内容に聞こえるから不思議だ。

しかも沙利亜がさつきの果たし状を読み上げているのは放送用機材がひしめく放送室なのに何故か沙利亜が話し出すとその場所のイメージがお花畑に変わるものだから、貴野沙利亜恐ろしい娘である。

しかし、雰囲気はラブレターでも内容は果たし状だ。

これを聞いた世界征服部が黙っているとは思えない。

「なにがどうという経緯でこうなったかは分からないけど、とにかく私達も行こう」

この千影の言葉にはやなと葵は頷く。

「うん」

「一応、AD着てくよーにね」

そして校舎の中へ向かおうとする3人に都から声がかかる。

「とりあえず活動はありそうなのね。私も車入れたら向かうから」  
そんなお気楽な母親に葵が青筋を浮かべるのも無理からぬことである。

「こなくていいから!!」

「ほほほー！楽しみだわー」

しかし都も然る者。葵の言葉を見事にスルーするとランボルギーニ・ミヤコ（仮名）を急発進させて遙か彼方へと走り去って行ったのだ。

当然の事ではあるが世界征服部の面々はさつきの果たし状の放送を聞いていた。

休日と言うこともあり、学院に来ているのは部室で世界征服部の今後を会議していた部長の夕霞、副部長の九郎、『紫閃』の八草重、

『黒帝』の冴。

科学部でVSS-007の調整をしていた『白煌』のあきと『桜流』の翔子。

そしてあきにお願いに来た『朱砂』の司木だけだった。

ここは会議を行っていた世界征服部部室の方に眼を向けてみるとしように。

そこでは

「最近調子がいいからと、余裕を見せたつもりかっ!!」

八草重は先ほどの放送がよほど腹に据えかねたのか苛立たしげに机を叩くと、先鋒を任せてもらうために部長である夕霞の方を向く。

「部長！ここは私に!!」

「落ち着け八草重」

血気逸る八草重にそう夕霞が声をかけるがそれでも八草重は止まらない。

「ですがっ!!」

「八草重君、大きな声は……」

見かねた九郎が八草重に口を開くが、さらに八草重は口調を荒らげた。

「オマエは口を出すな!!」

そんな八草重を見かねた夕霞は八草重に険しい視線を送ると共に言

葉を放つ。

「八草重………弁えろ」

静かではあるが絶対的な冷たさを幻視させる夕霞の言葉に八草重はたじろぐしかなかった。

「も、申し訳ありません………」

八草重が静かになったところで夕霞は九郎のほうへと顔を向ける。

「浅凧。『白』『黒』『桜』を率いて活動に」

夕霞がそこまでいった所で、急に部室の扉が開き、そこから明るい声が響いてきた。

「皆！ たつだいまー！！」

その人物こそ、カードゲーム部の極星にして、世界征服部が擁する最後の極星『金輝』たる切札勝舞だった。

そんな勝舞の姿に夕霞は口元を緩める。

「ほう、切札。ようやく帰ってきたか。それにしてもご苦労だったな、5日間に及ぶユース全国大会のあとにすぐさまユース世界選手権とは」

そう。勝舞が4月初頭から5月の半ばまで学院にいらなかったのは海馬コーポレーションが主催した高校生対象の大会のためだったのだ。

「俺もアレには驚いたよ。優勝して帰れると思った次の瞬間には飛行機の中だけ。海馬さんも無茶なことしてくれるよ」

しかも、その大会のミソは全国の高校生を対象とした全国大会のみに収まらず、各国で同時開催されたユース大会優勝者が集うユース世界選手権に参加するための全国選抜と言う意味も込められていたのだ。

このユース世界選手権選抜全国大会、デュエルアカデミアは主催者側がオーナーを務めているという理由があり大会への参加枠は与えられていなかった。

もちろんサプライズとしてその情報は伏せられ、勝舞がこのことを聞いたのは表彰台の上である。

おかげで1週間で帰ってこられる予定が1ヶ月も延びてしまったの



だ。

「しかし、お前の事だ。勝って来たのだろう」

「おう、もちろん！」

夕霞の言葉に元気よく答えると勝舞はバツクバツクから小さいながらも立派なトロフィーを取り出した。

「お前のユース世界選手権優勝を祝ってやりたいところであるが、今は少し立て込んでいてな。悪いがお前も疲れているところ悪いが出てくれるか？」

そう言う夕霞に勝舞は握りこぶしを作って答えた。

「当然！だって、正義の味方部とかにはウエスト3世やクーガー、ジエレミアを倒したシンクロナ召喚の使い手がいるんだろ？ユース世界選手権の賞品をペガサスから渡されてから、ずっとそいつと決闘したいって思ってたんだ！！」

その威勢のいい勝舞の声に夕霞は「そうか」頷くと言葉を続ける。

「ならば科学部部室に御堂がいる。決闘盤の調子を見てもらったほうがいいだろう。それとついでに科学部にいる『白』と『桜』にも出てくれるように伝言を頼めるか？」

「おう！じゃあ行ってくる！！」

入ってきた時同様、元気な姿で世界征服部の部室から去っていく勝舞だった。

「いやあ、しかし切札君はいつも元気ですねえ」

そんな勝舞の後姿に笑みを漏らす九郎に夕霞は笑みを漏らすと先ほど言いかけた言葉を発する。

「そうだな・・・では浅凧改めて言う。『白』『黒』『桜』『金』を率いて活動に出る」

「はい・・・でも僕でいいんですか？」

夕霞の命に頷いた九郎だが、九郎は先月末から前線担当を外されているのだ。

現在の前線担当、八草重がここにも関わらず自分に指揮を預ける夕霞に九郎は首を捻った。

「構わん。今日はやつらの座興につきあってやるだけのこと」

と、夕霞がそこまで言ったところで八草重から言葉が放たれる。

「わ、私は!?!」

置いてけぼりを喰らう八草重は何としてでも夕霞に情けを貰おうとしたのだが

「お前にも仕事がある。お前は今日、高等部校舎内すべてのトイレ掃除を任ずる」

「なっ!?!?何でこんな時にそんな……!!」

夕霞の容赦ない命に、当然納得いかない八草重だったが、少し前の活動で八草重は夕霞の怒りを買っていたのだった。

「これは先日の女の子と客人に刃物をつきつけた罰だ」

どうやら、釘を刺したのにもかかわらず強硬に行こうとした八草重にかなりお冠であったのだ。

そういわれては引き下がるほかない八草重を尻目に夕霞は息をつく  
と、九郎と冴に一言付け加えた。

「そうそう、相手が指定した時間までまだ余裕がある。ゆっくり向かうがいい」

友人である冴が少しでも思い人である九郎と2人でいられるようにとお邪魔虫を散らすことに成功した夕霞は、少し満足げに微笑んだのだった。

さて、では何故さつきが果し合いと言う暴挙に及んだかと言う理由  
はと言うと、それは久遠が最後に向かった陸上部にあった。

そこでさつきと同じく1年生ながら陸上部の極星である『赤』を継  
いだ、『赤陽』九行稜と出会ったのだが、彼女がこれまた曲者だっ  
た。

なんといつても稜による正義の味方部の評価は「コスプレぽくて、  
ミーハーぽくて、ハデハデしくて、騒がしい部活の片方」という、  
まあ言われてみればそうとも言えなくもない身も蓋もない評価だっ  
ただのだから。

この評価に『撃沈 轟沈 大爆沈!』となったさつきだが、部活回りの最後とあつてか、同じ1年生の極星でもあつてか即座に復活すると交渉を始め、そして中々に粘った。

淡泊に返す稜にそれはもう熱心に正義の味方部を勧めたのだが、そこで稜から1つの質問が飛び出たのだ。

「あなたの正義はなんですか?」っと。

そこでさつきが口にした答えは「正義の味方のお手伝い」。

自分の確固たる正義はないが、自分が憧れ、ひかれた正義の体現者であるティンクルセイバーとナイトセイバーを助ける。

これがさつきの偽らざる本音だった。

コレを聞いた稜はならば自分にもさつきが感じた、ひかれる何かを感じさせて欲しいとの言葉により、さつきは世界征服部との闘いを見てもらおうと思つたわけだ。

「……………で、果たし状だもんねえ」

今までの経緯を回想していた久遠は武道場の真ん中にアークセイバーの姿で立つさつきを見ると苦笑を浮かべた。

「だいたい今日は日曜日なのに征服部はきてるですか?」

久遠の隣に立つ稜のもつともな疑問に久遠の顔は少し険しくするが

「そればかりは お、噂をすればなんとやら」

武道場の入り口からVSSを纏つた翔子、あき、冴と決闘盤を装着した勝舞が入ってきたのだ。

そんな彼女らにさつきは頭を下げる。

「突然の呼び出しにに応じていただき、ありがとうございます」

さつきの礼に翔子は手を振って応えた。

「いやいや」

「いつもとは逆の形になりますが……一手、手合わせ願います  
!」

そしてさつきは頭を上げると凜々しく『巴』を構えるのだった。

さつきが世界征服部と対峙したちょうどその時、千影たちは第4保健室『湊』に到着していた。

だが、ついで早々葵がうなり声を上げた。

「なーっ！もうー！！なんでこういう時に限ってあのヒトは休みなのか！！」

その部屋の主たる霧瀬がいないのである。

「まあまあ、葵」

「そつだよ、今日は日曜だし仕方ないよ」

当然である。あの趣味の人といつてもいい霧瀬が休日まで学校に来るなんてことは天地がひっくり返ってもありえないのだから。

声を荒らげる葵に千影とはやなは、その声をかけるとはやなが言葉を続けた。

「とりあえず、私と千影ちゃんのADよろしく」

このはやなの言葉に「はいはい」と答えた葵はいつものようにキーボードにパスワードを入力する。

『正義は君の心の中に』

その文言が打ち込まれると同時に2つのアタッシユケースが飛び出て来た。

そしてそれを手に取り、更衣室に入り着替えるのだが

「……………あれ？」

「どうしたの？」

はやなの不意についた言葉に葵が声をかけると、少しはやなは顔を赤くしつつ答える。

「なんだか、ムネのあたりがしまらないんだよー！？」

この爆弾発言に葵どころか千影までも頭を抱えた。

「な……………なんでこんな時に成長しちゃってんのよー！？」

「私に言われても」

そこで葵ははやなの更衣室の中に入り、はやなにティンクルセイバーを着せようと四苦八苦しなから着替え終わったであろう千影に言葉をかける。

「はやなは私が何とかするから、千影君は先に行つてて！」

「・・・・・・・・分かった」

葵の言葉を聞いた千影は顔を真っ赤にしながら第4保健室『湊』から逃げ出すように武道場へと向かつていったのだった。

まさか正義の味方部室でそんなことが起こっているとは露と子知らないさつきは、翔子との果し合いを演じていた。

さつきが『巴』を振り払えば翔子は棍棒型TT『白妙』で弾き返す。気合の言葉さえも発せぬ緊迫した先の読みあい、長刀と棍棒がぶつかり弾きあう音が響く2人の戦闘はまるで演劇の1シーンであるかのように熾烈さを増していく。

そして、そんな2人の真剣勝負ともいえる場面でその現象は起きた。さつきが切り上げた『巴』から残像を引いて蒼い雷が進ると、翔子もその自分を中心とした空間に桜の花びらが舞つたのだ。

否、それは本物の雷でも花びらではない。

その名は 『極光』。

優れた極星同士の本気の勝負の時に見られる光の発現は、未だにその発生にいたるメカニズムや正体も謎の現象だった。

そして、さつきはその自分の極星、『蒼雷』と同じ蒼い雷を『巴』に纏わせると、力ある言葉と共に解き放つ。

「月華流奥義 『蒼星鳥』！！」

振り払われた『巴』から蒼い雷の鳥が羽ばたき、翔子へと迫った。

「蒼雷ちゃんもそろそろ本気やね。ほな、ウチも華やかにいきましょか！」

自分に迫る蒼き雷の鳥に翔子は笑みを浮かべると、自分の極星、『桜流』と同じ周りに流れる桜の花びらを巻きあげるように舞う。

「百華千万・緑萼桜！！」

迸る蒼い雷と舞い上がる桜の流れがぶつかり、相殺しあうと蒼と桜の光が煌く。

その横を抜けて、さつきと翔子は再び切り結ぶ。

そんな迸る蒼と舞う桜の光が満ちる武道場に千影は足を踏み入れたのだった。

「これは……さつきとあの娘の魂の輝き……」

「そう呟く千影の姿をいの一番に見つけた勝舞が千影の元に歩み寄りてきた。」

「よお、あんたが正義の味方部の決闘者、姫宮千影か？」

いきなり声をかけてきた勝舞をいぶかしむ千影だったが、その腕に装着された決闘盤を見て眼を見張る。

「君は　　決闘者か！？」

「そう。カードゲーム部極星『金輝』にして世界征服部所属の切札勝舞だ」

千影の言葉に答えるように出てきた文言に千影は表情を引き締める。

「カードゲーム部極星……」

それすなわち、この学院で一番強い決闘者が目の前の勝舞ということだ。

「あんた、ウエスト3世やクーガー、ジエレミアを決闘で倒したんだろ。俺はあんたみたいな強いやつと決闘したかったんだ！」

しかし、千影は勝舞のそんな姿に懐かしいものを感じていた。

（これはまるで十代みたいな人間だな……。それに世界征服部にも所属しているがカードゲーム部極星『金輝』。それに切札勝舞というとユース世界選手権優勝者……。まさに相手にとって不足なし！）

そこまで考えた千影は目をカツと開き武道場の入り口から外へ、決闘ができる広いスペースに出ると左腕の『レガリア』を掲げた。

「よし！その決闘、受ける！！ナイトセイバー・決闘形態

起動！！」

【Knight mode Drive】

千影の声と共に『レガリア』の中にあるカードの中から決闘用のデッキが生まれ、『レガリア』のデッキゾーンへとセットされる。

「そうこなくつちな！それじゃあ  
勝舞もデッキをセットし決闘盤を起動させると、千影と共に決闘の  
幕を上げるべく叫んだ。

「決闘ッ！！」

千影LP4000

勝舞LP4000

「先行は私が貰う！私のターン！！」

先手を取ってドロートした千影は手札の中から1枚のカードを選び出す。

「LOVサーヴァント・ケルベロス - を守備表示で召喚！」

LOVサーヴァント・ケルベロス -      3      ATK1400      DE

F700

続けてさらに1枚のカードを千影は手に取る。

「さらにカードを1枚伏せてターン終了だ！」

(さあ、君はどんな決闘を見せてくれる・・・切札勝舞)

『金輝』という極星を持ち、さらにユース世界選手権優勝のタイトルを持つ勝舞がどのような決闘をしかけてくるか。千影は緊張すると同時に胸の高鳴りを抑え切れないでいたのだ。

そして勝舞のターンがやってくる。

「俺のターン、ドロート！！」

勝舞は手札の中から迷いなくカードを選び出して召喚した。

「俺は手札のモンスター、飛びかかるジャガーを攻撃表示で特殊召喚！このモンスターは召喚を特殊召喚扱いに出来る！！」

飛びかかるジャガー      3      ATK1400      DEF400

勝舞はさらにもう1枚のカードに手をかける。

「さらに針刺スリヴァーを攻撃表示で召喚!!」

針刺スリヴァー 4 ATK1700 DEF1400

2体のモンスターを従えた勝舞は、すぐさま攻勢へ出た。

「戦闘だ！飛びかかるジャガーでケルベロスを攻撃!!」

名前の通り、飛びかかるジャガーがケルベロスへと飛びかかりケルベロスをいとも容易く食い破る。

だが、この程度の攻撃で怯む千影ではない。

「この時、L o Vサーヴァント - ケルベロス - のモンスター効果発動！戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のL o Vサーヴァントと名のついたモンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する！私はL o Vサーヴァント - コカトリス - を召喚!!」

L o Vサーヴァント - コカトリス - 2 ATK1000 DE  
F300

「そしてL o Vサーヴァント - コカトリス - のモンスター効果発動！このモンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚された時、相手フィールド上のモンスター1体を選択。選択した相手モンスターは、このカードが表側攻撃表示でフィールド上に存在する限り攻撃することができず、表示形式の変更も出来ない！私が選ぶのは針刺スリヴァー!!」

千影の号令と共にコカトリスから吐かれた石化ガスが、針刺スリヴァーの足を止めたのだった。

そんな針刺スリヴァーの姿に悔しそうに眉を顰める勝舞だったが、気を取り直して新たなカードに手をかける。

「くっ・・・針刺スリヴァーの攻撃を止めたか・・・だが！俺の



ターンはまだ終わってない！！俺はフィールド魔法、ライブラリー・オブ・アレクサンドリアを発動！！」

勝舞が発動したフィールド魔法により、回りは巻物でできた書物がひしめく古代の図書館へと姿を変えたのだった。

「これは・・・いったい!?」

その光景に視線を巡らす千影に勝舞はこのカードの効果をお口にしている限り、全てのプレイヤーはドローフェイズにカードを引くことができず、さらに手札からカード1枚を墓地に捨てなければならぬ！！」

「それじゃあ、事実上デッキからカードを引けないじゃないか!?」  
あまりにも滅茶苦茶なカードの効果に千影が声を上げるが、勝舞は指を振りながら言葉を続けた。

「だけど、このカードにはもうひとつの効果がある。それは全てのプレイヤーはターンエンド時にデッキからカードを2枚引くと言う効果だ！！俺はターンエンドを宣言！ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの効果でデッキからカードを2枚ドローする！！」  
手札に引いた2枚のカードを加えた勝舞は得意げな笑みを漏らす。  
(ドローフェイズがターンエンド時に変わるカードか・・・・・・おもしろい！！)

ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの特殊な効果に千影は笑みを漏らすと自分のターンの開始を宣言した。

「私のターン！」

「この時、ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの効果が発動！手札のカード1枚を捨ててもらおうぜ！！」

勝舞の指摘に千影は頷き手札の1枚を墓地に捨てると、すぐさま攻勢へと移った。

「Lovサーヴァント・コカトリス・を生け贄にLovサーヴァント・アンヘル・を攻撃表示で召喚！！」

LOVサーヴァント・アンヘル - 6 ATK2000 DEF1800

千影の場に顕現するは赤き竜。その赤き龍、アンヘルに千影を腕を振り上げ号令を下す。

「アンヘルで飛びかかるジャガーを攻撃!!」

アンヘルから放たれた炎の吐息は勝舞の飛びかかるジャガーを焼き尽くすと、その余波は勝舞にまで襲い掛かる。

「くうううっ!!」

勝舞LP3400

「私は、これでターン終了!この時、ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの効果でカードを2枚ドローさせて貰う!!」

千影のターンエンド宣言と共に勝舞のターンがやってくる。

「俺のターン!ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの効果で手札を1枚墓地に捨てる」

手札から1枚のカードを捨てた勝舞は、千影に負けじと再び攻勢に出た。

「手札から筋肉スリヴァーを攻撃表示で召喚だ!!」

筋肉スリヴァー 4 ATK1200 DEF1600

新たなモンスターを召喚した勝舞は、そのモンスター効果を発動させる。

「筋肉スリヴァーのモンスター効果!このカードが表側表示である限り自分フィールド上に存在するスリヴァーと名のつくモンスターの攻撃力は500ポイントアップする!!」

針刺スリヴァー 4 ATK2200 DEF1400

筋肉スリヴァー 4 ATK1700 DEF1600

「っ!?!」

勝舞の言葉と共に攻撃力を上げた2体のスリヴァーに千影の表情は険しくなった。

しかし、まだ勝舞は手札に手をかけると新たなカードを切る。

「まだまだ! 俺は手札から装備魔法、怨恨を発動して針刺スリヴァーに装備! このカードは装備したモンスターの攻撃力を500ポイント上げ、さらにその攻撃力が相手モンスターの守備力を上回った時、その差分のダメージを与える貫通効果も追加される!」

針刺スリヴァー 4 ATK2700 DEF1400

「4で攻撃力2700!?!」

低 でありながらここまで攻撃力を増大させた針刺スリヴァーに千影は背中に冷たい汗が流れたのを感じた。

「行くぜ! 針刺スリヴァーでアンヘルに攻撃!! ニードル・スピア!」

勝舞の声と共に針刺スリヴァーから放たれた針の雨は、アンヘルを貫き千影へと降りかかる。

「くううっ!」

千影LP3300

「続けて、筋肉スリヴァーで直接攻撃だ! マッスル・チャージ!」

「ああううううっ!」

千影LP1600

さらに腕を振り上げた筋肉スリヴァーが千影に襲い掛かり、千影の

ライフポイントを大きく削ったのだった。

だが、千影も然る者。何も無防備に攻撃を受けたわけではない。

「リバース罠オープンツ！ゲート！！このカードの効果はこのター  
ン、相手から受けたダメージの合計値分以下の攻撃力を持つモンス  
ターを手札から特殊召喚できる！私が受けたダメージは2400、  
よって手札から攻撃力1900のLovサーヴァント・ロキ-を攻  
撃表示で特殊召喚！！」

千影の場に踊る影を従えた道化師のような顔をしたモンスターが現  
れる。

Lovサーヴァント・ロキ-           7   ATK1900   DEF11  
00

「この時、Lovサーヴァント・ロキ-のモンスター効果が発動！  
！このモンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、全て  
の魔法・罠ゾーンにあるカードを破壊する！そしてこの効果で破壊  
した枚数1枚につき、そのカードのコントローラーは500ポイン  
トのダメージを受ける！！」

この効果に勝舞は驚きの声を上げる。

「なにっ！？それじゃあ！！」

「ライブラリー・オブ・アレクサンドリアと怨恨は破壊！合計10  
00ポイントのダメージを受けてもらう！                   開け、アビス  
ゲート！！」

千影の言葉と共にロキから伸びた影が蠢き、そこから伸びた黒い手  
が勝舞の2枚のカードを包み込み、底なしの影へと引きずり込んで  
いくと同時に、その黒い手は勝舞の体をも貫いた。

「うっ！！」

勝舞LP2400

針刺スリヴァー           4   ATK2200   DEF1400

怨恨が破壊されたことにより針刺スリヴァーの攻撃力は下がったが、まだ怨恨のカードにはもう1つの効果がある。

「……ッ！だけどこの時、装備魔法、怨恨の効果も発動！怨恨が墓地にいった時、墓地にあるこのカードをデッキに戻してシヤツフルする！！」

勝舞は怨恨をデッキに加えてシヤツフルすると、頬に伝わる汗をそのままに言葉を続けた。

「まさかライブラー・オブ・アレクサンドリアを破壊してくるとは……これじゃ俺大損じゃん」

「最小限の力で最大限の打撃を……だよ」

肩を少し落とす勝舞に向かって片目を瞑りながら微笑を浮かべ語った千影の姿に勝舞はほんの少しだが口元を緩める。

「言ってくれるなあ……俺はカードを1枚セットしてターン終了だ！」

勝舞のターンエンド宣言に千影はデッキへと手を伸ばした。

「私のターン、ドロー！」

1ターン振りのドローフェイズにデッキからカードを引いた千影は引いたカードを手札に加えると、その中から1枚のカードに手をかける。

「私は手札からLOVサーヴァント - 雷獣 - を召喚！このモンスターは、そのターンのエンドフェイズに墓地に送られることを条件に、生け贄なしで召喚できる！！」

LOVサーヴァント - 雷獣 -           6   ATK2400   DEF1500

2体の使い魔を従えた千影はロキと雷獣に向かって命を下す。

「LOVサーヴァント - ロキ - で筋肉スリヴァーを攻撃！！」

千影の号令と共にロキの影が巨大化して筋肉スリヴァーを包み込む

と断末魔さえも残させずに筋肉スリヴァーを破壊したのだった。

「そして、筋肉スリヴァーが破壊されたことで針刺スリヴァーの攻撃力は元に戻る!!」

「ッ! やっぱりそれが狙いか!!」

勝舞 LP 2200

針刺スリヴァー 4 ATK 1700 DEF 1400

攻撃力が元に戻った針刺スリヴァーを険しい表情で見る勝舞に千影はさらなる追撃をかける。

「さらにL o Vサーヴァント - 雷獣 - で針刺スリヴァーを攻撃だ!!」

元の攻撃力に戻った針刺スリヴァーを雷獣はその巨体を用いて弾き飛ばし、粉々に粉碎したのだった。

「針刺スリヴァーまで・・・ッ!!」

勝舞 LP 1500

腕で顔を庇いながら、なんとかその場に踏みとどまる勝舞に千影は未だ攻撃の手を緩めない。

「まだまだ! 手札から速攻魔法、超大紅蓮偉丈夫の呐喊を発動!! このカードは相手モンスターを戦闘で破壊したモンスター1体を選択し、発動! 選択したモンスターを生け贄に捧げ、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える!!」

このカードの効果に勝舞は驚きの声を上げる。

「なにっ!?!」

「私はL o Vサーヴァント - 雷獣 - を生け贄に捧げ・・・勝舞! 君に1200ポイントのダメージを与える!!」

そして千影の宣言と共に雷獣は雷の矢になると、眼にも留まらぬ速さで勝舞を射抜いた。

「あつがあああああつ!!」

勝舞LP300

方膝をつく尻目に千影は1枚のカードを決闘盤へと挿入する。

「最後に伏せカードを1枚セットしてターンエンドだ!!」

ターンエンドを宣言する千影の姿を肩膝ついたまま見上げる勝舞は、震えていた。

それは恐怖でも畏怖でもない 純粋な喜びで、である。

(すっげえ!ここまでの決闘者はユース世界選手権にもいなかった・・・・・・コイツなら俺の本気の本気の本気の本気をぶつけられる!!)

そうするとどうしたとか、勝舞の右手が金に輝きだしたのだ。

それはさつきや翔子が出していた、真なる極星が本気の時にのみ放つことの出来る真実の光、『極光』だった。

その勝舞の輝く右手を見た千影の表情は驚愕に染まるが、すぐに合点のいった顔になる。

「なっ!?!?・・・・・・そうか。君も『金』の名を冠する極星だったな」

「ああ。でもこれを出すのは本当に久しぶりだ・・・・・・それだけ、あんたが本当に強い決闘者だったことだ!!」

勝舞は金に輝く右手を振り上げると千影に言い放つと、デッキからカードを引くべく輝く右手をデッキに伸ばす。

「俺の右手の輝きは俺に勝利をもたらすぜ!!俺のターンだ!ドロー!!!」

金に輝く右手から零れ落ちた光の粒は宙に舞い、勝舞を祝福するかのよう降り注ぐ。

眼を見開き、そのカードを見た勝舞は口元に笑みを浮かべた。

「来たぜ!俺の切札が!!」

切札勝舞、その切札とは

「俺はチューナーモンスター、LOVサーヴァント - 極楽鳥 - を攻撃表示で召喚だ!!」

LOVサーヴァント - 極楽鳥 -                    1    ATK0    DEF500

勝舞の場に出現した虹色の尾羽を持つ鳥の姿に絶句する。

「えっ……!!? LOVサーヴァントのチューナーモンスター!?!」

千影の驚きは無理もない。チューナーモンスターとシンクロモンスターの試作カードたるLOVサーヴァントシリーズの持ち主は自分を含めても4人しかいなかったのだから。

しかも、目の前に存在するLOVサーヴァントはその4人が持つカードとまた違うカードだったことも千影が混乱する要因だった。

「ペガサスが用意していた今回のユース世界選手権の優勝者にたいする賞品、それがあんたも持つLOVサーヴァント!そしてチューナーモンスターがいるということは」

「シンクロモンスターも当然いる……!!」  
千影の呟きに勝舞は「そうさ!」と答えると、シンクロ召喚のために場に伏せたカードを開く。

「畏発動、リビングデッドの呼び声!このカードの効果で墓地に存在する針刺スリヴァーを特殊召喚!!さらにLOVサーヴァント - 極楽鳥 - のモンスター効果!手札を1枚捨てることで墓地に存在する4以下のモンスター1体を特殊召喚する!来い、飛びかかるジャガー!!」

針刺スリヴァー                    4    ATK1700    DEF1400

飛びかかるジャガー                    3    ATK1400    DEF400

こうして勝舞の場に3体のモンスターが揃った。

その3体のモンスターを束ねるべく、勝舞は金に輝く右手を振り上



げる。

「行くぜ！！ 4 針刺スリヴァーと、 3 飛びかかるジャガーに、  
1 Lovサーヴァント - 極楽鳥 - をチューニング！！」

金に輝く勝舞の右手に導かれ8個の星々は踊り、舞う。

「虹色の鳥に導かれ、竜の叫びが木霊する！！大いなる竜よ今こそ  
来たれ！シンクロ召喚！！Magick The Gathering  
Lovサーヴァント - シヴ山のドラゴン - ！！」

そして勝舞の場に雄々しき1匹の竜が金の光の祝福を受けて舞い降  
りたのだった。

Lovサーヴァント - シヴ山のドラゴン - 8 ATK3000  
DEF2500

千影はその竜の威容に圧倒されていた。

「これが新しくペガサス小父様が作ったLovサーヴァント・・・  
・・・ツ！！」

「そうさ！そしてLovサーヴァント - シヴ山のドラゴン - のモン  
スター効果発動！！自分の墓地に存在するモンスター1体につき攻  
撃力を300ポイント上昇させる！！俺の墓地のモンスターは5体  
！よって、シヴ山のドラゴンの攻撃力は  
シヴ山のドラゴンは墓地からあふれ出たモンスターたちの命を吸収  
すると、自信の力へと変えていった。」

Lovサーヴァント - シヴ山のドラゴン - 8 ATK4500  
DEF2500

「攻撃力4500！？」

その攻撃力の高さに千影は驚きの声を上げたのだった。

「これで止めだ！Lovサーヴァント - シヴ山のドラゴン - でLo  
Vサーヴァント - ロキ - を攻撃！！」

勝舞が金に輝く右手を振り上げると共にシヴ山のドラゴンもその口に極炎の炎を集める。

「放て！ドラゴン・ブレス！！」

そして勝舞の号令の元、巨大な火炎弾がシヴ山のドラゴンから放たれ、千影のロキへと迫る。

「くっ　　！！」

千影のフィールドにシヴ山のドラゴンが放った火炎弾が着弾すると、辺りは爆煙で覆われたのであった。

そんな中、勝舞は決着はついたと、未だ煙が蔓延する千影の場へと声をかける。

「お前、中々強かったぜ。だけど相手が悪かった………  
な……って　　ッ！？」

しかし、そこで勝舞は信じられないものを見た。

何故ならそこには両の眸と左耳に飾られた輝石を紅蓮に燃やした千影が無傷のロキを従え立っていたのだから。

「な、なんでっ！？一体どうして！！」

千影の未だ健全な姿にうろたえる勝舞に、千影は手札のカードを見せてやった。

「間一髪、この子の発動が間に合ったよ」

その手にあるものはL・Vサーヴァント・グリフォン。

手札から捨てることで攻撃力1500以上のモンスター1体の攻撃を無効に出来る、これまで幾たびも千影の危機を救ってきたモンスターだった。

千影が示したカードに勝舞は眼を伏せると、体を振るわせ始める。

「まさか、そんな手で攻撃を防がれるなんて　　」

そして、その顔を上げた勝舞の顔は輝きに彩られていた。

「やっば、あんたすげえよ！！俺、あんたみたいな強い決闘者と決闘できることをすっげえ幸せに感じる！！俺のターンはこれで終了だ！」

そう言うと、勝舞は金に輝く右手を振り払いターンエンドを宣言し

たのだった。

そんな勝舞の姿に両の眸を紅蓮に燃やした千影は不意に口元を緩めてしまう。

「君のそう言うところ、十代にそっくりだよ切札勝舞……  
・・そして！君の輝く右手が君に勝利をもたらすならば、私は私の想いでもって絶対勝利を掴み取って見せよう！私のターン！！」

デッキからカードを1枚引いた千影は墓地に存在するグリフオンのモンスター効果を起動する。

「この時、LOVサーヴァント・グリフォン - の効果が発動！！無効化したモンスターの攻撃力が2500以上だった時、次のドローフエイズ　　つまり今！もう1枚カードをドロォーできる！！」  
そして新たに引いたカードを見た千影は1つ頷くと、そのカードと墓地にあるカードに手をかける。

「私は手札からチューナーモンスター、LOVサーヴァント・クアール - を召喚！さらに墓地に存在するエルダーワイバーンの効果発動！このモンスターが墓地にいるとき、　　を1つ下げることでの自分の場に特殊召喚できる！！来い、エルダーワイバーン！！」

LOVサーヴァント - クアール -	2	ATK1000	DEF0
LOVサーヴァント - エルダーワイバーン -	1	ATK1000	
0 DEF600			

この墓地から甦ったエルダーワイバーンの姿に勝舞は首を捻るがすぐにその答えへと行き着いた。

「エルダーワイバーン……？そんなモンスターいつの間に墓地に……！！ッ！そうか！！ライブラリー・オブ・アレクサンドリアの効果で！！」

「そう。ライブラリー・オブ・アレクサンドリア発動後のターンで墓地に送ったのは他でもない、このエルダーワイバーン。そして

「！

そこまで言った千影は腕を横に振り払った。

「君に見せてあげよう！シンクロ召喚の真髄を！！」

千影のこの言葉に呼応してクアールは星となりロキとエルダーワイバーンを導くように天へと舞う。

「7 Lovサーヴァント・ロキと、1 Lovサーヴァント・エルダーワイバーンに、2の Lovサーヴァント・クアールをチューニング！！」

3体のモンスターは10個の星となり、夕焼けに輝きながら眩しく煌く。

「煌く星が、集いてここに地獄へ堕ちた天使を招く。墮天の使いよ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、明けの明星 Lovサーヴァント・ルシフェル――！！」

そして煌く星々が弾けると、天使の輪の代わり換れた角を頭に頂き、漆黒の羽根を飛ばたかせた1人の墮天使が降臨する。

Lovサーヴァント・ルシフェル - 10 ATK? DEF?

逢魔が刻。

陽が沈み夜へと移る、そんな現世と常世が交わる美しくも醜き世界に舞い降りた墮天の使いは、その威容を知らしめていたのだった。

そしてルシフェルを従えた千影はルシフェルのモンスター効果を発動させる。

「Lovサーヴァント・ルシフェル - のモンスター効果！このモンスターがシンクロ召喚された時、自分の墓地に存在する Lovサーヴァントと名のついたカードを任意の枚数、ゲームから除外する！そして除外した枚数分×500ポイントがこのモンスターの攻撃力、守備力となる！！」

千影は墓地から全ての Lovサーヴァントを取り出し、その手に掲げる。

「わたしは墓地に存在する8枚、全ての Lovサーヴァントをゲー

ムから除外！よってルシフェルの攻撃力と守備力は4000になる  
！！」  
千影の手にもつLOVサーヴァント達から力を集め、ルシフェルは  
その身に絶大な力を宿す。

LOVサーヴァント・ルシフェル - 10 ATK4000 D  
EF4000

「だけど、それじゃあ俺のシヴ山のドラゴンにはとどかないぜ！！」  
しかし、攻撃力を4000に上げようと勝舞の言うとおり、勝舞  
の場に存在するシンクロモンスター、LOVサーヴァント・シヴ山  
のドラゴン - の攻撃力4500には届かない。  
だが

「手札1枚をコストにしてリバースカード、発動！！」  
なんの勝算もなしに勝負に出る千影ではない。

「畏カード、サクリファイス！！このカードは発動時に手札を1枚  
捨てなければならぬ特殊な畏。その効果とは自分のライフポイン  
トを1だけ残し、引いた差分を自分のモンスター1体の攻撃力に加  
算！！さらにそのモンスターはこのターン、相手の魔法・畏・モン  
スター効果を受けない能力をも身に着ける！！」

この千影の言葉に勝舞は千影のライフポイントを見る。

「あんたの今のライフポイントは1600……しまった！  
！！」

勝舞が驚きの声を上げるがもう遅い。

「我が魂を乗せて、飛翔せよ！！ルシフェル！！」

千影の言葉と共に千影から飛び出た剣状の物体がルシフェルに突き  
刺さると、千影の力をルシフェルに与えていく。

千影LP1

LOVサーヴァント・ルシフェル - 10 ATK5599 D

その身に主である千影の力を宿したルシフェルがその羽根を大きく羽ばたかせ遙か天空へと舞い上がる。

その手には放電現象を巻き起こすエネルギーの集積体が解き放たれる刻を持っていた。

「LOVサーヴァント・ルシフェルへの攻撃！サンダー・フォース！！」

そして千影の号令の名の下、放たれた電撃の奔流がシヴ山のドラゴンごと勝舞を呑み込む。

「うわああああああッ！！」

迸るプラズマがシヴ山のドラゴンを焼き尽くし、残り少なかった勝舞のライフポイントを欠片も残さずに喰いつくしたのだった。

勝舞LPO

右手の金の輝きも消え、その場に膝をついた勝舞は意気消沈したかのように見えるが

「・・・・・・・・・・は・・は・・ハーツハハハハハハ！！」

いきなり顔を上げ大笑いを始めた。

そんな勝舞の元に両の眸の色を元に戻した千影が歩み寄り、手を差し出す。

「『金輝』、切札勝舞。なかなか面白い決闘だったよ」

勝舞はその手を取って立ち上がると、混じりけのない笑みを千影に向けて放った。

「ハハハハ！俺もだぜ千影！！なあカードゲーム部入る気ないか？お前なら大歓迎だぜ」

このいきなりの勝舞からの申し出に千影は笑みを浮かべると首を横に振る。

「嬉しいお誘いだけど、断っておくよ。私にここで残された時間は残り少ないから彼女達のために使いたいんだ」

その千影の視線の先に、はやなやさつき、葵の姿があった。どうやら武道場内部で起こった果し合い騒ぎは収束したようで千影の視線に気がついたのか3人とも千影に手を振ってくる。

「正義の味方部か・・・まあ残念だけど、俺も世界征服部に所属してるからお前と決闘する環境には申し分ないか」

千影もはやな達に手を振り返すと勝舞に向き直る。

「そうだね。私がいられるのは後半月だけど、その間ならいくらでもお相手するよ」

「それに！そつちはシンク口召喚に関してはセンパイだからな！！色々勉強させてもらっぜ！！」

そう言う勝舞に千影は踵を返すと、勝舞の方に振り返りつつ、こう答えた。

「お手柔らかにね」

そして千影は笑顔で迎えてくれるはやな達の元へと歩いていく。

それは、そんな休日のできごとであった。

ヌーベルトキオシティの何処かにある、秘密の工場。

そこに一振りの刀を持った金髪の男が足を踏み入っていた。

「失礼する」

その男の後ろにはこの工場の主たるウォルフガングの手下たちが死屍累々と積み重ねられていたのだ。

そんな男の存在に気がついていたのかコンソールを弄っていたドイツ人の天才科学者、ウォルフガングが口を開いた。

「おや、ようやく来たか。で、そのような物騒なものをぶら下げてこのウォルフガングに何ようかの？若いの」

まるでからかうかのように語るウォルフガングに金髪の男が頭を下げた。

「ここまでに至る無礼は許していただきたい。何分、あなたの部下

達があなたに合わせてくれないので強硬な手段に打って出るしかなかったのだ」

金髪の男はそこまでいうと、懐からなにかの破片をウォルフガングに投げてよこした。

それを受け取ったウォルフガングは額のゴーグルを眼に当て、その破片をくまなく見ていく。

「ほう。これはアルピストの多層装甲にクレスを基幹にしたクレスフレームか。人型のサイズに使うには強度、軽さ共に最高の素材じゃない」

その破片は何であろう、ガーデニオンの残骸の一部だったのだ。

その素材を一発で見抜いたウォルフガングに金髪の男は頷くと、言葉が続けた。

「ついでには博士に、その素材と同じもので私の鎧を作ってほしい」この言葉にウォルフガングは眉を顰めた。

「若造がこの天才科学者であるウォルフガングに何の見返りもなくモノを作ってほしいと？」

ウォルフガングの言葉に金髪の男は口を開く。

「見返りならある。それは」

「それは？」

少しの間をおき、殺気をウォルフガングに向けて放つと金髪の男は続きを口にした。

「……今、私が博士を切らないことだ」

本気の殺気に当てられたウォルフガングは、その男が持つ歪んだ感情の一端を垣間見た。

それに気がついたのは偏に目の前の人間がウォルフガングと同属だからである。

自信がマッドサイエンティストであるからこそ分かる、歪んだモノどうしの共感ともいうべき感覚。

それが何かしらかまでは分からなかったが、目の前の金髪の男から感じ取れたのだ。





## 第23話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

さて、とうとう第2部も折り返し地点といったところでしょうか。当初から用意しておいた他作品からのゲスト極星は一応、これで打ち止めです。

ほかのモブキャラに関しては他作品からの出向はあるかもです。お楽しみを。

さて、第2部初頭で語られていた『金輝』がついに登場です！

それはなんとデュエル・マスターズ主人公、切札勝舞。しかも初期のMTG仕様であります。

なぜ切札勝舞かと言うと、LOV?で参戦するMTGクリーチャーをどうしようかと悩んだのがコトの始まり。

MTGを使うキャラクターがいたかなあ　　っと思ったところ、頭に甦るビジョンが1つ。それがデュエル・マスターズ最初期の切札勝舞でした。

そして勝舞が使っていたMTGのカードを遊戯王化することが決定したのですが、ここで問題が1つ。

それはLOVに参加していないクリーチャーにもLOVサーヴァントの名前を冠するかどうかです。

ここはぜひぶん悩みましたが、LOV?で参戦確定しているクリーチャーのみLOVサーヴァントとしました。

できれば勝舞の使うカードは全てMTGで固めたかったのですが、純粋な墓地蘇生カードを勝舞が使っているところを思い出せなかったため針刺スリヴァアの蘇生はリビングデッドの呼び声にしておきました。

・誤字を修正しました。

では今回の最強カードのコーナーに移ります。

今回の最強カード『LOVサーヴァント-シヴ山のドラゴン-』

8 ATK3000 DEF2500 炎属性 ドラゴン族 シ

ンクロ効果モンスター

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分の墓地に存在するモンスター1体につき300ポイント攻撃力がアップする。

今回の最強カードは思わずと知れたMTGの代名詞ともいえる竜、シヴ山のドラゴンです。

LOV?参戦おめでとう!!

ステータスは青眼の白龍そのままに攻撃力アップの特殊効果つきのモンスターで登場です。

まあMTGでも赤マナがあればあるぶんだけパンプアップできる大型クリーチャーでしたからね。

その効果をこつして表現させていただきました。

## 第24話【正義の味方部篇】（前書き）

作者からのお願いがございます

感想と評価がなかなかつかず少々さびしく思っています。

ですのでコレをお読みいただいた皆様には是非とも感想 and 評価をいただけるよう、お願い申し上げます。

## 第24話【正義の味方部篇】

今回の物語は、千影がカードゲーム部極星たる『金輝』との決闘を演じているさなかの武道場の中であつた話しから始めよう。

あの時、武道場の中ではやなは因縁ある相手と対峙し、稜はまだ見ぬ世界を垣間見た、その瞬間の話から

話しはさつきと翔子が己の極星と同じ色の『極光』を発し始めたところから始まる。

その初めてみる蒼と桜の魂の輝きに稜は珍しく眼を丸くしていたのだった。

「いくら想いが強くても、あんなモノがでるモノなんですか？」

傍から見れば怪現象としか見て取れない『極光』に稜は久遠の方を見る。

そんな稜に久遠は微笑みながら答えてやった。

「そっか、稜は『極光』を見るのは初めてか」

「『極光』？」

そう聞き返す稜に久遠は『極光』の説明を始める。

「あたしらは勝手にそう呼んでたんだが……極星連中とやりあつてたアノ頃にはよく見たよ」

久遠はそこで一端言葉を区切り、数年前のことを思い出しながら言葉が続けた。

「本気のヤツだけが放つ気迫のような『何か』さ。ま、見るにしても物事の1つにでもある程度の領域まで片足を突っ込まないと見えない代物だけだね」

「普通の人には見えないですか？」

この稜の問いかけに久遠は首を捻る。

「どうだろう。あたしや律が放つた紅や銀の『極光』はたくさんの人が見たつていうから一概には見えないわけじゃないあろうけど・

.....」

そこで考えるそぶりを見せる久遠に稜は1つの仮説を立てた。

「それだけ久遠ちゃんや律兄が輝いていた・・・ということですか？」

歴代最強とも言われた『紅蓮姫』と『銀麗霸』である不破久遠と九行律。

その2人ならば何の心得もない人間にも見える輝きを放つことが出来るかもしれない。そう思つての言葉だったのだが、久遠は苦笑を漏らすだけだった。

「さあてね。あたしのアノ頃は、ただ我武者羅に喧嘩売つてただけだから」

そう言つて答えをはぐらかした久遠は稜に言葉を投げかける。

「でも、稜は見たことない世界なんだろう？」

久遠から投げかけられたこの言葉に稜の体はピクツと反応した。

この稜の反応に久遠は「しかたない」という様な表情を見せる。

「お前に『赤陽』を継がせた新道遙々も手を抜いていたワケではないが全力だったってワケでもない。新旧の極星が本気でやると引継ぎに差支えが生じる場合があるからね」

今まで自分の見てきた世界よりもさらに先があることを知った稜はしばらく考えるように俯くと、その場から踵を返した。

そんな姿に久遠は少し意地悪く口を開く。

「試合にも『極光』にも飽きちゃったか？」

「そうですね。見ているだけは少し飽きたです」

久遠の言葉にこう返した稜は上に来ていたウィンドブレイカーを脱ぎ、タンクトップ1枚になる。

「興味も少し出てきたところですし、いっちょやってみるです」

そして出口に方へと向かおうとする稜に久遠は「そうか」と呟くと、腕に持っていた外套『紅《CRYSOON》』を稜へ投げ渡す。

「それADと同じ素材でできてるから着ていきな。怪我をするのはつまらないだろ」

この言葉に稜は「ふむ」と逡巡すると、サツと『紅《CRYMSSO N》』に袖を通した。

「　　つまらないのは嫌ですね」

そして、翔子のVSS『桜』のデータ収集を行っているあきの方へと駆け出していくのだった。

そんな自分の想い人の妹御の後姿を見送った久遠は後ろから漂っていたよく知る気配に向けて言葉を放つ。

「さて、そこにいるのは　　和麻だね」

「流石です、師匠」

久遠の言葉に『紅刃』たる武居和麻が片腕を押さえ、よろめきながら姿を現したのだった。

「なあなあ『蒼雷』ちゃん。ちよつとタイムええ？」

『極光』乗せた攻撃を互いに繰り出す本気の勝負のさなかに翔子からかけられた「待った」の言葉にさつきは首をかしげた。

「はい？」

さつきが『巴』を下ろしところで、翔子は『白妙』を肩の収納部分に直すと、今回のこの果し合いの趣旨が何であるかの確認をさつきに取る。

「人に見せるためにウチとバトルしに来たんやったよね？」

「そ、そうです・・・けど」

さつきのこの答えに翔子は観客席へと指を向けながら、続きの言葉を発した。

「それってあそこにおったギャラリーについてことやる？」

そこには

「誰一人おらんくなつとるな」

「ええええええええええええつ！！！」

そう。翔子の指摘の通り、自分の活動を見てくれているはずの稜と久遠が揃って姿を消していたのだった。

この衝撃の事実にはさつきは肩を落としてうな垂れる。

「そ、そんな……。私の戦い……すぐくつまらなかつた……。のかな……。久遠先輩まで帰っちゃうなんて……。……」

まさにOTLとしか形容できないさつきの意気消沈ぶりに今まで戦っていた翔子は苦笑を漏らすしかなかった。

「ウチもがんばったつもりやったんやけどなあ」

うな垂れるさつきに、翔子が歩み寄ると慰めるように頭をなでる。

「まあウチはおもしろかったし。そう気を落とさんとき？」

そんな翔子の心遣いに涙しながらもさつきは頭を下げた。

「……。はい。つきあっていただいてありがとうございます」

「ほな区切りもええし、ウチらも切り上げよか」

もうやることもあるまいと、撤収の言葉を言おうとした翔子だったが、武道場に大きな声が響き渡る。

「くら〜!!」

誰であろう、なんとかティンクルセイバーを着込むことに成功したはやなであった。

「ウチのさつちゃんを泣かせてるのは誰ですか〜!!」

はやなは泣いているさつきの姿に、それが世界征服部のせいだと早合点していたのだ。

「遅くなってごめんね!今、いくから!!」

そんなはやなにさつきが声をかけようとするが

「はーちゃん!!」

翔子の言葉により遮られてしまった。

「……。っ!その・呼び方!？」

かつて呼ばれた懐かしい愛称にはやなは、その時初めてさつきの隣にいた征服部部員の姿を見た。

「久しぶりやね」

はやなの記憶にあるかつてと変わらず明るく、楽しげに手を上げる翔子の姿にはやなを困惑する。



「翔子ちゃんが……なんで……ここに？」

そう。はやなの疑問はもつともだった。

翔子は新体操部所属のはずだ。本来ならさつきと世界征服部が果たし合っているココにいるべき人間ではない。

しかし、目の前に映るのは紛れもなく天羽翔子で、さらに世界征服部の装備であるVSSまで纏っていたのだから。

「そんなん、今来てくれた人に会うためやわ」

はやなと翔子のこの会話にさつきは今までの会話を整理していく。

（え、えーとえーと……？はやな先輩と『桜流』さんはおともだち！？と、いつか今の意味深な会話はもつとふか〜い仲………  
……！？）

そこまで考えが行き当たると、さつきは「やってしまった」とばかりに「あわわわ」と頭を抱えた。

（私つてば、そんな人に果たし状とかを〜！？）

そんな頭を抱えるさつきに翔子は、はやなから視線をいったん外してさつきに微笑みかける。

「『蒼雷』ちゃん。途中までやったけど楽しかったわ。また部活の折にはよろしゅうな」

「あ……え……はい」

「さて」

さつきが返事を返すのを聞いた翔子は右足の腿部分に内蔵されたりポン型T T『紅鶴』を手に取ると

「続きは本命にお相手願おか」

『紅鶴』をしならせて上の観客席にいるはやなへと躍りかかったのだった。

「なっ！？はやな先輩！！」

不意打ちともいべき翔子のはやなへの攻撃にさつきが声を上げるが、それは杞憂に終わることとなる。

翔子が『紅鶴』を振り下ろすタイミングを見計らい、はやなが宙へと舞ったのだ。

そんなはやなの姿に翔子は口元に笑みを浮かべると、今一度『紅鶴』をしならせる。

「ブロッサム・リボン!!」

「プラズマ・リボンっ!!」

しかしはやなも然る者、先ほどの跳躍時に手に取ったティンクルセイバーの武装たる『プラズマリボン』をしならせ翔子の『紅鶴』を迎え撃った。

そして2つのリボンがぶつかり合い、今度はその初撃から『極光』

『桜流』翔子からは桜の花びらが、そしてはやなからは

銀の星の輝きが　　が顕現する。

2度、3度、4度　　互いにリボンが振るわれるたびに銀と

桜の輝きが宙へと舞い上がる。

そしてそれから何度か『紅鶴』を振るった翔子が満足げに笑みを浮かべた。

「・・・安心したわ。新体操の輝きも鈍ってへんようやね『星』」

かつての懐かしい自分の二つ名にはやなは「くすっ」と笑みを漏らすと、翔子に言葉を返す。

「『花』も。相変わらず綺麗だね」

『星』と『花』。それはかつて2人の中学生時代、新体操の大会で目覚しい活躍を見せた2人に送られた称号。

このことから察する通り、はやなと翔子はかつて互いに競い合い磨きあった、親友兼好敵手という間柄なのであった。

はやなが衝撃的な再開を果たしている中、その武道場の外では盛大な鬼ごっこが展開されていた。

「Dッ!!」

白い神官のようなVSS『聖』を身に纏ったあきがローラーブーツを高速回転させて、高速で駆け抜けていく。

その後ろを久遠から借りた『紅《CRYMSON》』を纏った稜が

走って追いかける。

この鬼ごっこのルールはこうだ。

武道場の外周を2周回る間に、あきの帽子を取ってゴールできれば稜の勝ち。その条件が満たされなければあきの勝ちというもの。

ローラーブーツを使っても稜を振り切ることが出来ないあきは頼に一筋の汗を流していた。

(流石は陸上部の極星、しかも1年生で極星を継ぐだけの事はある！このコの全力走行で武道場を2週だと『D』は使えて後3回・・・逃げ切れるかな)

そうやってVSSの限界値と走行距離を計算していたあきに距離を詰めた稜がその手をあきの帽子へと伸ばす。

しかし、あきも極星の1人たる者。そうそうやらせはしない。

「・・・おしい」

帽子を掠めた手の感触に稜はそう漏らすと、休むことなく帽子を狙うべく手を伸ばす。

「よ、は！・・・と・・・や！」

短い掛け声と共にあきの帽子に手を伸ばすが、どれもこれも空を切るばかり。

しかし、それも稜の考えのうちだった。

「これで貴女はアウトに出ました。次のコーナーで貰います」

そう。稜の攻撃により、あきがアウトの方に出ていたのだ。

そして稜が走る位置はイン。2人の間にあるわずかばかりの距離はコーナーを曲がる時にはゼロになる。

そんな稜の言葉にあきは不敵な笑みを浮かべた。

「いや・・・コレくらいは」

あきはスピードを緩めずに壁へと突き進んでいくと、大地を蹴り壁へと足をつける。

そして

「Dッ！！」

あきの声と共にローラーブーツが高速回転。そのグリップ力が壁を路

へと変えたのだった。

その大道芸さながらの壁走りに稜は度肝を抜かれる。

「・・・・・・・・・・なんと」

2回目の『D』を使い、稜との間にまた差を広げたあきが後ろを振り返ると言葉を放つ。

「陸上だけとは決めなかったよね」

そのあきの言葉に「む」と唸った稜であったが、その胸の奥に確かに『何か』を感じていた。

「予想外に胸がどきどきするですね」

そんな稜の胸の高まりと共に、勝負は最後の1周へと突入する。

「2周目は飛ばしていいこうか！Dッ！！」

早々に3回目の『D』を使ったあきにしつこく食い下がる稜の姿にあきは笑みを漏らす。

「キミも2周目はさらに本気ってコトか」

「稜はいつでも本気です」

あきの言葉に稜が淡々と返すと2人はまたしても帽子の攻防に取り掛かる。

稜が仕掛け、あきが避ける。時には稜があきを追い抜き、真正面からあきを迎え撃つこともあったのだが、それさえもあきは避けきった。

そしてとうとう勝負は最終コーナーへと差し掛かる。

（よし！ココで最後のコーナーを越えれば残りは直線・・・・・・・・『D』を使えば負けはしないッ！！）

確かに、総合的なスピードでは稜にはかなわないことは百も承知のあきだが、今までの1周と4分の3を走ってきて、瞬間最高速度ならば自分のほうが速いということに気がついていたので。

（ここで決めさせてもらうよ！・・・・・・・・・・って！？）

そして稜との距離を測るべく余裕の表情で後ろを振り返ったあきは信じられないものを見た。

そこには

「……やっつと、いつもの稜の世界です」

稜が足を止めてクラウチングスタートの姿勢をとっていたのだから、それだけではない。稜の身に纏う『紅《CRYSOON》』の裾が空へと舞い上がり、日輪を描くような形を取ると、その周りに赤い光が漏れ出していたのだ。

そして、稜は赤き太陽となってコースを駆けぬける。

そんな稜の信じられない速度を見たあきは表情にはもう余裕の色は見られなかった。

「振り返ってちゃ負ける……！Dッ、マキシマム……！」

あきは『聖』のローラーブーツが出せる最高速度をたたき出すと、さきほど測った距離から逆算し、自分の勝利を確信する。

（あの距離なら振り切れる……！）

そう思ったとき、あきの背中に日輪が煌いた。

驚く間もない。

刹那の瞬間を駆け抜けた稜があきを追い越しながら帽子を手に取ると、そのままゴールへと飛び込んだのであった。

「抜かされた」とあきが認識した段階ですでに決着はついていたのである。

沈み行く夕陽を背に『赤陽』と同じ赤い陽光の華を咲かせた稜が乱れた息を整えていたのだ。

奇しくもこの瞬間が千影がLOVサーヴァント・ルシフェルを召喚した瞬間だった。

再び場面を武道上の方に戻してみよう。

そこでは銀と桜の『極光』が舞い落ちる一種の幻想とさえも思える世界が展開されていた。

その光の中心で踊るように舞う翔子は激闘を演じるはやなに口を開く。

「ウチな、『桜』を継いだんよ！」

そして『紅鶴』を大きくしなせると、それが桜吹雪の奔流となる。

「百華千万・天の川！！」

「知ってる」

そんな翔子の言葉と技にはやなは何ともいえないような微笑を浮かべると、自分へと向かってくる桜吹雪の奔流をかわして翔子の周りに『プラズマリボン』を星の形へとしならせると、力ある言葉と共に解き放った。

「スターダスト・インパルス！！」

「そっか」

避けようのない全方位に張り巡らされたはやなのスターダスト・インパルスに翔子は満面の笑みを浮かべると、星の形を模っていたはやなのリボンに何かがあたり、星の煌きは不発に終わったのだった。「えっ？」

この現象にはなやは自分の技を不発に終わらせた物体を眼で追う。

「牽制のつもりで放つといたんやけど、助かったわ」

その物体、ボール型TT『御衣黄』を手に取った翔子はまるで新体操のポーズのような華麗な姿勢で着地する。

「ボールなんていつの間に……」

「さっきの技の時、死角からこっそりな」

はやなの当然ともいえる眩きに翔子は微笑みながら答えると、はやなにウインクを1つしながら言葉を続けた。

「こっち流やとこんな感じやる？楽しめとる？」

「……こっち流……こっち流……かあ」

その翔子の問いかけにはやなは笑みを浮かべて、その言葉をかみ締めたのだった。

そうして笑いあう2人に、やっと武道場に駆けつけた葵から言葉が放たれる。

「翔子！！なんであんたがソコにいるのよ！！」

この葵の仲良くとは程遠い言葉に翔子は懐かしさをかみ締めるように葵の方をむいた。

「って、なんや。まだ、はーちゃんにひつついとったんか」

未だに何かを叫ぶ葵を意識の片隅に放つてやると、翔子は今一度はやなの方に向き直った。

「うるさいのんも来たし、今日はこの辺にしとこか。これからはよう会えると思うし」

この翔子の言葉にはやなは少し元気な下げに聞き返す。

「あ……また、征服部として……?」

2人が会わなかった1年間を思い返して、再開がこんなことになった翔子ははやなに謝った。

「説明もせんでごめんなあ。つい……うれしくてな」

「私毛」

そんな翔子の言葉にはやなも返そうとしたのだが、はやなの言葉は翔子の抱擁によって遮られる。

「やつぱり、はーちゃんと競るのは楽しいわあ」

満面の笑みではやなを抱きしめる翔子の姿に、額に青筋を浮かべる人間がいたのだが誰であるかわお分かりであろう。

はやなを抱きしめた翔子は、そのままはやなの耳元ではやなに囁いた。

「ウチな征服部の部長さんに教えてもらたんよ。はーちゃんが新体操部に入らへんかった理由」

「翔子ちゃ」

翔子の言葉にはやなは顔を上げる。

「しゃあないわ。アレはしゃあない。……はーちゃんは優しいからな……。けど、知ったら余計一緒にやれへんのが悔しいし、それで決めたんよ」

少し悲しそうにするはやなに翔子はそう言葉を投げかけると、抱きしめていたはやなを体から放して言葉を続けた。

「はーちゃんが来れへんなら、ウチがこっちに来ればええんやつて。そしたらまた一緒や」

翔子の言葉にはやなが笑顔になり、2人が笑みを漏らす中、観客席へと駆け上がったきた葵が息を切らしながらそこに乱入する。

「……翔子、そんな自分勝手な理由で征服部に入ったわけ？」

「早いなあ、葵……」

はやなとの逢瀬を邪魔した葵に翔子は息をつく中、その葵はそんな態度の翔子にブチ切れた。

「はやながどんな想いでアンタに会わないようにしてたか!!」

鼻息荒く、そう叫ぶ葵に翔子は横目で葵を見ながら口を開く。

「それもわかっとなるて」

「ならそんな方法じゃなくても」

それでも尚、翔子への追及をやめない葵に翔子は「それは無理やわ」と言つとその理由を口にした。

「もひとつ理由があつてな。極星としてはーちゃん」

銀星姫』にも会いたいんやわ」

『銀星姫』の、はやなの持つ極星の名前に葵は驚愕の表情になる。

「ツ!!なんで翔子がその称号を!？」

葵の驚きはもつともだ。なぜなら、はやなの持つ極星『銀星姫』はほんの一部の人間しか知らない特別なものなのだから。

しかし、葵の問いに答えずに翔子は観客席から飛び降りると武道場から去つていったのだった。

「今が……そういう星の巡りなのかな……」

そんな翔子の後姿を見ながらはやなは懐から『銀』の極星章を取り出し握り締めていたのだった。

こうして千影と勝舞の決闘の裏側で起こった果し合い騒ぎは終幕し、稜を引き連れた正義の味方部の面々は第4保健室『湊』でADから私服へと着替えを終えたところだ。

「そっか。さっちゃんもがんばったんだねえ」

着替えのさなか、どうして果し合い騒ぎになったのかを聞き終えたはやながさつきの頭を優しく抱きしめた。

「いいえ、そんな!私が無断で勝手なことをやっただけですから……」



それに入ってくれるかもわからないのに………

それでもいじけるさつきに千影が言葉をかける。

「そんなことはないよ。私はちよっとしか見てなかったけど、さつきの『蒼雷』の輝きは見事なものだった」

千影の言葉に続いてはやなも首を縦に振った。

「そうそう。さっちゃんも自分の輝きを信じなさい」

2人からの励ましの言葉にさつきは涙を拭くと笑顔を浮かべる。

「……はい！」

「さて、さつきも持ち直したことだし夕餉にいこう」

「あつ！待って千影ちゃん」

さつきの復活に1つ頷いた千影は『湊』から出ようとしたのだが、千影の手をはやなが握り締めて止めたのだった。

「どうしたの、はやな？」

引き止められた千影は小首をかしげてはやなのほづを見る。

それは共に呼び止められたさつきも同じだった。

「んつとね、千影ちゃんとさっちゃんにはいつとかないといけないコトがあるんだ」

そこまで言ったはやなは服の下から1つのペンダント、『銀』の極星章を取り出して2人に見せる。

「実はね、私『銀星姫』なんだ」

この告白にしばらく固まったさつきだったが、しばらくするとその顔は驚きに染まった。

「ええええええええええええええええええええええええつ！  
！！！！！」

「『銀星姫』？」

聞きなれない極星名に千影が首を捻る中、1人だけヒートアップしたさつきが勢いよく語り始める。

「れいさんには話しかけ聞きました！歴代最強といわれた『紅蓮姫』と『銀麗霸』からそれぞれの色と心を受け継いだ『銀星姫』という極星がいると………！！！」

それからはやなが2人に自分が『銀星姫』を手に入れるまでの経緯を話し始めた。

かつて、試合をしていた不破久遠と九行律の間に勘違いして割って入り、スターダスト・インパルスの元になった新体操の技にして当時の異名でもある『星』を使い2人の試合を止めたこと。

そのことから久遠と律に極星を継いでもらうよう頼まれたこと。

はやなが2つの極星を継ぐことに同意したこと。

律の『銀麗霸』からは『銀』、久遠の『紅蓮姫』からは『姫』を継ぎ、中にははやなが持つ輝きである『星』を置くことにより『銀星姫』という極星が誕生したこと。

そして中学時代に『銀星姫』を継いでしまったため、すでに『桜』がある新体操部には入らなかったことを話したのだった。

「そうか。それがはやなの秘密にしていたことだったんだね」

はやなの話を聞き終わった千影がやっと合点のいった顔になった。

極星で　　しかも中学生当時、歴代最強と言われた2人の戦闘に割って入るだけの実力者であるならば、はやなの人並みはずれた身体能力にも納得がいく。

「このコトを知ってるのは、その時居合わせた葵ちゃんに久遠センパイに律センパイ、るーちゃんやれいさん。それから、ごく一部の人しか知らないことだよ」

ちなみにるーちゃんとは当時の星徒会長であったはやなの姉、鈴鳴るりねのことである。

しかし、ココに来てさつきが首を捻った。

「では、何故今までそのことを秘密にしていたんですか？新体操部に所属はしなくてもここかの部……正義の味方部に所属した瞬間から『銀星姫』を名乗ればよかつたんじゃない……」

そう。新体操部に『桜』があることと、はやなが『銀星姫』であることを隠す関連性がないのだ。

しかもどこの部にも所属していなかった時とは違い、今はれっきとした正義の味方部の部員である。

極星を名乗る条件は整っているはずだ。

そのことを聞かれたはやなは少し悲しそうな顔になると口を開く。

「久遠センパイの『紅蓮姫』にしても律センパイの『銀麗覇』にしても、かなーり曰くのついたモノだったからね。そこに中等部の私が両方とも……しかも最強の称号でもある『姫』を継いじやったから、話すとなしに挑戦者が押し寄せてきたんだよ」

極星の頂点の一角たる『姫』、それが中等部の星徒であるならば野心を秘めた者共が  
新たな『姫』を討ち取れば己が『覇』

に『姫』になれると  
黙っているわけがなかったのだ。

「人の噂って怖いねえー」と語りながらはやなが続ける。

「それを見かねたるーちゃんが私が高等部に上がるまで秘密にしておきましょってコトになったんだ」

「はやな……」

「はやな先輩……」

はやなの悲しげな顔  
折角継いだ、誰よりも辺りを強く照

らすはずだった星が輝けない現状  
に千影とさつきは声を

かけようとすが、言葉が何も見当たらない。

「それから噂は消えてなくなって、私が高等部に上がったんだけどその時のことを考えて『銀星姫』は名乗らなかつたの。それは正義の味方部に入ってもそう  
」

運動大会で好成績が残さなかつたのも、どの部活にも所属しなかつたのも、正義の味方部での活躍をA.Dのおかげだと嘘をついたのも、全ては輝きを発しないための偽装。

しかし、そこで言葉を区切ったはやなは、その顔に笑みを浮かべていた。

「でもね、今日翔子ちゃんと競ってわかつたの。やっぱり全力で自分の輝きを放つのは何者にもかえがたいモノだって」  
笑顔でそう千影とさつきに語ったはやなは窓を開け放つ。

「だからね　　私はあの空へ帰るよ」  
夜空に輝く星々の中、ひと際大きく、そして強く輝く星に手を伸ばしそう言ったのだった。

「何か大騒ぎです」

稜が指摘するとおり、さつきが上げた大声は当然の事だが、外へと響いていたのだ。

さつきの余りの驚きの声にさつきは「とうとう・・・か」と息をつく。

（あのコ、千影君とさつちゃんにいつちやたか）

そんな葵の心情も知らずに都はデバガメの如くウキウキしながら扉に耳を当てる。

「何かすごいコトでもされたのかしら？したのかしら？まさか

ひよつとしなくてもこれは3P!？」

「そんなワケないでしょう!!」

母親から発せられた不穏な言葉に青筋を浮かべた葵はため息をついた。

「っていうか、なんでまだココにいるのか・・・とつとと帰っていいの」

「ひつどーい！都はかわいいコたちとご飯いっしょにしたいだけなのに」

娘からの辛辣な言葉に「よよよ」と泣き崩れる都に葵は「仕方がない」と条件付での参加を認める。

その条件とは

「モデルへのお誘い禁止！写真撮影も禁止！食費は全額都さん持ち！これなら来てもいいわ」

「条件厳しすぎ!!」

あまりにも無体な条件に都はせめて名刺の受け渡しでもと葵に掛け合う。

そんな姿を眺めていた稜に遙々はいつもの笑みを絶やさずに口を開

いた。

「陸上部と兼任はできそうかな？」

そう聞いてくる遙々に逆に稜が問いかける。

「部長……稜が正義の味方部に入っているのか？」

「僕は君に星を継いだものだよ」

いつも笑顔でいるので分かりにくいだが、その表情には確かな力強さがあった。

「……なるほど」

その遙々の言葉に頷き、胸に芽生えた1つの期待感にポツリと自分が常々心に行っていることを話す。

「稜は見たコトのない世界が好きです。ときどきする未知の世界が」

「そう言っつて陸上部に来たねえ」

遙々の言葉に稜は「ふっ」と笑みを漏らすと言葉の続きを述べた。

「だから　こっちの世界も駆け回るですよ」

そんな稜の背中に2つの影が近寄ってくる。それは

「稜さん！」

「よろしくね！」

秘密の話が終わらせたはやな達だった。

はやなとさつきが稜へと抱きつき、稜は「む」っと驚きの言葉を漏らす。

そして最後に千影が稜へと歩み寄ると、右手を稜へと差し出した。

「歓迎するよ。ようこそ、正義の味方部へ」

稜は右と左で抱きつく、はやなとさつきを見た後、正面に立つ千影を見ると笑みを漏らして千影の右手を握り返す。

「……ま、よろしくです」

そして遙々と分かれて、正義の味方部ご一行＋京月都が夕食へと向かう中、不意にはやなが千影に声をかけてきた。

「でも千影ちゃんは本当に凄いね」

「うん？」

何が凄いかいまいち分からない千影に、はやなは笑みを湛えたままいつかの千影が評した自分のイメージの話をする。

「だって、私に会ってすぐに私のイメージを銀の星っていつちゃうんだもん。あの時だけはびっくりしちゃった」

そんなはやなの言葉に千影は笑みを浮かべると、夜空に輝く星を見上げて言葉を紡いだ。

「星っていうのはね、放っておいても輝くものなんだよ。それと『銀星姫』のことはいつ?」

『銀星姫』の公表をどうするか千影の問いにははやなは1つ頷いて答える。

「千影ちゃんがデュエルアカデミアに帰る前の日にするよ。その日を1番特別な日にしたいから」

銀に輝く星の姫君が千の影を敷く姫君の帰還と共に、空へと帰ることを宣言したのだった。

同じ頃、高等部の剣道場に久遠はいた。

なぜこんな時間に久遠がこんなところにいるかと言えば

「お前か、あたしを呼びつけたのは」

そう。誰かに呼びつけられていたのだ。

その呼びつけた相手が久遠の到着に腰を上げる。

「おうよ。伝説の『姫』さんと勝負したくってな!」

誰であるう、VSSの試作量産型であるPSS-001『鉄』を纏った司木であった。

あきに何を頼んだかと言えば、この『鉄』だったのである。

「あいつは役に立ってくれたみたいだな」

司木はそう言うと、その手に持った竹刀袋を久遠へと投げ渡す。

それはかつて久遠が振るい、今は封印した黒塗りの木刀『紅風』と

『紅雪』が収まっているモノだった。

竹刀袋から長刀の『紅雪』、短刀の『紅風』を引き抜きながら司木に問いかける。

「抵抗しない和麻を襲った理由は？」

「その方がアンタの本気が見れると思って  
しかし司木は最後まで言葉を発することができなかった。」

#### 奥義之歩法『神速』

「があああつ！？」

何故なら、久遠が一瞬の間に司木の顎を蹴り上げていたのだから。

(嘘だろ！？ぜんぜん見えなかった！？！？)

司木の驚きは当然のものだった。

何故なら久遠が距離を詰めるために使ったのは御神流が奥義之歩法『神速』。

コレに対処できる者は同じく『神速』を収めたものか、それ以外では久遠の知る限り九行律1人のみである。

「それじゃあついでに、そのリクエストにも応えてやるさ」

その言葉とともに久遠は再び『神速』のモノクロームの世界へと入った。

動けない司木の体に『斬』と『徹』を込めた斬撃を見舞うが、多層アルピスト装甲が引き斬る『斬』を無効化し、クレスフレームが『徹』の内部へと衝撃が至る前に吸収する。

御神流攻撃の法を無効化する『鉄』に改めてADやVSSの性能の高さを久遠は再確認した。

「それ、結構頑丈ねえ」

この久遠の言葉に司木は笑みを漏らすと構えを取る。

「そりゃあ、アンタ用に借りてきたからな！コイツがぶつ壊れるまでつきあってもらうぜえッ！！」

久遠の速度についていけなくても『鉄』が久遠の攻撃を無効化してくれることに気を大きくしたのだろう、そんな司木の言葉に久遠は笑みを浮かべた。

「……そんじゃ簡単には壊れないな？」

その言葉とともに久遠からゆらりと紅の炎が立ち上る。

「よかったね、まだ色褪せちゃいないようだ。紅蓮の姫の『極光』





んはどこがええ？」

「俺は久しぶりに和食が食いてーな。ここ1ヶ月ずっと向こうで洋食ばっかだったし、今は1番に米が食いてえ」

翔子の言葉にすぐさまそう返した勝舞に後ろのほうから夕霞が「では」と言いながら歩み寄る。

「割烹倶楽部などはいかがでしょうか」

この夕霞の提案に他の面々からは異論は出なかった。

「確かにあそこならお値段もお手頃だ」

「ほなら、そこで決まり」

「・・・ええ」

「よしっ！そうと決まればすぐ行くこうぜ！！」

そうして歩き出す世界征服部の面々だったが、翔子が「・・・けど」と夕霞の顔を覗き見ながら先ほどから抱いていた感想を率直に述べる。

「聞いてはいたけど・・・ほんまに印象変わんねんな、部長さん」

そうなのだ。あの氷のような冷たい眸は優しい眸に変わり、研ぎ澄まされた刃のごとき迫力も今の夕霞からは春風のような柔らかさしか感じられなかった。

眼鏡を架けて髪の毛を後ろで1つに結った姿で「そうですか？」と可愛げに小首をかしげる姿は万人の庇護欲を刺激するかのような小動物的な雰囲気醸し出しており、部活動中の夕霞と今の夕霞を見比べてみて同一人物ですと言われるも10人が10人とも首を捻ることだろう。

それだけ人が変わっていたのだ。

「とりあえず動こー。お腹減ったよー」

夕霞の背中を押しながら言ったあきのこの言葉に夕霞も頷く。

「今日は天羽さんも、勝舞君も、あきも、冴も皆頑張ってくれたもんね」

この言葉に、今日の活動に出ていながら何もやれなかった冴が肩を落とした。

「……………ごめんね」

「冴ががんばってないなんてコトないから〜！」

落ち込む冴を必死に励ます夕霞はその顔に笑みを浮かべると言葉を続ける。

「出してくれるだけで感謝してるんだから」

「……………ん」

夕霞の励ましに顔を上げた冴だったが、そんな夕霞に翔子はしな垂れかかるようにして口を開いた。

「夕霞ちゃん。ウチの呼び方だけ苗字やし、さん付けやし、さびしーな」

「あ……………しよ、翔子ちゃん？……………で、いいかな？」

少し自信なさげに聞いた夕霞だったが、翔子はそれに満足する。

「そそそ」

そんな2人のやり取りに、あきは1つ気になることが頭を掠めた。

（そういえば、アレはどうなったのかな）

あきの言ったアレ

『鉄』は完膚なきまでにボロボロにさ

れていたのだった。

そんな『鉄』と同じように完敗を喫した司木は仰向けに倒れながら、未だ体に走る激痛に顔をしかめていた。

「………たく！コレは役にたたねえし……………俺は何もできねえ」

悔しそうに言葉を漏らす司木に久遠は率直な意見を述べる。

「バカを言え。ソレがなきや全治2週間でお前が頑丈じゃなきや全治1ヶ月だ。御神の奥義を受けて尚、そうやって喋れるんだからソレもお前もたいしたモノだよ」

高速の4連撃最後の1撃は確かに『鉄』を打ち抜き、司木にダメージを与えたはずだ。

それでも立つことかなわぬが意識を保っていられるという事は司木も腐っても極星の1人であるということだった。

その久遠の言葉に司木は自分に極星を譲ってくれた先代の言葉を思い出す。

「……………つ、鉤屋サンの言うとおりの女だな」

「鉤屋？　　そうか、『朱』はアイツの色か」

懐かしい名前に久遠が1つ頷く中、司木は先代『朱鋼』である鉤屋辰が言った言葉を言った。

「『姫』はいる場所が違う……………ってな。悔しいが、今のでわかんねえほどバカじゃねえよ」

「……………そうか」

司木の言葉に笑みを漏らす久遠に、司木は久遠に向かって宣言する。

「　　だがな！俺がもうちつと腕を上げたら、その場所に駆け上がるからな！！」

「ああ、来られるならな」

かつての紅蓮の姫は今でも誰かを惹きつけずにはいられない輝きの強さを、その背中で語っていたのだった。

そして剣道場からでた久遠に歩み寄る影が1つ。

「お手数をおかけしました」

それは司木にやられた『紅刃』たる和麻だった。

「お前、保健室で寝てろって言っただろっ？」

司木によって負わされた怪我は決して軽いものではない。今日1日は安静にしていなければいけないはずだ。

「はい。ですが……………」

しかし、そうも言ってられない理由があった。

「味方が帰ってきたので……………その……………」

そうなのだ。正義の味方が帰ってくる。ADから私服への着替えがあるのだ。

そんな中、男である自分がソコにはまるで覗き見のようではないか。

「そうか……………それは悪かったな」

久遠は自分の配慮の至らなさに和麻に謝ると、今ここにいる和麻が

それまでどこに居たのか当たりをつけると一筋の汗を流した。

「じゃ……今のも見てたか？」

一縷の望みを託して和麻に聞いてみるが、人生の神様はどうやら意地悪らしかった。

「はい。その技の冴えもお変わりなく」

ばつちりしつかりと一部始終を見られていたのだ。

（くそ……恥ずかしいところを）

仇討ちとか言ったところを聞かれた久遠は、テレを誤魔化すためにソツポを向く。

「？」

そんな久遠の姿に首を捻る和麻であったが、久遠はすぐさま頭を振るとこれをいい機会だと考えた。

「だが……まあ、ちょうどよかった」

「………は？」

意味不明な久遠の言葉に和麻が余計に首を捻る中、久遠は和麻が心の問えになっている部分を指摘するために先ほどの自分と司木のこゝとを話題に出す。

「真剣勝負でも終わりやあんなモンさ」

この言葉に和麻は久遠が何を言いたいのかを測りかねていたが、次の言葉でその身は引き締まることになる。

「剣士交わすは刃のみに非ず。その信念こそ交わすなり」

ここまで言った久遠は「だからさ」と和麻の心の問えの核心を突く。

「お前も引っぱるなよ。はやなと戦ったコトを」

そう。未だに和麻ははやなと戦ったことを引きずっているのだった。

「ですが！僕は」

それでも久遠に食い下がろうとする和麻に久遠はやんわりと手で制す。

「……和麻。『姫』は絶対そんなコトは気にしないから。紅刃の信念を思い出せていってんのさ」

そして、和麻が少しでも前に進めるように、師であることの努めを

果たすべく言葉を放つ。

「刃が己を曇らせるな」

「はい」

この言葉に和麻は涙を流すと膝をつき、敬愛する師へと感謝の意を示したのだった。

そんな各々が自分を振り返り、新たな道へと歩みだす決心をした日から3日が過ぎたある日のこと。

美咲輝学院の星徒会で星徒会役員総会が開かれていた。

「では、10月の星大祭に向けての実行委員会の予算案、ならびに委員の選出に関して実行委員長の天羽さんに一任します。大変かと思いますが、よろしくお願いします」

「はいな」

なぎなた部部长であり先代『蒼雷』でもあつた水乃緒れいが、星徒会会長として星大祭の案件を翔子に一任し、それを翔子が承諾するのを見て1つ頷くと、さっそく次の議題へと移る。

「次に世界征服部より提出のありました」

ここで世界征服部という名称に反応した人間がいた。

「待って下さい」

誰であろう、その世界征服部部員の八草重だった。

「なぜ星徒会が征服部の活動に干渉するのですか！」

机を苛立たしげに叩く八草重に、これまた同じ世界征服部所属のあきが八草重を宥めにかかる。

「はいはい静粛に！。ボクたち、今は星徒会ね。八草重會計？」

存外に公私を弁えろとの言葉に八草重は言葉を詰まらせた。

「せ、星徒会としての意見だ！」

苦し紛れにそう言い放つ八草重だったが、次の翔子の言葉に眼を見開くことになる。

「これって夕霞ちゃんが言った話やる？自分とこの話だけちゃうから星徒会にって」

「何……!？」

自分は全く聞いていなかった話には八草重は驚きの声を上げる中、今まで言葉を発しなかった夕霞が初めて口を開く。

「……………ごめんなさい。私が征服部部长として相談したんです。皆さんに検討してほしいことがあって」

しかし、この星徒会の役員。翔子や八草重、あきのみならず冴や夕霞と、そのほとんどが驚くことに世界征服部の部員で構成されていた。

ここにいる人間で世界征服部でないのは星徒会長であるれいのみである。

そんな中、夕霞は征服部部长としての激しくも鋭い夏冬のような人格ではなく、穏やかな春秋のような語らいで言葉を続けた。

「征服部員ではなく、星徒の代表である星徒会役員として」

ここで夕霞は言葉を切ると、八草重に向かって謝罪の意を述べる。

「あなたにも事前に説明しておくべきでしたね」

夕霞にこうまで言われては八草重も引つ込むしかなかった。

「……………いえ」

場が落ち着いたところでれいが夕霞に先を促す。

「お話しを続けてください。秋篠副会長」

「では、味方部と征服部の均衡化案について」

夕霞の後ろのモニターに『正義の味方部の均衡化について』とその議題が映ったのであった。

全ての議題を消化し、解散となった星徒会室にれいと夕霞は残っていた。

「八草重君は征服部に入って元気になりましたね」

れいは先ほどの議題で活発に意見を述べていた八草重と昔の八草重を比較すると、そう感想を述べたのだった。

このれいの言葉に夕霞は呟くと、窓から見える八草重の後姿を身ながら答える。

「はい。少し言葉が強いところもありますが、征服部を真剣に想って来ています」

そんな八草重の今の世界征服部での活動にれいは、かつて八草重が起こしたコトを思い起こす。

「料理部を壊滅寸前まで追い込んでしまった時はどうしたのかと思いましたが」

「自分にも他人にも厳しいので誤解をされやすいんですね」

八草重のことを確りと理解している夕霞は、過去に起こったそのコトが八草重の本意でないことを知っているのだ。

そこまで言った夕霞は、今度はれいに向かって言葉を発する。

「私が言うのもなんですが、今回の事は『蒼雷』の新星に誤解されませんか？」

「問題ありません」

夕霞の問いに、れいは眼を閉じると迷いなくこういったのだった。

「聞かれればきちんと説明するだけ。それだけです」

一体、何がこの星徒会役員総会で議決されたのであろうか

「さ〜！みなさんお待ちせしましたっ！！」

そんな動きが星徒会であったとも露とも知らぬ霧瀬はハイテンションになりながら、舞台の司会者のように腕を広げると、後ろに隠したとあるものを他の正義の味方部の面々に見せる。

それは

「稜さんのスーツの・・・おひろめですっ！！」

そう。3日前、稜の正義の味方部参加の報を聞いた霧瀬が舞い上がって、すぐさま作った稜のADのお披露目だったのだ。

だがしかし、霧瀬の言葉と共に出てきた稜の姿は、その身にADを纏ってはいなかった。

「な・・・！？なんで！？なんで！？パーツがめっちゃめっちゃ省かれまくってるの力ナっ！？」

否、纏っていないというのは少し語弊がある。

正確には稜が身に付けていたのはADの下に着込む白のアンダーズーツのみで、体を護るべき多層アルピスト装甲とクレスフレームで出来たADの鎧とも言つべき部分がゴツソリ省略されていたのだ。そんな自分の作ったADを着てくれなかったことに涙を流す霧瀬に稜は淡白に答えた。

「走るのに邪魔なモノをつける意味はないです」

余りにも身も蓋もない言葉に、霧瀬は何とか説得を試みる。

「じゃ、邪魔って!? アレないと危ないし〜!」

「当たらなければどうってことないです」

真理をついた稜の言葉に早くも霧瀬は撃沈させられてしまった。

「そ、それはそうだけど・・・」

しかし、稜は容赦なく次々と注文をつけ始める。

「あ、あとアンダー白なのヤです。稜は赤黒派です」

「でも、ソレだとみんなとお揃いにならないし〜!」

そんな霧瀬の「でも」に対し、稜も「でも」で返した。

「でも、ちーちゃんのは黒ですよ」

「姫宮さんのナイトセイバーは不破さんの『紅《CRYMSON》』と同じで番外位なの!! 稜さんのADは正式に003のナンバーなんだから〜!!」

これは霧瀬の言うとおり千影のナイトセイバーのコードは『Active Dress - Type Demon Bane - 00Ex』、はやなのティンクルセイバーやさつきのアークセイバー、今稜が来ているADとは違う扱いであるのだ。

だが、まだまだ稜の注文は続く。

「あと全身フィットだときゅーくつなので、このへん穴開けてください」

アンダーズーツの腕の部分を摘んで語る稜に、霧瀬は血涙を流さんばかりの悲鳴を上げる。

「更に防御力を落とせと!?」

あまりにもあんまりな注文の数々に霧瀬はるーと滂沱のごとく



涙を流す。

「せ・・・せっかく3人目が入ったって言うからベースだけでも  
仕上げてきたのに、なんたる無体な名さりよう・・・」

そんな霧瀬の姿に稜は霧瀬への理解が及ばないでいたのだった。

「手直しがヤなのですか？」

そう言って首をかしげる稜にはやな、さつき、千影は乾いた笑みを漏らすしかない。

「と、いうか」

「自分のロマンを否定されてるのが・・・」

「ここまでコテンパンにされる藤代教諭も珍しい・・・」  
しかし、こうなっては余りにも霧瀬が不憫なので、3人は稜の説得に取り掛かることにする。

「そくだね、稜ちゃんもウエイトって考えてみたら？」

「そ、そうですね！こーゆーのつけても速く走れたら、きっと外した時にはもっと速くなりますよ！！」

「キャストオフしてクロックアップ　　ってね」

稜の嫌っていた重さを積極的要素として置き換えることで稜の関心を引くことにしたのだ。

そしてコレが大当たり。

「なるほど・・・納得です」

稜の納得の言葉に、霧瀬は稜の説得をしてくれた3人の後ろに後光が見えるようだった。

「3人とも・・・」

しかし、そんな霧瀬に稜は容赦なく今までの注文を総括する。

「じゃあ色と穴と、後ちーちゃんが言っただ軽装モードの追加だけ  
してきてくれればソレでいいです」

「そこはやっぱりダメだしなのね・・・ってか注文増えるし!？」

千影の言った言葉が藪蛇について霧瀬の仕事が増えることになった

のだが、そこは必要経費と割り切ることにしたのだった。

「あはは……じゃあしばらくは活動おあずけだね〜」  
しかし、この言葉に稜は首をかしげる。

「なんでです？色と穴と、ついたものを外すだけの機構くらいなら明日にはできてこなければ変です」

稜の「簡単な仕事なのに、なんで早くできないですか？」との言葉に霧瀬は拳を握ると、ありったけの力を込めて魂の叫びを放った。

「あー！？結構科学的な『何か』がまつてるんですが〜！！」  
力の限り叫んだ霧瀬は一旦肩を落とすと、稜の注文をどうやって解消しようか悩みに悩む。

「今日もまた徹夜すればなんとかなるかしら……」  
ん？」

そこで霧瀬はPCのメールボックスに1通のメールが入っていたことに気がついた。

PCを操作してそのメールを開いてみる。

『メールを受信しました。 件名は「星徒会より」』

「星徒会が？読んでみて」

星徒会が何の用かとも思ったがとりあえずPCに内容を読み上げるよう言った。

『はい。星徒会より、正義の味方部へ』

そしてPCがそのメールを読み上げていく。

『前略、日頃におかれましては活動の報せ多くめざましい限り。今回はその活動に際しまして、世界征服部からの提案を受けて次回活動時より 正義の味方部には《活動制限》が毎回適用され

ます。なお制限は星徒会が毎回、無作為に選出し制限条件をその都度放送しますので……』

まだ内容を読み上げるPCだったが、フラストレーションを溜まりに溜めた霧瀬はもう我慢の限界だった。

「き……今日は……なんだっていううのよおおおおおおおっ！！！！」

まるで火を噴く怪獣の如く「ぎゃおおおおおおおつ」と叫ぶ霧瀨に皆は少し引き気味になる。

「せ、せんせーが……」

「いや、今回ばかりは仕方ないかな」

はやなと葵の言葉に他の面々は頷くと、一応霧瀨は置いておくとして、星徒会が出てきた『活動制限』の話に移った。

「でも、なんでいきなりこんなルールが？」

「謎です」

「しかもあつちからの提案を受けてなんて……」

「でも、星徒会長さんのサインもついてるし」

そこまで皆が語ったところで、今まで黙して語らなかったさつきが勢いよく立ち上がる。

「私……私が明日までにちゃんと聞いてきますから！」

「あつ、さつき！」

千影の呼び止める声もむなしく、走って『湊』から出て行くさつきの姿にはやなは首をかしげた。

「どうしたのかな、さつちゃん？」

「そっか」

そんなはやなに、葵は1つ思い当たることがあったのだ。

それは

「今の星徒会長は先代の『蒼雷』だわ」

星徒会室で夕霞の言っていたコトとはこう言うことなのであった。

その夕方、高等部敷地内にある天宮流長刀道場で、さつきはれいに『活動制限』のことを問い詰めていた。

「れいさん！あれはどういうことなんですか！」

さつきが問い詰めに来ることを予てより予測していたれいは、ただ静かに口を開くだけだった。

「……『活動制限』のことですね」

「そうです！なんで征服部にだけあんな有利になるような決まりを……私……れいさんは　星徒会長は味方部を応援してくれていると思ってました！！」

あまりに淡々としたれいの物言いに、さつきはれいが裏切ったと感じたのだが、それは早計というもの。

「もちろん応援しています」

さつきの前にちょこんと座ったれいは、本日の議題で話し合われたことの自分の意見を、誤解を恐れずに率直に述べた。

「新興の部には頑張っしてほしい、さつきお嬢様がいる部ならなおのことです……けれど、あなたがいるからと特別にひいきはいたしませんし、新興の部なのは征服部も同じ。活動は活発で、部員もよく集めていますし頑張っています」

このれいの後ろの言葉にさつきは大きく首を縦に振りながら、攻勢にでる。

「そうです！征服部は9人も極星がいるんです！！それに対して味方部は3人の極星に、あと10日で帰ってしまう千影さんだけ……

……今回ののは　」

そう。現状でも擁する極星の数に不公平さを感じていたさつきには、今回の事はあまりにも眼に余ることだったのだ。

そんな正論をぶつけるさつきに対してれいは、ただ静かに言葉を紡ぐ。

「……今まで、征服部の活動回数は55回。ですが成功回数は0回……。これは味方部の成果とも言えますが、ここでは征服部の士気も下がろうというものです」

それでもなお、「でも」と反論を述べようとするさつきだったが、次のれいの言葉に「えっ」となった。

「私は正義の味方部と世界征服部の関係は素晴らしいと思います。

部活同士お互いを競い合う相手として、それぞれの信念が互いを磨き上げる。それは極星が持つ真実の光『極光』を導き出すほど」

れいは翔子から聞いた先日の活動を思い起こしながら、さつきに問いかける。

「それはあなたも『桜流』との折に感じたはずです」

「あ……」

そのれいの言葉に目から鱗が落ちる感覚を覚えるさつきに、れいは言葉を続けた。

「これが一方的ではこうはいかないでしょう。ならばこそ、規律で均衡を量り、調整を課することでさらなる研鑽が重なり……それで星徒達がより輝くのであれば　　星徒会長としては、それを願うのです」

星徒会長としての想いを全て語り終えたれいに、さつきは感銘を受け、涙を流す。

「す、すみません……！私、全然れいさんの気持ちとか……」

それと同時に、さつきは己の思慮のたかなさに自分を恥じていたのだった。

「泣かないでください、さつきお嬢様」

そつと、さつきの涙を拭うれいに、さつきは今の自分の精一杯の答えを返した。

「私……私、がんばりますから！」

そんないじらしくも可愛らしいさつきの姿に、れいは個人としての本音を語る。

「……どの部活も応援しているといいましたが、それは星徒会長の私。師の孫であり、妹弟子であり、我が『蒼雷』を受け継いだかわいい後輩を、『水乃緒れい』としての私は応援しておりますから」

つと立つことがあったと、翌日にさつきは、はやなや葵、千影に恥ずかしいところは端折って語ったのであった。  
だが

「ま、だいたいそんなことだろうとは予想してたけどね」  
葵の口にしたその言葉にさつきは眼を点にする。

「え………?」

「久遠センパイたちも同じようなこと言ってたしね」  
続けてそう言っただはやなにさつきはシユンとなった。

「すみません……私だけ勝手に勘違いして飛び出して………  
……」

「私達はのんきに構えただけだしっ。ただ、水乃緒センパイには私も昔からお世話になってるからね。理由もなしに無茶を言う人じゃないかなとは」  
自分と違い、きちんとれいの事を認識していたはやなたちに、さつきはズーンと暗い影を背負う。

「やっぱり私だけ空回り………  
そんなさつきの姿に、千影は笑みを浮かべるとさつきの肩を叩きながら口を開いた。

「でも、ちゃんと話して理解しあえたのでしょうか。私はさつきのそう言うところに好意を覚えるよ」

「千影さ〜ん」

千影の慰めに感謝の涙を流すさつきに、はやなは続けて言葉を発する。

「それに逆に考えれば……制限とかあるのもさ、それはそれで正義の味方っぽいんじゃない?」

この言葉にさつきは目を輝かせると、はやなの手を取った。

「そのとおりです〜!」

「やっぱり〜?」

2人が手に手を取ってはしやぎ合う姿に葵は「やれやれ」と首をすくめる。

「まあ、後は制限の重さ次第かな」

葵に言葉に千影も頷きながら口を開く。

「星徒会が決めるとは言ってたけど、どんなのがくるかによるね……」

「……」

「確かに……」

そう言つて第4保健室『湊』に入る4人だったが、そこには今日はいるはずの霧瀬の姿は見当たらなかった。

「あれ？まだ先生いない」

部屋を大きく見渡すはやなだったが、すぐにそうと言つていられない事態へとなる。

『へーイ！放送部より緊急放送だぜっ！！いつもどおりだがあいつら、世界征服部の活動だっ！こつちもいつもどおり頼むぜいっ、正義の味方部！！』

そう、毎度の事ながら世界征服部の活動だ。

ヒップホップ調に語られる放送部員の放送に葵はすぐさま、ADを取り出すためのパスワードを入力する。

そして展開した壁からせり出したADのケースを取る3人に今回の活動現場が知らされた。

『活動場所は学生寮西食堂《青龍》だっ！』

「つて、遠いね!？」

「走つても20分はかかります」

学生寮は居住区

高等部とは真反対の位置にある。

さらに件の『活動制限』が続けて放送された。

『そして、今回から味方部には《活動制限》が適用される！今回の制限内容は  
活動時間30分！！』

遠い場所の上に制限時間まで設けられたことに葵は驚きの声を上げる。

「なっ!？」

『これを超えても征服部が活動を続行中の場合、征服成功と判定される！判定は現場に担当の部が……』

未だに諸々の注意などが流れるが、それを暢気に聞いている暇がなかった。

「着替えてたら5分も活動できません！」

「は、走りながら着替えるとか？」

「無理です〜！」

あまりにも難易度の高い今回の活動に、はやんとさつきはだいぶテンパっているようだ。

「とにかく、急いで着替えよう！」

千影の声と共に3人はそれぞれ備え付けられた更衣室へと入っていたのだった。

ところ変わって、世界征服部が活動している『青龍』では極星も副部長である九郎もおらず、意外な人物達が士気をとっていた。

「ふっ」

その人物2人が笑みを漏らすと、自分達が勧誘し、かき集めてきた部員達に号令を飛ばす。

「では下っ端ども……」

「征服の証を立てろー！」

それは誰であろう、今まで世界征服部の下っ端部員AとBであった新井と松田だった。

「それを守りきれば我らの勝利だー！」

浅風隊の隊長格として異例の出世をとげた新井が、気分よさげに胸をそらす。

「ん〜気分がいいぜっ！人の上に立つつてのはよ……」

しかし、それにしても今回の活動に極星を1人も投入しなかった世界征服部に首を傾げそうになるが、それにはタネがあつたのだ。

「Y？ 状況見えてるか。お前たちのくれた情報どおりだな」

なんと事前に、今回の正義の味方部の『活動制限』の情報を仕入れていたのだった。

そうすることで正義の味方部の到着予定時刻を逆算、今回の活動に極星は不要ということになったのだ。

その情報ソースである八草重隊の1人は松田からの通信に笑みを持





しかし、何かこの現状を打破できる秘密兵器でもあるのか霧瀬は葵と千影を手招きした。

「ふふ、こつち来て来て」

そして、確かにソコには秘密兵器は存在していたのだ。

「どもです」

赤いA Dを纏う稜が、その着込んだA Dの各部位をチェックしていたのだった。

「って、稜ちゃんのスーツ！」

最後に稜に渡すパーツを取り出しながら、葵の叫びに答える霧瀬。

「ええ、ええ。完成させましたとも……！全部要求もばつちりのんでね……！！！」

昨日今日と徹夜を重ね、ついに完成したActive Dress-003『ソルセイバー』の最後のパーツであるエナジーファイラーを手にとると、それを稜へ投げ渡した。

「稜さん的には時間どれくらいかかりそう？」

「14分ちよいですかね」

直接走つても、かなりの好タイムを答える稜に霧瀬は笑みを浮かべると、さきほどレクチャーしたソルセイバーの機能の1つを挙げる。

「さつき教えたアレなら12分くらいになるかもね」

「了解です」

霧瀬から受け取った2つのエナジーファイラーを肩部分にはめ込むと、稜はクラウチングスタートの姿勢をとった。

「ストリーム・フィン」

稜の言葉と共に腰の後ろに垂れ下がっていたオーバースカートの機械的で鋭角的な形に変わると、エナジーファイラーをセットした肩アーマーから赤い粒子が漏れ出す。

「ソルセイバー、行くです」

そしてその言葉と共にスタートを切った稜は一迅の赤き風になると、その背をみるみる小さくしていったのであった。

肩部アーマーが稜に与える推進力、計算されつくした空気抵抗が稜をさらに速い世界へと加速させる。

(これは驚きです。まさか、これほどのモノとは………む) ソルセイバーの出す、自分の限界速度を超えたスピードに稜が舌を巻いていると、上空に踊る影が出てきたことに気がついた。

それは

「中々速いね、稜」

断鎖術式番号『セレス』と式号『ウイングダム』を駆って、これまた稜と同じ速度で走る千影が建物1つを飛び越してショートカットすると稜と並んで走るのだったのだ。

「ひよつとしなくてもちーちゃん、稜より速いです?」

聞けば千影のADはD・ホイールでもあると聞く。

それならば身体能力以前に千影は稜よりも速いことになるが、その稜の言葉に千影は首を横に振った。

「いや、流石に『赤陽』の速度には敵わないよ。ナイトセイバーが最高時速250kmを出せるといっても、それは騎乗決闘の時だけだし、このモードではこの速度が精一杯」

「ふむ……。それでもたいしたものですよ」

しかしながら、最高速度でなくともソルセイバーを纏った『赤陽』である自分に追隨できるのだから、稜の言うとおり大した物である。そう言われた千影は笑みを漏らすと、目の前に迫ってくる建物

幼等部校舎を見て1つ閃いた。

「よし、ちよつとズルをしよう」

「ズルですか?」

千影の言葉に稜が首をかしげる中、千影が稜に向かって右手を差し出す。

「うん。少々お手を拝借」

なにを千影が企んでいるのか分からない稜は「?」となりながらもその手を握ると、千影は両脚に備え付けられた2期の断鎖術式の力を解放した。

「では、征くよ！  
ンダム』、力場開放！！」

断鎖術式番号『セレス』、式号『ウイ

【Ignition】

千影の左耳に備え付けられたネクロノミコン機械言語新訳版が千影の命に応えて、千影の足元の時空間歪曲を大きくする。

するとどういうことであろうか、千影と千影に手を引かれた稜は空を飛んでいたのだ。

否、飛ぶではなく跳ぶと言った方が正しいだろう。千影が稜に追いつくにも使った建物を上を跳ぶ、前代未聞のショートカットに稜は眼を白黒させていた。

「……………もう、なんでもありませんね」

空中でさらに2度、3度と足元に時空間歪曲場を発生させ、その反発力を利用して跳ぶと、墜落することなく幼等部の校舎を跳び越えた千影と稜が地面に着地する。

「やっぱりちーちゃんはたいしたものですよ」

稜が未だに感じたことのない世界をいとも簡単に感じさせてくれた千影の姿に、稜は羨望の視線を向けた。

そんなこそば痒い稜の視線に千影は笑みを漏らす。

「そうでもないよ。ここから先は平地を進んだほうが速いから、手を離すね」

そして、2人が手を離し居住区の中を疾走して行く中、それは見えただ。

学生寮の西側入り口      ここを入れれば食堂『青龍』はすぐそこだ。

「よし、8分32秒！クーガーじゃないけど世界を縮めたね」

「あつ。その言葉、稜も貰いたいです」

他愛のないやり取りと共に2人は『青龍』に設けられたバリケードを蹴り飛ばすと、急制動をかけ、減速する。

「なにっ!?!?」

「速すぎるぞ!?!?」

千影と稜の余りにも速すぎる登場に新井と松田、他の下っ端共が口々に驚きの声を上げていた。

「って、ちーちゃんは分かるとして」

「お前は誰だ!？」

とりあえず、新井と松田が発した一応のお約束に稜は、ただ淡々と答える。

「正義の味方部新入部員、ソルセイバーです」

そして再び、ストリーム・フィンを展開させると、肩部分アーマーのエナジーファイラーからのエネルギーを、両手に取り付けられた大型の籠手型スタンデヴァイス『シャイニングハート』へ廻した。

「では 正義の味方部、活動開始・・・です」

この言葉と共に稜は世界征服部浅凧隊の下っ端共の中に突っ込んで行く。

「バカな!!」

「1人で呐喊とは こっちは人数で押しつぶせ!!」

新井と松田の命により、浅凧隊の下っ端が次々と稜へと襲い掛かるが、彼らはまるつきり遅かった。

「いち・・・に・・・さん!」

稜のカウントと共に『シャイニングハート』を押し当てられた浅凧隊の下っ端が次々と倒れて行く。

「し・・・ご・・・ろく・・・しち・・・はち・・・くつ・・・  
・・・!!」

時間にして5秒もなかったであろう、既に浅凧隊はその戦力の半分以上を稜1人にやられてしまったのだ。

「ソニック・ヴィジョン・・・見えないでしょう?」

余りにも余裕綽々といった稜の言葉に新井と松田は背中にいつもの感覚を覚えてしまった。

何であるう『敗北フラグ』というやつである。

「くっ!こうなったら!!」

「せめて、はーちゃんの到着まで持たせてやる!!」

こうなつては仕方ない。

2人はせめて、はやなに介錯してもらおうと間違つた方向へ奮起するが

「私を忘れてもらつては困るね」

初登場である稜の速さとインパクトが強すぎて千影のことを忘れていた2人は、千影がいたことを思い出すと顔を輝かせた。

「おお！そう言えばちーちゃんがいるではないか！！」

「ならば！我らがすることはただ1つ！！」

そこで言つた2人は先ほどまでとは打つて変わつて、自分から飛び出して行く。

「浅凧隊、突撃iiiiiiiiiiiiッ！！！！」

何がなにやら分からぬが、隊長が突撃をかましては下っ端もついで行くほかしかなく、10数人の浅凧隊残存兵力が全兵力を持って、千影に呐喊していった。

「はい、残念でした。私がさっきまでの大きな隙で何もしていません。つたとしても？」

千影の謎の呟きと共に浅凧隊の面々は自分の体が何かに阻まれ、動きを封じられたことに気がつく。

「な！？これは！！」

「いつたい！？」

千影と稜、浅凧隊をはさんで張り巡らされた紅い蜘蛛の糸に浅凧隊は囚われていたのだ。

「先ほど稜が君たちの目を引いてるときにパパッとね」

姿を見せたその紅い蜘蛛の糸は千影の『レクサス』から伸びているのが分かる。

「では、世界征服部の諸君。おやすみ」

この言葉と共に『レクサス』から伸びる糸を弾くと、それに反応して電撃が放たれたのであつた。

『ぐぎゃあああああああッ』

断末魔の悲鳴を上げて浅凧隊は全滅となつたのであるが、新井と松

田は千影にやられたことに嬉しそうな顔で倒れ伏していたことを追記しておこう。

「っと、活動終了。活動時間20分07秒」  
浅凧隊が立てた征服の証を手に取りながら、そこにカウントされていた時間を読み上げる千影に稜が少し嬉しそうな顔で口を開く。

「世界を縮めてしまったですね」

その笑顔は本当にささやかなものであったが、千影は彼女の中に煌く赤い太陽をみたのであった。

## 第24話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

今回の前半は、前話のB面的なお話と相成りましたkureiです。しかし、この話をどうしようか大いに悩みました。

なぜなら、はやなが何故『銀星姫』を隠しているのかの秘密が単行本ではまだ明かされておらず、稜の初活動も最初の保健室から走り出す場面で終わっていたのです。

コミックREXの連載分を読んでいない私にとっては、その後の展開がどうなっているのか分からずにどうするか非常に悩みましたが、ここは今まで出ている3巻の単行本からの推測と、前作である同人誌版ティンクルセイバーから稜の場면을引用させてもらう形の路線に入ることになりました。

あと、稜のADには原作にない機構を備え付けるつもりなのでお楽しみを。

今回はロリルルと千影君の決闘をお送りしますので、これもwktkしながらしばしのお待ちを。

今回、決闘はありませんでしたが、珍しく今回の最強カードのコーナーはありますのでどうぞ。

今回の最強カード『LOVサーヴァント・極楽鳥』

1 ATK0 DEF500 光属性 鳥獣族 チューナー効果  
モンスター

1ターンに1度、手札からカードを1枚捨てることで発動。

自分の墓地に存在する 4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたモンスターは攻撃できず、生け贄にすることもできない。



この効果で特殊召喚されたモンスターはターンエンド時に墓地に送られる。

これじゃあ前回の最強カードのコーナーだよとのツツコミもなんのその！前回、シヴ山のドラゴンとどっちを出すかで迷った極楽鳥を今回、紹介させていただきます。

MTGではタップすることで全色のマナの内1つを生み出せる重要なマナソースとして活躍したクリーチャーであります。

その効果はチューナーモンスターとしては破格の性能。

手札に 4のモンスターがあれば、それを捨ててそのまま特殊召喚し、 5シンクロモンスターをシンクロ召喚という流れに持っていくます。

本来ならば切札勝舞が使わずに黒城凶死郎が使ったカードでありませんが、この小説では勝舞の切札として勝舞を支えることでしょう。

## 第25話【正義の味方部篇】（前書き）

作者からのおねがい

皆様からの感想と評価こそが次の作品への活力です。

厚かましいかとは思いますが、読み終われましたら是非とも感想  
and評価くださいますよう、皆様をお願い申し上げます。

## 第25話【正義の味方部篇】

稜の初活動から1日が過ぎ、今日も今日とて正義の味方部の面々は昼休みを満喫していた。

「おやつ おやつ 食後はおやつ」

「こらこら、はやな。廊下を歌いながら歩かないの」

歌いながら歩くはやなの姿を苦笑しつつ、そうたしなめる葵にはやなは笑顔で答える。

「だって、今はおやつの気分なんだもん」

そこで指を口にあて、「なにがいいかなあ」とはやなは頭に浮かんだメニユーとソレを扱っている店の名前を挙げて行く。

「『扇屋』の和風クリームパフェがいいかなあ。『Zakuzaku』フルーツボンボンもいいかなあ……。『ドナ』の焼きたてシュークリームも捨てがたいよねえっ！『corocoro』のハニークロワッサンもいいかなあ……。ああっ！サクサクしてるなら『デューイ』のピッツアがいいな！！むしろ『十国堂』の浜塩ラーメンでもお」

「途中からデザートじゃなくなってるから」

はやなにツッコミを入れる葵の姿に2人の隣を歩いていたさつきは笑みを漏らしながら、はやなの挙げた料理の数々を思い浮かべた。

「はやな先輩が話していると、どれも食べたくなくなっちゃいますね」  
そんなさつきに葵が注意を喚起する。

「さっちゃんも、はやなに引っ張られちゃだめよ」

「そうだね。あれだけ食べれば、はやな級の胃袋でない限りブーデー確定だからね」

葵に続いて千影から放たれた一言に、さつきは自分の太ったイメージを想像すると顔を青くした。

「ぶ、ブーデーですか!?!?.....それは困りますね.....」

「……………」

「まあ、はやながたくさん食べるのは周知の事実なので置いておくとして、どこで食べる?」

千影のこの問いに、今まで黙っていた稜が勢いよく口を開く。

「今日はプリンです!」

「稜さんは今日はプリン気分ですか?」

このさつきの問いかけに、さらに稜は力強く答えた。

「はい。むしろプリン祭りです」

そうやって語る稜のバックに燃え盛る『何か』が見える。

「お祭りかあ……………。それじゃあソコソコのプリンじゃだめだねえ。うーん……………」  
『QJ』のプリンパフェならポリュームがたあっぷりい」

「クリームブリュレ系がよければ……………」  
『トリア』とか?」

「私は『山猫堂』のたまごプリンを推します」

「『トワの空』系列の洋食屋『クラウソラス』も中々、美味しいプリンの創作デザートを出すよ」

はやな、葵、さつき、千影の順番で話された各々のトビつきりの店のプリンに稜は少し悩むと、千影の方を見つつ答えた。

「稜的には、ちーちゃんの言ったお店が引かれる雰囲気です」

この稜の答えに、はやなも飛び跳ねながら賛同する。

「あああつ!そこは私もチェックしてた!いこいこ!」

他の皆からも反対意見はせず、行く店は『クラウソラス』と相成った。

「じゃあ、いつものアレが活動しないことを祈りつつ」

しかし、そんな葵の祈りも天には届かなかったようだ。

『放送部からの緊急放送!放送部からの緊急放送!』

スピーカーから流れる、放送部員からの放送に正義の味方部の面々は「はっ」と顔を上げる。

『現在、世界征服部が洋食屋クラウソラスにて活動を開始!正義の味方部は活動を開始してください!』  
なお、今回の《活動制限》は決闘者限定!

繰り返します、今回の《活動制限》は決闘者限定!！」

前回から適用された『活動制限』が述べられると、さつきは苦しい表情を浮かべた。

「コレは……実質の人数制限ですね」

「正義の味方で決闘者って言ったら千影君だけだもんね」

そう言った葵も「コレは少し厳しいか」と漏らす。

「とにかく、一応私達も着替えていこう!」

はやなの言葉と共に4人が走り出そうとするが

「ちーちゃん」

地の底から響くような稜の声に皆は足を止めざるを得なかった。

「活動できない稜のかわりにプリンの平和を頼むですよ」

未だに顔を伏せた稜が、眼を濁らせながら千影に言った言葉に他の皆は冷や汗を流す。

「りよ、稜さん……」

「プリンが絡むと稜ちゃん、人格かわるねえ……」

さつきとはやなの言葉にただ頷くしかなかった葵と千影であった。

そして第4保健室『湊』に到着した面々を待ち構えていたのが正義の味方部顧問、藤代霧瀬であった。

「来たわね、諸君! 今日もよろしく……って、活動できるのは姫宮さんだけだけどよろしく頼むわよ!！」

「了解です」

嬉しそうに千影に指示を出す霧瀬に葵はいつもの事であるが頭痛を覚える。

「ってか、一応相手は悪いやつなんですから、喜ばないでくださいよ……」

しかし、霧瀬にも浮かれる理由というものがあつた。

「だってえ、新しい機能つけちゃったんだもん」

この言葉に稜は期待を込めて霧瀬に質問をぶつける。

「ビームとか出ますか?」

「ぐつ、それはちよつと……」

「空は飛べますか？」

「そ、そつちも難しいなあ……」

この霧瀬との問答に、稜は少し失望の色を浮かべた。

「大した機能ではないということですね」

「しょ、しょんなあああああつ！！」

あまりにもあんまりな稜の評価に霧瀬は頭を抱えたのだが、そこにさつきが救いの手を差し伸べる。

「りよ、稜さん。先生もがんばっているんですから」

だが、稜はそう言うことをできる人物を知っていた。

「でもちーちゃんはビームも出せますし、空だって飛べますよ？」

そう。稜が先日見た断鎖術式による宙間跳躍以外にも、原理は秘密だが純粹な飛行や光線も出せると千影に聞いていたのだ。

「ひ、姫宮さんには純粹な科学以外のモノも詰まってるのよお！私も魔術工学は一応修めたけど、姫宮さんの断鎖術式とか召喚術式とかはブラックボックスなんだからあ！！」

そこまで吼えた霧瀬は気を取り直すと、大きく腕を広げて何がパワーアップしたのかを告げる。

「それに今回はADじゃなくて、この部室よーっ！！」

この霧瀬の宣言にはやなは首をかしげた。

「部室……??？」

しかし、どこを見渡しても何かが変わった後は見られない。

『湊』内を見渡し続ける5人に少し気を良くした霧瀬は高々と宣言した。

「バージョンアップしたのはココ！この格納システム！！なんと、音声入力可能になったのだ！！」

擬音が出そうなポーズと共に語られた新機能にはやなは眼を輝かせる。

「なあるほど。呼べば出てくるんですね」

しかし稜は、この微妙な機能に首を捻った。

「それは変更するほどのコトなんですか？」

そこは霧瀬、断として譲れないものがあるといった風に言葉を放つ。

「稜さん、これは正義の味方としては重要なコトなのよ！」

「じゃあ仕方ないです」

あまりにも霧瀬に感化された稜の言葉に、さつきは肩を落とした。

「稜さん、納得早いです……」

「あんまり次元の違う常識教えないでくださいよ」

非難轟々といった葵の視線もなんのその、霧瀬は自信満々に言い放つ。

「特撮は3次元よ！！」

「そ、その辺の問題なのでしょ……」

霧瀬の突飛な発現にさつきが表情を引きつらせる中、千影が前へと進み出た。

「まあ、藤代教諭の妄言は今に始まったことじゃないからね。とにかく早く行って早く終わらせてくるよ」

この千影の言葉に稜は今がプリンのピンチだということを出す。

「そうです。ちーちゃんにプリンの平和をいち早く取り戻してもらわなくては」

「じゃあ、呼び出す掛け声は前のキーワードと一緒に？」

少し期待を込めたさつきの言葉に、稜は少し笑みを漏らした。

「さっちゃんの念願でしたもんね」

稜の言葉にさつきは恥ずかしそうに頬を染める。

「そ、それはその……」

そこではやなが元氣よく手を挙げて、霧瀬に質問をぶつけた。

「日本語でいいんですかあ？」

「モチロン、日本語でOK！各音声に対応させてあるから、4人も呼んでね！あ、できれば4人で一緒に！！」

はやなの質問に答えた霧瀬は子供のように「やってやって」と繰り返す。

そんな霧瀬の姿に葵の頭痛が余計に酷くなったのは当然の事である。

「また細かいこだわりを……」  
葵の言葉などフィルターをかけているかのようにスルーした霧瀬は4人に問いかける。

正義の扉を開く言葉を。

「さあ、君たちの正義はどこにある？」

その霧瀬の問いに、はやなの「じゃあ、せーの」の掛け声に皆が合わした。

「……正義は君の心の中に!!」「」「」

正義の味方が着替えを行う中、洋食屋『クラウソラス』で世界征服部が征服活動を行っていた。

「はっははははは!!この『クラウソラス』は世界征服部が征服させてもらう!浅風、天羽、司木、ゴッドバルト、首尾はいいか?」  
部隊の指揮を執る八草重の気合の入った言葉に

「首尾ついても、味方部くるまで俺達の出番ねーし。ノンビリやればいいんじゃないっすか?」

「確かになあ。それに今日の『活動制限』ではーちゃんと競うことができひんし、相手1人にこんなに人数いるん?」

「それは私も思っていた。千影殿は敵とは言え大恩ある方だ、それを極星4人であたるなどと些か騎士道精神に反する」

「まあ僕は撤退ぐらいでしかお役に立てそうにないのですが」  
それぞれはやる気のない言葉で返したのだった。

こんな様子の4人に八草重は歯噛みする。

「お前たちい……っ!……何故このような人員しかないのだ!？」

八草重の八つ当たりともいえる言葉に浅風が律儀に言葉を返した。

「御堂さんは八草重君を避けていますし、そうすると御堂さんといつも一緒の鴉神さんも付いてきませんよ」

この浅風の言葉に翔子も続く。

「それよかだいぶマシな面子ちゃうん?ドクターにしてもグッピ―



にしてもワンマンアーミーが基本みたいな人達やし、よっぽどのコトがない限り団体さんで活動ってことはせえへんやろ」

ドクターとは『緑狂』たるウエスト3世、グツピーとは『灰速』であるクーガーの事で、クーガーが自称しているグッドスピードを縮めた翔子式の愛称の事だ。

そして翔子の言うとおり、確かにウエスト3世やクーガーが立派な団体行動を取れるとは思えない。

「切札勝舞は今まで学院にいなかった分、カードゲーム部での活動に精を出していることだしな。もう少しコチラには顔は出せまい」  
止めにジエミアも『金輝』たる切札勝舞の現状を語ったのだった。そこまで聞いた八草重は苦虫を噛み潰したような表情をすると、「では」と浅凧に問いかける。

「くっ……！そうだ浅凧、お前のところのバカ2人はどうした!？」

「バカ2人というと……ひよつとすると新井君と松田君のことですか？」

「ひよつとしなくてもそうだ！まあ能力は貴様達に大きく劣るが、あの情熱だけは見事なものだからな」

確かに活動実績を見ても新井と松田の活動回数はダントツだ。

それでも征服成功確率0パーセントで、いても邪魔になるだけかもしれない2人だったが、こと征服部に向ける　と、というか千影に向ける　情熱は八草重も認めないではないのであった。

それに、征服成功確率0パーセントと言うのは征服部員誰もが一律に当てはまるので余り意味を成さないものではあるが　ま  
あ、この話は置いておくことにしよう。

八草重の問いに浅凧は今朝言っていた2人の言葉を思い浮かべながら口を開いた。

「なんでも、駅前に来たスーパーが開店記念で特売中として1000円の予算で1ヶ月の食料を確保しなければならぬ彼らには死

活問題らしく

この浅凧の言葉に八草重は引きつった表情を浮かべる。

「……………月1000円で1ヶ月賄おうという事か……………  
……………どっという食生活だ……………」

しかし、この程度で驚いてはいけない。

「普段はお塩と水だけで生活している日もあるということだ」

続けて浅凧から語られた衝撃の内容に一同は驚きの声を上げた。

「塩に!?!」

「水だけ!?!」

ジェレミアと翔子の驚きの声に続いて、司木が頭に手を当てる。

「あいつら、そこまで金ないのかよ……………」

「驚きの貧しさだな……………」

八草重も2人の余りの赤貧さに若干の同情を覚えたのだった。

しかし、それにしてもである。

「ひゃあー!それでアソコまではしゃげるんやから、どっかに永久機関でも備え付けとるんちゃうん?」

「否定できないところが怖い」

そうなのだ。塩と水だけの生活がデフォルトになっても尚、日々を元気に過ごしているのだから世の中は不思議でいっぱいである。

そこでジェレミアから真つ当な質問が飛び出てきた。

「しかし、何故あの2人にはそこまで金子がないのだ?」

確かに、この美咲輝学院は奨学金制度も充実している学校法人だ。

食うに困るまでの星徒を出すほどではない。

では、何故2人に金がないのか?

答えは単純にして明快なものだった。

「味方部所属の姫宮千影さんのFC運営資金に充ててるんだそうです。彼らは会長ですからね」

この浅凧の言葉に八草重の2人に覚えた同情は木っ端微塵に吹き飛んだ。

「お・ま・え・は！部下の教育からやり直せ！！・・・くっ！  
！征服部には碌な人間はいないのか・・・！！！」

そして、素晴らしい捨てる八草重に翔子や司木から「失礼な」と声が  
上がりそうになった次の瞬間

「そこまでだ！」

『クラウソラス』に凜とした声が響き渡った。

「正義の味方部、ナイトセイバー」

銀の長髪をなびかせ、黒い甲冑を身に纏った千影が『レガリア』の  
一部分を分離させるとそれが展開、さらに分離し2丁の銃の形をな  
す。

「これより、世界征服部の活動阻止に入る！」

トウーソード・トウーガン直伝の二鬪流の構えを取って高らかに宣  
言したのであった。

「この後、戦闘に入ったのですが正義の味方部、ナイト  
セイバーの獅子奮迅の活躍により撤退を余儀なくされてしまいまし  
た」

本日の活動を終えた世界征服部の面々を代表して九郎が夕霞に活動  
の報告を述べていた。

「また征服失敗・・・か」

この夕霞の呟きに、八草重は勢いよく頭を下げる。

「も、申し訳ありません夕霞様！よもやヤツが光学兵器まで装備し  
ているとは思わず・・・くっ！まさか1人の相手に  
極星4人であたり敗退するなど謝って許させることはありません  
が

そう今回の敗因は千影が多勢に無勢と判断して解禁にしたクトウグ  
アとイタクアにあった。

どういう原理か、避けても避けてもしつこく追隨してくる光弾と、  
VSSの防御を抜いてくる光線の火力の前に撤退を余儀なくされた  
のである。

「あはは、本当申し訳ありません」

「わりいっす」

「やく残念やったねえ」

九郎、司木、翔子の余りの反省のなさに八草重は声を荒らげた。

「お前等は今少し反省せんか！」

そして何よりも今回の活動で八草重が我慢ならなかったのはジェレミアである。

「それにゴツドバルト！！お前は明らかに手を抜いていたな！！今回の『活動制限』で相手は決闘者1人だ、お前がヤツと決闘していればその間に征服できたものを！！」

確かにそうなのだ。

相手は多大な火力を有するとはいえ決闘者1人、決闘を申し込まればそれに応えないわけにはいかないのである。

そのチャンスを棒に振ったジェレミアに八草重は腹を立てていたのだ。

「……先ほども述べたが千影殿は大恩ある方だ。それなのに恩を仇で返すようなことを騎士ができればはずがない」

ジェレミアは『クラウソラス』でも述べたことを八草重に返すが、それでも八草重の淀は止まらない。

「お前の騎士道精神はどうでも  
しかし、そこで夕霞から言葉が入った。」

「八草重、いい。活動の成否は気にしなくてもいいと、いつも言っているだろう」

「ですが!？」

夕霞の言葉にくっついてかかる八草重だったが、夕霞は世界征服部の理念を八草重に言って聞かせるように述べる。

「繰り返し、星徒達に理解させるだけでいい。征服する存在がいるということ」

部長であり個人的にも敬愛する夕霞に、こうまで言われては八草重も引き下がるしかなかった。

「・・・・・・・・・・はっ」

だが、夕霞もそんな征服部員の面々に苦笑を漏らした。

「とはいえ、お前たちも成果がでないのは悔しいか」

確かに、征服する存在がいることを知らしめるといのが基本理念だが、こうも失敗続きでは土気も下がるうというものが

いかに正義の味方に『活動制限』という足かせが付いたとはいえ、それで征服が成功するわけではないのだ。

そんな夕霞の言葉に八草重は力強い返事で応える。

「はい！あの正義の味方に一矢でも報いたく！！」  
しかし

「俺は戦えればいいぜ。勝ちほしたいけどな、征服は・・・・・・・・ついでだ」

「ウチもはーちゃんと競れば別に」

「僕は成果を氣に出来るほど役に立てていませんし」

「誇りある勝負事での勝利によつてならば。しかし今回のように一方的なのは私の望むところではありません」

余りにも手前勝手な意見の数々に、八草重は額に青筋を浮かべた。

「お前たち、本当に世界征服部の部員か！？」

特に正々堂々を絵に描いたかのようなジェレミアの意見が一番氣に食わないのは言つまでもないだろう。

そう血氣逸る八草重の姿に夕霞は頭に浮かんだ1つの案を提示する。

「それなら、こう言つのはどうだ？別の角度から征服を考えてみる・・・・・・・・というのは」

「は・・・・別の角度からですか？」

八草重の問いに夕霞は頷きながら翔子の方を見ながら口を開く。

「そうだな・・・・天羽」

「はいなあ！つてウチ？」

条件反射で元氣よく返事してみたものの、いきなり部長である夕霞から指名されたことに若干の驚きが浮かんでいた。

そんな翔子に夕霞は問いかけるようにして聞く。

「お前に何か案はないか？」

しかし、この夕霞の言葉に驚いたのは他でもない八草重だった。

「あ、天羽に指揮権を移せと!？」

そうなのだ。この夕霞の言葉、聞き方によれば八草重の指揮権剥奪にも聞こえるのだ。

慌てる八草重に司木は鼻を1つならす。

「リストラカ」

「貴様あつ!！」

司木の言葉に過剰に反応する八草重を、九郎は宥めにかかった。

「まあまあ、お話の続きを伺いましょう」

八草重も夕霞の話の続きであることを思い出してか、静かになると再び夕霞が言葉を紡ぎ始める。

「勉強でも違う視点からの思考が成果を上げる場合がある。別の意見から案を取り入れるということだ」

「なるほど……」

そんな夕霞の言葉に納得する八草重にさらに夕霞は言葉を続けた。

「天羽は途中からの参加だ。新しい視点から気付くこともあるだろう」

「女性的な視点から物事を見ると？」

夕霞の言葉を総括したジェレミアに夕霞は頷く。

「まあ、そういうことだ」

そこで5人は揃って翔子の方を見ると、翔子は何か考えがあるのかその手を顎に当てていた。

「そうですねあ……案はあるにはあるんですが、ウチ指揮とかとるの性に合わんですわ」

確かに翔子は人の上に立つことは得意と言えず、しかもそんな面倒なことを自分から背負い込むのも遠慮したいと思う人物であったのだ。

「ならば指揮は八草重がとるといい」

しかしながら、この夕霞の渡りに船の言葉に翔子は目を輝かせた。

「ああ、ならアイデアだけお渡しするで」

翔子からの了承の言葉に夕霞は頷くと、八草重の方を向いて次なる活動への命を下す。

「そうか。ならば八草重、次は天羽をブレーンとして作戦を行え」  
ここで翔子は「そうそう」と言葉を付け足した。

「でもウチのその案やと、浅凧君や司木君、ゴッドバルト君の手も必要なんよ」

この言葉に名前を呼ばれた3人は互いの顔を見合う。

「僕は別に構いませんが」

「聞くだけは聞くぜ」

「私も話を聞いてからお答えしよう」

一応3人から、確定ではないが了承の言葉を貰った翔子は手と手をパンツと合わせた。

「んじゃあ、後で作戦会議やね」

「では八草重、天羽、成果を楽しみにしている」

この夕霞の言葉に翔子は初めてタッグを組むことになった八草重に右手を差し出す。

「よろしくな八草重君！」

「ふんつ。言うだけのモノは見せてもらおうか」

そう言い返しながら翔子の手を握り返す八草重に翔子は得も知れぬ笑みを漏らすと、自分の考えた作戦名を口にした。

「せやな、名づけてウチの『放課後ウイスパー大作戦』……」  
頑張ってもらおうよ」

しかし、そんな翔子の発した言葉に八草重はこめかみに青筋を浮かべる。

「な・ん・だ！その胡散臭い作戦名はあああああああ  
あッ！！！」

確かに胡散臭さ炸裂な作戦名であった。

そして、その日の放課後。

翔子が立案した『放課後ウイスパ―大作戦』が展開されていた。それは

「悪いなあ。ちょっと征服させてもらうぜ」

司木が準備中のカフェでウェイトレス嬢の横に立つと、そう囁きかける。

「だ、だめです。そんな」

カフェのウェイトレス嬢は抵抗しようとするが、そんなウェイトレス嬢の耳元にさらに口元を近づける司木。

「俺だって、本当はお前にこんなコトしたいワケじゃねえ」

「……………征服部さん」

いつの間にもやら抵抗することを忘れたウェイトレス嬢は司木に潤んだ眸を向ける。

「燈也だ。司木燈也」

「燈也さん……………」

いつしか、2人は肩を寄せ合っていたのだった。ここで、次の人物に視点を移動させてみよう。

「君よ、美咲輝の柱となれ」

某テニス部部長のような声色で囁く九郎に、別のウェイトレス嬢がおっかなびつくりといった風に聞き返す。

「は、柱ってなんですか？」

しかし、九郎はそんなウェイトレス嬢に首を横に振って微笑みかけた。

「理解できなくていい。感じるんです」

「か、感じるんですね……………」

「ええ。心を楽にして……………。貴女は私のゾーンに囚われているのです」

まるで引力に引き寄せられるかのようにウェイトレス嬢は九郎との距離を縮めていく。

「嗚呼、私を引き寄せてください……………!」

そして2人の距離は0になったのだった。



さて、次行つて見よう。

「主よ」

「あ、主……ですか？」

ジェレミアのいきなりの発現に眼を白黒させる3人目のウエイトレス嬢。

「そつだ。私は私を呼び覚ました主にのみ忠誠を誓つ……。さあ、なんなりと命令を」

まるで忠義を誓う武士か騎士のごときジェレミアの言葉にウエイトレス嬢は少し恥ずかしそうに俯くと、言葉を紡ぐ。

「では……私のハートを射止めてくださいまし」

この願いにジェレミアは口元をウエイトレス嬢の耳に近づけると、ウエイトレス嬢の望みの言葉を言い放つた。

「ふつ、私のグレートアーチェリーを持ってすれば容易いことだ。

ゴールドエンロー・ファイナルシュート」

ジェレミアから嘯きという名の金の矢が放たれ、ウエイトレス嬢の心に突き刺さる。

「はうう……！嗚呼、ここがレジエンドラなのです  
ね」

確かにウエイトレス嬢は輝く黄金郷を垣間見たのであつた。

何か段々頭が痛くなつてきたが、次で最後のようだ。

「お前の望みは分かっている。私に全て任せるがいい。委ねるがいい……。征服される悦びを教えてやろう」

八草重の妖しくも甘い嘯きに、4人目のウエイトレス嬢の防波堤は崩壊の危機に陥る。

「あああ……つ、私……そんなあ……」

それでも、決壊しないウエイトレス嬢に八草重は止めの言葉を嘯きかける。

「されたくないのか？」

コレが決定打だった。

「嗚呼！全て任せてしまいたい……。もつと嘯きかけてくだ

「さあい」

防波堤に入った小さな罅から、大きな穴が開き、そこからウエイトレス嬢の気持ちが一草重へと傾倒していく。

「ぶっ。いいだろう」

そんなウエイトレス嬢の姿に一草重は満足げに微笑んだのだった。

『放課後ウイスペーパー大作戦』、ぶっちゃけて言えばホスト紛いな作戦だったが、コレが中々に正義の味方部に対して効果を発揮する。

「正義の味方部、参上ですっ！」

世界征服部が異様な活動をしていると聞きつけて駆けつけた正義の味方部であったが

「……あ、間に合ってますから結構です」「……」

征服部員4人に囁きかけられたいた4人のウエイトレス嬢は揃ってそう言い返したのであった。

「……と、ワケが分からなかったですが全面的に撤退を余儀なくされたです」

「あんなホスト作戦をしてくるとは……」

活動らしい活動が出来ず、全員が狐につままれたような顔をしながら第4保健室『湊』に戻った正義の味方部の面々は、その場で起こっていたことを霧瀬に告げていたのだ。

報告をし終わった千影は手を口に当てて、この作戦の恐ろしさに戦慄を覚える。

「まさか、世界征服部がこんな絡め手で来るなんて……」

「なぜなら、今回の世界征服部の活動、迷惑行為をしていないし破壊活動もしていない。」

今回放送部からの世界征服部の征服活動による緊急放送が入らなかったのがその証拠だ。

先にサービスで相手の心を征服し、場所的な征服は後に回す。

店の女性店員の心は世界征服部側にあるので、コチラが問答無用に攻撃しようものなら正義の味方部に非難轟々。

しかも、お姉さま世代にある『征服されたい欲』を刺激する手法と  
いい、今回の作戦は見事の一言に尽きた。

本日の活動を終え、征服部部室に戻った八草重はその体を小刻みに  
揺らして笑っていた。

「はっはははははは！勝った！非ッ常オオオツに勝った気分だ  
！！」

初めて正義の味方部から得た勝利の美酒の味に酔っているのだ。

そんな八草重の姿を尻目に、翔子は手元の携帯端末に次々と送られ  
てくるウイスパーズへの予約の数に舌を巻いていた。

「うん・・・こおんな上手くいくとはなあ。『放課後ウイスパ  
大作戦』、初回の活動のあとの予約数も鰻登りや」

「しかし、改めて聞いてみても胡散臭い作戦名ですねえ」

この九郎の言葉に司木とジェレミアは同意する。

「実際胡散臭いけどな」

「右に同じだ」

そんな彼等の酷評に翔子はゴマをするように皆に言う。

「まあまあ君ら、顔も声もいいからなあ。こういう作戦もありかな  
あって思ってたんよ。ちよつと悪っぽいやる？」

そして悪代官のような声色で言う翔子の言葉に、九郎が感想を返し  
てきた。

「むしろ普段より悪い感じですよ」

しかし、今回の勝利に未だに酔う八草重は高らかに言う。

「それが今回の成功の鍵なのだ」

八草重のこの言葉に翔子は頷きながら、狙いどころとなる場所の条  
件をピックアップする。

「基本的にカフェスタイルの女の人、しかも店員さん少なめでやつ  
てるトコとかが狙い目やね。もちろんこうというのが好きな人のとこ  
ろっていうことになるけど」

この細やかでピンポイントな翔子の目の付け所に、九郎は感心した

というように頷いた。

「店の征服は後回しにして、まずは店員の心を征服。いやはや、僕には考えも付かない作戦です」

「夕霞ちゃんから犯罪だけはアカン言われてるからな。本当・・・顔と声と設定、台詞だけで勝負が基本やあ」

翔子のこの言葉に司木が口を挟んでくる。

「それだと、今後征服できる条件の店は少ないんじゃないのか？野郎にコイツをやるのは正直キツイぜえ」

確かに男相手にアレをやることへの抵抗感は一草重も九郎もジエミアもあるようで一様に顔を青白くした。

「それは二一ズもないし、やらんでもええって」

この翔子の問題発言に司木はすぐにツツコミを入れる。

「二一ズあればやらせんのかよ!？」

「考えもんやねえ」

口に手を当てて妖しげに言う翔子に司木はげんなりと肩を落とした。「勘弁してくれ」

そこまで司木で遊んだ翔子は「もういいだろう」とからかうのを止めて真剣な話に戻る。

「まあ、成果が上がればいいだけなんやから、店舗全制覇とかはせんでもええんやけどね」

翔子の言葉に九郎は頷きながら、噂の広がり早さを口に出した。

「明日になれば口コミで評判も広がるでしょうし」

「何、まずはウィスパ―作戦で足場を固め、残りは実力でじっくり攻めればいい」

今までになく順調に進む征服活動に一草重は終始ご機嫌であったのだ。

そんな、一草重の姿に翔子は「しかし」と率直な感想を述べる。

「一番嫌がりそうやった一草重君が結構ノツてるなあ」

「ふん。自分のプライドなど、征服活動が進むのであれば夕霞様のために捨ててくれよう」

との言葉だったのだが、そこで司木からの茶々が入った。

「1番楽しんでんじゃねえの」

「な・・・っ！誰がだ・・・！！」

しかし天羽、容赦ない

作戦だ見直したぞ。さすが関西人」

八草重からの珍しい賞賛の言葉に翔子は照れつつも、鋭いツツコミを放つ。

「関西人関係あれへんがな！」

それは見事に八草重の胸に当たり、八草重の肺から一気に空気を押し出すほどの威力を見せた。

「ぐふっ！？・・・き、貴様・・・！！！」

しかし、そこで部屋に帰ってきてから今まで口を開かなかったジェレミアが初めて口を開く。

「しかしこのような作戦、いつまで付き合わねばならんのだ？私としてはこのような破廉恥な姿、お嬢様にはとてもお見せ

つごほん・・・いや、なんでもない」

ジェレミアの言葉に翔子から生暖かい視線が注がれる中、征服部部屋の扉が開き夕霞が入ってきた。

「ふ、ご苦労だな。新しい作戦は順調に初日を終えたようので何よりだ」

夕霞からの労いの言葉に八草重は恭しく頭を下げる。

「ありがとうございます」

そんな八草重に1つ頷いた夕霞は、翔子の方を向いた。

「成果のほども聞いている。流石だな、天羽」

「いえいえ、今回は男の子達の頑張りですから」

夕霞の賞賛の声に手を振る翔子に、夕霞は一応、釘を刺すことを忘れない。

「とは言え、活動の内容が内容だ。本日の活動で学院側にはこの活動の内容が伝わっているだろうから、職員会議その他諸々で指導を受けるまでの時間は今日を除いてあと数日といったところか。くれぐれも無茶だけはするな」

この夕霞の言葉に『放課後ウイスパ―大作戦』の面々は頷いていく。  
(とはいえ、ワンサイドなのはちよつといただけんな……種だけでも蒔いとこつかな)

この翔子の呟きを最後に『放課後ウイスパ―大作戦』の初日は終わったのであった。

それから『放課後ウイスパ―大作戦』が発動してから2日が過ぎた、3日目の今日。

「はうう」

葵と合流したはやなは早くも意気消沈していた。

「やっぱりそつちもダメだった？」

「うん。お姉さんに怒られちゃった」

2人が手分けして何をしていたかと言うと

「説得で征服されないでつてのは難しいか、やっぱり」

お店の人たちに征服されないようにと説得して回っていたのだ。しかし現状は芳しくなかった。

「被害も悪影響もないから、やめてつて言っても止められる理由もないんだよねえ」

遅々とも好転しない現状に葵は齒噛みする。

「性質の悪い作戦だわ。こうなつたら千影君の言つてたネガティブキャンペーンかサイバーアタックしかないんじゃない？」

千影が「向こうが絡め手で来るならコツチも絡め手で」と考案した作戦が上の2つであるのだが

「それは私達、正義の味方がやっていいことじゃないよお」

提案した千影も含め、総員が正義の味方にあるまじき行為だとして却下されたのだった。

「はーちゃああんっ！！」

そんな八方塞なはやなの元に、今回の諸悪の根源である翔子がどこからともなく抱きついてきたのだ。

「翔子ちゃん!？」

いきなりの翔子の登場に驚きの声を上げるはやなに、翔子ははやなの胸元に顔をスリスリと摺り寄せる。

「ごめんなあああつ！ウチが口クでもない作戦考えてしもてえ」  
そんな暴拳にでた翔子に葵は早々にブチ切れた。

「はやなに勝手に抱きつくんじゃない！！」

翔子をはやなから引き剥がそうとするが、翔子も然る者。

「スキンシップやあ！」

ピタリとはやなに引っ付いて離れなかったのだが

「だめええツ！！」

気合一閃。葵ははやなから翔子を放すことに成功したのだった。

そんな葵を、翔子は恨めしそうな目で見る。

「ああ、もう！相変わらず葵は独占欲強いんやからあ」

ジト目で葵を見る翔子に、葵は先ほど翔子のはやなに言った言葉を思い出すと、非難の視線を翔子へと送った。

「何よ、今回はアンタが考えたっていうの？」

「そそ。日々のサービス業に疲れた心を癒して欲しい　　な

ーあんで、女の子の発想っぽいやる？」

自信満々、胸をそらしながら語る翔子に葵ははき捨てるように言うてやる。

「どこが癒しよ」

「あーいうのも必要なんよ？」

こんな2人のやり取りに、はやなは翔子の説得に入った。

「翔子ちゃん、もう止めようよ。これは私と翔子ちゃんて競い合う勝負にはならないよ」

もしも本当にこの活動の仕掛け人が翔子であるなら、翔子を説得できれば何とかなると思ったからだ。

「今回ははーちゃんと競う楽しさとは違う別の楽しさを満喫させてもらつとるからな」

そんなはやなの説得も無碍にした翔子に、葵は額に青筋を浮かべる。

「翔子……！！！！！！」

今にも爆発してしまいそんな葵を片手で制止させながら翔子は「はいえ」と言葉を続けた。

「そろそろはーちゃんと実際に遊びたくはなってはきてんねん。ほら、ウチとはーちゃんが競ったのってアノ武道場以来ないやん」  
翔子も、はやなと同じことは考えていたのだ。

「本当!？」

この翔子の言葉に喜ぶはやなであったが、コトはそう簡単に運ぶものではない。

「八草重君との合同作戦やから勝手に止まる作戦でもないし。せやからヒントだけあげるわ」

「ヒント？」

首をかしげるはやなに翔子は笑顔になると、そのヒントとやらをはやなに話した。

「そ。所詮囁きは囁き、ほんの一瞬の儂い星の輝きやしホンモノにはかなわへんで」

その翔子の口から紡がれる言葉を、はやなは反芻する。

「儂い夢より、ホンモノ？」

「一応、立案者やからね。ウチから言えるのはソコまでってコトで。ほな、またな」

未だに思考に耽るはやなにそれだけ言い残すと、翔子は去って言ったのだった。

「ホンモノって何のコトなのよ……」

訳のわからない翔子の言葉に葵がそう呟く中、はやなは翔子の言わんとしたことが何であるのかを理解する。

「ありがとう翔子ちゃん」

いきなりはやなの口から出た翔子への礼の言葉に葵は驚きの声を上げた。

「って、分かったの!？はやな!」

そんな葵の問いにははやなは笑顔で頷くと、勝利の鍵となる人物の名前を挙げる。



「うん！まずは千影ちゃんから！！」

「千影君？」

一体、千影に何があるのでしょうか。

未だに葵は何がなんだか分からないのであった。

そして正義の味方部部室でもある第4保健室『湊』にはやなは駆け込むと千影の名前を呼んだ。

「千影ちゃん！いるう？」

「うん？どうしたのはやな？」

はやなの返事に椅子に座っていた千影が返事をしながら振り返るが、千影や他の味方部の面々以外にもう1人、見覚えのある人物がいることに気がついた。

「あれ？」

その子って………

「こんにちは」

はやなと葵に頭を下げて挨拶するのは誰であろう、前回のガードニオン事件で出会ったルルーシュ・ヴィ・ブリタニア嬢その人であった。

「なんでルルーシュちゃんがここに？」

初等部の生徒であるルルーシュが高等部の保健室にいることに、はやなが首をかしげると、葵が「まさか」と霧瀬のほうを見る。

「先生、また何か良からぬコトでも企んでるんじゃない？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ！この子は姫宮さんを尋ねてきたのよ」

葵のあんまりなモノのいいように涙を流す霧瀬だった。

「千影ちゃんを？」

それでも尚、何故ルルーシュが千影をたずねてきたか分からず首をかしげるはやなに、お茶だしをしていたさつきが、皆にお茶とプリンを配りながら答える。

「なんでも千影さんに相談したいことがあるとか」

「別に隠すほどの事でもないとのことなので、稜たちも立会いを許

されてるです」

と、綾が早速一緒に出されたお茶菓子のプリンに手をつけながら言ったのだった。

はやなたちに一応の説明を終えたところで、千影はルルーシュの方に向き直ると、改めて問いかける。

「で、ルルーシュ。私に一体、何用かな？」

「実は、ジェレミアのことなんです」

彼女はポツポツと昨日からの事を話し始めた。

「昨日から初等部の方にある噂が入ってきたんです。高等部で世界征服部がいかかわしいことをやってるって……。。。。ジェレミアも手伝いで所属してる部ですから、ひよっとしたらと思っただけです。けど、ジェレミアに限ってそんなことはないだろうって思ってたんです」

そこまで言ったルルーシュは眸に涙を溜めながら言葉を続ける。

「でも、その噂を聞けば聞くほど、その1人はジェレミアのようで……。けど私にはそれをジェレミアに聞く勇気がなくて

それで世界征服部と対立していて、ジェレミアと同じ決闘者同士である千影さんなら何か分かると思って！教えてください、その活動にジェレミアは参加しているのですか!？」

ルルーシュの言葉と様子に、千影を覗く正義の味方部の面々は頭をつき合わせるとヒソヒソと話し合いを始めた。

（ねえねえ、葵ちゃん。これってひよっとしなくても）

（……。。。。ちよっとした、幼い恋わずらいつてトコよねえ）

頬を赤くし、涙を溜めてジェレミアのことを語るルルーシュの姿は正に恋する乙女そのものだ。

（この前のガーデンオン事件で女の子の夢を現実に体験しましたしね）

しかもさつきのいう通り、恋に落ちる過程も憎からず思っていた相手が自分のピンチに助けに来るといふ最高のシチュエーション。

これで女の子

しかも夢見がちな幼い少女

が墮

ちないわけがない。

それは頭脳明晰なルルーシュとさえも例外ではなかった。

しかし、その彼が不特定多数の女性に言い寄っていると聞いた訳だ。  
(その彼が他の女の子たちに見境なしに言い寄っているとくれれば本心  
穏やかじゃない・・・っか)

霧瀬の言うとおり、それが女心というもの。

(園芸部の極星さん。中々罪作りな人です)

と、最後に稜がジェレミアをそう評したのであった。

そんな他の面々が話し合いをする中、千影はルルーシュに真実を告げる。

「・・・うん。その4人の中の1人はジェレミアだったよ」

最悪の結果として予想していたとはいえ、千影の言葉にルルーシュはシヨックを受けた。

「ッ！！やっぱり・・・」

そんな肩を落とし、今にも眸にためた涙を落としそうになるルルーシュに千影は力強く言葉を続ける。

「でも、コレだけはいえる。彼は誇りある決闘者だ。好き好んで彼がこのような痴れ事に手を出すとは私は思えない」

「当然です！ジェレミアは私の騎士であってくれると誓って

っこほん・・・いえ、なんでもありません」

千影の言葉に勢いよくそう言い放とうとしたルルーシュだったが、その言葉により皆の視線が生暖かいモノになっていることに気がつくくと、ソッポを向いて誤魔化した。

それは数日前のジェレミアと同じようで、まさに似た者主従であったのだ。

と、まあそんなこんなで話を終えたルルーシュに千影は優しい笑みを浮かべる。

「まあ、ルルーシュの言いたいことは分かったよ。ジェレミアにホスト紛いの活動は止めて欲しいけど、自分から言うのは憚れる

「と」

「はい。きつとジェレミアも私にそんな姿は見せたくないと思っ  
ているはずですよ。ですからお願いします！ジェレミアを止めてくださ  
い！」

千影に向かって頭を下げるルルーシュの姿に、千影は難しい顔にな  
った。

「そうはいつでも、こちらも方々手は尽くしてはいるけど如何せん  
成果が」

「そうなのだ。止めれるものならば既に止めている。

それが出来ないのは征服部のホスト活動にニーズがあるからで、店  
側に説得に回つても門前払いを食らわせられているのだ。

しかしそんな中、はやなが千影のそばに歩み寄ってきた。

「そのことなんだけど千影ちゃん、耳貸して」

「ん？別にいいけど、なに？」

千影の耳元に口を寄せたはやなが翔子に貰ったヒントから得た解決  
策を千影に話していく。

「えっとね………でね………すれば………  
………なると思うんだけど………どうかかな？」

全てを話し終え、千影に向かって首をかしげるはやなに千影は手を  
口物に当てて思案に耽ると、そのはやなの語った作戦に勝算を見出  
した。

「それは………確かにそれならいけるかも」

「でしよう？」

千影の言葉に満足げに頷くはやなからルルーシュの方に千影は体を  
向ける。

「それなら　　ルルーシュ」

「っ！はい！？」

いきなり自分に振られた言葉に驚くルルーシュだったが、千影は続  
けてルルーシュに問いかけた。

「君、決闘はできる？腕前は？」

「ええつと・・・ジエレミアに教えを請うて覚えまして、決闘ではありませんがチェスは得意です」

と、返ってきたルルーシュの返事に千影は「ならば問題ないね」と満足げに頷く。

「何が、ですか？」

「私と君の決闘でジエレミアを振り向かすんだよ」

未だに千影が何を考えているか分からないルルーシュに千影が笑顔で、そう言ったのだった。

そして、放課後がやってくる。

「今日の放課後の征服予約

私は3件か」

八草重の予約確認にそれぞれ倅い、星徒手帳を広げて自分のこなす仕事を確認していく。

「で、俺が2件と

「僕が4件

「私が5件

か・・・はあ・・・」

司木、九郎に続いて自分に割り当てられた予約の数を見たジエレミアはため息をついたのだった。

「なんだかボランティア活動みたいになってきましたね」

気の乗らないジエレミアとは対照的に今までになくスムーズに進む征服活動にご満悦な八草重は、九郎のボランティア発現に笑みを浮かべる。

「ふっ。ボランティアこそが征服への近道ならば、いくらでも奉仕してくれよう」

そんなやる気にピンからキリまである面々に、翔子はホストクラブの支配人よろしく手を叩きながら訓示を述べた。

「はいはい！今日も日ごろウチらを優しく迎えてくれるお店のお姉さんたちに感謝の思いを込めつつ、まったりと心を征服してくるんよお！！」

「まかせておけ！」

「了解です」

「へいへい」

「はあ……」

翔子の言葉に返した返事の度合いで世界征服部の面々

ち

なみに順番は上から八草重、九郎、司木、ジエレミアである

にどれだけの差があるのかお分かりいただけただけのことであろう。

そんな中、九郎がとあるモノに気がつく。

「あれっ？」

不意に漏れた九郎の言葉に翔子は、九郎の方を向く。

「どうしたん？」

他の面々もそんな翔子に倣い、九郎の方を見たところで九郎はそのとあるモノを指差した。

「食窓外の真ん中のモニターに、正義の味方部とこの前の女の子が

」

九郎の指の指し示す先に映った大型モニターに2人の人物が映し出されていたのだ。

その人物とは

「お、お嬢様！？」

「それと、味方部のナイトセイバー！　いったい、何をしようというのだ！？」

適度の距離を保ち対峙する千影とルルーシュの姿に世界征服部の面々がいぶかしんでいると、2人がそれぞれの左手を掲げる。

「なっ　　！？」

「あれは　　！？」

「まさか　　！？」

「お嬢様と千影殿が　　！？」

「決闘！？」

驚く世界征服部の面々は、確かにルルーシュの左腕に決闘盤が装着されているのを見たのであった。

放送部の協力を得て、高等部校舎へ映像が行き渡ったのを確認すると千影は左腕に装着された『レガリア』を掲げてルルーシュに聞く。「じゃあ、準備はいい？」

「はい。いけます」

決闘盤にデッキをセットしたルルーシュの姿に千影は頷くと、ネクロノミンコン機械言語新訳版へと命を下した。

「じゃあ、ナイトセイバー・決闘形態

起動!！」

【Knight mode Drive】

千影の声と共に『レガリア』の中にあるカードの中から決闘用のデッキが生まれ、『レガリア』のデッキゾーンへとセットされる。

そして2人は決闘の鐘を鳴らすべく高らかに叫んだ。

「決闘ツ!！」

千影LP4000  
ルルーシュLP4000

まず先攻後攻をどうするか千影はルルーシュに問いかける。

「どうする？私はどちらでもいいけど」

「では、私は後攻をとらせてもらいます」

後攻を選んだルルーシュに千影は1つ頷くとカードをドローするべくデッキへ手を伸ばした。

「わかった。じゃあ私の先攻で・・・ドロー!！」

ドローしたカードを手札に加えた千影に、手札の中からサキュバスが精霊化して話しかけてくる。

《ひっさしぶりに、私・参上》

本当の久しぶりの登場にポーズを決めて千影の隣に立つサキュバスに、千影は微笑を浮かべた。

(そう言えば、このところ君を引かなかったね。サキュバス)

そんなご主人様の反応にサキュバスは少し拗ねたように頬を膨らます。





千影は場に酒の入った瓢箪を持つ鬼の使い魔を召喚すると、さらにもう1枚の手札へと手を伸ばした。

「さらにカードを1枚セットしてターン終了！」

千影のターンエンド宣言と共に、ルルーシュのターンがやってくる。

「私のターン、ドロー！」

デッキからドローしたカードの内容を見ると、よっぽど良い手札だったのか、ルルーシュは大きく頷いた。

(よし。この手札なら　　！)

戦術を即座に組み立てたルルーシュは手札から1枚のカードを決闘盤へと挿し込み、発動させる。

「私は手札から永続魔法、次元の裂け目を発動！この魔法カードの効果により、墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かず、除外されます！」

ルルーシュの宣言と共に、空中に大きな裂け目が出現したのだった。

(墓地に送られるモンスターを除外する永続魔法とは………  
・墓地にモンスターを溜めさせない戦術か?)

そんなルルーシュの手に彼女が何を狙っているのか分からなかった千影だったが、そんな千影を尻目にさらにルルーシュは手札のカードに手をかける。

「さらに魔法カード発動！おろかな埋葬！！このカードにより、デッキにあるマジシャンズ・ヴァルキリアを墓地へと送りますが、次元の裂け目の効果でゲームより除外！」

デッキからモンスターを除外したルルーシュのコンボはまだ途切れることを知らなかった。

「まだです！！私は魔法カード、魔法石の採掘を発動！この効果により、手札を2枚捨てて自分の墓地にある魔法カード、おろかな埋葬を手札に加え　　」

手札から黒魔導師クランと白魔導士ピケルを除外し、さきほど使ったおろかな埋葬を手札へと加える。

そして

「再びおろかな埋葬を発動し、もう1枚マジシャンズ・ヴァルキリアをゲームから除外します！」

このルルーシユの度重なるモンスター除外に、ここに来てルルーシユの狙いが何であるか千影は理解した。

（ここまでであらさまに自分のモンスターを除外するということは・・・間違いない！あの最後のカードは）

千影の予想通り、ルルーシユは手札からそのカードを発動する。

「そして私は魔法カード、次元融合発動！！この効果は私がライフポイント2000を払うことで、互いのプレイヤーは除外されたモンスターをそれぞれのフィールドに可能な限り特殊召喚する魔法カード・・・・・・・・私は除外されたモンスター4体を特殊召喚！」

ルルーシユLP2000

マジシャンズ・ヴァルキリア      4      ATK1600      DEF1800

マジシャンズ・ヴァルキリア      4      ATK1600      DEF1800

黒魔導師クラン      2      ATK1200      DEF0

白魔導師ピケル      2      ATK1200      DEF0

ルルーシユの発動した次元融合のカード効果により、次元の裂け目から次々と除外されたモンスターたちが帰還を果たしたのだった。

（やはり、次元融合によるモンスターの大量展開！しかもマジシャンズ・ヴァルキリア2体によるヴァルキリアロックか！！）

千影が心の中で驚愕の声を上げる中、ルルーシユはただ当然の結果を語るように口を開く。

「あなたにはこのモンスターたちの説明は不要かと思いますが

マジシャンズ・ヴァルキリアはこのモンスターがいる限り、

他の魔法使い族を攻撃対象に出来ない効果を持ち、黒魔導師クラン

は私のスタンバイフェイズが訪れる度にあなたの場に存在するモンスター1体につき300ポイントのダメージを与え、そして白魔導士ピケルは私のスタンバイフェイズが訪れる度に私の場に存在するモンスター1体につき私のライフポイントを400回復します」  
この一連のコンボに千影は驚きを通り越して、ルルーシュの腕前に感心していた。

「すごいな、君のような年の子が……しかもデュエルモンスターズを始めて間もないというのに、ここまでのコンボを繋げるなんて」

そんな千影の賞賛にルルーシュは口元に笑みを浮かべて応える。

「チエスが得意だつて言ったでしょう？相手の手を封じ、少しずつ相手の力をそいでいくのは定石ですから」

「確かに君の言うとおりだ」

このルルーシュの言葉に千影も笑みを浮かべたのだった。

しばらく笑みを交し合ったルルーシュは両手を広げてターンエンドを宣言する。

「では、私はこれでターンを終了します」

ここで千影は自分の場と、手札のカードを見ると少々表情を曇らせた。

(Loveサーヴァント・酒吞童子・は戦闘では破壊されないが、私がダメージを受けた時に破壊されるデメリット効果も持つモンスターだ。このままでは次のターン、クランの効果で確実に自壊する。

しかも伏せカード、サーチアイも墓地にモンスターが送られなければモンスターをサーチできないから次元の裂け目がある限り使えない。そうなればルルーシュからの総攻撃を受けて負けだ

手札に他のモンスターがサキユバスしかない今はシンクロ召喚によるバハムートの召喚で凌ぐしかないか……)

そこまで考えた千影だったが、首を振ると先ほどまでの考えを棄却する。

(いや、サキユバスの効果でシンクロ召喚されるモンスターは攻撃

の要。ヴァルキリアロックが掛かっている今、容易に切つていい札ではない………ならば　　！)

「ここで他のモンスターを引くしかない！私のターンだ、ドロ―！」

その思いを込めて引かれたカードは

(よし！)

モンスターカード、L o Vサーヴァント - サムヴァルタ - だった。

「私はL o Vサーヴァント - サムヴァルタ - を攻撃表示で召喚！！」

L o Vサーヴァント - サムヴァルタ -           4   A T K 1 8 0 0   D  
E F 1 2 0 0

早速、サムヴァルタを召喚した千影は、そのモンスター効果を起動させる。

「L o Vサーヴァント - サムヴァルタ - の効果発動！このモンスターの攻撃を放棄する代わりに、相手プレイヤーにこのカードの元々の攻撃力の半分のダメージ　　つまり900ポイントのダメージを相手に与える効果がある！！」

「っ！？」

「攻撃ができないのならば、こちらも直接火力で対抗するまで！」

千影の言葉と共にL o Vサーヴァント - サムヴァルタ - から放たれた炎がルルーシュへと襲い掛かる。

「ああああっ！」

ルルーシュLP1100

しかし千影の攻撃の手は緩まない。

「さらに速攻魔法、超大紅蓮隠密の罠を発動！相手プレイヤーに直接ダメージを与えることに成功した時、そのダメージと同じダメージを相手プレイヤーに与える！！」

千影の新たに発動した魔法カードにより、ルルーシュに900ポイントのダメージが牙をむく。

「きゃああああっ!!！」

ルルーシュLP200

新たに発動された超大紅蓮隠密の畏により、ルルーシュのライフポイントをあつ少しのところまで削ったのだった。

「私のターンは、これで終わりだ」

しかし、これではルルーシュを倒すことはかなわない。

「っ！私のターン、ドロー!!！」

何故なら

「この時、黒魔導師クランと白魔導士ピケルの効果が発動！あなたに600ポイントのダメージを与え、私は1600ポイントのライフを回復します！」

そう。ルルーシュの場にはヴァルキリアロックで護られたクランとピケルがいるのだ。

「くうう！」

クランから鞭が2度払われ千影のライフポイントを削ると、L O V サークヴァント・酒呑童子・が自身の効果で粉々に砕け散ったのだった。

そんな千影とは対照的、にピケルの放った輝きがルルーシュを癒していく。

千影LP3400

ルルーシュLP1800

さらにルルーシュは、さきほどのドローフェイズでドローしたカードを発動すべく、決闘盤へと挿入する。

「私は魔法カード、トークンズ・ギフトを発動！相手の場に2体の

ビッグ・ギフト・トークンを特殊召喚して、私はカードを2枚ドロ―！

ビッグ・ギフト・トークン	9	ATK3000	DEF3000
ビッグ・ギフト・トークン	9	ATK3000	DEF3000

自分の場にいきなり現れた攻撃力3000の大型モンスター2体に千影は驚きの声を上げる。

「こ、これは　！？」

トークンズ・ギフトの効果でデッキからカードを2枚ドロ―したルルーシュは、千影にそのトークンの効果の説明を始めた。

「そのトークンは攻撃力と守備力こそ優れていますが、生け贄にすることができません。しかも私の場合は2体のマジシャンズ・ヴァルキリアによって護られています。これでああなたは私の黒魔導師クランの効果によって毎ターン600ポイントのダメージが確定しているということですよ」

ルルーシュはそこまで語ると、トークンズ・ギフトで手札に加えた2枚のカードの内、1枚を手にとる。

「さらに手札から魔法カード、強欲な壺を発動してカードを2枚ドロ―！」

新たにカードを2枚ドロ―したルルーシュは、手札から2枚のカードを発動した。

「私は黒魔導師クランに装備魔法、王女の試練を装備！この効果により、クランの攻撃力は800ポイントアップ！さらに装備魔法、特別昇進をサムヴァルタに装備することにより、あなたのサムヴァルタの　を2上げます！」

黒魔導師クラン	2	ATK2000	DEF0
---------	---	---------	------

LOVサーヴァント - サムヴァルタ -	6	ATK1800	D
----------------------	---	---------	---

EF1200

装備カードを装備された2体のモンスターが、そのステータスを変動させたのだ。

しかし、このルルーシュの不可解な行動に千影は驚きの声を上げた。「克蘭の攻撃力を上げると同時にサムヴァルタの を上げた!？」その答えはすぐに出ることになる。

「そして戦闘です!黒魔導師克蘭でサムヴァルタを攻撃!!」ルルーシュの号令により、克蘭から振るわれた鞭が千影のサムヴァルタを破壊する。

「くっ!」

千影LP3200

それを見たルルーシュはすぐさま、カード効果の発動を宣言した。

「この時!装備魔法、王女の試練の効果が発動!!」

「なにっ!?!」

千影が驚きの声を上げる中、ルルーシュは黒魔導師克蘭と王女の試練の2枚のカードを手に取りながら言葉を続ける。

「王女の試練を装備した黒魔導師克蘭が 5以上の相手モンスターを戦闘で破壊したターン、このカードと黒魔導師克蘭を生け贄にデッキまたは手札から魔法の国の王女・克蘭を特殊召喚できるのです!」

「そのために私のサムヴァルタの を6に!?!」

ルルーシュの玄人顔負けの戦術に千影が戦慄する中、ルルーシュは2枚のカードを生け贄にすると、デッキから1枚のカードを選び出した。

「私はデッキから魔法の国の王女・克蘭を攻撃表示で特殊召喚!」

魔法の国の王女・克蘭 4 ATK2000 DEF0

魔導師から王女へと位階を上げたクランを従えたルルーシュは高らかに言葉を放つ。

「試練を乗り越え、王女となったクランはその能力にさらに磨きをかけました！その効果は、私のスタンバイフェイズ、あなたの場に存在するモンスターの数×600のダメージを与えるというもの！」

「と、いうことは　　！！！」

千影は自分の場に立つ2体のビッグ・ギフト・トークンを見た。

「そうです。生け贄にできないビッグ・ギフト・トークンが2体いることで、次の私のターンには1200ポイントのダメージをあなたは受けるということです！」

（なんて子だ！これほどの腕ならばプロとしても十分通用するのは！？）

千影の思ったとおり、一連の除外から次元融合での特殊召喚によるヴァルキリアロックの構築、それを見事に利用したトークンズ・ギフトの使用といい、黒魔導師クランを魔法の国の王女・クランへの強化といい、デュエルモンスターズを始めて間もない一介の少女の決闘とは思えない。

まるで百戦錬磨の玄人決闘者を相手にしているような感覚に千影は陥っていたのであった。

しかし、まだルルーシュの猛攻が終わったわけではなかったのである。

「最後に私は永続魔法、絶対遵守の力を発動します！！」

「まだ、手があったのか！？」

そう驚きの声を上げる千影を尻目にルルーシュの発動したカード、絶対遵守の力がルルーシュの場にある次元の裂け目が開いた穴を塞いでいく。

「このカードは発動した時に、このカード以外の自分フィールド上にある魔法・罠カードを全て墓地に送らなければならず、このカー



ドがある限り他の4箇所の魔法・畏ゾーンが使えなくなるデメリツトがあります　　が、その力はまさに王の力！」

その言葉を発した瞬間、ルルーシュの左目に翼を広げたような刻印が輝いていたのだ。

「絶対遵守の力！その効果は、私のターンエンド時毎に次の相手ターンのドローフェイズ、メインフェイズ、戦闘フェイズのいずれかを指定し、指定したフェイズを行えなくするのです！」

この決闘の法則を著しく捻じ曲げるルルーシュの絶対遵守の力の前に、千影は絶句するしかなかった。

「そんな……!？」

そしてルルーシュはエンドフェイズに移行すると、高らかに宣告する。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じます。あなたはドローフェイズをスキップしなさい！」

ルルーシュの左目に浮かんだギアスの刻印が煌き、次の千影のドローフェイズは封じられてしまったのだった。

「さあ、あなたのターンですよ」

「私のターン……」

千影は絶対遵守の力の前にデッキへと手を伸ばすことが出来ない。

（いけない！このままでは戦闘どころかドローさえも出来ないまま、ライフポイントが削られていく!!それに　　）

さらにビッグ・ギフト・トークンを見やると、悔しそうに歯噛みした。

（　　）　　ビッグ・ギフト・トークンの　　は9…….…….あまりに　　が高すぎてシンクロ召喚の素材にも使えない！本当になんて子なんだ!?!）

ドローを封じられ、新たなカードを引けなくなった千影だが、何も手が全くないということではない。

ないことはないのであるが

その賭けともいえる選択肢に千影は手札のサキュバスへと声をかけ

た。

(こうなつては是非もなしか

サキュバス)

《はいはい》

千影の呼ぶ声に返事を返してきたサキュバスに、千影は問いかける。  
(君と、君の力を私に授けてくれるか?)

この言葉にサキュバスは一瞬、眼を瞬かせるが千影の真意を悟ると  
笑顔で頷いた。

《ご主人様が望むのであれば》

これで千影の腹は決まる。

(ならば君を信じよう!)

千影は手札の中から1枚のカードを抜き取ると迷うことなく、それを  
発動した。

「私は手札から魔法カード、リロードを発動!手札のカード全てを  
デッキに戻してシャッフル、戻した枚数分のカードをドロウする!  
!私が戻すカードは2枚!」

サキュバスともう1枚のカードを『レガリア』のデッキゾーンへと  
戻し、デッキがシャッフルされる。

「ルルーシュ、私は君に謝罪しよう。私は君を見くびっていた・・・  
・だからこそ、このドロウに私の全身全霊を持って応えよう!君  
の決闘に敬意を表して!!」

そう語った千影の両の眸は、紅蓮の如き輝きを放っていたのであつ  
た。

そして、そんな千影とルルーシュの決闘は食窓外で働くお姉さんた  
ちの心を動かしていた。

「はあ・・・なんだろう。この感じ・・・!!」

「うん・・・絶体絶命のはずなのに・・・!!」

「次の引きで何かが起こりそうなの・・・!!」

「胸の奥が・・・すごいドキドキしてきます・・・」

「!」

「私・・・今日はコレでいっばいかも・・・・・・・・・・！」

「この後じゃ、何を囁いてもらっても・・・そんなことよりも今は決闘の続き！」

これこそが、はやなの得た答えだったのだ。

サービスは所詮サービス。

自分に向けて囁かれた言葉でも、それが真実であるはずがない。

しかし、目の前のモニターに映る2人は、持てる力と智謀と勇気を振り絞って闘っている。

その姿は万人に等しく、本物の胸の高鳴りと次への希望を抱かせたのだった。

そうなつては、世界征服部の『放課後ウイスパ―大作戦』による活動は不要のものとなる。

それは、先ほどから翔子の携帯端末にはひっきりなしに今日の予約分のキャンセルが次々と舞い込んできていることが何よりの証拠だ。

「はい。では、また・・・・・・・・・・ふう。全滅や」

「全部キャンセルの連絡・・・・・・・・ですか」

九郎の問いかけに頷く翔子に、八草重はモニターに映る千影とルルーシュを忌々しそうな眼で見る。

「なぜ・・・！？なぜ、ただの決闘に　　！？」

「それが決闘というものだ」

ジェレミアのその言葉と共に皆の視線がジェレミアへと集まる中、ジェレミアはモニターに映るルルーシュを見つめながら言葉を続けた。

「決闘者が互いの全てをかけて全身全霊で決闘する。そしてその思いが強くなるほど、他者を惹きつけずにはいられなくなる

それが決闘なのだ」

そう言ったジェレミアは「もう用はあるまい」と踵を返す。

「おい、どこに行く！？ゴッドバルト！？」

ジェレミアの勝手な行動に八草重がとめに入るが、ジェレミアは一

旦立ち止まり振り返ると口を開いた。

「『放課後ウイスパ―大作戦』とやらは失敗で終わったのであろう。私はお嬢様の元に行かせてもらう」

「なっ……！そんな勝手は」

角を曲がり姿が見えなくなつたジェレミアを追おうとした八草重だったが、後ろから響き渡る声が八草重の動きを止める。

「じゃあ……ここからはいつもどおりですね」

聞きなれた声に世界征服部の面々は「まさか」と後ろを振り返つた。そこには当然

「正義の味方部!？」

ADを装着したはやな、さつき、稜の3人が立っていたのだ。

はやなの発した言葉に続き、さつきは『巴』を稜は『シャイニングハート』を構えながら言葉を放つ。

「大人しく引くならよし。ですが、ここで元のように実力行使に戻すのであれば」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「よおつしゃあああ！！待ってたぜえ！！いいかげん俺もコツチに戻りたかつたんでねえ！」

「ほな！いくでえ！！！」

正義の味方に踊りかかっっていく世界征服部の面々に、はやなも笑顔になるとプラズマリボンを構えた。

「じゃあ、正義の味方も久々にいつくよ！！！」

「征くよ！これがラストチャンス　　ドロー！！！」

はやな達が世界征服部とぶつかった正にその瞬間に、千影はデッキから2枚のカードを引き抜いた。

（来た！）

その2枚のカードこそ千影の望んだ逆転の一手たるカードだったのだ。

（そして、よく戻ってきてくれたサキュバス！）

しかもその内の1枚は、先ほどのリロードでデッキへと戻したサキュバスだったのだ。リロードで戻したカードが切札と共に手札に帰ってくる　それは如何ほどの確率なのであるうか。

しかし、これで千影の勝利への道は開いた。

「私はチューナーモンスター、LOVサーヴァント - サキュバス - を攻撃表示で召喚！！！」

LOVサーヴァント - サキュバス -                    3    ATK1500    DE  
F100

そして千影はサキュバスと共に手札に来た切札を切る。

「そして魔法カード、エキサイトキッスを発動！このカードは場にサキュバスがいる時、発動できる魔法カード！相手の場のモンスター1体のコントロールをターン終了時まで得ることができる！！！」  
「と、いうことは………しまった！！！」

千影のエキサイトキッスの発動に、ルルーシユは初めて驚きの声を

上げたのだった。

そしてルルーシュが驚きながら見る、モンスターを千影は指差す。

「そう！私がコントロールを得るのはマジシャンズ・ヴァルキリア

！！」

サキュバスが振りまいたキスの嵐に籠絡されたマジシャンズ・ヴァルキリアは千影の場へと移動したのだ。

「これで鉄壁のヴァルキリアロックは崩れた！そして

！！」

千影は星々を束ねるべく腕を振りかぶった。

「4マジシャンズ・ヴァルキリアに、3LOVサーヴァント・サキュバス-をチューニング！」

4つの星となったマジシャンズ・ヴァルキリアにサキュバスの3つの星が妖しく絡み合う。

「妖しき星が、集いてここに破滅を誘う。破滅の竜よ、顕現せよ！シンクロ召喚！汝、絶対破壊者LOVサーヴァント-バハムート-！！」

LOVサーヴァント-バハムート- 7 ATK2500 DE  
F1400

そして千影の場に破壊の体現者たる竜が顕現したのであった。だが、まだバハムートはその身体を白金に染めて力を上げていく。

LOVサーヴァント-バハムート- 7 ATK3500 DE  
F1400

「こ、攻撃力3500!?!」

強大な力を知らしめるバハムートの存在に一步後ずさるルルーシュに、千影は墓地に存在するサキュバスを掲げて言葉を発した。

「LOVサーヴァント-サキュバス-によってシンクロ召喚された

モンスターは、ターン終了時まで攻撃力が1000ポイントアップする！さあ、これにて終幕だ！！」

千影の言葉に呼応するかのようにはバムートが咆哮すると、その腕に無限熱量のエネルギーを集めていく。

「マジシャンズ・ヴァルキリアに攻撃だ！メガフレア・エクステンション！！」

「ああ、きゃああああああつ！！」

ルルーシュLPO

その号令と共に放たれた無限熱量のエネルギーは攻撃表示で立つマジシャンズ・ヴァルキリアを飲み込み、ルルーシュの1800のライフポイントさえも残さず燃やし尽くしたのだった。

しかし、ソリッドビジョンによる決闘になれていなかったルルーシュは、その攻撃に一瞬気を失い倒れかける。

「いけない！！」

なんとかルルーシュを抱きとめようと走り出す千影だったが、どうしても間に合いそうになかった。

このままではルルーシュが冷たい床に身体を打ち付けてしまう。

そう思った、次の瞬間

「お嬢様！！」

どこからか駆け寄ってきたジェレミアが間髪、ルルーシュを抱きとめるのに成功したのであった。

ルルーシュの無事な姿にジェレミアは「ほっ」と胸をなでおろすと、千影に向かって言い放つ。

「千影殿！決闘を始めて間もないルルーシュお嬢様にソリッドビジョンによる決闘を行うとは、いかなる了見か！？」

「それは」

ジェレミアのもっともな非難の言葉に千影が何かを答えようとした時、ジェレミアの腕の中のルルーシュが眼を覚ました。

「……いいの、ジェレミア」

「お嬢様、お眼をお覚ましに！！しかし！それでは  
ルルーシュの覚醒に顔をほころばすジェレミアだったが、千影の行  
いを不問とするルルーシュの言葉に、何かを言おうとするジェレミ  
アの口にルルーシュは手を当てて黙らせると、小首をかしげてジェ  
レミアに問いかける。

「そんなことより、私の決闘見ててくれた？」

このルルーシュの問いにジェレミアは何度も頷いた。

「もちろんですとも！このジェレミア・ゴッドバルト、全力でお嬢  
様の決闘を拝見させていただきました！！今回、運なく敗退したと  
はいえ、お嬢様は立派に闘われました。このジェレミア・ゴッドバ  
ルト、お嬢様にお教えしました身としては、まさに感無量でござい  
ます！！」

「そつか……私の決闘見ててくれたんだ」

ジェレミアの答えにルルーシュは、身体を支えてくれるジェレミア  
にギュッと抱きつく。

「お、お嬢様！？」

普段は見せないルルーシュの大胆な行動にジェレミアは眼を白黒さ  
せていると、少し頬を赤く染めたルルーシュがジェレミアに囁いた。  
「恥ずかしいけど、少し腰が抜けて立てないの……ねえ、  
ジェレミア

「分かりました。では、失礼します」

そんな主の言葉にジェレミアは快く頷きルルーシュを横抱え

所謂お嬢様抱っこで抱き上げると、千影の方を振り返る。

「千影殿、今回の事私は非常に納得できないが、お嬢様を不安にさ  
せていたことは私の不徳によることは事実だ。そのコトを気付かせ  
てくれたことには礼を述べよう」

このジェレミアの言葉と、中睦まじい2人の姿に千影は笑みを浮か  
べた。

「別にいいよ。これからも君のお嬢様を大切にね」



「無論だ　では、お嬢様参りますよ」  
「はい、よしなに。では、千影さんもありがとうございました」  
ジエレミアに抱かれて去っていくルルーシユの姿はまさにお姫様そのものだった。

こうして世界征服部のホストまがいの作戦は幕を閉じたのだが

美咲輝学院の中等部で1人の星徒、須王環が友人である鳳鏡夜に眸をキラキラと輝かせながら話しかけていた。

「鏡夜！昨日高等部で、すごいのを見たんだ！！」

よほど興奮しているのか鏡夜の返事を待たずに環が捲くし立てるように言葉を続ける。

「部を立ち上げよう！！高等部に入ったら、すぐに活動開始だ！我々の美貌を生かした、その名も　ホスト部！！」

「寝言は寝て言え」

あまりにも突飛でトンデモな環の発言を一蹴する鏡夜だったが、誰が予想しえたであろうか。

この次の年、環が宣言どおりにホスト部を設立し、その次の年に新体操部から『桜』を引き継ぎホスト部極星『桜蘭』を環が名乗ることになるうとは

それは、今は誰にも分からない未来のお話し。

それは、千の影を敷く姫君が紡ぐ荒唐無稽な御伽噺とはまた別のお話し。

## 第25話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

ジェレミアが主人公っぽくなっているのは何故だろうか？

こんにちはkureiであります。

今回はドラマCD第2巻、『昼下がりのウイスパール』を元に書かせて頂きました。

しかし、本当にゲストキャラの中でジェレミアだけに主人公補正みたいなものが掛かっているのはなぜだろうか？

狙って書いていないのに不思議だ……。

と、まあ今回もジェレミアが最後にオイシイところを持っていった回になり申した。

ウイスパール作戦での浅凧九郎の某部長やジェレミアの黄金勇者ネタは　はい。中の人であります。

まあ、それはそれとしてルルーシュが使うデッキをクラン・ピケルお姫さまデッキにするか、ジェレミアのように黒の騎士団のKMFをオリジナルカードとして創るか悩みましたが、前者に落ち着きました。

一応、ギアスは絶対遵守の力というカードで出させていただきましたが、これは後の今回の最強カードのコーナーで紹介します。

あと、最後のホスト部ネタはお遊びです。

今のところ、書く予定はありませんので悪しからずお願いします。

では、今回の最強カードです。

今回の最強カード『絶対遵守の力』

永続魔法

このカードの発動時に自分フィールド上にある、このカード以外の

魔法・罨カード全てを墓地に送る。このカードが表側表示であるかぎり、自分は魔法・罨ゾーンの4箇所を使用不能になる。

自分のターンエンド時毎に以下の効果から1つを選ぶ。

次のターン、相手はドローフエイズをスキップする。

次のターン、相手はメインフェイズをスキップする。

次のターン、相手は戦闘フェイズをスキップする。

チートカード登場!!

流石に王の力は絶大であります、とばかりに壊れ性能のカードとなつて登場したのはルルーシュのギアスたる絶対遵守のギアスです。

これを発動すれば、もう自分は能動的に魔法・罨カードが使えなくなりませんが「そんなの関係ねえッ!!」とばかりに相手のフェイズ3つから1つを封じられる超絶効果です。

なお、メインフェイズ2はスキップさせることができません。

こんなに強くしてよかったのかなあ、っと思いつつもやはりギアスは強力なチート能力ですからコレくらいいいしないと再現できないと思いましたがこうなりました。

## 第26話【正義の味方部篇】（前書き）

作者からのおねがい

皆様からの感想と評価こそが次の作品への活力です。

読み終われましたら是非とも感想 and 評価くださいますよう、皆様  
様をお願い申し上げます。

それと、指摘のあった見にくさを解消するために試験的にモノローグと台詞部分を1行間、シーンの転換を3行間あげましたので、そ  
ちらのほうも以前と今回でどちらが見やすかったか報告していただ  
ければ幸いです。

## 第26話【正義の味方部篇】

世界征服部の『放課後ウイーパー大作戦』を見事に打ち破ってから一日。

放課後、正義の味方部の部室である第4保健室『湊』ではやなと葵はまったりしていた。

「美咲輝新聞、今回の1面記事は『正義の味方部の最強戦力、ナイトセイバーの素顔に迫る!!』……かあ。先日の稜ちゃん加入の時の記事といい、こここのところ正義の味方部ばかりね」

新聞部が発行している美咲輝新聞の第1面には写真部が取ってきた千影の活動中の写真が、大きな見出しと共に踊っていたのだ。

はやなも、葵の手元を覗き込みながら今までの千影の戦績を思い出す。

「千影ちゃん、久遠センパイみたいに極星さん倒しまくってるからね〜」

千影がコレまで降した極星は『紫閃』、『桜流』、『朱砂』、『炭散』、『緑狂』、『橙忠』、『灰速』、『金輝』の8人。

このコトも美咲輝新聞に書かれていた。

そのこの所を葵は、はやなに聞かせるように読み上げる。

「まあね、記事にも書いてあるわ。『僅か2ヶ月足らずで全極星の3分の1を降したナイトセイバーこと、姫宮千影。彼は《紅蓮姫》の再来か!?!』とか」

しかし、久遠でさえ僅か2ヶ月で全極星の3分の1を降したという

記録はないのだ。

それ以上のスピードで極星を降していく千影の姿に、歴代最強の極星の石柱たる『紅蓮姫』を連想する星徒は多い。

しかし、『紅蓮姫』の再来とまでいわれる千影だったが、それがかなう事はないだろう。

「他にも『星徒会は彼に極星の授与する可能性が！？残り在籍期間数日の短期留学生は輝ける星となるのであろうか！？』とか」

そう。千影に残された留学期間はあと5日しかないのだ。

その事を思い出すと、はやなはしみじみと、かみ締めるように言葉を紡ぐ。

「そうかぁ………千影ちゃん、もうすぐ帰っちゃうんだね」

若干の寂しさと悲しさを漂わせるはやなの言葉に、葵もつられて視線を下に落とした。

「そうね、そうなるとココも寂しくなるかな」

だけど、今はそうならないコトをはやなは知っている。

例えば千影がいなくなるうとも、この部には新しい仲間が増えたのだから。

「でも今はさっちゃんだっているし、稜ちゃんだって入ってくれたし。それに」

このはやなの言葉に「それに？」と聞き返す葵に対してはやなは微笑みかけると続きの言葉を放った。

「葵ちゃんもずっと私のそばにいてくれるでしょう?」

この半ば愛の告白ともいえるはやなの言葉に葵は顔を赤くする。

「も、もちろんよ!何を言ってるかな、この娘は!」

はやなの殺し文句によって大荒れとなった胸の奥を沈めた葵は、今年の春先からのコトを思い出しながら、はやなを見た。

「……………それにしても、入部して2ヶ月ちよいでずいぶん変わったわね」

「言われてみれば……………2ヶ月かあ」

1学期初日の授業のあと、昼食をとりに行った先で現れた世界征服部。

それがはやなの正義の味方部、ティンクルセイバーとしての始まりだったのだ。

彼等との邂逅が、かなり昔のように感じるはやなであった。

それは葵も同じようで、はやなが纏うADを、はやなの正義の味方部での名前をかみ締めるように紡ぐ。

「ティンクルセイバー……………か」

そんな葵に、はやなも笑顔で頷いた。

「ティンクルセイバー……………だよ。あとは」

そこに来て、葵は心配そうな視線をはやなへと向ける。

「本当に公表するのね。『銀星姫』のこと」

世界征服部の極星に自分の正体が知れ渡ってはいるが、他の星徒達がそれを知っているような騒ぎは今のところ起こっていない。そのところを見ると世界征服部が仲間内のみで情報の流出を止めてくれているということなのであろう。

世界征服部の狙いが何なのか分からないが、秘密に出来るのなら秘密にしておくのが良策だと葵は考えていたのだ。しかし、すでにはやなの心は決まっている。

「うん。千影ちゃんとの思い出を、もつともつと輝くものにするためにね」

あの夜、千影に誓ったとおり空へと帰還する思いを決めたはやな。葵はそんなはやなには、何を言っても聞かないだろうということとは長い友達付き合いで良く知っていた。

「まったく、この娘は

」

ならば自分は笑顔ではやなの決めたことを応援するまで、そう思った葵はこの話を終わりにして、美咲輝新聞を次々とめくっていく。

「後は……特にもしろいニュースもないわね。『女星徒の間で流行のアクセサリーのお店』が、とかばっかりだし」

しかし、この葵の言葉に珍しくはやなが食いついた。

「もしかして、『Tokki』かな？その記事、見せて見せて」

手を伸ばすはやなに、「ほいつ」と新聞を手渡した葵が珍しいものを見るかのようにはやなを見る。



「珍しいね。はやなが食べ物以外にアンテナ立てるなんて」

確かに。はやながアクセリーに興味を示すことは今まで余りなかったのだ。

「これちょっと気になってたんだよお。……ふうん  
ちよつといつてくるよ」

はやなはそう言つと、新聞を折りたたみながら席を立つ。

「今から？」

いきなりなはやなの行動に葵がいぶかしげに聞くが、はやなは元気よく扉の前まで駆け寄ると、葵の方に振り返る。

「たまにしかやってない上に、人気ですぐ売り切れちゃうらしいの。すぐ戻ってくるから、よろしくねえ！」

葵に留守を任せて駆け出していったはやなの背に、葵は何やら不満たらたらのようだ。

「……………これじゃ部員がないじゃないのよ。新聞も持っていかれたし……………アクセサリーなんて普段つけもしないくせに」

そこまで愚痴った葵が「もお」と一息ついたところで、さつきが入室してくる。

「こんにちは」

「こんにちは、さっちゃん」

挨拶を返してくれた葵の姿を見たさつきは、珍しく1人でいる葵に声をかけた。

「あれ？葵先輩だけですか？」

「はやなも来たんだけど、なんかちょっと買い物に行ってくつて。流行のアクセサリーが、とか言ってたけど」

葵の口から漏れた言葉に、さつきはそれが何であるかすぐさま見当をつける。

「アクセ……『Tokki』ですか？」

そのドンピシャリな答えに葵は頷きながら、感心した風にさつきを見た。

「うん、そんな名前言った。流石さっちゃん、ご存知か」

「あはは……いつもながらミスターなコトですみません」

そう言っただけで頬に手を当てるさつきに、葵は逆に聞き返す。

「そう言えばさっちゃん1人？千影君と稜ちゃんは？」

「稜さんは今日は陸上部の方に行ってます。千影さんはれいさんに呼ばれているとか」

稜は予想通りの答えが返ってきたのだが、千影に関しては星徒会長の名前が出てきたので葵は首を捻った。

「水乃緒センパイに？」

「たぶん、留学期間修了に関しての話だと思えますけど」

さつきの言葉に「なるほど」と頷く葵に、さつきは少し頬を染めて後ろ手でドアの鍵に手を伸ばす。

「でも・・・それじゃあ、しばらくは2人きりですよね」

鍵の閉まる電子音の音に、葵は表情を引きつらせて後ずさった。

「何故・・・鍵を閉めるかな？」

逃げるように後ずさりする葵に、じわりじわりと距離をつめながらさつきは口を開く。

「私、前から葵先輩と2人きりになる機会を狙ってたんです」

この発現に、葵は顔を真っ赤にした。

それはそうだろう。これではまるで告白のようではないか。

「な、なにを言い出すのかな・・・」

背中に壁が当たる感触に冷たい汗を流す葵に、さつきは段々と顔を近づけておく。

「葵先輩、私」

そして何かを言おうとしたさつきに我慢の限界が来たのか、葵は顔を赤くすると大きな声で叫んだ。

「だ、ダメよ！私にはやな一筋なの！！」

しかし、葵の言葉はいい意味で裏切られることになった。

「存じてます！それなんです、私が伺いたいことは！！」

どうやら、自分が思っていたコト 告白云々とはえらく違

うさつきの言葉に、葵は素っ頓狂な声を上げる。

「はいい？」

そんな葵にさつきは、その伺いたいことを口にした。

「葵先輩ってはやな先輩といつも仲良しじゃないですか」

「まあ、ねえ……………」

未だに顔が熱い葵がクールダウンに努めながら答えたその言葉に、さつきは質問を続ける。

「最初って……仲良くなるのってどうい風にしました？」

この質問に、やっと顔のほてりを沈めた葵が昔を思い返しながらポツポツと語り始めた。

「うーん。私の場合は、ええと……中等部の時にね、初めて同じクラスになって。なあんかいつも早弁しちゃう娘がいてさ。で、午後にはパンとか食べてるんだけど、足りないんだろっねえ。ずっとひもじそうにしているその娘に我慢ならなくなって、私がお弁当作ってきてさあ……………それから、かなあ」

よほど、その時の事が面白かったのか笑顔になって語る葵にさつき

は首をかしげる。

「我慢ならない、ですか」

さつきの言葉に頷きながら葵がその理由というべきものを口にしていく。

「なんだろう、別にそうして欲しいって言われた訳でもないのに何かそうしたくなっちゃってさ。あの娘はにこにこしているのが普通っていうか・・・そうであって欲しいというか」

ここまで語った葵に、さつきは共感するものを感じたのか大きく首を縦に振った。

「わかりますう！！私も一緒です！葵先輩らしい愛情です！！」

しかしである。さつきが葵とはやなの馴れ初めを聞いてくるということは、さつきも気になる相手がいるということだ。

そのコトに気がついた葵は、さつきへと問いかける。

「すると、何？さつちゃんも誰かさんと仲良くなりたいと？」

「ああ・・・はい・・・」

そんな反応に、葵は1人の人物を頭に思い浮かべた。

「と言うか誰か、とか聞く必要もないか」

この葵の言葉に、さつきは少し頬を染めて頷く。

「ご想像の通りだと思います」

その誰かとは、正義の味方部新入部員である九行稜のことだった。そんな稜の姿を思い起こしながら、葵は難しい顔になる。

「稜ちゃんも結構わからない性格してるみたいだからなあ」

あまり表情や感情を表に出さないポーカーフフェイス、周りに自分から気を回すような気遣いは余り行わないマイペース屋。それが九行稜という人物であるのだ。

しかしである。そんな稜でも非常に仲良く出来ている人物をさつきは1人知っていた。

「でも稜さん、千影さんとはすごく仲がいいんです」

このさつきの言葉に葵はなるほど納得の言ったような表情になる。

「ああ、まあ……千影君は何ていうか誰とでも仲良くなれるというか、得も知れぬ安心感みたいなのがにじみ出てるからねえ」

葵が千影に感じていたその感覚はさつきも感じていたようで、首を縦に振りながらさつきも同意の言葉を述べた。

「それは私も感じます！何か優しく抱かれているかのような感じを千影さんから感じますから」

だが、さつきには千影のような雰囲気到底だしようがない。そこで見ず知らずの仲からはやなの親友になった葵にアドバイスを仰ぎに来ていたのだ。

そんな可愛い後輩の姿に葵は少し考えると、自分の体験から得た答

えを述べる。

「そうだなあ……私がはやなお弁当持っていた時みにいさ、さっちゃんも体当たりでいいと思うよ」  
「体当たり……」

葵の口から出た助言をかみ締めるさつきに、葵は笑みを漏らしながら続けた。

「ああ言う娘にはハッキリこうしたいって言うのがいいんじゃないかな？」

しかし、それでは余りにもリスクが高すぎやしないか。そう思ったさつきは恐る恐る葵に問いかける。

「あ……嫌われませんか？」

このさつきの問いに「そこは難しいところだなあ」と前漏らしてから助言を続けた。

「でも、あの娘は……おっかなびつくりじゃダメだと思う。それに嫌われることを恐れちゃ友達なんてできないわよ」

「葵センセイ!!」

その正鵠を射た助言にさつきは感極まると、葵へと飛びついたのだ。

「ああ、こらこら抱きつくな!と、いつか誰がセンセイか」

さつきの体重を支えきれず、後ろのベッドに倒れこんだ葵がさつきを引き剥がそうとするのだが、この世と言うのは中々に面白い方向

に物語りを進めるのがお好みのようにだった。

「あれ〜？鍵かかったのに誰かいるのかにや〜？」

ここ、第4保健室『湊』の主たる霧瀬がカードキーをひらひらさせながら入ってきたのだ。

「「あつ………」」

当然、保健室の中にはベッドに横になるさつきと葵の姿。

と、なれば今までの過程を見なかった人間にはその場面がどのように映るのかということ

「ほ、保健室をそう言う用途で使ってもいいのは18歳以上向けの作品だけよー!!」

と、なるのが世の常である。

そんな勘違いした霧瀬の誤解を解こうと、さつきが顔を赤くして手をあたふたと動かす。

「ああ、違います〜!!」

しかし、霧瀬はそんなさつきにアルカイックスマイルを浮かべながら拳を握り親指を立てる  
いわゆるGJサインを2人に向けた。

「先生はそう言う世界も応援する方だからネツ!!」

「そう言う世界ってなんですか!？」

あまりにも電波な霧瀬の言葉に葵が大声で反論するが、霧瀬はどこ



吹く風と電波な言葉を続ける。

「安心して！正義の味方部は男子禁制だからね！！」

この言葉に葵は目の前の教諭の頭がとうとう涌いたのかと思った。  
何故なら

「千影君は男の子でしょうに！！」

そう。男である千影がすでにいるのだから、正義の味方部は既に男子禁制ではなくなっているのだ。

しかし、霧瀬の頭の中では千影の立ち居地はこうなっていた。

「あの子は男の娘だからいいのよお！！」

あまりにもあんまりな発言に、葵は頭痛がより一層酷くなるのを感じていたのだが

「あつ！私もそう言う世界大好きですう！！」

ここに来て霧瀬の盛り上がりで触発されたのか、さつきがトンでもないことを口走ったのだ。

「さっちゃんも、ここでそんなコトをカミングアウトをしない！」

さつきへとツツコミを入れる葵だったが、そうなるともう霧瀬は止まらない。

「『葵×さつき』は考えなかったわあ。『葵×はやな』、『翔子×はやな』とか『稜×さつき』が王道！」

今までの人物相関図から勝手にカップリングを作って盛り上がる霧瀬に葵は「もうダメだ」と突っ伏した。

「業界用語もやめてください……………」

しかし霧瀬の暴走はとどまる所を知らない。

「ああ、姫宮さんはどの娘とのカップリングでも総受けね！これはガチよお！！」

「『さつき×千影』……………ぽっ」

暴走する霧瀬と千影とのカップリングに頬を染めるさつきに、とうとう葵は頭を抱えてい舞うのだった。

「さっちゃんも嬉しそうにしない……………！！」

もう何というか、アレである。「ダメだこいつら……………、早く何とかしないと」と言っやつである。

そんなトンでもない展開が保健室で繰り広げられているとは露とも知らないはやなは、手に持った新聞の地図と睨めっこしながら件の店を探していた。

そろそろ地図の赤い点が示す場所に近づいたはやなは辺りを見渡すと、1件の店の前で数人の女子生徒が、その店を指差しながらお喋りしているのを見つける。

「このリースフルってアクセサリ。ほんつとくにスゴイ効果が

あるんだって！」

「マジでえ？」

「縁結びで1人1人の相を見て、作ってくれるんだってさ。人によつては彼氏できたとか、友達と仲直りできたとか、いろんな縁を結んだり強めたりしてくれるらしいよお！」

「ええっ！私も作ろうかなあ！！」

彼女達の言葉の通り、そこそがはやなの探していた『Tokki』であつた。

未だに談笑を楽しむ少女達の横を通り、はやなは店の中へと入っていく。

「こ・こ・かなあ　お店の人はっあ……と」

上手いこと開店している時に店を訪れることが出来たことに、はやなは歌を口ずさみながら辺りを見渡すと、1人の女性がはやなの元に歩み寄ってきた。

「いらっしやいませ。アクセサリーショップ『Tokki』へ、ようこそ」

その人物は誰であろう、世界征服部が部長たる秋篠夕霞であつた。

しかし、未だに夕霞は前線に出ていないこともあつてか、はやなを始め正義の味方部の面々には面は割れていない。

まさか、世界征服部の部長がアクセサリーショップの店員をしているなどとは露とも知らないはやなは、その夕霞に手に持った新聞を広げて見せた。

「すみませ〜ん、コノ新聞に載つてたのってココですよね？」

その新聞の内容を見た夕霞は、世界征服部とは違う日常使用の柔らかい笑みで頷く。

「はい。こちらで受け付けてます」

そんな夕霞に店の奥から、他の客をさばっていた店員が声をかけた。

「夕霞ー！次のお客様なら引き受けるよー！」

その御堂あきの声に夕霞は頷き「では、あきちゃん。ご案内を」とはやなをあきへと任せ入り口にいる客の応対へと向かっていく。しかし、忘れてはいけない。

そのお客とは正義の味方部、ティンクルセイバーのはやなであるということ。

「はいはい と……って、ティンクルさん!？」

まさかの正義の味方部とのエンカウントにあきが驚きの声を上げることが、それははやなも同じことだった。

「おやあ!？征服部の白い人だあ!！」

そのはやなの言葉に、あきはガツクリと方を落とす。

「し、白い人って……御堂あき、だよ！」

「ご、ごめんね。名前とか覚えるの苦手で……」

そんなこんなをしているうちに、2人の大声を聞きつけたもう1人の店員が奥のほうから顔を覗かせた。

「うん？ティンクルさんて  
！」

おっ！はーちゃんやないのお

またしても知っている顔の登場に、はやなは「もしや」と店内を見渡しながら、その推理を口にする。

「翔子ちゃんまでえ！？もしかしてこのお店、また征服部さんの？」

そう。『放課後ウイスパー大作戦』の名のもと、ホストまがいの征服活動を昨日まで行っていた世界征服部である。

そうであるならば、この店も征服活動の一環ではないか  
はやなはそう考えたのだ。

「ちゃうちゃう。これは友達の部を手伝ってるだけや」

笑顔で手を横に振りながら翔子は言葉を続ける。

「あんまり活動してなかった部なんやけど、ウチがプロデュースを考えてな。モチロン！営業許可も取ってあるしな」

だが、当の翔子もはやなが疑ってかかるのも無理はないかと思っていた。

「……………と、言っても信じてくれるかなあ。  
ウイスパーズとかやってたの昨日の今日やし」

しかし、はやなは翔子の言葉にニパツと笑顔になると頷く。

「なあるほどお。じゃあ安心だね」

「……………納得早いね」

あまりの納得の早さに、あきが予想外といった風にはやなを見る中、はやなは笑顔を崩さずに、その理由を述べた。

「征服部さんって、時々悪いこともするけど……あんまり嘘ついたりするイメージないし」

確かに、世界征服部が黒い謀を仕掛けてきたことなどあまりない。あるとすれば八草重による極星4人による包囲網と、先日、『放課後ウイスパ―大作戦』のみである。

極星が出てくるにしろ出てこないにしろ世界征服部の活動は、破壊行動と迷惑行動が見られるとはいえ、常に正々堂々としたものだったのだ。

そんな思いもよらぬ、はやなからの評価にあきは少し頬を染めながら頷いた。

「ああ……ありがとう」

「いえいえ。私も普通にお買い物したいし」

あきのお礼の言葉にはやながそう返したところで、翔子が待合の列へとはやなを導く。

「じゃあ、コチラに並んでください」

翔子の言葉に「はい！」と元気よく返事するはやなに、あきは翔子の方を見た。

「後は翔子ちゃんに任せたほうがいいかな？」

その問いに「OKやで」と答えた翔子に1つ頷くと、あきは別の客の対応へと向かっていく。

そんなあきを見送ったはやなは、改めて店舗の中を見てみると、驚くべきものがあることに気がついた。

それは

「うわーっ、お店の中に占いやさんみたいなテントが……」

そう、黒い暗幕で建てられたテントがあったのである。

「あんなかで店主が待つてるからな。この用紙に記入しながら待つてな」

はやなが見つめるテントを指差しつつそう言った翔子は、はやなに1枚の用紙とペンを手渡したのだった。

その用紙とペンを手に取ったはやなは、まるで本当の占いの館みたいな雰囲気、心に弾ませる。

「なあんか、楽しみだねえ」

今にも飛び跳ねそうな様子のはやなに翔子は笑顔になると、はやなに尋ねた。

「はーちゃんは何の想いを込めてほしいん？」

この翔子の問いかけに、はやなは首をかしげる。

「へっ？込める？」

未だにココのシステムを理解できていなかったはやなに、翔子はコ

コで売られるアクセサリーのことを教えた。

「ココのはな、1個1個に願いを込めて貰うんよ。縁を深めたい相手への願いをな。自分の願いが籠ったアイテムやから、ありがたみが増すわけやね」

「なるほどお。私はねえ」

と、翔子の言葉に答えようとしたはやなだったのだが

「き、貴様は!?!」

列の最前列で並んでいた八草重が、はやなの姿を見て取ると足音荒くはやなの方へと歩み寄ってくる。

そんな八草重の登場に、はやなはもう驚くことはなかった。

「ありや?今度は征服部の紫の人」

しかし、名前を覚えていない人物の呼び方は顕在だったようだ。

「なんだ、その呼び名は!?!」

『紫閃』で紫との安易なネーミングに肩を怒らせる八草重に、翔子も笑みを漏らす。

「わかりやすいなあ」

そう言って茶化す翔子の姿に額に青筋浮かべる八草重だったが、今は訂正させるべき事柄があることを思い出すと、はやなに向かって言い放った。



「敵の名前ぐらいキチンと覚えて置け！」

この八草重の言葉にはやなは懸命になって、目の前にいる人物の名前を思い出そうとする。

「えつと・・・や、や・・・あつ！」

そこで思い出したのか、頭の上に！を浮かべるとその名前を口にしたら。

「ヤエグサさんも並んでるんですね！」

「八草重だ！！」

はやなの狙っていなかったポケに全力でツッコミ返す八草重の姿に、翔子は「それはそうと」と八草重の方を向く。

「八草重君がこう言うところに来るとは思わなかったけどねぇ」

そんな意地の悪い翔子の視線に少し居心地を悪くした八草重はソッポを向いた。

「な、何でもいいだろう・・・」

これ以上の意地悪は可哀想だと思ったのか、翔子はソコで切り上げることにすると、一応店員としての注意を八草重にする。

「はいはい。詳細はツッコまへんけどな。列にはちゃんと並んでや？」

八草重は前のほうの列から抜けてココまで来たのだ。

一旦離れた列にそのまま戻るのはマナー違反である。

「む……わかった」

そのことを言われた八草重は、素直に納得するとはやなの前に並んだのだ。

そんな八草重を笑顔で眺めていたはやなは、自分までの人数を数えて行くと

「ひと……ふと……みつと……あと3人くらいかあ。

あれえ……列の前のほうにも知ってる顔が」

またしても知っている人物の姿に笑みを漏らしたのであった。

女子星徒の客が頭を下げて、テントから出て行くのを見送ったあきは次の客を招くべく、最前列にいた人物を見ると苦笑を漏らした。

「はーい、それでは次の人　　てえ、祐君と七月男君かあ」

はやなが眼にした知っている人物とは、世界征服部が元下つ端部員AとB。現在は世界征服部浅凧隊長補佐を努める新井と松田であったのだ。

「よろしくおねがいますッ！！」「」

あきの案内より早くテントの中へとなだれ込んだ2人は勢いよく頭を振り下ろすと、込めたい願いを叫ぶ。

「込めたい願いは結婚！できれば3重婚でえッ！！」

「込めたい願いは、ちーちゃん・はーちゃんの愛ッ！できればダブルでえッ！！」

しかし、この2人のは願いと言うより欲望と言った方が正しいのではなからうか。

そんな2人の欲望　　もとい、熱い願いに『Tokki』店主たる冴はタジタジになっていた。

「あ、あの……あんまり具体的なのは無理だから……  
……ね」

この冴の言葉に新井と松田は、机から身を乗り出して叫ぶ。

「あきちゃんとセンセイと、ちーちゃんの3人と結婚できるヤツは無理なのかあ!？」

「ちーちゃん、はーちゃん2人が俺を愛してくれるヤツはあああああッ!？」

欲望　　もとい、熱い願い全開の2人の叫びに冴は首を横に振って答えた。

「……………どつちも……………ごめんね……………」

しかし、それでも2人は引き下がらない。

「じゃあ、1人なら可能？年齢的にもOKなセンセイの方ならいける!？」

何とかしてもらおうとさらに身を乗り出す新井に松田はツッコミを入れた。

「って、言うか新井！そもそも結婚なんて、お前が年齢的に無理だろうツ！！」

「おう！？言われてみれば！！」

松田に言われるまで、その致命的なところに気がつかなかった新井に松田は「やれやれ」と腰に手を当てる。

「もうちょっと考えてから来いよぉ！！」

そんな松田の姿に新井は反撃に出た。

「なんだよ！ちーちゃん・はーちゃんとか言ってるお前に言われたくねえ！！それならコツチにちーちゃんをY O K O S E ツ！！」

段々とヒートアップしていく莫迦2人の喜劇的な掛け合いに天からの罰が下る。

「はい、はい！この注意書きを読むようにと言ったよなぁ。読めるう！？」

2人の頭に一撃ずつ落とした翔子は、手に持った注意書きを2人の前に突き出した。

そんな翔子に2人はドツカれた頭を押さえながら、言葉を返す。

「あたぁ！！・・・読めるよぉ！  
ないが」

程よく理解はしてい

「俺は読めない部分があったなぁ」

霧瀨なみにダメな2人の発現に翔子は激しい頭痛を覚えた。

「この子らはあ……」

しかし、ここでもっともな疑問があきの口から発せられる。

「そもそも祐君たち、お金あるの？」

そうなのだ。

前回語られたように、新井と松田の2人は塩と水の食生活がデフォルトになっている赤貧コンビである。

そんな彼等がアクセサリーなど買う金があるのであるのか。

と、いうあきの言葉に新井は自信満々に財布を取り出して叫んだ。

「あるさあ！33円ッ！！」

机の上に巻かれ新井のジャリ銭に、松田は1つ鼻で笑う。

「それでは無理だろ新井！さあ、この515円でッ！！」

そして何故かある500円札と残りの硬貨を、これまた自信満々に置く松田に翔子は鋭くツツコミを入れた。

「激足らんわっ！！はっい、お二人様退場！！！」

イエローカードどころか、レッドカードを100枚もらった莫迦2人は劇画調に顔を驚愕に染める。

「な、なんとおおおッ！！！！」

しかし、店と言うものは銭なし者には容赦のないもの。

「まったね」

「む、無念……………」

笑顔で手を振るあきの姿に2人は肩を落とすとベソをかきながら、その涙も拭わずにテントから出て行くのであった。

情けなくも涙を流しながらテントから出てきた新井と松田に、八草重は1つ舌打ちを打つ。

「まったく……………あいつ等はどこにいても五月蠅いな……………」

そんな莫迦2人は己の流す涙に視界が奪われているのか、はやなの姿に気がつくことなく店から出て行ったのだが、はやなもはやなで翔子から渡された用紙に書かれた注意事項を読むことに躍起になっていたため2人がテントから出てきたことに気がつかなかったのだ。

「ふむふむ。このリースフルリングって言うのは要するに仲良しペアリングなわけですねえ」

そこまで注意書きを読んだはやなは顔を上げると、「そう言えば」と前に立つ八草重に問いかける。

「八草重さんは誰と仲良くなりたいんですかあ？」

「ぼ、僕は・・・・・・・・・・」

このはやなの言葉に八草重は視線を「いらっしやいませ」と客の応対に応えている夕霞に視線をやると、顔を真っ赤に染めた。しかし、その質問を投げかけた人物が誰であるか気がつくのと、真っ赤になった顔を大きく横に振りながらはやなに言い返す。

「・・・・・・・・み、みみたぶ・・・・・・・・じゃなかった、味方部に教える義理はない!!」

あまりに心拍数が跳ね上がっていたためか、珍しくも台詞をかんた八草重の姿にはやなはしつく言葉が続けた。

「今は、部活動関係ないじゃないですかあ」

だが、そろそろ八草重の堪忍袋の緒も限界らしい。

「馴れ合うな!」

この八草重の一喝にはやなが「はううっ」と驚く中、あきの言葉が店内に響いた。

「次の方、どうぞー」

「あ、はい!」

あきの言葉に待ちわびたかのような返事をする八草重の姿に、翔子は笑みを漏らすと視線を夕霞の方にやりながら八草重に耳打ちする。

「八草重君もカワイイところあるねんなあ」

「う、五月蠅い・・・・・・・・・・」

その翔子の視線の先にあるものに気がついた八草重は、素晴らしい残すとそそくさとテントの中に入って行ったのだった。八草重を送り出した翔子は、「さてと」とはやなの方を向く。

「はーちゃんはあ、もちろんウチとの仲良しリングやね」

その期待の籠った翔子の目にはやなは困った表情を見せた。なぜなら、今日の買い物の中には翔子の分は含まれていないからである。

しかし、袂を別つたとはいえ今でも翔子を大切にしたい気持ちは当然持っているはやなは何とか当たり障りのない言葉を搜した。

「ああああ・・・ええつと・・・翔子ちゃんとのやつもつづくろっかなあ」

そんなはやなの気遣いに翔子は苦笑を漏らす。

「あはは、わかつとつたけどな。本命はウチやないんやねえ、寂しいわあ」

「・・・・・・・・ゴメンねえ」

翔子の期待を図らずも裏切ってしまったことへの罪悪感にはやなが肩を落とす中、翔子が笑みを浮かべてはやなの肩を叩くと、ポケットの中に忍ばせていたあるモノをはやなへと差し出した。

「なんてな！今日は会えるとは思ってへんかったけどコレ持っててな」

翔子から差し出されたモノ

アクセサリーショップ『T.O



k i」謹製のリースフルリングにはやなが首をかしげる。

「コレは？」

「ウチがここで作ってもらったリングやねん。はーちゃんといいライバルであるようにってお願いしてあるわ」

はやなの手をとり、リングを握らせながら言った翔子のその言葉にはやなは星が瞬いかのような笑みを見せた。

「ありがとう」

かつて道は違えようども、2人は同じモノを先見て道を進んでいるということを変更てはやなは実感したのだ。

自分の番を終えた八草重が商品を手にテントから出ながら、冴に釘を刺す。

「今日の事は他言無用だぞ……!!」

そんな一途な恋に一所懸命な八草重の姿に冴は微笑を浮かべた。

「……大丈夫。夕霞ちゃんには………秘密にしておくね」

「うっ………莫迦者！名前をだすな!!」

冴の放った言葉が他の人間に聞かれていなかったか、前後左右どこるか天井と床までも見渡す八草重に冴は謝罪を述べる。

「うっ……ごめん……」

一応、先ほどの事は誰にも聞かれていなかったようで、そのコトに安堵した八草重が入ってきた時同様にそそくさと店から出ていく中、冴は外に向かって声を発した。

「つ、次の方どうぞ」

「ほな、はーちゃんの番やで」

冴の言葉に呼応して翔子がはやなをテントの中へと導くと、はやなは「うん」と返事をして開けられたテントの中へと入っていく。

「よろしくお願ひします」

朗らかに挨拶したはやなに、冴も微笑を浮かべて頭を下げた。

「……いらっしやいませ。……』Tokki』店主の……鴉神です」

如何にも魔法の装いな冴の姿に、はやなは手と手を合わせて合点のいった顔になる。

「なあるほど。世界征服部の黒い人のお店だったかあ」

そこまで言ったはやなは「あっ！」となって言葉を付け加えた。

「征服部関係ないって聞いてますから、私も味方部関係なくってただのお客さんです」

そんなはやなのノーサイド宣言に冴は笑顔で「はい」と頷くと、手

元にある紙を差し出しながら告げる。

「……………それでは……………貴方が縁を深めたい相手のお名前を……………コチラに」

と冴から差し出された紙を前に、はやなは首を横に振りつつ口を開いた。

「あ、それなんですけど今回私がお願いしたいのはペアのリングじゃないんです」

このはやなの言葉に、冴は首をかしげる。

「……………いごと……………?」

「実は」

首をかしげる冴にははやなは、今回作ってもらいたいモノがどういうものであるのかを冴に語りだしたのだった。

はやなが冴と話し合いをしている中、星徒会長から呼び出された千影はその星徒会長、水乃緒れいと共に店が立ち並ぶ区画を歩いていた。

千影の隣を歩くれいは、千影に申し訳なさそうに口を開く。

「ごめんなさいね。貴方とはゆっくりお話したかったのですが、どうしても片付けなければならぬ仕事が入ってしまって」

そんなれいの言葉に千影は笑顔で首を横に振った。

「星徒会長としては部活動の巡視も立派な仕事　　しかも不定期の部活であるなら尚更の事。私のような1短期留学生に時間を割くほどの事でもないよ」

千影のこの言葉に、れいも表情を綻ばす。

「そう言ってもらえると助かります。あのお店で最後ですので、終わったらゆっくり腰の落ち着かせられるところに行きましょう」

そうして千影はれいの指差した店、アクセサリーショップ『Tok i』へと足を踏み入れたのだった。

初めて足を踏み入れるアクセサリーショップに店内をぐるりと見渡している千影を尻目に、れいは見知った顔に言葉をかける。

「盛況のようですね」

この言葉に驚いたのは他でもない夕霞であった。

「会長！いらっしやいませ」

まさかの星徒会長訪問に、店の奥へと案内しようとした夕霞をれいは手で制す。

「ごめんなさいね。お客ではないんです。様子を見に來ただけですが順調のようですね」

れいの率直な感想に、夕霞も做って店舗の中を歩きかう星徒や冴に願いを込めて貰うべく並ぶ星徒の列を見た。

「はい。冴の役に立ててよかった。たまには征服部で関係ないことで盛り上がるのも楽しいですね」

そこまで言った夕霞はれいの隣に立つ人物に眼を留める。

「あら、そちらの方は……………」

書類の上ではよく夕霞がよく見る人物だったが本人を見るのは初めてのようで、夕霞は千影の姿をまじまじと見つめるなか、れいが笑みを浮かべると夕霞の前に千影を連れてきた。

「この度、修了を控えた短期留学生の姫宮千影さんです。少しお付き合っていたいただいているんですよ」

「そうなんですか。始めまして、星徒会で副会長をやらせていただいている秋篠夕霞です」

自己紹介をしながら頭を下げる夕霞に千影は同じく頭を下げる。

「どうも、ご丁寧に。先ほど紹介された姫宮千影です。世  
界征服部部长さん」

そんな千影から放たれた言葉に夕霞の表情が驚きへと変わった。

「なっ！そうしてそれを」

それはそうだ。

何故なら今まで夕霞は表舞台に立たなかったのだから、正義の味方が知りようがないのである。

では、れいが教えたのかといえば夕霞と同じように驚いているれいを見れば一発でシロだと言うことは確実だった。

存外に慌てふためく夕霞とれいの姿に千影は苦情を漏らすと、頬をかきながらその結論に至った考えを述べる。

「あ、やっぱりそうだったか。いや何、君の醸し出す雰囲気か人の上に立つ者のモノだし、店内を見渡してみても店員は世界征服部の部員だからひょっとしてと思ったただけなんだけどね」

この半ば当てずっぽうな推理に、まんまと鎌をかけられたことに気がついた夕霞は慌てていた表情を笑みへと変えた。

その笑みの理由は、世界征服部の部長だということがバレても大きな問題は別にないと結論に至ったからである。

「恐れ入りました。流石ですねナイトセイバーさん」

そんな夕霞の心の内を察したのか、千影も笑顔になると首を横に振った。

「今は世界征服部の皆も普通に店員やってるみたいだし、今はただの修了間近の1短期留学生だよ」

互いの言葉の裏で交わされた停戦協定に夕霞は満足げに頷く。

「そうですか」

そうして笑いあう千影と夕霞に「それにしても」とれいが話題を変えに入ってきた。

「いつの世も、女の子は本当にこう言うものが好きなのですね」

れいからのこの気遣いに千影と夕霞もコレ幸いと、その話題に乗る。

「星徒会長はこう言うのに興味は？」

千影から放たれた問いにれいは首を横に振った。

「私は、こう言うものには疎くて」

「縁結びの相手とかは？」

続けて夕霞の口から出てきた問いにれいは頬に手を当てながら答える。

「そうですね、強い縁で結ばれていると信じている相手ならいます」

この言葉に千影はれいが先代の『蒼雷』であることを思い出すと、その人物に当たりをつけた。

「それはひょっとしなくても、さつき？」

千影の問いに頷くれいに、夕霞は質問を続ける。

「アクセサリーなんて……と、いう感じですか？」

「似合わないだけですよ」

そんなこんなで会話に花を咲かせる中、一連の作業が終わったのだろう。

テントから声が漏れ聞こえて来た。

「ありがとうございます」

「こちらこそ、どうもお」

そして、テントから顔を出した人物とは

「あなたは」

「はやな！」

それは冴に希望した願いを込めてもらった商品が入った袋を携えるはやなだった。

名前を呼ばれたはやなはその声の主がどこにいるか、すぐに目をつける。笑顔で駆け寄ってくる。

「千影ちゃん！それに、水乃緒センパイにまでお会いするとはあ」

そう言っただけ千影とれいの前に立ったはやなに千影は小首をかしげながら問うた。

「そう言うのはやなこそ、1人？」

「うん。ちょっと思うところがあったねえ」

そんな2人の姿にれいは何かを思いついた顔になると、はやなに向かって口を開く。

「奇遇ですが、いい機会です。少し時間をいただけませんか？」

「はい？私ですか？別にOKですけども」

れいのこの言葉に、はやなは不思議そうにするが二つ返事で応じたのであった。

場所を食窓外のカフェに場所を移した3人は、それぞれ飲み物を手



に1つのテーブルへと腰をおろす。

そして千影とはやなが飲み物に手をつけ一息入れたところでれいは2人に向かって頭を下げた。

「すみません、付き合わせてしまって」

そんなれいに千影とはやなは首を横に振る。

「いやいや」

「そうですよ」

千影に続いてそう言ったはやなは笑みを湛えたまま言葉を続けた。

「でもお、センパイとお話するのも久しぶりですね」

このはやなの言葉にれいは頷くと、かつての事を思い返す。

「はい。あなたが『銀星姫』の名前を封じて、しばらくはお話する機会が取りにくかったですから」

れいはさつきから正義の味方部内では『銀星姫』であることを、はやなが明かしていることを聞いている。

だからこそ、こうして千影のいる場ではやなのトップシークレットたる『銀星姫』の話ができるのだ。

そう言ってきたれいの言葉にはやなは笑みを持って返す。

「あははは。今日はその辺のお話ですか？」

しかしれいは首を横に振って否定の意を示した。

「あ、その辺は特には」

続けてれいは眼を閉じて、かつての星徒会長が言った言葉を反芻する。

「『銀星姫』の名はあなたが思った時に、思うようにすればいい。

私もるりね先輩と同じように考えていますから」

今も昔も変わらず自分に味方してくれるれいの存在に、はやなは万感の思いを込めて頭を下げた。

「水乃緒センパイ……ありがとうございます」

そして、心に決めた空への帰還をれいへと語る。

「それと、『銀星姫』に関しては久遠センパイや律センパイ、るーちゃんに水乃緒センパイが待った時が遂に来そうです」

この含みを持たせたはやなの言葉に、れいは「とうとう来たか」と期待を込めて聞き返した。

「と、言うこと?」

「私が『銀星姫』であることを皆に明かします」

れいの期待に違わぬはやなの言葉に、れいは眼を閉じて背中を椅子の背に大きく預ける。

「そうですね……。遂に決めたんですね」

思い返せば「長いことだった」とかつてを振り返るれいに、はやな

は元氣よく頷いた。

「はい！あつ

！！」

そこではやなは千影の存在を思い出すと、一番最初の疑問であった千影の同伴の訳を尋ねる。

「それはそうと水乃緒センパイと千影ちゃんが一緒にいるのは何故ですかあ？」

「私も未だに呼び出された理由を聞いてないね」

このはやなの質問に千影も同意するように頷くと、千影とはやなは2人して、れいの方を見た。

2人の視線が集まる中、れいは笑みを湛えたとその理由を話す。

「ええ、それは2ヶ月間この学院に短期留学していた千影さんに、この学院がどう映ったのかを聞こうと思ひまして。外部から来た人のこの学園の評価に興味があるのです」

そう述べたれいの言葉に、はやなも嬉しそうに身を乗り出した。

「あつ！それは私も聞きたい！！」

「是非とも忌憚のない意見を聞かせてください」

はやなとれいからの期待の籠った視線に、千影は腕を組むと少し考える。

「そうだなあ

つとー！」

そこで1つピンと来たイメージがあったので、千影は2人に頭にひ

らめいたイメージを述べた。

「私は、この学院は1つの銀河だと思う」

この千影の言葉にはやなとれいは首をかしげる。

「1つの？」

「銀河？」

余りにアバウトすぎる発現に頭をこんがらせる2人の姿に千影は微笑を浮かべると、そのイメージが湧きあがって来た理由を述べていく。

「うん。強く輝く極星を筆頭にして数多の星徒たちが輝く星々の集合体たる銀河。この学院が謳う『自由自在』が広大な宇宙空間をなして星々を縛らず、時に激しく輝く極星の魂の輝きが他の星々を照らし出す。そしてその色と魂が次代の星々へと受け継がれていく

まさに1つの銀河だ」

美咲輝学院を広大な宇宙と定義し、3等星以下を星徒、明るい2等星を極星、一番明るく輝く1等星を『姫』と『覇』と位置づけた千影のイメージはなるほど。なかなか理にかなっていた。そう千影が評した美咲輝学院の星徒会長は、千影に深々と頭を下げる。

「そうですか……ありがとうございます」

そんなれいの姿に千影は慌てて、手を横に振った。

「いや！頭を下げてもらうほどの事を言っただつもりは

」

千影はただ、心に浮かんだイメージを語っただけである。

しかしその言葉こそが、代々の星徒会長がこの学院をそう足らしめんと努力してきたコトだったのだ。

千影は図らずも、最大限の賛辞をれいに送ったのだ。

「いいえ。その評価こそが、この学院にとっての最大の賛辞なのですよ」

慌てる千影に、笑みを漏らしながら首を横に振ったれいの言葉に千影も、れいの心の内をそれとなく理解すると笑みを浮かべる。

「そうですか」

「はい。それから」

千影と笑みを交わしたれいは次いで、はやねへと視線を移した。

「これは鈴鳴さんにも聞きたいことなのですが、いいでしょうか？」

このれいの問いに「なんででしょう？」と首をかしげるはやなに、れいは言葉を続ける。

「後輩の話なんです」

れいの後輩と言うキーワードにはやねと千影は、1人の人物に当たりをつけた。

「後輩？」

あつ、そっか」

「さつきの事だね」

れいが気にかける後輩であり、はやなや千影とも親しい人間とくれば、さつきしかいない。

この考えは的中のようで、れいは1つ頷くと、そのさつきの事に関して2人に問いかけてきた。

「はい。天宮さんはあなた達の眼から見て、がんばっていますか？」

そのれいの問いに、はやなは首を大きく縦に振って答える。

「それはもちろん！」

「この間も新入部員を連れてきてくれたしね」

はやなに倣い、首を縦に振った千影の言葉に、はやなは続けた。

「私より頑張ってるんじゃないかなあ・・・っと思うときもありますもん」

「それに稜とも同学年で極星を継いだ仲として、仲良くしてるし」

さらに千影が、新入部員である稜との良好な さつきにし

てはまだまだらしいが、傍目から見れば十分に仲のいい

関係を作っているとの言葉に、れいは満足げに頷く。

「そうですね」

そんな感じで頷く、れいの姿にはやなは少し以外気に思った。

「なぎなた部もあるのに誘っちゃったんで・・・怒られるかと思っちゃいました」

確かに自分が見初め、代々受け継いできた極星を継がせた新極星が、

どこの馬の骨ともわからない部に所属するのは先代としては業腹モノ  
ノ　　と思うのが普通であろう。  
しかし、れいは違った。

「その所は、先代の『蒼雷』としてどのように？」

そんな先代『蒼雷』としてのれいの心の内を知ろうと発せられた千影の言葉に、れいは眼を閉じて、さつきが目指していたモノを思い返す。

「あの娘は『姫』と言う存在に憧れて極星を目指してましたから。

鈴鳴さん　　あなたの側にいることは彼女の望みでもありませんし、勉強にもなるでしょう」

さつきが正義の味方に憧れたのも、はやなが持っていた『銀星姫』の輝きに知らず知らずの内に惹かれていたのである。そう思うっていたのだ。

そして『銀星姫』と共にあることで、さつきは新たな位階に上れるかもしれない。

そう、さつきが憧れていた『姫』という位階に。

そんな思いの籠ったれいの言葉に、はやなは微笑を返した。

「なってるといいんですけど」

そんな立派なことをした覚えがないのに持ち上げられて照れるはやなから、れいは視線を千影に移す。

「それと、姫宮さん」

このれいの言葉に千影は「うん？」と返すと、れいは千影にも笑み

を浮かべ語った。

「あなたのその自然なあり方も、芯にある力強さも、あの娘の明日への糧となっていてます」

「私はそんなに大それたモノではないよ」

れいの賛辞に千影は首を振るが、れいは首をかしげる。

「そうでしょうか？あの娘が私と話すときの話題にはどれにもあなたが出てきていましたよ。あなたが直接関わらなかった事柄にも・・・です。あなたはそれだけ回りに影響を与えずにはいられない人なのですよ」

そこまで言っただれいは、なぎなた部の時のさつきの姿を思い返すと言葉を続けた。

「それになぎなた部では、多少窮屈そうにもしていますから。気楽に過ごせる場所があるというのは、いいことだと思つのです」

さつきは、祖母の祖母の祖母の代から続く由緒正しい長刀流派『天宮流長刀』の次期当主でもある。

そんな彼女が、なぎなた部で望まれる役どころはここで語るまでもないだろう。

顔には出さないが、日々その重圧と戦うさつきを姉弟子であるれいが気にかけないわけがないのだ。

そう、現在のさつきの環境を上々のものだと述べるれいに、はやなは頷く。

「お気楽さには自信ありますね、ウチの部は」



このはやなの答えに満足したのか、れいは2人に向かって頭を下げた。

「お話しが聞けてよかった。これからも彼女をよろしく願いします」

そんなれいの姿にはやなも千影も笑顔になると、倣って頭を下げる。

「はい。よろしくされちゃいます」

「私も……後数日だけど、彼女が胸を張って、私と言う人間と轡を並べたのだと言ってももらえるように努めるよ」

はやなと千影の言葉にれいは改めて頭を下げると、2人に感謝の意を述べた。

「ありがとうございます。私は彼女には早いうちに『蒼雷』を継がせたかったので、その背中を押してくれた鈴鳴さんと、そんなあの娘の友となってくれた姫宮さんに感謝しております」

頭を下げるれいに、はやなも感謝の意を込めてもう1度頭を下げる。

「こちらこそ、あんな頑張り屋さんを送り出してくれて……感謝しています」

そう言ってくれたはやなと、頷く千影の存在に、れいは深く深く星の導きに感謝したのだった。

「たっ だいまー!!」

「今、戻ったよ」

そうして、第4保健室へと帰ってきたはやなと千影に、正義の味方部顧問の霧瀬が声をかけてくる。

「遅かったわねえ、鈴鳴さん。それに姫宮さんも」

そんな霧瀬に挨拶を交わす千影とはやなに、葵は千影に挨拶をする  
と次いではやなに問いかけた。

「こんにちは千影君。それとはやな、お帰り。お目当てのもの買えたの？」

「お目当てのもの？」

葵から発せられた言葉に霧瀬が首をかしげるなか千影は、はやなが『Tokki』にいたことを思い出す。

「そういえばアクセサリーショップにいたね、はやな」

「うん！ちよっとビックリしたけどね」

まさか、そのアクセサリーショップの店主をしているのが世界征服部の『黒帝』で、プロデューサーが『桜流』、手伝いが『白煌』に部長。

止めにお客の方にも世界征服部の部員までいたのだから、本来ならばビックリどころこの騒ぎじゃないのだが                      そのところはあえて話題に出すことはないだろう。

仮にその話題を振っていたとしても、次に出てくるモノでその事も吹っ飛ぶことになるのだが、そのモノとは

「じゃ〜ん！〜！」

はやなの声と共に袋から取りだれたモノは5つの指輪だった。

「あ、それは」

その取り出された指輪に反応したさつきに、はやなは笑顔で頷くと銀色の指輪を手取る。

「さっすが、さっちゃん。チェックしてたあ。リースフルリングって言うんだって」

光に翳しながら「綺麗だよねえ」と呟くはやなに、さつきは首をかしげた。

「でも、『Tokki』のリースフルリングってペアリングですよね？これは何故5つもあるのですか？」

さつきのもつともな疑問に、はやなは笑顔になると千影の方を向いた。

「これはねえ……これは正義の味方部の絆を結ぶリングなんだあ」

そのはやなの言葉に、千影は自分を指差しながらはやなに問いかける。

「ひょっとして、はやな……私のために？」

「うん！これは私達、正義の味方部の中に千影ちゃんがいたって証し。想い出は心の中にずっとあるけれど、やっぱり形に残るモノの方がいいかなって思ってた」

千影の問いかけにはやなは大きく頷き手を胸に当てると、そう想いを語ったのだ。

そして、1つ1つのリングを見つめながら名前を挙げていく。

「銀色は私、青い銀色は葵ちゃん、黒色は千影ちゃん、蒼色はさっちゃん、赤色は稜ちゃんだよ」

いつの間によら、正義の味方部の一員として数えられていた葵は苦笑を漏らした。

「てか、私は正義の味方部員じゃないけど……まあ千影君の友人の1人ではあるからね」

この葵の言葉に皆が笑みを漏らす中、言葉が続ける。

「それに、ちょっと面白い仕掛けをしてもらったんだ」

はやなの言葉に、さつきは自分の蒼色をしたリングを摘み上げてよく見てみると、その仕掛けに気がついた。

「あ！指輪の内側にアルファベットが刻まれています！！私のはTとH？」

そう。指輪の内側に小さくではあるが、対極する位置に1文字ずつアルファベットが刻まれていたのだ。

「そう、ちなみに私にはUとY、葵ちゃんにはNとU、千影ちゃんのにはIとJ、稜ちゃんにはYとOの文字を刻んでもらったんだ」

このはやなの言葉に、葵はすぐさまこのアルファベットからなる言葉に当たりをつけると、笑みを湛える。

「U・N・I・T・YとY・U・J・H・O  
ね。はやな、中々粋なことやるじゃない」  
結束と友情

それは千影を中心に据えた絆の証ともいえる言葉であったのだ。それを用意した当の本人たるはやなは、頭をかきながら照れ笑いを浮かべた。

「えへへ。みーいんな仲良くなれますようにって、ちょっと贅沢すぎるかなって思ったけどね。それと、さっちゃん」

そこまで言っただはやなが、さっきの名前を呼ぶと「はい？」と答え、たさつきに赤色の指輪を握らせる。

「これ、陸上部にいる稜ちゃんに届けてくれるかな？これなら正義の味方部の皆にとって願いを込めてもらったから、きつと稜ちゃんとも仲良くなれるよ」

「は、はい…」

そんなはやなの気遣いに、さつきは嬉しそうな顔になって保健室から駆け出していったのであった。

元気よく駆け出していく、さつきの後姿に霧瀬は「うんうん」としきりに頷く。

「ふむふむ。途切れない友情・絆の証、いい話ねえ。  
で、  
鈴鳴さん」

そこで霧瀬から話を振られたはやなが「はいな？」と首をかしげる中、霧瀬が期待度200パーセントといった顔ではやなに問いかけた。

「霧瀬先生の分の絆の証リングはあ？」

正義の味方部の絆の証たる指輪ならば顧問である自分にもあつてしかるべきである。

そう思った霧瀬であつたが

「あやああ……。実は6文字で出来る言葉がなかったので先生の分は用意できなかったんです」

「はうわっ！！残酷なお答え！！」

まさかの用意されていなかったとの言葉に霧瀬は肩を落とすと、部屋の隅で「の」の字を書いていじけだしてしまったのだった。

「あああつ、ごめんさない〜！」

そんな霧瀬をはやなが慰める中、千影は黒い指輪を手にとると、それを左手の中指にはめ込んだ。

「ありがとう、はやな。私もこの思い出は忘れないよ」

そして、今日も平和な美咲輝学院の1日は過ぎ去っていく。

千影のデュエルアカデミアへの帰還は、すぐ間近に迫ってきていた。

「来たぞ、ウォルフガング博士」

ヌーベルトキオシティの一画、ウォルフガングの秘密工場に金髪の男が足を踏み入れていた。

その人物とは先日ウォルフガングに脅しとも取れる依頼をした男である。

今日、ウォルフガングから依頼していたモノが出来たと連絡が入り、こうして受け取りに来ていたのだ。

その男の来訪に、ウォルフガングは笑みを浮かべると、その男の名前を呼ぶ。

「おお！来おつたか、Mr・ブシドー」

そう。その金髪の男こそ、世界征服部と正義の味方部の活動に介入し、千影と死闘を演じたMr・ブシドーであったのだ。

そんなMr・ブシドーに、ウォルフガングは己の力作を披露するかのごとく見せる。

「これぞ、ワシの持てる技術の粋を集めたOO式戦術着装型戦闘兵装『武御雷』じゃ。ワシは型番から『ダブルオー』と呼んでおるがの」

ウォルフガングの後ろに立つ、塗装がまだ終わってないため鈍く光る鎧の姿にMr・ブシドーは感嘆の声を上げた。

「ほお……これは素晴らしい。まさに武士の魂が形になったよっだ」

このMr・ブシドーの言葉の通り、それはかつての世、戦場を駆け抜けた戦国武将の鎧兜のような意匠であったのだ。

Mr・ブシドーの感嘆の声にウォルフガングは当然といったように

口を開く。

「そうじゃろう。しかも見かけだけではないぞ！装甲とフレームは要求どおり、多層アルピスト装甲とクレスフレームで作り、動力には近年新しく発見された新素材、サクラダイトからワシが発明した高温超電導体を組み込んである。出力はそのサイズのモノにしては比類するものはなしじゃ！！」

自分が要求した仕様どころか、それ以上のものを仕上げてくれたウォルフガングにMr・ブシドーは頭を下げた。

「礼を言おう、ウォルフガング博士。これで私は彼の者と存分に愛死合える」

そんなMr・ブシドーの姿にウォルフガングは「なんの」と首を横に振ると、口元を歪ませ笑みを湛える。

「いやいや、ワシも今回は楽しませてもらったわい。それはそうと色はどうするのじゃ？一応、貴様の要望も聞いておこうと思ってる」

「そう言うことならば、この色で頼む」

そのウォルフガングの申し出に、Mr・ブシドーが懐から取り出して見せたのは緋色の極星章であったのだった。



## 第26話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

こんばんわ、今回はティンクルセイバーNOVA第3巻の初回限定版に付いてくるドラマCD『Crossing Star』を元に書かしていただきました。

本来ならば、はやな×葵と稜×さつきが繰り広げる婚約指輪の百合百物語なのですが（マテヤ！、ここは千影君を含めた5人の絆を体現する思い出の指輪のお話と変えさせていただきました。

気付いている方はいるかもしれませんが指輪の裏に刻まれたUNITYとYUJHOは遊戯王OCGのカード『結束 UNITY』と『友情 YU-JHO』から取らせていただいております。

しかし哀れなのは顧問の藤代霧瀬。日ごろの行いが悪いからあななのだ。

と、まあそんなこんなで次回から第2部はクライマックスへと突入します。

美咲輝学院での最終日に千影を待ち構えるのは何か  
ご期  
待ください。

今回は最強カードのコーナーはお休みです。

第27話【正義の味方部篇】（前書き）

作者からのおねがい

皆様からの感想と評価こそが次の作品への活力です。

読み終われましたら是非とも感想 and 評価くださいますよう、皆様にお願い申し上げます。

## 第27話【正義の味方部篇】

「今回も見事、正義の味方部が世界征服部からの征服活動を阻止してくれました！　ありがとうございます、味方部！！」

放送用のスピーカーから流れる、正義の味方部と世界征服部との戦績速報に、星徒会室で仕事をしていた人物の1人は少し肩を落としていた。

「はあ……今日も負けてしまいましたか」

誰であろう、星徒会副会長にして放送に出てきた件の世界征服部の部長でもある夕霞であった。

常日頃から活動結果よりも活動という行動に重きを置き、それを部員たちに説いてはいるが、それでも敗北という辛酸を嘗めるのを好む者はいるまい。

そんな今回の活動に一憂する夕霞に、となりで書類に何かを書き込んでいた星徒会長のれいが微笑みを浮かべる。

「残念でしたね。征服部部長」

「すみません！　今は星徒会の仕事でした」

星徒会の役員である間は、世界征服部との関係は断ってしかるべきなのに、そのことに思考をまわってしまった夕霞は首をすくめてしまう。

しかし、れいは夕霞の手が休むまもなく次々と書類を処理しているのを見て取ると首を横に振った。

「手は動いているのですから、咎めてはいません」

「そ、そうですね。……あ、それとこの征服部へ苦情の件なのですか」

れいの言葉に胸をなでおろした夕霞は、最近問題となっている案件　世界征服部の活動による活動区域の昼休み停滞による星徒か

らの苦情を取り上げる。

征服部が征服活動をするということは、つまりその区域で食事や昼休みを取ろうとしていた星徒の食事や昼休みを強制的に中断させられるということだ。

「ここところ、征服部の活動が昼休みに集中しているということもあり、多数の星徒が征服部に少なからぬ恨みを抱いていたのである。」

「……………最近、ちょっと増えていますね」  
「れいも夕霞から手渡された星徒たちからの嘆願書の束を手に取りると、その多さに頭を抱えてしまった。」

「そんなれいに、夕霞は苦肉の策を提言する。」

「やはり、迷惑になりやすい昼休みの活動は回数を抑えていくしか

……………」

「しかし、れいは首を横に振ると否定の意を示した。」

「ですが、それでは掛け持ちの星徒の放課後に負担がかかるでしょう?」

「確かにれいの言うとおり、味方部も征服部も主要となる部員のほとんどが他の部との掛け持ちである。しかも彼等は、本来所属する部の極星でもあるので本来の部活をないがしろにできるものではないのだ。」

夕霞もそのれいの意見に頷く。

「そうですね。正義の味方部は特に……………」

「極星ではないものの、純正の部員を多数抱えることに成功した征服部とは異なり、味方部は『赤陽』たる九行稜を加えただけである。昼休みの活動を制限しては、あまりにも味方部に不利になってしまうのだ。」

「すでに『活動制限』という枷をはめられている味方部に、これ以上の負担は星徒会としても認めることはできないのであるし、星徒達が互いに切磋琢磨しあい、より高みに上って欲しいと望んでいるれいにとって、その機会が逸せられる状況は好ましくない。」

そこまで言葉を交わしたれいはい、ふと別の案件もあったのだということを思い出した。

「そう。問題といえば正義の味方部のほうにも悩み事がありますね」

この言葉に夕霞は先日、初めて対面した短期留学生のことを思い浮かべる。

「それは、明後日デュエルアカデミアに戻る、姫宮千影さんのことですか？」

僅か二ヶ月ばかりの留学生であった千影ではあるが、その存在は今やこの学院には知らぬものはいないとばかりに名前が響き渡っていた。

それもそのはず。

短期間に24ある極星のうち8つの極星を瞬く間に降していったのだから。

そんな千影の存在は、多くの生徒から『紅蓮姫』の再来と呼び声高く、極星の授与の可能性までも噂されていたのである。

しかし、すでに正義の味方部には『銀星姫』であることを明かす決意を決めたはやなの存在がいる。

1つの部活には1人の極星が大原則。はやなが味方部に在籍し『銀星姫』を名乗る以上は、味方部に在籍している千影に極星の授与や移籍は事実上不可能なのだ。

それに、そもそも千影は美咲輝学院の生徒ではない。デュエルアカデミアからの留学生で、明日には留学期間を修了し、2日後にはデュエルアカデミアに帰ってしまうのである。

そんな人物に極星の授与など到底無理からぬこと。それに星徒会預かりとなっている極星はすでになく、星徒会からの授与とすることとは物理的に不可能なことであった。

しかしである。

千影の実力は多くの星徒達が認めるところであり、千影の極星待望論も千影の帰還が迫るに連れて日増しに大きくなってきているの

は事実。多くの星徒の要望に応えるのが星徒会の務めならば、どうにかして千影に極星を授与するしかない。

だが前述したとおり、すでに星徒会預かりとなっている極星はないので、星徒会から極星を授与するということはできず、それに24ある極星のうち1つを学外へ持ち出すことは前代未聞のこと。いくら多くの星徒が望んでいるからといって、星徒会の一存でできることではない。

そう考えての夕霞の言葉であったが、れいは首を横に振った。

「いえ。それも悩みといえば悩みなのですが、そちらの方は少し私に考えがありますから問題はありません」

「どうやら、千影の極星をどうするかに関しては、れいの中で妙案があるようである。」

ならば、れいは何を悩んでいるのであろうか？

「私が悩んでいるのは『活動制限』のお題なのです。れいから発せられた言葉に、夕霞は首をかしげる。

「お題？」

「わかりやすく言うとネタ切れです」

「そう言って苦笑を浮かべるれいは、指折り数えながら今まで味方に課してきた『活動制限』の内容を述べていく。

「時間制限も、場所制限も、人数制限も、などと色々やってきましたから」

「……特に新しいモノを考えなくてもよいのでは？」

「そんなれいの言葉に、夕霞も釣られて苦笑を漏らしたのであった。それはそうだろう。何とんでも先ほどの味方部の勝利で終わった本日の味方部の『活動制限』は『スキップ禁止』であったのだ。

「ふざけているとしかいいようのない『活動制限』であったが、これを考えた星徒会長はいたく真面目にこう語る。

「新しいモノの方が制限としての意味を持つと思うのです。臨機応変さも求められますし、何よりそれを楽しみにしている星徒の声も少なくありません。私も それに答えたいですから」

しかしである。それにしても『スキップ禁止』はないだろうに。そう思った夕霞であったが、微笑むれいの姿に「やれやれ」と肩をすくめると、苦笑と共を漏らす。

「会長、けっこう楽しんでますね」

れいの様子を見るに、今回は確信的に面白おかしい『活動制限』を課したのでは、という夕霞の推理は当たっていた。

「星徒会長の特権ですから。あとは」

れいはいたずらの成功した童女のような笑顔を見せると、新たな案件を手に取り、書類をめくっていく。

「部活動で忙しい星徒達が、味方部と征服部の勝負を生で観戦したい」と、言う希望も来ていたりしますね」

そんな嘆願書の数々に夕霞は一つため息を漏らす。

「先ほどの苦情とまったく逆ですね」

「まさに意見は十人十色　ですね」

片方で味方部と征服部の活動を快く思っていない星徒がいる傍らで、彼等の活動を見て見たいという星徒もいる。これら嘆願書の意見を取り入れるのならば、星徒会の名の下に味方部と征服部に活動時間や活動場所を指定するしかない。

だが、それでは美咲輝学院が掲げる『自由自在』の校風に差し障ることなので実行は不可能。

そう夕霞は思っていた。

「けどそれは、星徒会がどうこうできませんね。星徒会公認で活動予定を立てるわけにもいきませんし……………」

しかし、そこで手を口元に当て思案に耽っていたれいが、ポツリと言葉を漏らす。

「…………… 案外、それがいいかもしれませぬ」

「はい？」

れいの発した言葉に、夕霞は首をかしげるしか出来ないのであった。

そんな日の放課後、正義の味方部の面々は部室である第四保健室『湊』でくつろいでいた。

「じゃあ、明日の夜に旋風寺さんのお屋敷にいけばいいんだね」  
手と手を合わせながら、そう聞いてくるはやなに千影は頷く。

「うん。舞人もガーデニオンでの件からコッチ、皆と会ってなかったからね。会いたがっていたよ」

2人が何を話しているかと言えば、旋風寺邸で催される千影のさよならパーティーの話である。このパーティーには主催者の舞人と、主役の千影の願いもあつて味方部の皆もパーティーに招待されていたのであつた。

千影が、はやなと葵、霧瀬に旋風寺邸の位置やパーティーの開始時間を告げようとした時、保健室のドアが開く。

「こんにちは……です」

「こんにちは、稜ちゃん」

中にいた面々に挨拶を終えた稜は、その中にさつきがいないことに首をかしげた。

「あれ？さつちゃん来てないですね。今日は珍しく誘いに来なかったので先に來てるかと思つたのですが………」

この言葉に千影も声を上げる。

「あ、私もそう思つて先に來ただけど、ここには來てなかったんだよね」

「そうなのですか………」

いつもは何もしなくてもよつて來る、さつきの姿が見えないのが居心地悪いのか、そう呟く稜の姿に、はやなは笑みを漏らした。

「ふふつ。最近さつちゃんと稜ちゃん、なかよしさんだよ」

はやなの言葉に稜は手を口元に当てて考えるような仕草をとる。  
「一番よくいる同級生だとは思いますが……それを仲良しというのですかね？」

「それを仲のいい友人と言うんだよ。稜」



そんな稜の姿に千影のみならず、他の面々も笑みを漏らす中、勢いよく保健室の扉が開かれた。

「先輩！ 先輩！ 大変です！！！」

さつきが転がり込むようにして保健室へと駆け込んできたのだ。

そのさつきの慌てように、はやなはさつきに何かあったのかと首をかしげる。

「どうしたのかなあ？」

「そ、その…今日、れいさんが…いえ、星徒会長がお見えになるって」

はやなの問いかけに、一旦さつきは息を整えると、その大変が何を意味するのかを言葉にしようとした時に、間髪入れず保健室の扉が開いた。

「失礼いたします」

その人こそ誰であろう、星徒会長であるれいであった。

「はっ！ もう来た！」

余りにも早すぎるれいの到着に、さつきが驚きの声を上げる中、はやながいつものこにこ顔でれいに歩み寄ると口を開く。

「わざわざ会長さんが、何のご用ですかあ？」

「ええ、実は」

れいは、はやなの問いに答えるべくここに尋ねてきた目的を述べた。

彼女の語った目的とは

「一般公開征服！？」

驚きの声を上げるはやなであったが、これは他の味方部の面々も同じであった。

そんな彼女等が未だに驚きの表情を見せる中、れいはその事に行き着いた理由を語る。

「以前から星徒会に希望が多く寄せられているのです。正義の味方部と世界征服部の活動が観てみたい」と

「こんなモノ、わざわざ見たいとか・・・物好きですね」

れいの言葉に、そうやって稜が突っ込みを入れる中、れいは持参した書類を味方部の面々に手渡しながら言葉を続ける。

「勝負形式はその書類に書かれている通り、正義の味方部と世界征服部をあわせたトーナメント戦。1回戦・2回戦は人数の少ない味方部同士のマッチングはありませんが、準決勝以降は味方部でも同部メンバーによるマッチングもあります」

この言葉に保健室内部にどよめきが走った。

「じゃあ何？ 皆が順調に勝ち進めば、準決勝から上は正義の味方部だけで勝負することもあるってこと？」

霧瀬からでた言葉にれいは頷く。

「そうなります。しかしそれは征服部も同じ いえ、それどころか参加枠の多い征服部のほうがより過酷といえましょう」

今まで味方だった者とも戦う可能性がある。このことに大きなショックを受けるかと思っていたれいであったが、彼女達は違った。

「千影ちゃんや、さっちゃんや、稜ちゃんとも戦う可能性があるのかあ」

「少し不謹慎かもしれませんが、なんだか私楽しみになってきました」

「稜は誰が相手でも、いつものように駆け抜けるだけです」

3人は互いの顔を見て笑っていたのである。

本来、同僚であるならば仲間内での戦いは恐れるもの。しかし、彼女達は極星という1つの到達点まで駆け上がった猛者である。そのような感傷よりも、常に側に立っていた強者と合間見えることができるということに喜んでいたので。

それは他でもない千影も同じ。

「これは中々面白い趣向だね。普段は見られない同部内のメンバーとの戦いも観られるとは。ところで肝心の勝負内容のほうは？」

千影から発せられた問いに、れいは頷きながら答える。

「はい。勝負内容ですが、マッチングされた者同士の得意分野が被っていたらば 例えば姫宮さんと征服部の決闘者の方がマッチング

した場合は決闘で勝負ということになります」

例を挙げて答えるれいに、さらに千影は質問を重ねた。

「被らなかつた場合は？」

「その場合は、一般公募した中からランダムに選ばれた勝負内容と通常戦闘の2択から、さらにランダムに決められます。確率的に試合内容は、通常戦闘が多くなるでしょうね」

ここまで一通り語つたれいは言葉を区切ると、正義の味方部の面々を見渡しながら言葉を続ける。

「両部とも部活動ですから、これは強制ではなくお願いになります」

「星徒会主催の、星徒サービス・イベント企画　なわけね」

れいの今までの趣旨を端的に表した霧瀬の言葉に葵は一つ息をついた。

「また星徒会も酔狂なことですな」

確かに星徒会が骨を折つてまでやることは到底思えないのは事実。

しかし

「星徒会は星徒のためにあるものですから。声が寄せられた限りは前向きに取り組んでいきたいのです」

そう笑顔で言つてのけたれいの姿は、本当に星徒のために身命を賭す星徒会長の鑑といえるものであった。

そして正義の味方部も、そうまで言われては参加しないわけには行かない。

「まあ、ウチらの活動を楽しみにしているといわれればねえ」

「ちよーつとうれしくて、お断りしづらいですねえ」

霧瀬とはやながノリノリなのを見て取つた葵は、さつきと稜のほうへ問いかけた。

葵はもちろん、はやながYesといつたらYesである。

「さっちゃんに稜ちゃんはどうかしら？」

多くの星徒に観戦される場面でも思い浮かべたのであろう、さつきは頬を少し赤く染めながらも、首を縦へと振つた。

「な、なんだか恥ずかしいですけど・・・私はアリだと。私も以前は見る側で楽しみにしてたので、気持ちわかります」

「稜はメンドイことじゃなければいいです」

稜の条件付賛成の言葉を聞いたさつきは、イベント内容に太鼓判を押す。

「さつきの内容を聞く分には大丈夫そうですよ。……でもこれは、なんかお客さん側から観たいかも」

さつき自身もかつては、はやなや千影の活動に一喜一憂していた元正義の味方部ファンとしては夢のマッチングもあるかもしれない、このイベントは是非とも観てみたいと強く思うものだった。

そんなさつきの姿に、稜は首をかしげながら問いかける。

「さっちゃんは観るのと観られるのと、どちらがいいですか？」

「うーん……………悩みどころです」

稜の質問に首を捻り続けるさつきに、稜は爆弾ともいうべき言葉を投下した。

「こう言う時は『受け』と『攻め』、どっちがいいと聞くべきでしたか？」

「それだったら『受け』ですね。あ、でも千影さんの時に限っては『攻め』かな……………って！ そんな単語、どこで覚えてきたんですか!？」

見事に着弾した稜の爆弾発言に、これまた素で爆弾発言を返してしまつたさつきは、顔を真っ赤にしたのである。

このさつきの叫びに葵は「やれやれ」と首を振る。こんなことを教える人間は、この中では一人しかいない。

「犯人は1人でしょう」

「あ、あははっはっは」

葵の視線の先にいた霧瀬は乾いた笑みを上げながら、その視線上から少しずつ身体をずらしていくのだが、葵の白い眼はしばらく霧瀬に降り注ぐのであった。

そんなこんなで皆から賛成の意見を貰ったはやなは、最後に千影

に問いかける。

「千影ちゃんは？」

自分を除く正義の味方部全員が参加を表明しているのだ。ここで一人だけ断るような無粋なまねをする千影ではない。

千影は笑顔ではやなに頷き返した。

「私としても留学期間最終日となる明日に、そんな想い出に残るようなイベントを用意してもらったのだから断る理由はないよ」

この千影の答えにはやなは正義の味方部を代表して、れいの前へと進み出る。

「と、言うわけで、味方部としては全会一致でOKです」

「ご協力ありがとうございます。声を寄せた星徒達もきつと喜ぶでしょう」

この正義の味方部からの全会一致の参加表明に、れいは深々と頭を下げたのだった。

時を同じくして世界征服部でも、このイベントのことが夕霞の口から話されていた。

「　　というわけで、いきなりだがそういうイベントを明日やることになった。細かいことは書類を見てほしい」

促されるまま手元にある書類をめくったあきは、そこに書かれた協賛の部活の数々に眼を見張る。

「イベントねえ　　つてか、もうすでに放送部や映像部、新聞部に建築部その他諸々まで協力を取り付けてる!？」

「す…す…す…い…ね」

「はあ〜。会長さんもおもろいこと考えるなあ。しかも準備も早いときた」

あきのみならず、冴や翔子も驚愕と感嘆の声を上げるが無理はない。

イベントに必要な各種施設の使用許可は星徒会の権限でできると

して、その他の協力の必要な部活の根回しが、完璧なのである。しかも、1日にしてその書類にびっしりと書かれている部活全てにである。

星徒会長、水乃緒れい。先代『蒼雷』の武のみならず、文にも精通する御仁であることがうかがい知れた。

他の世界征服部の面々も書類を見て頷いていく中、ここに納得のいかない人物が1名。

「こ、これはどういうことですか!?!」

他ならぬ前線指揮を総括する八草重である。

「しかしですね、八草重君」

肩を怒らせる八草重を宥めようとした九郎だったが、これは八草重には逆効果だった。

「貴様は黙っている浅皿! 夕霞様、我々がこんなことを行う理由が」

九郎の言葉に、さらに不機嫌を募らせた八草重は、夕霞の方を向いて再考を嘆願する。

しかし

「これは味方部への要望に星徒会が応えた企画だからな。ウチはゲスト、お手伝いに過ぎんさ」

ものの見事に八草重の嘆願は切って捨てられてしまったのだ。

「お手……ッ!! なぜウチが!?!」

「いやあ、ウチが断るとイベントが成立しませんからね」

お気楽そうにそう言ってきた九郎を忌々しげに睨み付け、何かを言おうとした八草重だったが、夕霞がしきりに九郎の言葉に頷いているのを見て取ると、唸るしかなかった。

「ッ! ぬう〜!!」

視線に力を込められたら、穴が開いてしまいそうなほど九郎を睨みつける八草重を尻目に、あきは両手を掲げて「まいった」のポーズを取る。

「まあ、アッチがOKしたんだからボクらは強制参加　　と」

そんなあきのジェスチャーに、夕霞は苦笑を漏らした。

「すまないがそう言うことだ」

しかし参加が決定したのならば、大いに楽しまなければ損と言うもの。

そう思ったあきは頷きながら夕霞に勝負の内容を問いかけた。

「OK、OK。となると、これはエキシビジョンマッチみたいなのをやるのがいいのかな？」

このあきからの質問に、夕霞は首を横に振る。

「それについては書類の5ページ目に書かれている通りだ。勝負内容がどんなものになるかは今はまだ定かではないが、当日、思う存分その腕を振るってくれればいい」

未だに苦虫を噛み潰したような顔をしている八草重も含めて、夕霞の示したページをめくると、そこに書かれた勝負内容の選定方法などに目を通して行く。

「了解や。それと、試合形式はトーナメント式かいな。味方部と征服部以外にも2枠、参加枠があるね。これは？」

翔子が皆にも見えるように、そのページ　選手参加枠の項目を掲げた。

この翔子の指摘に他の面々もそのページに目を走らせる。

確かに書類のトーナメント枠を見てみれば、正義の味方部に4枠、世界征服部に10枠が与えられていたが、その他にも2枠の参加枠が見て取れた。

この不可思議な2枠に首を捻る世界征服部の面々に、夕霞はその2枠が何であるかを教えた。

「それは星徒側からの応募枠だ。よりイベントを盛り上げるための……な。そちらも会長が人選を行っている。おそらく他部の極星が出てくることだろう」

正義の味方部が有する極星は3人、世界征服部の有する極星は9人。

仮にこの夕霞の推理が現実のものになるというのならば、参加者

のほとんどは極星で占められるということになる。

その豪華な顔ぶれに、翔子はこのイベントがいかに大きいものであるかに気がついた。

「はあ〜！　じゃあこれは事実上、味方部と征服部の勝負っちゅうよりも極星ナンバーワン選手権みたいなもんやね」

「まあな、そうとも取れる」

夕霞はそういったが、そうとしか取れない。全極星の内、半分強もの極星を集めて催されるイベント。

果たして、れいの狙いは本当に星徒の厚い要望に応えるだけであるだろうか？

ここまで根回しによさも見せ付けられると否が応でも何かがあるかもしれないと勘ぐってしまう。

しかし、そんなことは今考えても詮無いことである。

仮に、れい何が何を企んでいるとしても、それは味方部や征服部、ひいては全星徒に害意を及ぼすものではないはずだ。

そう考えた夕霞は、口元に笑みを湛えると、陣ぶれを降すが如く立ち上がる。

「ウチからは9人の極星全員と残り一枠は浅凧に出してもらおう。こちらの人数の多さからウチは1回戦から同部内でのマッチングがあるが、今回は征服活動とは無関係だ。各々、今まで積んできた技術や力を発揮できる場と考えればいい。今日、この場にはいない司木、ゴツドバルト、クーガー、ウエスト3世、切札の5人には私から連絡を入れておく。では　解散だ」

こうして今日は静かに過ぎていく。それはまるで嵐の前の静けさのようだった。

そして、その嵐の日がやってきた。

昨日、いきなり星徒会から告知されたかつてない規模のイベントに美咲輝学院の星徒たちは一目その夢の競演を見ようと、本日用意



された観覧チケットを我先にと買い求めていたのだ。

その盛況ぶりは未だかつて類を見ないほどで、跳ぶように次々とチケットが消えていく。

「申し訳ありません！ 正義の味方部と世界征服部による合同公開部活動の観覧チケットは売り切れです！ 申し訳ありません！！」

開店早々にしてチケットの売り切れを叫ぶ購買部の生徒の声にチケットを手に入れられなかった多くの落胆の聲が辺りに響きわたる。そんな群衆の中に

「聞いたか七月男！？」

「聞いたよ新井！」

我らが愛する莫迦2人、新井と松田の姿があった。

2人は未だに購買部の前で意気消沈する敗者たちを眺めながらしみじみと呟く。

「征服部は当日の参加者以外は、チケットが必要といわれてきてみたが」

「チケットを買えんほどの人気とはな」

確かに、まさかこれほどの人気を博すとは誰も予想だにしなかった。

だが、しかし

「もとより、買える金もなかったがなあ……………」

そう。以前語ったように彼等は千影FCを運営しているので万年金欠。

しかも会員数を大きく伸ばしている現在ならば多少の余裕も出てきそうなものであるのだが、彼等はFCの拡大路線を突き進んでいるので資金はいくらあっても足りないというのが現状であり、未だに赤貧生活からは逃れられていない。

それだけ千影への愛が篤いということである。

しかしである。そんな彼等が千影が活躍するであろう、このイベントを諦められるはずがない。

「だが、七月男！！ お前は諦めきれるのか！？ 美咲輝でのちーちゃん最後の晴れ舞台を！！」

熱く問いかけてくる新井に、松田も熱く問いかける。

「新井よ！！ お前こそ諦められるのか！？ ちーちゃんの華々しい最後にして栄光あるステージを！！」

2人は、そこまで語ると大きく地面を踏みしめる、腕を天へと突き上げた。

「「否ッ！！ 断じて否！！」

そして、2人は一計を案じる。

チケットが必要なのはなぜだ？ それは観客だからだ。ならば、スタッフとして内部に入り込めばいい。しかもただの大道具小道具その他雑用では試合を見る時間は多々削られる。だとするならば、スタッフの役割として四六時中試合から眼を離さなくていい役職を選べばいいだけのこと。

しかし、あるのだろうか？ そんなおいしい役職が。

実は あるのである。

「シヨウには必要なものがあるなあ、七月男」

「シヨウには必然な役があるよなあ、新井」

その考えに至った2人は腕を大きくぶつけ合うと大きく頷く。

「「うむッ！！」」

そうとなると話は早い。

2人は早速、その秘策を現実のものとするために、とある人物がいるであろう場所へと駆け出して行ったのだった。

彼等の向かった先とは

「「失礼しやああつす！ 星徒会長さん、いまつすかあああああ  
！！！」

どこであろう、星徒会室であったのだ。

いきなりの闖入者に「すわ、何事か」と、れいは扉のほうへと顔

を向けると、その顔が知っている顔であることに安堵する。

「……あなた達は、征服部の」

「「おおおッ!? 俺等、会長に知られてるうッ!!」」

れいの言葉に新井と松田は星徒会長に名前を知られているという知名度の高さに感激した。のだが、世界と言うのは存外世知辛いものだ。

「莫迦二人 もとい、浅凧君のところの部下の二人」

それ見たことか。

結局彼等の認識なぞ、この程度のものである。

しかし

「聞いたか、新井!? いつも俺等の定冠詞のようにつけられる心ない単語を除いてくださった会長の配慮オオッ!!」

松田が拳を握り締め歓喜の涙を流すと、それに倣うように新井も涙を流す。

「聞いたさ、七月男!! 微妙に、名前までは覚えていないものの、コチラを認識してくれているという心遣いをおおおおッ!!」

昼間から星徒会室で感激の涙を流す新井と松田に、れいは額に汗を浮かべた。

「……………泣くほどの対応はしていませんが」

あまりに2人の行動が意味不明であったので忘れていたが、星徒会室に来たと言うことは、星徒会長であるれいに用があつてきたと言うことだ。

そのことを思い出したれいは、2人に用件を問いかける。

「それより、私に何のご用ですか?」

この、れいの言葉に「待ってました!」とばかりに2人は涙を消し飛ばした。

「そ、それですよ! 会長!!」

「正義の味方部と世界征服部のイベントの件伺いましたあッ!!」

新井と松田はどこぞの軍隊のように、直立不動の姿勢をとる。

是が非でもココでれいに興味を引いてもらわねば新井と松田はイ

ベントを見ることが叶わない。

彼等は一世代の大勝負と、烈火の如く気迫を込めて言葉を放った。

「ちーちゃん、はーちゃんが舞うこの素晴らしきイベント!!」

「ですが、それに欠かせないモノがあると思ひまして、進言に上がりました次第でございます!!」

新井と松田が鼻息荒く語り終えたあと、僅かであるが静寂が星徒会室を支配する。

そのあまりの静けさに新井と松田は「ダメだったか」「と肩を落としそうになった。

しかし、れいは組んだ手を口へと当てて、こう言ったのである。

「聞かせてもらいましょう」

「Yes Ma'am!!」

前向きなれいの返答に新井と松田は再び直立不動のみならず、敬礼の姿勢までも取ったのであった。

こうして彼等はそのおいしい役職を手に入れることに成功したのである。

そのおいしい役職とは

『さあ、歓声渦巻く美咲輝学院高等部武道場!』

以前、さつきが翔子と果し合いを行った武道場で、新井の音が高らかに響き渡る。

否、響き渡っているのは新井の声だけではない。

『観客もすでに三千を超える来場者が皆、今か今かと開始を待ちかねております!』

新井に続いて、松田の声も武道場に響き渡っていたのだ。

そう。2人が手に入れたおいしい役職とは、司会進行役であった。これならスタッフとしてタダで中に入れ、なおかつ特等席で試合を最初から最後まで漏らすことなく見ることができなのだ。

そうとなると、すでに2人のテンションは上限を突破して天元突破。

『間もなく13時！ 正義の味方部VS世界征服部の公開部活動が始まるうとしております！！』

その熱い情熱は否応なく会場のボルテージを引き上げるのにも一役買っていた。

未だ試合が始まっていないにもかかわらず大いに沸きあがる歓声に応える様に新井と松田は司会進行の仕事をこなして行く。

『今回の勝負形式は、それぞれのマッチングで両者とも得意分野が被るものがあれば、それが競技種目となります！』

『他にも星徒サイドから二名の極星を招いており、味方部と征服部の擁する極星を合わせると、その数はなあと！ 美咲輝学院に存在する極星の半数が集まっているということになります！！ まさにこれは、味方部と征服部との勝負のみにとどまらない、星々の輝ける決戦場！ スターズファイトだあああああッ！！』

そこまで言い切った新井と松田は自分達を映す映像部のカメラに近寄ると大きく見得を切った。

『そんな熱くも激しい戦いの司会を務めさせていただきますのは、俺・参上！！ 松田七月男とお』

『最初からクライマアアックス！！ 新井祐之介の二人で』

『お送りします！！』

普段ならば全員が顔をしかめるであろう新井と松田のどアップが映るモニターだったが、会場のボルテージはもはやそんなことを気にしないまでに高まった。

そのことを確認した新井と松田は腕を大きく振る。

『さて、それではあああッ！ 選手の紹介でえええッす！！』

この言葉に会場は揺れているのではと錯覚するほどの大歓声で包まれた。

そんな歓声に負けないように松田はマイクを握り締めると声を張

り上げると入場してくる選手を高らかに紹介する。

「まずは、世界征服部からッ！ 征服部の1番手に紹介いたしますのは、征服部が主要武装VSSの開発者にして、今回の勝負に新兵器も投入か!? 《白煌》、御堂あき!!!」

「どこにいったかとは思ってたけど……祐君たちノリノリだね」

「続いて征服部2人目は、魔女の如く変幻自在に武器を変えるトリックプレイヤー! 《黒帝》、鴉神牙!!!」

「……でも、すごく……盛り上がってる」

「続いて3人目だ! その舞いは、まさに散り行く桜の花びらのように百花繚乱! 《桜流》、天羽翔子!!!」

「まあ、こういうの天職っぽいしなあ、あの2人」

1番手に紹介されたあきが新井と松田の姿に苦笑するが、次いで紹介された冴や翔子が語るように、ここまで会場を盛り上げられるということとは一種の才能である。

普段では得られない征服部女子極星からの高評価に気付いたのか気付いてないのか、新井と松田はさらにヒートアップする。

次に紹介するのは世界征服部の男勢だ。

「さあ!!! 次々行ってみよう! かつての敗北は、この男にさらなる高みを見せ付けた!? アレからさらなる高みへと登れたのか!? 《朱砂》、司木燈也!!!」

「へっ!!! こういうのを俺は待ってたんだぜ!!!」

「お次は! 日ごろ俺たちを莫迦・馬鹿・バカの三連呼!!! そんなヤツの紹介は腹立たしいが、コレも仕事だ仕方ねえッ! 《紫閃

》、八草重遊!!!」

「あいつらあ……!!! これが終わったら覚えておけよ……!!!」

「続きましては、オレンジとルルーシュお嬢様のためなら何のその! 忠義のオレンジにして騎士と言う名のロリコン! 《橙忠》、

ジェレミア・ゴッドバルト!!!」

「……奇遇だな。私も奴等に殺意が湧いてきた。手が必要なら手伝うぞ八草重遊」

「まだまだ、続くぞオオツ！！ 7人目！ 世界征服部が頭脳にして、D・ホイール発明者！ しかし、その実態はただのキガイ！ 《緑狂》、ドクター・ウエスト3世」

「ふうん。言わせたいやつには言わせとけばいいのである！ と、言いたいところであるが我輩も1枚噛ませてもらおうのである」

「次はコイツだアアツ！ 速さは文化と豪語するスピード狂にして、俺たちのちーちゃんに思いを寄せる不屈きな輩！！ 月のない夜は背中に気をつけやがれ！ 《灰速》、ストレイト・クーガー！！」

「文化を知らない男の嫉妬とは見苦しい……………だが、俺も仲間に入れさせてもらおう。千歌音さんへの愛のために奴等を蹴り飛ばさないと気がすまん！」

なにやら司木以降の男勢で、新井・松田誅殺同盟がひそかに組まれたようだ。

「世界征服部の極星はこれで最後だ！！ デュエルモンスターズ・ユース世界選手権を、その輝く右手で掻っ攫っていった決闘者！ その輝く右手は、このスターズファイトの頂点をも掴んでしまうのか！？ 《金輝》、切札勝舞！！」

「まったく、そんなの少々相手にすんなよ。これからすっげえ決闘がまつてるかもしれねえんだぜ！」

「そおおおして！ 極星ではないものの、我らのボスがまさかのエントリーだアアツ！！ ダークホースなるか！？ 世界征服部副部長、浅風九郎！！」

「そうですね、切札君の言うとおりです。それにこう言う場でのリップサービスなんですから彼等も本気ではないでしょう」

そんな彼等を勝舞と九郎が宥めるが、残念ながら新井と松田が語ったことは場を盛り上げるための口上でなく本気である。

そして、それを見抜くまでもなく理解している八草重以下、新井・松田誅殺同盟はすでに殺気満々だ。

新井と松田の命も今日限りであろう。

「さあ！ では世界征服部の紹介が終わったところで、今回星徒側

から選ばれた精鋭2名をご紹介しよう!!」

今日が命日となるに違いない2人は、彼等の殺気が届いていないのか調子よく新たな選手を迎え入れる。

「まずは、皆さんもお忘れではないでしょう、この顔を!? 部活紹介の折、我らがちーちゃんにコテンパンにのせられた男! リベンジなるか!? バルジャーノン部が極星《炭散(笑)》、パトリック・コーラサワー!!」

「だから(笑)をつけるな! (笑)を!!」

「こちら辛酸を嘗めた極星の登場だ! はーちゃんに敗れること2回、その刃に己を取り戻すことは出来たのか!? 剣道部が極星

《紅刃》、武居和麻!!」

「師匠、見ていてください。今日こそ僕は真なる『紅刃』の信念を持つて『銀星姫』に望みます」

これまた星徒会長は正義の味方部 特に千影とはやなに縁のある2人を選んだものだ。

方や千影への再戦に鼻息荒く、方や静かなる水面の如く観客席に座る師 久遠へと視線を移す中、とうとう今回の主役の入場となる。

「世界征服部と星徒からの参加者の紹介が終わったところで、皆さんお待ちかね!! 正義の味方部の登場だああああッ!!」

新井の言葉と共に会場は今までよりさらに大きな歓声で包まれた。その歓声に応えるように松田はオーバーアクションを取りつつ、正義の味方部からの選手の名前を告げる。

「正義の味方部1人目は、普段と変わらぬ可愛らしさの中に何やら決意を秘めた凜々しさがにじみ出ております! この得も知れぬ雰囲気は何なのだああああッ!! 鈴鳴はーちゃんこと、ティンクルセイバー!!」

「どもども」

沸きあがる歓声にはやなは手を振って応えた。

「続きまして、正義の味方部2人目は、美咲輝学院高等部の蒼い雷



！ この文句を聞いて水をかぶると女になってしまおう主人公の作品に出てくる九能某を想像した人は多いだろうが、彼女は違う！！

『《蒼雷》、天宮さつきこと、アークセイバー！！』

「……確かにアノ方も風林館高校の蒼い雷を名乗ってましたね」

ネタ満載な紹介文句に少し顔を引きつらせるさつきなのであった。

『正義の味方部、お次は真っ赤な太陽を背に背負い、高速で駆け抜ける様は真っ赤なプロミネンス！ 《赤陽》、九行稜こと、ソルセイバー！！』

「稜にも何かネタが用意されていると思いましたか　少し残念です」

稜の本当に残念そうにしているところを見ると、本当にさつきのような紹介文を期待していたようだ。

これも霧瀬の薫陶の賜物だろう　悪い意味で……だが。

まあ、それは脇においておくとして次で最後の選手の入場だ。

その人物が入場口から姿を現したのを見た会場の観客は新井と松田の紹介を待たずに一層大きな歓声をその人物に送る。

司会進行役である新井と松田も、「喉よ枯れ」とばかりに咆哮する。

『『そして、そして！　我らがアイドルが遂に入場だああああああああああッ！！』』

観客の歓声も上限を超えてさらに高まっていく中、新井と松田は命と魂を言の葉に乗せて紡ぎだす。

『流れる銀の髪は白銀の如く　』

『輝く眸は紅玉の如く　』

『纏う秀囲気は王者のごとく威風堂々　』

『しかし、その身は愛らしく我らの視線を釘付けにして離さない　』

そしてその者の名を高らかに宣言する。

そう、彼こそは

『『本日を最後に美咲輝学院を去る、その者の名は！　千の影を敷

く夜の剣にして、万の魔を断つ騎士の剣！ 姫宮ちーちゃんこと、ナイトセイバー！……っていうか、ちーちゃん帰っちゃヤダあああああああッ！！！！」

新井と松田の声と共に会場の観客からも同様の悲哀の音が大きく響き渡る。

千影はそんな観客に応えるように1回お辞儀をすると、右腕を高らかに振り上げる。

ただそれだけのことなのに会場は悲哀の聲が一転、熱き物へと変わる。

短い期間の中で彼がどれほどの星徒たちに影響を与えたのか、これを見れば、この声を聞けば語るまでもなかった。

選手全員がリングの真ん中に集まったのだが、ここで1つ問題が生じる。

彼等2人は言わずもがな、世界征服部の部員なのである。

そんな彼等が司会進行役として試合の審判までも司っては試合の公平性を保てないのだ。

しかし、これを企画したれいが、そんな初歩的ミスを犯すはずがないし、愛しいさつきお嬢様の晴れ舞台を特等席で見ないわけには行かない。

『ここに全ての参加者が出揃ったところで今回のスターズ・ファイアの審判を紹介しましょう！！ それは公正なるジャッジメント！

今回のイベントの企画者！ 星徒会長、水乃緒れい！！』

ならば、特等席とはどこか？

当然試合から目を離さない役どころといえは審判しかないない。

それに彼女も彼女で新井や松田に負けずにノリノリだった。

「皆さーん！ 今日では是非とも楽しんでいってくださいねー！！」  
れいの登場に会場が大きく沸いた。

それもそのはず。先代『蒼雷』にすて星徒会長であるれいはレースクイーンの格好でいたのだから。

これには彼女を古くから知るはやなやさつきでさえも驚きの声を



## 第27話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

大変長らくお待たせしました。

すこし3次元世界が忙しくてこっちに構ってられず、かなり期間が開いてしまい、尚且つ文章量も少なくなっていました。

これからも10月のようなハイペースでの更新は望めないかもしれませんがご容赦ください。

さて、とうとう第2部も最終章に入りました。

千影君の留学最終日を飾るのは数多の極星との真剣勝負。

それだけでなくMr.ブシドーとの決着もどうなるのか、お楽しみください。

あと、前回行った行間の件ですが、結果としてこれからはシーンの切り替えに2行間、決闘でのパラメータ表示の時は1行間とし、ほかの場面では行間を開けないこととします。

そのかわり、行間の幅を200にすることで1行1行の幅を大きく取ることとします。

前回、意見を下さった方には感謝の意を述べさせていただきます。まことにありがとうございました。

第28話【正義の味方部篇】（前書き）

作者からのおねがい

皆様からの感想と評価こそが次の作品への活力です。

読み終われましたら是非とも感想 and 評価くださいますようお願い申し上げます。皆様にお願い申し上げます。

## 第28話【正義の味方部篇】

美咲輝学院高等部の武道場。観客収容数3000人と学院内施設では最大規模を誇る場所は、すでに座る席どころか立ち見の席までも人の群れで埋め尽くされていた。

そんな彼等の視線を集めるのは、今日この祭りに選ばれたこの学院の精鋭たち。

そう。今まさに正義の味方部と世界征服部による合同部活動が開始されようとしていた。

『さあて！ 選手及び審判の紹介も終わったところでAブロック及びBブロックの第1回戦・第1試合を開始します！！』

紹介された選手が控えまで下がったところを確認した新井が発した言葉が会場を沸かす中、松田が天井からぶら下げられた大型のモニターを指差す。

『では、皆さん！ メインモニターをご注目！！』

そこには未だに誰の名前も書かれていないトーナメント表が映し出されていた。

そのトーナメント表の左端の2つと右端の2つの計4つの名前が表示されるべき欄にドラムロールをBGMに出場選手16人の名前がルーレットのごとく、かわるがわる表示されては消えて行く。

会場の誰もが固唾を呑む中、栄えある第1試合に臨む4人の名前が映し出された。

その名前は

『決まったアアアア！！ Aブロック第1回戦・第1試合は、ちーちゃんVSパトリック・コーラサワー！！』

『そしてBブロックはーちゃんVS武居和麻だアアアッ！！ こ

ここで星徒側からの参加者である《炭散》と《紅刃》はそれぞれに因縁のある相手を引き当てた！ さあ両者はリベンジなるのか！？ それとも我らのちーちゃん・はーちゃんに返り討ちに会うのか！？ その勝負方法はコレだあアアアツ！！」

松田の言葉と共に、トーナメント表にそれぞれの勝負方法が表示された。

『Aブロック第1回戦・第1試合はバルジャーノン1本勝負！ Bブロック第1回戦・第1試合は通常戦闘となりましたッ！！』

『これはそれぞれが以前にちーちゃん・はーちゃんに敗北した内容だけあつて非常におもしろい試合になりそうです！！ では、第1試合に出場する4名は前へ！！』

「はやな先輩も千影さんもがんばってくださいね！」  
「ファイトです」

さつきと稜からのエールに2人は頷く。

「栄えある先陣、全力を尽くすよ」

「じゃあ、いつてくるね」

さつきと稜の2人に笑みを持って返した2人はステージへと歩み上る。

その2人に続いてコーラサワー、和麻もステージへと上った。

そしてそれぞれの対戦相手と向かい合わせに対峙する。

「『紅刃』さんと戦うのもコレで3度目ですね」

「はい。しかし今の僕には以前ののような慢心もありませんし、貴女が『銀星姫』であることに気負いも感じません。今僕の心にあるのは師匠より受け継いだ『紅』と我が信念たる『刃』のみ。今一度……」

……いえ、今度こそ僕は貴女に真剣勝負を挑みます」

一点の曇りもない表情でそっくり切った和麻に、はやなは笑顔で応えた。

「そうですね。じゃあ私もそんな貴方に応えないといけませんね」  
一見してみれば穏やかであるが、わかる者は見ればわかる。和麻が頭は冷静でありながら心を熱くたぎらせていることに。はやなが

いつもかわらぬ自然体である中に強い決意があることに。

2人の立つ間には強い風が巻き起こるのを多くの観客が幻視した。

方や尋常な立ち合いと相成ったが、もう片方もそうだったかといえはそうではなかった。

「ふっふふふ……待ってたぜ、この時を！ 以前いい様にやられた恨みは忘れてねえぜッ！！ 今日の俺は以前の俺と同じに思うなよ。マネキン先生とのウハウハマンツーマンレッスン もとい、血のにじむような特訓により俺は生まれかわったんだ！！」

かっこよく言い切ったコーラサワーであったが、カティ・マネキン教諭との血のにじむような特訓 もとい、ウハウハマンツーマンレッスンを思い出したのか、その顔には若干ニヤけた笑みが含まれていた。

なんとというか色々と台無しである。

観客席に座るマネキン教諭が苦い顔で「やれやれ」と頭を振っているのが見えたのは気のせいではないだろう。

しかし、今日もコーラサワーは絶好調だ。

「今日と言う今日は貴様の『ダミアン』をギッタングितタンにしてやるからな！ 覚悟しとけよ！！」

そんなコーラサワーに干影は笑みを持って返す。

「いいだろう。ならばしかと覚悟しておくことにしよう」

「ふん！ 今にその笑みを吠え面に変えてやるぜ！！」

舌戦を繰り広げる干影とコーラサワーの目の前にバルジャーノンの筐体が建築部の手により運び込まれてくると、彼等の手によりすぐさま対戦準備が整えられる。流石は美咲輝学院の部活動であるというべきか、それはすぐさまどこに出しても恥ずかしくない仕事ぶりであった。

そして、筐体の点検を終えた建築部の部長が親指を上立てるOKサインをだしたのを確認した新井と松田は建築部の部長に頷き返



すとマイクを手に取った。

『ここで、バルジャーノンの方も準備は整ったようですよ!!』

『さあ！ 両ブロック選手両者とも戦いの舞台へ!』

2人の言葉と共に、はやなと和麻は通常戦闘用のリングへ、千影とコーラサワーはバルジャーノンの筐体に身体を滑り込ませる。

はやなと和麻はそれぞれに得物である『プラズマリボン』と木刀を構え、千影とコーラサワーはそれぞれが駆る機体を選択する。それはかつての戦いと同じくアポカリプスとノエルクローシュだった。そして千影たちAブロックの方にMr.うるち、はやなたちBブロックにれいが審判として立ち会ったのを確認した新井と松田は戦鐘となる言葉を高らかに宣言する。

『それでは!! 第1回戦第1試合! スターズ・ファイト! レディイイツ、ゴオオオオオオオオ!!』

2人の言葉と共に、はやなと和麻は大地を蹴り、千影とコーラサワーはそれぞれの機体を空へと躍らせたのだった。

仮想空間の空で黒い悪魔とくすんだ灰色の機人が軌跡を描いていた。

千影の駆る黒い悪魔 アポカリプスは巨大な処刑剣『重機関軍刀グラム』をその手に、全機体中最高クラスのスピードを持ってコーラサワーのノエルクローシュに肉薄する。

しかし、アポカリプスのスピードが最高クラスとはいえ1番ではない。

バルジャーノンの機体の中で1のスピードを誇る期待。それがコーラサワーの駆るノエルクローシュだった。

そのスピードの秘密はブーストのゲージの減りが遅いことと、ブーストゲージの回復が群を抜いて早いことにある。

確かに出せるトップスピードではアポカリプスも引けは取らないし、旋回性能ではアポカリプスの方が上だ。

だが、アポカリプスがノエルクローシユに肉薄し攻撃を加えようとした瞬間にノエルクローシユは最大の武器であるブーストダッシュを使い、アポカリプスの斬撃を回避していた。

それだけではない。ノエルクローシユは離脱直前に硬直時間の短い武装でアポカリプスのHPを僅かであるが減らしてきている。これが先日、千影にコテンパンにやられた者と同じ操縦だとはとても思えない。

「なかなかやる」

あの時のコーラサワーが放った速攻攻撃からは連想できない堅実ながら丁寧な攻めに千影がそう漏らした言葉は指向性マイクに拾われてコーラサワーのコックピットに送られる。

そんな千影の言葉にコーラサワーは獰猛な笑みを浮かべた。

「だからいっただろう！ 覚悟しとけてよオッ！！」

確かにあの時は相手が初心者だと侮り、速攻で落とそうとしてカウスターを貰った。

侮りはあった。しかしながらコーラサワーは自分の速攻には絶対の自信があったのだ。

開始と同時に戦闘機形態へ変形し、相手の懐に潜り込み必殺の一撃を決める。

その戦法でコーラサワーは全国対戦2000戦負けなしを誇っていたし、この戦法が通じない相手は誰一人としていなかったのだ。

しかし、そんな必殺の一撃を易々と跳ね返され、土をつけられたそれからと言うもの、コーラサワーは顧問のマネキン教諭と共にアポカリプスに最適な新しい戦法の研究と、千影の駆ったアポカリプスの分析に心血を注いだのだ。全てはあの黒い悪魔と再戦せんがために。

「俺は貴様に勝って、その勝利を先生に捧げるんだ！！ だから貴様はここで倒れる！！」

ノエルクローシユに迫ったアポカリプスが『重機関軍刀グラム』を空振りしたのを確認するとコーラサワーはビーム砲をアポカリプ

スに向けて浴びせる。

『重機関軍刀グラム』による攻撃は確かに高いが硬直時間も長い。そのことはマネキン教諭との研究・解析し、全て頭に叩き込んだ。そしてノエルクローシュのビーム砲ならばアポカリプスには1発でダウンが取れる。

コーラサワーはビームの着弾で発生した煙から距離をとり、そこからアポカリプスが地面へと墜落するのを待った。

しかし、未だに煙の中からアポカリプスは落ちてこない。

怪訝に顔を顰めたコーラサワーは、急に耳元で鳴り響いたロツクオンアラートに「はっ！」となり急いで操縦桿を横へと倒した。

次の瞬間、ノエルクローシュの横を通り過ぎた高エネルギーの砲撃による高熱が僅かであるがノエルクローシュのHPを削っていく。判断が一瞬遅れていれば、致命的なダメージを喰らっていたであろう一撃にコーラサワーは信じられないといった顔になる。

「くっ！ まさかアレで落ちてなかったのか!？」

コーラサワーが声を荒らげる中、煙が徐々に晴れて行く。その中には僅かなダメージは負っているが、ビーム砲の一撃を受けたとは到底言いがたいアポカリプスの姿があった。

否、アポカリプスだけではない。アポカリプスの周りに蝙蝠の姿をした小さいユニットが数機待っているのが見えた。

そう。あれは

「ファミリアか！ えええいッ、ちょこざいな!！」

ファミリア アポカリプスの持つ武装の1つで、オールレンジ攻撃を可能とする遠隔操作型独立砲台である。このファミリア、他にもビームを膜状に展開し防御障壁とすることも可能であるのだ。千影はこの防御障壁でノエルクローシュの攻撃を防ぎ、反攻の一撃を放ったのである。

「避けられたか……」

アポカリプスを駆る千影は必殺を期して放った『重機関軍刀グラム・バーストモード』の砲撃がかわされたことに少し肩を落としていた。

相手との間合いが中々に詰めれず、僅かずつであるがHPを削られていく状況を打破するために一計を案じて相手の大きな攻撃を誘い、それを背中に隠したファミリアの防御障壁で凌ぎ、追撃をかけるところにカウンターを狙ったのだが、相手もそう簡単にはやらせてくれないらしい。

であるならば、どうするか

「ならば、小細工なしの総力戦でいかせてもらおう！」

千影は防御に回っていたファミリアを攻撃態勢に移行させると共に『重機関軍刀グラム』を構えた。

そんなアポカリプスの様子を見て取ったのかノエルクローシユは戦闘機形態に変形しアポカリプスから大きく距離をとろうとする。

「逃がさない！」

当然それを許す千影ではない。ファミリアから弾幕を展開し、ノエルクローシユに迫る。

だが、ノエルクローシユを駆るコーラサワーも然る者。致命傷になる攻撃は的確に回避し、アポカリプスの格闘攻撃の範囲に入るまいと曲芸飛行真つ青の戦術機動を取り、反撃に転じやすい絶妙な間を維持していた。

コーラサワーはただただアポカリプスの攻撃を避けていただけではない。ノエルクローシユを巧みに駆りながらも、ファミリアが出てきてからの時間を計っていたのである。

何故か？ファミリアは使用後、一定時間のチャージが必要になるのだ。

その時にこの弾幕はやむ。そして、その時こそが最大の好機。

(以前、貴様にやられたあの速攻戦法で葬ってやる！)

そして、遂に待ち望んだ好機が巡って来る。空中に展開されていたファミリアが砲撃を止め、アポカリプスのほうへと戻っていく。

先ほどの奇襲から、これも囿の可能性も考えられるが、それはないとコーラサワーは言い切れる。何故ならば、千影がファミリアを稼働時間いっぱいまで使用したのをコーラサワーは計っていたからだ。

故に、ここで戻したファミリアは最充填されるまで無力になる。

あとは強力な斬撃と砲撃だが、それはノエルクローシユの機動力と磨き上げた自分の腕で何とでもなる。その一撃さえ回避できれば自分の勝ちだ。

「いづくぞおおおおッ!!」

そう思ったコーラサワーは雄たけびを上げてノエルクローシユをアポカリプスへと迫らせる。

ノエルクローシユの高機動形態での呐喊にアポカリプスはピッチャーの豪速球を打ち返すバッターのように『重機関軍刀グラム』を振り払う。

その斬撃はものの見事にノエルクローシユを2枚に下ろすかに見える。

だが

「ココだああああ!!」

その大振りの攻撃こそをコーラサワーは待っていたのだ。

頭に叩き込んだ射程とタイミングから紙一重の位置でノエルクローシユに急制動をかけて停止する。

そのノエルクローシユが停止した目と鼻の先をかすめ去っていく『重機関軍刀グラム』と、大振りの攻撃を空振りしたことで大きく態勢を崩したアポカリプスの姿を見たコーラサワーは勝利を確信した。

「これで、トドメだああああああッ!!」

戦闘機形態から人型形態へと変形させ、全武装の火気管制を開く。後は引き金を引けばノエルクローシユの全武装が火を放ち、アポ

カリプスを蜂の巣にする　　はずだった。

しかし、コレはなんの冗談だろうか。

今さつきかわしたはずの『重機関軍刀グラム』が左腕を斬り飛ばし、ノエルクローシユのボディを中ほどまで切り裂き、そのまま刺さっていたのだ。

それに何故だがノエルクローシユを伝って嫌な音が響き渡る。

魔獣がその牙を鳴らし、得物を呑み込むために口を開けるかのような、そんな音が。

その音がノエルクローシユに刺さったままの『重機関軍刀グラム』が展開する音だとコーラサワーが気がついた時、その一撃は放たれた。

「重機関軍刀グラム・FULLバーストモード!!」

千影の力ある言葉と共にコーラサワーの視界は光に包まれたのであった。

千影とコーラサワーがバルジャーノンを駆って仮想空間の空を舞う中、現実空間でも熱き闘いが繰り広げられていた。

「せえええいッ!!」

「プラズマ・リボン!!」

和麻の木刀による鋭い斬撃と、はやなの『プラズマリボン』による中距離からの虚実織り交ぜた攻撃が互いに弾きあい火花を散らす。試合の内容を見れば激しく打ち合っているように見えるが、よく見てみると、はやなは絶えず和麻から一定の距離を離しながら戦っているのがわかる。

それに、はやなは距離を離しているだけではない。

和麻が仕切り直しに距離をとろうとすると間髪いれず距離を詰めてくるのだ。

その距離は木刀を振るには難しく、リボンを振るうには易い、はやなの距離だった。

絶妙な位置取りを続けるはやなに和麻は心の中で舌打ちする。

(ちっ、攻め込めない いや、以前戦ったときよりも遙かに手ごわい……。これでは奥義も放てない)

和麻の奥義である『紅刃』はほんの僅かであるがタメを要する必殺技である。しかし、はやなも和麻の必殺の一撃を身をもって知っているのです。その間も与えない。

共に決定打を欠く打ち合いが続く中、先に動いたのは誰であろう、はやなであった。

自分から有利な距離を捨て、和麻の木刀の間合いへ入っていくはやなの姿に、和麻は一瞬驚くが、すぐさま迎撃態勢に入る。

「スターダスト・インパルスッ!!」

はやなの放った星の煌きが和麻の四方を塞ぎ輝きを放つ。

しかし、和麻は慌てない。相手が逸ってくれたことでこちらにも勝機が生まれた。

はやなが『スターダスト・インパルス』を放つために作った僅かな時間。それは和麻にも必殺技を打つ機会を与えたことになる。

そして和麻の奥義は全てを切り裂く絶断の刃。

(我が奥義で必殺技ごと君を断つ!)

その和麻の強い意志が乗り移ったかのように、木刀から『紅』の光が蜃気楼のようにゆらゆらと揺れる。

そして

「奥義! 紅刃!!」

『紅』の極光を纏った斬撃が星屑の瞬きを霧散させ、その剣筋ははやなを捕らえた。

(獲った!!)

そう和麻は確信する。

立ち位置、タイミングから考えて、はやながこの攻撃を避けることは不可能だ。

そう。避ける事は……だ。

「スピニングフープ!!」

不可避である斬撃。はやなはそれを力を受け流すガードデヴァイス、『スピニングフープ』で防御していたのだ。

そのガードデヴァイスの本質 受けるのではなく流すという己が奥義の大敵たるをいち早く見抜いた和麻は吼えた。

「ならばッ！ その装備だけでも貰っていきます！！」

はやなが『スピニングフープ』を操り、和麻の『紅刃』を逸らすよりも早く、和麻は木刀を振り切ったのだ。

結果、『紅刃』は威力を相殺されたものの、『スピニングフープ』を両断することに成功する。

奥義の打ち合いの勢いにより大きく距離を離れた2人は、背中を向けた状態から同じタイミングで互いに向き合った。

「あやあく。まさかスピニングフープが真つ二つとは……。それにソレが『紅刃』さんの極光なんですわ」

はやなは手に持った『スピニングフープ』がものの見事に両断されていることに驚きつつも、和麻が木刀から立ち上る『紅』の極光に笑みを漏らした。

和麻も自身が握る木刀から立ち上る『紅』の 初めて自分が発現できた極光の輝きに、場違いと思いつつも、はやなに笑みを返す。「貴女には感謝しないといけませんね。僕がこの『紅』の極光を出しえたのは貴女が相手だからです」

未だかつて、いかな勝負でも和麻は極光を顕現させるには至らなかった。強敵と対峙するために世界征服部に参加しても、己を見つめなおすのに山籠りをするまでもである。

しかし、目の前にいる1人の『姫』との真剣勝負が、自分をこの位階へと導いてくれた。

敬愛する師と同じ領域にへと一步を踏み入れることが出来たのだ。そう思つての感謝の言葉に、はやなは首を横へと振った。

「いえいえ、そんなことはないですよ。その輝きは『紅刃』さんが自身が発現しえた『紅刃』さんの輝きです。だから私も」

そこで言葉を区切ったはやなの身体の回りから『銀』の粒子がこ



ぼれる様に煌き始める。

「持てるすべての輝きを『紅刃』さん、貴方にぶつけます！」

その宣言により一気にはやなから『銀』の極光が弾ける様に顕現した。

今まではやながひた隠しにしてきた『銀星姫』の極光である。

この『銀』の極光が現れると共に、極光を見ることの出来る3年生の生徒達は、その表情を驚愕へと変えていた。

「まさかアレは『銀』の輝き!？」

「じゃあアノ噂は本当だったのか!？」

「嘘だろ! じゃああの娘が『銀星姫』だったのかよ!？」

極光が見えない生徒たちも、彼等が声に出した『銀星姫』の名前にどよめきが広がったのだった。

会場全体が、はやなの放った『銀』の極光にどよめく中、和麻はその『銀』の輝きに目を細めていた。

「それが『銀星姫』の輝きですか。この場でソレを顕現させるといふことは、もう秘密にはしないということですか？」

「はい。もう私が『銀星姫』であることを隠すのはやめにしました。それに極光を顕現させてまで戦ってくれる人に全力であたらないのは失礼でしょう?」

「確かに。僕は今、貴女との戦いを心のそこから楽しんでいる。ここまで心が高鳴る戦いはコレが初めてです!」

和麻はそう言い放ち、『紅』の極光立ち上る木刀を構えた。

「僕はこの一撃に全てをかけます。師匠から頂いた『紅』と己が信念たる『刃』の全てを乗せて、最強の極星たる『姫』に今一度挑みます!」

身体から溢れる闘気が木刀に乗り移り、さらに輝きを増す『紅刃』

の輝きに、はやなは『プラズマリボン』を構えると笑顔で応えた。  
「はい。いつでもどうぞ」

それぞれの得物を構え、対峙する2人はまるでタイミングを計ったかのように同時に地面を蹴る。

和麻は『紅刃』の輝きを放つ木刀を後ろに大きく引き絞り、はやなも『プラズマリボン』を上段に大きく振りかぶる。僅かの数メートルの距離は一気にゼロになった。

そして2人から力ある言葉が同時に紡がれる。

「奥義！ 紅刃ッ！！」

「シューティングスター・ストライカアアッ！！」

『銀』の星と『紅』の刃が必殺の威力を持つて相手に迫り  
人の激突と同時に『銀』と『紅』の光が瞬いたのであった。 2

はやなと和麻の極光を乗せた必殺技を放ったこの時が千影のラストアタックの瞬間でもあった。

戦闘機の高機動形態で目の前に迫るノエルクローシュに『重機関軍刀グラム』による一撃を避けられ死に体となったアポカリプスだったが千影は未だに諦めていなかった。

「こんのオオオオッ！！」

千影は裂帛の気合と共に操縦桿を倒す。

すると、高機動形態から人型に変形しながら全火気管制を開いていくノエルクローシュに対し、振りぬいた『重機関軍刀グラム』を左手にスイッチしたのである。まさかコーラサワーも巨大な処刑剣たる『重機関軍刀グラム』をナイフのようにスイッチできるとは夢にも思っていなかったであろう。

全弾発射の用意をしていたノエルクローシュの左腕を斬り飛ばし、『重機関軍刀グラム』の刀身をノエルクローシュのボディに切り立てたのだ。

すかさず千影は手元の操縦桿を操作し、火気管制を開く。

「重機関軍刀グラム、砲身展開ッ!!!」

まるで地獄への扉が開くかのような音と共に、『重機関軍刀グラム』が割れ、禍々しい砲身が現れ出でる。

完全に変形が完了したのを確認した千影は力ある言葉と共に引き金を引いた。

「重機関軍刀グラム・FULLバーストモード!!!」

ゼロ距離で放たれたアポカリプス最大の攻撃に避けることかなわず、ノエルクローシユは光の波に吞まれ、残りのHPを全て貪りつくされたのであった。

千影は筐体の中で踊る『WIN!!!』の文字に、安堵のため息をついた。

「ふう〜。……あぶなかつたあ。さてと　　ッ!?　これは!？」

手元のコンソールを操作し、密閉されたコックピットから出た千影は会場全体に煌く『銀』と『紅』の極光に目を見張る。

そして、その発生地へと目を向けると、そこには各々の得物を振りぬいた姿で背中合わせで立つはやなと和麻の姿があった。

しばらくは微動だにしなかった2人であるが、不意に和麻の体が揺れ動く。

「やはり、『姫』には及びませんでしたか」

片膝をつき、『プラズマリボン』で打たれた胸を片手で押さえながら、そう呟きを漏らす和麻に、審判のれいは戦闘続行不能と判断した。

「勝負あり!　勝者、鈴鳴はやな!!!」

高らかに宣言された勝利者の名前に、会場は大きな歓声で包まれた。

未だにはやなの放った『銀星姫』の極光については動揺が少なからずあるが、息を呑む試合内容に観客は皆熱くなっていたのである。

「おおつとおおお！ 2勝負ともほぼ同時に決着がついたああああ  
！！！」

「2回戦にコマを進めたのは、はーちゃんと我がちーちゃんだあ  
ああああ！！！」

新井と松田の言葉に会場が更に歓声に渦巻く中、はやなは未だに  
方膝をつく和麻の元に歩み寄った。

「大丈夫ですか、『紅刃』さん？」

「大丈夫です……と言いたい所ですが、すぐには立てそうにありま  
せん。しかし」

そこで言葉を区切った和麻は少し悔しそうに顔を伏せた。

「僕の一太刀は届かなかったんですね」

最後に放った剣撃は今までで1番鋭く、速い、最高のモノだった。  
その過去最高の剣撃を持ってしても、全力を出した『姫』相手に  
は届かなかったのだ。

しかし

「いいえ、ちゃんと届きましたよ」

このはやなの言葉に和麻は「えっ!？」と驚きの声を上げると、  
はやなの手に持った『プラズマリボン』が機能停止しているのに気  
がついた。

和麻の視線に気がついたはやなは壊れた『プラズマリボン』を両  
手で抱えながら、和麻に笑みを送る。

「リボンもフープも、ここまで壊されるなんてことはありませんで  
した。本当に『紅刃』さんの太刀筋はすごかったですよ」

「それでも、僕はまだまだです。くっ！」

はやなの言葉にそう返しつつも無理して立とうとする和麻に、は  
やなは慌てて和麻を止めようとする。

「あっ！ 無理して立たなくても」

「いいえ、こう言つときくらい見栄を切らせてください」

その和麻の視線の先にある久遠の姿に、はやなは気がつき優しい  
笑みを浮かべた。

そして、ふらつきながらも2本の足で立ち上がることが出来た和麻に手を差し出す。

「あの、これは？」

目をパチクリとさせる和麻がおかしいのか「クスクス」と笑う。

「互いの健闘を称えて握手をしましょう。『紅刃』さんは私の立派なライバルさんの1人ですから」

このはやなの言葉に面食らった和麻であったが、和麻もその顔に笑みを浮かべると差し出されたはやなの手を握り返す。

「『銀星姫』にそこまで言われては、次は負けるわけには行きませんね」

「はい！ 私も次に『紅刃』さんと戦えるのを楽しみにしてますね」  
激闘を演じた『銀星姫』と『紅刃』は互いに互いを称えながら、その顔を笑みに輝かせていたのであった。

「2人とも、いい顔をしてるじゃないか」

自分の最強の『姫』の心を継いでくれたはやなと、『紅』の色を継いでくれた和麻の文句の付け所のない勝負とその結果に、久遠は笑みを漏らしていた。

そして、笑みを浮かべていたのは何も久遠だけではない。

「『銀』と『紅』の極光。昔の俺たちを思い出さなかったか？ 久遠ちゃん」

久遠の隣に座る人物 はやなに『銀』の色を譲った先代『銀麗覇』、九行律も後輩達の名勝負に笑みをたたえていたのである。

「そうだね。昔のあたし達もあやって互いに競い合ってたっけね」  
この何気ない振りに隣に座る人物はトンでもない言葉で返した。

「俺は久遠ちゃんに愛の告白を繰り返していただけだが？」  
人が真面目に話しているのに何を言い出すのかと、顔を赤くしたまま久遠は律を睨みつける。

「なあっ！？ お前はまた面と向かって堂々とそんなことを……！」

！」

しかし、当の律は至極当然といったような顔で笑みを浮かべる。

「お気に召さなかったかな？」

すでに久遠と律は恋仲だ。そして久遠も武士ではあるが、それ以前に女の子である。恋人にそういう甘い言葉を囁かれて嬉しくない訳がない。

しかし

「いや、別に嬉しくないわけじゃなくって……ただ場所は選んで欲しい……」

人目をばからずに囁かれる恥ずかしい台詞は、言うほうにとってはどうでもない場合でも、受け取るほうにとっては至極恥ずかしいものだ。

それにその場の雰囲気と言うものもある。こう言う場での愛の囁きは、何とか場違いだ。もっと2人きりの時とか、いいムードの場面とか、といった思考が久遠の頭の中でグルグルと渦を巻いて回る。

そう想い、顔を赤くして少し体をよじる久遠の姿に律はご満悦だった。

「ふっ。相変わらず久遠ちゃんは可愛いな」

昔から律は、そんな久遠が好きで好きでたまらないのだ。

「そ、そんなことより！」

このままではいけない。そう思った久遠は無理矢理話題を別の方向へと変える。

「今、改めて『紅蓮姫』を2人に譲ったことを誇りに感じるよ」

久遠は未だ頬を赤く染めたまま、視線を今一度はやなと和麻に向けると、2人は会場の大きな歓声に手を振ったり、お辞儀をしたりして応えていた。

話題を変えるためとの目的もあるが、この言葉は久遠の偽らざる本心だ。

「それは俺も同じだ。しかし

」

そして、その久遠の感じる誇りは律とて同じであるのだが、律は別口に気になることがあるようで、その視線は会場の大歓声に応えるはやなと和麻の元に歩み寄っていく千影の方に注がれていた。

「噂の留学生も中々にやるようだ」

ゲームの事はよくわからないが、モニターに映し出された黒い悪魔を模した機械人形の動きは見事なものだった。それに大学部にも彼の噂は小さいながらも聞こえてきている。『紅蓮姫』の再来という名で。

そんな律の言葉に久遠も関わった事件は少ないが、そこで見た千影の数々の実力に笑みを漏らす。

「ああ、千影ね。今日を最後に元の学校に帰るみたいだけど、最終日の今日にどんな伝説を創って帰るのやら」

実に楽しみだ。そんな言葉が漏れそうな久遠の綺麗な笑みに、律はついついイジワルをしたくなってしまうのだ。

「そこまで久遠ちゃんがかっこいいとは、少し妬けてくるな」

「バ、バカッ！ だから人前で堂々と………もお、いい！！」

ついには頬を膨らませてソッポを向いてしまった久遠に機嫌を直してもらおうとアレやコレや手と口を尽くす律の姿に、久遠のとなりに座る霧瀨は非常に居心地の悪そうな顔で横に座る2人に言葉をかけた。

「あのお、不破さんに九行くん。イチヤイチャするなら別のトコでやってくれないかな………っというか、今回私の出番ココだけ！？」

はい、ココまでです。霧瀨先生お疲れ様でした。

「しよんにやあああ！ 出番が！ 出番があああああああ！！」

霧瀨の咆哮は武道場の天井を突き抜け、大気圏を突破し、宇宙まで届いたそうな（蝶噓）。

## 第28話【正義の味方部篇】（後書き）

あとがき

正義の味方部篇最終章の緒戦、千影VSコーラサワーと、はやなVS和麻のダブルリベンジマッチをお送りしました。

バルジャーノンで千影君が必殺技名を思い切り叫んでいたのは音声入力システムが採用されているからです（蝶大嘘）。さすがKCKクオリティ、縮めてSKQ。すごいぞ！カツコイイぞー！

冗談はさて置き、決闘が絡まないとそんなにたくさん書けないものです。39文字×38行のページ設定で15ページ以上を目指して書いてきましたが、今回ははまさかの12ページ目で終了。

バトルものの難しさを痛感しております。精進せねば。

さて、今回は久しぶりに決闘の回になりそうです。誰と誰が決闘をするのか？誰が勝利し2回戦へと進むのか？

ご期待ください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2228i/>

---

OVERtheLORD-千の影を敷く者-

2010年10月9日04時22分発行